續群書類從

第拾七輯下

東京
續群書類從完成會

續群書類從第拾七輯下目次

連歌部

續群書類從第十七輯下目次終

續群書類從巻第四百八十四

總検校保己一集
男　源　忠　寶　校

連歌部十四

老葉第一

春

かすみにこもる花のおもかけ
春たつとおもへは山も色みえて
けふそむかしのかたみとはなる
朝かすみ袖ふる山に春はきて
みとりの柳うちなひくいろ
山かすむさほの川風あけそめて
かへるはいつこ雲とりのあと
霞つゝあやをる水のしろき野に
散ゆきし花は又咲春のきて
去年のあらしのかすむやま里
のほる七日の月のさやけさ
白馬をみはしに袖のつらなりて
もとめても花にあはすはかひもなし
梅をもかさせわかなつむひと
木かけにしはし水むすふところ
春しらぬ谷を氷やたのむらん
をとする水はこほりとけゝり
雪うつむ深谷のを川春さえて
うれしくもいつかと待し年越て
はる風かよふ雪のしたいほ
日かけしつかにうくひすそ鳴
山里のかすむ朝とにゆきはれて
めつらしと見るいまの一筆
昨日まて雪をえしまの朝かすみ

草葉はるなる住よしのきし
霞たつとを里をのゝゆききえて
殘りてそ哀はまさる春の花
むめかほる夜のあり明のつき
しはし見よとの花はうらめし
老のゝちうへし若木の梅咲て
こゝろやはなのかけにあるらん
うへをきし人はむかしの宿のむめ
梅うちかほり雪とくるころ
山本のかはそひ柳風ふきて
我いらむかとゝや駒はすゝむらん
春草なひくあをやきのかけ
たかきにもよらす恵はうる物を
木のした草のすゑのはるさめ
雪はかすみににほふ山のは
白たへのころもはる雨今朝晴て
よるひるに春の心やかはるらん
わかねぬ花にうくひすそなく
花によのあくる梢をまち侘て
かたふく月にうくひすのこゑ
おもふ事なき花をいつ見ん

山風のたゆめは月のかすむよに
こゝろをとめはおなし古さと
歸るなよかすむしかつの春の鴈
古さとは月日をへても行へきに
花を見はてよかへるかりかね
ちるとを風なをしへそ春の花
ことしさくらのひと本のかけ
梅か香のいつくよりかは匂ふらむ
朽木にさける花のあはれさ
むかしのとをこゝろにそとふ
うへし世を花はしるやとひとり見て
春は夢かとおとろかれけり
去年見つる人さへまれの花にきて
身そつらきあはすは何に殘るらむ
花さくやまのたにのむもれき
なくさむほとの夢もやはみむ
ときしもあれけふ咲花に山おろし
人のなさけそ戀となりぬる
おるえたに遠山さとのはなを見て
友なきやまのはるかなる道
おほかたのとふ人にせは花もうし

たもとにかすむ有明のそら
鳥の聲花のにほひに山こえて
うたかはしきも契りなりけり
山もりもいさや告しの花にきて
雲をわけゆくしかのやまこえ
よしのなる嶺の花そのいかはかり
いつ住そめむ嶺の木のもと
年〳〵の花に苔ふむよし野山
又けふゆくもしらぬやま〳〵
花見にといくしら雲にまよふらん
宮古にちかくこゝろこそなれ
深山きを分こしみちに花さきて
ともなふ鳥のゆふくれのこゑ
花香ほるみやまの苔路ふみなれて
かゝるうらみもこゝろなりけり
歸るへきはなにこよひの雨きゝて
めくれる雲はいく重なるらん
陰ふかき花にくるまの音はして
あらしはきかし雲の上人
かけたかき御階のさくら春をえて
なを面かけは去年のしら雪

玉すたれまきのと山に花さきて
いやしかる我こゝろこそかなしけれ
はなさく陰にすめるやまさと
ゐなかをとへは物そかなしき
かすむのゝ竹ひとむらに花咲て
打なかむれはとふ暮もなし
たれか住花より遠の草の庵
うつろふ色をわれそしたへる
盛なるはなはうき身の友ならて
花も世も移ひはてし山にきて
布留野のさくらむかし戀しも
春のこゝろはいにしへのいろ
岡の邊のなきさの櫻花さきて
いつかはさても思ひはつへき
待おしむ花にとし〳〵身はふりて
うつゝになれは夢もはつかし
賴こし身はふり花は又さきて
いのちのうちやあらましの山
老ぬとておもひすつへき花もなし
とひすてらるゝ世をそうらむる
淺茅原おい木の花に露おちて

なくさめかたきこの世なりけり
古郷はおいきの花にまつのかせ
　ちきりのすゑをたのむはかなさ
花やたゝ老にわかるとおもふらん
　又いつと胸うちさはく計にて
いのちはゆふへはなはやまかせ
　むかしを忍ふそての露けさ
里は荒て花のみひとり匂ふ野に
　こゝろほそきも誰かしらまし
人なみに花みてかへる草のいほ
　捨たるよをは忘れはてゝき
花鳥をみ山の庵に又なれて
　露しつかなる谷のしたかせ
鳥の音も花にしほるゝ日は暮て
　草むら〳〵になひく木かくれ
夕ま暮露けき花にかせすきて
　立かへりいつかみなせの春の暮
尾上の宮のさくらちるころ
　とをきむかしはなをきかまほし
花を風いつよりちらし初つらん
　いつはりなきや色にいつらむ

散そめし共世を花のうらみにて
　かりの世とおもふも心とゝまりて
ちらすは花をいつまてか見ん
　またあはて人のうらみはよもあらし
あらしの花にたれをまつらん
　見し人のなきを日毎にきゝ侘て
さくらちる野のやとのまつ風
　陰たかき尾上の椙に風吹て
ちれは門さすはなのふるてら
　たよりもあらはかくとつけはや
山里の花ちりはてゝ人やこむ
　てふ鳥のあそへる庭は長閑にて
さくらうちゝりかすむやまさと
　竹の葉もかすめる風の音よはみ
露けきそのに花おつるくれ
　いつくの人そこゝろはつかし
山里の花にたゝすむ夕まくれ
　花は根にちる比のさひしさ
櫻さくみやまかくれの岩こすけ
　ふきたによはれしほるまつ風
散はてん事は花もやうかるらん

かきりをしれは世をもなけかし
春さかぬ花もいつれか殘るらむ
いろ〳〵わたる世のなかそうき
櫻花かせをいとへは雨ふりて
うらみふかくてやみなむそうき
花の後なと雨風のよはるらむ
はかなの春やなにゝたとへん
朝露のきえぬ風にも花散て
いとふとて今はうらみむ方もなし
こゝろともちる花のやまかせ
春をは人のおしまぬもなし
花そうきなにの心にちりぬらん
うきはかりこそ身にたくひあれ
はなちれは心〳〵のかへるさに
見しはなにゝかあとののこれる
山かすむきのふの花の朝ほらけ
のこるこ蝶そ見るもあたなる
木の本に昨日の花をたつねきて
かきりとおもへけふの夕くれ
身を賴む人や花をも惜らん
吹くれし風もしつまり雨過て

殘るはなをも夢かとそ見る
うたかた人のとはしとやする
やまさとの庭行水に花落て
わか葉涼しき木々のした露
深山ゆくいはかきし水花落て
木かくれふかき山もとのさと
風もはやをとせぬ庭に花くちて
古里さひしたれか又こむ
あらしたに花のあとゝへ夕ま暮
人にをくれてとまる山みち
花も見よ散あとしたふ我こゝろ
里なきやまにいぬほふるこゑ
水なかれ桃さく谷のおくふかみ
遊ふてう春に心のたのしみて
駒かける野の水ののとけさ
しつか手ひきのいとまなき比
かへす田のくろの春野に牛かひて
又うちしたふ春のおもかけ
櫻散ふるの山たに水せきて
ちりし花もやみちうつむらむ
舟さゝぬ水草に春の池あせて

さひしき空はたゝ野への春
雲雀鳴にはの浅茅にさとふりて
かた山椿すゑかすむころ
あつさ弓八嶺のゝ雉子けさ鳴て
花そさくいつれの山か宿ならん
鶯にいるとりの春のあはれさ
人を夢とやおもひしるらん
住すてし園はこ蝶のやとりにて
むすほゝれゆく谷のした水
蛙なく岩まの小川はなうきて
あともをしほの山のあけほの
又やねむすみれ摘のゝかりまくら
倦ぬれは花をもうへぬ柴の庵
かきねの草にすみれさく見ゆ
あはれにかすむよもきふの宿
たそかれの梢の月に藤咲て
ちれはおくなきみよし野の花
山吹のいはぬこゝろもうつろひて
人もたつねぬ故郷はうし
櫻ちるみかきか原に春くれて

老葉第二

夏

蟬にやたてん袖のわかれ路
蟬の羽にうす花衣けふかへて
玉川なれや月すめる影
やり水に垣ほのうつ木花咲て
古きかきほを頼むやまさと
倦人はよを卯花にともなひて
かけは老その森もたのまし
郭公まつ夕くれに月出て
いかなる鳥そ雨になく聲
よな〳〵の月につれなき郭公
しつくのもりはうらみある袖
時鳥こゑまつ月にたちわひて
のる駒もしのふあたりは心せよ
ほとゝきすまつ森の夕かけ
うとき心かしのふならひか
なれこそは山里とはめ郭公
月いてぬかけし心な忘るなよ
くらはし山のやまほとゝきす

こよひは野へに宿りをやせん
ね覺とふ草のいほりの郭公
　よそにうつろふ事なしらせそ
きかしたゝ庵りあまたの時鳥
　なくさめとかたるに涙なを落て
なれもねぬよのやまほとゝきす
　夢のゆくゑはたゝ鐘のこゑ
郭公すくる枕をそはたてゝ
　あとふり殘るいそのかみてら
郭公あしたの雨に山こえて
　いつさためてかなをも待らん
むら雲に聲も跡なきほとゝきす
　榊はのこゑをも神は請つへし
ほとゝきす鳴かたをかのもり
　のこるさくらをおれるひとえた
かさしさす祭のつかひはなやかに
　今にのこるそとりの跡なる
神山のまつりはするのよをかけて
　日影もしるく夏はきにけり
あふひにや神のこゝろ〔か歟〕もなひくらむ
　冬もまたきのふけふりの空なるに

しける木の葉のやまふかきかけ
　みてれはかくることはりをしれ
さやかなる月もさかりの短夜に
　外面のあふち月もゝりこす
水鷄なく庭のやり水音深て
　とめなは袖のうつり香もあれ
のる駒に水かふ澤のあやめ草
　まくら涼しくほたるとふ影
水くらきまこもかくれの舟にねて
　それともわかぬ五月雨の空
河上の山たの早苗みつこえて
　去年みし花そくさに又咲
橘のにほひわすれぬ軒ふりて
　をくれてさける花のひともと
橘も人のむかしをしのふらん
　朽木に殘るかけはしのすゑ
橘にふるき雲井のあとみえて
　いり日影色こき雲にかたふきて
した露すゝしあふちさくやと
　むすふいほりの草もくちけり
五月雨は小田のしめ繩長ひきて

見れはあをはの露そすゝしき
五月雨は山風おろすをの丶里
さそ郭公よそのむらさめ
影たかく螢とふよの夕やみに
ものいふ鳥の聲もこそあれ
とふ螢もえてはなにを思ふらん
ほとゝきす鳴聲過るこかくれに
おもひをいはぬむしの哀さ
よな〳〵あきの風そおとする
鳴むしをまちて螢やみたるらん
月ゆへにこそめをもあはせね
さをしかのよらぬともしをさし捨て
なしをく罪のかすはかくれす
夜〳〵のほくしを嶺にさしすてゝ
かすかなる鐘をよ川の知へにて
鵜舟さしすてかへるあかつき
むなしき夜半をなけく哀さ
てる月のかつらの鵜舟さしすてゝ
さよのほたるそあをく明たつ
白たへの雲のは山にせみなきて
山のはうすくめくるむら雨

夕風に蟬なく梢露おちて
野原のいろのかるゝほとなさ
花におるかめの夏草うちしほれ
よろこひのまゆをはいつかひらかまし
ゆふかほかゝるわひ人のやと
いつくよりたちきて雲のうかるらむ
雨をいのれるみな月のそら
松風きよし水無月の影
夕たちに天津しら雲嶺こえて
とをちの里の秋のさひしさ
山みれは夕立すきてふく風に
あさゆふは浪の枕に松の風
水のうへにや夏をおくらん
くるれは明る夏のよのそら
影あつき西日にしはし戸をさして
なこやかなりし聲も忘れす
朝霞はるふくほとの風もかな
ぬきすつるよるの衣もむつましく
月たちのほる雲のすゝしさ
みかゝねといしも鏡のかたちにて
玉しま川の月のすゝしさ

あきをはやしる虫のしのひ音
立すゝむ泉にはの月ふけて
こぬ秋の聲をあらはす山おろし
ならのは涼し岡の邊のやと
あきこそ人のうき物としれ
桐の葉のしたに風まつ夕涼み
おちてなみたにやむ時もかな
思ふ事いつなる瀧の御そき川
人によりてそ身をもいのらん
たちましる御祓はかなや老の波

老葉第三

秋

たゝ有明にまかふみかつき
梓弓するはるかなる秋は來て
いつしかさひしならの古鄕
柳散さほの川かせけさふきて
はちすの上に露もまたるな
日くらしの鳴夕風に月いてゝ
あふきの風も舟やさそはむ
夕なみに天のかはらのきり晴て
さゝかにの糸こそ文字のしるへなれ
ほしにたむけのつゆの玉つさ
さひしさは夕暮のみか秋の山
雲ふく風に荻のはのこゑ
なくさめかねつ山里の秋
さひしとていとへは荻に風もなし
柳や風もまたてちるらむ
道の邊の本あらの小萩露ふかみ
日かけも寒し鴈のなく空
こ萩原おのへのさとの夕嵐
田のもの色を露そいそける
鳴をまつかりほのこ萩花さきて
うへなる山に月かゝる見ゆ
ま萩散野邊のさをしかけさ鳴て
あきにも夢の身をやしるらむ
槿にこゝろ見えぬる草の庵
なをゆく末も夢の秋の夜
あさかほの花なと種を殘すらん
心にかなふあらましの秋
うへをきし庭の色草花さきて

雲なかくしそあき山の色
露にほふ花のうす霧はるゝ野に
おる人見えぬ萩のひともと
花すゝき袖ふれよとやまねくらむ
露こそのこれあきのたまくら
山遠く月はいるのゝ花すゝき
むかし戀しき秋風ぞふく
人すまぬ尾上の宮のはなすゝき
ふくやくも間の秋のゆふ風
むら雨にかれのゝ薄露おちて
人はたれをかまたうらむらん
あらし吹ま葛か原の秋の暮
すゑのよになれは亂るゝ斗にて
むかししのふのやとのあきかせ
ほのかにも雲に秋の日かたふきて
かねも月まつ夕くれの聲
ゆふくれさむきあきの山さと
さしのほる梢の月にかねなりて
うすき日影やさしておつらん
ひかりそふ月はたかねを上るよに
もろき木の葉に虫の鳴聲

月かけに夕露かゝる庭ふりて
ことはりのかゝみの影はくもらめや
こよひなかはのあきのよのつき
もみちにふかき露はみえけり
月やとる庭の岩かき水すみて
をのつからなることはりをみよ
やとすとも水はおもはぬ月澄て
日もくれかたの水のさひしさ
舟とむるいり江のひかし月いてゝ
こゝろそしるへいにしへの道
舟さしてとはゝや月のよはの友
をしまいかにと思ふあけほの
鹽かまや月に浦こく舟を見て
古郷のあきをも人の忘れめや
なにはわたりのあり明のそら
川なみ遠く舟のほるかけ
湊こす月の夕しほ秋さむみ
ちとり打佗なきてゆく聲
月すみて川かせ荒き秋のよに
わかすむかたは山そまれなる
夕波にあしやの奥の月出て

たれをかもまつ虫の音に忍ふらむ
山かけさひしたかさこのつき
みるうちに住こし里は野と成て
露のそこなるふか草のつき
ねぬ夜に朽る夢のうきはし
いにしへのなからの宮に月を見て
おもひかけても見すや成なん
宮古より月はをは捨明石かた
きくもむかしのなみたならすや
秋風にふるき都の月を見て
古きかきねに鳴きり〳〵す
月たかく山風ふけて夢もなし
さよふけゆけは物そ淋しき
待ほとは心うかれし月すみて
ゆくかたしらすなれる秋風
深ぬるかみる〳〵月に雲もなし
世のうきも我からなれや出て見ん
なみたの月にたのむおくやま
いはすともこゝろの色は知らめや
おひのねさめのあきのよの月
老のまくらそなみたおちそふ

ことしもや限りとあきの月を見て
ひと夜にかはる雪のあけほの
秋の月あかつき方の空さえて
むさし野に秋のいく日を送るらむ
かやか軒はのありあけの月
待なるゝ夕ならねと立うかれ
やまの端かこつ月のいりかた
花もしとろになひく秋草
山本の月のあさ露むら消て
ふるき宮古はたゝ秋の風
した葉ちるこすゑの月に虫鳴て
露みたれぬるはなの草むら
夕風にむしの音まよふ里ふりて
袖にはけしき野路の秋かせ
むしのねに行かた暮て宿もなし
命なとかきりのあるにならひけん
草はにかゝる松むしのこゑ
こてうの夢にすくるよの中
松虫のこゑにことしもうつろひて
すゝきちる夜の風のさひしさ
きり〳〵すかたふく月に夜更て

はつ霜まよひかりのなく聲
ころも擣すそ野の梢色つきて
移ろふやまそ袖のいろなる
白妙のころもうつよに月いてゝ
誰かあはれもね覺にそ知る
をやま田に鹿おふ夜はの聲更て
をのゝゆふへはたゝ秋のかせ
殘る日も色こき稍に鴈なきて
あかつき遠き舟のかちをと
鴈のなくほりえの沖に月ふけて
宮この秋も夜のなかきころ
鴈のとふとを山かつらあけやらて
鳥いろ〳〵のいけの長閑けさ
朝日さすつゝみの霜にかりおちて
ふく風さひしはま河の秋
鴈のぬる汀にあしの花くちて
枕をもさためぬひまに月更て
舟にかり鳴あかつきのなみ
いくゆふ暮かむしも鳴らん
古鄕はうつら臥のゝ月を見て
をさゝのまくら秋風そふく

里もなきいなのゝ月に鴫なきて
かゝるいほりの秋をとへかし
野へ見れは霧に鴫たつ夕ま暮
ま萩さく野に人そやすらふ
夕ま暮鹿なく山の月おちて
霧かゝるみなとの山やしくるらむ
ゐなのをゆけはをしか鳴聲
やまのはいつく秋霧の中
をしか鳴草のいほりの窓のまへ
身にそはぬ心は人にあくかれて
笛をつまなるしかのあはれさ
もとのなみたにかへるおく山
鹿そなく妻とふ野へや明ぬらん
人のこゝろのかはるよのなか
秋といへはいかなる時そ夕ま暮
身を賤になしても袖はぬれつへし
岩木をみるもあきのゆふくれ
ゆふへのものとあはれなりけり
身にそしむ心にやとれあきの色
もろこしまても知人そしる
心なき秋のねさめをいかゝせむ

月もすゝろにしほるわか袖
うくつらき秋は心のなになれや
　長閑にたれか身をはたのまん
風わたる秋の草木の露をみて
　なにとなみたの袖にあまれる
草も木も葉にしたかへる露の世に
　面かけの殘る朝かほ花もなし
こすゑ露けきもゝそのゝあき
　月のいる宇治の山本物淋し
椎のはしほる嶺のあきかせ
　つれなきにいかて心を見えつらむ
眞木のした葉の秋のしら露
　かはる色ありともすまむ山の奥
まきたつ嶺の露のしたいほ
　水くれわたる遠の川つら
舟のほる秋の山もと鐘なりて
　おもひのけふりそれとたにみよ
舟とむるなたの鹽やのあきの暮
　いかなる人もつみははなれし
釣ふねに心をよする秋の海
　うらかれさひし霜の村あし

霧わたる夕しほ風に田鶴なきて
　なきたつ鴫の聲のさひしさ
霧渡る曉月にかせ吹て
　野分ののちの秋のさひしさ
きり立て木の葉うつろふ山里に
　かけもはつかの月のさひしさ
秋はゝやいなのあを山うつろひて
　人にさていかにかたらん興つ浪
たつたのやまのあきのいろ〳〵
　われからそたゝおもひこかるゝ
松の葉も露けき山の下もみち
　木のまに白きおくの瀧なみ
大井河すゑはあらしに紅葉して
　おとろくほとに秋そふけ行
かつ散を見れは昨日の若葉にて
　くるゝはやしの陰のしつけさ
紅葉ちるあとはをしかの音もなし
　宮古をはかゝる秋にもわすれめや
もみちをかさし菊をおるやま
　ゆるされぬれはとかやなからむ
しめゆひし菊一えたをけふおりて

住かたきかへなたのみそきり〳〵す
いつまて草の露の世の中
身をおとろかす鐘はすさまし
くろかみも今は霜よの秋更て
いとゝはけしきこからしの風
しほれゆくふか草山に秋ふけて
いつくにか又うき秋の立ぬらん
けふをかきりのなか月のくれ

老葉第四

冬

さひ渡りけり神かきのいろ
山風に三室のこすゑ冬たちて
こえゆく山のあとをこそみれ
暮わたる麓の月のひとしくれ
雲なき月のあかつきの空
さよまくら時雨も風も夢さめて
宮古おもはぬときのまそなき
時雨ふる深やまの庵に旅ねして
たかなみたとて袖ぬらすらん
かす〳〵のふること思ふさよすから
又みる夢もやかて覺けり
一年の花のあらしにちる木のは
うらみいくたひ身につもるらん
木の葉ちり人も移ふ山さとに
露としる身に吹風は物かなし
いのちまつ間に木葉ちる山
いく度か篠ふく庵のかはるらん
しくれあられのあかつきのこゑ
さひしくむかふうつみ火の本
音かはるしくれ霰のふくるよに
さむきあらしになるゝ冬の日
霰まつならの枯葉のちりやらて
つまきとる山みちふかく分いりて
松かせさむきかた岡のさと
こほれる水は駒もすさめす
影寒きひのくま川の夕わたり
きしの柳になひく初ゆき
水こほる遠の山きは草かれて
露霜もしらぬ常葉の森の陰
哀にかるゝ冬くさのいろ

さひしくこほる水のいなくき
鷹あさる澤のむら草冬かれて
むれ居し田鶴の浦に鳴聲
小山田のしもよの朝日かけはれて
水白く見えて橋ある江をひろみ
あしの若よに風わたるをと
あき風荒くかねひゝくこゑ
明わたるかれのゝ梢しもふりて
みやこもさひしみそれする比
そことなきとを山てらのかねなりて
しらぬ心はとりそかねぬる
山水の月さむき夜に猿鳴て
風はさえたをわたる村竹
有明にあられ散夜の月すみて
きくもかなしなすまの浦風
さゆる夜のかやゝの月にね覺して
いそくかたにそあしのいとなき
濱千とりよせかへる波に打むれて
なみのたちゐもつらき浦風
ちとり鳴雪の山もとしほみちて
ゆくかたいつく水ひゝくをと

鳴をしの羽かせさひしき冬のよに
水のこゝろもしらぬ早川
住かたき太山かくれにをし鳴て
草の戸はさせもか下葉朽はてゝ
あはれことしも霜ゆきのそら
なさぬつみもや身につもるらむ
心のみゆきのかり場のあるゝ日に
つかふもうれしきみかよのかけ
すへ出す御狩の鷹は雪はれて
わらふうちにそまことありける
とふ鷹はみえぬ茂みの山からす
なれぬれはおそるへきをも忘けり
あやうき嶺をはしる狩人
かゝみに年そうつりもてゆく
山鳥のおろのはつ雪ふりそひて
おるを見て花にうらみむ風もなし
みやまさくらにつもるしら雪
きけはちとりのね覺とふ聲
雪のよのあかつきさひし宇治の里
たかためさのみ身をはつくさむ
舟つなけ雪の夕の渡しもり

ねくらをたとる鳥のこゑ〳〵
山うつむ雪にゆふへや替らん
いりたつ窓の風のさむけさ
まきあくるこすの遠山ゆきふりて
かりねせし野のさむき朝風
そことなきよるのとを山雪ふりて
のこすこゝろのほとはみえけり
薪きる尾上の雪のひとつ松
まことの鬼にいかゝむかはん
鳥の音も猶すさましき雪の山
尾上のみやのあとのかなしさ
山ふかき雪を鹿のみふみ分て
ゆふ山からすうかれ行聲
雪たかきいり江の北のみねさえて
ふりわたりけり八重の芦かき
河波もおなし深雪のよし野山
こゝろのあとはなにゝ殘らん
おもひやる夕としらし雪の庵
冬こもる年のくれこそ哀なれ
ゆきに友なき老か身のやと
車もみつのこをおもふみち

ゆく名殘大井の宿の雪の日に
さやかなる日影や霜を拂ふらむ
たけの葉靑きやまあいの袖
かりねの野邊にさゆる山かせ
北祭かけしあふひも忘れめや
たく火ほのみえ人そ聲する
うたふ夜のほしの光に空澄て
宿いてゝ見すは雪もや恨まし
やま風よはるうつみ火のもと
はかなや年もはや暮にけり
山里の木の葉のあとに梅咲て
さむきはかりに春をこそまて
梅香ほる冬のかきほの山おろし
みやまかくれそかすみそめぬる
たく炭のけふりに年の末みえて
名殘あまたの春にこそなれ
としの暮老もかきりとおもふ世に
はるかにかへる山てらのみち
こゝのへに佛となふる年暮て

老葉第五

旅

こゝろよしはしなみたおとすな
道とをき別はいはふほともうし
ありはてん身とおもふはかなさ
したふなよとまるも旅の宿そかし
世のあはれをも思ふあかつき
しらす此別やかきりたひの空
關のひかしの山そはるけき
あふ坂や越ていつみん富士の嶽
やとりをとへは日こそ暮ぬれ
みるほとは近き山路をめくりきて
後のあしたそいとゝかなしき
昨日まて故郷見えしやまこえて
かへらぬ空をかこつ古さと
旅そうき雲は山をもたのむらん
ひとりはこえしをしか鳴山
おき侘ぬ月は旅ねのさよまくら
古さとさひしあけほのゝ山
よこ雲に遠かた人やわかるらん
草の原まて我そかなしき

故郷もしも夜のたひねいか斗
いのちあらはとかたりてそなく
おもひやれよはひの末の旅の空
つく〳〵まてはいきそくるしき
杖よりも山路は友をちからにて
やすくはたれか山にいるらむ
高ねよりをのゝ音きく旅の道
するかすかなる山もとのみち
旅人の弓はりもてる野はくれて
をちかた人をゝくる秋かせ
月白き山路に駒の音はして
むかふ日影もしらぬ山もと
よる出てゆく〳〵ねふる馬の上
やすむ木かけの水の涼しさ
山越し駒をふもとの野にかひて
かゝる深山にやとりかるあき
旅はたゝ鹿のふしともたよりにて
やすらふ野へをいつるたひ人
かり枕むすへは月のおつる夜に
はるけき旅そうきしつみあり
とふ宿に心〳〵の人を見て

つもる日はそれとも分す雪の庵
みの引かけていつるたひひと
まことならぬをなに頼むらん
やとりかるたみのゝ島の雨のくれ
ほたるをみるも物そさひしき
夏苅のあしやの雨にたひねして
たよりはあれと遠き古里
山もとの荻ふく風にたひねして
けふよりあすをなけかれそする
ふりくらす山路の雨にふし侘て
露もたまらぬ芦のかり庵
いかゝねむ秋は時雨のすゝか山
物おもひ鳥けたものも知らめや
みやまの雨のあきのかりふし
戸ほそをし明むかふおほ空
はれくもる雨の旅人いてかねて
もろともにこれや限と立別れ
かりねのやまのあかつきの雲
こなたかなたの山水のこゑ
旅ねするたかねに秋のよは更て
草もむすはぬ道いかゝせん

嶺たかみ雲を一よのまくらにて
こゝろほそさのまさる夕暮
雲鳥をしる人にする山こえて
身のゆく末をおもふ哀さ
草きたに知はまれなる山越て
夜ふかき山におもふいにしへ
こえかたき關に空音の鳥もかな
霧ふる山を又やこえまし
吹かはる霞のせきの秋かせに
ゆふ付鳥のこゑ／＼そする
人さはくよるのせき山月おちて
むかひのむらに舟わたるみゆ
人さはくかりねの月や明ぬらん
なさけなりける夢はわすれす
旅枕しつか燒火にまとろみて
われにひと夜の春はわすれす
埋火に雪の旅ねものとかにて
つひにゆく道をは送る人もなし
里はふもとのすゑのやまこえ
あさくも契る事のかなしさ
草まくら野寺の鐘におき出て

人のつてきくたひのゆく末
犬ほふる山路や里に成ぬらむ
たひのかとてをいそくこゑ〳〵
夜半の宿には鳥なけは犬ほえて
ともすれは泪ならては身にそはす
やま路のしくれ野路のゆふ露
ほと近く袖ふる山を歸り見て
われまちつれよみねのしら雲
花にみししかのうら波たちかへり
月をあはれむ秋のやまこえ
よふかきみちに舟まよふなり
うき旅をたれしらぬひのつくしかた
海をもわたる思ひねのゆめ
古郷はとを島國にあけくれて
いつくをやとゝ末にさためん
梓弓やへのしほちに舟出して
八幡の宮ゐあふかぬはなし
箱崎やまつを往來の舟に見て
たちかへらんもいさやふるさと
ゆくゑなきもろこし舟の與つ波
いたらんにしの國ねかふなり

追風をもろこし舟にまつらかた
ゆく末をたのめと神やまもるらむ
もろこし舟のさほのをひかせ
こゝろならすも又やわかれん
舟よするおきつ嶋山かせあれて
みやこのうちの風もすさまし
ねぬ床におもふ舟路のいかならん
古郷になを松風をきゝあかて
舟路なくさむうら〳〵のあき
夕風あらき川つらのさと
あしそよく陰にを舟やとまるらむ
山風さむし霜やをくらん
古里は草木もいかにたひのくれ
いつれの雲そこしかたの山
古郷は三の千里も過つへし
見すしらぬにもなきはうからし
古郷の山な忍ひそわかなみた
なからへけりとつたへやらはや
ふる里に身を有物とよもしらし
おもひやるこそ面かけになれ
かへらすはせめて都を忘れはや

ものうきみちはゆきもやられす
かへりても都やわれそ旅ならん
身をうら風に袖はぬれつゝ
みやここそ歸る浪にも戀しけれ
われを宮古にさそへ面かけ
旅まくら夢なとひとり歸るらん
たひは物かは古さとのあき
山路よりなれし風ふく軒の松
かへり見かちのかへるさのみち
なくさめし野山をかたる古鄕に

老葉第六

戀上

おもひうかるゝ空もはつかし
見ぬ人をたゝ吹風にきゝ初て
なみたの床そうくはかりなる
あまを舟はつかにみしを戀そめて
うかれ心のすゑもおほえす
みし人に思ひならひぬ戀やこれ
つらねし袖の香こそ忘れね

心しむみちゆきふりのおも影に
戀ちのおくのはやましけ山
ほのかにもみしをなけきの二葉にて
なにのこゝろの人をまつらん
戀路をもまた若草の下もえに
しらすこゝろやかはりゆくらん
草木たにみしにもあらぬ物おもひ
さても此身になにとかくさむ
天地もしるはかりなる物おもひ
たれにかふるきあとをとはまし
まよひきやむかしもかゝる戀の道
見れは心もそらになりけり
いかて身に物おもはする人ならん
ふみはしめぬるみちはあやうし
いたつらに身をなす物や戀ならん
しらぬもつらししらるゝもうし
きけかしな世にこそ忍ふ思ひなれ
こゝろともなき秋かせのころ
夕暮やしらす泪のぬしならん
たか袖としらても露やしほるらむ
身のうきまゝにかこつゆふくれ

荻ふく風にたれをまつらん
うき秋も君こそしらむゆふへなれ
　おもひすつなとまつ風そふく
頼こしゆふへつもりてよはる身に
　日くらしなけは泪おちけり
こめやとはおもふをいかてたのむらむ
　かきりをいそく世のほとそ憂
待くれに光のかけもわすられて
　まよひさとりは心にそある
夕暮の野寺の鐘に人まちて
　とかなき鳥をかこつわか中
はつ雁の聲にも人を待侘て
　草木もかなしうらかるゝころ
野分たつ夕に人をまち侘て
　人のこゝろにかきりやはある
わすれすはこよひならてもとはゝとへ
　いつの一日かやすくすきける
夕暮はとひもとはすもたえ侘て
　まつを見つゝもくる人はなし
おもひをもきかてとはすはいかゝせん
　はやうつろへる葛のはのいろ

神垣もこえんといひし人はこて
　おもへは神そ人をなやます
しらすきてかへるいもゐの日もつらし
　わかれむみちよ霧とふたかれ
とふ暮はうき中神もなき物を
　契てや常ならぬ道を忘るらむ
神なる雨にかよふゆふくれ
　ゆかむもくるし帰らんもうし
たそかれのしのひかよひに犬ほえて
　まよはぬは我心こそしるへなれ
しのひかよひのゆふやみのそら
　わかこゝろ人のうきをや忘るらむ
月をくもれとしのひゆくみち
　こゝろを見てやいとゝつれなき
あはすとてかよひはやまし夜半の空
　物いふほとのたよりをそきく
打そよくきぬの匂ひにたちよりて
　きくはかりにておもひこそやれ
奥ふかくきぬ打そよく槇の戸に
　さすかに人はみえんともせす
いひよれはこたふる聲をたのむよに

　こゝろ空なるすゑをしらはや
あた人はとのはをさへいひけちて
　思ふをしらてうたかふもうし
とかむなよしのひにたゝくよはのかと
　身をかくす栖いつくに尋まし
なしとこたふる人のつれなさ
　かよふそつらき忍ふよのみち
たまさかの契りとかむなとのゐ人
　いつあらはれてちきりむすはん
關もりのゆるさぬ中はあふもうし
　あふとする間に明はつる空
まれにとふよはに岩戸の闇もかな
　はかなやこゝろすゑなたのみそ
一夜こそうき身にあまる契なれ
　わすれやせましかゝるかりふし
賴ますよみちゆきふりのひとよ妻
　さもあらぬ名のたつ事をなけくみに
ひと夜のまことなをいかゝせん
　たれもさこそと涙おちけり
ゆく末のさためなき世をかたるよに
　又かきくらしなみたおちけり

まれにあふよはに恨をいひいてゝ
　ひさしき事をためしにもひけ
かはる世のならひをなとか語るらん
　のりも心のさはりとそなる
貝鐘の聲もあふ夜はうらみにて
　たゝひと聲にことたりぬへし
さのみなとわかれを鳥のさそふらむ
　うきとのみそみゝにしたかふ
あふよはのとりの八聲に鐘の音
　水のひゝきもつらきあかつき
千鳥なくさよのわかれ路月さえて
　ねよとの宿はよこそふかけれ
かたふかて月もひかふるきぬ〳〵に
　一かたならぬなみたなりけり
けさのみかつゐの別をいかゝせん
　ゆくかたしらすわかるゝはうし
ひかふるとおもへは夢のよはの袖
　いかにともいはれぬほとの中なれや
ゆめや覺るとおもふわかれ路
　うきもなくさむおりにこそあへ
きぬ〳〵に恨し鳥のあとをみて

おもふにゝたる文な送りそ
いそく夜のあした侘しき獨ねに
まれにあふみの又ゝいかならん
別しはあさつま山の名殘にて
おもひかねつとうらみやらはや
なかめ侘いたつら臥の朝ほらけ
人のつらさもよしや世の中
夢になせいつかおもひのはてならん
筆のすさみのことのはもかな
果ても空おほれせはいかゝせん
あらましのいたつら臥に月をみて
ちきりし物をあき風そふく
かりねかなしき月のさむけさ
あらしのみおもひよはるを又とひて
うき身ひとつそたのむかたなき
わするへきなみたの月に猶おちて
かりのこのよこ物なおもひそ
淺きえをうき水鳥の音に鳴て
こゝろにひまのなきやあまの子
袖の上はたゝ浪こゆるなきさにて
つらきなみたそ目にはあまれる

契しは形見にくめる水に似て
たつねもゆかし我名もらさし
いさや河いさといひてやあはさらん
替るならひの世をなゝけきそ
なかれてやあふ瀬にならん飛鳥川
ちかひのうみの深きをそしる
松山をわれやはこさむ沖つ波
とはぬにうきを何とこたへむ
木玉さへやとろはかりの戀の山
おもふこゝろはいかゝをよはん
戀はたゝふしより上のけふりにて
わか袖の瀧のしらいと絶やらて
人は岩木のやまそ苦しき
ひとり片敷そてそぬれそふ
戀わたる身ははし姫のおもひにて
よそなからみえこし色を戀ちにて
中はとをちのかつらきの雲
いまやとまては鐘のなる空
戀しさの心ほそくも月おちて
大かたの空も身にしむ物おもひ
月をもめてし戀しさそゝふ

こゝろをすますよはをとへかし
つゐの身の夢をもおもふ獨ねに
　こゑよはり行虫のあはれさ
獨ぬる霜よの空に秋ふけて
　身にしむ風よまつ心しれ
秋はふけ人は難面よることに
　なかき夜つらくまちそ侘ぬる
こぬ人もみるらんものを空の月
　つかの間もやすむ時なき思ひにて
たま〳〵見れはひと筆のあと
　とはすは明日もなにゝ賴ん
一筆の跡こそせめて命なれ
　なにをなさけとなをしたふらむ
手やふれしとはかりかへす文をみて
　たちゆく鳥の跡も殘らす
忍ひつる文をけふりになすもらし

老葉第七

戀下

たゝ一すちのおもひなりけり

花に根この葉に人をまち侘て
　まつにをそきは人やとむらん
我かたを忘れてこすは花もうし
　戀侘るとはほのかにもしれ
みし人は雲井の月を名殘にて
　思ひそまさる秋ふくるころ
有明にいひしはかりの月をみて
　袖もほしえぬ露のまそなき
あひ見しはたゝ秋風の夢にゝて
　これそかたみの袖のうつり香
面かけは手にもたまらす又消て
　そはぬなさけそ猶うらみなる
夢かとよ一よふた夜の其ゆくゑ
　なみたにむかふきぬ〳〵の跡
なくさめぬ物から月を形見にて
　月も身にしむ戀しさそしれ
形見とも人はおもはしあきの空
　なにを名殘となくさみもせん
つらさこそおもへは人の形見なれ
　あさからすとてそひはてんかは
うかれたゝそれも形見と成やせん

忍ふかひなく身や過なまし
あはて名のたゝむはかりはいかゝせん
　あはぬも深き契りとそなる
いたつらに歸る夜にしも名の立て
　やる文をいかてかかくはちらすらむ
たゝはふたりのうき名ならすや
　ふみこし跡をのこすゆふ霜
道芝に人のとたえをみるもうし
　きりつくさぬや歎なるらん
つれもなき我戀草のねを茂み
　かさなるも夢之けりなさよ衣
うすき契をうらのはまゆふ
　むさし野もかきりしらるゝ冬枯に
いかなる種そわかおもひくさ
　つれなき色はいかゝかはらん
はかなしや松をしくれの我おもひ
　まつになひかはうれしからまし
たえねたゝはふ木はよその玉葛
　風のみさはく夕くれの秋
たのめしは桐の下葉のをともせて
　物おもへとはなとちきるらん

たのめすは侘つゝもねん雨のよに
　あふよにいつかとかむ下ひも
月日のみゆきめくる世に戀侘て
　わすれかたみの風そみにしむ
夕のみとはれし秋の空にゝて
　うきに佛の名をもとなへす
後のよをなけくになすも色みえて
　いのちをさへにうらみてそ待
こぬ人やさためなき世を忘るらん
　とはれむまての身をな賴みそ
今こんと世の情にやいひつらん
　とはれてたにもなみたおちけり
わかるやとよそのかへさを憑む夜に
　いつちゆきてか枕さためん
ふた道におもひうかれて夜も更ぬ
　よそめにはおもふ中とやいはれまし
ひとり／＼にねぬるよのとこ
　これも形見の露のぬれきぬ
にくからぬ人ゆへ憂はつらからて
　戀そむる身のゆく末のいかならん
うき人妻にこゝろくたくな

こゝろしつめてみをかへり見よ
人妻におもひみたれは名やたゝむ
夢にもたのむかたそ稀なる
うき人の心のあらしよそにふけ
月をみるにはおもひこそやれ
たか袖か秋につれなきとかむなよ
水もねぬるやふくるよの秋
露のまの夢路によとむ我なみた
今あひみるやかきりならまし
ゆく末を泪にとへはなを落て
とはれむ物か秋ふくるころ
誰をまつ露のたのみそ思ひけて
ねぬよのとこにおもひこそやれ
人は身を哀たれにかわするらん
けふとたのめし暮もかひなし
人そうき身のあらはとはおもふなよ
なにをかことになを待てみん
わすれねといひしも誰そ我こゝろ
おもひなつけそゆふ暮の空
戀しさもたかなす事そ我おもひ
あふ事は今をかきりといひ置て
なを戀しくは身をいかにせん
中〳〵にたつ名も今はいとはめや
いくほとありて戀もうからむ
いくほとならぬ身をそ侘ぬる
昨日けふかくる契のはやたえて
のちの世かけてちきりをく中
ほともへすなと日のまへにかはるらん
そのたまつさそゆくゑしられぬ
たのめしはたゝとふ鳥のあとにゝて
木の葉ふりしく秋のかよひ路
露の間のえにこそあれなたえねたゝ
わすれんとすれは人の面かけ
あはぬまもありつる身そとなくさめて
むくひのほとのはてをたにみん
つれなきを余所にわするゝ人もかな
はかなきちきりさきの世をしれ
人にいつつらきを見せてうかるらん
さためぬ夢のよをはちきらし
うき中や又生れてもうとからん
うつせみのよに物なおもひそ
ことの葉にかゝるはかりを命にて

なにゝちきりのするをさためん
頼むへき命もしらす人もうし
　いつまてとてか身をはたのまん
そふも夢うときもかりの世間に
　すきにしかたのまとをそしる
あた人と聞つゝ頼むするたえて
　おもひかへせは身そうらみなる
あた人もひと毎にやはつらからん
　かこたんよりはおもひすてはや
見すしらすならはたれかはつらからん
　ちきりなれはや物おもふらん
心をもみはてぬうらみまてしはし
　うきおもひをも月やのこさん
なかめしようらみにかへる秋の空
　おもひにあまる夕くれの秋
恨をもこたへぬ月に打侘て
　ふかくはいかておもひそめけん
たのますは侍るうらみもあらし世に
　いつのときにか思ひすてまし
命よりうらみははてもなき物を
　たれをこゝろのおもひ出らん

うくつらく成きてふたり絶る世に
　かきとゝめつることのはをみよ
戀しなん後はおもひもいてやせん
　ある世をせめてとふ人もかな
しらさらん後のまとはなにかせん
　つれなくてこそ終にすきぬれ
戀しぬとよそにはしらん跡もうし
　きえんかきりをなと忘るらん
後の世のおもひ出にもしはしとへ
　ひとりのつらさいつよりの身そ
さきの世もおもひ有てやはてつらん
　うらみをなかくたれにのこさん
我思ひ來ん世にせめてつくさはや
　わかれしまゝの人の戀しさ
この世には今ひと度やあはさらん
　いつをかきりに人をおもはん
契りはや我にはてたる身をしらて
　うたかはしきもちかひにそある
なくれしといひしも後はいかならむ
　おもひつゝけて音をのみそ鳴
あちきなや世々にしつまん戀の道

おもひすてぬそ戀はかなしき
盡さはや世々のうらみとなりやせん
いかに結ふと契りはかなや
かれねたゝつらなる枝のはてもうし
いつあひみてか袖をほさまし
憂中はさらになき世のわかれにて
命にむかふ袖のわかれ路
君しきは身をもおしまし藤衣
人のこゝろのかはる世の中
はかなしや羽をならへし鳥へ山
のこすこゝろを人よかたらへ
かたみをもやかて見すてはいかゝせん

老葉第八

雜上

うくひすさそふ遠こちの里
聲まちしゆふ付鳥に年こえて
春とも見えぬ松の葉の色
子日せし野へも人なきふる郷に
いつれの春にこゝろとゝめん
歸るなよとこよもかりの宿そかし
梅の花手折てかさすかへるさに
嶺の檜原のはるのさひしさ
さひしさやけに古寺の松か本
花に人なきあかつきの庭
時をうるにもあやうきをしれ
世こそたゝ風まつ花の一さかり
なかめくらせる空としらすや
花とをき山のすそのゝ草の庵
人目たえたるおくの山かけ
花を風わか物とてやのこすらん
こほれておしき花の夕露
はかなさやあすはかたみの春ならむ
おもふみやこに尋きにけり
郭公まつとや空にきゝつらん
かくはかり人はきかしなよるの雨
ねさめの里のやまほとゝきす
涼しきかせのすゑのさひしさ
夏の日の夕山からすみねこえて
人はかけせぬさみたれの空
螢とふ夕川を舟さし捨て

住なれて心うこかぬ古寺に
たゝむ石井の水のすゝしさ
をと閒水によるそ涼しき
茅の輪きる御祓のかはら暮はてゝ
春とあきとにうつろひにけり
ほしまつる夜半のともし火かけそひて
木陰にをそき夕闇の月
篝火に秋のやり水こゑ深て
打かすむ雲井の御階まうのほり
弓はり月にむかふ山のは
色なき風もたゝあきの空
鴈のとふゆふへの山のひとつ松
ともす火すつる月のくれかた
夏むしと見しはこの比ねを鳴て
みたるゝ露の月そかくるゝ
すゝき散末野の山に雲引て
けふも〳〵と年そくれぬる
あやめひく袂に菊を又つみて
世々のすゑには生れすも哉
身を秋のおち葉を誰かひろはまし
はやきり〳〵す袖たのむころ

露のくれ霜のあしたに野は枯て
木の葉をみれは難面もなし
袖ぬらす老曾の杜の夕時雨
ねさめの露に身こそしらるれ
いつ住て深山にきかむさよしくれ
古き草紙の文字の韞かれ
柞山しものおち葉をかきすてゝ
あかつきふかくをしの鳴聲
嵐ふくとなせの月の氷るよに
千鳥なきたつ雪の暮かた
野をひろみ御狩の人のさはく日に
すてかぬるこそ戀はつらけれ
箸鷹のつかれをおしむ野は暮て
とはれぬをたゝ隱家に住なして
みやまにゝたる雪のした庵
うたのさまその時々を分置て
もみちのにしき花のしら雲
春より後も夢の一とせ
いつの光いつのかけをか頼むらん
かはるこゝろをなにと頼まん
春秋はたゝ時による哀にて

色にはみせていふ事はなし
春秋を草木にうつす天つ空
いかにして宮こをおもひ離まし
春をくらせは又あきのつき
いときなき程こそ今は戀しけれ
うへしこ松はやまかせのやと
まなひてや古き風をもつたふらむ
松にこまつのおひのほるやま
たつた川なかるゝすゑの山こゑて
瀧のうへゆく雲のひとむら
山した水の音はすさまし
瀧殿にはやくの跡を獨みて
雲間の月の陰そすくなき
奥山の岩のとたえに水すみて
くち木の中にすめる山かけ
水淺き古井の井けた苔むして
すみぬるさまもかはる家々
庭にせく水のなかれを田にうけて
ことゝふ鳥の名もしらぬ聲
山かつの垣ほのむはら花さきて
世の中に絶たる峯は誰かこん

みつ草きよき谷のした道
あるかなきかの山かけのみち
かけろふの岩かきし水草しけみ
ことのをたちし人はかへらす
たかき山なかるゝ水もたえぬ世に
すまはひとりとおもふ柴の戸
しつかなる身は雲水もさはりにて
むかしおもへはなみた落けり
しらさりき都にかゝる山のおく
山陰のさとは木葉に道絶て
嶺なるはしをわたる松かせ
寺のまへ行たに川の水
暮わたる橋のむかひに鐘なりて
ひとひ〳〵とをくりこそゆけ
程もなくいりあひのかねに夜の明て
こゝろほそきはきぬ〳〵の空
しのゝめの山の端うすく雲引て
かすみの庭の暮のさひしさ
雨はれて遠山のこるまとのまへ
さひしきもうきも心と草の庵
あはれとをきけあかつきの雨

忍ひねもらせ山ほとゝきす
誰きかむ夕の雨の草の庵
岩のかたちも水きよきやま
住人のむかししらるゝ庭ふりて
ほたるとひゆく暮の涼しさ
立出るやまつの戸に雨すきて
かすみなて都のかたの見えよかし
ひとりたゝすむ山さとのくれ
契ても情のなくはいかゝせん
わかやまさとをあらす松風
わかれし後そありしにも似ぬ
さひしさにならふ山里友もなし
松ふく風のすみわたるこゑ
庵結ふ太山の苔に水おちて
庭淺くなる冬の木のもと
軒ちかき山に柴かる人みえて
山かつの過ゆく袖に風吹て
たく柴にほふたにのした道
わかゆふ暮と鹿やなくらん
柴の戸のあはれは身こそ主なれ
ほたるの陰そともし火と成

蘆原にあまの釣せし舟朽て
ふく笛さひしかよふ山みち
麓ゆく舟にすなとる火はみえて
住よしのはま松か根をこす波に
あらはれそめつあくる遠しま
あらはれぬれはかきたえにけり
明ぬ間の雲のとたな山居に似て
なにとかならんまよふ行末
さま〳〵のかたちをみする空の雲
瀧津なみよるの巖の床寒て
深山の月に猿さけふ聲
ねくらを出るとりのこゑ〳〵
むさゝひのさはく深山に日は暮て
もとのさとりに身こそ遠けれ
獸のはしるや弓にをそるらん
なきてむかはゝあはれとやみん
いかり猪も命をそれよあつさ弓
家々の灯きえて更る夜に
星すさましく犬ほふるこゑ
旅人さそな雪のあかつき
里とをみ犬ほふる夜の月さえて

まくらかる野のむらの明ほの
聲遠きゆふ付鳥に月落て
弓弦をとせぬ代はしつかさ
竹ふかき陰をね鳥やたのむらん
ちきりの末そ雲となり行
梓弓とふしら鳥をなこりにて
夕さひしと山ないとひそ
雲鳥の歸るをみねにともなひて
くるゝさかひそ猶あはれなる
籠のうちを賴むやとりと鳥のねて
山かけの月や兎の臥所
秋のいり日にからすなく聲
春の鳥たになかぬ奥山
聲さひし霞の中の夕からす
心をうつすなくさめもかな
たまさかの友まちえたる古郷に
人はたつねぬやとの秋風
蓬生を我さへかれはいかならん
みえす成ぬる古郷の山
木草なき砌はたれかあらすらん
たのむにこそはうつる世もあれ

住はてゝ古き都の草の庵
わかれし人そみるはかりなる
淺茅生やふるき都の月のもと
きけはふきさすすのうちの笛
遠さかる車のをとに月寒て
淀路よりはや都なる心ちして
あかつき月にくるまやるをと
たれか此おもひの家を出ぬらん
ね覺にとをき小車のをと
とくをそく終にはめくりはつる世に
あらそひはかな小車のみち
きのふに替る世の中のさま
人もねぬ市のかりやに夜の明て
よろつのみちそ末に成行
かた山の市のかりやの夕まくれ
つみいかにともたれかしらまし
ともなひてうれへを酒のたはふれに
面影をまことゝ見れはくるしくて
のほる人あるうつし繪のやま
此まゝにときはなれかし花さかり
ともの木すゑの春のうつし繪

一しきり竹吹しほる風あらみ
むめさくかけは笛の音もうし
あそふや糸のみたれたる色
灯に夜半の笛たけこゑ更て
しる人なくてすめる故郷
絃をもはやたゝはや老のひとり琴
月はかくるゝうき雲の空
四の絃に秋のむら雨ねをそへて
こゝろのしるへむかふのみかは
かしこきはまた手にとらぬ文を見て
みちあらはれて雪はきえけり
灯やふみにひかりをのこすらん
かゝけてむかふともし火の本
かすかなる文字によはひを知もうし
いやしきも大君の代を初にて
まなへ淺香のやまとの葉
學ふへき道にはやくも至らはや
おもふ風ふけ和歌のうら舟
久堅の天地にしも生れきて
おもはさらめや言の葉のみち
思ふもつらしゆく末の道

昔たに名をうる事はかたき世に
はかなき物はものゝふの道
誰ための名なれは身よりおしむらん
たかあとゝしも見えぬ古郷
人はたゝ名をしらるゝもある世にて
うる事なにそかりの世の中
とゝめてもなからん後の名はつらし
見れはなみたのおつるうつしゑ
かしこきも求ぬすゑの世はかなし
あふまてはなくともしはしなくさめよ
身のよしあしにたのむうらかた
佛法僧と鳥もこそなけ
人はなとゝはをあたにもらすらむ
こゝろにねかふ事はつきせす
人毎にうれはうしなふ道有て

老葉第九

雜下

雲ものこらぬ夕たちのあと
かけ高き天のかく山月すみて

とをきあかたも君あふくなり
松浦山かけにおさまる風をみて
とのははなけくに安き道ならて
あふけはいとゝたかさこのまつ
みるさへうしや一筆のあと
朽残る松かうら島なみこえて
佛ともなるてふ事の有なるに
あはれ朽木をみをのそまやま
たれもみち葉をうつろはてみん
音きけはしのたの森の夕あらし
神のちかひのふかきをもしれ
たれか苅鎌倉山のはるの草
去年の秋おもへは夢のわたりにて
難波のあしに春風そふく
人はむかしのとの葉もうし
水ならて聲はなからの橋はしら
大ひえや我たつ法の跡とめて
むかしにかへれしかのうらなみ
のちにそ法の心をも得し
恨つるをは捨山の月はれて
いつきの宮はのりをやは聞
かすむなよ雲の林のかねの聲
たつの宮古もをとにこそきけ
浦かけて夜半の鐘なる三井の寺
漕ゆく舟そなみに消ぬる
鹽合のあはとはるかに日は落て
ことしも老のなみそよりくる
高砂のまつこともなくなからへて
わたりかたくも橋そふりぬる
津の國のなからへくるをうき世にて
身にもおほえす時そ去ゆく
をのゝえも我有増にくちやせん
はやく恨てのちやかはらん
まてしはし世にあるへしのわか心
こゝろを千々につくすかなしさ
幾程もあらしわかよをすみ侘て
うきとも嬉しきふしも夢なれや
あしのかれ葉のかりの世のなか
はかなき夢のなをやみえまし
世の中はよしあしともにとゝまらて
あへは中〳〵音のはもなし
よしあしのとはり分ぬすゑのよに

一日の夢の身をなたのみそ
世中はきのふもむなし明日もなし
　いつの夢とか身はきえなまし
露の秋かすみの春のあたしよに
　ねふりのうちはいとなみもなし
夢になせ世はうつゝこそくるしけれ
　人のわさこそみなあはれなれ
いつまての身とてうき世を渡るらむ
　なみあれ風のをともすさまし
世の中のかはるはしほのみちひにて
　夢つゆのみかあたのことはり
めくるよをおもへは水のあはなれや
　たか夢を苔の筵にさますらん
はらふかせまつちりのよの中
　しられすよ猶いかさまにかはらまし
わかみるうちもあらぬ世のなか
　わたる人なき雪のかけはし
たれもたゝうきよの道にふりはてゝ
　よしやしはしはおもひなくさめ
身にかきるうき世之ともいかゝせん
　あさましき心をなとかまなふらん

すてぬもありとよをなおもひそ
　なにゝか秋のさひしかるらん
世のうきにかへはつらさはなき物を
　有増もつゐにむなしく成やせん
よはなに事か我こゝろなる
　鳥のこゑきけ雪の山さと
つねならぬ身をやすくとはおもはめや
　さらは身のおもひなくても消よかし
こむ世をさへやいたつらにせん
　いつくを旅のゆく末にせん
又もかく生れは世々のうき身にて
　かりなる身とは露やなるらん
生れこし天の御鉾のすゑのよに
　夢うつゝともさためなのみや
なにかわか形となりて生るらん
　うれしき夢のすゑもたのもし
罪あさき身にてや人とむまるらん
　よの中しらぬ人のはかなさ
ありはてん物とて身やは生るらん
　あるもかひなしおもひきえはや
つれなきも人のためさへうき身にて

秋のしくれや里をわくらん
侘人の袖はくらへん露もなし
ことはりしれはなみたおちけり
中〳〵の山かつならぬ身はつらし
あるにまかせよよしや世中
なにか身のおもふによらはうからまし
きくもひとりとおもふ世の中
たか上か身のうきほとはつらからん
ものゝ哀もしらし山かつ
心あらは身のいかはかりつらからん
山里はなにはの事もともしくて
身のやすきにそ人はなくさむ
すみならかれそ秋のふる里
露の身をゝかはいつくか安からん
友もすくなくなれる世中
何をまち誰をたのまむ身の向後
又うき事に袖やしほらん
おもひたつ身を一きはに捨もせて
をとに聞芳野の花をいつかみん
身はすてすとも心あれかし
つまきの賤のうちわふるくれ

石の火のかけにこの身を忘るらん
いかゝはすまん冬のおく山
かくす身は賤か妻木のつてもなし
とりけた物もなかぬおく山
心なと世のうき事にとはるらん
かたらふ友もよしやおく山
すつる身は心ありてもなにかせん
おもへはむかしたゝ夢そかし
さま〳〵の有増つきて捨る身に
なをうき事は奥山もなし
鳥の音もきこえぬはかりかくす身に
すてはつる身を夢やとはまし
世間をおもひかへすな苔ころも
窓に瀧みる雲のした庵
桑門かへらぬ水をこゝろにて
おもひなれぬる暮そかなしき
墨染をなみたは本の袖にして
かしこきや民の上をも祈るらむ
ひとりやすくと身をなおもひそ
なみたすゝむる世とそ成ぬる
せめて身に人のうれへをみすもかな

たえぬは袖のなみたなりけり
よそにみるうれへも老のおもひにて
　山にすむ身のいつを待らん
おさまれる世はありとも我よはひ
　まなひえぬこそ身にくやしけれ
のかるゝも有世に老のなをすみて
　こゝろほそさそ更にまきれぬ
ましはれる人にも老はなくさまて
　とにかくに逢かたきこそ恨なれ
いまはのおいのすゑのはる秋
　あひかたきこそ後の春なれ
たれもとはおもへとおいのあすしらぬ
　人をうしとはいかておもはむ
とかむなよ老のくせなる物うらみ
　身にふる事のかへるあはれさ
老ぬれは又いとけなくわか成て
　我はかりにやつくるいりあひ
老か身よ誰もかきりはある物を
　へたつるや永き恨と成ぬらん
遠山とりのおいのいにしへ
　へたつる人もさのみかこたし

身ならすは我もいとはむよはひにて
　うきわかこゝろ誰にかこたん
霜は今ふり分かみの遠き世に
　月のひかりにあたる身もうし
秋風にかしらの雪はなをふりて
　そなたはさても何をうらみむ
くらふれはいにしへはうき事もなし
　おきていたらむあかつきもかな
夢路のみかへるむかしは猶戀し
　むかしの秋にものはおもはし
忍ふとてそのなに事かかへるらん
　そのことゝなく物そかなしき
しらす身のかきりや近く成ぬらん
　身をもすて命をも人おしむなよ
なからへてこそうき事もあれ
　かへらぬ事のつらきいにしへ
親になとなをさりにては過つらむ
　おもひあはするなみたこそあれ
我なくはいかにといひしおやもかな
　おとろく時そ身のとかをしる
親をさへ遠き別にわすれきて

それとたにしらはいひてもみまくほし
いときなき子をいかにいさめむ
　こゝろのなきも見てやしるらむ
みとり子のおもきらひこそあはれなれ
　おもふむかしそ又いまになる
子を見すはしらてやすきんおや心
　繪にかくのみかもろこしの人
誰もたゝおもへは夢のかたちにて
　おもふ友ある日こそおしけれ
あすはたかなからん事もしらぬよに
　秋のまくらに身も消つへし
なかき夜やこむ世の闇にむかふらむ
　うきをたよりと賴むおく山
取たひに薪つきなむ日を待て
　わすれよとてそ遠さかり行
大かたの月日もかなしおやのあと
　忍ふこそなをふかきみちなれ
なき人の跡にはらへし忘草
　すきしをおもふ心はかなさ
先たつはうからぬ世にも生るらん
　むまるゝ道を今つくさはや

立かへりまよふなつ非の夕煙
　むかしと成をなをかへさはや
とふ跡に七日〳〵のうつりきて
　そふほともなく歸らんそ憂
山寺におもふあとゝふ日の日數
　なみたの雨よゆく人にふれ
わたり河かへらぬ水と聞もうし
　あくれは雲やたちわたるらん
歸こし身をうら島か玉くしけ
　たく火もみえぬかたのゝとけさ
山に住人はかすみをいのちにて
　君かやとりそくつのあとある
かけ遠くしたふ鏡の山しなや
　むなしくむかふ秋のよの空
心なと月のかゝみにくもるらむ
　たゝありなしの契りなりけり
人の世はかゝみのうちのかたちにて
　よの中はまさる方にやなひくらむ
はかりことある國のあらそひ
　心にこめておほきいつはり
おそろしやゑみの中なるその刀

はけしき心虎はものかは
聞もうしさもからき世のまつりこと
をもくとも罪は心に消つへし
新島守をきみに見せはや
袖なるつゆや又かはるらん
つらき身の憂にあふも命にて
つもれる年に身やかはるらん
子は親のつかふる道をうけつきて
きみをおもふに身をそ忘るゝ
つかふるを我しろ髪にはちもせて
生れてはたのしむ園と聞物を
ゆく末いのれ春のみや人
みちは岩ふむかた山の寺
杖によるおこなひ人の年ふりて
すてたる身にはたれをさそはん
おもひ入みち一すちのてらめくり
ゆふへさひしき露のふる道
人かへる跡に野寺の松をみて
草木をさらに佛とそ見る
古寺は露のみ玉のかさりにて
とりけた物そ心かたらふ

山ふかき夕の寺の法のこゑ
こゝろそかよふやまともろこし
法にきく名も高かりき三笠山
あふははなるゝはしめならすや
法にこそひかれて出め右の道
ゆかむとすれは足もすゝます
いかて身にはるけき道そ法の場
うしのちからを我にからはや
道淺き法こそ鹿の車なれ
ほると見えてそ土はうきたる
法の水ちかつく袖のうるほひて
のこす御法のすゑの世の中
かくれても佛や人をすくふらむ
又むまれこぬ此よともかな
はてはたゝ佛もかりの親なれや
いつくにすむも君かくになり
誰を神人の人とはおもふらん
おいかはれるやすみよしの松
神垣に杉のこたかき八幡やま
かさす櫻を見せんうれしさ
石清水かけもくもらぬ月いてゝ

たちもはなれぬこの法の庭
枯し木もめぐむ日吉の神心
　さやけき月の夜をな忘れそ
春日野に神の恵の露をみて
　竹のうてなそ岸のほかなる
こゝに神世を住よしと跡たれて
　むかし知こゝろはかりをたよりにて
此みちいのる住よしの松

老葉第十

發句

　正月一日獨吟連歌に
月の秋花の春たつあした哉
　春たちける日
霞をもまたて春たつ都かな
　はるのはしめに霞を
山やけさめのうちつけの春霞
　草庵の會に梅を
やふしわかぬ春日にゝほへ宿の梅
　太田備中入道の許にて
むめか香にくもらはかすめ夕月夜
　梅の發句のうちに
白たへの梅に色こきにほひ哉
梅か香を空にしめゆふ嵐かな
二葉より匂ふ木もいさむめの花
梅の花色にとられぬにほひかな
むめかゝよ色に千しほも染つへし
　二月はかりにある山里にひとへなる梅の咲そめたりしを見侍りて
春なかは冬のむめ咲太やま哉
　春の雪を
山みれはふるより寒し去年の雪
朝な〳〵山のは遠しはるの雪
山の端にかすむや名残庭の雪
ふりそめしほとたにのこれ嶺の雪
　柳を
あさ露もしらぬ風ふく柳かな
青柳にこゑうちかへせはるのかせ
朝川のけふるや柳春の水
糸あそふ空もみとりの柳かな
春雨をあは緒によれる柳哉

春月を
はらふへき風たにかすむ月よ哉
かすむ夜そおほろけならぬ春の月
太田備中入道のやとりにて心敬僧都なと侍し千句
に
遠くみてゆけはかすまぬ春野哉
鎌倉にて二月のはしめに
まゆにほふ遠山あをし春の海
寺井四郎兵衛尉許にてまつ花のこゝろを
おもひくまなくてまたるなはるの花
おなし心を
またて見んさてもやをそき春の花
待人を花にかすめよとりの聲
いかにせん花をいそけは嶺の雪
さかて先あらしをつくせ春の花
花をたつぬといへる心を
朝霞かくさは花のしるへかな
はなの發句の中に
花はいさとしに色そふこゝろかな
みるはかりいはれはおらしやまさくら
花をみは人なき雨のゆふへ哉

よるや雨花に露けきあさかすみ
小笠原美濃入道の宿所にて
かすみぬと見しや春雨花の露
おなしく花を
色をすかた匂ひを花のこゝろ哉
濱豊後守亭にて花を
よそに見は軒はや雲井花のかけ
上杉戸部の亭にて千句に夕花
夕暮をみるや見る人はなの陰
鎌倉管領の亭の千句に花を
長閑なる世は花にたに風もなし
大内京兆の亭にて
しら雲のたてるやいつこ花さかり
同京兆の花見にさそはれ侍て
みる人を風もまちけり花さかり
細川聰明丸の亭の千句に
櫻かりかへさは野へのすみれかな
長尾々張守許にて花の比
花やひくかへる袖見ぬ木かけ哉
鳥の音も花のそこなる深山かな
よし野の花見にまかりて

御よし野やほかには花の山もなし
　南都成身院にて春の比
みかさ山ふもとも花の雲居かな
　同春覺律師の許にて
おる人を花にうらみむ風もなし
　はるの發句の中に
時は今花のよなれや風もなし
さかぬ木も風やうらみむ花さかり
一とせの風やいま吹はなさかり
花さかり雲井に見えぬ山もなし
みねの雲かくすも花のすかた哉
山里にさけるを花のこゝろ哉
花をまつ見すはかすみの匂ひかな
さかぬ木に花をなくさむ心かな
水せきて風をやまたん山さくら
見ぬ人をうらやむ花のあらし哉
　人にかはりて花を
山かすむ夕はちらぬ花もなし
　佐々木近江守の亭にて落花を
いつはりのある世にちらぬ花もかな
　おなしこゝろを
ちるのみをこの世のものか春の花
　花の雲といふ心を
花と見はこゝろもまよへ嶺の雲
まかへ花そをたに後の春の雲
　をそさくらを
待人にひと春まけよをそ櫻
花にかせよはるやまちしをそさくら
　池田若狹守千句し侍し時彌生にうるふ月ある年遅
　日を
一日にもくはゝるとおもふ春日哉
　東野州の山家にて春のすゑつかた祝のこゝろを
花のへむ千世は八峯の椿かな
　上杉戸部亭の月次に
さく藤に匂ふや北の家のかせ
　はるの發句の中に
道芝に匂ふ花つむ春野かな
たか袖そうらやまふきのにほひ哉
　暮春のこゝろを
春よまてちる櫻あれはをそ櫻
　蒲生藤兵衞尉舘にて三月盡に
けふのみとおもはてのこれ春の花

おなし所にて餘花を
夏きぬとあらしなつけそやま櫻
ちらて花またはまたれよ郭公
心敬僧都の旅宿の坊にて郭公
聲とをみまたぬはきかしほとゝきす
おなし心を
まつを聞人つてもかなほとゝきす
郭公とを山ならぬこゑもなし
上杉典廐の亭にて
二こゑの今そきゝしもほとゝきす
題しらす
月やけさいる山さそふほとゝきす
さ月の比郭公を
いつなかむをのか五月の郭公
いつきくをふる聲にせんほとゝきす
心敬僧都の旅宿にて
卯花と色には見せぬさかり哉
新樹のこゝろを
秋風をおもはてしける木葉哉
杜若を
さきこすからむらさきのかきつはた
杜若花に水ゆく川邊かな
水鷄を
水鷄なく谷に夜ふかき朝戸かな
月のさすとほそもしらぬ水鷄哉
こしへまかりし時榎並三郎左衞門尉許にて早苗を
あすやみむうふる早苗のすゑの秋
おなし心を
秋かせの面かけそよく早苗かな
夏の發句のうちに
下露もさみたれ髮の柳かな
五月雨は花のおち栗風もなし
ゆく水にひくや夏その糸柳
住吉の社家にて侍し會に
橘におもふは神のむかしかな
浦上美作守許にはしめてまかり侍しとき
すゑいく世いはほの小まつ石竹
細川の典廐の亭の千句に樗を
下草をすそこにちれるあふち哉
おなし心を
夏衣うす色しるきあふち哉
あつまへくたり侍し時北野の會所の月次に

かへらはと道芝むすふ夏野かな

題不知

山松のかけやうきみる夏のうみ

神保宗右衛門尉許にて扇を

心あひの風の名にあふ扇かな

おなし心を

さしかくすあふきに薄き夕日哉

夏の月を

ふけてみぬひかりもすゝし夕月よ

けさみれは月そなかきよ夏の空

夏の發句の中に

夕たちに見ゆる木草の心かな

柳かけちらて秋たつし水かな

伊勢國司舘にて千句侍しに納涼のこゝろを

花もかなあらしやとはむ夏の庭

おなし心を

むすへ露篠分る袖のあさすゝみ

かけ涼し苔に塵なきにはの松

雨涼し雲のあなたや秋のかせ

御祓のこゝろを

雲をかせはらふも涼し御祓川

秋たちける日

木からしのはつかせしるき一葉哉

風やしる散あと見えぬ一葉かな

三井寺佛地院にて秋のはしめに

水きよき池は一葉の塵もなし

おなしこゝろを

秋の葉は糸よりよはき柳かな

散をみてきけは風なき柳哉

杉次郎左衛門尉許にて

柳ふく川かせすゝし秋の水

七夕を

あさかほの名におふほしの契哉

閏七月七夕の心を

あふ夜半やことし二の天津星

荻を

はつかせもはや秋ふかし荻の聲

松風もほに出るあきを荻のこゑ

あさ露の月のした荻風もなし

佐々木信濃守の亭にて千句に

楸散山もと涼しかはらかせ

蜷川修理進許にて

かり鳴て秋色つく濱邊かな

横河安樂寺にて

山水もゆふ暮ふかしあきの聲

秋の發句の中に

朝霧のまつやうきしまあきの海

露におき霧に朝たつ山路かな

萩を

にほはぬをうらむらさきの小萩かな

のこれけさ月をする葉の萩の露

本能寺にておなし心を

露なから見るともおらし萩か花

草庵の會に槿を

露もおし夕かけまたぬ秋の花

すゝきを

秋といはゝ朝露なひくすゝき哉

八月十五夜の心を

草も木も月まつ露の夕かな

秋の月名もとはりのひかりかな

月の名を雲井に名のるひかり哉

をはすての月見にまかりて

あひにあひぬをはすて山に秋の月

清見か關にとゝまりし夜

月そゆく袖に關もれ清見かた

太神宮法樂の千句に月を

神代にもかくやすめるを空の月

つくしにくたり侍し時豐浦の宮にておなし心を

月にみつ夕鹽さむし秋のうみ

秋の發句の中に

白雲も月によ渡るあらし哉

うす霧の月や春の夜朝ほらけ

野分せしはなの袂やしのふすり

雨しくれ風野分たつ夕かな

題しらす

鴈なきてをく霜さむし菊の庭

實中禪師の興行千句に菊を

うつろはぬ菊や北なる天津星

旅宿にておなし心を

山路をもかさしてこえんやとのきく

上杉武庫の亭にて同心を

かはる瀬もなき淵なれや菊のかけ

九月十三夜に

秋を月なかはにかへすことよひかな

名やおもふこよひくもらぬ秋の月
遊佐新右衛門尉許にて長月はかりに千句侍しに月
を
もる月にあくるや關のとなみ山
奈良京にて千句侍しに
秋の雨を下葉にもらせ三笠山
池田民部亟許にて秋の發句に
嶺の松そめぬも雨のこゝろ哉
長尾肥前守許にて時雨を
時雨より心はそめぬ山もなし
宇津の山こえ侍し時蔦のはの色こきを見侍りて
宇津の山こゝもたつたのもみち哉
木戸參州の山家へまかりて
苔をうつ雨や太山のあきのこゑ
鹽川豐前守許にて秋の時雨を
染わたせまたむら山の初しくれ
おなし心を
そめやらて松風になる時雨かな
秋の發句の中に
蘆のはゝみつしほしらぬ紅葉かな
松の葉や秋のちしほの遠ひかた

鹿の音をきかすは山やうす紅葉
千しほをもまたし夕日のうす紅葉
千しほとや露は染けんうす紅葉
色みえは心やちしほ秋のあめ
露やしるいつれ昨日のうすもみち
山姫のおもはぬ枝からうすもみち
色こきはしくれのおもふ片枝哉
心とや木々は紅葉の霜の松
筑紫のはかたにて秋の末つかた
秋更ぬ松の葉かたの興つかせ
染川のわたりにて
染川はしくれし山の雫かな
専順法眼の坊にて暮秋のこゝろを
露にきえ木葉にちりて秋もなし
長尾左衞門尉のもとへはしめてまかり侍し時九月
盡
秋をせけ花はおいせぬ菊の水
十月一日の會に
神無月けふや八雲の初しくれ
羇中にて時雨を
をくりきてとふ宿すくる時雨かな

　おなし心を
鳥の音も雲にしくるゝ太山哉
月やしる有明の夜のゆふしくれ
　おもふ事侍しころおなし心を
世にふるもさらにしくれのやとり哉
　題しらす
そめ／＼てちるも時雨の木葉かな
　落葉を
夜の雨を木の葉にはるゝあした哉
雨とのみ散しもしるき朽葉哉
花をさへ忘れぬ風の木葉かな
色こきはあらしに近き落は哉
吹たひの風の色わくおち葉哉
　冬の發句の中に
木枯の庭はもみちの千種かな
こからしに木の秋たつもみちかな
風にふくや下葉の松のかせ
　しら川の關にて
木枯におもふ宮この青葉かな
　藤澤の道場にて冬の菊を
白菊や秋をとをくの雪のえた
　題しらす
清水すみ冬草あをき岩ね哉
　伊丹兵庫助許にて氷を
夕月よ宿りし水かあさこほり
　おなし心を
川音はあらしに殘るこほりかな
氷より引まゆならし瀧のいと
　朝倉彈正左衛門尉舘にて
雨寒し雲のいつくかみねの雪
　冬の發句の中に
紅葉せぬ心やゆきをまつの色
空にちれ霰につほむゆきの花
降はまたうす雪ふかし月の庭
詠つゝことしも雪のこすゑ哉
　あつまに侍し比ふしの雪を見侍りて
しら雪にそめ色の山かふしの嶺
　泉みの堺にて千句侍しに雪を
雪の松ひとり浪こす鹽干かな
　おなしこゝろを
雪にかせ嶺のあらしの宿のまつ
　武田光[illegible]亭の千句に夕雪

鳥の音もきかぬを雪の夕かな
　烏羽にて人のこひ侍しに雪を
しら鳥のとは山しるし雪のまつ
　奈良の京近き所よりとてある人のこひ侍し發句に
　同心を
しら菅をぬふや三笠のみねの雪
　冬の發句の中に
雪はれて川音さむき山路かな
世を知やつもれはおつる木々の雪
　松梅院にて早梅を
こぬ春にたちえは見えよ宿の梅
　おなし心を
咲てまて春やいそかむ梅の花
　冬の半よりむめの花あまねく咲侍し年
さくらにや春をはまたん梅のはな
　大内京兆の亭にてとしの暮に
ひとゝせを見るは氷のかゝみかな
　北野の會所にて歳暮の心を
たちかへり春秋もおし年のくれ
　おなし心を
年くるゝほとも一日のゆふへ哉

〔右老葉以内閣記錄課本校合〕

續群書類從卷第四百八十五

連歌部十五

萱草

戀の連歌第五

あらむかきりはおもひやまめや
あめつちを人の戀路のはしめにて
なみたの床そうくはかりなる
あま小舟はつかに見しを戀そめて
秋はなにゝもぬるゝころもて
夕くれをわか物おもふはしめにて
つらねし袖の香こそ忘ね
こゝろしむ道行ふりの面影に
しらす心やかわりゆくらむ
草木たに見しにもあらぬ物おもひ
おもひなつけそ夕くれの空
戀しさもたかなすとそわかこゝろ
さきの世よりもなとかすてさる
めにも見ぬちきりにかゝる戀はうし
たのみかたしやつらき後の世
生あふ時たに人はつれなきに
さためぬ夢の世をはちきらし
うき中や又生れてもうとからむ
戀そむる身の行末のいかならん
うき人つまにこゝろくたくな
誰にかふるきあとをとはまし
まよひきやけふるもかゝる戀の道
きのふのなみた又けふのくれ
つれなきはおもひにきえぬ命にて

名の立ほとのおもひとそなる
さらはそのふしとも見えよ戀の山
おもふこゝろはいかゝおよはむ
戀はたゝふしよりうへのけふりにて
しのはしいまはきえぬまをとへ
山よりも戀そあさまの夕けふり
さてもこの身よなにとかくさん
天地もしるはかりなる物おもひ
とはすとよしやうらめしき中
たれゆへに物おもふ身と成ぬらん
とはぬにうきをなにとこたへん
木玉さへやとるはかりの戀の山
こはきうつろふ色そ物うき
玉川をなみたくたくる袖に見て
名のたつはかりあふ事はなし
我袖に吉野の瀧のをともれて
あふ瀬あるそときゝならひつゝ
うらやむもはかなの中やあまの川
いのちをさへにうらみてそまつ
來ぬ人やさためなき世を忘るらむ
こゝろひとつはやすくもそある
戀たにもしなれすはなをいかゝせん
つれなやいのちきえはてねたゝ
後の世になりてあはすはいかゝせむ
强面てこそつゐに過ぬれ
戀しぬとよそにはしらんあともうし
すつる身にゆかりのあるをうらみにて
けふりも見ゆな戀しなんあと
うつせみの世に物なおもひそ
との葉にかゝるはかりをいのちにて
かりのこの世に物なおもひそ
あさき江をうき水鳥の音に鳴て
戀しきとそいやまさりなる
みるめなみみち來るしほをたもとにて
しのふかひなく身や過なまし
あはて名のたゝぬはかりはいかゝせん
なみたも露も人おもふほと
しのはしよさりとていつかとはれまし
まつにうらみのかすやそふらん
暮とにきのふをしのふ物おもひ
かくうらみてもまちはよはらす
さきの世を誰にて人はうかるらむ

はかなきちきり前の世をしれ
人にいつつらさを見えてうかるらん
あはむといか丶身をもおしまし
ありはてぬ玉のをはかりなくさめよ
我こ丶ろ人のうきをや忘るらむ
しらす來て歸るもいもゐ日もつらし
あはぬもふかきちきりとそなる
いたつらに歸る夜にしも名は立て
うたかふこ丶ろあるはうらめし
我ならてか丶る雨夜にいか丶せん
こ丶ろそらなるすゑをしらはや
ある人はとの葉をさへいひけちて
きくはかりにておもひこそやれ
おくふかくきぬうちそよく眞木のとに
さすかに人は見えんともせす
いひよれはこたふるこゑをたのむ夜に
こゑはなやかに日くらしそなく
まつ里をいかにといそく人もかな
いつのひとひかやすく過ぬる
夕暮はとひもとはすもたゝわひて
いかなる風のまたしくるらん

さためなき人を忘れてまつ暮に
かきりをいそく世のほとそうき
月をくもれとしのひゆくみち
あひ見るとやいなつまのかけ
しのふ身は神なる夜半もたよりにて
のちとたのまんとの葉もなし
一たひの玉章にたに名の立て
戀しきそてよ露もしくるな
身にそしむ風やおもひをもらすらむ
露ときゆとも人にしらせし
かすならぬ我ゆへ君かなやたゝん
よもつきせしな人のとの葉
なき名をや又もたゝましいか丶せん
たつねもゆかし我名もらさし
いさや川いさといひてもあはさらん
こ丶ろを見てやいと丶つれなき
あはすとておもひはやまし夜半の空
あられみたる丶道のさ丶はら
尋ぬれとあはてこし夜のあり明に
おもへは神そ人をなやます
まつ暮にひかりの陰もわすられて

人のこゝろにかきりやはある
わすれすはこよひならてもとはゝとへ
　うらみてまつとつけもやらはや
とはゝとへ命はあすの暮もなし
　こゑよわりゆくむしのあわれさ
ひとりぬる霜夜の空に秋ふけて
　心をすます夜半をとへかし
つゐの身の夢をもおもふひとりねに
　ふりはへて來ぬ人はうらめし
いつかたのたよりに我をとひつらん
　人のとかをしなともとむらん
いつはりにならへはねぬる夜半に來て
　かよふそつらき忍夜のみち
玉さかの契とかむなとのひ人
　いつあらはれてちきりむすはん
關守のゆるさぬ中はあふもうし
　あふとする間にあけはつる空
稀にとふ夜半に岩戸の闇もかな
　はかなやこゝろ末なたのみそ
一夜こそうき身にあまるちきりなれ
　たゝ一こゑにことたりぬへし

さのみなとわかれを鳥のさそふらむ
　はては何その中のかたらひ
あふ夜しもはねをならふる鳥鳴て
　我のみ物をおもふはかなさ
あふ夜半に人はかこたぬ鳥鳴て
　とわりしるになにうらむらん
したふまの鳥は八こゑにはや成て
　なみたを見てもさらにとまらす
まてしはしさらは何ゆへとひつらん
　いかにともいはれぬほとの中なれや
ゆめやさむるとおもふわかれち
　行かたしらすわかるゝはうし
ひかふるとおもへは夢の夜半のそて
　あふをかきりのなみたほさはや
夢になせとはかりつらきわかれちに
　水のひゝきもつらきあかつき
千鳥なくさ夜のわかれち月さえて
　ゆくすゑしらぬとそあたなる
とゝむるやつゐのわかれを忘るらん
　一かたならぬなみたおちけり
けさのみかつゐのわかれをいかゝせん

わかれていなはかたもおほえす
さらはそのあふ夜の夢となりもせて
むかふときにはとのはもなし
歸るさのあとにうらみの又ありて
ゆふへはいとゝうかふおも影
わかれつる鐘をおもへはけふもうし
こゝろひとつは春そかなしき
かすめとてそなたにいそく暮もかな
とはれんまての身をはたのみそ
いまこんと世のなさけにやいひつらん
つゐにあふせは御祓をそする
たのめをくほとはちのはの露の世に
戀わふるをはほのかにもしれ
見し人は雲ゐの月をなこりにて
うき身一そたのむかけなき
わするへきなみたの月になを落て
あふとは今をかきりといひ置て
なをこひしくは身をいかゝせむ
我より後はたれをかこたん
ひとりしも人はそのまゝよもはてて
さりともの人もうらめし世もつらし
おもひよたえぬ身をいかにせむ
なにゝちきりの末をさためん
たのむへき命もしらす人もうし
いつまてとてか身をはなけかむ
けふも夢うときもかりの世の中に
中〳〵に立名もいまはいとはめや
いくほとありてころもうからん
いのちつれなく見えんさへうし
あとたえて戀路にいらむ山もかな
ふかき戀路も人そわするゝ
きのふけふ見そむるかたにうつろいて
いくほとならぬ身をそわひぬる
きのふけふかへるちきりのはやたえて
後の世かけてちきりをく中
程もへすなと日のまへにかはるらん
過にしかたのまとをそしる
あた人と聞つゝたのむ末たえて
たのめしすゑやたえ〳〵の雲
契うき人ゆへ雲もかこたれて
あさからすとてそひはてんかは
うかれたゝそれも形見と成やせん

わすれ[illegible]た[illegible]山[illegible]身にしむ
夕のみとはれし秋のそらにゝて
　月も身にしむ戀しさとしれ
形見とも人はおもはし秋のそら
　うきおもひをも月やのこさん
なかめしようらみに歸る秋の空
　いつあひ見てか袖をほさまし
うき中はさらになき世のわかれにて
　いつを[illegible]に人をおもはん
契はやわれにはてたる身をしらて
　おほつかなしやとをきおもかけ
里はあれてとはれし暮もしらぬ世に
　こゝろとお[illegible]ひ忍はてめや
我うらみいはすはなきに成つへし
　いひあわせても世は定めなし
あた人と中にちさへやうらむらん
　やはらくるこそこゝろ成けれ
我にうき人とてなとかうらむらん
　たか身のうへもたゝ夢のうち
露の世にうらみをいかてむすふらん
　おもひすてぬそ戀はかなしき

つくさはや世々のうらみと成やせん
　うらみをなかく誰かのこさん
我かおもひこん世にせめてつくさはや
　おもひつゝけてねをのみそなく
あちきなや世々にしつまん戀の道
　人のこゝろのかはる世の中
はかなしやはねをならへし鳥邊山

雜連歌第六
　伊勢殿會のほとりにて侍會內
たゝ夢の身の春のひとゝき
世の中にふれは年さり年こえて
　雪ちりまよひ春さむきそら
山はまた去年の嵐に月すみて
　まつ人よりも身そ恨なる
我か庵にさかすは花やとはれまし
　時をうるにもあやうきをしれ
世こそたゝかせまつ花の一さかり
　いつくかつゐにこゝろとめまし
おもひ入山も花ちり鳥なきて
　もみちもきくの舞人のそて

ちれは又色なる花をおりかへて
山ほとゝきすなかはなけかし
月のこりさくらちる夜の有明に
けふの日までもおしまれそする
たかの山のこるやよひの花ときて
のきはのはやし道そ木たかき
花ちりし野寺をとへは春暮て
かゝるたよりもたひにこそあれ
ほとゝきす山こえ來すはよもきかし
とめなは袖のうつり香もあれ
のる駒も水かふ澤のあやめ草
露はたもとに五月雨のころ
まこもかるよとのゝかへさ日は暮て
見せはやかゝる山の下ふし
いるやをもしらぬかのこのあはれにて
すゝしき風のすゑのさひしさ
夏の日の夕山からすみね越て
雲かゝる嶺とおもへは風ふきて
月をわけゆく夕たちの空
ふくかせふかき松陰のもと
あつさ弓いそへのし水てにくみて

のりのまなひそふかき道なる
水に浮一葉を舟のはしめにて
枕かる野のむらの明ほの
こゑとをきゆふつけ鳥に月落て
ちはやふる神を衣にやとし來て
そてさへ秋の月よみのかけ
こゝろものへぬ秋の夜の床
なくさめよ月こそしらめわかむかし
ほのめく月にわたる鹿の音
行て見んまくらしほるなはなすゝき
みたるゝ露に月そかくるゝ
すゝきちるすゑ野の山に雲引て
うへなる山に月かゝる見ゆ
小萩ちる野へのさをしかけさ鳴て
うくつらきかりねの秋をいかゝせん
鹿なくやまのあかつきのあめ
武士のあらきは情すくなくて
八十字治川のすゑの秋かせ
月そはかなく野にはやとれる
露よるや身をある物とおもふらん
世々のすゑには

身を秋のおち葉[illegible]おひのはまし
　まくらの露やまたしくるらむ
あかつきの木葉[illegible]行柴の庵
　ゆふ川の月はふたつの影ありて
ゆく水さむく日のゝこるやま
　草木を見るも心こそあれ
ふかき野やかりはの鳥をかへすらむ（く兼）
　千鳥鳴たつ雪のくれかた
野をせはみみかりの人のさはく日に
　文のたよりにいつわりそある
ともし火にたのむはかりの窓の雪
　いかにして都をおもひはなれまし
春をくらせはまたあきの月
　すゝむるさけに夜半そ深行
あかなくに月はかくれて山もらし
　打かすむ雲のみはしまゝのほり
ゆみはり月にむかふやまのは
　およひなき歌に心をなをかけて
月にあはれむあかつきのくも
　春と秋とそうつろひにける
ほしまつる夜半にともし火影そへて
　なみたに見れは大空もらし
我年のほしまつまてはめくるらん

旅の連歌

なけかすは旅のつらさやなからまし
　とをきかとて〔ト本〕のなみたおとすな
世をあはれをもおもふあかつき
　しらすこのわかれやかきり旅の空
関のひかしの山そはるけき
　あふさかやこえていつみんふしのたけ
なみたも雲もたえ〳〵にして
　なくさめと都の山や見えぬらん
のちのあしたそいとゝかなしき
　昨日まて古郷見えし山こえて
わかれのあとの月そかたふく
　かりねせしたかねをけさは雲に見て
こゝろほそさのまさる夕暮
　雲とりをしる人にする山こえて
身のゆくすゑを思ふあわれさ
　草木たにしるは稀なる山こえて
たましひさへに身にそはぬころ

雲くらき夜るの山路に神なりて
情ある人をおやとやたのまゝし
暮て宿とふかたをかのさと
心さひしくとまる山みち
すまはやな旅に我とふ柴の庵
旅のかとてといそくころ〳〵
夜半の宿にはとり鳴は犬ほえて
いつみとかやもちかき難波津
かねはたか旅ねの夢にかよふらん
かすめる里の人のよそほひ
旅枕かれいくいそく火は見えて
まなへる道に人いそけかし
関の戸や鳥の空ねに明ぬらん
夜ふかき山におもふいにしへ
いたらんにしの國ねかふなり
おひかせをもろこし舟にまつらかた
いてやすらひしたひのあわれさ
なみたさへもろこし舟のわかれ路に
夜ふかき道に舟よはふなり
うきたひを誰しらぬひのつくしかた
あふさかちかき三井の古寺
誰にそのおしへをまたん旅の道
山かせさむし霜やをくらん
ふるさとは草木もいかにたひの暮
もしやと送るふみの一筆
古里のともをはかなく聞なして
こゝろほそくもこゆる山道
のちの世もかくやと獨旅立て
たひは身をしるかきり成けり
いかにせん都をいつる老の末
いのちあらはとかきりてそなく
おもひやれよはひの末の旅の空
かすみの庭のくれのさひしさ
雨はれて遠山のこるまとのまへ
こゝろほそきはきぬ〳〵の空
しのゝめの山のはうすく雲引て
つり〳〵とおくりこそゆけ
ほともなく入相のかねに夜の明て
うき身の行衛いかゝ定めん
ありはてん古郷にたに住わひて
くち木の中にすめる山かけ

水あさきふる江のいけたこけむして
　眞砂をうかつ夕なみのあと
生あふるいうまのにくさ村〳〵に
　柴とりかへる人もこそあれ
のこる日にしほくむ浦の遠ひかた
　ほたるのかけそともし火となる
あしはらに海士のつりせし舟捨て
　すみぬるさまもかはる家〳〵
庭にせく水のなかれを田に懸て
　きのふにかはる世の中のさま
人もねぬ市のかりやに夜の明て
　いつくへゆけはほたるとふらん
野にむすふ道芝くちて人もなし
　ならの葉すゝし露こほるらん
行人のおほちの卯木陰ふかみ
　たつぬれは又道まよふなり
はゝ木々の遠きよそめはさたかにて
　きみかくるまの跡のこれなを
わけ出る道に小松のかたよりて
　ふねさしいたす春の水うみ
しつかなる時代をさるゝ心にて
　さてもにぬ心と葉のおほつかな
かしこき人はそふもはつかし
　こゝろにこめておほきいつわり
おそろしやゑみのうちなるとの刀
　あたの名のみに身をやなかさん
かなしきはつみをたゝさぬ時代にて
　いはゝやつらむとの葉そうき
すくならぬ道にもさすかしたかひて
　神と人ともたゝこゝろから
にこる世も民は中〳〵すくなれや
　なみよりかよふそてのした風
ひく人やからことの名をのこすらん
　よへともふねはこたへさりけり
引ひすむせふなみたにこゑ絶て
　一しきり竹ふきしほる風あらみ
梅さくかけはふゑのねもらし
　こゑのにほひをふくむうくひす
笛竹の鳥のまひ人打むれて
　あそふやいとのみたれたる色
ともし火に夜半の笛竹聲ふけて
　さえわたる夜そはしに霜ふる

かさゝきの嵐にまよふこゑわひて
秋さわかしく時雨ふる空
からすなく太山の雲に日は暮て
ふりわけかみのあたのかたらひ
あけまきのさそふ牛の子かへる野に
いまはの時そつみをおそるゝ
いかり猪も矢によはれるいのちにて
たひ人さそな雪のあかつき
里遠く犬ほゆる夜の月さえて
物かなしかるやとのあきかせ
螢なくよもきふに月さえて
わかれし人そ見るはかりなる
あさちふやふるき都のもと――
いつくにすむも身はうかりけり
都にやかすならすとも迯まし
身をかくすへき木の本もかな
都にもなからへんとはおもはぬに
こゝろにさひし山のまつ風
やとからに都もみねのいほりにて
庭あさくなる冬の木の本
軒ちかき山に柴かる人見えて
おくまて山をもしやとひこん
古里の松かせおもふ柴のいほ
なれてもさひし山の松かせ
誰來てか心とゝめんしはのいほ
松ふく風のすみわたるこゑ
庵むすふ太山のこけに水おちて
やとりやとらんさくらかり人
すむ月を太山のいほのあるしにて
雨ふりすさむ〔を脱歟〕くれのさひしさ
山里は雲の歸る軒に見て
いそくは人のまたや來さらん
山里に心とむへきゆへもかな
とはをも〔に脱歟〕かわすはかりにむつましく
はやしの鳥なるゝやまさと
我山里をあらすまつかせ
契ても情のなくはいかゝせん
まとうつ雨も老のなみたか
山里に身をうき雲のきえわひて
まと〔た歟〕いかならん人のゆく末
老ぬれは今はとおもふ山里に
かくれかとてもすみはさためし

しつかにとおもへはさひし山の奥
　物おもはてもすまし世の中
うき事はありとも山のおくなれや
　むかしおもへはなみたこそあれ
しらさりきみやこにかゝる山の奥
　水のみちかき山もとのさと
大原やのほるをひえの嶺たかみ
　おもふと立居に付て見えやせん
大はら山のくものしたいほ
　山路は水をゆく／＼そ見る
明ぬるか上に鐘なる志賀の海
　佛ともなるてふとのあるなるに
あはれくち木をみほのそま山
　入月に誰か心をつくしかた
木の間あけゆくはこさきの松
　遠き道こそ物かたりなれ
又いつかあこやのまつをみやこ人
　ありしむかしそ見る計なる
大よとの松ものこらぬうらさひて
　やわらくる哥のとはもある物を
たまのゆかとふまつ山のかけ
　なみたにわくる宮城野のはら
松山をわか年なみのするにみて
　けふりをたにもたゝすかなしさ
しほかまや名ある跡そとあまもしれ
　遠山もとそかねにしらるゝ
難波かたきのうみ懸て明わたり
　あす川舟そきしのうへなる
渡邉や大江のにしの夕日かけ
　人はむかしのことの葉もうし
水ならてこゑはなからのはし／＼ら
　むかしをのこすさかのふる道
つくれなをなからのはしの跡もおし
　かゝるうき身はいふかたそなき
はし柱くつるもあるになからへて
　のちにそのりの心をはえし
うらみつるおはすて山の月晴て
　雲ものこらぬ夕立のあと
影高きあまのかく山月すみて
　戀るみやこにうかふうみやま
ふしの雪あかしの月もいつか見ん
　いやしきも大君の代を始にて

まなへあさかのやまとヿのは
　久かたの天地にしも生來て
おもはさらめやヿの葉のみち
　しらぬ汀をたとりこそゆけ
わかのうらあまに〔は脫歟〕とはん道ならて
　命あらはいかなる名をか殘さまし
またとしなみのわかのうら人
　てにふれて返す文もなつかし
なきおやのいさめし道をまなふみに
　ほたるの影のとをきわかれち
たらちねのをしへをうけし窓ふりて
　住人は我をとなりのかひあらし
おろかなる身はたれをしへん
　道あらはれて雪はきえけり
はかなきは今はの老のまなひにて
　いつまてうき身くたしはつへき
老てたにせめて名をえん道もかな
　たかあとゝしも見えぬ古里
人はたゝ名をしらるとも有世にて
　うる事なにそかりの世の中
とゝめてもなからんのちの名はつらし

　かりなる身とは露や成らん
生れ來しあまのみほこの末の代に
　はかなきつゆはあともとゝめす
物ヿに人とおなしくあらはれて
　しのはし宿やゆめの中道
かゝる身をいつくより來てうけぬらん
　世をいとふ身のこゝろとはゝや
うきヿのはしめとなにか成ぬらん
　そなたはさてもなにをうらみそ
くらふれはいにしへはうき事もなし
　秋もおもひのかすとこそなれ
うき時やゆかぬとしさへ積らん
　すまれぬ物と世をなうらみそ
うきヿのなくはあはれやしらさらん
　きえもはてぬはいのち成けり
いく千たひ身はうきヿに相ぬらん
　かしこさやたみの上をも祈らん
ひとりやすゑと身をなおもひそ
　ゆくすゑおもふ子をそいさむる
おろかなるわかこゝろより身を知て
　あるもかひなしおもひきえはや

難面は人のためさへうき身にて
　いまのわかれをのちまてもとへ
又こすはけふを我身のなき日にて
　妻木をしつのうちわふる暮
いしの火のかけに此身をわするなよ
　こゝろをすみにいつかそめまし
てならひに身のうきふしをかきすさみ
　もしやこなたをうらみはつらん
人とにわか身のとかはわすられて
　くやしく過しなみたこそあれ
すてぬへき身をさりともに漂來て
　へたてはなをやおもひあるらん
見し人の時をうるにも身をはちて
　世にくらふれはうき事もなし
數ならぬ身をもうらやむ人有て
　うらみんほとにある世ともかな
數ならぬ身はとわりもうつもれて
　人におくるゝあらましそうき
かすならぬ身とこそならめおろかにて
　とわりしれはなみたおちけり
中〳〵に山かつならぬ身はつらし
　いはんとすれはなみたおちけり
よしやたゝ名さへなき身と誰もみよ
　そのとゝなくそてそしほるゝ
しらす身のかきりやちかく成ぬらん
　としもとかく暮しこそゆけ
わひぬれはいける計になくさみて
　あわれをかけぬ人はうらめし
わひぬれは世をたのむこそ習なれ
　うき身はたのむかけもさためす
世になひき人にしたかふ袖ぬれて
　はかなき夢のなをや見えまし
世の中はよしあしともにとゝまらて
　やそちときくもたゝ夢のかす
まよひゆくちまたのちりの世の中に
　かりのいほりのあるゝほとなさ
なからへん物とおもはぬ世の中に
　しつかにこもるいほりともしれ
人は身を世のさかへにやわするらん
　なとかこゝろのつみにひかるゝ
わたる世はしつからみ緒のあさましや
　人のわさこそみなあわれなれ

いくほとの身とてうき世をわたるらん
　わたる人なき雪のかけはし
執もたゝうき世の道にふりはてゝ
　よしやしはしはおもひなくさめ
身にかきるうき世なりともいかゝせん
　いにしへなれしともそ戀しき
うき世なとみちなき人はのこるらむ
　ゆくゑさためぬ身をいかゝせん
ほともなく一日のうちにかはる世に
　一日の夢の身をなたのみそ
世の中は昨日もむなし明日もなし
　おもふ友ある日こそおしけれ
あすはたかなからんともしらぬ世に
　いかゝはせまし身を秋のかせ
きえわひてうらやむ雲のあたし世に
　心ひとつになかくとし月
あらましや苦むす道に成ぬらん
　したひとめつるこゝろくやしさ
捨よとは人をもいはん世の中に
　つらさくらふる身ともなさはや
皆人のいとふはたくひある世にて

　をとにきく吉野の花をいつかみん
身はすてすともこゝろあれかし
　かたらふともはよしやおく山
すつる身は心ありても何かせん
　むかしかたりをいかゝつくさん
身をすてしゆへとは人のとふもうし
　なをうき事はおく山もなし
鳥の音も聞あへぬはかりかくす身に
　いかゝはすまん冬のおくやま
かくす身はしつかつま木のつてもなし
　秋は山にもすまれさりけり
松かせは世のうき計身にしみて
　すてはつる身を夢やとはまし
世の中をおもひかへすなこけ衣
　やつれぬる身のすかたはつかし
人になといのちなかくも見えぬらん
　我身かりやにあるもいつまて
命をやしはしかたちのやとすらん
　ゑにかくのみかもろこしの人
誰もたゝおもへは夢のかたちにて
　いつかたも旅の心やうかるらん

身はたのみなや此世後の世
しのふもくるしたえね玉の緒
後の世にならはむかしの人や見ん
とはん人なくなれるふる里
のちの世のことをたのまん友もかな
聞てもむかふ心ちこそすれ
見すもかな我のちの世のますかゝみ
おもふはかりはなにかあらまし
おくれしの後の世とてもしらぬ身に
玉くしけふたりの心ひとつにて
おやのそたてし身をあたにすな
のこるおしへもあれはこそあれ
かゝる身になを親なくはいかゝせん
むかふかゝみのつらき後の世
かたちさへおやには生れおとりきて
生れぬさきのふる里もかな
しらさりしおやのおやさへ戀しきに
おもひあわするなみたこそあれ
我なくはいかにといひし親もかな
わかれし後の戀しさそそふ
折〳〵におやしあらはと袖ぬれて

歸らぬとのつらきいにしへ
おやになとなをさりにては過つらむ
憑むかけなき身をいかにせむ
ひとりたに殘ると親をおもはゝや
おとろくときそ身のとかをしる
おやをさへ遠き別に忘れ來て
わひぬるそても身をはくたさし
たらちねやかゝる我をもいのるらん
あたに過ぬる身をなたのみそ
子やおやにいつもそふへくおもふらむ
ねぬほとは夜の枕もさたまらす
なけはこゝろをそふるみとり子
おとろく時そ身をなけきける
みとり子をさむきはたへに猶そへて
なにゝよるへきこゝろ成らん
みとりこの入なんみちはしらまほし
ゆくすゑしらぬとそはかなき
みとり子にとしをいそけは身のふりて
うき中にかたみのなくはいかゝせん
あはれさきたつあとのみとり子
とかわすほとたちならふ中

いとけなき子のおとゝいのかたらひて
　としへてや水の行末も替らん
瀧のよとみのしるきかみすち
　うきわかこゝろ誰にくらへん
白きかみさらにすくなる道なれや
　きえんのみこそ身はたのみなれ
さりとものゝそみもつきぬ我よはひ
　山に住身のいつを待らん
おさまれる世にありともの我よはひ
　此世すくるも夢の春秋
むまれしをいはふや老と成ぬらん
　いとゝあはれをそふる世の中
わひぬるをなけくか上に老の來て
　寢さめの後のかせそ身にしむ
うきとも老より先はおとろへて
　むかしかたりを孰かつくさん
しるとのあるさへ老のうらみにて
　まなひえぬこそ身にくやしけれ
のかるゝもある世に老の猶すみて
　へたつろやなかきうらみと成ぬ覽
とを山とりのおひのいにしゑ
　かろきいのちは待ほとそなき
老の身は風の上なるちりにゝて
　つれなの人やうすむ明ほの
老か身の昨日のかねにはてもなし
　心まとひの暮そかなしき
ともすれは明日ともおもふ老の末
　たゝかりの世はあるにまかせよ
强面もいくほとならん老のすゑ
　いかてなみたのかはらさるらむ
老はたゝ日とにあらぬ身と成て
　なにかこゝろをとむる世の中
うきとのなくてもすてん老か身に
　われひとりかはよしや世の中
ゆくを見るもかへらぬ
　いく度かこえぬる年のはつせやま
世をふる川や我か老のなみ
　心ほそさそさらにまきれぬ
ましわれる人にも老のなくさまて
　うらむるいのち露ときえはや
かきりたに老は心のまゝならて
　うら枯の草葉より身はよはりつゝ

老のかきりやつゆもおくれん
　すつるをせめて身にそまかせん
老ぬれはこゝろにかなふともなし
　すこきねさめのあかつきの鐘
行末の心ほそくも老はてて
　思ひのこさぬあかつきの雲
しるしらすいにしへ人をかそへ來て
　過しをしのふ心はかなさ
先立はうからぬ世にも生るらん
　うきをたよりと憑むおく山
取たひに薪つきなん日を待て
　生るゝ道を今つくさはや
立歸りまよふなつ井の夕けふり
　忍ふるとそせん方もなき
先立をかわりてとめん道もかな
　心もしらす松かせそふく
夕暮やこけのしたにもうかるらむ
　そはぬ世になと我はすむらん
一日たにあらしとおもふおやのあと
　わすれよとてそ遠さかりゆく
大かたの月日もかなし親の跡
　よそのわかれもうきはかわらし
よしやたゝなきをはなきに慰めて
　しのふこそなをふかき道なれ
なき人の跡にはうへしわすれ草
　むかしと成を猶かへさはや
とふあとに七日〳〵のうつり來て

　　宗砌〔き脱歟〕十三廻ニ追善連歌し侍しに
つらか上につらき世の中
わひぬれはとふらふあとにとたえて
　みしかき末をなけく玉の緒
我よりもあるへき人のあととひて
　くるやこすやを露もしらはや
なき人の秋の手向に袖ぬれて
　涙に似たる野へのゆふ露
秋風にきえにし人のあととひて
　涙の雨よゆく人もふれ
わたり川かへらぬ水〔[illegible]〕を聞もらし
　なみたの水のすみはいつはり
御祓にやわかれし袖をわするらん

誹諧體連歌ニ一句百句付侍しに

人のこゝろのかはる世の中
時過る身こそ六日のあやめくさ
またしとすれと秋のさひしさ
みねのいほしかのわたるも人にゝて
なすつみをくゆるもさす（か脱歟）むくゐにて
矢さきに來すはしかもあたらし
あしの夜さむに風おつるこゑ
すそたらぬ秋のさ衣みしかくて
しのふ戀路をやま（す脱歟）ふまはや
あふさかにやらぬ人目の關はうし
人のこゝろのかはる世の中
あふさかもはては（の脱歟）なこそ關路にて
君にまかするいのち成けり
世にしはしあれとおもはゝ忘るなよ
とはれぬまゝに袖そ露けき
君しこはしけくもおかし庭の草
あかさりし別の跡のあきの床
夜さむの枕おもかけもねよ
ひくこゝろこそおもふかたなれ
いはすともめくはせてたに憑まはや
おろかにまなふ道そはかなき
あしとをきこえゆく山にうらやみて
かけたちなれん住吉の松
村雨のかささすはかりふりいてゝ
かきりあれはや雲もきゆらむ
いたゝける我大空のはて（な脱歟）もうし
ころもはあるにまかせてそきん
折にふれかへぬる袖もわつらはし
たかねおろしはふきもよはらす
遠くなる人をもふしや送るらん
なかめにこゆるうつの山道
ふしをさへかくすは旅のなみたにて
いしの上にも時をこそふれ
人はなをいそくみた（れ脱歟）碁打かねて
あれたる里そ道あまたなる
となりよりかきのくつれをふみ分て
おもふそなたにいつかゆかまし
みとり子のあゆみもやらす親を見て
我につらきをしたふはかなさ
みとり子は後のおやをも又しらて
いつの間にとをくは人のかわるらん

子そつき〳〵に生れおとれる
なとゝふしものいはす成らん
みとり子は人のうきにもなく計
道かすかなるさかのふる寺
歸るなとうき世や人をおもふらん
おもひのかすはいはれさりけり
物うしや年をなとひそ老の友
えそやすからぬかゝる世の中
すてかたきいのちに松の葉を數寄て
およふへき山こそなけれ老の坂
おこなひ人のかくるおふみね
隱家もさすかけふをたてそやせん
なからんあとをたのむのりの師
人のこゝろのかはる世の中
うき身さへいまはの時やおしからん
見れはのかれぬあみのうろくつ
いるやをもねたる鳥にはこゝろせよ
むかふ日影もしらぬ山もと
夜る出てゆく〳〵ねふる馬のうへ
おそきまなひは人もおしへす
牛の子のおやのあゆむに行つれて

付様誹諧躰の連歌

人につくすはあたのこゝろか
おれは花あるしをさへやうらむらん
はるかにとふやいつみ成らむ
柚人のおのにくたくる木はちりて
今さらおもひよはるへしやは
里近く山のたきゝをもちわひて
歸らし色は〔た脫歟〕かわのころもて
住つきて今はたのむ山のおく
あし村〳〵の眞砂地のすゑ
あとさひしこゑみたれつる鞠の庭
いつかほとけを夢にたに見ん
夜る〳〵の鐘の御嶽はきく計
御祓や夏をたよりなるらん
生れつるけふのほとけの跡とめて
かひふく時のうつるほとなさ
たき物の袖のした風打かほり
あひ見んまてとおもひてそゆく
待人のおほつかなさに立いてゝ
いひちらしなはそれもはつかし

おちかみの白きに老の名をしりて
　はかせの道はいかゝたかはん
こゑをひく法のおこなひきかまほし
　あくれは雲やたちわかるらん
年をへし身をうら島か玉くしけ
　されとも夢はつれなからすよ
きけはそのよはひそ遠き天津人
　袖のせはきは玉もかくれす
から人の身を花やかにかさりきて
　おらぬこゝろそつるき成ける
武士は名をたひ〳〵にあらはして
　心やかへるわかかたのみち
ものゝふは文より弓をわさにして
　末に執法のはしめをしたふらん
あしよはくるまおくれてそゆく
　たゝにぬるをや風もいさむる
とのゐする時のかはれは鳥鳴て
　おやよりも子をはこくみそます
君やしる代をかさねてのつかへ人
　君をおもふに身をそわするゝ
つかふるを我しろかみにくちもせて

此世ならてもわすれやはせし
年たけて君かめくみをうくる身に
　いにしへよりのすみ吉のまつ
此君の代こそ長井のうらとをみ
　千たひおもふもおなしあらまし
君をおもふ此宮川のゆふはらへ

　神祇之連歌の内に
　月日やうけむ君かさの葉
雲きゆる天津神路の山はれて
　たちもはなれぬこの法の庭
かれし木もめくむ日吉の神心
　おもひはれるやすみよしの松
神かきに杉の木高き八幡山
　さの葉は我身はなれぬ契にて
たのむ心にすみよしの神
　けにあたなりや今はたのまし
後の世をいのれと神や思ふらん

　釋教之連歌の内に
つもれるつみをなにかけたまし

かひかれもきかぬすみかに明暮て
　ふねよるみきわ人かへるなり
川めくる山さしおほふ寺ふりて
　うらやむ人の身をもあわれめ
住わふるいほりの上のみねの寺
　おろかにきけは法そかひなき
我庵もおなし野寺の松の風
　夕さひしき露のふる道
人歸るあとに野寺の松をみて
　草木をさらにほとけとそ見る
古寺は露のみ玉のかきりにて
　なからの山のうちかすむ比
たれかその心の月を三井の水
　世をいとふ人のやとりか谷の奥
橋なかるゝやまの井のすゑ

のこす御法のすゑの世の中
かくれても佛や人をすくふらん
　まとの色はおもふにそある
繪にうつすすかたはかりの佛にて
　すむかくれ家にいそく彼園
一こゑを鳥もすゝめよ山のおく
　いかてかふかきつみをけたまし
身をつくし心をくたく法の道
　ほると見えてそ土はうきたる
法の水ちかつく袖のうるほひて
　こゝろは空にうかれてそゆく
わしの山御法の庭もうつろひて〔しみ歟〕
　いつくみしこそ四方にみちぬれ
法の花はしめは遠くひらけ來て

續群書類從卷第四百八十六

連歌部十六

下草第一 春連歌

世をのとかにと年やこゆらん
霞よりあまつ春風けさふきて
ゆかは花いつれとからんをそからむ
春の月日のたちそむるそら
山はみとりの春ふかきいろ
かすみこくあまのつり舟遠江に
磯つたひ我をものせよ海士小舟
かすむ江しまは行てみまほし
山里のかすむ墻ほに春たちて
こゝろをけたぬ雪のつれなさ
かへりもやらす鳥のなくこゑ
山はなを雪さむけにてかすむ野に
春はこゝろそいろ〳〵になる
雪とをしきえすは山やかすむらん
ちる花のとかをは風になしはてゝ
木つたひすてすうくひすそなく
あはれにかすむ谷のむもれ木
人しれぬ世をうくひすの聲おいて
花はたゝかけもうこかす咲そひて
梅か香ちかきともし火のもと
草のいほりの花のはかなさ
春ことにえたおる梅のなをさきて
ふりはつるかきほの花のうちかほり
かたえつたはふ山さとのむめ
かたはらさひし柴の戸のはる

水さむき谷のふる道梅さきて
　雨しふらすはたちもとまらし
かれし野の春の草やく夕けふり
　手おるさくらのかけのやすらひ
道のへのつゆの春草花さきて
　池の水さひとむめもこそちれ
青柳の露のうき草たゝよひて
　ふるきみやこのはるのあけほの
久かたの月のいく世かかすむらむ
　春とてもかすみははてし嵐やま
おほろ月夜にふくる川をと
　ほの〳〵かすむあけかたのそら
さえし夜の月にはるかせ又吹て
　いりぬる海にたかき山のは
あさほらけかすみの月に鴈なきて
　くるほともなく春そわかるゝ
天津鴈いつかのとけきたひならん
　いつのしほりのみちのこるらん
まよふやとみれはかすみにかへる鴈
　かそふれはなかはも過る年なれや
またれてはるをはなゝをくりそ

いつくかは都にまさる春の花
遠山さくらなをたつねみん
　むさしのゝ末に雲引山みえて
かすみのせきを花にこえはや
　けふをはしめの春風そふく
うつろはんゆくゑもしるく花開て
　さく花にさかしき山の峯こえて
おらはやさくら瀧なくもかな
　むかしにはかへるためしのなき物を
老木をかくす花のあはれさ
　おもふへきこそやまの奥なれ
我いほの花によしのをわするなよ
　玉をみかけるいにしへのみや
吉野なる瀧津川つら花さきて
　こゝろふかきもあさくこそなれ
奥山にいれは花さき人すみて
　いまこんとてそみやこいてぬる
かへらすは山はさくらとおもひやれ
　なさけにをくるむめの一えた
山ふかみみるをや花にいとふらん
　花をあるしに人のゆくやま

柴の戸もさくら一木は植まほし
　わひてのうへも都なりけり
人なみに花うへをける草のいほ
　雪とのみふるのゝ櫻ふくかせに
はかなかれとや花はうへけん
　いかにせむしゐてとひくる柴の庵
花に門さすゆふくれの山
　芳野川よしやつらくはたえねたゝ
花のなたてのみねのしら雲
　うつろはんとはかねてしらすや
をきわふる露こそ花にあはれなれ
　人の身やむまるゝたひにうからまし
花にてしりぬ世々の春かせ
　おもひやたえんうらみもやせん
花さけはふかぬ春なき山おろし
　かへさの袖は手にもたまらす
爪木おる山ちを花にわすれ來て
　ちるにすきさくにやすらふ花の春
鳥やさくらに身をまかすらん
　かへらは花にあらしもそふく
ちらせたゝさくらにつらき鳥もなし

　あそふとて遠き野へにもゆきやせん
花にうかるゝてふのはかなさ
　うつろひてはたのむへきかは
ちらぬまと風にや花をたつぬらん
　こゝろふかくも身をかくすやま
花みれはうき世の人になりはてゝ
　なをすてかたき世とやならまし
ちらぬまにいらはや花のよしの山
　かたのゝさくらいつかわすれん
かすみつゝ花は雪ちるあけほのに
　まれにとひきてわかれいそくな
山さくらをちかた人はいつかみん
　たれもちり行花の夕くれ
山さくらさそへかせとやのこるらん
　なみたなそへそよはひもそうき
花もたゝ身をうらむやとうつろひて
　おもはぬを思ふに我身つかれきて
いるやまことの花のはるかせ
　いかなるゆめのしはしとふらん
やとゝせは花よとするにやすらはて
あやにくに待しうらみのかひもなし

たま／＼さけは花にやまかせ
　こゝろもなしや世にすめる人
花もたゝみえしうきめとちる物を
　なけきしゆめの跡のはかなさ
花に人風も吹あへす散はてゝ
　おしめはゝやく月の入やま
松かせはうらむる花になをふきて
　こゝろとまらぬかりふしの床
山かせに花は旅たつかけにきて
　日をもをくらていかゝうらみん
をそくきてみれはうちちる花のかけ
　雨過てこけはいろそふ木の本に
ふるきみきりの花おつるくれ
　ひとりかすみをたのむ山かけ
しられしの花のこゝろをかせもみよ
　きけはふけゆく松かせのをと
苔むしろ露ひやゝかに花おちて
　うちむかふにも風そはけしき
ほとなさを花はうれへの色に出て
　惜にやくはゝる春もなかるらん
さくらの山のはなのゆふかせ

　とりあへぬまてみしか夜の空
雲風の山は花おち月いりて
　たひなるわれを思しるくれ
袖にかれ宿なき花やまよふらん
　かこつにも命はきえぬ物なれや
おしまてをみん花やつれなき
　あはれ世はあさはかなるやまさるらん
おもへは花はかせにちるころ
　嵐にむかふ駒のあしなみ
さくらかりちる花ことにあくかれて
　さかりはいまよ雨かせのはな
いつをみんたゝちりまよへ山さくら
　ちれとこと葉の花そのこれる
山さくらおしむをけふのかたみにて
　あまりさひしき松風のくれ
ふる里よちるはうくとも花もかな
　世の中はゆくもとまるも哀にて
ちりのこる花になを松の風
　春よりはるそうつろひてゆく
ならふやと一木つれなき花もかな
　くるゝはやしのおくそさひしき

春したふ花の一もとちりやらて
　ことしもすゑにうつるまそなき
木々はみなたゝはつ花に散はてゝ
　いまよりはおもひのこさし我うらみ
はなのあとをも風のみそとふ
　みそめしよりの在明の月
春をみな都や花にをくるらん
　人はこゝろとまよふなりけり
いつのこる花とて春をうらむらん
　うときはさらにもろこしの人
みよしのゝ花のふる里とひ捨て
　野をとをみわけまよひぬる春の雲
おつるやいつくひはりなくなり
　花のあるしのたれをまつらん
こえくれはなを山ふかくよふことり
　我またてうつりなはてそ山さくら
すみれつむまの道のやすらひ
　とはゝや花の後にさくはな
欵冬をしるへにかへる春はうし
　一夜はあけぬ花もわするな
立かへり田子の藤なみいつかみん
　なかき日とても身には憑ます
ありなしにかけろふもゆる春の空
　おもかけをわすれぬ花の山颪
春をあらすな志賀のふるさと
　天津鴈夜はの別の聲聞て
春よこゝろと夢なさましそ
　ちりにし後の花のふるさと
春過ぬいてし吉野の奥もうし
　さくをみて散をとはすは花もなし
あはれをいはゝなを春のくれ
　あたらさくらそ一かたにちる
今日のみとおもはて夏を花もまて

下草第二　夏連歌

　はなはあを葉になをのこるころ
時鳥はるをいつくにかへすらん
　あることのめつらしきこそあはれなれ
夏ふかき山に花の一もと
　おくはいく重の卯花のかけ
杜若たかすむあとをかこふらん
　つれなきになを松かせは聞もうし

山ほとゝきすみねこえてなけ
過にしかたのおもひもそそふ
ふけぬまのはつ音やいつら郭公
なをはれかたきなか雨のそら
ほとゝきす我うたかひに聞わひて
ゆふへのなみのあらいそのこゑ
ほとゝきすなのりそれとも誰わかん
わすれすよ道行ふりの一こと葉
ほとゝきすとていつちすくらん
うくひすは飛かへりつゝなく物を
かたとをりすなゆく郭公
おほつかなしや行末のみち
かへるにはしかしと鳥もなく山に
ふるき軒はのさみたれの比
時鳥わすれは草の名もつらし
雲ははれても身こそうきたれ
ほとゝきす月さし出て過夜に
けしきはかりの夕たちの雲
夏山の月しろうすきよひのまに
いつかほたるの袖にいりけん
かりねしてかたしく草のみしか夜に

うへてくやしき軒の下荻
山かけやさらても茂る草の戸に
ましわりもなかりし軒はつらからて
こゝろのあさのすゑのよもきふ
わかきになとかをくれはつらん
ことし生とみれは千ひろのそのゝ竹
御階のもとにとしをふるみち
たち花にかわらぬかけをふみなれて
ゆふ露すゝし道のへのさと
あふちさく外面のは山蟬なきて
雲もうこかぬさみたれのころ
樗さくはやしつゝきに山みえて
わたるそとをき志賀のうらふね
野をかけて水の海なる五月雨に
むすはぬ水はにこりこそゆけ
庵りもる程もあらしとうふる田に
澤水のなかるゝ土にうつもれて
ふか田をうふるしつかあはれさ
ひかりもかけもけにそはかなき
ともしするかた山川の鵜かひ舟
命にはなにをかたのむかけならん

おもひによるのむしのかなしさ
にしに□(なか)るゝ星のかす〳〵
影うすき河邊の螢あけそめて
いまやきえんとあをきともし火
遠野の風にふかれてゆくほたる
ほしきよき夜にのこるむら雲
めくる日は夕たちのまに影おちて
雲かせはさはくをおのかならひにて
月ないそきそゆふたちのあと
あへは又心ならひのなをそひて
山路やすらふゆふたちの雲
みゝなれぬるもつらき松風
たちすゝむ日をくるしけに蟬なきて
やまちをともに忘てそゆく
夕すゝみあらしも水もことかたれ
日かけもゝらぬゆふたちの雲
涼しさを月まちいてんしるへにて
袖のかりやはあとものこらす
大井川夏をくらすははやき瀬に
いつみなかれて夜こそふけぬれ
秋またてむし鳴宿のうたゝねに
水よりはやしあくる夏の夜
さゝ波のこゑ〳〵しのにおりはへて

下草第三　秋連歌

みちあらわるゝ野邊のはるけさ
露のいろ風のけしきに秋は來て
露をけはかれし草ともみえわかて
はやあつき日もよそのあきかせ
中たちも思ふほとをはよもしらし
月ないそきそほしあひのそら
月をかことにいひあわせはや
さそなうきわかれし星の後の暮
かよへるは野分のこゑと聞宵を
ゆふへすゝしきあきのむら雲
露にやとれる月のはかなさ
いなつまを我かけになとわするらん
いとふもしらす秋は來にけり
風はたゝ荻にまつとやしほるらん
ひとり月みる床そかなしき
鴈なきてかせは荻ふく山里に
しのはん月やこの比のそら

〔[illegible]〕小萩ちり萩〔[illegible]〕に風ふく夕まくれ
　たからへもいまを秋とや思ふらん
しら露かゝる野へのむらはき
　ひとり旅たつ秋かせのそら
いねかてに小萩ちるのゝ月をみて
　うらみのこすな夜半の下ひも
しほれすは何あさかほの花ならん
　一たひのあふ夜はあるもはかなきに
しのゝめならぬあさかほもかな
　あらしの露に月なまたれそ
薄ちる野は夕かけのをくら山
　人とはぬ露の古里むし鳴て
ひとむらすゝきゆふかせそふく
　おもふとちとやましるあはれさ
月影に花のやとかす草のはら
　えらひもあへすかるゝむしの音
植置しそのゝいろ草野分して
　ふりすは我身露もなけかし
色つけはむかしもわけし野へにきて
　しつやのかりね月そさひしき
すかのねの露のかたしき長夜に

やゝしろく□ろ窓の月かけ
袖さむし草葉の露やおもるらん
　ちりやすきかけに椎〔[illegible]歟〕のうつろひて
夕日かくれのもりのしら露
　あさかほの花のあたなる色をみて
あしたの露に身をそなくさむ
　はつかしきまてのこる世の中
きえわひていくあさ露をなかむらん
　はまなのはしをたゝにやはみん
すみわたる月にいそくな天つ雁
　月はふけつゝきゆるともし火
つり舟の夜るの海つら滴なきて
　下もみちする松風もうし
雁わたるあまのはしたて浦さひて
　雲はきえゆく秋風のそら
かりおつるすそはの山田きりたちて
　霜うすき夜のみねの秋風
かたしきの衣かりかねこゑふけて
　人もまたねし秋かせのそら
淺茅生にまくらむすはて虫もなけ
　いまのうらみにたえんとやする

はつ霜のゆふへにならへ虫のこゑ
　なれにし秋そなこりはかなき
きえぬまに露かふむしの音は絶て
　うす花すゝきちらまくもおし
鶉なくかた山くれてさむき日に
　草木の中のふる道の月
かたうつらかへるをいく夜たのむらん
　田のもにつゝくさとのかよひち
ふくる夜の月にいつれは鴫たちて
　馬草とりかひ打いつる里
小鷹かり小萩ちる野に一夜ねて
　山ふかくすめるはかりはかひもなし
たもとにいてよ秋の夜の月
　とをくともいそかは山やこえはてん
露わけすつるむさしのゝ月
　おきてや關を夜るもこゆらん
里人も月にうかるゝ清見かた
　住よしやとをき海邊の朝かすみ
にしに月すむ空のあはれさ
　心もしらす山かせそふく
ふけはつる月は空をも憑むらん

　よしやふせやとなくさめてすめ
ふくるまてみる空つらき秋の月
　いくほともなくよはるむしの音
ふくるともおほえぬ月にたゝすみて
　木のはふりゆくあかつきの庵
かけさひし嵐や月にのこるらん
　今聞し事も心にとゝまらて
月しつかなる夜はの山風
　草葉のこらぬ雪のしたおれ
野分せし庭をしつかに月澄て
　おとするはしよたれわたるらん
月しろく風はとたえてふくる夜に
　入山みつそ清くなかるゝ
瀧の上の月のむら雲風ふきて
　いりなん山もさためかたしな
いつる夜をおなし高根の月もなし
　露の袖いく野分にかしほるらん
あはぬとしなき秋のかなしひ
　板間もる夜の雨のかなしさ
野分せし行殘もさむき古里に
　涙こそ板田の橋とこほれけれ

ふる宮人の秋のゆふくれ
おもかけとをし夢や覺らん
したひ來て跡を都の秋風に
又みえくるもおもかけの人
秋風をふるき都のあるしにて
忍ふとて遠さかりゆく人はうし
おくやますみの秋風のくれ
くもらぬ月にものなおもひそ
あらさすは宿にやはみん野への秋
吳竹のひまもる月はさやかにて
夜ふけ風ふく秋のかなしさ
月にふけゆく四のをのこゑ
秋の夜は子を思ふ鶴もうらむらん
又もあはなんありあけの月
宇治山のあかつきさひし秋の雲
舟いそけ月はと山のあさわたり
いふきおろしの秋さむきそら
水にまつふく秋のはつかせ
波もいつからくれなゐに龍田河
すむ山しらて雲もとまらす
龍田姫よその時雨やうらむらん
うらみのはてそ秋のゆふくれ
紅葉せぬかけはあらしのつてにみて
秋風に須磨の關守うかるらん
とまるやまなくまよふもみちは
みさひましりの秋のやり水
露さむき岩根の木葉朽初て
涙をさそふ秋風はふけ
露みたれ木葉とまらぬ夕くれに
袖はしもをくねやもすさまし
月さひしひかりに秋や深ぬらん
みるもこかるゝもみちはのいろ
海士小舟はつせおろしに秋暮て

下草第四　冬連歌

折あとさひしくつるもみちは
神無月たむけの山も道たえて
なこりの山はかせもすさまし
下紅葉かけをたのめはちりはてゝ
きけはさるなく夜るの山かけ
しつかなる月に木葉の音はして
淺茅にみし色もなく枯はてゝ

ゆふ日かくれに木のはちるこゑ
　鐘にきりふるをはつせのやま・
暮わたるみねの常磐木うちしくれ
　やすくすくさへ身となたのみそ
心すむあか月かたのひとしくれ
　老をなせめそかゝらさらめや
秋は時雨冬は霜夜にふしわひて
　草の戸に枕をからはいかゝせん
もらぬ岩屋のしくれたにうし
　露のまに夢なと今朝は覺ぬらん
あはれことしも木からしのかせ
　こなたかなたの松風のこゑ
かた糸の一むらすゝきかるゝ野に
　すゑかすかなる瀧のした道
柴の戸に岩もとすゝきかれたちて
　あしのほわたも猶や憑まん
さえとをる袖のみなとのうら風に
　めさます空に月はふけけり
身をわふるしつか家〳〵夜やさむき
　したかふにとくる心をみせもせて
つれなき霜ののこるなよ竹

　今夜もふけぬひとりかもねん
月しろき小條〔篠歟〕か霜の手まくらに
　しくれはけしき夜るの山風
むら雲に月は中〳〵影さえて
　水ほそき岩間のつらゝむすほゝれ
ふけて月すむ庭のさむけさ
　霜あさの墻ねにあをき小草哉
清水なかるゝ庭のさむけさ
　きりはれのほるはつ霜の山
さえし夜の雲井に鶴のけさ鳴て
　のこれる友のかたろいにしへ
志賀のうらや夕波千鳥こゑ〳〵に
　橋たてや松ふく風にきりはれて
ゆふわたりする千鳥なくなり
　小山田のおくてのひたの冬かけて
鹿なくみねに雪ないそきそ
　あるじさへもよほす宿をかく出てん
雪をまつしる山もとのさと
　とひくる人をかへすやまさと
友または雪なと道をうつむらん
　あくるもをそし日のさむき比

出てみよ柴のと山のみねの雪
たよりとなるもわひつゝやふる
雪わくるしつかつま木を待くれに
さそわれし月にやぬると歸り來て
舟みえすなる雪のやまかけ
松風かたふくまゝにうつもれて
夕日かくれの雪のとをしま
おもふにかわる山のさひしさ
なかむへき雪はあさまの夕煙
雲こそしるへ山ははるけし
ふらはたゝあつめてをみん富士の雪
千里をしのく馬のあはれさ
あしからや雪の八重山末にみて
竹のは山の道のさかしさ
下こほる雪のかたそに庵ふりて
かきりなき千里の波に日は暮て
山かけくらき雪のあけかた
たつや千鳥の又さはくこゑ
暮わたる雪の山もとかり鳴て
いつほりいてん我法の水
あら小田の春待わふる民の戸に
しつかにねふる夜るの山さと
埋火をかへる木とりやたのむらん
道も野中にかすかなるむら
霜かれの草のはつかに梅さきて
あふきのかせも身にさむき比
かなしきは老のしはすの空なれや
春もわかしの谷のむもれ木
こえぬとも身にはかへらん年もなし

下草第五 旅連歌

千さとはかりの末はおほえす
出たつもうきあし引の山たかみ
つらさをはみするなみたにまかせ來て
人になくさむたひのゆく末
うつろへる草木も人の形見にて
山路にわくるふるさとの露
あたなるは我にうつるも恐まれず
みちしるへするよひのいなつま
やまちに人のまたれすもかな
嶺こえて雲やは送る袖ならん
たのまぬほとのつてははかなし

かたりゆく人よ都のたれならん
われなくさめるたひの夜な〳〵
ほのかなる夢よ都のたれならん
遠くおもひし宮こをもみつ
夢こそはなくさめ草の枕なれ
人たのめなる旅はいつまて
もろこしに行をもみれと夢はうし
いつくの露の身にはしむらん
秋風に遠かた人はつてもなし
あはれをしらはたゝたひの暮
たつぬともかゝらし花にかり枕
こえにし峯は八重のしら雲
興つ波月の千里に舟出して
うからぬ旅とつけもやらはや
わすれすは古里人やなけくらん
さそふつてまつわひ人そうき
住はなれいまは褓さへ雲井路に
なにを關とかたつねこさらん
夢にもと宮こにおもへうつのやま
たえは身のわすれはてぬる暮ならて
みやことみしは中空の雲

こえてあらちの山のくやしさ
都にといつはたかへる空ならん
佐野のわたりにまよふ旅人
都出し事や身のうきはしならん
心を人になしてとはゝや
こふるともしらしなとをき都鳥
山里（き）□ひしいかゝをくらん
我出し都ならすはかへらはや
うき時や思はぬ身をも歎くらん
ゆふへの山につるゝ旅人
待ほとはたかひにおそき夕へにて
をくれさきたつ道のたひ人
我のみあるもたのまれそする
したひ來てかけはつれゆく深山ちに
せめてはほしの契ともかな
こえわひぬ月なき山の秋の雲
都にはうつらん物を旅ころも
夕しもはらふ山のさむけさ
身のうへをみれは昨日の雲□
あさたつ山に袖そしくるゝ
都はいつらまよふあつまち

月にたに木の下くらき山越て
　河上の宿とひ行は日の入て
山ちの月に水おつるこゑ
　つかれゆくかた岡山に日は暮て
一夜おりしくみねの椎しは
　くるゝ夜ことにさのみうからし
旅（の脱歟）やと心とまるもなからめや
　うきもさこそとやとりをそかす
くるゝまてぬれ／＼雪の山里に
　あはれむはいかなる人そ旅のやと
うきかりふしのあかつきの雨
　人□もこよひにかき□かは
清見か關の月のかりふし
　おき出たれにやまちとはまし
あまならて音せぬ雪の磯まくら
　ひなのなかちの枕かなしも
月はさえかせはあら野のかりふしに
　かひなしやなれし一夜のうかれ妻
雲のころもをかりふしの山
　いまのとかなる心をそしる
過ぬへき道を日くれていそく野に
　雲ゐるみねもしらぬゆく末
武（藏脱歟）野や草葉を山の露わけて
　河音さひしみよしの□
鐘とをき岩のかけ道くれそめて
　ふり出ていつそれとしられん
また過ぬ夜るの馬屋のすゝか山
　あしはやくゆけ春のとを山
古郷のかすみに駒やなつむらん
　いまより道の末たゝしかれ
まち／＼し日よりをけふの舟にえて
　ほしすさましき夜る／＼の空
人すまぬ蘆屋の奥に舟とめて
　伊吹おろしそ波にのこれる
舟わたる夜なかに月はかたふきて
　なれもうしとやをしか鳴らん
舟よせ□時雨にかゝるみなと川
　そ□（ことり）わかぬ夜こそふかけれ
ふねよせよゆふ付鳥や里ならん
　あかしかた浦なみ近くすむやたれ
水けふる江にふねかへる見ゆ
　ゆくたひに心のとまる前渡り

舟こきかへれしほかまのうら
　まほにはいつからちもむかはん
をひかせはかた山舟のすきかてに
　こゝろにのるはいひしことの葉
たのみつゝわたりにくれは舟もなし
　心すみなは法もえつへし
わたし守ゆきゝたえたる舟さして
　又ゆふへとて戀しきや□
かへらすは雲やはかたみたひの空
　なかめしよ心のかよふ山の奥
しのはんとてや出しふる里
　山ふかく庭もなるまてかへりこて
たひのころもや苔もむすらん
　夕暮おしく鐘ひゝくこゑ
古鄉をみつゝ山ちに又やねん
　我こゝろ昨日はいかにすきつらん
かへれはちかく思ふやまこえ

下草第六 戀連歌上

　いかさまにせん我身ともなし
かゝるをや戀とはいふとたゝならて
　いつより袖の露と成らん
草葉にもまたみぬ色を我おもひ
　春やなみたにまかせさるらん
初草にうちなひく色を待もうし
　われをとふとてふくあらしかは
なひくとも人やは雲にさそはれん
　たかしるへとてほたる飛らん
しのひわひ夕やみをたに待ものを
　露きゝしらぬ人のことの葉
さのみなと聲ひきいれて忍ふらん
　あかてゆく身と何おもひけん
わか影をたれそと月にしのひきて
　いかなる道そ戀といふもの
いもせ山いれはまよはぬ人もなし
　日くらしのなかぬ夕もまつ物を
とはゝとはらふ庭草の露
　ふすかとはかり夜こそ深ぬれ
待空を月に見ゆとも名やたゝん
　もれてはかすの文もうらめし
一度の名をはあらすとしのふ世に
　わかれしとこそ身はおもひつれ

筆の跡かきまかふ日を名やたゝん
　あは□の身をきかねてうき
けふり□□すへき文をしのひわひ
　またしとするもうらめしの身や
さ夜ふくる心いられのとにかくに
　こゝろあれなと梅にほふかけ
かすみつゝ月も待夜そいつとはん
　音つれてたゝとふ事もなし
つれなしやこよひの月の前わたり
　うときはなにかゆかしけもある
〔り歟〕わかなしや名こその關の前渡り
　つらきそなたもとかはおほえす
ちきらはそこぬ夕くれもあたならん
　こやともいまはえこそいはれね
深にけり我やゆかんもはかなくて
　ゆふへのしらはいかゝしのはん
待うかれ我やゆかんの道のへに
　といひかくいひ待てこそみめ
しられしの人によひ居を打侘て
　後のあしたに一筆もかな
さはりありてこぬ夜としらはかこためや

　おもふあたりも行とまれかし
いもかりと駒にまかする夜はの道
　よそには思ふかたもさためす
いたつらにかへさは今夜いかならん
　いもかりゆくも物そかなしき
一夜たにまたれていつかとひつらん
　あ□するやさせるねやの戸
つれ〔なく歟〕□てといひかくいふはてもうし
　空たきも袖にはふれし名もつらし
つれなき戸さしたれをまつらん
　くらきよりくらきにいらはいかゝせん
とひよるねやのおくふかきこゑ
　戸ほそのなるもむねさはく也
しられしのけしきよ誰を返すらん
　いつくにゆきて身をかくすらん
ぬきをける衣の人香をしたふ世に
　涙なと人のためには落ぬらん
うき身をみてはとはんともせし
　うらむとも數ならぬ身は問もせし
ゆきてやつらきかきりをも見ん〔乃脫〕
はらへ七ふのさむしの露

契かは君にかたよるわかこゝろ
　遠さかりぬる人はうらめし
おほつかなたかこゝろにてとひつらん
　のこるこそ猶あさかほは哀なれ
ねくたれかみのにほふまゆすみ
　床をはなるゝ鳥の音そする
したふ夜はたかねまくらの秋の空
　かりねのやとりいかゝあかさん
とふ夜とて道行ふりをしたはめや
　あかつきにならはおきんと夜はにねて
いまはのわかれこゝろともなし
　やと□(りし)つれはのこる秋の夜
あさきりの空をかことに又やねん
　君になすらへ春もわすれし
花の香を袖のわかれの名殘(ら脱歟)にて
　やすらふ空はこまもしるらん
ひきわかれ雲さへいそくしのゝめに
　人はこゝろそおろかなりける
今こんといひていそくをたのまめや
　うすく成ゆくよこ雲の月
かさねしもうき衣〲の秋風に
　うき人からに月をこそみれ
別ちをゝし明かたの朝ほらけ
　ひきわかれつる夜こそ深けれ
道芝や月をもすその露もおし
　打つけに思ふ心はつくされす
石の火のまよいかにみえけん
　思し事よすつる身のはて
ふかくしもあらしとみつゝなれ初て
　こゝろのほとを文にのこさし
かれゆかは悲しつらしもいついはん
　ちかひてはなとかわりゆくらん
うつろはて嶺のしゐしはしはしまて
　今さらいかてわすれはてまし
たえぬへくうかりし世をも忍きて
　おもかけはたゝいにしへの月
遠からぬ夜はのとたえもうき秋に
　露を□ぬる月のあはれさ
たのめし□哀もてかるゝよひ〲に
　おもひをしらは人やとひこん
わりなしやいはてうらむるこの夕
　とたふるを君はいかてかいさめまし

つらくはつらくなかてうらみん
　たちわかれてはしらぬゆく末
さらしよ身をたのむとや人もみん
　心のゆくに身をはまかせし
夢にもとおもふ夜はこそはかなけれ
　あやしきことはたれにかたらん
をよひなき夢をもみれは戀む身に
　又あふまてとたのみこそせめ
よしや人夢になせともいひわひぬ
　かくれぬ物そおもひなりける
心なとしらしたれもとみたるらん
　戀む世にあはれもなとかなからまし
人はひとにものおもふらむ
　なる神もさはりとそきく思ふ中
いなつまのまもあはしとやせん
　しのひかよひの道やたゆらん
みな人のしるも中〳〵契にて
　こなたかなたのけふり立なり
ふたみちをわかぬはむねの思ひにて
　いとけなきよりちきるゆく末
下帯のむすひもはてすたえやせん
　こゝろいすゑにたのむゆふくれ
侍もせし□もせしといひすてゝ
　ともにあはれむちきりとる哉
忘るとてそれにならはんこともなし

下草第七 戀連歌下

　ほとはへぬともまちなよはりそ
世中はなみたを年のわたりにて
　身をこそしらぬ人に戀まし
はかなくて物思ひ初し年もへぬ
　戀のはしめよさても身のはて
あさましや老もてきての物おもひ
　戀しつらしとなにをうらみん
世こそたゝもにすむ虫のおもひなれ
　なを戀草のねをのみそなく
もにすまぬ我から何をうらむらん
　たのめしはよし忘るとも秋の空
なみたのゆふへはつ鴈もなけ
　めにはみれともなひかぬそうき
あた人をおもへは雲もなにならて
　ことしの春も又くれにけり

霞さへつらしや人の空たのめ
とはゝそ雪に跡もおしまん
おもひやる心をたにもいとふなよ
絕はつる人の情をしるもうし
おもひいてよのあたのことのは
したふをや猶あやにくにいとふらん
おもはぬかほをせめてみえはや
わするとすれは夕へにそなる
消かへり雲のはたてに戀わひて
たのめをくへきことのはもなし
付句 ほともへす心のかきりみゆる世に
たひにそいとゝひとりねはうき
かたれ月吉里人やうらむらむ
なくさめや又玉のをならん
あらし世といひしも戀のはてならて
なに人つまにおもひみたるゝ
うき中はねて心みん暮もなし
わひつゝ庭に出てまつ空
みえてたにゆけかしいつち通らん
命わするゝ戀のはかなさ
逢ことにかへはせめての夕けふり

おもひをも我心よりつけ初て
戀はむなしき空さへそうき
又とはれすは身をいかにせん
神に人ひと夜めくりをならふなよ
わひつゝこゝろさのみつくさし
たのむ夜をいつくの月に忘らん
尋てもめくりあはすはいかゝせん
空ゆく月におもひうかれし
ふたりかたらはなにかうからん
しるともと枕にゆるす我こゝろ
うらみのはては又そ戀しき
つれなさを我いろ〳〵のひとりねに
物思ふ比は空さへあはれにて
あくるいたまをたのむひとりね
秋をや人のなこりともせん
花すゝきほのかにみつる末たえて
草木にもあらぬことのはうつろいて
風まつ花に人なならひそ
こゑ物かなし末のあきかせ
閨はあれて身はならはしの有明に
なくさめてたゝあはしとやする

はかなしなたのむいく夜の夢の告
　契し事を憑むはかなさ
かれぬまは露の末葉の浅茅生に
　後をおもふに身こそつらけれ
たかよみちきりかかたき夢になせ
　ふくろ夜もかくやあらんと永日に
遠山とりのおもひねはうし
　うきおもかけの月はかくれよ
わすらるゝ身を秋風の空の雲
　おもふからにそ袖もしほるゝ
よそにみはたれからき人忘はや
　逢みるといふ斗なる名はたちて
うしやいもせのをちこちの山
　一言もなとかけさらんうきこゝろ
とたえはさらにかつらきのはし
　夜をこそたのむ契りなりけれ
かけすてはくめの岩橋名もつらし
　あはにむすふを契とやせし
はてはたゝ我のみしつむ思川
　あふくま川もなかれてそうき
我身こす浪のむもれ木朽ねたゝ

　すゑたのみつるこゝろはかなさ
山水のわれてあはんもしらぬ世に
　はかなしや身をかへりみぬ物おもひ
[illegible]そちひろのふちにみそめる
　忘られぬるにおもひきえはや
露よりも人の心にみちたえて
　なをうきふしを人やかさねん
あしつゝのうすきへたてもうき中に
　まかれるこゝろすてもはてはや
ともすれはものうたかひの文もうし
　おもふとしらはうきやなからん
あやにくの物うたかひをはるけはや
　いかにしてつらき心を忘れまし
つれなかりしそおもかけにたつ
　たゝわれのみに人もうからし
つれなきをみのくせならはかこためや
　ふかきもよそに心みえけり
たかためのなみたを我にこほすらん
　あすをもしらす何をまつらん
なからへん心ともみぬ世の中に
　戀そめしよりむねそくるしき

あはれ君身のなになれはうかるらん
　おもひかへさはものは思はし
うしや君なとふた道にかはるらん
　あたなる言葉いひなをさはや
かこたしと思ひしをなと恨むらん
　ひくも露けし我ひとり琴
かこつ身のさしいらゑをもいつきかん
　いかなる夢のまくらとふらん
みはてつる心はおもひかへさはや
　しらすよこゝろ人のゆくすゑ
かねてよりつらくはうきもいかゝせん
　空に名のたつも涙のつらさにて
野にも山にもうらみあるころ
　わかれし跡をしたふはかなさ
つらくともたへぬへき世を恨わひ
　戀ちにいかてたかふこゝろそ
世やはうき誰うらめしき人ならむ
　身をつくしてそつみはきゆへき
後世をたれにのこさん我うらみ
　おもひもすてよとかやつもらん
つらしとていはゝうらみのはてもなし
　せめてはいまのつらさともかな
戀しなはたゝ一きはのおもひにて
　あた人も日かためてははちつへし
うたかひてこそこゝろをもみめ
　いのるたのみに日をゝくる比
それもうし戀や命と成ぬらん
　いくたひかくは生かわらん
物おもふ命はきえぬくれもなし
　もとのまよひはいつかつきせん
命こそきゆとも世々の物おもひ
　又いかならん夢をかもみん
わすれねとふりにし人はかひもなし
　たかまことをかことのはに見ん
わするへく身さへなりきてうき中に
　人のこゝろよかゝるものかは
あふ事にかへし身のやはおしからん
　なかき世の人にほたしと成つへし
あわをならすはおもひたえはや
　はかなき道もあさくなるころ
戀しにて身をたゞしにもひかれはや
　おもひかへさは夢にたにとへ

なき世までさりともえやはにくからん
　おもはぬ事もなにやたゝまし
君ゆへといひてはきえし夕けふり

下草第八 雑歌上

　ふる言と人はけふもたつねす
道芝の跡なき霜に春はきて
　春のゝそみそきまく／＼にある
玉すたれあくるいつくもかすむ野に
　かくなるものか山かすむかけ
谷峰もなかりし雪の消はてゝ
　おもひやらるゝ古里のはる
雁そゆくえやは花なきかたならん
　けふ毎にひとり／＼の跡をみて
えたおる花そしほれもてゆく
　前世や人におもひをつけつらん
はなの宮とのあとの松かせ
　のこるや木の葉山かせのこゑ
思ふへきあはれは花にことつきて
　おくやますみのはるのあはれさ
そことなき峰にはたやく火はみえて

　花ちるむめをたれかおるらむ
ふえの音をかすむ山路のしるへにて
　山にゐらんもしらぬゆくすゑ
ほとゝきすうはの寝覚を鳴捨て
　たゝすの門の火かとも見そ
夕すゝみ月にうかれぬ宿もなし
　めにみえぬなにか涼しくむかふらん
またゆふたちもとをきなる神
　はるゝもいてぬさみたれの宿
月そゝき袖のいつこにやとるらん
　五月雨すくるあとのしつけさ
雲消て月たちのほる山のはに
　なれこし庵り松かせもふけ
心こそなくとも月にゆめやみん
　秋やまたま葛か葉にかへるらん
はるはうらみしはつ雁のこゑ
　むしの音よはしたえんとやする
いとみたる一むらすゝき風みえて
　つれなからすは名をもゝらさし
いたつらにゆふへ時雨るゝときは山
　とゝろみえつゝなにゝやむらむ

色かえぬ尾上の松の一しくれ
契しは淺茅うつろふくれことに
あはれことしもみねのあはゆき
のとけくあへる友そまれなる
ましわれは大かた誰もうとからて
心のほとや後にしられん
大かたになるれはあしき友もなし
尋ぬへきゆふへともなき雨風に
わかこゝろしる友のあはれさ
袖のためとやしくれきぬらん
衣をるしつはた山の秋の雲
はるをもいとふやまのかくれ家
わか染ぬかすみの袖は友ならて
おく山すみのかりの世の中
契らねはなくに物うき鳥もなし
面影は古郷人もかりねして
はかなや夢はたゝあらしのみ
いつれの道を身にはたのまん
をろかなるおもひはむねにきはまりて
ひとりさとるもまことならめや
行末をこゝろのうらにたのむなよ
身のなくさめとなにかならまし
人にこそうられへもよらめわすれ草
いかゝたつねんよそのはる秋
もろこしの文はこゝろもえかたきに
かしこきはしるもろこしの人
道はたゝ卷をひらくをたよりにて
昔よはしなかれやあさく成ぬらん
風をつたへよ和歌のうら人
なにのひとつをまなひともせん
わきかたき道はむくさのみたれあひ
たのむゆくゑも世にはのこらし
かなふへきあらましやたゝ山ならん
いつはりとおもひなからもみる文に
山たうらやむ友のあはれさ
たのむもあさき心なりけり
それならぬあらましもみな跡もなし
山もとかけてはるかなるさと
みねの庵あらしの末や夢もみん
空にたつ名はいつかきえまし
ふしの根のゆきかへる年は遠世に
かさなれるさかひもなしや天つ空

山のいくつをふしにたとへん
あまのたくものかすかなるかけ
里はあれて夕しほちかき浦風に
入江のむらそくれてさひしき
北にさり南にさりて舟もなし
眞萩かもとの人もかけせす
いつすみて遠里小野に成ぬらん
草の花つむみちのかたはら
日くるれはさひしきまゝに宿出て
そのおもかけはにたるたになし
草葉さへふるき都のうらみにて
うつれは夢のはる秋のそら
たれすみてふるき都になかむらむ
かきりあるにそ身はのこりぬる
ゆくとしを新島守のたのみにて
名をきゝきかぬ人もこそあれ
かなしくも新島守のかすそひて
いく世のかけそふたもとの杉
寺見えて嶺は木ふかきはつせ山
きゝえぬは何のむくひそ法の道
野寺のかねのあさゆふのこゑ

めくりめくるも夢のはる秋
山ふしの老の坂こすみね〳〵に
岩のうへをもたのむあはれさ
山ふしとおもへはつらき床もなし
いくたひ人を思ひきぬらん
まよふ世にあふを佛のこゝろにて
たつぬる人もとをき古寺
法にたゝ道とてあらは絶やせん
ひとつをいへはみつをこたふる
聞えしと思ふ法をやかくすらん
鐘なりくるゝふる寺のみち
時をわる法の庭人うちちりて
舟にのる人やおもひもなかるらん
海をちかひの住よしの神
山風きよく雲はのこらす
あふけ人みもすそ川の日の御影
名もたかゝれや此北の峯
影清き雲井の星をまつる夜に
又ほとゝきすまきれてそゆく
月はたゝ雲間斗の有明に
車のうちにほふ空たき

月かすむ夜はのうへ人聲深て
　夜ふかき宿にあくるこすの戸
みるやたれ月おほろなる雲の上
　ねぬとてかほを引そいれたる
庭鳥の羽の下にもこゑはして
　松杉を下葉に雪や晴ぬらん
夜からす鳴て月さゆるらう
　ねむれるうちもしつかならめや
身にそしる子をおもふやみの夜るの鶴
　さしおほふ竹の中こそ住うけれ
鳰なく山のゆふくれのくも〔重言〕
　むすふそしけき五月の露
さゝかにの物はかなくも引糸に
　つはくらめをの常世を遠來て
はにふのこやをたのむはかなさ
　かすむひかりそはやうつり行
とも火にあすの雨しる闇深て
　その家の名はくちねとも古はてゝ
なきさのさくらむかしともかな
　うき世はいてつ何をさそはん
花ならて入もなからし吉野山

　こゝろとまるはたゝ山のかけ
鳥の音もゆふ森ふかき花に來て
　わかるゝをいまはと思ふ旅はうし
世をも花をもいつかへりみん
　人は思へは世をもなけかす
つらからぬ身は誰とてかうらやまん
　朽せしの思ひのねさしいか斗
いやしからぬやおとろへもうき
　うきもあはれも涙とそなる
知人もなからふる身のうらみにて
　わくれは袖にそよく篠のは
野への庵我ゆきゝたに道もなし
　いかなる里に人はすむらん
けふるたにみえぬ深山のをのゝ音
　一坂ものほりくたるはくるしくて
ちかきとなりもうとき山さと
　やすくなる身もよそめ成けり
水を友山をとなりの草の庵
　むかし思ふも友となりけり
高砂や我さへ松の老の世に
　風をきくにも袖そ露けき

かけ深き槇原に老の身を侘て
みるにあやしきあまの橋たて
色かはる下葉はさらに松ならて
いつみえてかも名にはたつらん
はゝ木々はとをきふせやの跡古て
みとりの山のかけのすゝしさ
松すきの霙ゐるはかり高き野に
立よりてあはれ憑まん陰もなし
まつなららみそかへるあたなみ
石間をせはみ魚そやすらふ
ゆけはたゝ千里の道もかたからて
なくさむほとを契りとやせん
ぬししらぬ軒はの雨のやすらひに
世をそむきにし跡のあはれさ
宮こより雲を横川の嶺にみて
澤行水のこゑのさひしさ
いはゝやき〔し歟〕ゝわたりても遠き世に
いまたたえせぬ難波津の跡
朽なからおもひわたるを橋なれや
たえすうたかふ中はたえけり
ふむたひにあやうき谷の一はし
たれともなはんわたるはや川
山かつのあさゆふなるゝひとつはし
あかつき人のをくる柴の戸
世をわふる身はたゝ夜るをひるにして
おもひし事のすゑもたかふな
身にまことなくてはたれを憑まし

下草第九 雑連歌下

むかへは月のかけそかたふく
はるゝ夜の高根の朝日さしのほり
おほ海やかすみに渡る舟の道
日はゆふなみのをちの遠やま
つらしとていつくにゆかん山の奥
わかれし雲のかへるゆふくれ
それともわかすとをき山のは
覺あへぬ夢ちの末に雲引て
雪にさやけき四方のとを山
槇の庵木のはの後も住あかて
松ふくかせや木のもとの友
人すまぬ宿は水のみもる扉に
いては□するやとりともな〔し〕□

露のまをうき古郷と恨なよ
うらみしこゝろ見えもこそすれ

たへねたゝ思ふにかなふ人もなし
おもはぬはめくりあひても何かせん

わかためつらきはる秋のそら
めくるむくひのありとこそきけ

日は入ぬ月なと空にまたるらん
をろかにやむくひをしらて歎らん

夏をくらせは冬のやまさと
打かすむ都の市の朝またき

炭うるこゑそはるもさむけき
のこれる人の物ふかきかけ

かくす身や市の往來をなかむらん
さむるやと思ふも夢の內にして

世はみな酒のゑひのたはふれ
手にとらぬ衣の玉はうらめしや

さかつきにこそこゝろみたるれ
なからふる身や世をは祈らん

よしあしははしめよりしる道ならて
ともし火の消るを露の身に知て

窓に雨きく老のかなしさ

としへて契る中のかなしさ

あちきなし人にも老をみてはてはや
うき世にはこゝろをとめぬ身そ安き

老をのこすなはなもおしまし
世にふれはしらぬ人にも友なひて

おもふにうとき老のかなしさ
我身世にふるほとのはかなさ

老そうき待ことありと人やみん
ことわりにのみ袖そぬれそふ

身は老ぬ誰いとふをか恨まし
身はかくしても又やとはれん

はかなしや老にみえしの我こゝろ
絕ねたゝかゝるおもひの身のゆくゑ

老をひかふるあたの玉の緒
うらやむとてもすまし山さと

たえぬへき心も老はつきはてゝ
うつり行そなたはなにかとかならん

月日をかこつ老のはかなさ
つらきをつらき身に成てしれ

さかりなる人も老やはとをからん
生れくる身はなに事か安からて

ちかきかきりにおいそなくさむ
我世の中そたのむかたなき
おもふ事とすれはか丶る老か身に
日のひかりたに老ははつかし
みれはた丶かすみのうちの朝ほらけ
あたなりと我世はみつるかひもなし
さりとて老やつれなかるへき
都には雪とてつもる事もなし
しろかみさへや人をわくらん
うかれめのねや（へ歟）もいらす明□（す）夜に
おもへ霜をくくろかみのはて
たかはるならし身には還ます
みるそうきか丶みは雪の朝ほらけ
夕の雲になをそ戀しき
かへる道なきを昔に忘れ來て
そのこと丶なくあはれなる空
おもひいて丶いは丶むかしよ何ならん
身のゆくすゑよなに丶さためん
とにかくにふるもむかしは安かりき
心もいはすしのふくやしさ
たかしらん我むかしそと涙をち

おもひつ丶けぬことわさもなし
むかしたにうき身のゆくゑいか斗
鐘けわか昨日をかへす聲もうし
遠つあすかのいにしへの夢
露のいのちのか丶るあはれさ
昔たにきけはまれなる年のをに
あはれもよほすあかつきの月
つらけれとむかしを知はなみたにて
をろかなれはそ道もをしへぬ
おもふ事たれにか親の淺からむ
かたるをみれは友とこそなれ
みとり子のなにこ丶ろなく打ゑみて
すきにし事そまのあたりなる
くもるなようらみやおやのかけならん
かわるを見てもたのむはかなさ
あるはみなしつみうかへる世の中に
思ひのみかさなりてなとうかるらん
しつめはうかむたのみたになし
立浪やしつけき色を殘すらん
みたれおさまりうつる世の中
おもひしらる丶すゑのふたみち

くたりての世やよしあしをわかさらん
　我こそうけれおもひたつみち
のかれてもしのふかた〳〵おほき世に
　うき事つくす人の行末
世中は夢の千種のあたし野に
　いまそまことの我すみの袖
うき世いとふね覺をあすや忘まし
　人のつらさのほとそおとろく
捨はやの心はひとつ世の中に
　又雪ふかぬあらましのやま
世をいとふ道やはたえんいてゝみよ
　たゝまほろしを契なる人
誰もみなあさ露のまに生れ來て
　待ともとはん友はおほえす
たれもみなひとり〳〵の憂世にて
　とはすかたりに世をわふる人
なけくなよたれもさこそはうき身なれ
　なくさむ秋もところからかも
いつくとて露の身ひとつつらからん
　なれぬをたのむ旅のあはれさ
世中よたれむつましき人ならん

　身をしれは玉のありかもよそならて
世はまほろしのゆくすゑの空
　なをいつまてのおもひならまし
かりの世をはしめなき世とうけ初て
　しらぬこゝろはからくにの人
とらのふす山より世やはつらからん
　あつき日をくるしむ道のやすらひに
ちから車のうしや世の中
　けふよあすよと身そさためなき
世の中は風まつ舟のとまりにて
　とむれともとまらぬ身こそかなしけれ
たゝ世の中はなみの上のふね
　いつわりのみのあけ暮はうし
誰も世はおもふにかなふ道ならて
　ものあちきなくものおもふころ
あさはかに身をやはすてんまてしはし
　ふかきに山そみちとをくなる
淺くとも染まし物をすみの袖
　春の山ちに日をやをくらん
霞さへうき世の空のほたしにて
　きかすかほなりいかにうらみん

ほたしおほき世をつれなくも我出て
　おとろかすともかひやなからん
こん世をはしらぬにもあらす迷ひ來て
　かねははるかにあけぬとそきく
おとろかはこん世の夢も覺つへし
　いつより人のかわりゆくらん
みたるとも心なるへき世の中に
　しるしらす君かあはれむ時をえて
すてしわか身とおもふはかなさ
　哀にもかへぬ衣はしほりきぬ
こけむすらめやあらましの庵
　すみ家ありとは見ゆるかよひち
たつねしよ身をかくす人やつらからん
　こゝろたにわか身にもしたかへ
しつかにと思ふはかたきねかひかは
　名にもたゝしと忍ふうれしさ
捨はつる身のよしあしは誰いはん
　我をもさそへ山にゐる人
おほつかな心のぬしよ誰ならん
　みやこ戀しきひるのあさ夕
うき事はあまのたくなはくり返し
　たれをかとはんしらぬゆふくれ
忘るなよなき跡ちきるけふの友
　かりにも人そこゝろあるへき
常ならぬ世にしもたれかにくからん
　人に見えなは夢よことわれ
たか玉かあはれこてふとなりぬらん
　夢かとそおもふさてもなになる
はてをたゝいへは身もなく人もなし
　心よりそむるはまれのすみの袖
あらましかはとうちなけくあと
　かひもなき世を我にへよとや
いかにせんむかしたにうき親の跡
　かたはかりたゝいにしへの祭して
うき身かひなきたらちねのあと
　ほとふれはかへらぬ旅を思わひ
はかなやなきもあるこゝちする
　おもひあまれは忘れてやまつ
さきたつもかりの別のこゝちして
　たかいさめにか世をものかれん
なきかけのかたみはかゑし墨の袖
　藤衣ぬきてはなにゝかゝらまし

わたるみさほもしらぬ瀬やうき
　わかれてのちそおもひあわする
あらし世といひしを人におとろへて
　たなひく雲そ空にわかるゝ
身もいつかつねならぬ風にさそわれん
　こゝろのゆくはそふやそはすや
ありなしもみぬ世の人を戀わひて
　ゐたつらにせん身とや思ひし
うへてみぬ花に人こそあはれなれ
　僞とおもひてはなとたのむらん
たれか千とせの松のことのは
　名をとけて後や心のかはるらん
うゐかふふりにひとゝなる人
　出すはしらし世の中のうさ
かくす身の心を君にひかるなよ
　いてん道なき雪のやまさと
しろかみにならすは世をも待やせん
　あへるも風のたよりならすや
さま〳〵の家をあらわす君か代に
　とをきかり庭もふみはまよはし
おもひやる千世のふる道いつたえん
　我としなみそ末になりぬる
松山や君かよはひはとをき世に

下草第十 發句

　正月二日春立侍し年持是院法印坊にして
朝かすみきのふたちしや去年の春
　霞の發句の中に
たつとしもみえぬや四方の朝霞
みすもあらぬ遠山いくへうすかすみ
　高雄尾崎坊の所望に霞を
衣をるかすみもしろし瀧のいと
たか筆の春の木末そ朝かすみ
　水無瀨の御廟法樂に
雪なから山もとかすむゆふへかな
　殘雪のこゝろを
ひましろきかすみやす（ら脱歟）たれ嶺の雪
かすむらしけさはきゆん嶺の雪
消やらて花の友まてみねの雪
山や春かすまぬ方の雪もなし
　梅發句中に
雪に梅やみはあやなきにほひ哉

たゝのみか此ころの風に梅のはな

梅いつく袖はうつしのにほひ哉

　山崎に知人侍所にて

梅か香もありとや袖の夕月夜

　おなしこゝろを

たほるなと袖にや匂ふ梅の花

　宗闇とて朋友の侍るか草庵して沙汰ありし時の會
に

いひなして花の名ならぬにほひかな

　おなし草庵會に

にほへ梅身にこそよその春の風

　志賀のわたりにて侍し一座に

春はまつ梅や花その志賀の浦

道しはのあさ露はらふ柳かな

　河内國正覺寺の陣にして

青柳のかつらき遠しあさかすみ

　同ところの會に

水かすみ春草にはふつゝみかな

　住吉參籠の時春月を

夜るは月さそ住の江の夕かすみ

　おなしこゝろを

いまひとへ月に色そふかすみかな

　待花のこゝろを

たれを世のまつ人にせん春花

　二月の半に俄に雪ふりし朝三富の豐前守の許にし
て

花やあらぬきのふは雪の山さくら

　尋花といふこゝろを

花に入山くちしるき一木かな

　右京兆の亭の每年千句に

夜るもみよ戸さしせぬ世の春の花

　池田兵庫助宿にして

植しうへは庭や春てふ春のはな

　青蓮院殿坂本におはしまし侍る時の御會に

花の水山こそ千しほ志賀の海

　三河國より或人のほりて花の比旅宿の會に

春はたゝ花薗ならぬ山もなし

　花の發句の中に

花にたて色わくほとのあさかすみ

あさ露は花にみたれて風もなし

花を見は千世もへぬへき木かけ哉

鳥の音に花の宿とふやまちかな

おる人に鳥なく花の山ちかな
いつれそとみれはたをらむ花もなし
花に月夜は春なれや朝ほらけ
花さかり跡も雲井の深山かな
うくひすの羽風はちらせ花さかり
　千葉中書の亭にて
花鳥をあらそへる世は風もなし
　とふへき人のもとにさはりありて後花の比まかり
　たりし時
かねてみぬさはりもうれし花盛
　池田兵庫助許にて侍し一座に
花ににほひみとりにかすむ千里哉
　景瑞庵にして花の比侍會に
花さかりちらさぬほとの風もなし
花に我おもふいろそふ老木かな
ちらぬ野へさかぬ山なきさくらかな
九重の外山も花の雲井かな
　能勢頼則許にて侍し千句に
花やあらぬおもひかへせは世々の春
　右京兆の亭の千句に
花を見はよしや芳野も都人

　或人の所に花の比やすらひて又旅たちし侍し時
跡に人みるやとはなやちりぬらん
　人にかわりて
いつかみぬ都は花の常世かな
　草庵の會に
老木にもさかすや心はなもかな
　花の發句中に
うつろふかかすまぬ花の朝くもり
ちりちらすおくみえぬ花の心かな
いとはすは花こそうらみ春の風
うらむなと花の跡とふあらしかな
ちらはちれさくら斗の花もかな
とくちるもまたれし花の心哉
ちる花に木の下ふゝく嵐かな
　大内京兆瀧のもとに花の散をみて所望し侍時
瀧なみに花も岩こすあらしかな
　暮春こゝろを
かへれと□思なたちそ春かすみ
道しらはひとりかへらん春もなし
ゆく春も花さそふ風のやとりかな
　新樹こゝろを

いつとみん花のわか葉のうす紅葉
　池田民部丞綱正宿所にして
卯の花のひまさきかこへかきつはた
春草はうの花かきの外面かな
　備中發岡といふ所にて卯花を
卯の花に木の下はるゝ山路かな
　おなしこゝろを
うの花に月雪はみつ春もかな
　書寫に上り侍し時卯の花の初に
春か夏か木はしけ山の下つゝし
　待時鳥のこゝろを
おもはぬをわかはそまたん郭公
おもふをはおもはぬ世かけほとゝきす
山ふきをこゝろのいろかほとゝきす
まつ人に心かへせよほとゝきす
　蒲生刑部大輔時鳥十の題にて千句し侍し時
またしはやねたる聲せよほとゝきす
　同千句に人にかわりて
藤のみや時はたそかれほとゝきす
　備中國にて庄春資のもとに罷侍しに音高の山此所
なるよしをきゝて
音たかの山とや思ふほとゝきす
　夏發句の中に
なかはいつ月は在明のほとゝきす
　巷の後會所々奉行承侍し時其會に
あらぬ名をかるや天ひこほとゝきす
　音羽山ちかき所にて會侍しに
をとにきく山か木すゑのほとゝきす
　江州にて侍し千句の十番めに
榊取山や下葉のむらかしは
　あふひを
むかふひもさわれはみすのあふひ哉
　あふちを
露おちてあさ風にほふあふちかな
　遊佐彌九郎｜衛の館にて同心を
侍を風つたへてにほふあふちかな
　神保能登守宿にて橘を
たち花の露にかほるや玉のえた
　おなし心を
五月まつ花をもよほす郭公
　宮若狭守の城寨高き所にて侍し會に五月雨を
五月雨は山かさなりて雲もなし

おなしこゝろを
影みせよ月日をうつすなつの雨
五月雨はかへる雲なき夕かな
夏の發句中に
くゐなく梢は眞木の外山哉
くゐな鳴月は明ゆくと山かな
今年生はみななよ竹の林かな
うふる田の雨になひくや秋の雲
大内京兆つき山の舘のさまを發句にすへきよし侍
し時
池はうみ木すゑは夏の深山かな
夏の月こゝろを
明し夜や月にくやしき夏の空
和泉堺引攝寺にて同こゝろを
月おつるあさしほはやし夏のうみ
蜷川修理進太神宮法樂千句に
もすそひく夕川すゝし柳かけ
朝倉貞景舘にておなしこゝろを
おくや瀧雲に□(涼)しき谷のこゑ
夕立を
た□(か歟)里にまつ夕立そ天津雲

納涼の發句中に
見ぬ山のおもかけ涼し苔の庭
夏山に秋の水せく岩ねかな
庭に松植水おとしなとしたる所にて
下露のつもるや泉庭のまつ
夏發句中に
風なから雪を袖なるあふきかな
思あまり風や秋まつ荻のこゑ
御祓こゝろを
はらへする水は心のちりもなし
山上にて小倉將監實澄山家にて
雲水を色に秋たつ深山かな
妙蓮寺にて侍し一座に
風みれは一葉にとをき山もなし
秋の初つかた侍し會に
荻にふけきかはいつれの秋の風
秋はたゝ松や下風おきの聲
ちるかけをみすは柳や春の風
人の雨請し侍しころ
桐の葉に雨をうこかせ秋の雲
七夕こゝろを

波こさは契やいく世天の川
梶をとに草の露とるあしたかな
ほしあひや名のみ七日の一夜つま
　おなし後朝に
天川昨日もとをきわたりかな
　題しらす
荻すゝきみたれていはん秋もなし
秋風のふかぬやにほひ〔萩〕萩の露
　越前国岩本の道場にして
根やひとつ岩もとすゝきさゝれ荻
さ夜風もけさや在明荻のこゑ
　小笠原宗元旅宿にて槿を
露をみはたゝあさかほのまかき哉
　草庵の會にかるかやを
おきてみん夜るやかるかや露のやと
　題しらす
風をゝきて鴈のこゑまて萩の露
　西行法師宮城野の萩を慈鎮和尚に奉し其種いまに
　残侍を草庵にうつしをき侍しに花の比其國の人き
　て會侍しに
露けさや宿も宮城野萩かはな

　村山利重旅宿にして
荻にまつほのめく鴈の羽風かな
　秋發句中に
日やよはき花うすくもる野への露
うすくこき野は花そめの衣かな
　上杉相州の亭　月次に人にかわりて
あすもこん比は花野の小鷹かり
　志賀わたりにて侍し會に
波にさけ花そのとをき秋の海
　天王寺住侶ゐさなひて景おもしろき所にて侍し其
　會に
難波津の秋にことはの海もかな
　野分のこゝろを
むら雲にふくや野分の初尾花
袖にこそちきる花おる野分かな
霧さむき庭は野分のあした哉
　八月十五夜平新左衛門尉宿所の會に
みしやこれ今夜やあらぬ秋の月
名そたかき月や桂をおりつらん
　定家卿の墓所にて名月の夜善都聞の催され侍し會
　に

あけはまたいつかは今夜秋の月

住吉社に詣て月をみて

われみてもいく久かたの秋の月

おなし月を

あさほらけ月にわかるゝひかり哉

越中放生津にて

月やふれあしそよく江の秋の水

遊佐加賀守舘にて千句侍しに

もる月にあくるや關のとなみ山

霧を

山みれは霧に秋たつ朝戸かな

鹿の音を山なるきりのあしたかな

みねはれて川きりしろき朝日かな

心敬僧都の旅宿にて

露やいつ空をうかふる秋のうみ

秋の發句中に

すゝきちり松に霜ふる岩根かな

染そめす草木やをのか秋のいろ

木葉さへ都は柳さくらかな

九月の初に或人の許にて菊を

うへたてゝみるや仙人庭のきく

おなしこゝろを

家〳〵にくむや菊さく谷の水

長月九日の會に

淵せなくあすも猶みよ庭の菊

秋發句中に

もみちせはいつれ深山の木々の露

松の色も秋にはあへぬ下葉かな

秋のいろを松にあらそへ夕しくれ

山姫の手染にかわれはつ時雨

かつそめて時雨にみえよ木々の露

しくるともいま一たひそうす紅葉

つくしへ下侍し秋

染川はしくれし山のしつくかな

武田光祿小濱にて千句し給し時

露にみよ青葉の山そ初しくれ

南昌院にて和漢の發句に

そめて又しくれやあらふうす紅葉

かつちらせもみちはみねの朝あらし

野山より夕やちしほ秋のいろ

風はおきしくれはまきの板やかな

播州中島にて侍し千句に

あまた霜に跡なくあし邊かな
　肥前に久しく侍し比秋の暮に
かへる秋身はいつはたの山ちかな
　おなしこゝろを
風にたちし秋は木葉に暮にけり
　初冬の比本能寺にて
秋そめぬ山もあかきやはつしくれ
　殘菊こゝろを
秋をゝきて關やはつ霜庭の菊
　松梅院にておなしこゝろを
木枯をよそけに菊の匂ひかな
　冬の發句中に鹽川豐前守許にて
木々は木すゑ松は下葉の時雨哉
　村田肥前守旅宿にて
散音も染かねし雨かうすもみち
　おなしこゝろを
ちりそむる木葉か雨かひとしくれ
　吾妻に侍し比落葉の心を
ちれはきぬ袖もあらしの木葉哉
　おなしこゝろを
春雨の染し□もなき朽葉かな

ちらすなよ風も染ししたもみち
夜るの雨をけさふりかくす木葉かな
　湯山にて有馬羽州宿坊にして
風やちる庭は木葉の音もなし
　伊丹兵庫助宿所の會に
木葉くち水草きよき川邊哉
　冬の發句中に
木枯にとへは葉守の神もなし
　草庵にて千句し侍し時
われもとてちるか葉守の神無月
　人の月待し侍しとき
月にいま待ともえやはひとしくれ
　浦上美作守俄に所望侍し發句に
今朝もふれみやこは月の北しくれ
　同心を
あさほらけ時雨にめくる月もかな
　本能寺圓光院にて侍し一座に
のほる水ありてやこほる空の月
　室の八島の松を見侍て
霜きえて松のはけふる朝日かな
　若狹守正種秋といふ字を入て予に發句をさせて千

句すへきよしの夢を見けるよし申侍し其會に
はつ雪も秋をはけたぬもみちかな
湯山にて侍し會にこほり（二）を
水こほる谷□□き出湯□な
外郎宿所にて
木々の霜こほるも水のひゝき哉
會所に千句侍しとき
もろからぬ氷やいくへ紙屋川
或人みたり心ちの立願に千句し侍し時
松風の聲や八千代の友千鳥
伊丹兵庫助宿所にて雪を
またさりし我かは今朝の峯の雪
池田兵庫助宿所の千句に
くれぬめりみしや白雲峯の雪
おなしこゝろを
庭□ふれ松やはかわる峯のゆき
こしに罷し時或人の許にて
庭はけ□（三）あは雪いくへあらち山
こしよりのほりし時草庵にて
はらひこしみねの雪まつ都かな
冬の發句の中に
風やなき竹にまちとるけさの雪
まきのやの玉水さむし雪のころ
池田若狭守宿所にて侍し會に
水しろき庭はみそれの名殘かな
題しらす
月をけさみはてぬ雪のひかりかな
月なからうす雪くもるあしたかな
住吉法樂會□雪を
□に□れ鷹□の淺かかた
和泉堺にておなしこゝろを
雪なからいつれの山そおきつ波
細川典厩千句し給ひしときおなしこゝろを
ふもとまて雲なき雪の高根かな
早春發句中に
またてみよ梅ならぬなにか花の春
雪にのみさかせてやみん梅の花
梅さけは年もこすゑになりにけり
杉原宗伊身まかりて後年の暮に小笠原宗元名號連歌し侍し時
なれ（四）□世は夢に暮ゆく今年哉
〔右下草舊本闕今以圖書寮本補之〕

續群書類從卷第四百八十七

連歌部十七

園塵第一

春連歌

霞は夜はの空よりそたつ
あら玉の春やみやこにいそくらん
かけひのすゑに春はきにけり
吳竹の一よあくれは打かすみ
いつの衣の殘りきぬらん
春かすみ袖ふる山にたなひきて
けふりやたえん鹽かまの浦
松しまの松よりかすむ朝ほらけ
石のうへにや春かへるらん
來かすむ千里の濱のおきつ浪（しほイ）
春はけふりのみえぬすみかま
たなひくを又たちこむるあさ霞
はなれ小島の花のしら雲
山の端をひたす霞は海に似て
のこすさへ花にあらしの根にて
木すゑにさむき春のしら雪
すゝふくかせのをとはいつまて
よし野山雪のふる鄕春さへて
古きふすまそ打もをかれぬ
雪をふく白山風は春ならて
幾春をさて過しきぬらん
世にはみなきえぬる物をふしの雪
咲こそのこれ花の一もと
長閑なる春の中はの又さえて

おもひもかけぬ春のしら雪
長閑なるさよのあらしの明ほのに
となりもみえすなをかすむ比
松ふくも一木の風はのとかにて
あとはむかしのみやのおもかけ
宇治川や汀の氷うちとけて
又ほとゝきすつれなきもうし
うくひすのまたるゝ雪の山さとに
雪にほのめく朝あけの空
霞より谷のうくひす聲もれて
梅にほひくるあけほのゝ空
うくひすの聲より月の色きえて
花にねにけるこゝろかなしさ
うくひすのあたら春のよなきもせて
かすかなる住居なからもとし越て
籠のうちになく鶯のこゑ
ゆきゝの人のめをやはつらん
道のへに色よくさける梅の花
このさとまでも春はきにけり
人しれぬ柴のまかきも梅さきて
むもれ木となれは春さへ花さかて

かきねのむめに眞柴つむ山
おひぬるをみておとろかれぬる
手すさみに種まきすてし春の草
春日野の雪はむら〳〵きえ初て
若草山にはるさめそふる
人もをとせぬ庭そかすめる
眞砂よりこまかに春の雨ふりて
にほふさくらの殘る木のもと
雨かすむ暮のみとりに鳥なきて
くるゝかすみはうすゝみの色
きゝすなく野のやけ原雨おちて
ねぬ聲しけき門のよそほひ
鶯のゐる柳か末はふく風に
糸よりも惡むはよはき心にて
柳におつるはるのあさつゆ
あさまたき梅さく宿に人待て
門をしひらく青柳のかけ
のほるもくるしみねの一むら
さやかなる月のふもとの夕かすみ
さくらにほふ袖のおひかせ
から衣日も夕月夜うちかすみ

のとかにすめるやとのいけ水
かはつなく雨夜の月のかけ更て
いくたひ春と秋にあふらん
月ひとりかすみつはれつ更るよに
假のひまのあけほのゝそら
たか夢のかへるに雁のつれぬらん
春に（運）逢るゝあはれをもとへ
雁そなくわれもみやこにかへらはや
こゝろになにと身をまかすらん
歸るへきものかは花にあまつかり
こゝろなかくもたのめゆくすゑ
山とりのおのへのさくらまちわひぬ
おもひたつ道に幾日をゝくらまし
さかぬよりとへみよし野のはな
よろつとたるこゝろなりけり
住わひし草のいほりに花さきて
おりしを花もさそうらむらん
わらひ生る野に先くらす松かり
とはぬおりにや花はちらまし
めかれせすみるへきものそ山さくら
おもひかへ世はまつ人もなし

しつかにてみるとそ花のこゝろなれ
名をあらはすは折にこそあへ
さきにけり檜の宿のさくらはな
枕に鐘の長閑なるこゑ
花の香に睡ぬる夢はおしからて
つはさやすむるとりの一つれ
跡さきもかすむ廣野の花にきて
かくしあらはすをしへもそある
色ふかきかすみのおくやはなゝらん
なをおもひますくれとこそなれ
かへるへき花の山のは月いてゝ
かならすつらき名をはおもはし
ゆきてみんあらしの山のさくら花
みなれぬくにゝまよふあはれさ
花もしれたかためいらんよし野山
あふ人もなくかすみぬるやま
袁とは花もしるへきあめにきて
野への草いくもとゝなく分くらし
さくら一木にとまるはかなさ
むかしのまゝの梅かゝそする
花にのみなとすゑの世のなかゝらん

行かへるさのしけきみやこち
いろ〳〵の花に玉つさ引むすひ
たれにかとはんいその山こえ
あま人のからぬは花のみるめにて
鐘なるころにとふ人そうし
山さとのはなは夕に色きえて
夕のゝちのおもかけのやま
咲はなのいろやいり日をかへすらん
わか身にかけのつれてこそ行け
歸るさの花に夕日をおりそへて
ほとにしたかふのそみこそあれ
たをらはやわれもしつえのさくら花
かくすともやは身のかくるへき
花はたか老のかさしになりぬらん
後の世までをちきるはかなさ
何かそのうてなは春のはなゝらん
ふるさとしらぬはるの山みち
をのゝえも朽木のさくらあかすみて
くやしくこゝろ人にとけけり
さくら花おられし宿は春もなし
あひみるうちもこゝろくるしさ

さかりなる花はうつろふはしめにて
とはりしらぬ人のはかなさ
おれは花うつろひやすくなる物を
なひく柳のいとみたすそら
露たにものこれる枝に花落て
深山にむかふはるのおもかけ
ふるさとの庭に花おち鳥なきて
日かけ露けくかすむ木の本
春さくもたゝあさかほの花なれや
うきはつくさん靑のはもなし
はなにきく朝のあらしよるの雨
水のをときこえて深きよしの山
川なみいつらはなのしら雪
野はらをゆけは雪そ打ちる
草むらに木末わかれし花咲て
さゝかにのいと引みたす故郷に
ちりにしはなのかゝるあさちふ
みはてしのちも猶そこひしき
靑葉にももしやのこれる春の花
苔の鳥居やすきのむら立
あをけなる花に檜皮の軒みえて

今は花なきさともあらしな
かせふけはよもにちり行山さくら
かこつもなにのゆへとしられす
花をふく風にこゝろはあらまほし
いはゝやものをかせのをとつれ
人ならぬはなのきぬ〳〵とめかねて
あるゝ住かにかへるあはれさ
さく花にかくれし軒は春くれて
とふそ實のなさけなりける
人をまつやとに花ちり春くれて
しける木すゑに露そ殘れる
うくひすもなきてや花にわかるらん
つらかりけるは今のうれしさ
待わひし花を世になき折にきて
月も三月もうつりこそゆけ
かへすともみえぬあらをた水澄て
今年もはるのすくるほとなさ
わかなつむ野へに菫を又つみて
かさしのはなをちらせぬはうし
夕まくれ春の山さと門さして
舟をうかふるはるの木のもと

つき鳥にやまふきにほひ藤咲て
けふこのやとにやすらひやせん
とゝまらぬならいなりともおしめ春

夏連歌

こゝろもいまやきよくなるらん
きちやうまてみなあたらしきころもかへ
おもかけのおなし姿をあらはして
卯の花やまにありあけの月
さてもいつよりさみたれの空
いにしへもかくやまたれしほとゝきす
さりとては又おく山のかけ
うち解てなかぬみやこのほとゝきす
待てこゝろをつくす川ふね
月ふくるよとのわたりのほとゝきす
たへてまちぬる道はつきせす
ほとときすいく言葉にかゝるらん
とはぬこそうとむ心のはしめなれ
山ほとゝきすいほりわするな
卯月のあめのゝらの五月雨
あふひ草あやめの水に色かれて
すゝしきいろに水そをとする

小山田のさなへのすゑ葉風立て
　いつる戸ほその夏の夕かせ
袖のうへに軒のあやめの露落て
　ひはたの軒はきらめきにけり
月かけにぬるゝいろなるあやめ草
　待あかしてはまちくらしつゝ
さみたれにみはや月かけ日の光
　野への草木葉ほのかにあらはれて
澤水たまるさみたれのころ
　古川にみさりしいしのさし出て
きしくつれゆくさみたれのころ
　みれはこすゑに舟そよりくる
五月雨の古川柳水こえて
　淺茅生のかけにうつらの伏かとよ
みきりさひしくのこるたちはな
　きしの眞砂そたかくなりぬる
竹の子やまつ土くれをうかつらん
　すゝみに人のいつる道のへ
蚊やりたく草の戸ほそをおし明て
　涼しきいろは何にあるらん
かやりたくそともにしつかまとゐして
　こまかにさはく風は竹のは
軒ちかき蚊の聲〳〵に日は暮て
　さは邊の草そかけたかくなる
一つゝやとりをいてゝとふ螢
　人めしのふそ軒にみたるゝ
袖ちかき窓にほたるのいりかねて
　これみよとてやともす螢火
夏くさのかけにしられぬ花さきて
　いくむら竹のしけり行やと
夏をたゝ月みるよはのうらみにて
　五月雨はゝれて幾かに成ぬらん
空にさやけきみな月のかけ
　空すさましき稻妻のかけ
夕立をもよほす雲に神なりて
　旅の間にさてもことしや暮ぬらん
さむきはかりのなつの太山ち
　ころもをやつす松の夕風
夏はたゝ木のね岩ねにおきふして
　人はかけせす夕日さすなり
ぬるみ行かた山清水くみ捨て
　きゝそへはやなはつ鴈の聲

おもはすも夏のに秋の花をみて

秋連歌

うかるへきをそとはりとしる
夕露の古都に秋たちて
　雨そゝく野は行人もなし
露に猶こゝろのとまる小萩はら
　うきもたゝ心つからの秋のくれ
きく人にふくおきのうは風
　何ゆへに月は涙をたつぬらん
しけき草木の露の夕暮
　朝ほらけ雨こまかにて風もなし
露をつらぬるさゝかにのいと
　うへしにあらぬ松むしのこゑ
道たえて露けき小田のむら薄
　暮いかならんきりのをくらの
朝露にぬれて色こき花すゝき
　草のそこなる露そすくなき
色かはるのへに二葉の松みえて
　いろかはりゆく野への秋風
花のさく千草のするの小松原
　こゝろもさそな秋のたなはた

あかつきの川風しろく霧たちて
　うちつゝきつゝわたるかりかね
鷺の飛みねのあさきり末晴て
　野分のあとの野へのあはれさ
朝ほらけ薄霧わたり日の出て
　木かくれてゆく秋の山水
夕霧に駒うち渡す一はし
　くれゆく水に月かすかなり
河霧にむかひのふもと鐘なりて
　ひとり老せぬいにしへの月
水のえや浦島風に霧はれて
　をくれ先たつ雁の聲〳〵
末の露もとあらの小萩うつろひて
　めをとちてみるにも文字やうかふらん
むかふ朝日にわたるかりかね
　とを山の端の秋のさひしさ
天津風おきこくふねの綱引て
　水すさましくくるゝさはのへ
たつ鴫に我もおとろく草かくれ
　かへりかねたるあきのかり人
くるゝ野にをしかの聲を又きゝて

風のをとよりすさましき山
さをしかの嶺の篠原そよきゝて
野はらのすゑに月そかたふく
山もとの薄霧かくれ鹿なきて
聲はたかはす秋のゆふくれ
吹笛ををしかや妻とおもふらん
あはせ捨たる草のには鳥
鷹をつけのゝ庭の夢さめて
秋かせの舟路のすゑや山ならん
おもはぬうらのさをしかの聲
みたれあひたる露の草むら
松むしにすゝの聲をもふりそへて
月ほのかなる夕くれの庭
鳴むしの音もむら薄かせ吹て
命のうちにみやこならはや
遠野にえらふ松むし籠にいれて
かくれあらはれとをき山の端
秋の日のおつるや月をさそふらん
霧にかけしく松の下水
太山ちや行すゑくらく月いてゝ
ふもとはさらにかすむともなし

唐島やうみより出る夜はの月
こゝかしこやすらふ舟にさよ更て
たくひもなに波すみの江の月
いつみにや秋もこほりを結ふらん
篠田のもりの木のまもる月
をしなへてよもつらからし夕ま暮
むらさめかゝるやまのはの月
夜に峯のしけきあかつき
清瀧や月の川波岩こえて
いくたひ苔のしたをとふらん
水ゆけは巖をくゝる月のかけ
おこなふはよるもしきひの葉をつみて
すゝくか水に月そさやけき
秋風をしはの庵のあるしにて
とふ人なれやゆふくれの月
草をたのめる松むしのこゑ
月しろき眞砂の庭の更るよに
人はかけせぬふる宮のうち
はる〱とおろすしとみに月更て
深き霧には風もをよはし
月にたか秋のあふきをあけつらん

時しるもみ山はつ霜の聲
さやかなる月のしら雪秋ならて
へたつれと恨も今はのこらぬに
雲こそ月をさやかにもなせ
おもへは露のやとりなりけり
霜にみる色すさましき野への月
あまたの圓のぬしに成へく
天地も月のひかりはひとつにて
あひみつる名残にしはしなくさみて
空にきゆれはおもかけの月
秋にこゝろのさそはれやせん
入山をわれにをしへよ夜はの月
難面も又つれなきやうらむらん
松の葉さはるありあけの月
夜の闇にも清瀬やかはるみなの川
月そつもりてありあけのかけ
月のゝち窓をそのまゝをしひらき
朝日をまつや秋さむき宿
ぬれてや露に人かへるらん
秋さむみ淺茅かやとの夕ま暮
さひしやをちの山たもる聲

秋さむきさとのかた原氷おちて
日もくれなゐのうす雪のいろ
秋ふかき廣野のするにふしをみて
きりにあけゆくしかのからさき
あきのよのなからの山に鐘なりて
露としもとのせむろころもて
枕よりあとより秋の風ふきて
をしかの聲をあはれとそきく〔[illegible]〕
秋かせに衣かたしきひとりゐて
ありつる夢のするをこそみれ
なかきよは又あかつきにまとろみて
身にしられけり木のはちる秋
なかき夜と老のなけきしれ覺して
月すみわたる古郷のいけ
秋の風はすの枯葉にをと更て
露うちはらふをしの一こゑ
古郷は池に淺茅のいろ付て
なきあとにかへりもやらぬ秋の暮
とてふはいつらたをるしらきく
波にほのめく月の夕かけ
露しろき門田のいなは風たちて

やかてそ人のあきかせの音
打なひく稲はきのふのさなへにて
鹿の聲まつ山のしつけさ
かりのこすわさ田や霜になひくらん
稲妻のてらすにあたの世をしりて
つくりみかくもあきの田の庵
を川もるしつや隙なかるらん
引捨し草のいほりの露ふかし
野へのすかたにふれる露霜
うへをきし庭の秋草うらかれて
わくる野かみは秋風そふく
雨にきるみのゝ中山色付て
住なれし山ともみえす秋のきて
錦をかくるみねのもみちは
苔におちたる秋の山風
もみちはの青かなかにましはりて
山かせあらき川つらのさと
世はいとゝうちの渡りの秋更て
まくらかる眞葛か原に秋更て
しくれは松に露はたもとに

冬連歌

時雨のあめをはらふあさかせ
色かへぬ竹のよのまに冬のきて
きえてもなひく雲はうらめし
山さとはよそにふらぬを打しくれ
ゆくや誰なる山てらのみち
風ませにしくるゝ木陰笠さして
霜よの月をたれかみるらん
木葉ふむ音更渡る道のへに
心ほそきは露のあきかせ
ほろ〳〵と木葉うちちる山さとに
人もこぬ柴のたな橋うつもれて
片山さとに木からしそふく
あるかなきかのみねのはつ雪
かけろふのいはかき水はをとさえて
結ひすてたる氷のたえ〳〵
冬はまたあさかのぬまのあさ氷
雪ふみわくるをのゝ山もと
氷てやなを音なしの瀧の水
こゝろしらるゝ歌の一ふし
寒き江のあしの枯葉に風をみて
ふりにしまゝの文の一ふて

莢さゝにまた朝霜の落やらて
　鴨かねきむみこほる澤水
風わたるつゝみの柳冬かれて
　小松につゝく道ちのすゑ
冬枯の野へのかや原むら／＼に
　夜はのあらしそあけてしつまる
玉くしけ二見の月に浦さえて
　二夜あひみしのちの夕くれ
けふをかきりの春とこそなれ
冬はなと名のある月のなかるらん
冬なから日の長閑なる折ありて
　霜のふるかとおもふあけかた
またれにし雪ほのかなる庭の面
　野山をしなみ夏はきにけり(マヽ)
雪はけさかのこまたらにふり初て
　たゝく戸細をあけぬくやしさ
けさそみる風さむかりし夜はの雪
　けふりにつゝくをちこちのさと
山もとの木末むら／＼雪はれて
　山きはにをのれ／＼の家みえて
雪のあしたの木々のむらたち

うちかこみつゝ冬こもるやと
みわたせはよもの高根に雪ふりて
　また二月はあらしふくなり(コ)
かきくらし伊駒の山すふる雪に
　となりとなるも程とをき山
雪に今朝みわたす淺間ふしの嶽
　かゝみのうへになみたおちけり
しろたへの雪の山のは隈なきて
　常よりもなをくるしきはかへさにて
おへるたきゝにつもるしら雪
　山にてもなを身をそ侘ぬる
雪の日はちかき眞柴をとりかねて
　山さとや後の春までおもふらん
たきゝつみをき冬こもる人
　しられしの心を今や忘るらん
人なきかりはとりのなくこゑ
　鹿の聲こそかさなりにけれ
ひとりなくあはちのせとの夕千鳥
　ますけの枯葉夕かせそふく
千鳥なく曾我の川原に月寒て
　磯にゐるまにしほや引らん

水鳥の高岩ほのうへにゐて
我としの數をいくつといひかねて
また冬なからはるのくるころ
まれにとゝろく冬のなる神
稲妻のひかりのうちに年くれて

戀連歌

野は春なから袖の露けさ
若草のはつかにみしをおもひにて
おもへはつらき戀ちなりけり
しのはすは月のひかりをいとはめや
こゝろのおくをいつかしらせん
おもひあまりほの〳〵人にいひいてゝ
かゝるおもひそやすむ間もなき
忍ふ身はつらつえつくもさはりにて
しる人もかなふかきよの月
高砂の松そてしほる秋風に
面難さのかきりみぬ世にはてやせん
岩ねにおふるまつとつけはや
名のるもかなしたそかれの空
松むしにこゝろのほとやしらるらん
人まつこゝろつけもやらはや

物おもふよはに門さすをともうし
またみぬさきにむねさはくなり
待人のさはりしらるゝ文のきて
又うらむへき中としもなし
とはゝたゝ過にしつらさうち捨よ
命をはこゝろのなきもおもふらん
こひよはる身をさすかとふくれ
あかつきおきにまたなれぬ比
わかれてふことなきかせそ新枕
みぬ人をおもふこそ猶床しけれ
あふよにくらき閨のともし火
くるかとおもふむねそくるしき
まれに逢夜はそむかへのなくもかな
けにあはれなり鳥のなく聲
よそにきくわかれを今夜身にかけて
おつるなみたをいかにまかへん
むは玉のよもしろたへのきぬ〳〵に
契をく暮とはなきに立出て
又ひかへぬるきぬ〳〵のそて
わかれし人そやかて戀しき
命あらはとはかりすゑを契るみに

こほりもうすきありあけの月
わかれちに駒のあしをと聞もうし
打なかめつゝなかぬ日はなし
わかれちに書をく文も名残にて
忘かたみになれる一ふて
かり初のとたえをなかき別にて
へたてゝ戀し古鄕のそら
わかれつるきにゝ心もそれならて
たゝ人ゆへのゝちの世もうし
さま〳〵にいかなる名をかいひたてん
有明の月をはてまてそみる
はつ秋と契し人に立らかれ
いつのゆふへかまたもたのまん
我哀つれなき人にならはゝや
とむるにとまる人ならはこそ
我いのちきえぬかうちに問ひもこよ
はては身の物思ふとやしられまし
つれなき中にこゝろよはるな
かたちには似ぬこゝろなりけり
たをやかにうへはみゆれとつれなくて
夢にも人のこひしさそます

面かけは身にそふ物のなくさまて
よそのかへさに人やきぬらん
みたれたる夜はの黑かみ打かほり
人につらさをのこすあき風
草木にはこほるゝ物をそての露
あまの衣そまたかへもなき
しほれたるたもとをよるはかたしきて
わかいつはらぬ程をあはれめ
袖にのみ淚の玉の枝をりて
みちいつちともみえぬ雪の日
こゝろのみ人にかよふはかひもなし
新玉つさはうちもをかれす
しはし先こゝろみんとやかへすらん
猶戀しさそゐぬにまされる
立なからかへる夕はなくさまて
ふりにし人そみるはかりなる
とはをもかはさて覺る夜の夢
心のなきもあはれをやしる
夢のうちにおほえすぬるゝ夜はの袖
ひとりなみたにむかふ夕暮
うらみしよ月のしるへき思ひかは

おもかけもとまらぬ庭にむしなきて
かたみかほなるよもきふの月
人もをとせぬ夜をやあかさん
あひみつる去年を戀つゝ月にゐて
たれにきけとか鐘ひゝくらん
ふたりねし床はむかしの手枕に
おもかけとめよあけほのゝ雲
かたみとはむなしき空もなる物を
かり初のえにしを末の契にて
あし分を舟ちきりにそうき
露もなみたもたれをうらみん
心よりねをさすものそおもひ草
こゝろに隙もなみのうき鳥
生田川幾度人をうらむらん
迷ふこゝろはうつの山こえ
するかなる田子のうらみを身にかけて
雪にけふりのともしくそたつ
末の世や人のおもひもあさま山
帶こそかたみやとやたつねん
石川の水のたゆへき契りかは
とたえんかたもなみたおちけり

彥ほしもとしの渡りはたえぬ世に
とにかくにおさへかたきは涙にて
戀ちの上のあきの夕くれ
なれし月さへうとくなるころ
人は今よもきか庭に秋更て
かたれはなかき夜も更にけり
我中はふしのしけ糸くり返し
夜ふくるまてにかたりこそすれ
とふ人はむなしき階の雨の音
うつみ火きえて更るよの床
人はこて螢はかりの影もうし
鐘きくまてはたのむいつはり
鳥かねになみたの衣かたしきて
聞てのみなみたをおとす法の庭
うききの龜に似たるわか中
とても戀ちをあらはしそせん
のちの世のかゝみにふたりむかはゝや
うきもつらきも中にこそあれ
やる文をひらかてなとかかへすらん
こひしきかたのたよりこそあれ
それならぬ文は手に取かひもなし

忍ふよそめにむれそふたかる
ふところにまきあへぬ文を引入て
　ひつしのあゆみとゝまりもせす
問ゆかんあすはれぬよのかのえさる
　なみたはかなく雨とこそなれ
むれにたく火は消ぬへき物ならて
　人はみな花に心のうつろひて
まとすくなきとのはゝうし
　さためのなきはこゝろなりけり
引かれてや身もあた人になりぬらん
　衣〳〵になる空そ悲しき
きみ待とたゝすむまゝの明かたに
　かたるをきけはおほき言のは
我ならぬ人には人のうちとけて
　つれなき人を待てこそみめ
とけやすき心はすゑもとをらめや
　たりぬへき事をしさのみ思ふなよ
かたちもよしやこゝろなりけり
　かくても人のたつねもやせん
絶はつる中とてよそにうつらめや
　水のきよきをこゝろ共かな

わかるれはつかはぬをしを人もみよ
　をよはぬ人をみるめからはや
かひなきは程につけたるよすかにて
　さすかゆかりも慕し柴の戸
おもはすといふこそよそめはかりなれ
　さらはつてをもなとかきかせぬ
うき住ゐ侘にとふにおとろきて
　なきあとゝはん日そちかくなる
こひにわかよはりはつるをまたしらて
　いつの夕かまたもあひみん
哀とも今はの時をとはゝとへ

雜連歌

　時のうつるや水にしるらん
花うかひ紅葉なかるゝ龍田川
　みちのくの忍ふはかりは何かせん
たつねてみはやちかのしほかま
　みれは夕日にうかふつり舟
難波江やあしふく小屋を立出て
　たゝ時の間にかはるうみつら
鹽みては汀の松をおきにみて
　うへにかすめるまつの一もと

鐘ひゝくをちの山もと鹽みえて
　海にいり日のかけのゝとけさ
鐘ひゝくをちの家居のうす煙
　又越る山のかけちのくるしきに
うみを見つゝもやすむ松のね
　忘めやなにはの夕朝ほらけ
なとまよふらんあまのつり舟
　こゝろほそきは旅の夕暮
浦とをくもしほのけふり打なひき
　おもひてもなきためし成けり
もしほたれ侘にし浦に今住て
　待人いつら月はいてけり
あかしかたあまのみすめる家〳〵に
　かり初にかよふもあまの舟さして
家ひとつつゝみゆるしま〳〵
　いつるとみれはかへるつり舟
興中の小嶋にあまの家ありて
　住世に水の哀をそしる
川嶋やせはき内にも巣ありて
　なかめやらるゝ浦のとを山
あしのやは戸ほそとつるも闇からて
　冬しらて立陰青き一松
春秋さむしあら磯のやま
　霜うちそよき篠そかれそふ
谷あひのなかれに細き橋みえて
　かすむはかりのいにしへの跡
いつのちりつもりて山と成ぬらん
　衣うつ音こそ一ふたつなれ
ふもとの雲にくるゝあまひこ
　あと先に笠のはならへ行つれて
山路のあめに杣木引人
　山かけは人も音せす静にて
尾上の杣木雲や引らむ
　入はすゝしき山もとのさと
さやかなる尾上の松の夕日影
　月かけのおしきは馬のひつめにて
あかれるちりに空そくもれる
　笠のはしけくみゆる海きは
まつはらに行人かくれあらはれて
　鐘をしるへの夕くれの道
馬草かる鎌の音して深き野に
　くさのいほりはかきりしられす

夜の雨はるゝときけは又ふりて
　水うちけふり雪は晴けり
竹なひく田中のこいへ數みえて
　よへとこたへぬをちの川舟
かせのをと波の聲にやまかふらん
　蓮の立はそみるも涼しき
みとりなる水の淺みに鷺おりて
　江をとをみ雪をすかたの春の山
しほひのとかに鷺の飛くれ
　あはれにみゆるさま〳〵のわさ
籠のうちのとりの出へき道とめて
　なくさめくさも便ならすや
野かひにとやせたる駒を引出て
　舟のよるへに人そあつまる
引あみのなみにやおもく成ぬらん
　秋の入江に小舟さす人
うらかれのすか蓑一身にかけて
　うみ山めくるすゑも定めす
哀にも釣のいとまに木をこりて
　たとりしみちのとをき谷川
梯を眞柴こりつむ隙にみて
　いつをこゝろの隙になすらん
山かつはね覺にあすの木をこりて
　一日〳〵の霜雪のみち
とりためぬ爪木の山に又いてゝ
　世にあはれなる契りなりけり
薪とりはたやくしつか草の庵
　夕まくれ渡りかねたる一はし
市人むれてかへる山もと
　さすかにかれぬ二道のすゑ
を車のわたちの草葉打しほれ
　めくるひかりそとをくかすめる
松ともすよるのを車音深て
　心とめつゝすましよの中
かりにこそむかしもくたれ天津人
　數あまたみえぬ庵りの古殘り
世をうち山のたかきことのは
　みちある世にそ人は出ける
えらふにはふりぬる歌もあらはれて
　後世までもたのみこそをけ
是もまた法のほかゝは大和歌
　はらにきていかなる玉のやとるらん

みかきいたせる人のことの葉
　かたみともなることのはのすゑ
書捨るふてのあとをもこゝろせよ
　かゝみに雪をみるもはつかし
あつむへき窓には文のすくなくて
　こしかたの何を心にのこさまし
庭のをしへにうきわすれ草
　くたるそとをきあまの羽衣
ふくふえの月に聲すむ夜は更て
　人のをしへそちからとはなる
いときなくおもひみたれ碁（チイ）うち侘て
　世にはこゝろをいかゝとめまし
うつし繪にかたちかはらぬ人をみて
　こゝろのなきそこゝろありける
のむさけの醉のまくらに目は覺て
　花もいろにやいてん岩かね
苔むしろなみゐて人ののむ酒に
　あらはせは言にのこる罪もなし
とりの聲しる人のかしこさ
　しる人おほき市のかへるさ
哀にもいやしき里に住馴て
　いかはかり木をこる山のうかるらん
けふりともしきをちかたのさと
　こてふに似たる身をそなくさむ
古郷はさらに野はらの花にねて
　荻の葉にきけは雲吹秋の風
みやまに似たるつゆのふるさと
　むら／＼みゆる住ゐさひしも
とゝまるや古きみやこをしたふらん
　秋をしめつる
古宮のせんさいみたれ人もなし
　今更にたか宿をかはたのまゝし
住こそはてぬふるみやのうち
　むかしをは吹もかへさぬ秋風に
椎の葉さひしうちの古宮
　車入へき門そ久しき
住宿もさひたるしやうを明やらて
　たかへてたゝく門のかへるさ
九重は似たる宿ゐのかす／＼に
　みやこはるかにすめるおく山
たちいてゝうちなかむれは雲霞
　一むら雨をとをすやまかけ

はかなくもを篠を軒にかりふきて
　いつる戸ほそに袖をこそとれ
山さとはむくらからたち枝しけみ
　ほそくなりゆく月かけはうし
やま水の軒のかけひにつたひきて
　あまは隙なく波になれけり
あしのやの軒はの山に瀧落て
　中〳〵安きわか身なりけり
ふたりともすまぬ庵りのおきふしに
　とはれしの夕の雨に我出て
ひとり門さすやまかけの庵
山かけのさとは庭さへ廣からて
　ほしやわふらんしつか青柴
なれにし人をおもふ秋の夜
まれにきく話もつらきおく山に
　おほつかなきは老のたらちね
音信もたえたる嶺をやとりにて
　しのふる門はたゝかれもせす
我ありとたれもおもはぬ山のおく
　かろきしはをもはこひかねけり
きのふけふ山さと住の世すて人

　このまゝならはさていかゝせん
住そむるこゝろ悲しき柴の庵
　うき世のかせのいつかさそはん
山ふかく住とてこゝろゆるすなよ
　やまかつのまへ渡りする柴の庵
窓のしたゆく谷川の水
　さてうき事はいく度のみそ
おり〳〵のなくさみおほき山の奥
　うたてわか心みしかくうらみきて
はては友なるやまのまつ風
　とふ人のなこり悲しき山里に
ゆふくれふかきみねのまつかせ
　朽はては何かみやこの我ならん
人の中にもむすへかくれか
　こりもせて又夕暮を待やせん
人のたきゝをたのむかくれ家
　いにしへのおもひなそへそきり〳〵す
露をも世をもはらふ草の戸
　こすともよしやしはしとゝまれ
谷こしにゆく人かたる嶺の庵
　たちよるかたもやま下の道

雨よりも岩の雫に袖ぬれて
　わけゆく野への跡をこそみれ
はけしくて面をむけぬ山風に
　かへりみるあとの山端月入ぬ
宮こもつれていつるおもかけ
　やかてあらしのをとそきこゆる
今日こそは都出ぬるはしめなれ
　古歌はかなしき折の便にて
かへるなみにもたのむわかれち
　めくりあはしとおもひこそすれ
國とをくたひたつ人に袖ぬれて
　人はかへらす古郷のそら
送しやそのまゝ旅に出ぬらん
　草葉の露の白妙の色
行袖のおもかけとをく野は枯て
　そてにそはらふ山のしら雪
やとるへき野中の門にさし入て
　行人をやかてそ戀る旅の道
をしへし山にふみ通ふくれ
　嶺にまきれす松はたちけり
太山ちや名もしらぬ木の陰分て
　野となるよりや鳥もねぬなり
山〱を越はてぬれはくるゝ日に
　むかふもかなし雲かへるやま
とりたにも宿ある物を旅の暮
　かりそめにゆく道もはるけし
飛鳥のうらやましきは旅の空
　わかかたをとふ人になさはや
名のみしてかひなき物そ都鳥
　ほりえこくを舟靜にさよ更て
こひしやみやことりもなかなん
　古郷を草葉の露や荒らん
旅ねのやまのあきの初風
　戀しさのみのまさるふるさと
草まくら夕の露に風たちて
　おもふとかなふも夢の內なれや
草のまくらにこふるふるさと
　夢のなこりになみた落つゝ
かくてしも明されけるよ草まくら
　里もありけり村も有けり
哀にも廣野はらにかりねして
　おもふもくるし冬の山こえ

秋ははやすゑ野にむすふ草まくら
　かすむすゑ野のとりの一聲
明る夜を草のまくらの命にて
　すみた河原に鳥もむつまし
あくる夜をまつちの山のかり枕
　打霞む難波の里にかりねして
夢にさはらぬはるのうらなみ
　行もゆかれぬ道そかなしき
かりまくらたのむいほりはもる雨に
　いかにせんやるかたもなき秋の暮
わかいほ一たのむたひゝと
　さはりなき道をはよるも猶行て
雲引月に旅ねする山
　なかるゝ水の音のさむけさ
そことなく曉月に宿いてゝ
　おもかけむかふよこ雲の空
有明にそゝろさむくも宿出て
　はる〳〵ゆけは野へそしつけき
やと出るあしたは駒の足はやみ
　とをくきにけるとのくやしさ
足をいたむやとりをけふは出もせて
　かへりみすれは山のはの月
秋の日のかたふく末の野を分て
　ゆめの跡とふ手まくらの月
秋かせやとをきみやこをはこふらん
　すくなるみちをたれもつたへよ
をくるゝはしらしな谷の一はし
　分ゆくすゑのとをき武藏野
しら川を霞の關に先越て
　おもへとつれぬ別ちはうし
松しまをみやこのつとにさそはゝや
　うつゝにまさる夢もこそあれ
はるかなるみやこに安くかへらめや
　月のつたふるなみたともかな
東路の秋に宮こを戀佗て
　袖にさて幾瀨の波をかけつらん
海まてきぬるよとの川ふね
　かせにけふりのすくならぬいろ
うきしつ（き脱歟）む舟ちは富士をみるもうし
　とをかたより神あふくなり
松たてるはまの鳥ゐを舟にみて（本ノマヽ）
　みてるかくるならひとそきく

あら鹽に古き舟はた心せよ
　ゆかりやたひをいひ出すらん
けふは又みやこわかれし其日にて
　たひのおもひを忘れこそすれ
宮こ人その一筆も書たえて
　やかてしほるゝ旅のころもて
ひらくより物あはれなる文をみて
　なしときゝしそなからへにける
國とをきつては誠のまれなれや
　又おもひたつ旅の悲しさ
かへりても心とまらぬ古郷に
　いつくにも住へきかたやなかるらん
うきふるさとにかへる旅人
　わすれはかなしわか忍ふ草
はかなくも又かへりみる露の宿
　あかつきちかくね覺するころ
いとなみにさはく家／＼哀にて
　なく／＼いつる世そ哀なる
しのひかたき其年月を過しきて
　あつさ弓取忘たる君か世に
身を捨にしもいてつかへけり
　かへらんものかつらきよの中
はかなしや猶いにしへをしのふ人
　身もいつかはとおもふ行すゑ
めくみある人をうらやむ君かよに
　なをさりの君か言を打憑み
かすならねともつかへぬる人
　おもふほとにはさすかいはれす
君をさへいさむるは世のならひにて
　日を重年をふるとも忘めや
親のいさめし言の葉のすゑ
　つらかりし人も戀しく袖ぬれて
いさめのつへはのちにこそしれ
　花さくころは山さともなし
在増やみやこの春にわするらむ
　老のなみたは人もとかめす
すみ染になせやこの世はかり衣
　墨染の袖もかなしき夕闇暮
さまかへなんとおもひたつころ
　きくもかなしき曉の鐘
山さとをね覺はかりはかひもなし
　なみた忘るゝ苔の衣手

捨しよりなけかし物とおもふよに
　住かへはやとおもふかくれ家
おしまれぬ身は捨かぬる世中に
　すつるもうき身さていかゝせん
事しけき世には住へき物ならて
　捨る身にさへ子をそおもへる
世中にたれを憑みて泣るらん
　なをもこゝろをのこす古郷
捨る身の人にあはしも迷にて
　おもひやるには山そすみうき
すつる身にみやこの心うかふなよ
　おきのこしまに尋くる人
罪あるをおもふこゝろに身を捨て
　こゝろに夢やゝふれはつらん
立かへり在にまかする世捨人
　涼しき色は苔にこそあれ
迷ひぬる身を捨衣うらやまし
　なれつゝすめる山の松風
中〳〵に苔のころもは寒からて
　み山のさとはなを秋の暮
露ひんと何おもひけん苔ころも
　つれなしと人やみるらん我姿
こけの衣にかゝる玉のを
　はやあけかたになれる冬のよ
また一こゆるとしこそ哀なれ
　みし筆ならぬ便こそあれ
いときなき古郷人の年長て
　ひとり捨るはあちきなの身や ならひ本ノマヽ
みな人の子をおもふこそ哀なれ
　こゝろなきもや法を知らん
里の子の垂あけたるさゝれいし
　さまをかへんはさすか成けり
たらちねのあとは家さへかたみにて
　後先いまはわすれはてけり
おとゝいの内白のみあはれにて 如本
　わかるれは面影こそは形みなれ
親よりのちに憑むはらから
　袖にそかへるしかのうら波
ゆかりなき身はから崎の松にゝて
　わか身にしれる法のとのは
水のあは草の上なる露をみて
　おもへは山はこゝろありけり

うき事をきくみゝなしの世ならはや
　口すさみにそ彌陀をとなふる
さま〴〵の夢打覺て深きよに
　西になる日影に身をもおとろかて
うしやひるねのまくらする人
　をろかなる身に又やむまれん
しらさりし世もしらるゝはこの世にて
　賤のおの歎を聞もをとろかて
よそのみちにやおもふ後の世
　昨日けふこそおもひ初ぬれ
のちの世を今はの時にをとろきて
　けふりとなして跡をやはみる
人はたゝこの世はかりの物なれや
　つゐにのほらん山そ近付
けふまてはけふりを人のうへにみて
　なみたの袖そいとゝぬれそふ
雲となる名殘や空に時雨らん
　忍ふとも命のうちは逢かたし
をくれし人をのちの世やみん
　涙の水に身をやしつめむ
さのみかく歎もいかゝこけの下
　命も人のためそおしかる
我なくは誰かはとはん草の跡
　しるしの一なとなかるらん
露をのみ玉のかさしの草の原
　うらみを捨つ忍ひ行道
ありし世のとかもかくるゝ苔の下
　ちきりこめをく神そひとしき
箱崎の松かせさそな八幡山
　苔にかたふくはしの一すち
嶺たかみ岩の隙より寺みえて
　野中をゆけは鐘もきこえす
たひ人の道となる程寺ふりて
　あるにまかするすみ染の袖
檀なき野寺に草のはをつみて
　月にかさぬるあきのはつ霜
さよふかく花皿すゝく音はして
　もり入雨そ軒をかこへる
寺古ぬ露やかさりと成ぬらん
　門のまへなる馬牛の聲
夜るひるの時のかひふく古寺に
　世はこのころそ道まとふなる

また出す
うくつらき人をもおもひ捨もせて
佛もこゝろ世につくすらし
ひとつ子をさへはくゝみそえぬ
罪をもき人は佛も道ひかて
寺かとみえてともす火のかけ
里とをく佛となふる夜はふかし
又出にけり薪とる人
いく度か御法の庭をめくるらん
その二月の
とく人のとはに法の花ふりて
たらちねのいとき無より放きて
法の師にそふ人のかしこさ
こなたかなたにかすむ山寺
かたいとの逢かたきこそ御法なれ
おこなひ人そ年をかさぬる
神のちかひそけにあらたなる
祈れるや君のよはひと成ぬらん
この國は人の國よりおさまりて
いつはりになさしとのみや思ふらん
とふきしるく御代そ久しき

發句

千句連歌侍しに初春の心を
春はまた朝日いろこき霞かな
石淸水社にて正月七日
若菜つむ野も雪ならし嶺の松
木戸三川前司家にて
雨に今朝霞も靑む末野哉
東大寺正俱法師の房にて
春さむみ雲や天きる朝霞
春日社に奉ける連歌に
常葉木の時雨は春の霞かな
祇園社中千句に霞を
おくふかくみゆるかすみの外山かな
理家法印の日吉社に奉る
冬なから深雪とけゆく山ち哉
藤原國重家にて
のこれるは色さへうすし春の雪
初春の發句に
梅花二木にほしき色かかな
一重にもこめける梅の匂ひ哉
待人に立枝やかすむ宿の梅

上杉の亭にて松と梅とを題にて侍る連歌に
あひにあひぬ五葉の松に八重の梅
かた田舍にて侍し會に
梅しろく竹の葉けふる末野哉
柳
一葉つゝ又もえ出る柳かな
露むすふおもかけめくむ柳かな
相國寺藏集軒にて
みどりさへひとつ色かは春の草
比叡の東坂本にて
早川は汀にのこるこほり哉
文明八年畠山左金吾法樂とて北野の社にて千句侍しに春雨
春雨をしらする露の草木哉
春月を
春の心しらすは曇月夜かな
飛鳥井大納言家にて和歌會侍しつゐてに發句すへきよし侍しかは花を待心を
宿からや花待とをの春もなし
藤原貞秀蒲生の家にて
またれしを理花の色かゝな

公佐隆業ともなひて立田に罷て
初花に又いそかるゝさかりかな
おなし心を
咲いてゝのこるやささふ山さくら
北野社にて
咲けりといひあへぬ花の盛かな
太田備中入道千句連歌侍しに朝花を
霞ふくあらしや花の朝きよめ
春の發句に
花さきて松原うすき山邊哉
宇治山のおくなる所にて
花さけはわか庵ならぬ山もなし
兵庫助盛鄕家に罷て
袂引にほひやと葉花の陰
花の下にて
雨に又花をやとさん陰もかな
花の發句に
春をおしめさかりの花に風もなし
鳥はまつちらぬ花ふむ木すゑかな
ちらしつゝ花をやつさん風もかな
風をあらみ花ふきおつる木陰かな

文明十四年の春前十住心院心敬僧都の墓所にて百韵の連歌さたし侍しに

ちりにしも花は又さくこの世かな

三月三日海老旅宿にて

引汐はかすみをかぎり春の海

圓明法印の房月次連歌に

春をへし松のかさしや若みどり

志賀の浦にて藤を

さゝ波にたつや若枝のふちの花

南都の訓英律師の房にて

さくらちる世やわかさかり藤花

三月はかり比叡の山にて

初はなに春くれかゝる太山かな

武田大膳大夫入道家月次に

暮てゆく春はとはり花もなし

三月盡

ためしにはなさしよとまれ今日の春

四月一日平顯忠長尾家にて

せめて春へたてゝかよへ花ころも

日吉社に奉ける連歌に

花のこる卯月は後の三月かな

高倉黄門亭にて月次會に

卯花の雪けの水か庭のあめ

細川淡州亭の月次に

うのはなの雪の雫や露のえた

おなし心を

咲そむるうつきや花の夕月夜

卯花は山かけしらぬ月夜かな

うの花よいつみて雪をならふらん

新樹を

あめならてぬるゝいろなる若葉哉

しける葉におくふかけなる一木かな

木本にしける柳のすゑ葉かな

郭公を

郭公一はなさけるはつ音かな

小野景頼家にて

ちる花や聲におさめしほとゝきす

夏の發句に

またて世に聞へき聲の時鳥

まれになく音もとはりそ郭公

文明十九年四月十二日心敬僧都の十三廻に佛の御名を冠に置て百韵の連歌沙汰しけるに

夏のよの夢ち過行月日かな

五月のころ

古聲も人に初音そほとゝきす

大舘刑部家にて千句に夏草

しけらぬはみちある宿の草葉哉

新田禮部家にてあやめ

水に晴軒はにくもるあやめ哉

橘賢仲許にて同心を

軒のあめに又水こゆる菖蒲哉

千句連歌に五月雨を題にて

春秋の中川ふかき長雨かな

同心を

雨もかく空にありけるさ月かな

さみたれの眞砂の庭のたまり水

五月雨と知をこゝろのはれ間かな

吉良常陸介北野社にて連歌沙汰し侍りけるに

あめあらくなりても晴ぬさ月かな

日吉社に奉ける

一夜にもしけるか雨の朝かしは

早苗を

風あをく渡るさなへのすゑ葉かな

夏月

夏の夜は月かけ更る朝かな

人にかはりて螢を

夏のむしのひかりに秋の

藤原資直家にて

しら雲に照そふ夏の日影かな

平助正家にて

みてもまつ涼しき嶺の木陰かな

千句連歌に納涼を

水きよみ春秋冬のやとりかな

月次の連歌に荻

荻にかせやとれはやとる露もなし

露ふくかあらしの荻の朝し

同心を

荻の葉に朝霜なから風もかな

おきにとひ松にこたふる嵐かな

江田宗雅法師もとにて萩を

あひおもふ色なる萩の錦かな

水谷禪林家にて

今年生は若むらさきの小萩かな

初秋の心を

初秋は松むしの音の二葉哉
　霧を
山の端も空行霧の朝かな
朝霧にむら雨ましる山ちかな
夕霧を槇のは山の千しほかな
　専濟律師の山上の坊にて
露やほす槇のは山の朝日影
　秋の發句に
をそさくら花やくやしき初紅葉
　八月十四日の會に
明日の名に月もあらそふ光かな
　十五夜
雲霧も月にかくるゝ今夜かな
　長享二年重陽日
九のほしか今日みる菊の花
　西方行者の住ける庵にて
菊さける庭はこかねの眞砂かな
　藤原眞純家にて
にほひくるきくや川上谷の水
　九月十三夜
菊の日にいつかと待し月夜かな
名をそわくかつらや二木秋の月
　千句に野月を
空よりや月に契しのへの月
　宇治山のおく白川と云所にて
谷ふかみ月や夏の夜秋の空
　平朝景家にて
月に吹あき風ほそき雲間かな
　元用大德身罷て後人々すゝめてとふらひし連歌に
名そきえぬ露は風ふく草のかけ
　秋の發句に
山姫の染ならふいろか薄紅葉
松にふる時雨や惜き薄紅葉
ちらて今あらは一葉や初もみち
秋の風くれなゐくゝる木間かな
　春日の社にこもり侍し時
秋の色はいつくの雨そ三笠山
　海近きやとりにて紅葉を
紅葉さへありける浦のとまやかな
　細川野州亭にて千句に
秋はまた木葉まかはぬ時雨かな
　九月盡

行秋の道は時雨るゝ空もなし
東路に侍し時十月つゐたち比鹿島御社へ參けるに
祈ふし時雨打そゝき神さひ渡りたるに神つかさの
もとにて
うき雲の宮めくりする時雨かな
有間温泉鎭守は三輪明神にてましますとなん奉る
連歌に
木からしや尋ぬ杉の下紅葉
冬の發句に
なかれせく落はや便うすこほり
朝霜の草葉うこかす日影かな
和泉のさかひにて
玉あられ空さへ濱の眞砂かな
空はれてふるは軒端のあられ哉
備中守元重家にて
霜に菊又さかりなるまかき哉
伊丹兵庫助家にて
冬草の菊さき出すまかきかな
東春法印の坊にて
こほるらしあらしに殘る松の露
泰湛法橋の東山なる坊にて

山水のこほりをかくる木間かな
宇治橋寺にて
こほらめや山はあさ日のふもと川
横瀬雅樂助千句に冬月
名こそ秋ひかりは冬の月よかな
冬の發句に
山松に色をおさむる冬野かな
陰あをしけに木枯の庭の草
種やかる冬草青き松の陰
冬そとや先一しほの雪の松
□の葉にふらぬ雪みるあらし哉
金澤といふ浦にて
ひとりたつ釣人さむき入江かな
祇園社にて
ふりそひて雪にさたむるみそれ哉
ある山家にて
紅葉はに雪ちりましるみ山かな
宗悦千句興行に
時雨かは山めくりする四方の雪
谷風に雪ふりのほる高ねかな
山家にて千句に

ふりそむる雪さへふかき山ちかな
　霜月廿三夜月を待とて
月をそし光待とれ嶺の雪
　雪の發句に
薄しとて月やかさなる庭の雪
　慈鎭和尙の御影のおはします小島といふ所にて永
　玉法師すゝめ侍しに
空に月雪もさやけきあしたかな
　雪の發句に
雪はれて遠山さえる軒端かな
ちりそなき雪や千鄕の水鏡
　武田安房守家にて
冬の日をふりつく雪の光かな
　慈惠大師に奉る連歌に
山たかみ雪も八重たつ雲ゐかな
　殘鴈と云題にて
聲ちかしつはさや雪の天津かり
　歳暮に寒梅を
一花を冬さくむめのさかりかな
こゝろとめてみれは梅さく冬野かな
行年もこゝろやのこす梅のはな

園塵第二

春部

　初春の發句に
花もみちこむるや木々の朝霞
山本のかすみにならふ木すゑかな
　正月五日北野の會所にて會はしめ侍しに
けふひらく梅は千年のかさしかな
　有ところにての會に
にほへ梅のちはあまたの春の花
雪にのみ春なしらせそむめの花
　若菜の發句に
雪をつむいろなる澤のねせり哉
　赤澤兵庫助家にて
若草に花もおもはし春の庭
　人にかはりて
吳竹に鶯なひくまかきかな
　石清水法樂千句二月初卯日
色薄しかすみもゆるせ夕月夜
　獨吟連歌に
月ならし霞のにほふ夜はの空
　細川房州亭月次會に

おしまぬは花待春の日數かな

花の發句に

咲まて花にはちきれ春の雨

櫻さく春は色なき草木かな

一花やふもとの塵の山さくら

世に一木さかは都や花の陰

山さくらうす紅のつほみかな

朝とにすくなき花のつほみ哉

まかへたゝ雲も遠山さくらはな

糸櫻有ける家にて

さくころや空にもあそふいとさくら

細川右京兆亭千句二月廿五日

青柳にふかすはさむし春のかせ

獨吟連歌に

ゐる鳥のしたりおそふる柳かな

千句の發句に夕花といふ題にて

しろたへを花にまかせぬ夕かな

横川にて

春寒みはなもおくあるみ山かな

千句連歌に花盛と云事を

待おしむ年や我世春のはな

花さかり落葉にかへる梢かな

落花を

花そちるかゝらんとての色かゝな

うつろふか花に色つくあさ霞

防州に清水と云山寺の花見に罷て

花に瀧この清水の山おろし

人發句してをこすへきよし申侍しに遣す

春風のふかすははなや雪の枝

大内左京兆亭にて

花をねにをしふる聲の春の鳫

月次會に

花にぬる鳥やこゝろのあひやとり

法泉寺の花の本にて

下水は花もめつへき鏡かな

有所にて

かさしくる柳ははなの山路かな

千代菊丸すゝめて連歌し侍しに

散よりもおしきは花のさかり哉

暮春に比叡山にて

みやこには青葉花まつみ山かな

おなしころ

花の跡にみれはこそあれ若葉かな

三月三日

紅の雪のそのふのもゝのはな

暮春の心を

今幾か有明のこせあさかすみ

行春に花もなしとやをそ櫻

三月盡日雨のふりけるに

人ならは雨とやいはん今日の春

付句

かすみをよする田子の浦波
清みかた咲ともいはす年こえて
今朝よりの道は一のゆくゑにて
いく國〳〵にはるのきぬらん
山ちもかせのゝとかなるころ
春きぬと岩たのをのゝあさ霞
帯引すてゝかりそわかるゝ
雪や今山のこしちもとけぬらん
山の半にかすむ一すち
瀧のいと春の氷のくり初て
いほりならふる遠の山もと
立こめし軒端のかすみ風ふきて
たえ〳〵の道をや霜のうつむらん
ひとりのむらにさむき梅かゝ
み渡せは冬のけしきの寒き野に
をちこち人のわかなつむ袖
すゑよりぬるむ山川の水
青やかに石間の小草萠初て
のほるかすみのなひく夕山
春雨のあとに夕日の又出て
柳むら〳〵くるゝやまさと
つはめなく軒の春雨靜にて
花にあさ日のにほひそふかせ
みとりなる春の遠山まゆに似て
尋ぬれと花の山かつ物いはて
寢にけるとにはるの明ほの
こゝろの花よいつまての春
空寒み遠山さくら待わひて
世にひかれてや梅にほふらん
子日せし小松かはらに花さきて
櫻さくなるかつらきの山
朝かすみたつたや花に成ぬらん
朽木の松もみとりにそたつ

世は花のほのめく色にさそはれて
こゝろのまゝにをくるふる寺
さくはなの秋のはやしは風もなし
いとふこゝろやあめ風の空
峰おほひ谷めくる陰に花咲て
面影はわかれもしらす身にそひて
たゝ木のもとそ花のうつり香
いやしき身とておもひ捨めや
立そよる人をいとはぬはなの陰
みれは木をうる人もありけり
嶺たかき花とてなとかとはさらん
なをくちのこるさくら木のかけ
み山ちはこその落葉を花にみて
今きて住は世の外の山
とし〳〵に花によしのゝおくをみて
しはしとて立よる宿の木隠に
今日まていくかはなになれけん
峯には月のおほろなるかけ
明ほのゝ花のおくより鐘なりて
山本の杉のむら立雲おりて
ところ〳〵のあけほのゝはな

きのふの雲となるちきりかは
かりねせし遠山さくら跡にみて
くるゝかすみに月をいつみん
のこれ猶はなの木末の入日かけ
若はの木々に雨そゝくころ
人かへる花の山かけ日はくれて
春はこゝろそあらす成ゆく
惜へき花をかさしに我おりて
つく〳〵しれは人もうからす
折のこす花にも春の風ふきて
いり日のよはくかすむ夕かけ
たをやめのかさしの袖に花落て
おほえす袖に露そこほるゝ
それとなき哀を花やすゝむらん
むかしはとゝへとも更に物いはて
なみたに似たるはなのゆふ露
かゝる世に又たれをたのまん
草の戸に一木の花を友なひて
かよひなれても道そ露けき
古郷の花はよもきか木末にて
又たちかへるすまの浦波

朽はつる跡に若木のさくら花
　さ夜ふく風はきかしとやする
花はたゝゆふへの雨を限にて
　若葉はさらになよ竹の陰
今朝みれは夜なかき雨に花もなし
　うらむるをたにさそいとふらん
花をわか心まかせのはるのかせ
　匂へともかたみの帶はかひもなし
花ちりとまるいし川の水
　たゝ大かたの水のうたかた
なかれては花の色なきよし野河
　夢をやうつゝ現をやゆめ
散まよふ花の手まくらあくる夜に
　もとのみちにやまよひ行らん
風ふけはちりし梢に花をみて
　はてはいかなるつらさをか見ん
あらしにも猶のこりけるさくら花
　植をきて陰にと憑む軒の松
かと家さくらあらしふくらん
　夜のまの雪やさそつもるらん
嵐ふくはなの朝戸を出てみよ
　かそふるほとのいりあひの鐘
ひとつつゝ靜に花のちるをみて
　山とをく雲をはらへは日も暮て
さくらにもろきいり會の鐘
　かへさやまよふ夜も深きみち
花ちれはかたみの月もおほろにて
　しのふたもとそなみた落そふ
淺茅原かたみの花に風吹て
　うらむる程そいひ盡しつる
今はゝやかせさへ戀し花の跡
　立わかれたる半天の雲
花ちれは鳥のねくらもさたまらて
　軒に苔むすおく山の庵
とりの鳴木陰の庭に花落て
　みし人もなくなるそ悲しき
雨そゝく青葉の花の夕まくれ
　むかしかたりになみた落けり
昨日みし花も青葉の朝あらし
　いかにとも人のとひこん暮ならて
はなは青葉のかけの山さと
　猶ふかく住へかりける山のおく

くれゆく春に花をみましや
うくひすつくるよこ雲の空
霞よりはつか餘の月いてゝ
みまくほしきはみよし野の花
きかはたゝ霞む初瀬の鐘の聲
おもふこゝろは春もへたてす
かすめとも古すに落る夕ひはり
心からおもひなさるゝ春の空
我やはよふこ鳥のなくころ
たゝ大かたにおもふはるかは
百千度なくや太山のよふこ鳥
橘の香もなつかしく里古て
うへしやおもひゐての山吹

夏部

首夏の發句に
昨日みし木間消行若葉かな
千句連歌に
待こゝろしらは千聲そ郭公
四方にちれ聲も花ある時鳥
仁木兵部大輔亭にて
今朝そとふ有明いつれほとゝきす

蒲生刑部大輔家にて時鳥を題にて千句連歌侍し十番に
一年の後や古聲ほとゝきす
光勝院にて五月の比
郭公いつを五月の初音かな
おなし心を
郷なれよいまは五月の時鳥
阿州里のあまと云浦に留りて
やとりとへ郷のあま夜の郭公
牡丹題にて
春さかぬ花やこゝろのふかみ草
五月四日の發句に
明日はたか軒端に水のあやめ草
浦上美作守家にて千句にさなへ
うき草もねをさためたる早苗哉
おなし心を
せはき田にやとす千郷の早苗哉
細川右京兆千句連歌に
夏山のよそめはこけのみとりかな
夏山や木たちにみすは松もなし
幡磨律師許にて

夏山の木陰夜ふかきあしたかな
武庫山の麓にて會侍しに
浪寄し山やかけすむ夏の海
海邊にて
うきみるの眞砂におふる鹽干哉
藏集軒會に
ゆゑもなく光凉しきほたる哉
夏の發句に
夏の日に色こき山や雲のかけ
あきや引しほひの松の下凉み
やすらはてすゝむ茂木の山ち哉
定盛法印會に竹田
世に凉し草木にそゝく夏の雨
納凉を
色凉しこゝろやゆらく玉かしは
杉左衞門尉家にて六月晦日
凉しさにけふや千度の御秡川
畠山左金吾亭にて
凉しさや一夜をまたぬ秋のかせ

付句

別にとりのこゑなきかせそ
花みれは卯月も春のある物を
問ひすてたるを又待そする
山ふかみ茂るか中のをそさくら
卯花の雪はかきほに散はてゝ
若葉かさなる木々のしたいほ
花は昨日紅葉も明日か夏こたち
又はつ音きくやまほとゝきす
半にさむる夢もうらめし
いつよりか鳴そめつらんほとゝきす
きくも名たかき言のはの道
足引の山邊すくるほとゝきす
薄きちきりやなみた成らん
ほとゝきすせみのは山に音をそへて
宿とはんかたもおほえすふる雨に
やよほとゝきすこのさとになけ
つれなさをかこちやるへき傳もなし
ほとは雲ゐのやまほとゝきす
人をもはちし身をもおもはし
をのつからなく音まれなる郭公
おもへはひさし五月雨の比
かれぬへき軒のあやめの靑やかに

さそはれてけふや都に出ぬらん
あやめにましる水のうき草
　むかしおほえて袖そしほるゝ
見も馴ぬ姿をかさる神まつり
　いく度か待夜むなしく明ぬらん
おもふもおしきさみたれの月
　今もたゝおもへは神の世に住て
月日をこむるさみたれの空
　となりにたにもうとき山鄕
雲はたゝ軒はをうつむ五月雨に
　植し田面のはつ鴈の聲
五月雨の涼しき水におり立て
　うなはらとをくかへるつり舟
志賀の浦や波をふもとの五月雨に
　にこりなかれはくむとしもなし
はれてたにその名殘ある五月雨に
　若葉の竹になひく朝露
五月雨の名殘の日影軒もりて
　あつさ弓おもひかへさん道しらて
ともしにまよふ鹿のあはれさ
　道たえ／＼の木本のかけ

夕露に芝生のほたるあらはれて
　野はした萌そ色深なる
飛ほたるまた影薄き夕ま暮
　しらさりし衣のうらの玉をみて
いつかほたるの袖にいりけん
　やり水に似たる朝澤末遠み
みれはほたるのかゝりたくかけ
　塵なき庭の露の涼しさ
夕立の跡の山水いはこえて
　ともなふ雲も水もとまらす
ゆふ立の空より早く日はてりて
　なをかけあつく照す夏の日
夕たちのはるれは出る中宿に
　つらからん我身の後を今しらて
あきかせいそく木本のやと
　かけにおつゝも民そたのしむ
はるかなる鄕の茂木の夕涼み
　月のひかりはさやかにてよし
あつき日の空に一むら雲もなし
　雨とをき梢にかへる雲をみて
いくかてるらし夏の日のかけ

あめよりのちの夏の夜の月
岩つたふなかれ涼しく音更て
　雲にほたるの何とかるらん
涼しくも村雨はれて更るよに
　うつる折をもしらぬ奥山
月もかな岩かき水のゆふ涼み
　たよりにかこふ古寺のみち
芭蕉葉にきけはまたこぬ秋の風
　朽ぬるふねの水のさひしさ
かたしろのなかれもやらぬ秡川

秋部

慈雲院にて
初秋に花はさかりの小萩かな
　陶兵庫頭家にて
錦にも玉やはおりし萩の露
　妙法院月次會に
野へにぬる小萩やをのか草まくら
　千句連歌に
花のいろは古枝もしらぬこ萩かな
　萩を
山とりのおきにへたてぬ嵐かな

　殘暑の心を
春さえし日影やあつき秋の空
　龍翔院(三條入道右相府)御會に七月七日
天津星一夜のなかき契かな
　おなしきこゝろ
初秋のもみちは月のかつらかな
　大内左京兆閑居の亭にて會侍しに
折人の住やかつらの花のかけ
　波々伯部兵庫助家にて七月
花もまたむら草かくせ庭の露
　筑州箱崎にて神代紀伊守すゝめ侍し一座に
松原の秋のしるしや風の音
　遊行上人西國に御座の時
波にふく秋風きよし西の海
　江口左衛門尉家連歌に
驚ねふり淺茅色付川邊かな
　慈雲院にて八月十五夜
おしまれし月は今夜の光かな
　西行歌ニ云太神宮法樂に
すむ月もさすか百枝の松の露
　石清水社法樂千句に月を

氷ける秋とはいはし水の月

伊勢のかみ亭にて酒宴次に

在明を夕の庭の眞砂かな

秋の發句の中に

むしの音に月かけしるし雪の庭

朝きりに鴈かねはるゝ雲井かな（野分の巻にみえたり）

山ふきを秋のよそへや女郎花

卅六人の歌仙に奉る連歌に

世にちらせ六のむくさの花の種

陶中務少輔家にて草花を

うつろふも花はつきせぬ千草哉

おなしこゝろを

いつくにかおはなをこめし糸薄

田部松本もとにて

花すゝきかりいたす秋の山田かな

秋の發句に

こえやらぬ波やおはなか末の松

〔増歟〕轉多にて

江にまねくおはなや袖の湊風

四宮家にて

朝かせに雪ちる庭のおはな哉

伊勢守北白川山庄にて

野分せし垣ほにしろき眞葛かな

櫻の紅葉を

散さくら音もありける紅葉かな

麻生兵部大輔家にて發句すへきよし侍しかは

朝霧にさゝぬ舟ゆく川邊かな

石清水執行坊にて

川霧の山をうかふるあしたかな

九月十日

小蝶とふ菊にきのふの花もかな

暮秋に

長月の名やしらきくの花盛

有山寺にて

色かはる山は夜さむの朝かな

九月十三夜飛鳥井亭にて和歌會侍し後

紅葉ゝに月も照そふ今夜かな

月次發句に

薄紅葉しらてや晴し秋の雨

千句第十番

ちしほよりあまたに染よ木々の雨

興福寺訓英律師坊にて

秋つすの山はいつくそから錦
　内藤肥後守家の會に
たか爲そ山はちしほの初時雨

付句

　ほたるたえ〳〵更渡るそら
末くらき木のした風に秋立て
　更行秋のちきりともかな
みしか夜を星合の空の恨にて
　なみたを秋の暮になさはや
山さとに一葉ちるより絶俗て
　野邊のうつらの聲そさひしき
道芝に夕日色こく露はれて
　はれてあとなき秋のむらさめ
をく露も小萩か色にうつろひて
　ちきらぬ物を名こそ立ぬれ
さをしかの妻とふ野への萩か花
　萩の葉深き山下のみち
をしかなくおのへの小萩うつろひて
　さひしさやいつくもおなし露の暮
花も下葉も萩そうつろふ
　山の端に夕の月は出初て

川上過るかりのひとつれ
　立つゝきたる半天の雲
友よふに田面のかりのさそはれて
　涙をはわか身の雨とおもへたゝ
月きよき夜にかりのなく空
　時雨にくもる有明のそら
さむき夜に友よふ鴈の聲更て
　梢の聲に秋ふくるころ
時雨行山ちの鹿の聲ぬれて
　軒端の松になひく萩かえ
をしかなくかた山郷は野をかけて
　身にしれは戀てふ戀もくるしきに
山田はもらしさをしかの聲
　憂身をしらぬ戀そはかなき
あつさ弓入野の小鹿妻問ひて
　しのきやわひんあきの山道
さをしかのつれなき妻によはりきて
　雪に跡なきをのゝ山かけ
秋かせをつまとふしかの限にて
　あれて猶すむ古郷の秋
去年まては一むら薄むし鳴て

人はぬるよの月しろきかけ
露更る野への虫の音數そひて
なひくお花に露そみたるゝ
みち芝に虫の音枯て人もなし
みやこ出しはあき風の空
かすかにそ雲井に月をみかの原
みやこへたつなあふさかの山
影はやく東や月の出ぬらん
一筋みゆるおきの中川
山とをく月待浦の　夜に
をそきを待につらさこそませ
とくいてゝ夕にきゆる月はおし
今夜いかなる夢に寝なまし
なかめつゝあかせ半の秋の月
舟こきまよふもろこしの海
くまもなき月にうしほのくもりきて
いかにみえてか名はもれぬらん
一年の中にも分て秋の月
しら雲は薄霞にみえすきて
あることゝちする月のみや人
いつくよりたつ雲の一むら

月澄て空はみとりの秋のよに
あふけはたかきわかの浦風
しらさりし夜の松原月更て
水のをとさへあきふかき比
舟人のあかつき月にさほさして
すむもにこるも水の行末
山川の月はあまたに影みえて
時雨るころのかせはすさまし
河音も月よりたかき夜は更て
ふりにける都の跡と誰かみん
月かけきよきしかのうらなみ
残れる木々の猶にほふころ
長月の名にあふひかりきえやらて
いかてむまれし秋津すの秋
月かくす神代の山を限にて
なくきり〳〵すかすかなる比
蓬茅の宿は月さへすみ侘て
たか秋よりか月もくもらん
をちこちの村の夕霧夕けふり
あはちの月そ波にかたふく
薄霧の繪嶋か磯を霧にみて

こまかにはいつより雨のふりぬらん
木下まても草そいろつく
凉しさやかて野分にかはるらん
草色つけるもりの下かけ
うき身とは人の上にも知ものを
おとろけとてや露のあさかほ
いつの日をかきりと世には住ぬらん
身をしおもへはあさかほのはな
夢こそあらめ月たにもなし
槿のしほるゝまかき秋くれて
いく田のもりの秋も過けり
野邊みれは昨日の若菜うら枯て
うつらころもはほしや侘らん
狩人のゆふ露分てかへる野に
立出ぬともなをやたつねん
身につるゝ秋のゆふへはいとふなよ
すさましやすそ野に殘る人目かけ
柴のかれはにあきかせそ吹
影たかく殘れる月に鐘なりて
あきかせさむきみねの杉むら
草のいほりをとはんとはせし

秋風をうき身ひとつにかこつなよ
月こそおなし光なりけれ
露むすふみねのしらかし玉つはき
今そなくさむ月をみるそら
秋の夜のあかつきかたに雨晴て
葛のは茂きやとの道ち
むら雨の跡の松かき露をきて
あさかほの花に日影のうつりきて
かきほ荒たるあきの山さと
しつは今はた衣をそ打
かりはつる田中の庵り隙有て
一むらすゝきゆふ風そふく
かる跡は水のみすめる小山田に
鮮やゝさむみ千とりなくころ
衣うつあしの丸屋に日は暮て
必とたのめし物を秋の暮
もみちも今はあらしふく山
露を分ゆく風そはけしき
月かけもはつせの山ち秋更て
山ほとゝきす夢からつゝか
片岡の木末をみれは秋更て

冬部

初春會に

松の葉に猶つれなきは時雨哉

手向せはいつれの宿か神無月

浦上美作家にて法樂の會に

比叡山にて

槇の葉に木枯くもる高ね哉

有山家にて

ふる雪の音きくみねの小篠哉

眞野にて人のすゝめし一座に

雪ふりてお花にかへる冬野かな

月次會に

雲にこそつもれ千尋の雪の竹

若槻民部丞家にて

とを山の雪ふり分よ庭の松

大内左京兆亭にて千句連歌侍しに松雪

松におつる雪は風なきふゝきかな

興福寺にて

雪しろしかはらの軒は峰の松

聖廟法樂に

春もみぬ花の木たちや雪の松

春もやは木毎にさきし雪の松

田舍より人のとひ侍しに

先ちりてさくや梢の雪の松

氷を

山水をしつくにのこす氷かな

こほりにも底あらはなる清水かな

大内別駕亭にて月次の會に

鷹とはひ駒いはふ野の嵐かな

延徳はしめの年松梅院にて御法樂の千句侍しに神樂を

うたふ夜はさゝも靡する霰かな

としの暮に

うくひすのなかぬそ冬木梅の花

付句

むしの音かるゝ野こそおしけれ

村すゝきみところまさる冬のきて

とまりとてこそ舟もよるらめ

松たてる遠山本のゆふしくれ

まよへはめくる道もこそあれ

月に雲しくれはてめやましはし

しつかにつるゝ雲風のそら

さはらすは月に時雨をいとはめや
明かたの霜の夜からす立うかれ
枯木にみれは月もすさまし
たえせしものよ家〳〵の風
はかなしや落葉の庭の朝清め
ちるおもかけをみするはつ雪
冬枯のそともの櫟枝さひて
あとなき雪の橋のたえ〳〵
山川のみなかみあさく木は枯て
おち葉朽ゆく杜の木からし
霜しろきふもとの鳥ゐかたふきて
雪のうちこそおもひやらるれ
初霜にいろあはれなる野への草
雪になるかとさえわたる空
夕霜の色をかさねて更る夜に
なれ〳〵し秋も昨日に成にけり
飛鳥のさとにさむき川風
石はしるてふ水そはけしき
河原風さむき夕の友ちとり
あしの葉みたす風の白波
とまり舟我も千鳥の音に鳴て

きゆるそはやきけさの初雪
水もまたへたてぬ程の薄こほり
日かけ待間の庭のあさ霜
薄こほる池の水鳥岩にゐて
うす雪しろし庭の松かえ
苔つたふ岩ほの雫つらゝゐて
をとにのみきく百敷の内
月さむみあられはしりて深き夜に
猶雨ならん雲のをちかた
さゆれともまた初雪の空たのめ
昨日まてたゝまさりつる夜の明て
はつ雪ふらぬよこ雲のやま
みなれぬとりのかへる山本
空さむみ雪を翅の夕からす
さゆる日にたく火のなくはいかならん
かたふく軒につもるしら雪
岩かねつたふふるてらの道
ふる雪になかはゝひらく笠さして
よこをれる山はさたかにあらはれて
雪にはれたるまとのくれ竹
こき出し跡を舟ちに歸りみて

あくるしほ千の雪の松はら
　暮るとおもふとしは越けり
雪ふかきねやを忘るゝ埋火に
　こゝにありても遠き山風
哀にも我ためならぬ炭やきて
　あたりしつけき雪の下庵
冬こもり人めなくもとおもふ身に

戀部

　そなたのかせよしたふかひなし
人しれぬこゝろの松は木かくれて
　えらひのこせるやまとのは
しのふ名もけに理と世をしりて
　聞をのみ契りになして思ひけん
人まつこころのやまほとゝきす
　身をあやしむそ誠なりける
もらすなといひしを色にはや出て
　待わひぬ月をいつくにおしむらん
たのめし人に更る秋の夜
　打つけにとや我そへたつる
あらはすも年へて思ふ末そかし
　その天乙女いつ下りけん

めつらしくほのみる人におとろきて
　いかてこゝろのかはりはつらん
うらむへき数つもる夜に人のきて
　むかへのくるまなとかへすらん
露霜をふみてもとはん人ならす
　名をいひけちて猶やしのはん
たゝ一夜露のほのかにあふひ草
　猶うきなみた身をもわかれす
玉くしけ二たひ人はとひもこて
　ゆかんかたなく霜ふかきみち
在明にわかれの車引出て
　又いつくにかまくらからまし
さよふかくかへりし人よおほつかな
　道まよふかとやすらひにける
ふかき夜にかへるは名残よもあらし
　わかなみたこそ雲にうきたれ
衣〳〵の道は空行心ちして
　さむき夜は猶いねかての我思ひ
引かさねつるきぬ〳〵のあと
　あはゝたつ名をいかていとはん
むなしくもかへるか上に夜の明て

親あるほとよ身をあたにすな
くろかみも別のゝちやかはらまし
ましはる法の庭の歸るさ
とのはの殘りおほきに鐘なりて
よそのかへさの音信はうし
うつりかを我袖のかにいひなして
したふこゝろや袖ぬらすらん
なをさりのうさより思ひ捨もせて
やかてもこゝろかにるものかは
折〳〵につれなき人をしたひみて
うかれゆくともおなし夕暮
つれなさのこゝろかはらん人ならて
きしを待てふ程のさひしさ
つれなきは中道にさへやすらはて
（[illegible]）
文にはいかむとのはもなし
ひとりつゝねたる朝けの物思ひ
あはぬうらみも今そ忘るゝ
獨ねに夕つけとりの聲きゝて
みとり子のおやのいさめを聞しらて
なく〳〵ねぬる夜やふけにけり
たか火をとりてほたるとふらん

我のみとむねくるしくもねたる夜に
こゝろそ心こひの中たち
夢こそは人もとかめぬ契なれ
人もしらしなおもかけはねよ
夢にとふこゝろまてやはいとはれん
それかとうすき明ほのゝ雲
面かけも夢のたゝちは消やらて
あやしきものはおもひ成けり
おもかけのそはゝそれにもなくさまて
（宗砌）
殘まゝれる身そ恨なる
おもかけは人のかはるに友なはて
枕の月のさ夜ふかきそら
覺ぬれと夢の面かけ留まりて
こひしさまさる夕暮の雨
別にしあしたの雲の消もせて
うからしとてや身をは捨らん
くやしきはいとふをしらぬ恨にて
はけしやいかゝとひもよらなん
色みえすせめていとへる人もかな
つれなき中もさのみ恨し
あひ思ふならひなきこそ戀ちなれ

みしおもかけはいかて忘れん
戀せしの御秡こそ猶はかなけれ
　いつちゆくらん手枕の夢
月かけをなみたの袖にやとしをきて
　しほくむかたに又や出らん（一よ歟一）
月かけはぬれたる袖をたとりにて
　過るあらしの冷しき空
まち侘る有明の月に音信て
　かへる空より夜は明にけり
はかなくや月を形見とおもふらん
　春さへなとか人のつれなき
解行はみるらん物を雪氷
　去年のまゝにやにほふ梅かえ
花よりは人のこゝろはうつろひて
　情かほにもむしそをとする
わすれ草君かうへにも宿ふりて
　たえぬる中よ何をたのまん
白糸のなかきちきりをかゝる世に
　おなし人とは又もむまれし
契りても蓮のうてないかならん
　玉さかにたに又あはんかは
契しは大宮人になるもうし
　友なふみちを行やわかれん
はかなきは後世までの契にて
　なみたにみれは面影もうし
ちきりさへはや薄墨の玉札に
　おもひ捨ぬそ猶はかなかる
よそにはやえにしさたむと聞物を
　なれはそ人のつらさをもみん
まれなるは中〳〵長き契にて
　我うきなみたたれにはれなん
たゝせとも名をいひたてし主もなし
　こひはたかきも哀とやおもふ
たかむねにかはりてふしのもえぬらん
　名もはつかしや忍ひぬる中
むねに立けふりもさそなあさま山
　いつよりつもるおもひなるらん
落あへす袖に涙の色付て
　我のみうしと身をな思ひそ
おもかけをなみたの水の下にみて
　戀よいつかはこゝろゆるさむ
ねぬるまに涙をしのふ袖ぬれて

月にしなくはかりにたにとへ
空よりも袖は隙なき五月雨に
いく夕行ともあはぬらさつらさ
よはるもしらすこゝろみんとや
よしたえはてね恨たにせし
したひつるこゝろなきまてよはる身に
はつへき物はこゝろなりけり
かきりそとかこちやりてもなからへぬ
市のなかにも人そかくるゝ
尋よといひしはいつら三わの山
いける身なからうときとのは
契るともいかゝはとはん草のはら
とはんとおもふこゝろはかなさ
この世たにかれぬるものを草の原

雑部

たゝ一すちの道そかすめる
年との春は東の山こえて
そのゝこてふのかすみ行かけ
しつかすむかきねのなつな花咲て
かきねの竹のうくひすの聲
名もしらぬしつやの小草みとりにて
松の葉をすく庵のあはれさ
山本の木陰に春の田はあれて
水の(註)河出そ今もなくなり
春の草おふるはかりに池あせて
木陰さひしく梅はちりけり
草青き春のみとりのたまり水
古き宮こも春になるころ
石すゑの石まの菫苔にみて
舟つなき捨くる人もなし
いにしへは陰にすゝみし松朽て
木の名をかゆるとそ聞山のかけ
秋きてせみは日くらしの聲
人もみぬ住家にうつる月はおし
岩のはさまのあきの山水
なみたさへ落くる色に秋更て
木本すみのつゆの夕くれ
鴫のなく野澤の月にあこかれて
こゝろ有身に秋やなすらん
宿かさぬ里は月みる音もせて
あまの川原に更るあきかせ
また夜やふかき半天の月

あまたゝひ秋のまくらにね覺して
村雨の空かとみれは日の出て
朝の雲にあをきとを山
かきりあれはとなく郭公
むさし野の末に雲引山みえて
折〳〵のつらさを山になくさめて
いたゝくのみかみねのしら雲
入日のにしのみねそのとけき
おもひつゝ窓にあつめぬ雪もなし
山に今みる海川の末
いつよせて舟岡の名をとゝむらん
よむ歌も幾姿にかかはるらん
山のあけほの海の夕暮
いり合の鐘かすむ〻山の奥
水はふもとのはしの一筋
なかるゝかけもあをき山水
打渡す朽木のはしに苔むして
あさ夕に佛の御名をおこたらて
音すみわたるみつのをの山
末にかけひをうくる山水
石はしる瀧の水上はけしくて

けふりのすゑに水そみえたる
瀧おつる片山もとの一いほ
入江のを舟人もかよはす
ふるあめにあしの葉なひき日は暮て
岩にくたくるあら磯の波
みわたせはうなはらすこく日は暮て
影さたまらぬゆふくれの月
江の水や舟さすさほにうこくらん
ふね引つなくまつの一もと
遠き江の水上くもり時雨に
木末にちるや瀧の岩波
音羽川をとはかりする日は暮て
行てかへりし道の露けさ
渡し舟今はなきさに草生て
くむともみえぬ水のさひしさ
いたつらに波こそかゝれ海士を舟
都のつても春そまたるゝ
遠島に哀三年もはや過て
世にうらみあらしと君や思ふらん
はなれ小島のあはれみせはや
たつのみやこも住ははてしよ

浦しまかこの國とをく歸りきて
　朝市に憂もつらきも數みえて
哀にうほをわくるつりふね
　なをおもかけのこらんもうし
おとろへはそれとなみえそ都人
　かり場のとりの哀なる聲
御幸せしむかしのゝへの草たかみ
　たらちねの跡あらためす宿ふりて
らへ木のこれるよもきふの秋
　すさましき野原の末の夕ま暮
うつほなる木のゝこる淺茅生
　蓬生のおくには殘る道なくて
松一もとにゆふかせそふく
　太山の猿のすさましき聲
雲うつむ梢はるかに日は暮て
　ちれはそめつる花よ紅葉よ
尋きてみる人もなし峯の松
　磯邊をとをみ松も立なり
山本のいはほは庭にみまくほし
　ふるき住家のおもかけそたつ
苔をしく玉のみきりのつきしまに
　心して住もなさはや山のかけ
岩に水おちまつふりにけり
　日くるれは霞の戸さす山深み
谷行水にとりの一こゑ
　草の牛のはるの池水
籠ねふる木かけの夕日長閑にて
　作れる民そ水をたのしむ
湊江にけふあたらしき舟うけて
　こゝろをすます秋の川をと
うら梢のあしまの舟につりたれて
　みとりの海に舟もうこかす
ねふるにやつりを翁の忘るらん
　又かへらんもはるかなるみち
風あらみ浦の外まて舟よせて
　みれは舟こく夜るの松原
夕しほや濱の眞砂をひたすらん
　しはしおりゐて千鳥鳴聲
夕なみのよせてはかへるあら磯に
　出るもしらぬ月そかすめる
けふりたつあしやの里の海士を舟
　露さへしろき卯花の陰

玉川によりくる波やくたくらん
　朝ほらけいそくや舟のつなてなは
海士そかひなきしほかまの浦
　いかてかはありのまゝにはいひ出ん
みせはや人にしほかまの浦
　なにゝこゝろの又うつるらん
松島をかへる舟人おほつかな
　夏川や淺瀬涼しき夕渡り
さゝれ石ふむをとのさやけさ
　なひきぬる霞の袖も三重かさね
雲よりたかきなちの瀧なみ
　さかひもみえすおつる山水
布引の瀧こそさらに天川
　たか袖ならし舟の行みゆ
別ちは人のうへさへ哀にて
　ゆくふねとをくなれる海原
旅人を送る限もあはれにて
　昨日もとをきこゝちこそすれ
別るれはやかて戀しき古郷に
　かくこひしきもむくひ成けり
しゐてなとゝめし都を出つらん
　みやこのほかは何かすみうき
おもひたつけふの旅人まてしはし
　戀しくなるは何のこゝろそ
名殘なく侘て出にし古郷に
　身の行末をそ思ひおとろく
誰をとひたれをたのまん旅の空
　松の葉つもる山かけの道
旅の袖みねのあらしにさそはれて
　風すさましきむら雲の空
山ふかき道やこの世のほかならん
　わかるゝ人よをしへたにをけ
友なふをしらぬ山ちのたよりにて
　岩越るあら磯波の音聞て
海をふもとにのほる山みち
　おもひ絶しに鐘そきこゆる
この島も鄕はありけりとまり舟
　しらぬ淵瀨そ袖になかるゝ
とまりふね川かせ吹て闇夜に
　たなひき初る嶺のよこ雲
限あれは舟ちの月に山みえて
　すくなる道そ法にうれしき

鹽干ゆく人を小舟に友なひて
　西に行東にさるも哀にて
舟まてをくるよとのたひ人
　夜ふけてゆけは千鳥鳴なり
ありあけの月待浦のとまり舟
　月は今曇影なくさしのほり
河なみふくる夜はの舟人
　驛して人の過る山もと
駒わたすはしは朽木のあやうきに
　今朝はまくらのつらきをそみる
しらてねししつかやとりにめは覺て
　うきにはならふ古郷もなし
何かその露もいとはん草まくら
　我みる月ははるゝ夜もなし
かりねするあしやの郷の秋風に
　殘やとりを人やとふらん
行するは郷なきみちの夕日影
　有にもあらぬ郷そかなしき
夕けふり憑てくれは宿にさて
　かたるへきたよりもなしや心さし
宿をはかしてねたる郷人

　たゝ心からくらき夜の道
いそくへきやとりをゝそく今朝出て
　きみにつかへし心ちこそすれ
にはとりの驛待出る旅の宿
　誰なきあとの玉まつるらん
また殘身ともしらしの古郷に
　をくれてかへる鴈もこそあれ
また花と古郷人もあはさらん
　夜なかきころのかりね悲しも
あすははやかへらん鐘の古郷に
　よるのゆめこそ物忘れせね
道たゆる我古郷にかへりきて
　はな一もとそおくにみえたる
かさりたる家ゐにしるくみすかけて
　定なき世はつらき身のはて
をとにのみ聞こし郷に今住て
　あやめなかるゝ五月雨のあと
古郷の軒は庭まてかたふきて
　みつゝねよとの月そ悲しき
板まあらみ空もへたてぬ宿ふりて
　つらきまくらの又ねをそする

獨たにやとるにせはき草の庵
　つもれはおつる雪の松かえ
里はあれて拂人なき庭の面
　いつうつろはん我おもひ草
野となれと古き都にまた住て
　冬野にたてるこらの哀さ
荒ゆけはかこひもみえぬしつかやに
　みちに心をはこふなりけり
いく度かつらきとなりをかへつらん
　をろかなるこそ岩木成けれ
蓬生に庭はあらして人もみよ
　なのりをさへにおほめくはうし
尋ぬれは木の丸殿も草の原
　かへさわするゝしほか〔ま無〕ほの浦
草深き門田あれたるしつか庵
　むら／＼竹のなひく山本
みち細き田中のわらやかたふきて
　ひま／＼みえてたつる蚊はしら
篠かにのはかなくつくる家／＼に
　夢にいく度すめるおく山
籠の内の鳥のねふりも哀にて
　くるしみやあみのめよりもしけからん
こてふつらなるさゝかにのいと
　家にをしふる道はつきせし
子をつるゝ野かひの牛の朝夕に
　爪木とる人のこゝろのいかならん
草かりなるゝむさし野の郷
　人なき舟をつなく川つら
暮るまてむかひの岡に草かりて
　かへらすは我もと山にやすらひて
よはる木こりの友のあはれさ
　人のつらさも今そしらるゝ
いにしへはよそに聞つる老のきて
　むかへは人の面かけそうき
いにしへの我姿にはますかゝみ
　なをなからへは世をいかゝせん
身をかろくよはひの末になしはてゝ
　なくさめぬるも我はたのます
とのはにわかくなゝしそ老の友
　なにを住つゝ世におもふらん
旅ならぬ身もたひなるをまたしらて
　暮とに待はこゝろのうき物を

我か世のかきりいつとしらはや
　たえ〳〵につゝくはかりの道の末
とをきゆかりはたゝよその人
　夢にあへるも契ならすや
何事も實なきこそうき世なれ
　物おもはせて我をみんとや
憂身にも猶なかきこそ命なれ
　まなはぬみちをおもふいにしへ
草木にもおとりぬるまておろかにて
　中のころものうらめしのみや
うき世にも山にもつかぬ墨の袖
　立よらて過る木陰も哀なり
むかしははなにすみ染のそて
　〔ろ歟〕こゝろかへするならひともかな
花染をしのふもつらし墨の袖
　こゝろある身そ人にしたかふ
さそふなよ今は岩木の苔衣
　柴の戸に心よはくは住れめや
引とむるともいてよ世の中
　たゝ大かたのちきりたのむな
世を出はよし野のおくの奥をとへ

　何のうらみをなをのこすらん
折〳〵にめくみし君の世捨人
　うらむるふしをそれとしらすや
呉竹のよになと心とめぬらん
　なれもあたなる身ともおとろけ
出て行世をなとさのみとめぬらん
　きぬたもなくて閑なる山
哀にも落葉をきたる世捨人
　にしきもしらす袖そ朽ぬる
花さける都は春の世をいてゝ
　おとろかれける袖のうつりか
忘れては花に馴ぬる世捨人
　住はまれなるをちの山かけ
との葉にのかれ安きは憂世にて
　旅とてたのむかへるさのやと
世を捨し人をはかなくまたしらて
　たゝひとりこそ世もしつかなれ
君ときみあらそふむかし安からて
　おなし世をたに忍ふ悲しさ
思ひ出はさしてむかしもなき物を
　身をつれなしと打そおとろく

ね覺つゝふりにし人に手を折て
　こゝろそよそに遠さかりゆく
とはさも若かりし世のすさひにて
　こゝろによるやまつ風の聲
引琴もその人からのあはれにて
あとをたゝ石のうへにもとゝむなよ
すゝりにかける文字やいむらん
　窓にうつろふ梢をそみる
つれ〳〵とむかふすゝりの水澄て
　こゝろひとしき友にあひつゝ
あらそはぬ道はなか〳〵かひもなし
　みちはのほるを心ともせす
數ならぬ身をなくさむるとのはに
　ともし火の消ぬはかりに身もよはり
老のまなひやかひなかるらん
　誠にはこゝろのうちもしりかたし
今夜いかなるゆめかむすはん
　おきもねもせす物思ふころ
何を夢何をうつゝとさためまし
　聞內になにはのともかはりけり
はかなのゆめやあかつきの鐘

　ふくるもしらぬ夜るのともし火
よりそふとおもひしかへにまとろみて
　鐘やこゝろを人につくらん
まとろむはたゝ玉しゐのなきに似て
　泊瀨のかねそ分て聞ゆる
ね覺してもろこし思ふ手枕に
　きのふもとをき老のよの中
床さむみいくね覺にも明やらて
　よをうちはらふ苔のさむしろ
松かせになかきねふりも覺つへし
　生れなからにたれかみえぬる
彼國にきけと別はあはれにて
　一むらすゝき何まねくらん
あたし野の露にかへりし人もなし
　昔をきし歌のさま〳〵詠ゐて
あはれとそおもふなき人のあと
　しらぬ鐘きくくれの哀さ
無人の家ゐを寺にあらためて
　心にのこる人そくやしき
いにしへの玉のかす〳〵まつる日に
　山本に市のかり屋の物さひて

神まつりせしあとの松かせ
　神は今たか心にかやとるらん
ふるき社そ草のはらなる
　昔のたもとそしほれそひぬる
しきみつむあかつき露に花落て
　ところによりて春はかはれり
若水を法にも今朝や結ふらん
　鐘とをし壁も露にやしめるらん
草のなかなる野へのふる寺
　松はのへふすはしの一すち
さひしさの門よりみゆる寺ふりて
　こぬ秋の風のをとはの名も涼し
し水の寺にたれかすむらん
　神の末なる人とこそきけ
深くたれ佛のみちをねかふらん
　たよりかほなる文もなにせん
をしへこそ中〳〵法のさはりなれ
　二道にうつりもやせんおほつかな
法の外なるわさなたつねそ
　一聲の安きをたにもおこたりて
いかなる法のみちをまなはん

　もろこしまても行人そある
法のためむなしき海に舟さして
　たゝそれとなく涙おちけり
山ふかみ法の聲して暮る日に
　安くをくれるすみ染の袖
永日もつれ〳〵ならぬおこなひに
　ひとりおもはゝそのかひもなし
なへて世はめくむ心に納まりて
　心よりまよひさとりは有物を
むなしき空によもなさためそ
　都にもならはぬ旅ね思ひやれ
とをきくによりつかへぬる人
　いにしへの友とも今はいひかたし
きみのめくみにさかへぬる人
　つたへまほしきこの和歌
もろこしもはちぬはかりの君か代に
　松の葉の千年ともなと祈らん
君かよはひにかきりあらめや

園塵第三

春部

引そかさぬるもりのしめなは
ちはやふる神のゐ垣も年越て
うつりきぬれはあふさかの關
春は先遠き東をはしめにて
峯のかすみそはやく明行
年やけふ宇治てふ郷も越ぬらん
一夜あけて月の春たつ夕かな
昨日の雲もかすむやまの端
きのふ今日立つるものを春霞
はや三か月のおほろなるかけ
さくらも雲もにほふ月かけ
明ゆけとたかねの霞夜をこめて
うつし繪は更にむかしの人なれや
千枝かすめる木々の明ほの
まかきの梅に風さむきころ
鶯の聲まつ朝戸おき出て
暮ゆく野へにかはつ鳴なり
うくひすはあしたの山にさえつりて
宮こにさそへ人も待らん
山かつのそのゝ鶯聲もおし
みえみ見えすみ春雨そふる

雪解て水まさる江のみをつくし
かすみもうすくなひく難波江
からころもきさらき寒きい駒山
梅かゝはおくふかゝらん山さとに
一むら竹のはるのあさかせ
霞にとをきとりの音もおし
あをむ野に朝鷹人の駒なへて
野は若草に春風そ吹く
きゝすなくあしたの霞ほのかにて
春になるてふ空そかすめる
そことなく道芝あをみ梅咲て
きみかにほひもまかふ花のか
末とをき竹のそのふに梅咲て
水のなかれもきよき谷かけ
常葉木に梅の一花咲出て
春まつ竹の雪の下おれ
柴かきのおくにやせたる梅咲て
只さく花の一本のかけ
水なかれ梅は苔むす岩のうへ
門は柳になひく春風
奥ふかき垣ほの木末梅咲て

みぬをさへ風の便にも想侘て
いろいかはかりふかき梅か香
　半になりぬ春もいく程
枝のこる朽木のむめに花咲て
　さく事もちらんためかは春の花
さくらほのめく宿の梅かえ
　二月の半も近くうつりきて
したりそめたるあをやきのいと
　空もかはらて春はたちけり
月しろき遠山もとの夕かすみ
　霞のいろそふかくみえたる
にほふらし梅さく山の夕月夜
　面影にみえしはかりの花のもと
かすみのいつく更る夜の月
　梅のにほひも長閑なる色
空に月いそかぬ春の夜は明て
　のこるさくらにかすむ鳥の音
春の夜は月をおします明はてゝ
　ほのくらくなる浦〳〵に火はみえて
あかつきかすむ波の上の月
　水もみちある春の山もと

夜は早くあけのそほ舟漕きて
　里を出れはかすむにほ鳥
春の夜の月も入江のとまり舟
　けふりもみえぬかくれかの山
みよし野は櫻にくもる夜はの月
　かすめる雲の峯になる山
昨日みぬ尾上のさくら花咲て
　にし日になるも長閑なるかけ
竹ふかきそのゝかたはら花さきて
　いつれかまさる舟ち山越
花さきて明ほのかすむしかの浦
　巖にかゝる瀧のしらいと
山ひめや花のころもをいそくらん
　木末なき野の焦島の峯
一本のさくらになかは雲おりて
　さのみうたかふ心はかなさ
花とみてよしや雲にもなくさめや
　たかひにおほきいつはりの中
花や雲くもや花なる山さくら
　ものうたかひの末のはかなさ
まかひつる雲もさくらも風吹て

とひもやせましとはれもやせん
我か宿もよそのいほりも花咲て
よしやこのまゝすてん世中
わか宿も遠山寺の花にきて
かへりすまんもつらき古郷
花のかけに哀わか世を盡はや
限あるならひもつらし春の空
いかゝみはしのさくらさくかけ
數ならぬ身を忘てそとふ
馬車行かふはなの木の本に
ふり捨て出へき世そと思ふ身に
又花さきぬふるさとの春
かへる夕そとむるかひなき
袖の香も薄花櫻ふく風に
紅葉にかゝる峯の薄霧
忘れめやさくらかうへのあさ霞
いてゝは四方をなかめこそすれ
窓にのみむかゐの山の花さかり
宮こもいまは人にまれなる
花さかりよし野の山に旅立て
さくらにきけは山かせそふく

花ならぬ草木のうへは日もたゝて
これをや戀とうち侘にけり
軒ちかき花のをちなる鳥の聲
また殘る日のかすかなるかけ
淺くみる人やかへりし花の本
契あれはやなるゝ木のもと
うらやまし花にあひおひの春の草
こなたかなたに水はこふらし
かめにさす茂木梢の花の露
老をいとへる春のあはれさ
おなし枝も苔むす方は花さかて
木末をわたる峯のかけはし
谷の水に片山さくらうつろひて
柳かもとをなとかすき行
露なひく枝は花にもおとらめや
茨からはさもこそあらめ雨の暮
よし露かゝれ花の下ふし
こえゆくあとの山ははるけし
うかれつゝしらす覺す花にきて
思ひやるにもなみたおちけり
いにしへは睦し花に身の老て

しらぬいのちそたのしみとなる
あすは又たか木本の花をみて
あらましになす心うらめし
さそはんといひしは今の花のもと
けふはかりとや花もちりなん
おもひたて遠山櫻かりころも
ふし木も橋もわかぬ谷川
花にゆく山ちは心身にそはて
一かたならぬものおもへとや
尋ねはやよし野たつたの山櫻
とふしはの戸の夕あけほの
ふくる夜を花に行きのとたえにて
とふとものちはあはんものかは
風そふく待人いそけ花のもと
おもへはおしきこの身ならすや
年〳〵に月よ花よとなれ〳〵て
たえぬ雫にぬるゝ苔のは
物おもふ色か老木の春の花
春さへ秋のおもかけそたつ
つたかゝり〔一蘿〕苔むす花の木は朽て
えらひせく心もしるし和歌

たくひなからの山さくらはな
あふに恨をいひな出しそ
花さそふ去年の風や又とはん
かへるみやこの程そはるけき
かさす間にちらはをしほの山櫻
情のなきは今そみえぬる
雨よなとさかせて花をしほるらん
身を忘てかこつはかなさ
風よりもたをるにもろき山櫻
くやしやたゝに過てこし跡
風そふくおらぬ花とて殘らめや
夕くれふかき人のこゝろ〳〵
かへるさはけふみし花の上さにて
一かたならすおもふくるしさ
さく花に雨をいとへは風吹て
霞もはてぬありあけの空
さそふ風よはれはまよふ花もなし
いかなる種かうらみとはなる
年ふれは小松も花に風吹て
宿をたかへてとひ行もうし
この比は花にうつろふ松の風

松の木ふかきふる寺の門
花あれは入會の鐘の聲もうし
うらむるはしめ更におほえす
後にこそうさは嵐の花をみて
海山のへたてもみえぬ春の暮
あらしの花はみねのしら波
海に出行水のしらなみ
花をふくひらの山風かすむ日に
明日は又こなたかなたの旅の空
ゆふへのはなにあらしふく山
塵にましはる庭の立石
つたひくるなかれの末に花朽て
ちかくきこゆるうくひすの聲
我か薗にみ山さくらをうつしうへて
さきしをかたれ花もしらまし
つれなさは比をや分ぬをそ櫻
あしきこゝろのはての哀さ
鳥花をちらせはなれも宿なくて
あをむはかりの春の草むら
雨にちる花の薄雪まよふ野に
みる人おしむ春のあけほの

散花は砂にまさらぬわかれにて
なかるゝ水のとゝまらしとや
涙に花そをたに殘せ吉野川
住んといひし山もはつかし
御芳野を花より後も又いてゝ
ましはりを思ひ出てや尋ぬらん
ひはらかおくのはなのやまかせ
何事もたくひある世をたのみにて
みれは年〳〵花のはるかせ
おもへはこれもなさけならすや
ちる花を窓に吹いるゝ山嵐
柳ふく風ひやゝかに今朝過て
たもとにかゝるはなのしら雪
人にしられぬ事な歎そ
[illegible]むもれは花ちる思ひなき世にて
よるひるのさかひもしらぬ物思ひ
夕くれしろく花のちるやま
たかため世にはなからへもせし
ちり行かは身をも殘すな春の花
住すはきかしみねの松かせ
花そちる歸りし友は浦山し

うきながらかくてや同じ[illegible]らまし
おしみてはなのあとの松風
わかれしあとそ空も身にしむ
よこ雲に花に昨日の夢[illegible]て
こゝろふかきやつれなかるらん
世に花をちらしてさける遅櫻
いとひはてなはさていかゝせん
青葉より又花をくる春の風
わかるゝに　をつれぬ花はうし
あを葉の山のはるのしら雲
わかれしあとそ殘るうつり香
道芝にふるきみやこの花朽て
さくらちりゆくかけの若草
雲雀なく外山の入日野をかけて
又霞行野こそとをけれ
夕雲雀なかそらまては影みえて
つれなさの中に涙の色きえて
月はありあけのはるのかり金
在明の月は霞にほのみえて
ゆめもまくらにかへるかりかね
はつはなよりもうかれはてたる

せめて春くらして歸れ天津かり
霞のすゑにつゝくしら雲
かへるにも鴈やはねうちかはすらん
朝ほらけ霞を分て吹風に
小舟いつれはかへるかりかね
もとのこゝろに春はきにけり
あるしなき宿をもしらぬつはくらめ
道とをき尾木にやすむ一ねふり
おる花たのむてふのあはれさ
ちらは我もと花にくらしつ
夜にも薗生の小[illegible]にねて
青葉かくれに花そ落ぬる
うちしめり春雨ふりて風もなし
こゝろそすめる草の戸の春
玉水も長閑きあめの音更て
くれて又たつ彌生もそある
さひしきはそほふる雨の朝かすみ
霞より野は先遠く弃初て
ぬれすはしらし袖のはるさめ
つれ／＼とたゝをくる永日
玉水は軒もりやまぬはるさめに

袖そつらなる櫻さくかけ
山くたす杣木の綱手永日に
ならふ小松のかすむ山もと
あそふ野にわか方遠く暮渡り
一もとさくらさける淺茅生
露をきて秋のおもかけかすむ野に
誰かすむあとそ庭の山吹
岩かけになかれの蛙聲さひて
ちまたにいつる夕暮の秋
雨ふれはなはしろ水もあと越て
おもふかひなくなとかへすらん
あらを田の小草に春の花咲て
物いふはかりむかふおもかけ
古郷にさきて露けき桃の花
はかなきは一夜を契る心にて
菫さく野にかすむあさ露
こゝろある人や花に寢さらん
しほるゝもおしき菫の草まくら
音信きくもまとすくなし
花もやはさけるみ山のよふこ鳥
とひしはいつの蓬生の宿

花もみな青葉こ深ふる雨に
はなれもやらぬさくら木のかけ
うつろへは今はと花の宿出て
別つる跡の道芝打しめり
花さへともにふるさとのあめ
松ふく風もうちかすむやと
在明にかけこそならめ鶯にて
ねくらをはまたさりかぬる鳥の聲
花は青葉に人もなきやま
をそきも根散はなもうし
いかにせん月はありあけの彌生山
朽木の松に春はすくなき
さくふちの花は枝さへうつむらん
枝もたをらぬはなそ咲そふ
藤にほふ宮の木ふかき春日山
櫻ちる跡とてなとかうかるらん
とへやふちさくはるの山さと
名をかす松は色そすくなき
春なから藤江のうらは花もなし
彌生のすゑの春のくれかた
ものふかき松の隙〳〵藤咲て

　かへるさ何にをそき旅人
山もはやさくらちるらし春の暮
　うすきかすみのかゝる山のは
花鳥の名残たになく春暮て
　雲もかすみもみえわかぬ空
かたちあらはなとゝめさらん今日の春

夏部

　ゆきかふ雲に薄き日のかけ
春はきのふけふよりやかて夏衣
　二聲はいつやまほとゝきす
夏きぬとはやうくひすの鳴絶て
　きのふの夢よけふの現よ
花はゝやあを葉の山のほとゝきす
　うきゆめはつけの枕も恨にて
まつ夜更行やまほとゝきす
　おもひたえんの夕ともなし
むら雲のもよほしかほの郭公
　なかめあかせる夏のよの月
ほとゝきすやは一聲にまとろまて
　はやく覺つる夢なららみそ
かりまくら夜ふかき山のほとゝきす

　こゝろをなとか定さるらん
おとろくに驚きゝ分ぬ郭公
　玉さかに聞もうれしき法の場
あくるよ川のやまほとゝきす
　都のつてをきくそうれしき
いにしへにならのは山のほとゝきす
　名をかへてとふをもしらす契るよに
誰か身のはてそ山ほとゝきす
　夏とても空のけしきの外ならて
やよほとゝきす一とせもなけ
　今夜あふをやはてになさまし
五月山あり明かたのほとゝきす
　あまりしのひてはていかゝせん
五月さへすゑ野のもりの郭公
　山たにみえぬふるさとの空
夏のきて草たかくなる窓の前
　ゆくやほたるのかけのむら蘆
茂る葉にまた木の本は夜をこめて
　ほたるのやとゝ茂き夏草
雲かゝる山は梢にせみなきて
　むら雨に日影いさよふ峯たかみ

あさけ涼しきせみのもろ聲
　時鳥いまやとおもふね覺して
きけは水鷄の月になくやと
　涼しきかせの過るころもて
水鷄なくさ夜のうたゝね月は覺て
　山ははるかに水ひろき鄕
五月雨は軒はの峯も雲おりて
　あたりの木々は雲そかゝれる
五月雨のはれまの日影ほのめきて
　いと消安し夏のあさ露
五月雨ははるゝ跡より又ふりて
　門田のいろのさびしくそなる
日は暮てかはつ聲する五月雨に
　なかれ分たる水のうき草
五月雨にもくつしからむ橋はしら
　おもはぬ島に身をそよせたる
五月雨に水ゆく野邊の草の庵
　半は水のわたるうきはし
さみたれの跡は小川の名をかへて
　なけむら雲の山ほとゝきす
五月雨の名殘涼しく嶺越て
　かけたかくなる森の下草
さみたれは山もとひたす水もひて
　殘れる雲もうすくこそなれ
五月雨のあとの川音木よはみ
　夕くれ近く鐘そきこゆる
枕をもとりあへすあくる夏のよに
　後のあしたにうらみこそあれ
さやかなる月にみしかき夜はの空
　あはてはやまし消はゝつとも
をしか待ともしのかけのみしかよに
　をんなもいたるこの法の道
小車にともすほたるの影更て
　鳴のなく聲に哀やまさるらん
野澤にもえてほたるとふくれ
　汲へき水も夏川のするゑ
あら[illegible]や鵜のゐるいはほ[illegible]こえて
　枯はてぬれと名殘こそあれ
露はまたみすのあふひにゝほふらん
　おもはぬ草のまくらをそかる
あやめしくけふの今夜のみやこ人
　軒端のくさの忘ぬそうき

中〳〵にあやめもふくな里古ぬ
　まこもかるふか澤野への暮る日に
殘るあやめのにほふひとむら
　軒端にかゝるそのゝ呉竹
夕かほのあをき葉分に花咲て
　花いつならん水の水上
みるも先蓮の浮葉は色涼し
　春暮て夏はつる日のみ秡河
名もむつましや櫻あさのは
　待ぬる花のむかふおもかけ
むらさめに夏のゝ草葉打かほり
　又とふさともおなしむさし野
夏の日はほりかねならぬ水もひて
　露のなさけはあるかひもなし
夏の日にかれ野の草は雨待て
　また寒からし雪のふしのね
草もかれ水もなきまて照す日に
　み渡せはみとり色こき半天に
雲たに戀しあつき日のかけ
　夏も雪ふむ岩のかけ道
夕たちの名殘の月による出て
　又かきくもり雪そふりくる
ふしのねやすそ野をめくる夕立に
　長雨の比も忘すふりそひて
富士には五月水無月のゆき
　むすはるゝ草もやあるし夏の宿
水も人まつ庭のすゝしさ
　行人みえぬはしの一すち
又くるも木本たのむ夕すゝみ
　水くらき小舟の道の夕川に
門すゝみするあまの家〳〵
　たゝかた糸のよるの戀しさ
夕すゝみあつさの殘る柳かけ
　庭にしつけきみしかよの月
人かへる岩垣しみつ音更て
　雪をいたゝくかみ筋の色
駒とめて行人すゝむ瀧のもと
　うつりかはるはこゝろ成けり
夕涼み花みし山に風待て
　しのひ〳〵にかよふ人つま
おもかけの秋風涼しから衣
　たてのこしつゝをける槇の戸

夜ふけてや涼しかせのをとつれん〔三四[illegible]〕
人はかけせぬともし火の本
はしゐしてあつさ忘るゝ夏のよに
はるかなる川原にみゆる渡し舟
水ほそくなる水無月の空
草にむもるゝ水の一すち
千々の人あさの葉なかす御秡河

秋部

あしたのかすみ夕暮の露
あら玉のことしも夢に秋立て
秋のけしきそもの哀なる
しら露の玉のうへ木にかせ立て
誰に月物をおもはせ初つらん
木の間になりぬ一葉ちるあと
玉のをにかけし思ひははかなくて
ほたるもともに柳ちるくれ
きのふのかせの松にふく聲
秋そくるさなへ取にしいなは山
猶かけうすく月そ殘れる
ほしあひの空ひやゝかに夜は更て
ゆふへになれは山のはの月

秋の風荻に涼しく吹初て
下葉になひく竹の一村
古郷はまかきの萩を空にみて
すそのゝあさちうつらなく也
秋かせに山路のこ萩花さきて
情あるやとに今夜の月をみて
かせもさはらぬはきのうへの露
露をく野へになせる我か袖
色ふかきまはきかはなのすり衣
庭にすちかふ在明のかけ
里はあれぬもとあらのこ萩ふる蓬
見捨てはたちかへらしの古郷に
淺茅ましりの秋はきの露
花の千種にむしの聲〳〵
山かけて薄霧まよふのへの暮
いつれによらん春秋の空
薄霧のまかきの露に虫の聲
なくさみおほき秋も暮けり
薄霧にむし鳴ち草花咲て
かへろ夕は月になりけり
むしのねも花の匂ひもあかぬ野に

かゝるやとりは夜こそなかけれ
虫なきて月は影すむ淺茅原
　衣をも重ぬる程に秋更て
たかためいそくはたをりの聲
　月は更つゝおき風そ吹
淺茅原むしの音よりも我鳴て
　なかめそたえぬ夜はの月かけ
あかつきはおちても結ふ草の露
　秋や中〳〵そてもかはかん
なかむれは露の宿とふ草もなし
　むなしき空も秋は悲しも
夕露をみれは草木の鳴に似て
　なみたの袖に月はやとらし
色〳〵の秋の草木の露をゝきて
　すゑとけぬ心の色に習きて
月草の戸のあさかほのはな
　おはなみたるゝのへの夕暮
をみなへし小萩か露に咲そひて
　殘るかとなをふる郷に歸りきて
野へのちくさのはな落るころ
　秋やなを旅行人のうかるらん

花しほれたるみちのむら草
　佗つゝあきをゝくりこそすれ
根をいたむ草葉は花の色もなし
　宿〳〵になくさみおほき事を
庭の千草のつゆの月かけ
　こゝろにをくや古郷の露
淺茅生をはらふ夕の秋風に
　いつらむかしの人のおもかけ
はる〳〵と露をなかめの草の原
　一筋ほそくつゝく道しは
篠かにのはかなき糸に露置て
　秋をさへ忘れはてたる月をみて
たゝしら玉そ草のうへの露
　閨の戸ゆけは秋風そふく
かるかやの露をみたるゝ袖にみて
　殘るもうれし月のおもかけ
花すゝき袂ゆたかに露をきて
　秋のあはれも人による袖
まねくとて誰とゝまらん初お花
　分る人なきよもきふの宿
誰か袖にむかしの跡の花すゝき

小田もるかたにつゝく道のへ
風なひく一むらすゝき色付て
　夕日になれは影そさやけき
とく出て雲間に薄き秋の月
　面かけを忘すなから秋更て
うすはなさくらもみちする比
　にほふかせふけ夏の衣手
月しろもみえぬ夕の嶺の雲
　春寒きおのへの嵐吹はれて
鐘よりいつるゆふくれの月
　山の端は霧のほのかに色付て
まつ夜の月にかけそさきたつ
　秋の半はのうつる程なさ
夕まくれ月も細えの水すみて
　ひたすらにおもひたゆるも有物を
木のまうれしき山郷の月
　あふ夜たにまほにむかはぬ影はうし
みやまのいほに木の間もる月
　このまゝにそひはてぬへき道ならて
しはしまたなんうき雲の月
　水まさり行河つらの里

月うつる眞砂をよるは波とみて
　はれゆく雨そ庭に残れる
月うつる岩ねのし水音更て
　そとなく夕の雨に山越て
更るや待し月のさやけさ
　さよ更て明る妻とは心せよ
露に月すむ軒のくれ竹
　あふ時は又あかつきを限にて
雲に月すむうちのやまのは
　時のいたるに身をもまかせよ
めてすとも老やはよその秋の月
　草葉しほれて露そすくなき
いかにせん我か袖ならは夜はの月
　人はかへりて夜こそ更けれ
月ひとりすめる野寺の松の風
　夕のなみのこゆるむら蘆
月さへや露ふく風にみたるらん
　あひみる夜半はとのはもなし
秋なかはおとろく程の月影に
　〔ら歟〕君かあたりにゆかぬよもなし
うみやまし大内山の秋の月

あかしのうらの秋のおもかけ
廣澤や月の池水清さよに
　神さへやあくるを惜と思ふらん
月はにしなる箱崎のうみ
　川上よりやこほり初らん
玉島をみかきて出る秋の月
　こゝろ〳〵の秋とこそなれ
千里にも月はひとつの空のかけ
　いさゝはしはし恨てもみん
こゝろなき雲やは月をしたはまし
　霞よりこそ雨もおつらめ
空にみはいかゝくもらん夜はの月
　むらたつ松そなかくみしかき
晴くもりつらなる峯に月更て
　いかにねは父もみやこのよるの夢
あき風ふけて月しろき山
　心つくしの夜はの秋かせ
行月の松浦の奥になるもうし
　いつれ　きあらましの道
夕なみに月まつうらのとまり舟
　かそふるほとの露そをきける

軒は荒て月のくまなき篠の庵
　雁かへる空をしみれはさひしくて
寝覺のまくら月かたふきぬ
　あるかなきかに殘るむしの音
あかつきは谿の底まて月澄て
　山の端は薄き霞にあらはれて
あかつきいつる月のさひしさ
　語る夜の時やおほえすうつるらん
山の端にみし月もやまのは
　むかしかたりそぬれぬ袖なき
あつまりてこれかれむかふ月の本
　ひかりのかけをゝくるはかなさ
稻妻の月みぬくれをなくさめて
　田面にかよふあきの初かせ
いなつまに野澤の水のかけ更て
　絶間よりほのめく雲の夕月夜
をくらのやまのいなつまのかけ
　空のいろやいとはや秋に成ぬらん
またほにいてぬ小田のいなつま
　ふりくる雨に人さはくなり
いへ〳〵に山田のをしねかりほして

夕日のくれに過るむら鳥
をしねかる跡は水すみ人もなし
ねさめ〳〵のあはれかはらす
門田もる聲をまくらの草の庵
なく聲ちかく鴈渡るなり
ねさめする尾上の鄕の長夜に
いつくもおなし長夜のそら
秋風にねさめのとなりかたらひて
この世の夢をいつまてかみむ
限あれは秋のまくらに鐘なりて
月の戸ほそをたれたゝくらん
こゝろなくねぬへき物か秋の空
月はあり明にすみ渡るそら
小舟さす八十宇治川の秋の水
川のほとりに月をこそまて
舟はたに袖かけてみる秋の水
風うちそよくおもかけの荻
ふれとむる難波のあしのほに出て
月に聲して人は出けり
秋の雨に戸ほそとちたる草の庵
めにこそみえねかよふ秋かせ

霧よりも猶こまかにてふる雨に
涙かと草にも木にも露置て
さるなくやまのあきの夕暮
こゝろよはくもかこつはかなさ
理のゆふへのうさそ老の秋
西に入月のみなとかしたふらん
夕日に秋はものそかなしき
住なれし園をは遠く隔きて
みやこの月にはつかりの聲
ほのめきてなと夕月夜またるらん
はつ花すゝきかりもきにけり
大空に澄をや月も思ふらん
夜ふけてきけはかりの一聲
在明の月は殘れる半天に
かりの世つけて渡る一こゑ
おもはぬかたに月をみる暮
鴈のくる雲に稲妻ほのめきて
月は浪まに更渡るかけ
秋かせに聲打そふる鴈鳴て
ふけゆく月の影きよき空
夜をさむみうちなかむれは鴈鳴て

木からし衣かさねの篠原
山路行をしはす露にそよくらん
月に分ゆくむさし野の原
妻こふるさ山のをしかよる出て
露やさむけきをのゝ山さと
夕闇くれられへかほにも鹿鳴て
露をよすかの月の夕かけ
秋きぬといへはいつしか妻戀て
ともなひてゆく秋のむら鳥
さをしかの山田のひたにおとろきて
まへわたりきく宿のたそかれ
さをしかに門田の稲葉打そよき
もにすまぬ虫も我からねを鳴て
妻とふをしか世をはうらみし
あり明の人かた分ぬ雲かくれ
おのへのしかのあかつきの聲
野邊のまはきの花の夕露
鹿の音はかへるみやこのつとならて
野へにねて雨に明さはいかならむ
つまとふをしか月になくさめ
山を軒端のあき風の聲

をしかなく夜寒の枕めに覺て
むしの音たかく月も更けり
淺茅生のやとはきぬたにあらはれて
使のとかそちらす玉つさ
あらしやは今よりふかむ初紅葉
秋風の夜はに霜おく立田山
いろいかならんあすのもみちは
秋の日さむくうつる草むら
里古きかきねの梢の薄紅葉
月はいつくもおなし夕暮
うすくこく山の端みれは色付て
寒けき水に秋そ更ぬる
たつた川山かせふけは色かへて
うしとやいはんうれしとやいはん
風さそふもみちの木の間月みえて
月には雲のかゝる夕くれ
紅葉ゝにみねの朝霧はれやらて
露おつるこの山本のを篠原
きりにぬれたる紫のしゐ柴
すみのほる月の下ふしぬもあはて
椎の葉いつれ松かせの聲

麓に残るきりの一むら
秋のかせいろなき松に峯越て
　かりのなく空に嵐やをくるらん
松にたゝよふみねのあさ霧
　入かたちかき月のあかつき
秋ふかき嶺はさやかに松みえて
　舟さすかたの月そさやけき
大淀の浦のあき風松吹て
　朝霧ふかき野へのはるけさ
時雨せし薄霧かくれ日の出て
　うつろへるより又もとひこす
しら菊の花をこ[illegible]のやとりにて
　あたなるはあたにも心さたまらす
いく世かむすふきくのしら露
　まろひおひたる野への白露
古郷は菊のませゆふ人もなし
　ひとりさひしき秋の暮方
霜かれし千草か中の花薄
　さえぬる霜におるゝ朝鳥
名もしらぬ垣ねの木のみ色付て
　あかつき月におきなるゝ山

河かせに瀬の聲たかく秋更て
　ふるき社のあとのさひしさ
かりはつるいなりの山に秋更て
　雨しつかなる水の行する
秋ふかみ古江の蓮はゝくちて
　今はたさそな廣澤の池
水ほそき野もかれ〳〵の秋風に
　み渡せは暁月のほそきよに
かれ野のすゑの秋の遠山
　むくらの宿そな[illegible]く
夏むしの聲せし梢秋更て
　月こそ晴れ露の草むら
おもかけに鳴や夜寒のきり〳〵す
　人と月とのなこりある空
程もなくよはひも秋も更はてゝ
　くもるとみれはさしのほる月
秋やたゝいつはりはかり時雨るらん
　彌生もするゑと花そちりゆく
いかにせんもみちうつろふ秋の暮
　星のひかりもあけかたの雲
廿日あまり八聲の鳥に月出て

したゞ消えはよこ雲の雪
くれの鐘おもかけはかり月みえて

冬部

霜にみれは雲かゝる山やま
神無月みねのあらしのいかならん
霜ならてしろき小篠の木は哉
山ちやさみしこほるあさつゆ
何をか春のしるしともせん
しくれふり霞みたるゝ神無月
雲のころもをかさねたる山
時雨ふるころは月さへ雲からし
こゆれははるゝ峯の白雲
心ありてしくれも月や待ぬらん
暮ぬる年の春ちかき雪
霞しは昨日の梢冬かれて
草のはらをはせめて哀め
木からしの名におふ梢色もなし
わすれもやらぬ音信はうし
冬かれの荻に又とふ秋の風
涼しさたのむ松の木本
跡つけし草は冬野に先成て

なみた落そふ衣〳〵そうき
あかつきの木葉風ふく道のへに
時雨にも苔のみとりは青やかに
おちはも水もめくる岩かね
軒端に近きみねの松風
かけ水は木葉うつみて道もなし
窓うつ風そ月にこたふる
木葉には夢の通ひさへうつもれて
みやこも今や風の身にしむ
霜ふりてまさきうつろふおく山に
松よりいてゝからす鳴なり
明かたの霜の木末の天津ほし
おく山に人もすさめぬ花咲て
小篠にしろきけさのはつ雪
冬野の尾花松の一むら
朝霜に大和なてしこ枯やらて
淺からぬちきりや中に殘るらん
このはかくれの山の井の水
情なく散紅葉はよまてしはし
しもの花さく木々の明ほの
山みれは梢むら〳〵葉は落て

霜を一すちわたすかけはし
火をたく山にさゆる木からし
消にける跡より霜や結ふらん
くらき夜ふくるをちの山本
霜しろき竹のはやしに犬ほえて
ゆく水はすくなく成てこほる日に
人もわたらぬはしのゆふ霜
たゝすむ宵はほしも曇らす
霜さえてかせは松ふく槇の戸に
からすねにゆく野そはるかなる
山きはの松一もとに霜ふりて
木葉のうへに殘るまつ風
春秋の夢も霜よや覺ぬらん
なかれのすゑそみえかくれなる
霜みちて雲に更たる銀河
つかへぬるみちや哀もふかゝらん
霜よの月にはとりの聲
うきを拂てすめるおく山
もりかねし木葉の後のよはの月
とはし今はと枕やはせん
時雨れと月はたのみの有明に

なかるゝ水の聲そしくるゝ
木からしの雲ふく外山月落て
ばかなしやいなはのやまぬ物思ひ
冬田きてみるしつのあはれさ
秋よりさひしかすむ山もと
人もこぬ冬田の水の薄煙
結ふにや板井の水のつきぬらん
こほりのうへも月そやとれる
暮のこる雪の川つら舟さして
こほりになひく岸のむら竹
行をとちかき水のさむけさ
にほの海や氷をくたく海士を舟
濱松の一もと生る陰さひて
月はこほりにゝほの海つら
草のかきほにつもるしら雪
音信し水さへ氷かさなりて
木葉のしたに落る山水
さゝれ石谷の氷に閉ませて
又雨となるはつ雪の空
山さとの軒のつらゝに日のさして
山かけは人のうときを便にて

さはらぬ松につもるしら雪
いねかてに霜よの朝戸をし明て
うちなかむれはとを山の雪
たえ／＼のこる峯のよこ雲
曉のあらしにおつる木々の雪
かへりみらるゝ道の山もと
むら竹に薄雲なひき夜は明て
野中につゝく道のたえ／＼
山本の門のむら竹雪にたれて
獨舟よふ川の夕なみ
山柴に雪をおもかせ袖ふきて
たえてとはれぬ庵のさひしさ
しはしこそ跡をもいとへ雪の庭
日くれ雲こす山のはるけさ
雪はるゝ門田の澤に雁なきて
とはし今はとたつる槇の戸
今朝の閑はまたらす雪の降暮て
浦のとまやをたのむはかなさ
水に消なみにとまらぬ今朝の雪
鷺のとふ江は白妙に水晴て
雪の淵さきにたてるつり人

たゆるもよしや二道のすゑ
薪とり水くむ山の今朝の雪
つなくへき舟や渚にまよふらん
いつれもわかぬ雪の眞砂地
ほそきけふりのゝほる山本
人かへる雪の遠鄕日は暮て
庵にたく火をしるへにそゆく
道たえてふるらし雪も深き夜に
つれなきこゝろ猶しられけり
雪おれし枝さへ松はつれなくて
松にはかせのたゆるもわかは
いつの間にふりつもるらん夜はの雪
折ならへたる山住もなし
雪ふれはいほり一にうつれて
いつもきゝつる入あひの鐘
かはりけり尾上や雪のつもるらん
閑をもとめてうかれ出けり
雪ふれは山しろたへの夕からす
、我か名をかへて門たゝくをと
柴の庵かせもあらしの冬こもり
あらしの月の冬かれの山

川舟のこほりをきしる音はして
　影さむき朧月夜に鴈鳴て
水のけふりののほる冬川
冬川のかすみは水のけふりにて
　けしきはかりに春のたつ比
　田鶴なく夕ものそかなしき
水寒き鹽干のかたに松みえて
　つもれははらふ雪の夕くれ
寒き江に釣の翁の舟よせて
　なかるゝ水のするの川をと
をしのなく有明の月の白夜に
　やとりにきても波そ聲する
をしのゐる梢にさはく夕嵐
　日かけもこほる庭の松はら
床ひろき池の水鳥むらねして
　鷺やさそはぬ友と成ぬらん
をしのねふれる谷川の水
　きてなくさむる雪の暮かた
ひとりすむ與の小島の友千鳥
　からすのとまる古つかの上
鴛とりのなみに床かる生田川

　おやこのみちもしらすこそなれ
をちこちに狩場の鳥の立別
　命こそたゝ行末のこのみなれ
かりはにとりを殘すかへるさ
　小篠かすゑにかゝるしら雪
狩くらす野への歸るさ月出て
　月も人風も音せぬ冬の夜に
かへにものこすうつみ火のかけ
　手ならふ筆の文字は消けり
埋火の灰のすさひも更る夜に
　寒き風にそめをさましたる
埋火のあたりしつかに人はねて
　またさきやらぬ窓の梅かえ
うくひすやをのか聲待冬こもり
　作の日のうつろふ梢花咲て
霜のかきねにつほむ梅かえ
　雪の下たる谷のむもれ木
春待や心くるしきむめの花
　ひとつ二の庵そさひしき
冬こもる軒はの梅に花咲て
　雲に似たる山の端の雲

□のとしの内にも年越て

戀部

よらんかたなき思ひとをしれ
一すちにつらき思ひをふみ初て
こゝろ盡とつけもやらはや
しのふれはたゝかぬ門の更る夜に
たつねは人にあひもこそせめ
忍ふとてをしへぬ宿を恨なよ
玉のみきりのくれなゐの梅
かけわたすみすの隙より衣みえて
秋やおもひのはしめ成らん
野分せしこすのまとをにみるもうし
まとかましき今の音つれ
よそにきくよし野の袖に瀧落て
ありし思ひは事のかすかは
しら玉をはらへは袖に瀧落て
おもはぬ人そ月にかけする
秋かせの夜はにまてともとひはこて
いかゝきくかすめる暮の鐘の聲
契をかねとまたすしもあらす
ねたさられたさいかゝかこたん

空たのめそれこそあらめよそにねて
おもふてふこそうはの空なれ
いたつらにぬる夜はあれとゝひもこて
今はためしもあらぬつれなさ
わかるへき曉の鐘に人まちて
今はた我も夢やたのまん
おもふともくへき夜はかは更はてゝ
待しもくやしとをさかる人
のる駒の夜聲をきけはそれならて
とふへきまては身をもたのます
待人のこゝろなかきを恨にて
かきりは今そとはゝとへかし
まち佗てきけやと門をさすよはに
暮てはむかふ山の端の雲
待人もこよひの月もいかならん
別ちのつらきにさらはこりもせて
鐘に人まつゆふくれのそら
をちかた人の袖のおもかけ
まれにとふよはさへとけぬ手枕に
ぬれつゝ雨にいつくにかねん
とふ夜はに槇の戸明ぬ人もうし

文まきかへすともし火の本
音信も門たかへなる夜はゝうし
おもふかたにやゆかてあかさむ
心とけぬ人をとゝめて語る夜に
のとけきこゝろいつかあらまし
待えつゝ枕をとれは鐘なりて
物おもふ身には限のなきものを
一たひあへは又みまくほし
たゝひとりねやくせと成らん
誠ともまたおもはすや新枕
これも夢かや春の夜の床
ともし火もかすむ枕に人のきて
たちかへりても又やとはまし
今はとて出しきぬ／＼ふかき夜に
一二のかねそこゑする
深き夜をはや衣／＼になすもうし
とむれは人はとゝまりもせす
きぬ／＼にふるは誠の雨ならて
立やすらへはうくひすそなく
庭つ鳥八聲うらむる衣／＼に
きぬ打そよき歸るをそ聞

忍ふれは送りたに出ぬ身を侘て
あさ戸にきけは時雨ともなし
別路をまてしはしともいひかねて
そのまゝあくるよこ雲の空
きぬ／＼の跡とていかゝ打もねん
またよひの間の鐘もうらめし
わかれちよいつ曉に成ぬらん
山かすむ在明の月ははつかにて
なみたふみゆくきぬ／＼の道
うきぬしつみぬ心つくせり
憑みあるとはもましる別路に
戀こその人つみとかとなれ
ころすほと別の鳥のにくまれて
右や左の人のおもかけ
小車のわもかふはしき衣／＼に
いつをさたむる契ともなし
むせ歸りなみたせきあへぬ衣／＼に
さすかにみちはいそかれもせす
明過は人めかなしき衣／＼に
あひみても又涙なるきぬ／＼に
をくりも出し夜こそあけぬれ

心くるしきかへるさの道
夜はくらしあけは人めのいかならん
あふ時の心にしはしなくさまて
わかれもあへす戀しきはなそ
又あはぬのみ數とをしれ
いかはかり月日かむすふ新まくら
あさきをたにも契とそする
年へたる中のわかれち思ひやれ
ものあはれなり曉の月
わかれしも今は戀しき手枕に
そのまゝかれん契かなしも
あたとのたゝ一ふしを恨にて
こりすまにあた波かけん袖もうし
人にくからぬうらみいつまて
人も今はたとはしとやする
たえなんといふは恨をまとにて
いはぬ色をも哀とをしれ
あらはさはうらみにさよも更ぬへし
きぬ〳〵になる道いかゝせん
我か恨また一ともいわぬよに
なれはうきも身にはいとはす

一たひもとけし人かはうらむなよ
我より外の紐のかなしさ
あふ事をなにゝいのらん神無月
誰かわかれしさむしろの衣
わかおとすなみたも今朝はかたみにて
えらへるむしの聲そみたるゝ
おほかたになくをは人のきゝ捨て
忍ふおもひそこゝろくるしき
せめてわかなみたを袖にまかせはや
月もしはしの名殘とそなる
拂はしよ人のゆかりの袖の露
身にしむ風に侘つゝそふる
かす人もあれな涙の雨やとり
うちつけよりやなみたおつらん
石の火のひかりを中の契りにて
更るまて宿夜に誰を待ぬらん
うしやねのみ木からしの床
いつのまにかは老のきぬらん
かはるをもわか心にはまたしらて
身にうきふしを猶そしたへる
つれなくは我もといはん中ならて

人のつらさそ彌まさり行
いとはれはなれぬ先より絕もせて
よそのみるめもはつかしのみや
忘られはやかて命も消よかし
つれぬ習を身をなけく比
君にそへはわか心をもうらやみて
心ともなきを別の行衞にて
おやのいさめもつらき我か中
情もうきもおなし別ち
我中は夢にまさらぬ契にて
ぬしさたまらぬ戀もこそすれ
よそにはやむかへとられはいかゝせん
これや別のはしめなるらん
いとはれんとともしらぬ物思ひ
尋てもなしとこたへはいかゝせん
命のうちを人のとへかし
たのまはこそはこぬもうからめ
あた人と知におもひをなくさめて
いかにせんともしらぬこゝろそ
あふせなき世にもうき身の名取河
たちそふきりのいくへ成らん

渡りみぬあふくま川のつらきせに
あかつきまてのともし火のかけ
打をかぬ文をまなひにおもははや
面影の殘る限やしたはまし
文字きゆるまてふるき玉つさ
衣〳〵の跡は淚をたよりにて
硯の水もつくるたまつさ
今朝をもとをくおもふ戀しさ
返しみぬ文に心もさたまらす
枕をしやる山ほとゝきす
引さすや琴をなく音にゆつるらん
うき一ふしにとをさかる中
しら糸のなかき契も何ならて
たつにそ旅の衣をくれる
うつせみのはかなき契をへて
人のなさけを露にをく袖
今は身のちきりも秋のあふきにて
はかなやまては秋も更け
を山田のいなせもいはすうき中に
まへわたりする人はうらめし
花をさへわか宿からやいとふらん

しほるゝ袖にいとふ春秋
物おもへは夜も明やらす月もなし
　事とはゝ涙〻(に歟)みへん我思ひ
いつれ待くれかへる明ほの
　いかにせん夕〳〵のわかなみた
おもひ捨しは誰かこゝろそ
　ふる郷人もとひ捨し空
うき身をや道かひにたにいとふらん
　しらぬ東に我そまよへる
おもひあれはふしの煙の身にそひて
　うきをあまたにかさねをく人
いかゝみるひえをふもとの戀の山
　こゝろの程をなにゝたとへん
そめ色もおもひの山のふもとにて
　うきぬれ衣をいつかほすへき
ことのはにたはれしまてを名の立て
　なをなからへは待事やある
人こゝろかはるに我もならへかし
　とにかくにしられぬこそは心なれ
我かためつらき人の戀しさ
　袖のなみたそほさん間もなき
人のうき身のかなしさを歎世に
　ちかけれは都の傳もきく物を
うしやなか〳〵かけはなれはや
　忘すきつゝそふそうれしき
おもかけやおもはぬ人にかはるらん
　枕のうへに殘るおもかけ
かきなてし涙たはつくみたれかみ
　我なからわれにまかせぬ身はつらし
こひのさはりはつかへぬるみち
　そのとのはもあはれなる傳
心にもまかせぬ中のとゝ絶して
　たつねてしはしまよふはかなさ
大かたの契りをふかく賴む世に
　さのみに人のなとかつれなき
えにしあらておなし此世に生れめや
　にくしとたにもえこそおもはね
うき中はとのはにさへかゝらめや
　ひかへぬ駒も道のやすらひ
行ふりに音信なるゝ門の前
　はらふ袖にも露そ打ちる
おもはしの思ひを月やすゝむらん

こふるむかしそ忘れかほなる
物いはてかたみにむかふよはの月
たえて人まつともし火のもと
夏むしの音にこそたてねうき物を
くるしふこころなにかかくれん
我そゝれ螢をよそになかむなよ
今はうきにそかゝる玉の緒
ほのみしをあやめのなかきねになきて
大かたの秋たにあるを待くれて
菊うつろひぬならひもやする
心よはなよいかゝちきりし
槿の露かと人もうつろひて
立出て打なかむるもなくさます
花にやしけるものおもひくさ
いつとはれてかかくとかたらん
みし夢をこゝろ一のわか中に
命もしらぬおもひなりけり
うき中よいくつの神をちかふらん
現とも夢とも身にはしらさりき
酔のまきれの情かなしも
こゝろうかれつ門にこそたて

君か住やとゝしきけはなつかしみ
さしていつくをなかめならまし
たえしのち住所さへしらぬ世に
今さらなにのうらみおもはん
戀しなんそのきはをたにせめてとへ
おもひ忘れぬ程のあはれさ
我に人うくつらくして絶し世に

雑上

たつとはかりは春ならぬ空
山さとに嶺の霞もいつかみん
花にをくるゝ身をいかゝせん
山さとは梅さく春も冬こもり
やまもとおもふあけほのゝ空
年こゆる夜はもくるしき老の坂
あふさかや春をとゝむる關もかな
老にはとしのこえくるもうし
春の雨芝生の露にふりそひて
むかしの跡に霞をそみる
我にくれゆく春の山のは
染よとやかすみも袖をきそふらん
又なかめけり春の明ほの

今年たに老は霞の消もせて
外山の雲はさえかへりけり
秋篠の郷とやかすみかねぬらん
いはふにも名残かなしく袖ぬれて
野となるさとにわかなつむ比
染やらて梢の雨や過つらん
かた枝くちてもなひく青柳
いそかぬさまにいそきこそすれ
花に行よそめはつかし墨の袖
あた人とてもさのみうらむな
月花にめてすは千代も何かせん
みれはかすみそ猶ふかくなる
老はたゝ花もむかしの色ならて
苔にむもるゝ道かすかなり
古寺にひとりうき世の花咲て
あるにまかせは安からむ身そ
花をいとふ心も山のさはりにて
彌生の月のいりかたのかけ
唐人の舟あそひする日はくれて
心をはとめぬ春こそおろかなれ
きけやかはつもうたかたのこゑ

ぬれ〳〵かへる春雨の山
ねにたてぬ鹿は霞に立うかれ
夏をわするゝ袖の夕かせ
しらかさね雪を衣に今朝かへて
日かすをふれは近きもろこし
五月雨はさらに五の湖をみて
螢さへとゝをせによるき舟河
くらまの山のさみたれのころ
ふる郷はおもはぬ虫のやとりにて
ほたるあつめしまとのさゝかに
分ぬかたのゝ露ふかきころ
これやこのほしあひの外の天河
一夜をもとをさぬ月の曇るて
なみたに更る野のみやの秋
こなたをはいとひて君のそふ中に
わかれはかなき野のみやの秋
又きこゆなり初鴈の聲
荻の上の露の命のなからへて
秋も半のゆめのよの中
とむるかたなしや隙ゆく駒むかへ
みれは梢をすくる秋かせ

月殘る松の葉こしの海士を舟
　たえにし中も思ふとをしれ
ねやふりて風は身にしむ有明に
　野分のあとのすみ渡る山
木のもとの落はに露の音はして
　なかるゝ水や秋をうかふる
大井河もみちの御舟あとふりて
　秋ふかけなるうつの山越
長月にいくへふるらん富士の雪
　山をこえきてまよふうき雲
世にめくる我かたく火かは村時雨
　吳竹のすゑ野の村は霜消て
露めつらしくむすふ冬草
　人のあとみぬ霜のさひしさ
面影も今はかれ野の草の原
　かはらては何はの何か殘るらん
ひとりの峯のよそのしら雲
　あけぬときはく道の行かひ
程〳〵に身をいとなみの年の暮
　入日にかゝる雲の一むら
山の端は眉よりほそく遠きのに

夏ふかきすそのゝ月はほのかにて
夕日色こきみねのしら雲
　まよふ雲より山そみえぬる
嶺たかきみとりの木間瀧おちて
　出る日の霞ににほふ山遠み
なきたるあさにあをきうなはら
　ほしうつる夜の鐘の聲〳〵
あかつきの山の下水色すみて
　立わかれつる霜のあけほの
よこ雲のはてはあまたにたなひきて
　夜をさむみ空にや霜のみちぬらん
山の端みえてほししろきかけ
　山さとの雪に一夜のかりねして
おのへをいつるあかつきの雲
　まよひ行夕の村に火はみえて
ふる畑さひしとを山の雲
　けさ別をち近人となるもうし
あらしの雲も袖のおもかけ
　かすかにみるもちかき釣舟
くもりなく海はみとりに夜の明て
槇の戸（築イ）しろく月そうつろふ

河をとに峯のあらしもさ夜更て
　瀧しろく雲より上にあらはれて
巖もましろみねの松杉
　面かけや入會の鐘に消ぬらん
雲のひまなる遠山のまつ
　ふりそめし末野の雪の絶〳〵に
とを山みれはかさなりにけり
　谷ふかく山かさなれる道すから
木すゑふみゆくみねのかけはし
　夕霜さむみからすなく聲
人もなき峯の梯雲おりて
　猶も人まつ舟そやすらふ
物すこく河風吹てくるゝよに
　むらたつ鷺のあとは晴けり
虹うすきむかひの山の夕日影
　さもくるしけに小田かへす人
山さとの道は木本さゝれいし
　もろともに老のね覺の物語
あらしの松のあかつきの聲
　何事もみ聞につけて驚きぬ
うつしは雲になひく松風

　そことしもなき古郷の跡
松おひぬいく世の人におくるらん
　眞砂におつる秋風のこゑ
村とをきみとりの竹に江は暮て
　いつのまに身にしむ風と成ぬらん
昨日からへし松の木たかさ
　磯うつなみのあらき明くれ
年ふれと岩におほるは小松にて
　岩ねふむ道の絶〳〵ほのかにて
竹の古葉にましるむら草
　なみたはかくも年をへにけり
紫の色こき竹のくちやらて
　すめとなりたる柴の庵かは
をのつから岩をかきほの苔むしろ
　をとすさましき谷川の水
岩の上に常葉木闇くかさなりて
　巖そはたち波しろくみゆ
風さはくうらの松原日はくれて
　ひとりむかへる水の涼しさ
はなれその岩ほの上に釣たれて
　釣のおきなのいつる朝夕

数そへは岩にも舟の跡みえて
苔に水おち夕風そふく
こすなみやしはし岩ほに残るらん
戀すてふ心はいつも安からて
しほひしほみつ磯の岩かね
かゝれるあみのうほの數〳〵
名もしらぬもくつしほかひましはりて
わつかにみゆる山の下道
とをくさす潮にひろき江となりて
舟さし下すをとはすさまし
打よする波のあさみのさゝれ石
鷺のむれゐるいその松かえ
かさなれは波の上にも浪をみて
磯ちかくなるよるの舟人
更ぬるか巖にたかき浪のをと
稀にくる山ちの末はしつかにて
岩のしつくをうくるかけ水
をのれ〳〵にすめる山鄉
岩にせきかけひにうつる谷の水
氷ゐしこその深雪の先消て
つき〳〵にゆくゝいはかねの水

岩のかけなる山のかくれ家
かけ水の心ほそくも音はして
おく山住はたゝ鷲の聲
岩かねにしつくはかりの水落て
夏の夜とおもはぬ斗月すみて
まつかせふくるたかさこの山
やすらふ事のおほきみやこち
家〳〵に賀茂の川水せき入て
大ひえにのこゑをきけや法の道
横川の水のあかつきのこゑ
鶴にへたつるなみのとも舟
明石よりてに取棹の淺ちかた
なくさみもたゝめの前にあり
朝夕の鐘の浪まのあはち島
たくひなくよはひはるかになからへて
いかなる種そからさきの松
いく年を都戀しく送るらん
風もともなき志賀の濱松
なかめやる心のはてや一まつ
あかすよ誰も住よしの濱
旅にいくらの國を過らん

しほかまの浦そたくゐも波の上
望とけても望こそあれ
おなしくは宮こにみはやふしの雪
つく〳〵とのみむかふ大そら
かゝる山も世にはありけり富士のたけ
しはしはみゆる山のしら雪
ふしのねは千里になるも麓にて
名のたつをいかに忍はん我か心
けふりも雲にまかふ富士のね
やかてこゝろそ春になりぬる
なひかねと便の關を行道に
かへるにしかし東路の旅
おもふともなこその關はゆかれめや
末たえ〳〵にかすむ澤水
朽わたるその八橋は數たらて
うれしきともあふにこそあれ
宇津の山夕闇ゆけは月出て
明やすきよに出るたひ人
清みかた波に横雲たなひきて
むなしき山に向夕くれ
武藏野や行衞に雲のかさなりて

しほやきころも露も拂はす
草しけき野島かさきは道絶て
打そふならは戀やなからん
河なみの中をへたつるいもせ山
難波の寺にかよふとのは
を舟よふ三の浦風さよ更て
水に涼しくかよふ浦かせ
蘆のやのさとの前行生田川
あしかりを舟行かへるなり
哀にもいとなむ海士の家つくり
木ふかき蘭の風のゝとけさ
住なせは山さとひたるみやこにて
ふり分かみの長きよもきふ
野となれる里に非つゝの朽やらて
安くはいかて家を出まし
八重むくらとつる軒はの夕けふり
いく夕くれか恨きぬらん
古郷に人も老木の松の風
忘るゝ草の露そ身にしむ
蓬生も杣木となれる古郷に
野分のあとはあさきかくれか

露寒き草の鼠のはひ出て
つゆを分行道のひとすち
さゝかにの淺茅か末にいとはへて
みれはいとよりつたふさゝかに
軒ふりて物あはれなる草の戸に
草葉たかきにかくれたるいほ
道のへのへたての垣ほかたふきて
古郷をおもふはかりに日は暮て
淺茅風ふく野への ほそ道
樓癡にましる蓬の末すくに
しつやさひしきその ゝ細みち
さらは身のとくなき數に成もせて
ふるきみやこに殘る草の戸
天彥さひし雨くらき空
宿直する岸もよ深き古宮に
立よりてこす卷上る槇の戸に
とへと人けもみえぬ古みや
引とつる戶細の內の物かたり
ふかき岩やに誰か住らん
をちかたけふるうす雪のくれ
衫の陰松の木間に軒みえて

いかてうき世になからふる人
煙たにたつひまれなる草の庵
野澤の水の寒き朝あけ
山もとのけふりに村はつらなりて
霞行淀の川舟みえかくれ
水のけふりそむらにあらそふ
巖にこもるおこなひの聲
打出すひかりのくらきよるみえて
幾度か消ては霞む色成らん
なみたに更る秋のともし火
衣〳〵の夜ふかき跡に獨ゐて
明日の文かくともし火の本
立ゐにつるゝ人の面かけ
ともし火の光さやけきかへの本
時〳〵風のさやくくれ竹
いつかたもしつまりはてゝ更るよに
あらしの隙のしつかなる比
曉はほと遠き鐘もさやかにて
いつくをわかぬ雪のあけほの
寒る夜のあらしにめくる鐘のこゑ
在明の月のわつかなる空

鐘ひゞく野寺の杉に雲おりて
　むすひかへぬる草のかり庵
もる雨に床やすからぬさよ枕
　別夜ふかき床のさひしさ
そむけをく灯あをみ消やらて
　燈はきえて砧の深きよに
夢なき床にひとり待るゝ
　おほつかなきは心なりけり
みすしらぬさかひにいたるよるの夢
　つらさやおなしこゝろなるらん
夢も又現をみれはなくさまて
　としをふれともあはぬかなしさ
たのみある事をみし夜の夢かたり
　明ぬれは又いとなみの道もうし
ねさめにすめるこゝろともかな
　心まよひはかへるあかつき
覺ぬれと面かけのこるよるの夢
　姿はみえす聲そきこゆる
何かさて空ふくかせと成ぬらん
　ことのはあれはまなひこそすれ
山彦もひとりはいかゝこたへまし

遠き野のかへさの道に日は暮て
ひとりのむらにかすむ笛の音
　風ものとかに吹かふるそら
笛竹やその夜の聲をうつすらん
　更てしつけきともし火のもと
みたれ碁のいしにさはれる音はして
　こゝろのうちよみえぬ物かは
あさはかに書なみたしそ筆の跡
　何を誠とたのみしもせん
色〳〵に神代をしるす筆のあと
　なに殘らましことのはの道
ふるき世をしるもおもへは筆の跡
　歎ありけに琴の音そする
なすわさにこゝろの內もあらはれて
　雪におとろく朝明の山
春秋をなす事もなく送りきて
　今は世に直なる道を忘るなよ
かせかはりゆくやまとことのは
　心のまゝにあらぬくるしさ
理をいひつゝけはやゝまと歌
殘ることはに夜は明にけり

双帋よむ窓のともし火かけ更て
　ひくや駒のゝはるかなる道
ためしにもなすこそ古き物語
　愚にも身はわさなくて月日へぬ
草木はをのか時〱のいろ
　人はいつくのさとに住らん
馬草かる跡のみみえて廣きのに
　野はうら枯に寒き夕山
村とをみしつか牛引袖みえて
　いつまて秋に心つくさん
行かへるを田の山かつ年ふりぬ
　鳴たつ澤のをしの羽音
谷川のなかれをうけて作るたに
　行水に入日すくなくうつろひて
になひ持つゝ渡るしははし
　暮はてぬれは舟もかけせす
歸り行人もひとりの村さひて
　おもふと心〱にあるならし
たちましはりてさはく市人
　人の聲してむらそ暮ぬる
松かせや古き市路にさはくらん

　程は雲井の旅のはかなさ
鶴の子のはねならはしにすを出て
　きよきにならふ心ならはや
かもめゐる入江の水に釣たれて
　いかにねてかはこゝろやすめん
風さはき雨ふる山の夕からす
　雲にまかへる雁のおもかけ
夕烏ねに行空はほのかにて
　あらぬ色にはなとかはるらん
ねくらとふ鷺さか山の夕からす
　あしの枯はのそよく江の水
鷺あさる古澤の邊の夕日かけ
　池水におふるやあやめまこも草
松のはひ枝にさきの一つれ
　駒もおとろく岩かねの道
人かけに片山鳥の鳴たちて
　雨に夜ふかきともし火の本
関ちかく聲すさましき鳥鳴て
　霧より上のかりの一行
山本の朝川小舟さし捨て
　いつれはあくる夏のよの月

（くらき江イ）闇の夜の蘆のはかくれ舟さして
をかのへのまへに木間の海をみて
おちはにゝたる海士のつり舟
嬉しき傳そめをさましたる
釣舟のあかつきふかく波にきて
海原やそらも一の夕波に
ほしのかけなる海士のいさり火
霞つゝ舟こそみえね浪の上
夕くれふかきおきのいさり火
霞もいくへ遠つ島かけ
いさり火の春の夜舟にほのみえて
つなける舟のみゆる海つら
あしのやの軒に釣竿たて捨て
もらさしとこゝらの年を淩きて
今は波こすあまのすて舟
海にむかひの山そ稀なる
もくつをや海士は薪とたのむらん
雲に明行遠のつり舟
うなはらやこさぬも波を山にみて
身につもるこそ老の波なれ
みちくるも朝夕鹽は跡もなし
釣する舟そ波にやすらふ
あはれにもあまは住かを旅ねにて
さよのねさめの風あらきころ
うきしつむ舟にも海士はおとろかて
打つけにふむ道そくるしき
あら磯の木のね岩間に舟よせて
朝に出る駒のあしをと
道のへの小川のさゝれ石ふみて
水かさまさりてみゆる河つら
流木のかさなる末はよとむ瀬に
月につれゆくよるの山道
槇たてる谷の小川の音すみて
すさましき色をまさこの水すみて
淵は千尋の川そひのみち
雲ははや越ぬる山の夕ま暮
あとなき雨をのこす川をと
松あをく色そふ山の陰にきて
末はのとけき瀧のしら浪
夏の日を忘るゝ山の陰くれて
きえぬ雪みるたきの岩なみ

雑下

春の別におもふ行すゑ
門出にも一本柳おり侘て
　みちをたゝすの神もたのもし
旅たつはあふ坂山に手向して
　その名にも似ぬ心なりけり
相坂をこゆれは人にへたゝりて
　淺茅か原にかすむ古道（路イ）
はる〳〵とひはりなく野を朝立て
　かへるさおもふ旅のはるけさ
小萩原朝立露のしけき野に
　みちのお花も別とゝめよ
野となれる古郷いてはいつか（こイ）みん
　今こんといひしを待もをそき日に
とをきわかれよいつかあはまし
　けふをわかれの日とそ悲しむ
古郷をよはひの末に我か出て
　たゝよひきぬる旅のあはれさ
遠ともおもはて出しふる郷に
　とをくかへるもこゝろなりけり
旅たつを名殘のあまり送きて
　心ほそくもたひねをやせん

送りこし人も道より歸る日に
　涙と（をイ）ゝもに野へのかりふし
立いてし昨日の道はふたりにて
　たち出し都のかたの空をみて
駒とむる野にかすむ山のは
　すくなくなりぬよはの虫の音
今日は山昨日は野への草枕
　わかましはりは都なりけり
情ある世をなと旅と思ふらん
　猶なかきよの明やらぬそら
旅まくら袖の雨さへふりそひて
　しらてねしのにさとも有けり
小夜更て犬の聲きく草枕
　雨きゝわふる古郷の床
たひ枕ねさめの心身にそはて
　たえ〳〵みゆる山本の道
草まくらまた夜をこめて出し野に
　一方に定めさるこそ心なれ
しらぬやとりのあかつきの鐘
　雲はいつくにかへり行らん
身はかくてまよひはつへき旅の空

哀かけすはさていかにせん
宿とひてよるの雨きく草の庵
　風のをとこそよはくつよけれ
梓弓はる〳〵分る山みちに
　さも深き情に似たるヿのはに
山ちをしへてやとかさぬ人
　ヿのはに末の契もさたまらて
ひとり（ロイ）〳〵のやとのはかなさ
　はるかにみえて雲かゝる山
舟はやみ又あとになる沖津島
　霞をしのく風そのとけき
興津舟なみの入日をほにかけて
　あとをのみゝつゝいそかぬ旅のみち
つるゝはあしをいたむくるしさ
　宮こはなるゝ名殘かなしさ
歸りみる梢は雲に消やらて
　誰とひてあはれもかけんわかすかた
山ちのあめにまよふ夕くれ
　まヿの道はいさめをもしれ
つかれたる駒も暮れは山越て
　あるとも草の庵やたのまん

いかにねて野へに一夜をあかさまし
　まよふこゝろのやみいかゝせん
ともす火のたよりに過るよるの道
　おほえす今制そあさみせらるゝ
枕かる木陰のやとりよをこめて
　きえはわか身の跡のかなしさ
をくれつる夜舟にみよと火をたきて
　遠山おろしあかつきの鐘
ふる郷の夢をはのせぬとまり舟
　立てみゐてみ物思ふなり
古郷の山かくれ行舟のうち
　行衛やいつく秋風の空（雲イ）
和田の原波の一葉にさほさして
　いつくの山か我を待らん
浮雲と身もこそ消め旅の空
　末もつゝかぬみちそみえたる
旅人や出てふゝきにかへるらん
　いく度かたのむやとりを出つらん
うきかりふしの明やらぬそら
　哀さきたつわかゝたの道
かろきみは出るも安き旅の宿

あはれ月には誰かねぬらん
みたれにし露の跡ある草まくら
いつも夜ふかく人そわかるゝ
我か庵や旅のやとりにうかるらん
いついとふへき此身ともなし
ぬしらぬ野山に安き旅の宿
夢さませとや水の庭鳥
明るまて打ねぬ物をとまり舟
それとなき古郷とへは袖ぬれて
旅なるうき身人もはつかし
友とてや鴈もかへさをさそふらん
おもへはわかみふる郷もなし
旅のあはれは山ちのみかは
古郷に人をおもふもくるしくて
ならひにいそく道のはるけさ
旅の宿誰を契もあらぬ身に
行盡すへき野ともおほえす
暮ぬまにいさゝは結へ草まくら
とをさかるより袖そしほるゝ
またみゆるみやこの山になくさみて
打渡す橋の半を波越て

おりのりくるし大舟のうち
へたつる雲のあとも殘らす
行舟にいつく（くつイ）の山の過ぬらん
宮この内のちかのしほかま
夢も今をしまか磯のかり枕
古郷の便もまれの遠つ國
夢路へたつるさよの山かせ
人をこそ旅には憑むならひなれ
みちしるへする山の鳥の音
いたつらに物みてくらす人おほみ
雨やとりするみちのへの庵
在とみる雲もむなしき大空に
波の千里を過るはや舟
誰かとかへりみ送りそする
旅にても似たる人ある行ふりに
いく度かへり又をくるらん
しら波を舟にいたゝく渡しもり
よるのねさめの水のたえ〲
いつくともしらぬ浦はのとまり舟
名殘かなしくなみたおちけり
古郷に又わかれぬる夢覺て

其国ふりのかはるとのは
むれゐつゝ舟待岸のやすらひに
　人もとはもかはり行郷
この世かはみやこ出ての旅の空
　しほひにしろき石はまきれす
かりねする松原すこき夕闇に
　身は心よりまよふとをしれ
をしへつる山ちをあたに聞捨て
　朝たつ空は八重の白雲
おもはすも花さく山に旅ねして
　旅のつらさをいつ忘まし
越はつる山よりやかて舟の道
　胸に水かふ人そみえたる
いそきこしかひなく待や渡し舟
　まよふとたにもしらて過けり
うらやましうき山越に興津舟
　ねられぬうさも今朝や忘ん
よる出てとをくきにける舟の道
　行もとまるも旅そくるしき
やとるへきものか野中の一庵
　そなたよりふく風もなつかし

ふるさとの山は雲たに時雨こよ
　いてし都のとをきをそしる
うはかきもきゆる便の文をみて
　とにもかくにも宮こ戀しや
消やせんなからへやせん旅の空
　度〳〵の便に人の文もこす
旅に出しやなき世なるらん
　いつはりおほき文はうらめし
いく年か旅のかへるさまたすらん
　塵の世なからとしそつもれる
あま雲のなひく山には住もせて
　人はかへらぬ春のふるさと
いりしより嶺の霞を衣にて
　幾程もあらしとはかり月をみて
半天のこる山あひのさと
　程もへすかはりはてたる人心
きのふのみやこけふのやまさと
　世を捨る友と後にこそしれ
住そむる山そかなしき松の風
　まちみる程に月そ更行
陰たかき山をむかゐの柴の庵

とふ人におもふ心のかはりきて
うき世きかしの山かけの庵
　軒しろく行月そみしかき
かけひさへすくにわたさぬ谷かくれ
　まれにとひてはなといそくらん
ともに人すまんといひし山のおく
　みれはさくらの花そ咲ぬる
年月のうつるもしらぬ奥山に
　花にふりくる雨いかゝせん
立よりてわか影かくす一庵（きくイ）
　たゝ山水のおつるをそみる
世捨人打もまきれぬ柴の戸に
　おもへはつらきあふ坂の關
庵しめてあらしを友と憑む身に
　語をきくもきかすかほなり
住山に世のよしあしも何かせん
　なくさめて忘ぬまては何かせむ
うらやむ山にふたりすめかし
　すてんとの身も等閑のほと
山に我たゆへくもなき老のきて
　おもひしつむをさていかにせん

捨はやの世にたらちねの在もうし
　あらは世に又この比やおもはまし
身のうき時も戀るたらちね
　忘はてぬるこゝろはかなや
みとりこのなくをちふさになくさめて
　山に入ては安しとそきく
おもひたつ世に幾年を送るらん
　人はこゝろのかはりこそすれ
世にかくと捨るきはまてしらすなよ
　心よはくは身をもすてめや
名殘ある事をあまたの世の中に
　片糸のみたれたる世にたへ侘て
こゝろほそくも身をそ捨ぬる
　いつこの岸をわれもはなれん
呉竹の世をあたとに捨やらて
　かしこき道は學ふにそある
大かたの世はみな似たるこゝろにて
　しはしの身をも安くなさはや
千代ふともうきに送らはかひもなし
　むかしなからのこゝろ成けり
侘人と色みせぬこそ眞なれ

世はいつくともおもひ定めす
我か心いくかくれかをもとむらん
世をいとはすはなにもいつはり
夢といひ幻といふとのはに
ひろふかひなき年なみはうし
玉さゝのあられし此世いとはゝや
いにしへも今も心はひとつにて
人をふたりに老やなすらん
何をうき世のなくさみにせん
人の身のかりなる道をいとふなよ
おさまれる世に數ならぬ身を恨
うき時はうきとも歎かす
理しらぬこゝろはかなや（コイ）
忘てやうき世を人のかこつらん
世を一すちにたれたのむらん
たのしひにかならすうきはましはりぬ
はかなや何をおもひ侘ふらん
安くなしうき世になすも心にて
うしとも人をかこちはてめや
むまれすは世の理やしらさらん
身には數そふ涙とそなる

入會の明日の聲をもしらぬ世に
ひたふるに恨はてんもさすかにて
ひとりのためのうき世ならめや
物いはてこそ身をもかくさめ
いさめさへ（をもイ）とかめらるへき御代はうし
おもふといふもいつはりそかし
後の世のつらくはこの世出もせて
佛のみちにいかてすゝまん
のそむなよ此世はかりのくらゐ山
けふりに雲のまかふ山かけ
消ぬとも誰かしらまし桑門
となりもまれにむすふ柴の戸
おもひたつきはゝあまたの世捨人
ともすれは限ある身の忘られて
人ののそみそうへからうへなる
身ひとつも住れぬよこそ恨なれ
千人もめくむ人もありけり
中〳〵につれなきこそは憑なれ
老の命やきみか代をまつ
寢覺する空こそ更に昔なれ
歎あかせる老のあはれさ

たのむかけなきみをはおしまし
老はたゝ山の端近き月にこて
おもひやるにも袖そしほるゝ
なからへはいとゝ老こそつらからめ
又くりかへしかたるふること
老かみやとしへぬ間にも忘るらん
わか身の末をおもふかなしさ
立ゐさへ安けにもなき老をみて
いつの間に遠き跡とは成ぬらん
こゝろは老ぬおいのあはれさ
人こそ人のかゝみとはなれ
白かみはよそにみるさへ哀にて
むくゐある世を身の契にて
いつの間にいとひし老と成ぬらん
今朝は猶夕付鳥に袖ぬれて
老につかへしむかし戀しき
うつりかはれる今の世中
いにしへは雪にむかはぬます鏡
今いく程か人にそはまし
玉のをの老を待こそ哀なれ
うき世の外や命のはへん

物おもへはまた老やらぬ身も老て
身はうきなから明て暮けり
ひをむしの命あらそふ世中に
いつきゝ捨んいりあひの鐘
かねてその限しらはやわかいのち
あたにわかるゝたひの宿〳〵
情あるさとにもなれぬ世捨人
何をこゝろの眞とはせん
夢と過うつゝとかはる世中に
心なくきゝこそ捨れ鐘の聲
けふもたか身にあたの世中
老のこゝろそ分てあやうき
定なき事を習ひの世中に
嬉しきはうからん事のはしめにて
世そ一かたにめくる道なき
こ家かちなるすまゐかなしも
いける世を幾所にか迯るらん
旅のかへさを待やたらちね
今こんといひて其まゝ捨しよに
いま聞とを老そ忘るゝ
心にはとをきむかしも定かにて

けふにあへるもはつかしの身や
老ぬれは雪にあやめをかけそへて
數ならぬ身そむかし忘るゝ
めくみしをむくはんとすれは事たえて
つゐにわか衣を墨になしもせて
いひのかるれと又つかへけり
藻かり鵜くむわさのあはれさ
世をわたる道もさま〳〵ある物を
山住も年へて後はいかならん
身のさかりにそ世をも捨へき
きのふをこそとうつりかはれり
心さへよはひの末はそれならて
あしからし身と憑むかひなし
道あるにそふも我こそをろかなれ
まなひもとらぬ事のくやしさ
かしこきも命はかなくなれる世に
何の道にか名をも殘さん
いときなき程よりみゆる人こゝろ
なと身のくせとおもひきぬらん
をしへなはあしき心もあらためよ
何事も我とはしらん物ならて

あしきをつくる友のうれしさ
身をいたつらになしやはてまし
道ならぬ道の友とそかなしけれ
琴のしらへそ色〳〵になる
傳くる道は誠をはしめにて
あらはれぬ玉は衣の恨にて
三世まてしつむ袖はぬれけり
はかなくもめなるゝ人を友として
たかきしなにも身をはのそます
まとをおもふこゝろあるへし
中〳〵の民にや道は殘るらん
聲はきけともあふ事もなし
後世の旅人いつくほとゝきす
あらぬ身となる老のあはれさ
かねてよりわか後世の道とひて
またるともおもはぬ身こそ哀なれ
つれなしと人を後の世やみる
思ひやる道すさましきのへの雪
さそ後のよのたひの秋風
程なくかへる旅そうれしき
後の世を行てわかみるよるの夢

あらぬゝたちを在とこそみれ
夢やたゝふりにし人のためならん
かはかぬ袖よさもあらはあれ
たらちねのあとは歎を形みにて
旅にしあれは友もかひなし
つゐにゆく道こそ誰もひとりなれ
こゝろやのこるくれかたの色
雲をのみふりにし人の形見にて
つく／＼むかふ夕くれの空
消にしはいつれの雲となりぬらん
神の社のまつかせの暮
立さはくねくらの鳥ゐ物ふりて
枯木の中にましる常はき
おくくらく古き神かき人もなし
よむとのはにつれなからめや
大御田に雨せきくたせ天津雲
使よりなひく心はしる物を
君かまつるや神もうれしき
日をさして行旅のくるしさ
神まつる君か使をまつ國に
おほくの恨其跡もなし

かへりきて都をまもる天津神
足たゝぬよはひや神も歎らん
いつみ熊野をみちのくの末
それかとはかり殘るかけはし
明かたの灯うすき神の前
しられぬあたは我みなりけり
はしめなくはてもなきよに生きて
つゐにや廣き法をうけまし
かたちなき心は空にひとしくて
古き社のかすむかた原
道ほそく尾上の雲に寺みえて
末まて今のこゝろならはや
聞からに身も捨つへき法の庭
きゝみるとそみな夢になる
人かへる御法の庭に日は暮て
捨んとはおもひもよらぬ世成けり
若きこゝろをおこすあはれさ
佛となふる草の戸の秋
閼伽水に菊や紅葉を折そへて
あかの水にも袖はぬれけり
極つむ山ち行／＼露分て

なみたこほるゝ袖とこそなれ
曉の山水むすふ苔ころも
　かくしあらはす法のとはり
いつもたゝ月すむ物を鷲の山
　いつはれやらん雲としもなし
なかめはやこゝろの月に秋の空
　ふたらくの南にゆかぬ海士を舟
はつせの山そわかたのむかけ
　ときも又おそきもおなし法の道
よもすからきく寺〳〵の鐘
　法のこゑきく山かけの庵
國めくるおこなひ人の旅の宿
　曉の松のはこしに霧立て
法のこゑするみねの古寺
　つもるおち葉をはらふ秋〔松イ〕風
朝きよめそれもむかしの古寺に
　みるをあふにて程もへにけり
うつすこそかくれし後の佛なれ
　まよへる人にやとりかしけり
佛こそ三のさかひの主なれ
　朝夕へにさゆる山みつ
こけころも露のひるまをなくさめて
　こゝろきよきは墨染のそて
室の戸はこけむし塵にうつもれて
　契のはてはあはれなりけり
引かへし法のとはの書文に
　命なかさを松やおもはん
山しなのやますも御代を祈きて
　身の何事かさのみ歎かん
祈ても君〳〵たれとおもふ世に
　有増よいつか眞の道ならん
はつもとゆひにいはふしろかみ
　時代かはれと猶そつかふる
君もたゝ道ある老や惜らん
　おなし世に生あふこそ契なれ
かしこききみにすなほなる臣

發句

はつ春毎に草庵にて連歌さたし侍る發句
さえけりな淡雪つもる春の庭
水にちる雪やおもかけ春の庭
殘れ雪いまよりまたん花もなし
　四宮左衞門尉家にて和漢聯句に

下解て去年の水行氷かな

正月七日六角わたりにて

わかなよりたまるや雪の花かたみ

東に侍しころ

若草に雪もおしまぬかきねかな

上池院和漢聯句に

にほへ梅はなは色みぬあさ霞

細川淡州家にて

梅かゝに成てのとけき嵐かな

吾妻に侍し時那須播州家にて

山みえぬ松は霞のうへき哉

石清水社千句連歌に將軍家にかはりたてまつりて

川かせに霞もめくる麓かな

安富修理亮千句第一霞を

山に海うみに山ある霞かな

細川右京兆亭千句に

雨ならし霞にぬるゝ草木哉

相國寺蔭集軒にて

春さむみ今年やなへてをそ櫻

在人發句すへき由申せしに

咲かぬ間やはなの青葉に春の風

北野會所にて

峯の雪消かへるはなの梢かな

花の發句に

又みるもおとろく花の朝戸かな

細川右京兆亭千句に將軍家にかはりたてまつりて

色にたて花待ほとの峯の雲

同千句にかはりたてまつりて

花に明月には殘るよはもかな

賀茂社千句に花を

花に明松に夜ふかきはやし哉

綾小路わたりにて

色そ花にほひに待ん風もなし

藤田にて

さほ姫のをるやにしきの糸櫻

波々伯部兵庫助所望に

糸さくらちらぬ花しく木陰かな

文龜（元イ）二年二月十六日淸水寺成就院にて

瀧ならし花に音羽の山櫻

同年三月十八日松梅院松のはのといふ五文字にて

予發句し侍ると夢にみしとてとりおこなはれしに

松の葉のつきぬ世うつせ花盛

茂木總州家千句に山花を
花そあらぬ峯のしら雲谷の雪
　同千句に人にかはりて水邊花
下水にうこかぬなみや花の陰
　細川土州の家にて
花に先あらしをゆるすさかり哉
　伊香保山温泉にて
花さかり雲もまことの深山かな
　長尾修理亮家にて千句夕花
花に人こゝろみゆへき夕かな
　赤澤兵庫助家にて
日そなかき月に分はや春の空
　月待とて人〳〵連歌し侍しに
かすむよは山さへ月のすかたかな
　蜷川中務丞春の月を題にて發句してをこすへきよし申侍しに
山の端か月のきは在夕かすみ
　月次發句に
花さかぬさとやいつはり歸鴈
　周防國より春京へのほるとて
はなに行こゝろやあとにかへる鴈

　二月廿五日千句に
常世にやはつ鴈わたる朝霞
　飛鳥井三品に和歌會侍し後人〳〵すゝめしに
雨にちる花にとかなき嵐かな
　攝州より人のこひ侍しにつかはす
面かけにちらぬは去年の櫻かな
　細川房州家月次連歌に
花とひて小蝶を殘す青葉かな
　細川讃州にて侍し會に
はなに風くやしかるへき青葉かな
　おなしきころ
霞さへ曉かけて月もなし
　月次連歌に
雲雀あかる末野にかすむと山哉
　千句連歌に人にかはりて遲櫻を
八重さくに日かすやうつす遲櫻
　月次のためとて人のこはれしに
藤かつらこほれてちらぬ木末哉
　赤澤兵庫助家月次連歌に
梅花藤にゝほひて春もなし
　上杉禮部館にて暮春に

暮行も猶これ春そ藤つゝし

夏の發句に

花そ春月もいはし夏の山

咲つゝけ卯花さくら雪もなし

雨にみてうの花しるし雪の枝

一萬句發句に

卯花にもらぬ月みる木陰かな

四月ニ横川一音院にて

山ふかし夏さへ花のをそ櫻

豐原寺西方院にて

水きよく若葉凉しき深谷哉

小野崎下野守家にて

聲とをし人傳いつれほとゝきす

月次連歌に

ほとゝきす人は聲なき初音哉

白土攝津守家にて

さなへとるあとさへ水のみとり哉

志賀備中守家に旅宿し侍しころ

えにしあらて宿やはかりねあやめ草

一萬句連歌に樗を

ならのはにあふち咲出る外面哉

丹波より藤壽丸はしめて京へのほりてしはし在て千句するよし申て發句をこひにおこせて侍しにつかはしける

猶そしたふ初音の後の時鳥

海邊にて

夏かりに又みるあしの若葉かな

在所にて

聲のこせ月も在明の郭公

岩城總州家にて

五月雨に夏のよなかき朝かな

鹽左馬助張行ニ

雨白し空や明かた五月やみ

遊佐家にて千句連歌に

五月雨は雲をあつむる晴間かな

相國寺德溪軒にて

あき萩の木すゑにさける樗かな

豐原寺大泉張行に

蟬鳴て行衞木くらき山路かな

和州にくたり侍しころ

月うすし蟬のは山の朝日かけ

上杉戸部亭にて

撫子ははなにもみちの千入かな
佐藤伊勢守興行に
撫子の露に幾日は色もなし
武州にて在人こひ侍しに
花にゐる露やわか床夏の庭
西部といふ人の家に
夏の日や木の下水の花さかり
明應八年六月十八日蘆野大和守興行の連歌に
あつさ弓入月のこす扇かな
右扇須與一末葉なれは也。
一萬句連歌に
風しろく月からうはしき扇かな
蓮沼千句に
陰涼しかくてや千代もそなれ松
駿河兵庫助興行に
松風に涼しさゝむき泉かな
千句におなしころ蓮を
藻かり舟はなに入江の蓮かな
東洸院といふ寺にて
池水のにこりをあらふ蓮かな
成田左衛門大夫家にて
岩井波しつくや夏の玉霞
おなしきいへにて
春にやかて花やは三日の秋の月
神保左衛門尉家にて
三日のよを月のかつらの二葉哉
毛利左衛門尉家にて千句侍しに
花の春聞とも風や荻の聲
おなし心を
朝露の荻にや待し夕嵐
七夕に土肥右衛門尉家にて
今夜のみ空に二の星もなし
年久在て東へ下侍し比長尾修理亮家にてはしめて
會侍しに
幾秋をふる枝忘ぬ小萩かな
長尾三川守興行に（あるイ）
名やしたふ松たつ庭の虫の聲
南都にて古市播磨律師張行に
なひきあひぬ野は薄霧に初お花
長尾能登守家にて
みたるなよ露の玉ぬく糸すゝき
河霧に山のはほそきあした哉

浦上美作守家にて
霧はれて林になれる一木かな
朝霧に興津空行小舟かな
上杉戸部亭にて
松や種ときはかきはの菊の花
旅行にて井田政信もとにて
身にそしむ都にきゝし春の風
野分せし空さりけなき朝日哉
宇佐美加賀守家にて
梢をもまたて色こき山田かな
播州書寫山にて八月十五夜
月は世をはるかにてらす高根かな
空や影猶水きよし秋の月
風はなしひかりやはらふ月の雲
あたら夜の嵐や月に雲もなし
八月十五日
月も人によゝしとつくる今夜かな
名をかさねひかりをそふる月夜哉
月に雲かこたは秋のこよひかな
吾妻より田島修理亮のほりて千句張行せしに月を
空にのみすまぬも月の都かな

殘月の心を
夕闇の程とやそらに今朝の月
九月十三夜
更てさへひかりそ㝡中月の秋
秋の發句中に
きのふかもかへる鴈なく雲ゐ哉
獨吟に
空はれてかりかねなひく外山哉
八月はかりに
もみちせす青葉にもあらぬ梢かな
伊勢守貞宗朝臣家にて
手折しもくやしや露の村紅葉
比叡山にて
山彦に鹿の音しけき林哉
上杉尾州家にて
風もしれ松に秋あるつたかつら
藤田にて
月にけさしくれやまよふ薄紅葉
木々の色は西こそ秋のきたしくれ
鷹原といふ山中にて
秋の葉にあさ霜こほるみ山かな

關東に侍し比管領の亭にて九月廿五日

花さかん數や眞砂の庭の菊

木部年人佐家にて十月一日

冬にけさ雲も立そふ時雨かな

鳥の音も木のはになひく嵐かな

下水をほしのやとりか冬の菊

印拝（牧イ）興行に

霜そ花枯野におしき色もなし

木からしやたのむに殘す下紅葉

一笑軒にて

葉を盡すあらしの宿や嶺の松

千句第（十イ）一落葉

下水に梢はなれぬ落はかな

新田禮部亭にて

松杉を冬のはやしのにほひ哉

茂木總州家にて

露や氷るすゝきにいつか玉あられ

原野州興行に

風ませのあとや霰のむら梢

村竹に靡〳〵もろし玉霰

千本常陸介家にて

篠分るあさ風寒きすそ野哉

小栄匠作之會に

寒し夜の數を汀の氷かな

はや瀬にもむすふは月の氷かな

多賀谷下總守常州にて張行に

陰しけしいつくか冬木筑波山

桃井野州家にて

月みれは水在空のこほり哉

短日の心を

出る日も夕にちかし冬の空

藥師寺家にて

山の端にみても雪待都かな

武田信道家にて

遠山の雪吹は庭の霰かな

山崎新左衛門尉許にて

こほるらし水やはたむる今朝の雪

雪に風かはるもなひく草木哉

空に誰花の種まく木々の雪

千句のためとて人のこひしに

木木は松の姿に雪もなし

朝倉家にて

おさまれる山風しるし雪の松

上三川安藝守家にて雪の朝

風に今朝ふるやきのふの雪の松

茂木にて千句に

風そなきなれもやおしむ雪の松

山水のみとりを冬の雪間かな

雪はれて竹に數そふ軒端哉

雪のふり侍し日白川の關を越侍るとて

旅ころも雪にあらたむる關路かな

此發句にて霜臺張行。

對松軒にて

先明て山もとくらし嶺の雪

庭はなし檳（安イ）たつ雪のみ山哉

正梅禪門興行に

ふしのねやおもへは雪のときは山

冬の發句に

行水にかゝりかねこほる河邊哉

水に雪はらふもをしの翅かな

水鳥にさゝ波たちて風もなし

白川所々にての會のうちに

水鳥の月をうこかすうきね哉

人は花梅は春まつ木すゑかな

めくみけり春やとなりの家櫻

しらす又冬やわか時むめの花

年内立春の心を

たつ春に三冬もつきぬ今年哉

德川少將家にて

梅かゝのほかは春まつ草木かな

寒梅の心を

冬さくや霞をいとふむめの花

梅や又花をいとなむとしの暮

むめは冬木ことにさかは花もなし

本云
文龜壬戌臘月末注之。莫外見者也。

兼載

〔右圖應書本闕今以帝國圖書館本補之〕

續群書類從卷第四百八十八

連歌部十八

春夢草

詠百首和歌　勅點

釋　肖柏

春二十首

立春

千早振かみ代はるかに立かへりあめの浮橋春や來ぬらん

橋邊霞

東路の行へもあれと霞しく濱なのはしの春をしそ思ふ

朝鶯

朝ほらけちりかひ消てうくひすの聲の匂ひにかゝるあわ雪

餘寒霜

さえし夜の梢の霜の朝くもりかたへは霞む二月の空

梅薫風

梅の花四方の匂ひに春の風さそふもまよふ明仄の空

河邊柳

くりかくる岸の柳のかたいとをあわをに結ふ春の河風

浦春月

淺みとり霞やそめしふけわたるかとりの浦の浪の月影

春曙

思ふらし天津乙女もさほ姫のしめゆふ空の春の明ほの

明ほのや霞の浦の風をよはみ花に移ふ春のあたなみ

閑居春雨

とふ人もよもきの宿は春雨の草葉につけて思ふ頃かな

歸鴈

歸こん秋の契りは嶺に生るまつほと遠し春の鴈金

曙花

霞よりあまりて匂ふあし引の山はしのゝめの花のしら雲
夕花
櫻花くち木にやとる玉しゐもそれかと匂ふやとの夕暮
名所花
うへもなき道ともいはゝ岩ねふむ吉野の嶽の花の明ほの
寄雲花
よしの山花にそまよふ白雲のかゝらむ峯も長き日くらし
月前花
あひ思ふ契や花に春の月ひとつ匂ひに霞むよの空
風前花
おもはすはさそはん物からうつろはて櫻にやとせ峯の春風
三月三日
行やらて岩まによるも言の葉のよとむをしるや花の盃
呼子鳥
春の色もひたや籠りも松の戸におもふをうしと呼子鳥かな
閏三月盡
大方のわかれとや思ふ老か世に又逢ましき後のやよひを

夏十五首

更衣
うつり行折しもあれや花の香にうとき契の蟬の羽衣
新樹露
染そめす風もはらふな紅のわか葉にかゝる木々の朝露
郭公
久堅の雲井はるかに過ぬなり月はあり明の山郭公
いつれとも聲きかまほし夢にたに見ぬ唐土の山郭公
山田早苗
日くるれはいそくやさなへを山田にうゑ女のを笠所せきまて
盧橘
たのめつる人こそあるらし橘の忍ひにかをるたそかれの宿
庵五月雨
いかならし袖も一に五月雨のすゝのかりほの野への夕くれ
鵜川
うかひ船あかてさし行かゝり火の河瀬ほのめく短夜の空
蚊遣火
里わかぬ月もやいとふかやり火の煙ににほふ賤かさころも
瞿麥
紅の花のやちしほ玉たれのこすもうつろふ庭のなてしこ
竹亭夏月
うたゝねも此比うとし風の音に竹打そよく短夜の月
里螢
飛ほたるいりにし袖をいつくとかあくかれ歸る玉川のさと
夕立風

吹ほさぬしつくもすゝし夏衣日も夕たちのすきの下風

野草秋近

夏ふかきかた山かけてくるゝのゝ草葉露けし蜩のこゑ

六月祓

心さへ清き河原にみそきしてうき世のちりをのこさすもかな

秋二十首

河邊早秋

面影も身にしむ比やいもかひもゆふは河原の秋のはつ風

七夕別

はるかなる年の渡りに妹をおきて立分るらん天の川なみ

荻風

荻原やとたえをおきてさよ嵐月を末葉の有明のこゑ

荻露

野分たつ夕は露の玉のをも花にをしまぬ荻のうへかな

月下虫

虫の音にむすほゝるらし行月も夜わたりやらぬ小野の篠原

田上鴈

秋の田のいほもる袖のよひ〳〵もいまよりいかにはつ鴈の聲

野外鹿

かたみさへ花と露とのあたし野に朝ふす鹿や妻を戀らん

深山月

山深みのほりもやらて椎の葉の嵐にふくる秋のよのつき

海邊月

秋の月夜渡る空に山のはの恨みもなちの興津白なみ

明石かた心と月もすみきけん苫屋荒にし秋のうら風

山家月

とひ馴し月は有明にならし柴のいほりかなしき秋の山里

月似氷

清見かた沖の岩こす浪の音を限に月のしく氷かな

翫月

思ふらし櫻かさしゝ宮人もかつらをゝらぬ月のうらみは

駒迎

相坂や關路ふけゆく山風にいはふもしるしもち月のこま

秋夕

身をしほる嵐よ露よ世のうきに思ひけちても秋の夕暮

稲妻

鳴のたつ苅田のねやを露にのみ荒しはてても通ふ稲妻

月前擣衣

月の色をうつすころもや白鳥のとは山本に打あかすらん

嶺紅葉

立田姫峯のいつくのもみち葉をわきてかさしの色に染らん

瀧紅葉

布引の瀧の白衣たかために錦おりかく峯のもみち葉

暮秋

村雲の時雨るゝよりそ山里にこゝろもかよふ長月のそら

冬十五首

寢覺時雨

夢路より風やしくれの太山ふくすゝの篠やの有明の空

曉落葉

山ふかみ在明方の霜のうへに風も音せす散木の葉かな

落葉嵐

身の行へありとや思ふ神無月木葉のこさぬ峯のあらしに

橋上霜

夢路まて思ひや絕しさ莚の月も霜夜のうちの橋姫

竹霰

おとつるゝたよりのみして風なから霰ふるなりいさゝむら竹

寒蘆

三島江や枯葉のかけも亂あしに宿りかねたる夕月夜哉

非氷

くちにけるまゝのゐつゝは冬の來て結ふはかりの朝こほり哉

高山冬月

葛城や雲の往來もおのつから月のよそなる冬の夜の空

磯千鳥

啼て行荒磯千鳥ぬれ／＼てつはさの浪にむすほゝるらん

江水鳥

こもり江のまこもかくれにぬる鴨の數々しるき曉のこゑ

海邊雪

松山の松のうら浪歸らすは汀もわかし今朝のしらゆき

風前雪

風のたて雪のぬきもてしろ妙におるや久堅の天ノ羽衣

神樂

をりかへしうたふ霜夜の榊はに夕付鳥のこゑそ打そふ

雪中鷹狩

狩衣はらふとすれは箸鷹のおなししらふにかゝる薄雪

歲暮

つもり行身になけかすは柴の戸に年も暮ぬと誰か思はん

戀二十首

忍戀

おほかたはいさ白玉のをゝよわみみたれてもろき袖の上かな

祈戀

たのみこし神やはけたぬ胸の內の思ひにみてる天の八重雲

不逢戀

峯ふかみ侵籠たる花よりもおほつかなくてけふも暮しつ

待空戀

侘はてゝ入ぬるねやのかひもなし更わたる夜の風のけしきに

過戀

唐衣人も心をゆるし色のうつる匂ひそ身さへくるしき

逢後戀

移香は猶そくるしきまかふやとかねてしめつる夜の衣に

稀逢戀

それなから色も匂ひも初花にかたしき衣まよふ夢かな

逐日增戀

いかにせん朝な〳〵のます鏡かけにもしるきしたのおもひを

寄月別戀

くるしくもいさよふ月のしのゝめに玉ゆらかゝる衣々のそら

羇中戀

忘れしの心の末を秋の風吹なみたりそまのゝかやはら

寄風戀

つたへてよかけん哀もいさや川ひとりぬる夜の床のやま風

寄海戀

朝なきにむかふ日もかなともかくもいはみの海の奥つ汐風

寄橋戀

ふけぬとてたのみやはせし宵の間の夢をも渡せうたゝねの橋

寄門戀

心さへとゝひかねてかへるなりたか夕くれのすきたてる門

寄椎柴戀

いかならん椎の葉柴の下もえにあまるけふりは思ひけつとも

寄月草戀

唐衣つらきゆかりを月草の花にやすらんをのゝあさつゆ

寄鳥戀

まてしはし身をこそしらめ鳥の音も花も露けきしのゝめの宿

寄獸戀

ふみそむる戀の山路よ虎の子の思ふ千里ははるかならめや

寄紐戀

とにかくにつれなく明て槿の花のみとけし露のしたひも

寄鐘戀

今ははや人にも身にも夕くれの昔なつけそ入相のかね

雜十首

曉鷄

霜はらふ夕付鳥もあはれなりをかやのこやの月の枕に

夜燈

そむけ設てたよりともなき灯の光またゝく曉のあめ

閑中聞鐘

わか涙心よわしや鐘のこゑこたへぬ月のあかつきの空

山家嵐

憂世いかに嵐のかせの山深み夕は袖のぬれぬ日もなし

晴後遣水

雨はるゝ日も夕風にあきつはの涼しくかける水のうへかな

海路

荒礒の山の木玉のかちこたへ夜の舟路を猶まよふとや

羇旅

都出てはる〳〵きぬるかひかねや雲井の月のさやの中やま

寄夢述懐

心をはとゝめとゝめす思ひこし世のとわりよ春の夜の夢

寄露懐舊

あさちふや朝の露も消かへる夕はなきを世々のふること

寄月祝

あひにあひぬ五十鈴川浪あきらけき時こそあれと秋の夜の月

冊五首

女房奉書

この一くはん御らんせられ候て。おもしろくおほしめし候。御てんの事はおほしめしもより候はぬやうにて。御れうけんも候はぬ御事なから。いかやうにもと申され候ももたしかたくおほしめし候て。なにとやらん御すみをつけられ候ていたされ候。返々御らんせられ候はかりにてかへしつかはされ候はんするを。かつはとり〳〵におほしめし候に。うちおかれかたくて御筆にまかせられて候いかにもよきやうに御心得候て。おほせつたへられ候へく候よし申とて候。かしく。

侍從大納言とのへ

詠百首和歌　住吉社法樂

釋　肖柏

春二十首

立春氷

うち解てみとりの水の薄氷しはしは殘せ春のはつかせ

初春霞

山はまた朝風寒し春霞衣うちはへ誰にかすらむ

雪中若菜

若菜つむ遠里をのゝ形見とやうちも拂はぬ袖のしら雪

初鶯

誰里に心の有てをしむへき初音鳴らん野へのうくひす

簷梅

おのつから小夜更にけり梅の花軒はに匂ふ春のうたゝね

門柳

我門に音する風のをり〳〵も柳そなひくとふ人はなし

歸鴈知春

行鴈の春を忘れぬ恨をも秋の空にや晴んとすらん

二月餘寒

この比のまた朝霜にきやくなり半は春の荻の燒はら

古鄕春月

なかむれはうれへ顔なる古鄕に住こし物を春の夜のつき

夜春雨

ふるとなき音も枕に聞ゆなり夜や深ぬらん春雨のそら

春日遲

うつる日の夕影遠く行歸りつはめ鳴野の道のはる草

尋花

あくかれぬ人こそなけれ山櫻さきもさかすも此ころの空

見花

心たに花にみたさし露はかり梢うこかす春風もなし

翫花

ちりちらす問人あれや（なイ）櫻花ひとりみはやす淺茅生の宿

折花

人もなき宿の櫻もいかならん心のとはゝ手をるひとえた

惜花

あくかるゝ心もみえしあやにくの嵐やいとゝ花に吹らん

三月三日

いにしへの春の空まて思へとやわきて入ぬる今日の三日月

欵冬

春暮ぬ今より後の花の露何にかゝるきしの山ふき

松間藤

咲かゝる松より外の山風も色のゆかりににほふふちなみ

三月盡夕

あすよりは天津空にや戀わひん雲のはた手に春はくれにき

夏十首

卯花似月

やとりきて更行月と見ゆるまて山のはくらきにはのうのはな

待郭公

恨ての後さへいかゝ打もねんまつ宵過ぬ山ほとゝきす

寢覺郭公

時鳥かゝるね覺を一こゑにおもひは捨し有明のそら

五月郭公

つれもなき妻戀しるし五月山明ぬ暮ぬとなくほとゝきす

庵五月雨

雲とちて五月雨にさへなら柴のいほり淋しき山のかけかな

夏草露

夏草の野への茂みに埋ても露もてはやす萩のひと本

里螢

蘆螢かけさへとほきかりねかなあしやの里の深き夜の雨

夜川篝火

夏の夜の明かた近き川風にのほるもくるしかゝり火のかけ

遠夕立

夕立やくもりもあへす過ぬらんいる日を返す山の端の空

樹陰納涼

秋の風は山の陰を尋てもかくやはそてに庭のまし水

秋二十首

初秋風

飛鳥風けふそ身にしむ手弱女の袖もたゝならぬ秋や來ぬらん

早秋露

いつのまに移り來ぬらんあたし野や暮にし夢の秋の白露

七夕後朝

限ある年の渡りに明し夜や歸る浪にもおもひ立らむ

秋夕

限りなき袖のなみたもあやしきは憂世のうへの秋の夕暮

江荻

荻原やふる江の水にぬる鴫の夢な殘しそさわく秋風

野萩

やとりこし野原の小萩露置て移ひゆかん花のこゝろよ

夕薄

花すゝき袖やくるしき唐衣日もゆふくれのをのゝ秋風

山初霜

え來こぬる夜の山風さえけらし隅のつはさに秋のはつ霜

田家鹿

小山田のかりほにはへる玉かつらくるれは淋(かエイ)しさをしかの聲

野亭聞虫

秋の野を隔ともなき垣内に外面の虫の聲そあらそふ

嶺月

更にけり嶺の杉むら別きて嵐も送る秋の夜のつき

谷月

すむ月もよそにそめくる谷の戶を夕ゐるまゝの雲にまかせて

海月

もしほやく煙もすめる秋の夜のあしやの奥に月傾きぬ

湖月

いかならし五十あまりのまき〳〵もうかひ出けるさゝ浪の月

關月

秋の月やとりし世々の哀をも誰に問ましすまの關守

擣衣暮風

木の本の關への里は暮はてゝ松の嵐のうつころもかな

紅葉將雨

はつ時雨いかに染けんおのつから秋や更ぬる杜のもみち葉

紅葉映日

淋しきはあるゝ垣根のうす紅葉木の下てらす秋の日の影

暮秋露

野へも今くれ行秋の名殘にや思ひ亂るゝかるかやのつゆ

惜九月盡

うつろはぬ花は殘りてゆく秋をけふせきかぬる菊の下水

冬十首

初冬時雨

神無月こすゑ時雨るゝ山里よ花にくらせる春は有とも

風前落葉

はかなしや峯のもみちは心にも嵐の風にまよひ行らん

庭霜

おき出て雪と見るまて庭の面に薄おしなみ結ふ朝霜

冬月

聞馴る夕付とりのあかつきもふかきあはれは冬の夜の月

古屋霰

ひまをあらみ軒の忍ふの枯葉にもはかなくかゝる玉あられ哉

曉千鳥

さよ千鳥有明の月を遠妻のかたみの浦にわひつゝやなく

池氷

芦の葉も松の枯葉も氷とち鳥もかよはぬ山かけ（きはイ）のいけ

常盤木雪

たよりにも人こそみえね陰は猶山路を殘す雪の常磐木

深雪

心なき雪そふりつむ道のへの打よろほへる賤かふせやに

歳暮

世をわたる人は問こす草の庵ののとかに送るとしのくれかな

戀二十首

寄雲戀

との葉のあとは思はてはるかなる戀路ふみみる（レイ）いつも八重垣

寄風戀

たよりにもくたけそまさる移り行秋の野風のゆふくれのつゆ

寄雨戀

あちきなき心の色をつたふやと松の嵐に夕くれの雨

寄月戀

よひ／＼にさしむかひても忘しの月の行衞をたとる空かな

寄煙戀

あやにくに思ふわたりは空にたく夜半の煙もきえかへる也

寄山戀

うき名のみ世にそくるしき麓にや忍ふの山路猶まよふらん

寄杜戀

かきつめてみせはや人に思ふといたつらになる森のくちはを

寄關戀

もり侘ぬつらき心のみかさのみいとゝ涙の川くちのせき

寄海戀

袖のうへに思ひかけきや綿つ海のおなしかさしを沖つしら波

寄橋戀

駒の音もつらき別よ宿ちかくさけさらましを前のたなはし

寄埋木戀

それとたに人や思はぬ埋木の春を心のむかしかたりを

寄鹽木戀

里の海士のはこふ鹽木も燒すさふ折もこそあれうき思かな

寄宿木戀

よしや又おなし世にたに宿り木の枝さしかはす中ならすとも

寄杣木戀

杣人の宮木の數にとりもみぬ淺きこゝろに我やおもひし

寄朽木戀

契りこそくち木の筆の跡をたにしるし斗に見る世ともかな

寄初草戀

ふかくともわきて思はし初草のひとへ心になひく春風

寄忍草戀

あちきなく思ひも消し忍草移ろふ露もならひなしやは

寄思草戀

夕されは千々に亂れし思草しをれ果ぬる霜のさむしろ

寄下草戀

哀にも風のたよりにかゝり來ぬ梢の花の露のした草

寄忘草戀

限あれは我も今はと打わひて忘草つむころそかなしき

雜二十首

曉眠易覺

明ぬやと打おとろけは手枕に聞もる月の影もかはらて

窓燈

深き夜の風は音して燈の窓しつかなるいさゝむら竹

名所松

それとのみ松を殘して夕鹽のみつの濱風音かすむなり

名所浦

雲もなき千里の浪に夜半の月雪をしきつの秋の浦風

名所嶋

哀なる老の友つるあはと見る淡路の嶋をかけて行聲

野風

うちなひく春の芝生の若葉より野へは風こそすさひなりけれ

橋雨

山寺に歸る夕へのひともなし雨打けふる前のいたはし

渡船

さま〱に渡る世なから朝川や月殘る夜の雪のふなひと

旅行

里の子のたゝいひ捨しとの葉を旅のすさひに語りてそ行

旅宿

旅けたゝ竜てくるしき山の名のしつはた帯のとけてやはねし

旅泊

秋田の頭はるかに見えてかた枕心ほそさは月いつるころ

山家路

柴の戸の岩のかけ道名もしらぬ木草の花そ苔にちりしく

山家鳥

寂なるゝ奥山住もいかるかゝ富の小川の御代をしそおもふ

田家煙

暮るゝまて秋田刈はこふ山陰の里しつまりて立けふりかな

獨述懐

身におはぬ人も忍はし心こそあかしくらすも友となりけれ

老後懐旧

なからへて忘れかたきもうかりしも真そこらの老のねさめよ

往事如夢

忍はれん一ふしもかならつる世は跡なき夢と思ひしるにも

神祇

世に誰かたのむしるしのあたならん我こそしりぬ住吉の神

釋教

隔なき心をなにゝ隔つらん雪のみ山のあかつきのそら

祝言

君か代に雪もみとりもかさねらし鶴の毛衣亀のけころも

都合三十五首

宗世

明應九年十二月廿五日詠初之。廿七日終之。

詠百首和歌 石清水社法楽

春

牡丹花

立春

春といへは山もみとりの岩清水動なき世の影はしるしも

霞

薄かすみ心ふかしやさほ姫のにほはしそむる春の明ほの

朝ほらけ嶋もわれはてん浪の上を小島ほのかに立霞かな

鶯

わか柳にきたき移ろへ山里をあくかれそむるうくひすのこゑ

若菜

いほ近き田つらの小芹唐なつな春のすさひに行心かな

春雪

晴もあへす麓はふかき霞より雪にわけたる春の山のは

梅

うとくなる人もこそあれ宵〳〵にころも手かれす通ふ梅か香

花園やおくある春の山口にしかつの梅のかつにほふ比

柳
うつし見よ風のすかたもわかるてふ六田のよとの春の青柳
春雨
霜枯の野山の末も春雨の緑をそゝく天津空かな
歸鴈
古郷に今か待らん玉つさのつはさくるしきはるのかりかね
春月
光すむ月も半は春の夜の心なしにもかすむそらかな
花
あやなしやほころひあへぬさくら花霞にこめて匂ふ明ほの
敷しまや花の(にィ)いつくも吉野山かつらきかけて匂ふはる風
袖とのかさしもしるし思ふ人なきにもあらぬ花のやまふみ
待人の恨にもあらす淺茅生や露けき花の春の夕くれ
うちはらひねん方もなき苔むしろ嶺は嵐の花のしら雪
欵冬
玉川や下行水もむすふまて朝露しけききしの山ふき
藤
谷深み古枝は龍のはひのほる岩ほと見えてこゆる藤浪
暮春
あはれなる春のわかれよ馴々てひととをたにかたみとやせし
夏
更衣
けふはとて袂にうつす卯の花の浮身わするゝ垣根ともなし
郭公
五月待花たちはなの匂ひさへなにかをくらす山ほとゝきす
時鳥は山しけ山忍ひねのふかくは誰を思ひいるらん
はるかなる月の行への時鳥鳴てやしたふ有明のそら
早苗
はかなしや道行人のころもてに早苗うちかけうたふをと女子
盧橘
白妙の花の夕はえこれやこのあまのはころも匂ふたちはな
五月雨
雲ふかき五月の空の雨くもりそれもこゝろのすめる宿かな
おしなへてみをにしつめる五月雨にとたえも見えす天の橋立
夏月
あかす見る軒端の影や呉竹のわか葉の露に短夜の月
夏草
それとしもわかぬ夏野の村薄はやほのめかす秋のはつ風
鵜河
うかひ舟山は木しけき篠川あたりまてゝる瀬々のかゝり火
螢
吹まよふ風さへたえて淺ほたるしつかにのほる夕闇のそら

夕立

葛城や谷の川音立のほりくも井にひゝく夕立のあと

納涼

片敷のころも手涼し玉すたれ風吹とほす宵のむらさめ

夏祓

御そき川浮身をうつす麻の葉はかき流してもをしけくもなし

秋

早秋

色見えぬ千枝に移るや昨日けふしのたの森の秋のはつ風

七夕

から衣恨わふらん一夜ねしいもこひしらにあまの川かせ

荻

誰にかも思ひよそへん秋の夜（寢イ）のふかきね覚に下荻の聲

雁

夜を寒み移らふ嶺の朝霧に拂ひもあへす雁は來にけり

萩

程もなき眞垣の內も萩の戸の秋にや通ふ花のうへのつゆ

鹿

秋ふかき山の嵐もなれぬとやしのふのおくのさをしかの聲

秋夕

心すむ住居もいかに世の中のうきにまきれぬ秋の夕くれ

秋田

かり殘すいなはの風にかた岡の田つらのくぬき音そ寒けき

月

住の江や松の下枝のゆふ月よ八重の鹽路の影そいさよふ

澄のほる月は雲間に高圓の宮の古みちあふ人もなし

袖に猶契りはあれや折しらぬ月の桂の影やすむらん

ふし待の月の枕にはた織のうちも休まぬ音のさひしさ

誰か見んいく夜の秋の有明に猶限りなき月のひかりを

虫

そともなる桐の下葉も蛩いつれかさきの秋のおとつれ

霧

分のほる行へもさひし横たてる外山の里の秋のあさ霧

擣衣

秋風に音信そめしからころもころもへすしていねかての空

菊

咲みたる色の千くさをうつしもて匂ひに浮ふ菊の上の露

紅葉

はつもみち年にかはらぬ山邊をやわきて時雨の雲も間けん

身におはぬ錦おりかく秋深き賤はた山の峯のもみち葉

九月盡

鳴ていにし鳥も此ころとゝへは春のわかれそ秋になくさむ

冬

時雨

もるほとの休らひもなく杉いたもてふける板やの初時雨哉

落葉

山陰（やイ）の風のゆくてのはゝそ原惜しけにも散らす紅葉哉

霜

夜や寒きをかやの軒の薄煙り見えてつれなく殘る朝しも

寒草

かれやらぬ影とし見るや春近み下に萌らんのちの冬草

氷

袖かけて氷もゆくかいさや川近き旅ねの床の山かせ

冬月

霜の上の月に寢覺ぬ里人もあらましとにをしき冬の夜

千鳥

妻やなき夕浪千鳥むれて行中にひとりの聲のさひしさ（悲しさイ）

水鳥

をし鴨の深き霜夜に片よるや玉藻の床の所せき聲

霰

玉霰しひのは山をしのきゝて音もよわらぬならの下柴

雪

山高み嵐の風やかさしこし九重ねのよものはつゆき

すさめこし木草も雪を待見すは山里住のかひやなからん

哀なり雪のみたれに引とつる交のゝみのゝさゝのかり庵

鷹狩

立鳥のいさよふ見れははし鷹の上毛の雪を拂ふ間もなし

炭竈

炭かまの煙のもとを立歸るかた山かつのねやゝさむけき

歳暮

行歸る市女あき人我らへに暮ぬる年と見えもする哉

戀

寄風戀

たのめたゝ空に吹こすつくはねの風はうきたるたより斗も

〻雲〻

手にかくる物にもかなや天の原すめるみとりに浮ふ白雲

〻煙〻

思ひわひ空にくゆらす煙をもそのとゝなき雲のうたゝね

〻杜〻

袖に見よいたつらにやは山しなの木幡の森の霜の下葉を

〻關〻

迷ひ行戀路やいかに白河の關より遠き相坂のせき

〻橋〻

絶せしの世々の行へにちかひけん哀かけてよ宇治の橋守

ゝ藻ゝ
よるとみしおきつ玉藻もはなれそに動かす波の便たになし
ゝ篠ゝ
跡たえて思ひいるともさゝの葉の深山もそよと人やあやめん
ゝ杉ゝ
いかにせん時雨もしらぬ色よりも深き心を杉のもとたち
ゝ鴫ゝ
あちきなし思ひ侘ては鳰鳥の浪の浮巣をよるへとやせん
ゝ猪ゝ
やすくたに明す夜もかななき名のみ伏猪のかるも埋れはつ共
ゝ蛛ゝ
思はすや垣ほの柳移ろはん下葉にかゝるさゝかにのいと
ゝ鏡ゝ
ます鏡我影なから忍ふらんとふらんとたに思はさらめや
ゝ枕ゝ
うちもぬる隙もこそあらめとも枕たかせの淀の一夜なりとも
ゝ莚ゝ
あれにけり塵もつかしと思ふ身をいかに待みん閨の小むしろ
ゝ衣ゝ
重ねしや千へとそたとる蟬の羽の夜の衣の夢のうつりか
ゝ紐ゝ
今更にむすほゝるらんつれなきもとけてはえやは花の下ひも
ゝ弓ゝ
うちゆるふけしきをいつかみたらしの梓の弓の心つよさは
ゝ船ゝ
徒ならぬみほの興津のいつて船早くも人のうつりにし哉
ゝ鐘戀
待宵も浮暁もひとりねのむかしことゝふかねのこゑかな

雑

暁鶏
しのゝめの霞なからに龍田山夕付とりの聲にほふなり
夜燈
そむけおくいほの灯壁に生る草葉よりけに青き陰哉
浦松
夕浪に光くたけてもりそむる月を葉分の松かうら嶋
庭竹
玉敷の砌の竹にはむ鳥のしつかなる世は今そ待らん
山家
山里のおなし夕も世のうきに出にし人は猶やくるしき
田家
にほ鳥のかつしかわせを苅しより駒もとたえぬまゝの繼はし
羇旅

しらさりき床はいはほのまろこ菅薦の丸ねの露の小莚

眺望

山のはの契りもよしや詠れは玉の緒ゆらく春の明ほの

述懐

今よりは猶や浮世に任せみん夢の行への七十のそら

祝言

仰き見ん国のしるしは實とも成りて神代のふしの柴山

詠百首和歌

春二十首

關路早春

霞行むまやの道のすゝか山越らん春に關の戸もなし

湖上朝霞

霞のみなきたるあさをふかめけり満ひもしらぬしほつすの浦

霞隔遠樹

里遠みほのかに見ゆる片岡の霜の林やかすみかねらん

野中聞鶯

あかなくに行や別れん歳ころも日も夕くれの野邊の鶯

隣家竹鶯

呉竹の末葉の風も吹こさぬ垣ほにねたき鶯のこゑ

田邊若菜

里人の行ての田つらけふはとてみとりのこ芹目にやとむらん

野外殘雪

昨日今日野守か庵の通路に春見え初る雪のさゝはら

山路梅花

山里をいとゝひ行は梅かえのとたえをつきて匂ふ春かせ

梅薫夜風

風ゆるき春の手枕梅か香にさそはれきてや夢にとふらん

水邊古柳

くち殘る柳の糸にやとり來て春見えわたるきしの川風

雨中待花

春雨にうとき人をも櫻花さかぬ限はうらみしもせし

野花留人

天河秋の契りをよすかにてかたのゝ櫻やとやからまし

遠望山花

行てをる心のかへさいかならん千里にかすむ山さくら哉（花イ）

故郷夕花

古郷は花に馴する便もや待ことならむはるの夕風

曉庭落花

木の本の花に光りそ別行月は有明のしのゝめの庭

河上春月

春の夜り霞につゝむ玉島や光更ゆく川なみのつき

深夜歸雁

春の陽ころも蓬生にふけぬとや開るもまたき見ひ立らん

藤花間風

うつろふや池の藤浪吹かへせ春の木葉の庭の松かせ

橋邊欵冬

咲かゝる花山吹の衣手に朝露はらふ宇治のはし姫

船中暮春

行春にさそはれぬるか夕霞ゆらの湊のなみの船人

夏十首

卯花隔路

咲そふや卯花かきねとはれしの行へを見する雪の下道

初聞郭公

此ころのならふ花なき藤浪に初音あらそふ郭公かな

山家郭公

雨そゝく青葉の陰のつれ〲に心ありける山ほとゝきす

池朝菖蒲

ふりにける野中の池のあやめ草遠里人に今朝や引るゝ

閑居蚊遣火

山陰や蚊遣くゆらす夕煙いとはぬ人もうとき宿かな

盧橘驚夢

橘のちかきかをりに故郷はあとはかなしや夢のかよひ路

杜五月雨

よそにして見るもくるし五月雨にほす日もしらぬ衣手の杜

野夕夏草

夕くれは風そ吹とくはかなくも結ひすてつる野への夏草

澗底螢火

川浪にみてる螢もさ夜更てあるかなきかの谷のかけ草

行路夕立

ぬれつゝもゆかまし物をやすらへて照日くまなき夕立の宿

秋二十首

初秋朝風

秋はけさ泊瀬をと女の玉かつら露ふき結ふ風や涼しき

閏月七夕

月も日も同し今宵を一たひの契あやなきひとりねの空

野亭夕萩

咲こすやしぬおく小のゝ垣内に小萩亂るゝ夕くれの露

江邊曉荻

霜やおく曉月をひたす江の汀にすめる下荻のこゑ

山家初鴈

山里のすゝのかりほの朝露になみたやおもる初鴈の聲

海上待月

浪間より松にかゝるや夕暮の籬のしまを山のはの月

松間夜月

秋ふかき風はあらしの松の葉を猶もりかぬる月の影哉

深山見月

哀ともわく方そなき心さへむなしき山にむかふ夜の月

草露映月

白露のかやかみたれに身をわけて千々にやとれる秋の夜の月

閑路惜月

夜半の月西になるまて木幡山さゝのくまなき影そ殘れる

鹿聲夜友

さをしかの聲より外にとゝふもかたのゝ里の有明の空

田家擣衣

夜を寒み山田のをしねもる聲に遠からぬ里も衣打也

古渡秋霧

舟人の迷はぬ道もしかすかに渡りかねたる朝霧の空

秋風滿野

秋更ぬはらひもやらぬ木枯に色こそ見えねをのゝしの原

籬下聞虫

むら草はまた咲いてぬまかきより花やかになくすゝ虫の聲

紅葉寫水

時雨せし今一しほやもみち葉の沈む影こすうちの川浪

山中紅葉

夕つく日みねこす後も山深み柴のとほそを照すもみち葉

籬底槿花

朝顏の花ともわかすおもる也古き籬のあきのしらつゆ

河邊菊花

咲にけりすめる流の千とせをもしる人ならし秋のしら菊

獨惜暮秋

身にそしるなれにし月も暮かたの秋になるをの松の浦風

冬十首

初冬時雨

神無月いもやすからすあかすともかことはかけん初時雨かは

霜埋落葉

をしと見し嵐の庭のもみち葉をわするはかりにおける朝霜

屋上聞霰

さえし夜の曉方の閨の上に夢もくたけとちる霰かな

古寺初雪

むろの戸のしきみの下葉まかふまて初雪降ぬ岩のかけ道

庭雪厭人

問人のなきも思はしいにしへの跡も殘さぬ庭のしら雪

海邊松雪

かけて見む心もあらし海士衣濱松か枝のゆきのあさ風

水鄕寒蘆

みたるとも夢路は殘せ三島江やあしのかりねの深き夜の霜

湖上千鳥

さゝ浪や八十の湊のいつくとか妻とふ千鳥啼て行らん

寒夜水鳥

をしとりの獨りぬる夜の思とやつらゝの枕むすほゝるらん

歳暮澗水

とゝまらぬ年にも有かな花にそみ木の葉に朽し谷の下水

戀二十首

初尋縁戀

橋姫のたのめぬ宵をはつかなるしるへあやふき宇治の中道

聞聲忍戀

思はすもはかなき宵のとくさにかゝるを聞そ身さへくるしき

忍視眤〻

おなし野に咲ましりても蘭したに露けき故はしられし

祈不逢〻

たのみこししるしの杉はそれならて同し思ひの三輪の茂山

旅宿逢〻

宜れまた草の枕の面影をいつくの里の月にやとさん

後朝曉〻

心ありて人もねよとの鐘の聲打もわすれよ曉のそら

歸無書〻

今朝のまの一筆もかなたのめしはなをさりことの行へ成とも

過不逢〻

すゝしくもかさねし小夜のから衣いく秋風のひとりねのそら

契經年〻

もろともに世のうきふしも忍ひつゝ長らへこしは哀ならすや

疑眞僞〻

年ふれと思ひおもはすほのか成人に心のうらそくるしき

返事増〻

世にしらぬ筆の匂よかきやりしあやしき跡をいかに見えけん

被厭曉〻

思へ人身はあまの子に浮浪のかかるあはれもならひなしやは

途中契〻

忘れすは契やはなき玉ほこの行てにかけし一ことのすゑ

往門歸〻

あちきなし空しく歸る槇の戸のつれなきをたに面影にして

忘住處〻

あれにけり草木も人の心とや有し垣根のおもかはりする

依戀斷身

住吉や池のみくりのなからへをなにしか人のうきにかけけん

隔遠路〻

里遠み通ふ心の旅ねにも夢やはやすき道の山風

惜人名〻

見えまうき我身よいかに槇の戸をあらぬ名のりに推開くとも

絶不知ヽ

思ふには心ふかしや大ぬさのつひによる瀬の行へしらなみ

互恨絶ヽ

むかひ火をつけしもあやなはてはたゝ淺はの野らの霜の冬枯

雜二十首

曉更寢覺

ね覺する折しもあれや灯の一はなおとすあけかたのまと

薄暮松風

やとりこし契やいくよ夕嵐すみのほる峯の高砂の松

雨中綠竹

煙とも夕ともなしらすみとり雨にこもれる竹の一むら

浪洗石苔

よせ返り苔のいはほに積りこし千世の數み〔とイ〕る浪のしら玉

高山待月

生駒山いさよふ月や難波かた光ににほふ沖津しらなみ

山中瀧水

心ゆくあしやのなたの里つたひ思ひしよりの布引の瀧

河水流清

いにしへの謙心より落瀧つ清瀧川のみつのみなかみ

春秋野遊

おもふとちかりねの夢に移ふや梅をかさしの野邊の萩原

關路行客

都より紀の關こえて三熊のゝはてなき浦に出るたひ人

山家夕嵐

さま／＼の世をのかれきて夕暮の嶺の嵐に身をまかせける

山家人稀

玉さかに影する人も薪おふすかたはかりの谷のほそ道

海路眺望

舟いたす浪に面かけ八十島の夕暮かなし鹽かまの浦

月轉中友

あまさかるひなのあら山荒野にもこふる雲井の月そ伴なふ

旅宿夜雨

幽なる音そ身にしむ八重ふきの萱か軒はの雨のかりふし

海邊曉雲

明やらぬ浪にたゝよふ鐘の音にほのあきそむる沖の横くも

寄夢無常

身をも世をも思ひしるへきいさめ哉春の三月のうたゝねの夢

寄草述懷

空蟬の世をはおもはしかゝるまをとなし草の朝夕のつゆ

寄木述懷

年ふとてかひもなき身よ足引の山邊にたてるくぬ木成せは

逐日懐舊

道は昔あと瀬になりぬ飛鳥川昨日の淵にかへる世もかな

社頭祝言

草木まてうくる恵や久かたの天照す日をあふくかみかき

詠百首和歌

春二十首

おしなへて人の心の氷をもけさや吹とく四方のはる風

染あへぬ霞の衣にほふなり柳さくらのはるの初しほ

霞けりしくれぬ色も明ほのゝ春をはるの峯の常盤木

詠むらん山里かけて浦なみの關路かすめる須磨の明仄

玉ゆらも松の上葉に宿りかせ霞にそゝく嶺のあわゆき

ことゝへは住世をうちの里人も伏見の田井に若菜摘也

霞つゝ散としもなき吳竹に鶯さそふはるのあわゆき

梅か香もわくるをしと宿るらん九重のたをやめの袖

うちなひくけしき許を春風の霞にかゝる青柳の露

更るまてかすむ恨を（てイ）思ひねの夢路さやけき春の夜の月

櫻花よしまたるとも面影をよもの梢のはるのあけほの

櫻花尋ねもいらし明ほのゝ山路かすめるはるのむら雨

しら露も今朝咲そむる花の上に宿りかねてやかつ氷るらん

過ぬるか曉つゆの音はして花もうこかぬみねのまつかせ

山の端は霞にけらし櫻花暮やらぬ色そむすほゝれ行

風ならて散やさゝ浪白妙に花のかけしく庭のいけみつ

詠てそうさもまきるゝ花にさへ老はつゆけき夕なれとも

霞をや天の羽ころも春の野に霞立蝶の明かたのころ

朽にける故木の橋を山川に又さきわたす春のふちかえ

さま〳〵のなさけを春の留め置て心深くもわかれゆくらん

夏十五首

から衣かふる袂もにほへとやしけみの櫻いまもちるらむ

生駒山木々の若葉の下染や紅うすくにほふしらくも

郭公こゑのにほひを待けらし春におくるゝ山さくらはな

聲しのふ山ほとゝきすさそひ出て影かくしゆくゆふ月夜哉

時鳥聲をはかなみおとろくもいつれを夢のみしか夜の空

すみのほる雲井の光りに時鳥あらそふ聲や月もくるしき

ほとゝきすたくひもえやは久かたの天津空にも有明の聲

はかなしやあやめににほふ短夜の夢路明行軒のしら露

急雨の露うちはらひあふちさく木陰の小田に早苗取也

濱風に行人もなし明石かた月のいく夜を五月雨の空

橘のにほひや宿も久かたの月のかつらのはなのさよかせ

夕暮は外山にむせふ風の音も梢に高き夏のよのつき

更る夜の蚊やりの行へそれとなく木末に煙る岡のへの里

ふし川や嶺のけふりの下もえも夏あらはれて飛螢かな

すゝしさや岡邊の早苗穂にも出ぬ秋を獨りの松風の聲

秋二十首

敷しまの大和もろこし契ありて桐の下葉の秋を告らん
いかならん思ひやりても秋の風天の河原の霧のはころも
月も出ぬ猪をりかへせ荻の葉を風のかさしの深き夜の聲
身をかへつ野守のかりほ萩か枝の露の衣手花の小むしろ
花薄をとめや袖をふる里のみかきか原の秋のゆふかせ
夕月夜やとると見れは散ちる片山かけの松むしのこゑ
うちわひて小鹿なくなり秋の田のそよともいはぬ妻や戀らん
さらしなや夜深き月に初鴈の聲吹送る嶺のまつかせ
そこひなく光の淵やつくはねの峯より出る月の行する
清見かたさしのほる影や富士の根の雪にけたれぬ秋のよの月
明石かた山もはるかに秋の浪浮ひて清きいさよひのつき
心とや獨たつらん秋の月ともとなるをのはなれそのまつ
とふ人も思ひ絶まの秋ふかき椎の葉山のよな〳〵のつき
山里の籬の竹にいくたひか月をふき越すさ夜の秋かせ
月そすむ誰心より見えそめてねよとの鐘のふかきよのこゑ
風寒み一村のこる小山田のをしねかくれのしきのはねかき
から衣誰かは月もふくる夜のかりの涙にそめてうつらん
やとしてや深き山路の末までも匂ひを袖のきくのしらつゆ
龍田姫あかぬ千しほのから衣日も夕しくれいかにそむらん
老らくの秋のわかれよのへの露木々の木葉もたえぬ契りを

冬十五首

とゝふやいく世のかけに初時雨冬は來ぬらん杉たてる門
靜なる心やしるへ杉ふけるいほのね覺をとふしくれかな
尋來てみし秋よりはま菅生ふるみ山かくれに積るもみち葉
今朝見れはむすほゝれつる冬の夜の夢路は霜の荻の下折
吹となき朝風さむししとゝなく霜のかきねのいさゝむらたけ
あはち島待遠ならし住の江の松にふけやらぬ冬のよの月
たちならふ花しありとも白妙の氷のうへのしかのはまつま
天津空みてる霜よのうすくもり明かた寒き月のかけかな
はるかなる夕浪ちとり湊江の月のみ船にうかふこゑかな
更にけりいたつらふしををし鳥のうき中川にひとりなく聲
かり衣露はうち散る夕集のとたちの原をおもひすてめや
散やらぬ時雨の下葉椎柴に又ことかへてうつあられかな
深き夜の雪のはたへにうす色の衣々をしき嶺のよこくも
見し花は山風そ吹うつみ火のねやに問行春の夜のゆめ
霜雪にとしは末葉のさゝのくまひま行駒の影もとゝめす

戀十五首

雲の色風のけしきになかめても心のとはゝうきゆふへかな
尋ねこし里やをの山菅なしの淵をは袖の歸るさのそら
袖の上はたのむ心のはらふまに夕くれ深し道しはのつゆ
宵の間はよしや心の初花にむすほゝるとも露のしたひも

見よや人夕付鳥のころ〳〵に袖はたつたの山そしくるゝ
なくさめよ面影をたに心とや花にもとめししのゝめの空
駒の音も今夏ゆめとおとろくや哀よかなしまゝのつき橋
行(へ)る心や見えん八百稲おもひしる身はさしこもるとも
もかみ川浪にいな舟いかならん思ひのつなて千すちかくとも
隅田川河かせ寒みおもふひとなきにしもあらす夕暮の空
しらせはや小萩片しき宮城のゝ露をは鱗の夢の間原の
今宵たに心をや見ん馬はあれとかちのゝはらの霜のふゝきに
かしけたることさゝにつけて獨寒のいくよの霜の跡を見せはや
繩草のちから車を引牛のくるしむいきを我むねにして
今夏に千々の一もこひしさのまし̀る涙はなにゝおつらむ

雜十五首

松に吹風としもなし雲うつむ嶺の岩屋の夕くれのころ
わけ入は吉野の嶺の鐘の聲また雲ふかし岩のかけ道
宇治山やはるかにのほる川霧の嶺におつるみねのしひ柴
秋深み梢おちくる杉山のまつのうら風沖つしらなみ
淀鳥川吹しく浪にもみち葉の色の瀾淵を見する山風
夕暮の色にそしつむ立鳴の聲はるかなる野への澤水
軒端には稲はかりかけ山陰の外面のえのみ色付にけり
露寒み岡邊の楸あさちふのふかむる秋も知ぬ色かな
あしたつの行〳〵や月のかつらかた梢にやとる曉のころ

行てにもなにはすか笠うちやきん袖を忍ふ便ならねと
契ある須磨の關屋の旅ね哉いくよの月の秋風のそら、
こえわひぬをひえのかけを思ひ越し雪はうす雪のこしの大山
ふりにける松のしらへの琴の音を法に打そふる嶺の夕くれ
萬代の君かためとや櫻花夕かけそふるいすゝかはなみ
和歌の浦やあふきし人もいやましにみちくる重の深きみち哉

陪　住吉　社境謝自首和歌　牡丹花

春二十首

音羽川

山高みこえ來る春の音羽川雪の水もしたにとくらし

玉嶋川

朝ほらけ霞の袖にこきちらす玉嶋川のみつのしらなみ

高砂

浦浪の音もかよはす春の風それかとやとる高砂のまつ

春日野

若菜つむ今朝も打ちれ春日野や霞はうときそてのあわ雪

三輪山

鶯にさそはれ行は三輪山の霞のおくにすきたてるかと

葛木山

行へなき心やまよふ明わたる花のくも井のかつらきの山

手向山
ちはや振神てふかみにさくら花ぬさと手向の山風そ吹
伊勢海
春の空なきたる朝に伊勢の海士の世に浮日かる心もや行
志賀浦
花そのゝ春のむかしをつれ／＼と松もやおもふしかのから崎
三嶋江
みしま江や芦間も春の下萠に結ほゝれ行鴫のかよひ路
鹽竈浦
しほかまや春は霞に浮嶋の名も顯れて遠さかりぬる
宇津山
そほつめりうつの山邊に思ふ事しけき野中の春雨の空
芦屋里
芦の屋の海士のもしほ火春の夜の月にけたれぬ影そ殘れる
吹上濱
春のきるこれや霞のから衣吹上のはまにたゝむ浦波
湯等三崎
夕暮の霞はかりを行へにてゆらのみさきを過る船人
忍山
春深きしけみのさくら何ゆゑの忍ふの山に匂ひわふらん
水無瀨川
哀また春もうつりぬ水無瀨川ふりにし宮の花のやま風
大淀浦
おほよとや松よりほかに行はるのつれなき空そ浦の夕波
田蓑浦
朝なきに霞の袖をうちかへし今やおり立田子のうら波
末松山
うち侘てたれ恨むらん波こゆる春のちきりの末のまつ山

夏十首

大井河
夏木立陰しつかなる大井河浪のあらしの山のあさ風
信太杜
忍ひねも何かをしまん郭公しのたの杜の深きやとりに
猪名野
夏衣いつしか涼しみなと風吹やとすらんゐなのさゝ原
御裳濯河
神風や清き光りにあやにくのみもすそ川のみしか夜の月
伊香保沼
いつくにもけふと引らんあやめ草いかほの沼におふる一しほ
天香久山
かけて見る神代の鏡夏の夜の月もやすらへ天のかく山
大江山

大江山にしにうつろふ夏の日の梢はるかに蟬のもろ聲

難波江

夏苅のあし間にやとる都鳥なには堀江の跡や問まし

美豆御牧

はるかなるみつの御牧の五月雨に同し渡りをたとる舟人

松浦山

うちむれてみそきすゝしき松浦川山は忍ひに通ふ秋かせ

秋二十首

泊瀬山

はつ瀬山一葉の秋の朝嵐色の千しほも何かおもはむ

龍田山

花に見し峯や龍田の山櫻時雨もまたぬ秋のもみち葉

須磨浦

さらてたに月はいねかての秋の夜を須磨の關やに寄する浦浪

宮城野

見せはやな古郷人にみやき野の花にうつろふ秋のころも手

水莖岡

秋深き夕の色にそめ出す誰か水くきの岡のへのまつ

小倉山

をくら山鹿のねかなし遠からぬ都いてゝの秋の夕くれ

宇治川

水上の山いかはかり秋の色それにも見ゆる宇治の柴船

常磐杜

つれもなき常磐の杜の露時雨心をつくす秋のくれ哉

三室山

秋のおる三室の山の唐錦神の御前に手向すらしも

高圓野

あさの袖ぬるともわかむ高圓やふりにし野ちの露の篠原

伊駒山

秋の夜と賴みてそまつ伊駒山時雨の雲にいさよひの月

生田池

池水も色にそうつる秋の風生田の森に立にけらしな

淸見關

行月のうらみもしるし淸見潟關もる浪の明方の聲

武藏野

むさし野や萱か亂れに妻乞の思ひを見せて小鹿鳴也

伊吹山

長月の伊吹の山の山颪にこしのみそらの雪そ打ちる

佐良利里

をは捨や月吹拂ふ山風に小笹か上のさらしなのさと

白川關

限なき西の空よりこし秋のまた深からぬ白河のさき

野嶋崎
秋の日のうすき名殘にみたるめり野嶋か崎の波の夕暮
明石浦
さても猶ふりぬ光りよ明石かたいく世の空の秋の夜の月
阿武隈川
瀨を早みあふくま川の埋木に殘る木の葉の秋そいさよふ

冬十首

清瀧川
峯の雲しくれもあへす夕月夜清瀧川の瀨々のいはなみ
小鹽山
千代のかけ誰も待見よをしほ山小松か上につもる初雪
住吉浦
浦風も霜夜のそらに住の江や松の葉拂ふ曉のこゑ
交野
いかさまに鳥ふみたてん狩暮す交野のみのゝ雪の下柴
田簑嶋
みそれすと田簑の嶋を來て見れは（とへにイ）ぬれ〱立る鶴の一聲
有乳山
夕暮の雲のけしきも有乳山こえむ空なき嶺のしら雪
浮嶋原
みるか内の夕日にはるゝ雪の松餘の浪に浮嶋かはら
安達原
霜あさやま弓つき弓つきもせぬあたちかはらの冬枯のいろ
因幡山
かくしつゝいなはの山に今年はや末葉の松のかたみはかりに
鏡山
立かへり幾としくれぬ老のなみかゝみの山の陰もはつかし

戀二十首

伏見里
呉竹の葉分の風にひとりのみ伏見のさとのよひ〱のつき
霞浦
はる〱と霞の浦の夕月夜おほつかなくて世をつくせとや
石瀨杜
はらふなよ露はかりたにとわりをいはせの杜の木々の秋風
筑波山
袖の上にくらへくるしきつくは山峯のもみちのいく千入とも
袖浦
昔へや誰か思よりかけゝらしためしもつらき袖のうら波
益田池
賴めしにいを安くしもねぬなはのうしや益田の池みころしみ
高師濱
うつせ貝かひこそなけれ沖津浪高師の濱にくたく心は

阿波手社

朽はてぬ思ひの下葉いく世かはあはての杜にむすほゝれまし

志賀須賀渡

憂身なとあへなきこひをしかすかの渡りもやらす袖ぬらす覧

濱名橋

みつ瀬に濱名の橋のきよ千鳥まよふ浪路のしるへやはせぬ

磯間浦

たのみ来て歸る磯間の清浪も強面松にいかゝくるしを

守山

よしやたゝ忍ひこし名も守山の時雨の下葉色に出てん

佐野舟橋

世のならひあやふき中に東路や名さへうらめしさのゝ舟橋

安積沼

深からむたよりならすや埋水淺香の沼に生ふる草葉も

松島

したもえによそへてを見よ松島や月澄秋のあまのもしほ火

緒斷橋

恨みしよ心にもあらて折々はをたえの橋を中のかよひ路

三熊野浦

便なき道いかなれやふたらくも思へは行て見くまのゝ浦

鳴海浦

うとくのみなるみの浦の忘貝あやしき人の手なふれそゆめ

二見浦

心より袖にくたけて玉くしけ二見の松の風そくるしき

名取川

なけくなよ思へは人も名取河淺からさりし世々の水上

雜二十首

吉野川

よし野川青根か峯の急雨にまさるともなき瀬々の岩なみ

鈴鹿川

さくら花稀ふかけはすゝか河春をやそ瀬にせきも止めす

不盡山

すみのほるふしの煙よ春秋の株の空のいつとかは見む

還山

いにし春別れし秋の歸る山哀むかしのかゝらましかは

海士橋立

松の風浪にとたえてさ夜深き雲の渡せる天のはし立

飛鳥川

あすか河歸らぬ水のとわりにふりにし里を思ひなしてよ

鳥羽

冬されはその里人も影見えぬとはたの霜に風の一こゑ

辰市

様〳〵の世はいかならしけさの間のほとらしけなる辰の市人

吹飯浦

かち枕夢路もたえぬ秋の月ふけひの浦の沖津しら浪

布引瀧

山ふかみおつとは見れと高き名や千里におほふ布引の瀧

長柄橋

又たくひなからの橋のはし柱朽木のはしもあたにやは思ふ

玉川里

夕闇にまかふ螢やいにしへのよる光りけん玉川のさと

生浦

大方の世はうきめのみ生の浦にたゝ事なしの行へをそ思ふ

佐夜中山

旅にして有明の空の長月や見し面影はさやの中やま

嵯峨野

立いつるさかのゝ秋の夕こそこゝのかさねの匂ひ成けれ

角田川

かちにあたる浪の音にもすみた川古き渡にすむ心かな

飾磨市

引かくるおなし市女の手作りもしかまのかちに心有けり

若浦

松の色芦の枯生もことの葉に移ろはしてよ若の浦風

會坂山

あふ坂や夕付鳥の初聲に杉の葉分の月そいさよふ

三津濱

宵のまの南の風に網しほのみつの濱松陰そ涼しき

詠三十首

石清水社法樂　牡丹花

立春

明ほのや松に春たつ風の音も心そすめる嶺の神垣

霞

春の色を千種にこめて天の原限りもしらす立霞かな

梅

いつちともやとりさためぬ梅か香の心をしるや春の夕風

春月

春の夜の空しつかなる松風に霞もすめる庭の月影

見花

春の風吹なみたりそ明ほのゝ花のかさしの露のしら玉

落花

うきにたへすうつりも行か櫻花よしやと思ひかへす夜も哉

藤

山かつの垣ほつたひに匂ふなり邊にあまる松のふち波

郭公

ほのかにもいかに過けん時鳥みつのゝ里のしのゝめの空

五月雨

待出る月としもなし五月雨の雲のとたえの村雨の空

納涼

里遠み夕立すらし玉すたれ吹まとはせるのきの松風

初秋

思ひあへぬ光をそ見しひくらしの鳴や梢の秋の三日月

草花

ふちはかま色も匂もから衣袖にをしまぬ野への朝露

鴈

とゝむへきかたこそなけれ鴈金の聞ゆる夜半の袖の白露

鹿

秋の露やゝ寒からしさを鹿の聲も移ろふをのゝ萩原

山月

はるかなる晋羽の山の山あらしも都の月にふくるそら哉

浦月

難波かた鹽干にうすく成にけり浪にかたふく沖の月影

擣衣

花すりの袖露をしみ秋の野の形見の衣うちすさふ也

時雨

大方の袖やはかゝるさよ時雨すゝの篠屋の明かたのそら

落葉

哀とや村々のこる神なひの杜の木の葉をとふ嵐かな

雪

淺みとり雲もまよはす明にけり雪の光りの山のはの空

忍戀

秋の風身にはしむとも亂るなよ忍の岡のつゆのかる萱

不逢戀

はかなしや思ひ思はすとゝへはむなしき空の秋の夕くれ

契ゝ

春の風あたには過し花のかの契りやおきしかたしきの袖

待ゝ

もとゆひに拂はぬのみか伏佗て今朝は移ふしものおも影

別ゝ

忘れしの行へよいかに月やとる袖のわかれの有明の空

絶ゝ

うきなから猶や伊勢をの海士衣昔をかけし須磨の浦波

恨ゝ

嶺高み思ひの雲もかゝるめりつもるうらみのちりひちの山

曉

鐘の聲いつとひ捨ん覺やらぬ憂身の夢の曉のそら

旅

身の行へ漕行舟の跡とたに誰に傳へん鹽かまの浦

祝

道しあらはおろかなりとも君か代を祈心は空にみつらん

詠十首和歌

住吉社法樂　牡丹花

春

天地のひらけし代にも春の色や分て心のたねと成けん

うちなひき春にうつろふ世は花の光りも陰もをしき空哉

夏

大御田をうゑめのころもすみの江や秋遠からぬ峯の松風

秋

彦星の妻むかへ船待ほとや月もいさよふ天の川なみ

おらてこし小萩か上のいかならん遠里をのゝ秋のむら雨

冬

啼千鳥たよりともなしかち枕おきの小島の有明のそら

戀

獨のみ詠むれは猶おもひ草朝夕露にしけきころかな

今宵たに思ひもいれしおくみえぬ心の花のしのゝめの空

雜

日くらしも鳴ねとたえて槙の葉にいる日を殘す峯の天雲

なけかしよとにもかくにも老らくは心も盡ぬ敷しまの道

夏日詠十首和歌

住吉社法樂　牡丹花

新樹露

秋の露思ふ若葉にくれなゐのとたえあやなく茂り行比

海邊郭公

うつりこし山郭公すみの江の松にやとりを月もをしまし

五月雨

かきこもる宿にかこたし天の下かくこそあらめ五月雨の空

深夜螢

風やたつ夜深き露の亂れ芦に宿りもあへす行螢かな

林下納凉

行まゝにひさ木の茂みむら柏風も忘るゝ陰の凉しさ

忍待戀

かけて吹雲よあらしよ忘れては心見ゆへき夕くれの空

逢不逢戀

かさねつるをしの衾をいく夜とかむなし氷の床にしくらん

羇中戀

夢にとも何か旅ねのすか菰たらふをはらふ十ふの浦風

浦鶴鳴月

身にそしるふけゐの月に老のつる便も浪の曉のこゑ

社頭祝

かけまくもいへはかしこしみつ垣の代々に傳へし敷しまの道

詠十首和歌

天滿宮法樂　牡丹花

初春

久かたの空は霞も立聞ぬあけほのしるし春の遠やま

殘雪

淺みとり移らふ比の梢より遠き山邊の雪のひとむら

梅風

梅の花四方の匂ひを心あれやせはき袂に分る春風

柳露

よそふへき匂ひよ誰と白露の玉をかさしの青柳の糸

歸鴈

いつくにも思ふ行へをふりすてゝすゝの御崎に歸る鴈金

春月

更るまて霞の月を鐘の聲うらみかねてや消かへるらん

見花

いく春の老の末まてあくからす花やいかなる匂ひなるらん

款冬

影うつる花山吹のから衣ひとへやひたす春の川なみ

春戀

面影の霞める花に詠して忘れ形身の春そくるしき

神祇

亂れあふ苔のみつらもしらゆふに霜ふりたる神垣の松

陪　住吉社壇　詠十首和歌

牡丹花

閑中春曙

明ほのや深き霞はつゝめとも千里の春にゆく心かな

深山花遲

山深み契りか假し百千鳥歸りまちける初さくらはな

人傳郭公

時鳥心なき身に人傳の初聲をたにさそなをしけき

遠天旅鴈

心すむおのか夕や天の原深きみとりに秋のかりかね

明月如晝

むは玉の夜るとしもなし秋の月朝の雲の夢や待見ん

水鳥馴舟

あし鴨も朝夕浪にみなれ棹さしも馴れぬたなゝし小船

相互思戀

哀しれ思ひ暮して蝶鳥のうちかたらへる花の手まくら

披書恨戀

さたかには思ひ思はすみえしとやくま〳〵深き水莖の跡

晴後遠水

夕暮の遠山本のたまり水暮もゆかは大澤のつき

松契遐年

千とせをもかけさらめやは思ふ事印をみつる住吉の松

陪　住吉社擅詠十首倭歌　　牡丹花

初春

昨日けふ聲うち霞む沖つ波春をこたふる住吉の松

殘雪

深山路や眞柴の垣ね村々に日はさしなから殘るしら雪

梅風

春の風千里をかけて梅の花咲るさかさるわくとしもなし

柳露

川つらの山本柳さやかにも朝日うつろふ露のしらたま

歸雁

歸る雁春の海邊にうちつれて汀に殘る聲そさひしき

春月

さしいるも更行まゝに霞夜の月のかゝくる窓のともし火

見花

白妙の花におほへる明ほのゝ春のかすみや天の羽衣

欵冬

うつりこし春の千種も忘る也八重山吹の花のゆふはえ

春戀

あひ見しを思へは人もうかれけん朧月夜を巾たちにして

春祝

かきりなく久も千とせをふる聲の春に立歸る和歌のうらつる

春歌上

年内立春

けふの春いかに知らん久かたの空も霞めるとしの暮かな

おなし心を

年の内に心みしかき老業をなくさめとてや春の來ぬらん

立春

ことの葉の道に歸りて久堅の天つ神代の春立らしも

正月一日攝州豐島住吉社にまうてゝ

春は來ぬ讓代に思ふ萬代も是やためしの住よしのまつ

年々此社にまうて侍りき

瑞籬や萬代かねて松の葉の同し緑に春立らしも

かくしつゝあかす八千代も七十の春を契りし住よしの松

住吉の松をたよりにけふの春を[illegible]に迎へ來し哉

おしなへて世に待えたる春の色ひとしからめや住吉の松

住吉社法樂に海邊立春を

住の江や松ふく風の春よりそやまとしまねも今朝は霞める

たくなはの世々の春風けふとのみ霞にけりな住吉のはま

天の原日影ににほふ春の色をしきつの浪も今朝そ長閑き

立春梅　年々試筆詠之

天地のひらけし代より梅の花今日の春にや匂ひそめけん

あまつ風ほの〳〵明る梅か香に世は打なひき春や立らん

梅花けふもあまきる雪中に春來にけりと匂ひ出らん

契ありて咲にけらしなくる春の千年のかさし匂ふ梅かえ

天つ風わきて東の空もあれと梅か香よりや春は立らん

いつのまの春にそみけん空の色千しほに匂ふ四方の梅か枝

世にみてる人の心を梅の花いふはかりにもにほふ春かな

明渡る空にそにほふ春來ぬといふよりまさる梅の初花

久かたの天つ乙女の衣手も梅かゝよりや春はたつらむ

永正十三年正月一日試筆に立春天

今朝よりの春を心の天の原霞の衣世におほふなり

年々詠梅花とせすして改題。

正月二日の月を

ほのかなり昨日か立し春の空にさそはれぬらし月の夕影

又の年の二日に

昨日こそ年は越しか三日月の空より高くすめる影哉

正月三日の月を

天の下春待えたる誰も世に心あるへき今日の三日月

春來てもさえける雪の山の端にそれかと霞む宵の三日月

春の色に霞初けり一年の月の匂ひやけふの三日月

おのつから春はこもれり山のはに霞むともなき三日月の影

哀なり老の末までいくかへり見そめし空の春の三日月

早春

雪もまた絶々まよふ草の上に燃へたれて霞むはる風

おくふかき春にそ霞む百千鳥はころひ初る曙のそら

早春雲

昨日見し雪の名殘は葛城や霞にまよふ嶺のしら雲

早春霞

今朝みれは雪吹まよふ天つ風音もかはらて霞む春哉

さえし夜の嵐の跡は岸深み松とはかりに霞む明ほの

早春雪

消ぬか上に霞むやいかに吉野山かすかの野へに迷ふ沫雪

おなし心を

淺みとりかすみの衣はらふなよぬれぬはかりの春の沫雪

山早春

時わかぬみとりに成ぬ白雪の殘るを春の嶺の常磐木

足引の山とし山も雲風のをさまれる世をはるの色かな

關路早春

曙や霞なからのふはの山槇の葉つたふ春の沫雪

湖早春

明渡る霞も波も春を淺み氷にむせふしかのからさき

名所早春

久堅の天つ神代の春を今朝御裳濯川に引霞かな

松たてる峯の霞も千とせ山猶いく返り春にあひ見ん

誰も見よ千とせの春を高砂や松に宿して立霞かな

名に高き富士のしは山春來ても雪の麓にたつ霞哉

淺緑今朝そ移ふ春日野や空は霞のゆきのしたくさ

住吉社法樂に初春

浦浪の千里をかけて住吉や春風立ぬきしのひめまつ

住の江やとたえては又春霞八重の鹽路に岸のまつかせ

おなし心を

空は今朝から藍染を敷島のやまとの春にたつ霞かな

朝霞

四方の空春を神代の妻こめに八重垣作る朝霞かな

久堅の空にこもれる深みとり春待いてゝ今朝霞むらん

泊瀬法樂におなし心を

春としも今朝はあらしの音なから檜原に霞むをはつ瀬の山

源賴豐(能勢因幡守)城にて嶺樹帶霞

梓弓万代かけて春かすみたなひきにけり峯の常磐木

霞隔遠樹

ゆく／＼もおもはさらめや朝霞生田の森のをちの船人

ほのかなる梢のをちの木末まて薄き霞に殘る野へ哉

遠村霞

朝霜に見えし軒はや夕くれの霞のおくのさとの一むら

行路霞

ゆく／＼も見まくほしきを夕霞遠山まゆににほふ袖かな

山霞

風にみかく白玉椿今朝みれは霞につゝむ高さこのやま

ねくたれの黑髮山の明ほのをゆかしけあれと霞む春哉

遠峯霞

生駒山ふかき霞も面影の高根うつまぬ春の明ほの

海邊霞　住吉社法樂に

住吉の松よりあまる朝霞浪を千里にそむるはるかな

萬代の數にもあまる白玉をしきつに霞む春の浦波

住よしの岸の姫松かすむ日のゆふへもしらす返る浪哉

おなし心を

明る夜の浪に霞をあらはすや衣の浦の玉つしまやま

世にしらぬ春の心やみつ汐の入江に霞む玉つ島山

浦霞

朝きりのむかしをかけて明石かた霞の内の春をしそ思ふ

霞もや心あるへき四方の海に名高の浦のはるの明ほの

濱霞

日の本はいつくわかねと朝霞みつの濱松のこるはるかせ

湖上朝霞

行へなき霞の内に明る夜のあさつま舟を誰したふらん

江上霞

難波江や今朝はかすみに玉かしは埋れのこる淡路しま山

三島江や河風ならしかりこもの亂れて浮ふ朝霞かな

關路霞

來る春を關の明日さえなから空はしのひに立霞かな

るもしを上におきて讀侍し原上霞

るりをし／＼霞なからに若草のあしたの原は露のしらたま

早春鶯

昨日けふ春をまちとる梅かえにほころひかぬる鶯のこゑ

待早鶯

朝な／＼霞めるのへや白雪の深山にむせふ鶯のこゑ

鶯出谷

鶯も雲ゐる谷に埋木のはなを都におもひ立らむ

雪中鶯

山ふかみ匂ひ出たる鶯のこゑのはつ花雪なしをりそ

雪なから明れはかすむ呉竹のふしみの里の鶯のこゑ

ゆき殘る梢をよきてあくる野の霞を傳ふ鶯の聲

鶯のこゑする野邊の曙にちりすてて行〻春のあわ雪

朝鶯

朝またきいつくの野への花の香にさそはれ出し鶯の聲

夕鶯

夕月夜ほのかなるまて梅か香のあかぬ匂ひに鶯のなく

谷鶯

うつり行谷の梢に聞ゆなり川音遠き鶯のこゑ

瀧邊鶯

鶯の聲のしら玉氷るよりおのれうち出る瀧の本かな

山村鶯

野を遠み夕日かくれぬ鶯の一聲のこるいさゝむら竹

あをうき

ふりかゝる雪の色さへあをうまをさやかに照す夕月よ哉

七日子日なりしに

わか菜つむけふしも引て姫小松とを數多の野への春哉

若菜

沫雪の降からをのゝはつ若菜ぬれても摘ん今日の諸人

けふといへは門の前野に里人の市をなしつゝ摘若菜かな

春をしる人にひかれて雪の中の老の心もわか菜つむなり

殘雪

名殘とて人もすさめぬ奥山のおとろの枯葉雪そこほれる

おそくとく枯し草葉の心ともいかゝ崩出ん雪のむらきえ

野外殘雪

淺緑野へに待とる春の日の光りも薄きゆきのむら消

春雪

伊駒山嵐の末やかすみしく遠里をのにまよふ沫ゆき

餘寒嵐

山さくら花まちとほに成ぬとも嵐にまよふはるの沫雪

湖餘寒

吹向ふをひえおろしにくる春の霞いさよふ志賀の浦浪

二月の三日月を

春立つと驚きしまに今年はや二たひ見つる三日月の影

又の年二月三日月を

さえにけり空は二月はつ春の影におほめくけふの三日月

依梅知春

梅の花さきにけらしも太山邊の雪間打出る春の初風

梅

春の花色も千草の行へまてほのかに匂ふ梅のはつ風

曉更梅

あさいすとよそにや見えし玉簾曉かけて匂ふ梅か枝

夕梅

またれよと霞にけらし梅かゝに月はいさよひのたそかれの空

夜梅

明ほのを待見さらめやうたゝねに匂は捨し梅のはる風

梅薫夜風

春の夜のはかなき夢も梅か香に夫かとたとる小筵の追風

月前梅

いくたひか見さりし影にうつるらん更めくる月の窓の梅かえ

軒近紅梅にほひ深く月もかすみたりしに

梅か香も霞める月も春の夜を身はならはしのいねかてにして

山家梅

心あれな春の山里香に來し人もうち見ぬ梅のにほひに

里梅

吹風にうかれ出ても古郷と立やかへりしふかき梅か香

籬梅

荻の葉の葉にまさりて身にそしむ軒はの梅に匂ふさよ風

藤原直盛（池田近江守）亭にて池邊梅

春の池の玉もの花と移るまて衣手かれす匂ふ梅か枝

梅香透簾

梅花匂ひはそらに飛鳥のあすかの里や立つ春風

梅薫風

さえ〳〵し風も匂ひに咲そ行霜枯山の梅のあわゆき

千歳經む千代の種や梅の花さけ床の匂ふ相生の風

梅の花匂ふゆふへは身を分て空に心の行衛そふく

春の風まかせてを見よ梅かゝの心とゝはん里もこそあれ

梅か香や空にみつらん色にさへ霞む斗の四方の春風

海邊梅（尾崎宗琳茅屋にて）

潮風も心ありきや梅か丶の霞みこめたる芦の八重ふき

梅風

さそひ來る風の力やよわからし殘多くもにほふ梅か香

から衣行手にとめし梅か丶を心あさしと拂ふやま風

梅香留袖

今も名は高津の宮路過かての春のころもに匂ふ梅か香

草庵にて梅叢得客といふ事を

梅花千しほあうへの匂をもとゝふ人に待見つるかな

水邊柳

あさみとりそむる柳のから衣今朝そたつたの春の川風

川邊柳

大川や春の河上七夕の手染よりかくる青柳のいと

春をへし川そひ柳おきふしに朽はてぬ世を亂れ侘らん

岸柳

青柳のいとにこきちらす朝露の玉しま川に霞む春風

柳風

古川やたてる朽木のかた枝にも風のすかたは青柳のいと

河邊柳躍風

山もとの川風よわみ春の色に夕日をそむる青柳の糸

柳路風

うらむへき花の行への春の風宿りはあれと青柳の糸

柳露

さほ姫の千尋にかくる白玉の露とも見えぬ青柳のいと

歸雁

櫻花うつろふ比やおのつから思ひ立らん春のかりかね

歸雁聲々

おくれつゝ迷ふは花に心もや引かへさるゝ春のかりかね

歸雁幽

雲井にそこたへて霞む面影は苗代水の春のかりかね

琴の音になかのほそをゝ引かりの一すち霞む明ほのゝ空

春曙

九重や思ふあまりに思ふかなえそか千しまの春の明ほの

それとなく天飛鳥も此比の花にうかるゝ明ほのゝ聲

いかさまにわか身むかはんとの葉も心も盡ぬ春の曙

閑中春曙

むかふにそ身さへくるしき花鳥も色ね亂さぬ春の曙

二月の比夕月夜のおかしく見えしを

雪あられさえぬる空と見し程に嵐に霞む夕月夜哉

おなし比月いまたさえわたりぬれは

山高み嵐にさゆる春の夜は霞も空にいさよひの月

春月

誰をいとひ誰に見えんの影もなくひたや籠りに霞む月哉

哀をもいかに問まし春の夜は心ふかくも見ゆる月かな

をしましよさむる枕も春の夜の月の都のうたゝねの夢

海邊春月

和田の原霞はれつゝ渚うつ音のみのこる月のゆふ波

浦春月

春は又霞のころもうちかさね月に夜かれぬすまの浦人

煙たに霞なそへそ鹽かまやさらても月は春の夜の空

おもふへき姿ともなし春の夜の朧月夜の和哥の浦かせ

濱春月

あやなしや霞なからに明石かたはまの苫やの春の夜の月

白妙の眞砂の數も濱ゆふの百重にかすむ春のよの月

春湊月

ゆらの戸や月の小舟も梶をたえよるかたしらす霞むよのそら

三月の三日月

初秋の空に待見し影もあれと花の木の間の今日の三日月

花かつら長き日くらし待出る空にそ霞むけふの三日月

春歌下

待花

咲出ん花の世をまつ此比の心や誰もはるのみやひと

咲ぬともかくこそはあらめ朝霞をくらか嶺の花の面影

雨中待花

窓の内に思ふもかくや春の雨のやしなひ立ん花の面かけ

待花

とひ行は野にも山にも櫻花心まよひの面影もうし

櫻かり夕付鳥もはる霞たつ田の山にこゑにほふなり

都人春の錦のころも手に山路の花も見えやわふらむ

遠尋花

いたつらに分るもよしやかへるさの山はいくへの花のしら雲

櫻花とひ行末は山ふかみしる人ならぬ鳥の音そする

山路尋花

櫻咲春にしあれは百敷の大宮人もやまちこゆなり

花の本たつねもゆかし見すもあらぬ嶺の霞の夕暮の色

尋山花

おくしらぬ花のこゝろやいつくにも問は忍ふのはるの山ふみ

遠尋山花

白露をわけそほちつゝ夕月夜霞む山路の花の面影

遠日待花

逢へたゝ霞にくるゝ遠山路なきたる朝の花の面影

初花

櫻花はつ時鳥初もみち色ねにもあらす霞む明ほの

まち／＼し心よいかに櫻花我にもあらすむかふ明ほの

雨後初花

さくら色にまた染はてぬ春のあめの四方にいさよふ曙の空

花初開

誰に猶殘す思ひそとけてたに今朝は露けき花の下紐

霞中花

かすめたゝもろこしまても敷島のやまとのみかは花の面影

かは櫻わか面影にさほ姫の霞る花とたれか見さらん

夕暮は花の宿りを春霞風もよきよとかこふやまかな

雨中花

天をと女そめし心やよしの山花にゆふへの雨となるらん

うすくもり雨とも見えす櫻花ぬるゝ貌なる春のゆふ暮

花

世にみてる色も匂ひも天の戸のあくる待ける花さかり哉

花は世におなしにほひの春としも思ふ人なき山櫻かな

いかにせんこの世のものと櫻花思ひかへすもあらぬ匂ひを

曉花

明なはと誰思ふらん花の上に心をやとす春の夜のそら

花の色にうつろひ消て明る夜の高ねに霞む鐘の聲かな

曙花

ぬしや誰霞のころも花の色に匂ふかうへの明ほのゝ空

い別れ思ひな消そ相坂や山櫻戸の春のよこくも

朝見花

思ひつゝねての朝けの横雲に夢ともわかぬ花の面かけ

手枕の花のひかりにうは玉の夢路うつろふ春のしのゝめ

攝州神咒寺にて十首に同し心を

山さくら嵐はむこの海かけて花にそ霞むしのゝめの空

朝花

春の夜や岩戸のむかし咲花の光りに明る天のかくやま

櫻咲よもの山邊の朝くもり花にまかせて霞むともなし

夕花

はかなくも待とる花に夕月よ宿りもはてぬ影と見なから

名所夕花

花の上に誰夕くれのかねの聲霞にけらしを泊瀬の山

山中花夕

いかにせん花に嵐もとわりの宿りわかれぬ夕くれの山

草庵に人々來りて歌よみ侍しに心在山花

あやなしと花の宿とふ人やみん四方の山邊に分る心を

山花

淺緑空に殘らぬ白雲の花にいくへのあまのかくやま

山高み雲井のさくらよそにてもあかすは何を春の曙

移ろふや朝な／＼のさくら色にひとしほそむる四方の山の端

山家花
殘る日の霞もあへぬ花の上に夕風たちぬ春のやま里
古寺曉花
ね覺ても夢かとそ思ふ鐘の音野寺の花に匂ふ明ほの
關路花
風をいたみ足柄山の櫻はなちりかひくもる浮島の松
田家花
うちかへす賤か袂も雪とのみ嵐の花のふるの小やま田
川上花
夕川や吹おろす風のあらし山花にやすらふ春の旅士
はし姫の袖の別や思らん花もいさよふうちの川風
遠村夕花
しをれても待人あれや夕嵐ふけともちらぬ花の一村
閑居花
かすめともなにかさひしきこてふのみ尋ねし花の夕暮の宿
庭花
玉簾おろす夕もしらぬまに程なく花の明るかけかな
名所花
岩はしも絕なはたえねとはかりの花に明行かつらきの山
哥合し侍し時志賀の山越を
さゝ浪やひらの高ねの明ほのも花にかすめるしかの山越

花映日
八重にたつ雲にくもらぬ朝日影花より匂ふ葛城の山
花さかり霞こきませ久かたの光りも匂ふ四方の山のは
花盛
久かたの天つ空行月も日も花にそかをるみよしのゝやま
おなし心を
うつろはむ物とも見えす櫻花雲井遙に匂ふ春かな
一はたにましらぬ花はます鏡うかふ塵なき山櫻かな
花[illegible]閑
忘れてや後はうらみん櫻花ふくともちらぬこその山かせ
處々花盛
すかのねの長き日くらし百千とり四方の櫻にあかすも有哉
花滿山
櫻花峯もふもともけさみれは八重の白雲沖つ白なみ
曙やのこれる月も鳥のねも花の匂ふをいてぬ色かな
雲鳥の達もたえて櫻花匂ひに霞むみよしのゝ山
見花
物ことに世そ久しらぬ櫻花いかなる色に人なとふらん
終日對花
菅の根の春日ともなし移り行花の雲ゐの詠せしまに
[illegible]

よそめいかにいほり立出て花の本杖にそかゝる老の姿は

花目

思ひやる心にもあらし雲埋む山櫻戸の花のあるしよ

依花待友

心あらは誰をまたまし櫻花淺茅かやとにひとり見るとも

花留人

山里のたひねやせまし夕霞花に霧をそふる色かな

九重や行來まれなり足引の山路の櫻また盛りかも

旅行花

忘れしな花に宿りをかり衣ぬれてもかをる夕くれの雨

雨中花

花にたにたれすはせぬ古郷のほとは雲井の白川の關

月下見花

うちつなく花の山路に櫻色の月毛の駒は心ありきや

花下送日

とけそめし露の下紐移るまて心つからの花のかけかな

おなし心を

枕とていく夜になりぬ野への草結ふ斗の花の木の本

花に人しかひやなからん散ぬとも立歸らすははるの山里

攝州榮根寺にて花下忘歸

けふくれし名殘のみかは花の本に年の幾とせ馴し老そも

花時心不靜

かきくらし散らはちらなん櫻花さらても心うかれやはせぬ

三月の比三輪の社にまうて侍りて

さらてたに問まし物を櫻花木ふかく匂ふ三輪のしけ山

風前花

あたにしもさそはれ初て霞行嵐の末は花そわかるゝ

水邊落花

折しもあれとまらぬ花にみな瀨川ありてゆく水つらきころ哉

花漸散

花盛ちるてふとを見え初し一本つらき山さくらかな

花如雪

すみれたにさかすは何を山風にかきくらす花の雪の下草

木陰落花

とふ人のうとき恨みを色見えてふりにし里に花そ移ろふ

落花人稀

古郷のこすのまよひに散花をしたひ捨ても飛つはめかな

夕暮のあらしのすたれ糸たえて結ひもとめぬ花櫻かな

落花滿庭

霞つゝたえ〳〵散と見しほとに庭は夕の花のしらゆき

落花埋道

み山路やあらぬ木かけも白かしの雪をあらしの花そ降しく

よしの川嶺はあらしの櫻花ちりしくうへや夢のうきはし
玉ほこの道行人も夕嵐ちりかひむせふ花のしら雪

落花

うらみしよ散を哀と見る人も有とや花に春の山かせ
いとふなよ花に山風さらてやは世にをしまるゝ程を見えまし

惜花

さそはるゝゆゑこそあるらし行春に四方の山邊の花の白雲
天地も思ふをしるや櫻花ほのかすむ雨に山風もなし

暮春惜花

行春もさそひ捨てよ櫻花たか名殘とか人も忍はん
山さくら殘るをみれは花よりも心みしかくはるの行らん

布留社にて

山さくら春は暮てもふかみとりたてるを花のふるの神杉

殘花稀

歸りしをくいの八千たひなく鳥や花なき山に思ひ侘らん
思ひいりし行へならすは春ふかき花をみましやは山茂山

春雨

雨なれや霞の中にとふ鳥のつはさをおもみ聲しをるなり

古郷春雨

みるまゝに軒のしのふをふる鄉の春にいろそふなかあめの空

旅泊春雨

浪枕霞のうちに雨のおとも忍ふのうらのあまのもしほ火

海邊春朝

松のはゝ今朝うつもれて興津波霞をあらふ住吉の濱

春夕

頼むへき行へなからもなかめ侘ぬ霞む夕の春の山のは

春夜

花のうへに春の嵐の更行をうたゝねなから聞あかしつる

戸外春風

暮はてゝあかすゝ人にし眞木の戸のそらの名殘やさよの春かせ

春田

世中につらき物からうちかへし哀とそ思ふ春のあら小田

早蕨

雉子なく峯のさわらひそことなく袖ふれて行春の日くらし

春野思子

なくきゝすけふりのうちは夜のつるの聲より悲し春のやけ原

呼子鳥

わきて忍ふたれそのもりの呼子鳥昔忘れぬ夕くれの聲

雲雀

夕ひはり床も忘れて櫻花ちりかひ霞む空になくなり
こゑは又あかりもやらぬ夕雲雀花のなかめそ雲井はるけき

かほとり

何となく物忘しつかほ鳥のしけみに通ふはるの山里

春駒

おほかたの春にやいさむ若草に心もとめす駒かける也

春雑物

なつなおふる園生のこ隠すかなる花にはかなき宿をそかる

野遊

様子なく春野朝ふむ宮人のうち出る袖も花のしら雲

遅日

花の香も空にみたれてゆふ栄の長を春日ををしくやはあらぬ

石清水臨時祭

春もたゝやよひの今日と鴨よりかさしの藤の花の夕はえ

苗代

かりほさす苗代を田にうなゐ子の鳥おとろかす聲のさひしさ

蛙

澤小田に妻よふかはつ雨ふれはいとゝをしまぬ夕暮の聲

田村春草

水清みおふる草はもたゝならす花のあたりの春の小山田

野徑菫菜

こゝろなき道行人もてふ鳥のさそふ春野に菫つむ也

菫

すみれ摘便をもみつ露霜のふりにし里と思ひ消めや

つはな

春そむるすそのゝつはな白妙になほなかき日を殘す比哉

杜若

春の草沼澤をのに咲そめて花もかくれぬかきつはた哉

桃

もゝさけはしつやのそのふ行歸るあさの衣も花の夕はえ

梨花

行春の名殘はあれと見る人も遠山なしの花やさひしき

燕

百千鳥それに成行春の暮に軒のつはめの聲なかりせは

池邊藤

うす色のたかから衣ふちなみをおりかけゝらし瀧の白糸

江藤

うつろふや山は名殘のかすむ江の春も惜まぬ岸の藤波

躑躅

紅のこそめのつゝし衣手も心も花の色そうつろふ

款冬

咲かゝる岸の山吹行春のしけみの露に袖ぬらせとや

しられしな下に露けき山吹の花にいかなる思ひありとも

名にたつはそれさへくるしいはぬ色に人としけき山吹の花

里款冬

たをれとやいふはかりなる櫻かり行ての里の山吹の花

名所欵冬

春くれぬふるき都のやへさくらさくとみしまの井手の山ふき

岸欵冬

吉野川岸による波山吹の花を名殘の春なさそひそ

暮春

春そ行契し誰に花鳥のなこりをみつゝ思ひたつらん

花はみな木ふかく成て小蝶とふそのゝ小草に殘る春哉

行春も山路やすらへ名もしらぬ木草の花のちりのまかひに

暮春風

ちらしても戀しからしや花に風みなれそなれし春のくれかた

暮春月

誘れはうれへかほなり聞々て花に別し春の夜の月

暮春雲

思ひたつ春もやいとゝあくかれん鳥もいるさの山のはのくも

暮春野

雉子鳴をのゝ淺茅生この比の朝露しけし春や行らん

江暮春

住よしの松もや思ふ月も又ほそえに霞む春の名殘を

草庵につれ〳〵として暮春鳥を

さひしさよ垣ねのしとゝ春くれて朝夕なれし聲も聞えぬ

舟中暮春

船わ(いイ)たす波ちのすゑも面かけはくれにし春のしかの花その

留春不駐

したふ人につれなき春よたゝならぬ曙をさへ思ひすつらん

三月に時鳥をきゝて

ほとゝきすうちおとろかす曉はやよひの春の夢も殘らす

三月盡

更に又別はてにし花鳥の面かけをしくくるゝはるかな

かきりある春のこよひよ大かたにふけぬと聞し鐘の音かは

閏三月盡

誰もさそことしはいたく馴々て名殘かなしき春にも有哉

夏歌

首夏

春暮し四方の梢に在(花イ)鳥の音里したふ夏やきぬらむ

首夏風

夏きてはしけみの櫻さそひ出て花に恨み[illegible]

夏衣

けさはまたかふるわか葉の衣手に咲おくれぬる撫子の花

けふとしもえやは白絹たちかふる心ならひの瀧の岩波

うらもなくみなゝりにけり今日よりの衣を人の心ともかな

餘花

よし野山花ゆへみおくは櫻花更にけりと今かさくらん

餘花

夏木たち殘り行花の跡〳〵にうつる山かせ

田新樹

白かけの岸たにゝこれ夏内のすそのゝ草葉咲かはるまて

新樹

夕月夜いさ白雲もかつらきやこのころしける槇は井の水

うつしみよ山す鳥やはらかになりぬ若葉をことのはのみち

山家卯花

山里や今もとはまし道櫻移ひあへぬみねの卯花

路卯花

心あれや草はもはるのなこりなき片岡のへにさけるうの花

卯花

白浪をたゝへてさける卯花の山路はるけき瀧の水上

目にたてぬ垣ねのむはら卯の花をうらやみかほに咲るのへ哉

待郭公

郭公まつちの山に女郎花咲てうらみん使ともなれ

待侘ぬおもひ入しやもろこしのよしのゝおくの山郭公

時鳥つれなきこゑを忍ひにてはちすのなかにこもるやと哉

初郭公

春の花わすれかたみは初聲の明ほのにほふ時鳥哉

攝州あくた川のほとりの山中にて同心を

夏きては仲日けふかも是引の山のかひある時鳥かな

伊勢に居しとき名所郭公といふ事を

時鳥伊駒のたけの雲ゐより今もなかむる秋しのゝさと

おなし心を

さかきはの夕つけゆけは忍ひかね鳴や三室の山時鳥

野時鳥

うつりきて手にもたまらす水草苅あさはの野らに鳴時鳥

海邊時鳥

時鳥涙き岸とす一こゑは忍ふのうらにさよや更ぬる

時鳥思ふや月は清見かたなみのせきとの明ほのゝ聲

住吉社法樂におなし心を

はかなくてなけ時鳥橘のをとのしほちの有明の空

杜郭公

時鳥月待とてや泉川はゝそのもりの有明の聲

曉郭公

あはち嶋待とる月に郭公と渡る聲の住よしのはま

時鳥心ありきや思ひねの夢にまきれぬ曉の聲

いつちとか鳴て行らん時鳥うのはな山のしのゝめのそら

薄暮時鳥

ほとゝきすことわりなれや鳥の音も四方にやめたる夕暮の聲

五月郭公

あやめしく夢路はかなきうたゝねに結ほれ行山時鳥

心あれやことゝひきつる時鳥けふのあやめも分ぬ庵に

飛鳥井黄門入道の亭にての當座に月前郭公

雲もなき月に一聲時鳥朝きよめする天津空哉

おなし心を

月きよみ誰かね覺の時鳥夜わたり歸る有明の聲

夢中時鳥

一こゑはしるしをそみし夢にもと頼む初せの山時鳥

郭公いかにしたはんうたゝねの夢さへのこるさよの初聲

郭公稀

たえ／＼になれるもよしや郭公野にも山にも面かけの聲

菖蒲

あやめ草陛はうちなびき雲のうへの軒も一つにけふ匂ふらし

菖蒲しく名残にゝたる空もなし軒はも匂ふしのゝめの露

疎屋菖蒲

しつやまて今朝はあやめの玉簾はひ入にゝほふ袖の白露

若苗をみ侍て

みちのへの小田のわかなへ衣手にうつる斗の夏の朝露

夕早苗

かけうすき日も夕風にさなへとる賤か袂や忍ふもちすり

山田早苗

雨そゝくすそはのさなへつくはねのかけとみるまて茂る比哉

採早苗

岡のへやかれいひすさふさをと女のやすむ間もなく取早苗哉

立そさるゆひも中／＼所せき田面のさなへうへやかぬらん

茂りてはくるしき田草一本もうふるさなへに取なましゝを

嶺五月雨

霧落る峯の葛葉の夕風に歸る雲なき五月雨の空

杜五月雨

駒とむる影さへくらし木幡山猶さみたれのもりのしたくさ

湖五月雨

たゝへつる海に神代の玉ほこやみちひを見する五月雨のあと

此比の道行人ははれまにも雨つゝみするさみたれのそら

五月雨晴

朝日かけみとりに涼し草も木もくるしかりきや五月雨の中

はれ間にもしのたの杜の五月雨は草吹風や雲と成らん

梅雨久

雲間みし一夜ふた夜は月もたゝひろひし玉の五月雨のころ

まゆこもりいつ立いてん夏引の手引の糸の五月雨のやゝと

橘薫風

なかめてもしのふかひなきとの葉の昔の風ににほふたちはな

さそひいる花橘のきよ風によひまとひせし閨のさむしろ

夜橘

やとりきて月やいさめし橘のにほひなからのうたゝねのそて

野徑夏草

夏草のしけきのへはふ葛かつらしめゆふからに残るふるみち

磯夏草

磯つたひみらくのおほき夏草やみつ鹽よりもふかくなるらん

夕夏草

いもかひもゆふかけ深き夏草の野島か崎に通ふ浦風

百合草

夏の夜はむすふともなしさゆりはのかとかましく靡く朝露

あたに咲色もむつましさゆり花大和ことの葉思ふ名残に

堀川院百首作者肥後號百合花思之也。

島間麥

行水も庭にを見はや川島のいはねの小松なてしこの花

蚊遣火

残る日のなこりほとなき山本やかやりに暮るゝ梢なるらん

鵜河

鵜かひ舟せゝの河音小夜更てはるかにのほる篝火のかけ

名所鵜河

宇治川やかけは鵜舟のかゝり火に椎の葉白き夕やみの空

鵜かひ舟さとの契も後の世に思ひやしらん宇治の川長

曉鵜川

鵜かひ舟いとひもあへす月影に心や見えしよこ雲のそら

夏月

天の川千さとの中の恨みをもしらてと渡る夏の夜の月

まつとなき椰のたつみ月は出ぬ行へもさそな短夜の空

短夜月

うらむへきたよりもそなき天原めくり残さぬ夏の夜の月

外山夏月

むらかしは葉分にふくる影もをし外山の庵のみしか夜の月

風おろす峯もや秋にならの葉の外山しくるゝ夏の夜の月

海邊夏月

あま人のつけのをくしのさしもあへす浪にうかるゝ短夜の月

浦夏月

水の江の浦島か子か歸るさもあかす見るへき短夜のつき

住よし社にておなし心を

すゝしさを月に吹こせ住の江や西こそ秋の興津鹽風

沙月忘夏

夏の夜を影ふむみちに忘貝月のよせける住よしのはま

江夏月

白妙に更行かけや氷ゐしまゝのいり江の夏のよのつき

川夏月
龍田川秋のにしきをしら浪にかさねまほしき夏の夜の月
竹亭夏月
間にもる影かと見れは軒端より竹の葉うつせ夏の夜の月
竹の葉はさらに秋なる風の音に短夜つらき月の手枕
關夏月
夏の夜は袖とふ月もうたゝねにむすほゝるらしすまの關守
夏月涼
すきあへぬ雲間に涼しすむ月の光りをこほす夜半の村雨
更行は袖も秋なり夏の夜の月のかつらにあまるしらつゆ
照射
五月山ともしさしそへまつ鹿のよりこぬ程や長き夜のそら
瀧邊螢火
岩間よりみかき出すやとふ螢あまる光りに瀧のしらたま
瀧下螢
おとなしの瀧の岩なみとふ螢世は忍はれぬ思ひとそ見る
海邊見螢
まつらかた唐土ふねのつまこひにあまかけるたまのとふ螢哉
深夜螢
夕やみもやゝ更わたる川の瀬に照し捨てもゆくほたるかな
とふ螢光りやをしき月の色に山の端にほふ深き夜の空
行やらてやとる螢も影うすき岩かき水の深きよのあめ
雨中螢
とふ螢澤小田ひろみてらすなり山本めくる雨をよきゝて
叢螢
露霜の尾花かもとにくちにしや螢ともゆる草葉なるらん
水鷄
天の戸をたゝき捨つる水鷄かなはしめて夜半の明やすき比
小夜深くたゝくをきけは山水の月の水に水鷄なく聲
曉水鷄
つれなくも水鷄そたゝく山かけの松のとほそのあり明のそら
はるかにもたゝく水鷄よとふゆめの誰歸るさの戸ほそ成らん
夕顔露
花といへはあはれならすや露かゝる行てのこやの軒の夕顔
夕顔遶垣
たそかれの垣ねのこてふ打むれてやとるを見れは夕顔の花
林下蟬
雲かへる林のつゝき山かけのむら雨送るせみのこゑかな
杜蟬
秋やこし鳴音露けき蟬の羽のうす花染の衣手のもり
瀧邊蟬
蟬の聲秋ちかゝらし浮ひきて一葉色なる瀧の岩なみ

夕立早過

かた岡の杜の雫をしたふまに雲はをひえぬ夕立のそら

河邊夕立

ゆふ立のをちくる空やみなの川嶺より遠き水のみなかみ

蓮露

風吹は露のしら玉蓮葉にまろひあひてもそふ光りかな

池見蓮

時による池の蓮も時をしるやひろ葉にうつすむらさめのつゆ

泉

行となき岸さへ涼し山陰の岩のとたえのいさら井のみつ

名所氷室

世は夏にたえし嵐や松かさき氷室のうへに皆やとりけん

閨中扇

さよ更る扇の風にねやのうへの葉ひろかしはを思ひ社やれ

河邊納涼

あしそよく河風たちぬ夕すゝみ岸の柳もちりぬはかりに

月下納涼

かた敷の月の袂の朝しめりなこり涼しきしのゝめのそら

納涼

夏衣袂すゝしも虫の音もしのひ〳〵のよひのうたゝね

かへるさはさかなもとめて夕すゝみ浪にこゆるきの磯菜摘也

夏曙天

ふかみとり涼しくあけて春秋にあらそひぬへき夏の空かな

夏朝風

いつれとかけふのあやめのもすそさへ内外に薫るこすの朝風

何か秋をしのふのすたれ涼さはねての朝けの露のした風

夏夕野

茂き花かつ咲けらしかたうつら秋をもまたぬをのゝゆふ露

夏夜衣

やとし侘ぬうらはかとりの月影に衣手かろきみしか夜の夢

夏床莚

ひやゝかにかたしきかへて高瀬ぬるま程なきしのゝめの空

夏夢

むは玉の夢のなかにも別て猶わか身おとろく夏の夜の空

夏動物

はなちかふ夏野の牛もかたよるや水草清きもりのした道

夏祝

昔きく御代のためしに五月雨もとたえをおきてそゝく空哉

荒和祓

宮古人みそきすらしもから衣せみの羽川の風もすゝしき

貴賤夏祓

百敷の大宮人のみそき川あやしきしつも所せきまて

秋歌上

立秋

うつろはむ野にも山にもこもるらし今朝は空のみ秋の色かな

立秋風

こほれあへぬまた白露に天の原みとり涼しき秋のはつ風

おなしこゝろを

たち蹈し袖をわするなはる霞とほ里をのゝあきのはつ風

初秋の三日月を

此ゆふへ秋ともやとれ置しらぬ淺ちか露に三日月の影

風の音つゆのあはれもそれなから秋をまちとる三日月のかけ

永正十二年七月に

秋は來ぬ七十あまり三日月の心をきよくすます影哉

早秋

春の空わかれし鳥も山深みおもひ立らん秋のはつ風

ちりちらす秋は來にけり村雨の桐の葉わくる夕くれの宿

草も木も見えん氣色を桐の葉の心かろくもつくる秋哉

早秋風

あたし野やおけは亂るゝかるかやの露よりよわき秋の初風

待とるもきゝやる秋も住の江や風をたよりの岸の姫松

名所早秋

しるしなき杉の梢もたゝならぬ三輪のひはらの秋のはつ風

いつしかも衣手すゝし秋の風やまは青葉のゐなのさゝはら

山早秋

龍田ひめあらしもしらぬ秋の色や空にしめゆふ葛城の山

たつた川岸の柳の下葉より山もほのめく秋のはつ風

初瀬山老木のひはら時しあれは音もほのかに秋の初風

みむろ山したはふ葛はうちつけの恨な見えそみねの秋風

浦早秋

此ころの海士のもしほの夕煙秋になひく須磨の浦風

新秋朝風

いかならし龍田の秋も伊駒山そめぬ色ある今朝の嵐に

新秋露

行て見んかた野のをさゝかり人もまた袖ふれぬ秋の白露

初秋露

世にそむる天の羽衣秋來ぬと結ひしより今朝の白露

曉朝早涼

閨のうへは曉つゆの槇の葉にこたへて輕き秋の衣手

織女夕心

このゆふへかゝれとや思ふ棚機の手にも任せぬさゝかにの糸

七夕

忍ふなよ雲は秋かせ世に誰か思ひわたらぬ天の川ふね

七夕風

けふたにも心盡すな天の川雲のはたての秋のはつかせ
彦星の待よりふけて秋の風すゝしくはるゝ天の川波

七夕露

野へことの花になやとせ今朝ちるや七夕つめの袖のしら露

七夕別

はかなしや天の川原の鵲かしはぬる夜うらやむ衣々の空

七夕七首

時しもあれ風のけしきも露の色も涼しき比の星合の空
あまの川深き契りのいかて世に流れそめけり瀬々の埋木
夕月夜ひかりなそへそ七夕の忍ひ佗らむ雲のころも手
天の川けふの舟路や一とせを渡りしよりもはるか成らん
あけぬれは頼む夕の契さへくるしきものをほし合の空
なからへし玉の小琴の音にそなく七十迄をほし合の空
思はすよ今日の手向もしつかなる草の庵の露のことの葉

永正十二年かちの葉の歌

天の川世々につゝりし戀の淵しらすいかなる水の水上
星合のいもせよいかに天の下思はぬ人もなきちきり哉
天の川舟出しつゝも思ひやるいもか家路やはるけかるらん
あまの川心の渡すたなはしもあやふむかたにさそな苦しき
色なきもこゝろは見ゆや底清き水かけ草の露のとの葉
ひくほしの袖のわかれを思ふよりあらぬ草葉の今朝のしら露
七年の秋の守より七十やみとせのけふのたむけをそせし

荻風

ね覺ても侘まちわひぬくたかけの荻ふく風の長き夜の空
むすふいほのすゝ吹風に荻の聲きゝわくゝにかりすむこゝろ哉
村雨も花にそゝきてから衣すそのにかへる荻のうは風
荻原やかさしけんよの面影も月にあり明の秋風の聲

あかつきのをきの風

吹むすふ契やはなき鳥羽玉の夢てふ物ををきのうは風
折しもあれ曉つきの荻原や天の嵐のつゆのしらたま

夕荻

秋の風けしきはかりのゆふは山松よりふかき荻の聲かな
ゆふ風いたくなふきそうつらふす影はかき根も野への荻原

濱邊荻

荻に寒み秋のね覺の濱千鳥うちもまきれぬなきの音かな

幽栖荻風

荻の葉のとふ聲にゆふ暮の露のこたへもふかきやと哉

故郷荻風

消はまた古郷人の夢にたにうき身かへすな荻のうは風

月前荻

さよふかく見はてぬ夢の恨なも月にこたふる荻の上かせ

遠萩

萩原やゆふ日かくれの秋風に遠かた人はいつちすきけん

萩知秋

露の色風のけしきにさそはれて一本にほふ庭のむら萩

萩

ほのかにも結ひ初けり日くらしの聲を契りの萩の上の露

朝萩

をしましよ雨行そてに萩の露こほれてはまた秋のむら雨

野亭萩

月ならて誰なまつらん夕暮のなのゝかりほの萩のうへの露

古寺萩

里はあれぬ月は見ぬ夜の便りにも恨なかけそ萩の上の露

行路萩

秋の野に萩かるをのこいかならし折たにをしき花の上の露

萩帯露

こきまする花と露とに宿りかね野風いさよふ秋のはき原

萩露

枯そ行露のしら玉萩の上にゆつりかおきしいけの蓮を

霞つる袖かうへの朝つゆに又とかへてあきのはきはら

しら露の手枕なから亂るめりねての朝けの庭のむら萩

女郎花

風になひく花のすかたよ女郎花なにそは人の心つくしに

蘭

ほともなきまかきの中に咲花のあまりて匂ふ藤はかまかな

苅萱

あたし野や哀をみせてつよからぬ姿になひくかるかやのつゆ

薄

さひしさを催ほし草のはな薄夕もまたぬやとの秋かせ

月下薄

あやにくの影はとまらぬ夕月夜入のゝ薄おもるしらつゆ

原薄

染いたすはつ花すゝきむらさきのゆかりも秋や武藏野の原

行路薄

から衣ゆくてにもなし花すゝきかりのなみたのむすふしら露

薄[illegible]垣

花すゝき吹むすふ風のかこひにも玉ゆらかゝる露のかり庵

夕虫

秋の日は夕かけ草の程もなく露にしをるゝまつむしの聲

促織を

鳴虫のふるき庵におるはたの誰爲となき音のくるしさ

虫聲亂（井イ）

草の戸もさせてふ聲にこぬ人を猶まつ虫の恨みわふらむ

それとなく物そかなしき虫の音の打亂れたるあけ方の空

霜草虫吟

小さゝ原霜の下葉のきり／＼す絕々そよく聲かとそきく

曉鹿

とたえつる木葉しくれも棹鹿の聲を待てやね覺とふらん

夕鹿

吉野山すゝ吹みたる夕あらし時雨もゆくか小男しかの聲

月前聞鹿

秋の野にねたるこ萩も有明の月見よとてや棹しかの聲

山鹿

遠妻に通ふやいつく龍田山ひとり越行さをしかのこゑ

田家鹿

里遠みいな葉にましりたつ鹿の聲吹まかふ小田の秋風

小山田のかり穗の煙妻こひの思ひにたてゝしかそ鳴なる

鴈初來

來る鴈の聲を末野の初しほに折しもあれや秋のむら雨

秋の鴈聲も今宵の新まくらふし見の里の契りにそきく

初鴈

花にさへ別れし鴈の草も木も色こき時といかて來ぬらむ

恨みすやまたてうつりし秋萩のあたの大野の初鴈の聲

から衣秋風寒み今朝みれは淺茅いろつき鴈なきわたる

夕初鴈

旅にして秋の夕もまきるやと思ひや立し初かりの聲

旅鴈連雲

啼鴈も月を心のゆふやみに聲打かはすむらくものそら

霧中初鴈

朝霧にぬれてや越しかた岡の早田もる庵の衣かりかね

月前聞鴈

玉の聲月につらねて伊勢の海や淸き渚に鴈渡るなり

左右聞鴈

秋のかり駒うち行は一つれのとひ別れぬる布留の中道

秋歌下

夕月

しの薄つれなく見えし夕かな月もほのめくあたし野の原（路イ）

上弦月

宵の間の光りそよわきひく人もあらましかはのゆみはりの月

晴天待月

ふかみとり雲なき空に待れてもあひに逢ぬる秋の夜の月

晴夜月

月は猶曉かけてすみの江やはるかにてらす興つしら浪

不知夜月
いとはしよ山のはるかに月はまたいさよひの間の秋のむら雨
十五夜月
秋の空月は今宵とまつしまやさそな松浦の興つ舟人
八月十五夜
老はてし身にこそあらねことし又半にかへる秋の夜の月
およはし（なイ）よいつれの道の高き名も月の今夜の大和もろこし
閏月十五夜に住吉社にして
いつか見ん興津しら浪高き名をふたゝひ照す住の江の月
駒迎
相坂や關路すき行山風にいはふもしるきもちつきのこま
飛鳥井二樂院にての會に在明月
秋の月あはちの島にかゝるまて袖にしきつの有明の空
月前風
あかす猶はらへはまさる光り哉雲なき月にさ夜の秋かせ
秋ふけぬ木葉の時雨吹あらし夜渡る空も淸きつきかな
月前雲
すむ月にいくたひかみし天の原消てうかへるよはのしら雲
秋の月淸見の波にうらかせもさそな心を興津しら雲
山月
はるかにも更のほる月を山のはに恨もとめぬ松風の聲
よしや又宮古の夢もさら科やおは捨山の月のかりふし
秋ふかき峯こす月の光りをや雲もかさしのかつらきの山
深山月
限りある光りと見しを明方の深山おろしの秋の夜の月
ま柴たく軒はも見えすみ山木の煙にうすき有明のつき
深山曉月
さひしさは深山かくれにもり來ても明方しるきつきの色かな
嶺上月
たえ〳〵に嶺の下露かくろへて峯たちのほるいさよひの月
野月
旅ねするいつくにか見ん宮木野や宿りは花に秋のよのつき
關月
ふけぬらし山風なから白妙の衣のせきのあきの夜のつき
かへるともよるともわかす月淸き須磨の關戸の秋のうら波
海邊待月
をふの海ちさとの波にいさよふや秋つしま根のよその月影
海邊月
濱ひさし久しく住や神代より大和しま根の秋の夜の月
まちとるや田子のうら波ふしの根の雪より出る秋の夜の月
難波かた月影したふ鐘の音も及はぬ波に有明のそら
海邊秋月

紀の海やいているかたもはるかなる月に雲なき浪のうへかな

浦月

昔思ふ心も秋もあかしかたはてなき浪にわたるつきかけ

浦人のこゝろを見るや明石潟すめるか上のつきのあき風

濱邊月

松よりも月に濱風さひしさは海士の苫やのいさゝむらたけ

湖上月

さゝ波やひらの山風ふかき夜の志賀の大わた月渡る見ゆ

江上月

住の江や神のいかきの灯もはるかにふけぬ浪のうへのつき

秋ふかき入江のまこも霜なから光りみたるゝ月のさよ風

河月

それとなき遠方人もしろ妙の袖のかはらにいつる月影

すむ月の川風ふけておのつから音せぬ里をすくる舟ひと

浪上月

思ふにそ程遠からぬ山のはは千さとのなみの月のゆく末

船中月

松浦ふねまち出る影やさよ深くみやこにをしき山のはの月

橋上月

旅ころも鹽かせさむし白妙の濱名のはしに月やふけぬる

廣澤池眺望

日の本やいつくならひの岡こえて月まち出るひろさはのいけ

名所月

草も木もぬれて夜深し月の中の水わけ山の秋のしら露

古寺月

見れは世のこゝろ〳〵や靜なる月はたかつの秋のうらなみ

山家見月

そことなき秋の山寺霧の中に月のかけたる前のいた橋

山家月

さらぬたに秋はいねかての松の戸に夜深く出るみねの月影

月下閑居

宇治山やいにしへよりの里の名に打まきれぬる月のころ哉

秋の月うき世に染ぬ心をや我にうつして友と見るらん

市間月

獨すむ市のかりやの月かけに世渡るひとのあはれをそしる

苔徑月

ふけにけり山路のこけの白露に宿るもすめる秋の夜の月

苑秋月

すゝしくもそゝく園生の花の上に月影やとす秋のむら雨

淺茅月

淺茅生のやとりあらすな山ふかみ月に過こし秋の木からし

月契多穐

いつとしも思ひわかねと獨見る老の行への秋の夜の月

月似古

天つ空面かはりせぬ秋の月老のねさめを哀とやみむ

閑見月

更ぬらしくもりみはれみ昔思ふ詠せしまの夜半の月影

明月如晝

何れかも夜ともわかん時しもあれ戸さしせぬ世の四方の月影

毎夜月明

萩の露荻のうは風いねかてにいく夜になりぬすめる月影

終夜見月

月清み夜や明ぬらん槇の戸もさゝて三嶋のしきの羽かき

停午月

出つるも行へも山もはるかにて月もこゝろも今そたゝしき

曉見月

深き夜のね覺さひしき鐘の音も絕ての後の山の端の月

月前聞鐘

かねの聲さそひし夢の手枕に月の恨みやふかき夜の空

惜月

松浦かたはるかになりぬ渚うつ浪に光りはのこる夜の月

月忘憂

何ならぬ秋のおもひよ心もて月のみこやにすめはすむ世を

九月十三夜月

まちみつる月の契りよ十日あまり秋の今宵のみつの濱松

十三夜月くもりたりし秋

高きなよさやけきよりも秋の月くもるを今宵世に思ふらし

詠月

久かたの月よみをとこいかなれや見ぬを思はぬ人のなき哉

秋夕

花の色露のあはれの夫よりも秋はゆふへのふかくさの里

江邊秋夕

すみの江や夕は秋の浦風にまつも心をくたくころかな

田家秋風

吹みたる稲葉の風に山かつの行手のそても秋のしらつゆ

よしや又庵もる袖に鳴のたついなはの風にかゝる白露

田家秋興

さそへ猶むろのはやわせ打はへしつなてに宿る秋の色鳥

吹みたる稲葉の露に秋風もぬれてや宿る遠方の松

露

あさな／＼花なき野への草葉にも情おきける秋のしら露

山里の雨のなこりの朝日影露にこほるゝ槇のむら立

曉露

山深み木の葉のつゆもすむ月に心亂さぬあかつきのそら

月露

みたるなよ風さへたえて苅萱の月の下葉にかゝる朝つゆ

古郷露

露深みふりにし里は古の秋のみかへるくすのうらかせ

淺茅露

思ひにし秋の草木の露もあれと移ひ初るをのゝ淺茅生

野草花

からにしき秋の心を朝露の花におり出す宮木野のはら

夕月夜やとるともなき秋の野に光りを結ふ花の上の露

閑庭草花

うつしうふる宿やさひしき秋の野は人もすさめん花の色〳〵

草花露

秋の菊心ふかしやいろ草のはなはひもとくしのゝめの露

あきの風思ふやいつれ朝露の花にあらそふ宮城野の原

秋花

しのゝめの露の匂ひよ秋萩のぬる夜いさめし槿のはな

槿

つらくとも見えはうしとや花に露心くらへの庭のあさ顔（つれなくイ）

朝野分

吹しをる夜のまの野分花の上に露をやすむる朝霧の空

きり〳〵す

きり〳〵す聲うらむなりしけかりし夕かけ草の露の行へに

稲妻

消かへる草葉のうへや稲妻の光りに結ふ野へのしらつゆ

花すゝき誰手枕にかよふらん月はいる野のいなつまの影

霧

山かけや猶そ夜深きとふ鳥の羽風きこゆる朝きりのそら

秋ふかきあしやの里の夕霧に音するものは異しら浪

鶉

かた岡の秋の野風のさむけきにうつら鳴なり柴のした草

澤鴫

うかれけん月のいつくにさよ更て歸る澤邊のしきの羽かき

秋衣

朝露もほのかに殘す月草のはなすりころも影やわかれむ

擣衣

さやかなる氷の色や霜しける月を衣にうちいたすらむ

なれ〳〵し花すり衣秋の野の忘れかたみの霜にうつ聲

海のほとりに衣をうつ

沖に出しいさりの影を便りとや海士のかりほに衣打らむ

月下擣衣

から衣あたりまて照る紅を月にうつしのにほふ聲かな

擣衣幽

里遠み月の行へになく鴈のこゑもそれかとうつ衣かな

南北擣衣

都にもやゝ打そへてからころも鳥羽田の里に聲そこたふる

老後に九月九日

秋をへて猶そあはれむけふとの老の末葉の秋のしら露

けふまてもわたかつけゝる白菊を頭のゆきの友と見るかな

朝菊

世に匂ふ花ともしるし朝霧のまかきにあまる秋のしらきく

水邊菊

心ありて霜もおかなん大澤やふりにし跡にたてるしら菊

黄葉

かつらきやしくれ〳〵し梢のは井の陰もふかめぬ秋のいろ哉

紅葉（京極黄門山庄の事を思ひて）

小倉山そめし心の秋の色や世々のしくれもしたひ來ぬらん

おなし題にて

龍田姫そめ殘す山のうすもみちくれ行秋のそらたのめなる

山中紅葉

水清み底の秋さへ影深きいはかきもみちひと枝もおし

岡紅葉

夕あらしなきさの岡のもみち葉を又ふきわたす天のかは橋

瀧紅葉

山姫のあきのくれなゐ染わたせ瀧のしら糸波のしら玉

播磨に下りし時しかまにて秋の暮に

しかま川かは風いたみ浦浪にちしほなからの浮ふもみち葉

大覺寺にて池上紅葉

大澤やふるき跡もる水鳥のうは毛も色にそむるもみち葉

攝州久安寺に入て紅葉を

もみち葉のにしきおりはへ龍田河流れ來にける山の陰哉

暮秋興

花すゝき結ぶともなき手枕を夢の形見にくるゝ秋かな

閑居暮秋

苔のうへに散しく庭の薄もみち名殘り多くも暮るゝ秋哉

海邊暮秋

あしやかた今はの秋もまてしはし音すむ浪の有明の空

浦暮秋

行秋を引もとゝめぬからことのしらへかひなき浦浪のこゑ

暮秋月

ゆく秋も今はの月の有明に關もりわふるすまの浦浪

九月盡空

秋にけふいつれの雲か契り來て歸るを送る夕くれの空

九月盡

霜さよふ神のいかきにはふ葛の下葉もしるく歸る秋かな

この比は涙もつきぬ恨むなよ聞こし秋のけふの別れに

冬歌

初冬

神無月けふの時雨の一しほを秋も染のこす四方のもみち葉

みやこ人かふる衣に今朝そおもふ四方の山邊の嶺の木枯

三室山しめしやとりを夕風の四方にしくるゝ神無月哉

十月三日月を

よひ〳〵の秋もみさりきはつしくれ曇りもあへぬ三日月の影

おなし比の三日月を

心をも盡してや見ん初時雨木の葉もまかふ比の三日月

時雨

浪のうへに曇りもはてす夕月夜しくれにまかふ淡路島山

時雨過

定めなき名にこそ立れ夕時雨契りし宿も有て過らむ

朝時雨

かさしをるはつ瀨をと女の朝ね髪袖もしくれのしのゝめの空

初時雨行めくりこん夕をや松のとほその明ほのゝそら

夕時雨

程そなきね覺の空の初しくれ木の葉をそむる夕暮の山

夜時雨

はつ瀨川月ともわかす村時雨杉の木末にいさよひのそら

更るまて月すむ空の俄にもしくれて渡る槇の葉かしは

外山時雨

しからきや外山の里の夕つくひ半しくれの峯のしひ柴

杜しくれ

布引の瀧のひゝきとおもひしを生田の杜に時雨來にけり

かけは猶しのたの杜の夕しくれさそひすてゝも行嵐かな

和泉堺にて宗訊すゝめし一續に瀧邊時雨

山姫のたきの白きぬ染かねて今朝初時雨さそひ來ぬらし

海邊時雨

ね覺てのあしやの里の初時雨心あるへきみやこなりとも

まつ島や千島をめくる村雲のひまもしくるゝ浪の音哉

松風もことゝひ捨つ初時雨をしまのとまや夜は深くして

川時雨

村しくれ猶過やらて河淀のゆふ日のうへにふるの神杉

名所時雨

契ありし袖やしくれんめくり來て雲も旅なるさよの中山

山家時雨

峯深みいり日なからの槇の葉にまなく時雨のふゆの山里

古郷時雨

槇の葉の名におふ宮の世々の夢ぬる夜もあたにとふ時雨かな

ね覺時雨

れぬるまはとたえをおきて玉くしけ明かたき夜をとふ時雨哉
跡もなき思ひを何のね覺そと知せ顏なるはつしくれかな
羇中時雨
色かへぬ黑髮やまの明やらて旅ねうれふるさ夜のしくれに
曉落葉
なれ〱し宿とや影も守山の木の葉たつぬるあり明のつき
夕落葉
神無月しくれこきませ亂るめり日も夕くれの四方のもみち葉
夜落葉
嶺の家の木の葉時雨の夢うつゝ思ひ亂るゝさ夜の手枕
山落葉
木からしに峯のもみち葉吹ませて雲の千入のかつらきの山
吹のほる川風いたみはつ瀨山紅葉にうとき末のさと人
瀧紅葉
あらし吹たきの水上白妙の老のかさしをちるもみちかな
川上落葉
三室山嵐にうかふもみち葉の紅したふたにのいはなみ
海邊落葉
まよひ來し情ゆかしき紅葉はを荒磯かけてくたく浪かな
橋紅葉
山風もこゝろあはせて誰爲ともみちを渡す宇治のはし守
心あれやふりしく木葉霜なからかきも拂はぬ宇治橋守
閑居落葉
思ひやれ木のはの下の草の庵に時雨するよのかたしきの袖
松の戸の山井の淸水木葉ふり影みし人をいかに忍ふや
落葉窓深
松の風老のねさめの窓のまへにたゝ時のまの木葉をそしく
落葉嵐
山めくるあらしの末や盡としも果らぬ里の庭のもみち葉
山里の木葉ふきつくす夕暮や嵐も峯に獨りさひしき
もみち葉や雨とふるらん生駒山雲もかゝさぬ峯のあらしに
落葉風
すまの浦やまなくもさそふ山風を關もる浪のよするもみち葉
山風は吹よわり行かひもなしさそはれ立し木々のもみち葉
殘菊
枯やらてたてるもしるし暮し秋を忍ふの軒に庭のしら菊
野寒草
霜かれにむすほゝるゝや秋風も淺はの野らの下荻のこゑ
花ならぬ枯葉の霜の行へまて誰かはうとき宮城野の原
朝霜をへたつるをのゝさゝくまに猶冬枯の花やかくれし
原寒草
霜枯の朝のはらのむら薄むすほゝれけり秋やこふらむ

夜の霜おきまさるらし風の音のむすほゝれ行小野の篠原
白妙のしものたてぬき曖機に今朝おりかくる野へのかるかや

霜草

やとりこし嵐も霜も結のこる下葉はかりの野へのかやはら

枯野朝風

淺茅生ヶ木からし立ぬ朝な／＼花にかすめる野へと見しまに

和泉國金光寺覺阿所にての廿首に枯野風

聲をしるなならすやは下荻にたらの枯葉の野への朝風

おなし心を

むら薄霜夜のしきのいほりとやかれ生の野風吹結ふらん

朝霜

敷妙の手枕さえし冬の夜の霜にいさとき朝からすかな

橋上霜　住吉社にて

松陰のふる江の橋は袖かけてしをれもゆかんまよふ朝霜

山家霜

山深みもらぬ朝日やたけぬらん檐の板屋の霜のむら消

庭霜

庭に見よ布留野の小篠春日のやおとろの霜も迷ふ明仄

柴霜

名もしらぬ山のあさ鳥霜氷る楢柴しのき靡むせふなり

寒松風

樵の葉のさわく嵐を峰の松心も見えてすめる聲かな

冬月

天の原雲井みとりの下葉に霜ゝ拂ふ冬の夜のつき
霜の上の光りをそへて天つ風月に落たる野ちの笹はら
おのつから川音すみて千鳥鳴いたつらに寒き冬の夜の月

山寒月

谷深み音せぬ水は久かたの月にこたへて氷る夜半哉

江冬月

濱鳥かたてし跡のおもかけも今は跡なき氷の江のつき

河上冬月

更にけん光りさへいとゝ眞菅生ふるそかの河原の霜の上の月
冬河や宿れる月も亂れ芦の霜の枯葉にもろき影哉

兵庫に居し時名所冬月

濱のうへに冴のほるかな冬車の和田の御崎の冬の夜の月

冬曉月

天の原雲ふきつくす明かたの嵐にかゝる冬の夜の月
冬の夜の月はあかつき雲もなく拂ふあらしの音ものこらす
霜とのみ松をはらふか興津風吹上の月のあけ方の空
更わたる霜も氷もまちけらし若色そふるあり明のつき
かた敷の袖こそあらめ明方の草葉くるしき霜のうへの月

曉寒月

さえわたるおのか光りを天つ空氷にやとるあり明のつき
はつ瀬山心くらへの鐘の聲月の光りにさゆるそらかな

氷初結

山川や一葉のちりも落あへぬあらしに清き朝こほりかな

芦間氷

冬川や朝こほりせり立鷺の芦間の宿もよそに見るらん

池水半氷

さえ〳〵てみてる氷をあすや見んさ夜も半のしるき池水

川上氷

うつりこし花ももみちも泊瀬川とめぬ氷に浮ふ面かけ
橋姫の袖の氷もふきむすふよな〳〵いかに宇治の川風

瀧氷

氷りてそ吹もしらるゝ瀧の上のあらしにさわく嶺のさゝ原

冬田氷

ひつちおふる冬田の原の石たゝきふむ跡もろき薄氷かな

寒芦

夕月夜それとも見えす冬枯の芦の末葉にそよくはま風

江寒芦

打はらふ鴎のつはさもしをれ芦の古江に寒き雪の音哉

曉千鳥

鳴とめぬ江しまの千鳥恨むなり西になり行浪の上の月

濱千鳥

浦風や光りをそへし濱千鳥つはさの浪にあり明のつき
濱千とりくるゝ汐干のかた糸を引すてゝ行ひとつらの聲

湊千鳥

別れてもおもふ契りやさよ千鳥かけの湊のあかつきの聲

磯千鳥

風はやみあら磯岩に後れゐる友もさそはて行千とりかな
さよ千鳥あられ横きる松風に行ては歸るあらいそのこえ

川千鳥

別れ行妻やこひしきさ夜千鳥あふくま川の明かたの聲

野島井黄門亭俊卿旅宿にての當座にれ鵆の千鳥

かるもふく猪屋の崩れ玉ゆらの夢をとたえに鳴千鳥哉

水鳥

水の面にましるむられも見れは久同し毛色の鳥そかたらふ

浦水鳥

朝日さす浪に一むらあしかものうち出の濱をすくるたひ人

残雁

さそはれん春の霞を松浦かた寒き渚にあさるかりかね

雪中残雁

あはれなり伊勢のはま荻下折も雪に埋れのかりの一こゑ

鷹狩

山鳥の尾上引こすはし鷹のこすゝかすかに松風そ吹く
はし鷹をすゑ出す朝け夕暮の野邊のかへるさいつれ増れる

夕鷹狩

狩くらし立や歸らん折かさす雪を鳥柴のしるしはかりに
はかなしや暮ぬと歸る御狩野に鷹くとりのおのれ立群

霰

音うつむ草の庵のとたえより霰しのきを尋ねられかな

寒霰

たきゝこる賤か袂もしほるまてあられにふゝく嵐の常磐木
降りやた野の眞葉衣下くゝれぬにかりにうつあられかな

霙

さえけらし山の下柴ぬれもあへす霙色そふ峰の常磐木
打なひき夕日かくれに成にけりみそれやおもる山のした柴

晴天雪

をと女子もおき出て見よ天の原晴し四方のよものしら雪

夕雪

夕ゐるもやとりかねてや葛城の雪の高根をよそのしら雲
ゆふくれは杉村しのきふる雪を柴の垣根に猶かも見ん

夕深雪

殘りつる雪の光りも埋れて夕暮ふかし木々のしたをれ

山家雪

跡となく松のとほその庭に雪のかけなるも見えす十歳まて
忘れしの人の心の限りをも太山のさとのけさのしら雪
おきゐつゝ窓にともし火の戸を押明ふたの朝のしら雪

野外雪

朽やらぬ一むらかしは白妙にふるからをのゝけさのはつ雪
冬枯のすそのゝ尾花すゑこえて霧の上葉にまよふ淡雪

羇路雪

旅人の袖もひまなし相坂や杉の葉おもるゆきのしたみち
さらてたにやすらひ行を[illegible]山降まかへたる雪のした道

遠樹雪

雪はらふ野中の杉の一むらや嵐にやとるゆふくれのいろ

湖雪

すかむしろ雲かと見とか白妙の雪を吹まく千さのうら風

曙雪

送りこしいふきおろしや弱りけん今朝薄雪のしかの濱松

川邊雪

明ほのや山かさなれる川上の雪より出る宇治のしは船

禁庭雪

花さくら袖のしら菊うつり來て九重の今朝の初雪

閑中雪

玉すたれ風もうこかてふる雪のかゝるも氷る宿の寒けき

軒端よりあまりて落る雪の音に夕暮深くなれる宿かな

閑居雪

吉野山おもひ入てもとはかりに雪はふりしくやとのゆふくれ

踈屋雪

松の葉に待こしよりも頃ほなる小柴にかゝるけさのうすゆき

籬外雪

しつかなる音は見るにもまさりけりいよすにかゝる雪の夕風

竹雪

みつわくむ姿とそなる雪の内に年もやつもる園のくれ竹

天台座主梶井宮より給ひし五首中残雪

足引の山路の小篠岩小菅またあわゆきの下みたれつゝ

積雪

ふりにける萱か軒端は里わかぬ雪も重けに見ゆる哀れさ

行路雪

朝ほらけ野へをおしなみ行駒も尾花あし毛にかゝる薄雪

行路雪深

ゆく儘に笠のみ重しくつはたゝかくはしからぬ花にうもれて

十二月三日月を

初春のかけを昨日とおもふまに今年もくれぬ三日月の空

冬夕

四方の空暮やすき比の冬の日もゆらの御崎の花の白波

冬夜

星清き峯の霜夜やすむ月の空にまさきのかつらきの山

峯椎柴

やとりかねもるかとそ見る椎柴にさやく霜夜の峯の月影

木からしもしつまりくれてかし鳥の羽風木ふかき峯の椎柴

月前網代

更るまて氷魚まちわふる岩波に月のみ夜のせゝの網代木

神楽

榊葉の霜すみのほる聲は今も神代をふるのかみ杉

炭かま

なほからぬくぬ木白かし炭かまにこるとも見えすたてる山賤

爐火

名残なきあさ木の炭を埋火のね覚をいそく閨そ夜深き

閨爐火

埋火をたよりとすきゝ寝たきも下まつ閨と見えぬへきかな

契あれや知らぬみ山のふしくぬ木灰となりぬる閨のうつみ火

雪中早梅

雪の中に待見しよりそ梅の花さかぬ垣根も過かてにする

ゆき深き四方の草木の心をや春に咲出るやとのうめか枝

都歳暮

九重の春の衣の花さくらいちめもかさすとしの暮かな

惜歳暮
せきとめぬ花は昨日の吉野川あはれ早くも年のくれぬる

戀歌上

初戀
ほの見しにその事となく詠わひぬ共をや戀の春の夕くれ

忍戀
ならはすよ忍ふの山路いかにとも心置夜の誰にとはまし
いかにせん更行まゝに月影のぬれて色そふ片敷のそて
いかにせむよひ〳〵ことに忍ひこし月の袂もあり明のそら
折しもあれ秋の風さへ身にそしむ忍ひかねぬとよしや見ゆ共
何となく思ひわひての手すさひも心の末の山ふきのはな

依忍増戀
しのふ草露のあはれもかけわふる人と見るにも猶そ亂るゝ

寄書忍戀
よそめうき玉章をたに返すなよ思ひおもはすとなしにして

忍涙戀
から衣いつれの野への花染に下のおもひのいろをまかへん
忍ひわひ哀をかけよ涙にもたか名はたゝしそてのしからみ

忍難逢戀
いかにせん下のみたれをしのすゝきかたよる（なたかたイ）糸の小野の秋風

忍久戀
春の風あきの白露いくかへりしたの思ひの色をそふらむ

不逢戀
とえぬまの心つくしよ花にたにかゝりしものかみよし野の山
なからへてひろふよもかたかわく間も袖は渚によするしら玉
さむしろやいく夜になりぬ獨ねのあらましとも有明のそら

聞不逢戀
うらみしよ世には櫻のかけをさへよそにぬる夜の鶯のこゑ

聞戀
さしむかふ中にもえやは忍ふしをこまかに聞ておもふ面かけ

見増戀
くたけてもかゝる袖かは昨日まてみぬめの浦の秋のゆふ波
風をいたみ猶やくたけんほのかにも御裳濯河のせゝの岩波
袖もかくしくるへしやは夕月夜ほのかなりつる雲の名こりに

久新戀
思ひつゝ頼みこしよはみつかきのしるしあらはせ住よしの松

卜戀
むかはしよしらぬ心の行末をうらての山のみねの秋かせ

借人名戀
はかなくも頼みし名のみ櫻あさのはては露けきをふの下草

數無名戀
花のうへにかけても見えし立し名は仇の大野のつゆの衣手

被返書戀

あやなしや結ひそへつる花にのみ心をとめてかへす玉つさ

待戀

あはれをや今心みんほのかにもいひしなからのあきの夕くれ

忘れしのよひの恨みもむなしきは里を分てや月もすみけん

待とせし心やよわるさむしろによひのまふけてやとる面影

夕待戀

契りしはいさしら玉の數々にのきのしのふをなかめくらしつ

月にさへ物はおもはし夕暮を限りとたのむならひともかな

毎夕待戀

ことかへて心つからの思ひかなくものふるまひ日くらしの聲

契待戀

忘れしの空に待出てふけゆかん行へもしらぬ夜半の月哉

けしきたに露も見えしとすか莚七ふのこさぬよひのうたゝね

待夜深戀

さそひ來る月に幾度更ぬらん面影はらふ荻のうは風

ひとりのみおもひ亂れ菲斧の柄も朽ぬるはかり更し夜は哉

猶くるし待よ今はの鐘の音を心あさしとのこす月かけ

戀隣女

起ふしにおもふをその歲おと物うたかひにつれなかるらむ

臨時變戀

しをるへき花のうへをはいかにとか胸引かへすあふさかの關

年臥無實戀

から衣しをれあかしつ花のかけさてもつれなき袖の下ひも

初逢戀

なくさめしあらましとの面影はあらぬ匂ひにやとるさむしろ

ひとり寐の袖よりくるしなれしらぬ心の花の露の初そめ

八幡山勝詣法師坊にてまれ人の童なとありし續歌に

ならはすよ初花そめのから衣いかにねしよの手入なるらん

こよひたに思ひも入れし櫻色の衣手かれん行末のそら

さよ衣世々のかたみに忍へとやはかなく匂ふはつさくらはな

とけぬとて行へもかけし花櫻心ともなきつゆのしたひも

とまり船心を與津しほあひのよるへはかなき浦のはつしま

忍逢戀

おくふかく引かくしてもおくり來し月やはしらぬさよの小車

ひとりねのやとのならひをよそにふけ逢夜しるとも松風の聲

逢戀

よひ〳〵にいらて明つるねやの中は我も君はぬ夢の手まくら

我袖に宿るもくるしさよ衣にほひにあまるねやの月かけ

忘るなよ今夜かけをくさゝれ石の岩ほとならんよゝのとの葉

互契逢戀

年月をおなし心に深めすはあふくま川や瀨々のしらなみ

隔川戀

年をへて相染川の一世にも身の浮なみは猶くたけつゝ

夢中逢戀

思はしよ花に小蝶のもゝとせも逢見んほとは轉寐の夢

さやかなる光りもつらし見し人を夢と知するあり明の月

忘れはてゝぬるよはもかな思ひねにあらぬ契も夢に見ゆやと

歎別戀

恨みすや出かてにする槙の戸を催しかほの月のむら雲

いつかはと此浦の波にともつなをとくも苦しき渡つ舟人

急別戀

聞あえぬ鳥のはつねを又も来ん一よになして別れすもかな

惜別戀

ふけ嵐ゆくての櫻散と見てむすほゝれなはきぬ〲の空

別うき人に恨みをふかめしてゆふつけ鳥や辛しきるらん

さしのほる空にもまかへ別うき枕のにしの山の端の月

深更歸戀

かひそなき心の關の戸さしをも鳥のそらねにきぬ〲の空

深夜別戀

思ふには千歳もあかしきぬ〲をよしや夜深き有明のそら

今こんも遠き夕へよわかれてのよこ雲をさへまちそわひつる

曉別戀

かゝらめやをゝしの嶺まよふとも鳴つゝゆめきぬ〲の道

別戀

身にそしむもよほしかほの深き夜に木葉の音もきぬ〲の空

ことに出て心よわきを見えつるやうら山吹のきぬ〲のそら

心ありて門を目かけよかけ捨し袖の形見の惜かほの花（雪イ）

さよ深く出しは夢の道芝に露見えそむるしのゝめのそら

出てこし宿の跡めはいかにとも誰に問ましみねの横雲

今そなく夜ふかかりつる別ともさやは歸る鳥のはつこゑ

獨寐に馴来し月やふかき夜を人にとわるきぬ〲の空

寄潟別戀

名殘うき有明の月は清見かた浪の關もる別路もなし

後朝戀

分るとも人やおもひし明ほのゝ花にむかふもおも影のそら

逢見しになさしとすれは鐘の聲猶わかれちの明ほのゝ空

忘れしのとの葉のみや今朝よりは戀の山路のしをりともせん

後朝切戀

いへはえに人もおもひし面影の花にこほるゝしのゝめの露

白露の世はあやにくにおき別うき身を殘す朝顔の花

逢後増戀

浪よするあら磯岩ほ越て猶くたけよとてや强面かるらん

渡りての思ひの末はあふくまや行方もなき瀬々の川きり

から衣誰かは染しはつかにもあゐより出る色の千しほを
白露のしけき戀草わくらはに袖かけし人やつみはやしけん
見すもあらぬ夢の名殘を止めけん夕の雲に明ほのゝそら

逢不逢戀

思ひ川しはし心の行水をなにかふかめてせき返すらん
すか莚心とゝめぬよひ〳〵に面影をさへ玉の緒にして
秋風の空もうらめしをと女子か行逢のわせをかりの契りに

稀門戀

たとるまてうつる月日を人もしれ結ひもおかぬ宿の道芝

稀逢戀

枕ゆふ夜半も露けし茂山を分こし末のはなの下ふし
匂ひをも夢の枕にうつし侘ぬ年に稀なる花のころも手
今宵まてつゝみし袖の移りかに衣手かれし程な忘れそ
人も見よたゆむ心の淺川中々こよひ關おとしつる
打わひて身はならはしのよひ〳〵をとにも出し又やとたえて

稀戀

そむけつる影も忘れてよな〳〵のとたえ語らふねやの燈火
むねに立富士の煙よ天人の契はかりにおもひけてとや
忘れ貝ひらふ渚とみしほとに袖打ぬらしよするなみかな
いみかねて忘形見の月やみん重きか山のありあけの空

稀戀といふ事を源氏物語の詞にて讀へきよし侍しに

おもはしよ七夕はかり待えても浮身にあまる夜半の名殘を

邂逅逢戀

泪川千とせ待えてすむ水にしつ心なくやとるつきかけ

被厭戀

あはれなと山槇戸のゆふ嵐浮き身の露に心みすらむ

別戀

くるしきはよわる嵐にならし柴やをらぬ袂の袖したふらし（露のしたふしイ）

切戀

いかにせん心もとなき手枕にしきとめらるゝきぬ〳〵のそて

難忘戀

あちきなし夢となしてよ秋の雨に桐の葉落る宿の夕暮

顯戀

相見しは我さえたとるむは玉の夢をさたかに誰もらしけん

憎戀

ひとへにはかけしや心花さくらをらはこほれんつゆの明ほの

夕戀

いそきてもかひなき空を花にさへ心見えつるはるの夕くれ
せめくるは浮身の何といたつらに心合するあきの夕暮

夜戀

たのめたゝうき戀路にも泊瀬山名たかき鐘の曉のこゑ

月夜戀

さそふなよ思ひいれしの我心見ゆらんものをよな〳〵の月
それと見は打もむかはしよはの月通ふ心を人にしらすな

月前戀情

詠るも何そは露の萩の上にやとる契りをよその月かけ
いまさらに影もうらみし槇の戸にさそひこし夜の有あけの月

海邊戀

別路を忍ふの浦の浪まくらおもひ捨てもあまのたくなは

深山秋戀

ありてうきみ山に生ふる菅の根の秋の幾夜を獨寐の空

山家戀

見し人も外山の里はおのつからたえぬ便りにわすれわひぬる

山家夕戀

あちきなく詠めてけりな夕時雨思ふかたにや杉のしたいほ

故郷戀

かたしきの袖の裏もおもふらん露にすみこし故さとのつき

關路戀

逢見ての後の思ひの行へなき戀路にするよしらかはのせき

隔遠路戀

里遠しおほつかなしや小車をあしとき駒にうつりゆくとも

羇中戀

おもかけは都なからのよこ雲にあらぬおもひのさやの中山
いかに見ん心の色そつくはねの雲吹風はたより有とも
忘れすはいかほの沼のいかにねて思ひ（はるイ）都の夢のかよひ路
うつろひし心のはなの面かけに秋風はけしみやき野の原
明かたのかひの白根もかなしきは夢にわかれしさやの中山

旅宿逢戀

よな〳〵のしをれし袖にかけきやは花の紐とく宮城野の露

旅戀

故里に傳へてしかな草まくらしらぬ山路もゆめはとひきと
清見かた眞かくとや面影を關もる峯もおくるたみかな

旅泊戀

おもかけも今宵はやとれ渡つ海のかさしの波をかたしき（袖イ）の床
月影もぬれてそ宿る手枕のかとりの浦のしのゝめの空
夢路やはひたすら絶ん浪まくら龍の都に人をこふ共

戀歌下

寄月戀

よもすから思ひの空をすむ月の拂へはかてに浮ふ面影
賴むよの露もあらしもふけはてぬ心も見えし淺茅生の月
わりなしや人に戀路のしるへして果は恨みをおくる月哉

寄月逢戀

今宵はと空にとわれいねかてに詠し月をおもはさらめや

寄月稀戀

やすらふもとわりあれやわくらはの涙のひまのさむしろの月

寄月遠戀

行へなき夜半の詠や松浦潟ひれふる山のあり明のそら

寄月恨戀

つれなさを月にまかへし恨さへ人にそかへるあり明のそら

寄星戀

詠つゝたのめし空も夕つゝの霞にしつむはるの山の端

かこつとは雲吹風やしらさらん我夕くれの袖のむら雨

おもほえす袖のしら露おもるめり獨詠むるよひの秋風

戀風

小むしろや月の霜夜の山風にはらふ跡なき思ひをそしる

寄風見戀

みし人に心空なる春風の花の香さそふゆふへのみかは

寄風待戀

賴む夜は四方の山風小むしろの我身ひとつの更るこゑかな

寄雲戀

夕暮のおもひを宿す秋の雲雨となりてや袖におつらん

寄雲忍戀

いかにせん思ひけちてよ天原あらしに浮ふゆふくれの雲

寄雨戀

あやなくも賴むよくるし雨の音に心すむへき燈のもと

寄露戀

戀わひぬ消かへりても白露のわか身かゝらぬたくひともかな

露ならぬ何そは心秋はきの移ふうへに猶みたるらむ

秋の色を何か恨みし袖もはや朽葉のうへにかゝるしら露

寄山戀

かひそなきよな〳〵胸にまかねふく思ひを見えはきひの中山

寄山逢戀

消かへる露とはしるや強面さのとたえ待えし深山颪に

筑波山戀

鷲の羽も世にそ散行つくは山深き戀路と賴みけるかな

寄杣戀

戀路にや朽はてぬへき佛ともみかけはみかく三保の杣木を

寄海戀

何ならぬ我名のりそのよるへをは清き渚にいかてとりみむ

寄浦戀

身におはぬわか木の花にこりすまの恨はかなき老のなみかな

いたつらに夜の更行はすか莚身さへ浮ねのすまのうらなみ

寄浦忍戀

うつせ貝よし碎けてよ身をかくすみの生の浦の波のまに〳〵

寄江戀

待そ見んあら立波も限ありて今朝はなこ江の遠つ舟人

寄磯戀

興津なみよるの衣よ玉藻敷磯屋も袖のひまはなしやは

あちきなし此比なみはこゆるきの荒磯かけの片しきの袖

寄川恨戀

秋ふかき峯のあらしの立田川誰せきかけし袖と見るらん

寄關戀

長き夜の岩戸の關路あけぬとて今日も思ひの行方そなき

ならはすよ浮身をかへて秋の風いさこゝろみんすまの關守

一筆も書絶にけりそれをたに誰かはすゑし文字の關守

寄橋戀

ねぬる夜のはかなきのみか朽せしの世々の契も夢の浮はし

寄名所戀

またしらぬ心のおくの秋しのや外山しくるゝ色は見えにき

遠方や名のみありその渡りえぬ日もゆふくれのくすのうら風

寄簾戀

袖の露うち拂ふにもよそめのみしのふのすたれ隙そ苦しき

寄草戀

たよりなき旅よりかなし思ひ草まくらに結ふ露のひとりね

春の風いかに待見ん數ならぬ三室の峯のしものかけ草

忘れしの行へもしらぬ秋風のゆふかけ草にかゝるしら露

あさちふや頼むこゝろの葉末まて殘さぬ色に秋風そふく

寄下草戀

はかなしや更にし物を秋の風猶しら露のすゝのした草

尋ね見よきえぬ思ひも白露のたくひやはなき月の下草

寄忍草戀

消かへる心の露におもひ草よしや枯なは何にやとさん

寄忘草戀

わすれ草人はいかてか我おもひかつも見えつる種を植けん

住の江に尋もゆかし忘草われゆゑ人やつみ盡すらむ

寄草別戀

たくひある袖とや見えんきぬ〳〵の曉月のつゆのしたくさ

おきて行限もあれとしのゝめの光りをいそく萩の上の露

寄淺茅戀

誰ための床はらふらんさよ嵐心ならひのあさちふの霜

しられしの心の色やよひ〳〵も思ひ絶にし淺ちふのつき

寄篠戀

頼むなよつらき心はひまもやは嵐吹夜のいほのしのふき

寄苫戀

いく世ともとふ人そなき足引の山の岩ほのこけのみたれを

ふけぬとて獨やはねん見るまゝに庭の霜夜の苫の上の露

寄藻戀

うきねにも身はならはしを水鳥の玉藻の枕思ひみたれし

寄木戀

なけきをはこりも盡さす待よひの斧の柄くたす程そくるしき

岩高みしをる嵐の太山木も絶ぬるものを身をなくたきそ

賴むなよ川邊の楸ふかゝらぬ色と見るともあきのくれかた

秋ふけぬ人はこゝろのたかさこやおよはぬまつにおきつ白波

木によせてあふこひ

から衣花にそ匂ふ夕くれはかけしいのちのつゆの下ひも

寄花戀

人も見よさそへは風にさくら花心よ花はあはれならすや

寄花待戀

はかなくもたのむゆふへを心ある花やあらしの雪と降らん

恨ても待ても見えし櫻花にほひにかすむ夕くれのやと

風をたにまたさらましを花櫻心そ見えし宿の夕くれ

寄花別戀

忘れしのしるしなく共いかゝせん花はかつちるしのゝめの空

なくさめと思ひやおきし花の色も苦しき物をしのゝめの空

寄花契戀

夕嵐ふきな殘しそ花よりもあたに契りしこゝろをは見し

寄花久戀

賴め猶花に老木の哀をもかけやはすらん宿の夕暮

寄花恨戀

あたに人よしうつらすは櫻花思ひくまなき世にならふとも

哀とはよそへても見よ今はとて移ふ花にかゝるしらつゆ

ならひけん人のこゝろよすゝか川ふりすてゝ散る山櫻はな

しかりとておもふもよしや吉野山花に入ぬと人に傳へよ

寄松戀

くやしくもこゆるをそ見しわか心おくらす浪の末のまつ山

寄杉戀

鳥たにもなきて恨みよ杉たてる谷をこゝろの夕くれのやと

ちかひてし心のおくのあや杉を山田の原に猶賴むかな

寄槙戀

まきの葉も猶いかならん袖のうへを不破の關屋にふる時雨哉

寄虫戀

思ひねの夢にもそ行あきつはの袖ふるいもか影に見えつゝ

寄蟋蟀戀

小萩原下葉の秋をきり〳〵す鳴てうらみよゆふくれのやと

寄鳥戀

雲井まて心高きも夕ひはりおちさらめやは露の淺茅生

ねに行を見るさへくるし鳥のねも聞ぬみ山のゆふくれも哉

おもひねの片敷ころも染つくせかりの涙もあかぬ千しほに

かほよ鳥深山に深き宿りなも世のあやにくの類とや見ん

いつちともあふ瀬はしらて水鳥のくかにまとへる戀路をそ行

逢はぬ夜は十つゝとをの鳥の子を今そ重ねし中の小ころも

寄鳥別戀

深き夜のとりのはつねにとよせて思ひかひなき人は恨みし

おもはすに翅ならへんとの葉をさよの枕の鳥のはつこゑ

寄山鳥戀

あちきなく思ひなわひそすか莚我も山鳥のさ夜の嵐に

寄鳩戀

わひつゝも獨やねなん頼むにはかた山鳩のゆふくれのこゑ

寄水鷄戀

驚かす水鷄もあやなおもふ人なきにしもあらぬ松の扉に

寄鶴戀

歎かしよ獨ぬるよもをし鳥の深き契りはなほやくるしき

寄鴈戀

頼むなよう き三島江のしをれ芦にかゝる浮すの鴈の通ひ路

いかにせんうき人とは亂れあしの浪にたえ行鴈のかよひ路

寄獸戀

袖に見ぬ色もまさらしさをしかのたちぬれてなく萩の上の露

まてしはし夕やみよりもいさよひの月毛の駒や打もまきれむ

あはぬ夜の月毛の駒よさすか又引かへしてやあり明のそら

まち見はやとらのうそふく野へにたたに契有ける風の便りを

しる人の心つけはと小車の牛のよそめも今朝そくるしき

寄猪戀

かきつめて物思はする我身かな臥ゐのかるもとふしかくふし

寄樵夫戀

見せはやな岩のかけ道たとりてもをるてにもろき嶺の椎柴

寄海人戀

よしや又千尋の浪も海人の子のなこりにかけし片敷の袖

寄傀儡戀

恨しよ野上の里の秋の風世々のちきりもゆめのひと夜を

寄舟戀

それとたによせてや見えん藻刈舟興せふかめしした の亂を

寄車戀

したひのる心も見えて小車のところせくとや人のいとはむ

契りあれはつれなき君か小車になれける物をうしや世の中

寄鐘戀

いつか身に鐘もうらみん葛城や高間の雲のあかつきの聲

うきねとふ鐘も告こせ床の海待夜むなしきあかつきの聲

寄鐘絕戀

驚てや鐘もさひしきさ莚にみし夜の夢のあかつきのこゑ

寄鏡戀

手もふれし物おもふかけは増かゝみ心の内を見るそ苦しき

おもはしな人のこゝろのます鏡浮身のちりをかけて見んとは

つれもなき槇のとほそに榊葉の鏡をかけよ秋の夜のつき

おもかけもやとさはやとせ替かゝみあひに逢ぬる秋の夜の月

寄燈戀

一筆を見るよしもかな初瀬山みあかしふみのふかきしるしに

おとろくや獨ぬる夜の床の海にあまの釣するともし火の影

いさりすとよそにも見えよ渡つ海を涙の床にのこるともし火

寄衣戀

うは玉の夢より外に賴む夜のかたしき衣いかゝくるしき

はし姫のかたしき衣我袖にえやは吹こすあきの川かせ

行かよふ夢もやとさし我ゆゑのうたゝねならぬ夜の衣に

獨ねのよるの衣を戀つゝもくらす春日にほしそわつらふ

寄衣別戀

紅のこそめの衣別れこしなみたの袖にいつうつしけむ

寄衣稀戀

かれぬともよしさ夜衣をと女子かなつるいはほも契なる世を

おもへともならはし侘ぬさよ衣ぬる夜もおちす見るよしも哉

寄衣恨戀

花にさへ恨はかけし櫻いろの衣手かれししのゝめの空

戀帶

詠わひぬ花の姿に引帶の行へにかすむみねのよこくも

寄帶戀

數ならぬしつはた帶のかなしさはかた結にも身をそかけにし

寄紲戀

いかならん千引の石のつなてにも心つよさはさ夜のしたひも

寄莚戀

獨ねの床のさむしろ身一つを逢見し夜半はいかにおきけん

寄枕戀

敷妙の枕につもるちりひちの山はふしのねうきおもひかな

夢かとよ枕うこかす面影にうちおとろけはあり明のそら

寄糸戀

袖の上にいかゝ千しほにおとすらん山はいつくも瀧のしら糸

寄書戀

言の葉に殘す心ををりそへし野分の跡のはなとたに見よ

寄笛戀

笛竹にこゝろもとめし天人の空にめてけんねにはたつとも

寄斧柄戀

をのゝえのいく度朽て秋の夜の明るまち見んひとりねの床

寄碇戀

沖つ舟あはれ契のうき浪に千引のいかりおろす夜もかな

寄夢戀

くるしくもおもひ明しつ長月の宵のまくらのゆめのおもかけ

寄色戀

暮色にうつる霞のそらおほれ人のこゝろのゆふへとや見ん

戀涙

おきわかれ待よひよりもつく〳〵とおもふ戀路にふる涙かた

戀形見

いく度かたゝ書捨し筆の跡に千々の心をそへて見つらむ
あやなしや君か手ふれし琴のねを打驚かす軒のまつ風

被忘戀

いまはたゝ人も忘れぬうきふしをみえ置さりしわれそ苦しき

繼戀

なひくまも一花すゝき吹かへす秋の野風にもろきしらつゆ

思

侘ぬれはそれさへつらし離しかもよゝの思のはしめなりけん

片思

人そうきおもひくまなき花も今うつろひわふる春のくれ方
さのみやは袖にしくれのさゝ波やかた山あらし秋ふけぬとも
心あらは思たゆへきふし〳〵を見すきかぬ身といかて成けん

恨戀

見せはやな契り捨しを花の色のいふよりまさる夕くれの雨
うきにのみあへすこほれて花の色をうら山吹の袖のしらつゆ
哀またした葉の秋に物そおもふおらはとみえし萩のうへの露

寄海恨戀

よな〳〵はかけすもあらなん石見かたつれなき月に秋の浦浪
はかなしや思へは人をとはかりにまたしら浪のうらのはつ島

更恨戀

ふく風のまた入たえぬ秋の色をねやの扇のうへに見るかな（風のをたまたイ）

恨身戀

うら葉吹嵐も色に見えしとのうきみ山木にもろきしら露

恨傷戀

何しかも吹しほりけん秋の風ひとり行露の下荻

恨絶戀

思ひわひ見そめの島にかへるなりたえにし後の秋のうらなみ
山風の葛葉ふきかへす行へにも結ひし露の名殘やはなき

雜歌上

北野社法樂千首中に立春

手向山あくる一夜に行年のぬさも取あへす春は來にけり

田つらに出て若菜をもとめしに

から衣ものすそぬれて根芹おふる雪けの澤に今日やくらさん

春の雪を

霞つゝこゝにちりこね山遠き梢にのみやはるのあわ雪

箕面山に入て瀧の本にて

春なれや峯の岩ほの雪氷とけて落くるたきのしらいと

前内府三條のもとへ二月の比申侍る

九重の空いかならし山里もはな鶯のはるのあけほの

贈答五首

九重のみかきの春の近けれはむくらの宿も花をこそまて

昨日今日空いかならし峯の雪消しかうへに又そうちゝる

すむ人の心をいろに山里も岩木にはあらぬはなやさくらむ

はかなしやわか身に殘る昔とて花うくひすのあたの情は

いつはあれと思ひや出る思ひやる心に向ふはるのあけほの

有弄花老人被投一首之和歌。金聲玉振。嗟嘆詠歌之餘。賦彼一句呈此五篇云。徼渦惟幸。逃虚翁。丁卯仲春初六。

又の年申侍し

春來てはいつかと花に詠めしやひとつこゝろの夕へあけほの

返し

花にのみ詠むとや思ふ思ひいる尾上の鐘のゆふへあけほの

永正十三年正月ふみ奉る次に申侍る

まち見ても老の行へそ忘れける君か千とせの春のひかりに

返し　分五句述卑懐云々

待見てそ年を隔てし雲霧のこゝろもひらくかりのたまつさ

しらさりし老の行へも我ゆゑに今年はいたく霞む月かな

はかなくそ身はあた物を忘れける逢見ん事をはなに待つゝ

いくかへりおなし事のみ祝ふらん君か千とせの春のさかつき

消かたき頭の雪をかこちても先やむかはん春のひかりに

藤原正能(池田伊賀守)すゝめし三十首に海邊霞

染出す八しほの衣里のあまのなれしにもあらぬ朝かすみ哉

山家早春

山里は雪もふらなん春といへと花うくひすの音信もなし

壬生二品の正月半月さしてと侍歌をおもひ出して

月すめは都のほかも神山の御戸ひらく夜を思ひやるかな

梅の枝をすかし侍るとて

はかなしや今一春の花にもと軒端の梅に思ふいのちは

京にのほりてはなの比攝州に下るとて

櫻花ほのめきわたる九重を旅たつ身とも成にけるかな

神南備に八幡の社とかやに八重櫻ありなかはひらけぬと見えたりおもひなから過ぬとて

ほのかなる行手の櫻いきうしといひしもしるき花のもとかな

春の歌の中に

吉野山はなの盛りや敷しまのやまと島根の匂ひなるらん

草庵にて

身にあたる春にも有かな咲めくる花のやとりに鶯のこゑ

三月一日みの日なりしに

思ふ事祈りやみまし須磨の浦に御祓せし日の今日にもある哉

三島江春三月盡に

三島江や忘れかたみに舟なから今宵はかりの春の夜の夢

春雨

染出す若葉の梢山かせにおとはしくれのはる雨のそら

暮春のこゝろを

あはれしる心見んとや花もはや散はてにしを殘る春かな

樹陰夏風

夏はまたあさな〳〵にそよくかな楢の若葉にふくむやまかせ

五月の比宗椿法師もとより藤花を贈りて

花も世もうら紫の身をしるや春のなみにはもれて咲らん

返し

秋をはや見する小萩とたとるまて咲やあやしき藤の一えた

人に遣しける

さたかにも聞しやいかに人つても身にはとたる山ほとゝきす

人と物語して郭公をきゝて

忘れしよ問人ゆゑに端ゐしてさたかに聞し山ほとゝきす

五月比庭前の橘に鶯の宿りて鳴けれは

郭公らとからぬ聲を思へとやはな橘にうくひすのなく

三位入道富春旅舘に五月槿の咲たりしを見てよみ

てつかはしける

いかさまにつくろひけらし夏もまた半を秋のはなのあさ顔

夏草

夏草にひともともかな秋きてはことをあまたのはなの色々

早苗

急雨の雲も過あへぬ小山田に朝露をしくとる早苗哉

夏田

白妙の雨つゝみして田草とるをと女と見れは鷺の毛衣

盧橘

夕月夜ふけ行まゝに玉すたれひま求めつゝにほふ立花

深夜螢

風やたつ夜深き露のみたれ芦に宿りもあへす行ほたる哉

納涼

せみの羽の袂に秋やくりかけし清瀧川のせゝのしらいと

荻風

昨日今日とやまの秋の山風にあへすくたくるをきの聲かな

聞荻風

待えたる末葉の風や夕くれの聲も下荻のあり明のつき

荻露

秋萩も移ふころの行すりに袂くるしきをのゝあさつゆ

萩盛

秋の風心やつくすふちはかまお花か袖もはきか花すり

自然齋宗祇第三回に前内府すゝめ給ひし五十首に

むしのね聞は　勒題

よひの間も虫のねきけは唐衣隙こそなけれ露のかたしき
　富春權を送りて
心おく人に見せんと詠れは明るまおそきつゆのあさかほ
　返し
白露も袖にそあまる明るまを我ゆゑまちし朝かほのはな
　住吉社にて月を
なからへて今年も見けり住の江やいけるかひある秋の夜の月
　八月十五夜おなし社にて
命ありて又もあひ見んと思ふとも秋の今宵の住の江の月
　藤原正盛宅にして十五夜に
うへもなき名を得たる夜に秋の月心ゆるさす出る影かな
　月契多秋
身にしれはさそなと向ふ月の中の老木のかつら影もかはらす
・京極黄門忌日廿日なる事をおもひて
今も猶あふき見よとや秋の月はつかのそらの高き名殘を
　須磨浦 秋
心もや月はあり明の秋ふかきよものあらしに須磨の關守
　廣澤の池にして月を見侍りて
天の原雲なき四方の月かけも殘らすやとるひろ澤のいけ
　住吉の社にまうてゝ
秋の風哀とそおもふ住よしの濱松かねを手枕にして

　秋田
月なから時雨と聞は小田の庵に稻葉ふきこす風の下つゆ
　生田のもりを過侍るとて
ひと葉をも袖に吹こせつの國の生田のもりの秋のこからし
　月を見て深更にいたるえらひ來て庭にすませ侍り
　しむしの聲かれ〳〵に聞えけれは
弱りゆく聲そかなしき野へにのみ聞まし物をまつむしのこゑ
　河州寺延寺僧禪心庵室にて閑庭の興を神無月に
もみち葉も移ろひかれて殘るな・藤にくれし秋のしらきく
　播州高槻淨觀庵に花の木草をうゑ水をたゝへたる
　庭神無月の比猶見捨かたくて
冬枯の影とも見えす春秋の花のやとりにすめる池水
　草庵にして冬興を
霜さゆるかきねのしとゝそよ〳〵と朽葉の衣かつきてそなく
いつはあれとさしても人はとはぬ哉雪降ころのふゆの山さと
　冬懐舊
冬の夜の長き寐覺よ程もなき憂身に何のおもひ成らん
　曉山
時雨せし夜のにしきを龍田姫ゆふ付とりの聲やまつらむ
　山嵐音靜
横雲も心あらなん山ふかみあらしのゆるすゆめのあけほの

暁雲

契きやよひの村雲消つきて一筋うかふあり明のそら

夢中に曙雲といふ題にて歌を案し侍るとおほえて

あくかれていもやすからぬ春の夜の行へや霞むしのゝめの空

薄暮煙

すむ庵や山ふかゝらし夕暮の木の間しのきて立けふりかな

關路雨

思ひ來し不破の關屋の旅ねかなぬるともよしや夕暮の雨

名所關

都出ていつこはあれと白河やこゝろの關のあき風のやま

關路鷄

待とりし花そほのめくあふ坂や杉村くらき鳥のはつ聲

相坂や道のはてまて思ひたつ夕付鳥の聲やかなしき

河邊夕

九重のみやこ出てもこゝろゆくそらはゆふへのかもの川かせ

播州室の津にまかりし時

はるかなるもろこし船もかゝるてふ室の入うみけふ見つる哉

天橋立にて古寺のこゝろを

おもへとや世々に出ても法の道たゝ一すちの天のはしたて

古寺秋曉

志賀のうらやふもとに明て秋の夜の雲を小比叡の峯の杉村

古寺夕嵐

かつらきや嵐をいたみ夕暮の雲におくるゝすみ染のそて

古寺鐘

深き夜の嶺の杉村おく霜の色より寒きかねのこゑ哉

おとろかぬわか身いく夜の手枕に尾上の鐘も音（聲イ）の苦しき

澗水

すむ鶴の心ともなふ人やなきいはほかくれの谷のした水

野水

さひしさはかよひし鳥もねぬなはの下行水の野への月かけ

出湯

しるしあらは七くりの湯を七かへり戀の病のみそきにやせん

江雨

よるの雨の明ほのにほふ住の江やいつれ繪嶋の春の舟人

夕雨

山のは（もとイ）の杉の葉したり降雨や夕暮いそくまとのともし火

草庵雨

誰かきく世の理りも殘なき草の庵のあかつきのあめ

嶺上松

さそひ出る峯のあらしや宿すらん松にやすらふかねの聲哉

暮山松嵐

夕嵐きくもなやましみねの松いくとしく〵（花いくとしのイ）の忘れかたみそ

名所松

言の葉にかけしやいく世風と月二木のうへのたけくまの松

陸奥のまかきか嶋は松にのみ朝夕なみもこゝろよすらむ

高砂の松を初て見侍りし時

老らくに相見んとてや今日までもなからへ來けん高砂のまつ

鳴尾浦にして

宮古より思ひし末や七十にわか身なる尾のまつのうらかせ

山椿

生のほる山は高さこいく代ともしら玉つはき蔭も木深し

嶺樹

かきくらし雪は名殘もとゝまらて夕日さひしき嶺の常磐木

むろの木

山もとやさとはいつくもはなれそにむろの一木のたつ煙かな

しきみ

極つむあかつき露に世は花の匂ひにあまる（まさるイ）すみそめのそて

くちなし

うち出てくやしからすや口なしを世に思ふへき花とこそ見れ

くり

老の後心の中を尋ぬれはみなしくりともなりにけるかな

山家

はかなしやかた敷ころも篠ふきをみ山颪のへたてはかりに

なくさめし人さへつらし山里に聞なやむへき春のかせかは

さひしさよ思ひもかへせ花にくらし木の葉におくる柴の樞を

年ふれは有にまかせていとひこし世の便りにもかゝる山さと

秋山家

秋の日もゆふへの色にならしはのかきねの山路行人もなし

山居

草も木もかきねの外山かゝらぬや心のまゝにうゑて見るとも

山家曉

かねの音もまた深き夜の庵の内に松の火さひし嶺の朝霧

山家夕

さひしさはこ（眞イ）柴のけふり山里のゆふへのものと思ひなしても

ならしはの戸ほそをあらみ雲風も暮れは宿る山のかけ哉

山家嵐

心すむ夜のあらしに思はすよたえし山路のふかきうらみを

山ふかみ絶てもきくやいかにとも峰のあらしをとふ人のなき

影たのむすゝの籬のはかなきに嶺のあらしも心おきけむ

誰か見ん峯のくす葉の夕嵐こゝろのよそにさわく物とは

山家夕嵐

名もしらぬ木の葉を庭の夕あらし山もいくへに誰をうらみん

山家松風

よひ／＼の片敷袖（衣イ）のしはしたに夢を宿さぬみねのまつ風

山家雲

やすらはゝ思ひなすてそ春深き松のとほそのしのゝめのくも

心ある人や苦しき雲はよのうきをもしらてやとる山かな

鐘の音の夜深き峯を別てや軒端の杉にやとるしら雲

能円法円まゆ白に妙とよみし石井のもとにて山家の水といふ事を

白妙のかはらぬ影をあとしたふ山井の水にうつしつるかな

山家杉

杉たてる門もふりにき足引の山よりふかき心すむらし

友と見よ軒端の杉の夕あらし心深くもこもる聲かな

山家鳥

くれなからたよりもなきを霞む日の夕山鳥こゑそ淋しき

ふくろふも耳なれぬるを名もしらぬ深山の鳥の夕やみの聲

松の戸に人たのめなる鳥なれや谷の朽木をたゝき捨つる

山家人稀

庵こそ山ふかくとも花にこひ木の葉に人をしのはさらめや

わか心見えこしものを問捨る人のなこりのみねのまつ風

暮ぬめり見せはや人に忘れしの嶺のかけ路の八重の白雲

田家興

色かはる梢もあれと山さとのいなはしくるゝあき風の音

閑居雨

老はてゝ獨しきけは住こしや憂世の中のゆふくれのあめ

閑居友

さひしさをかた見に心見えしとの心見えけるやとのゆふ暮

よしやたゝ竹深き窓のひとりこと筆のすさひの長き日暮し

山館竹

ひまをあらみなかめいたすも行人はかたをか山のまとの呉竹

窓竹

呉竹を葉分に染て秋の日の窓より西にのこるさひしさ

宣前長竹

竹取のこゝや園生と住からにゆかしけ深き窓のうちかな

雨中緑竹

影うすき夕日は野への片岡や竹の葉しのく秋のむら雨

径苔

かつらきや遠山伏の峯こえし跡もいく代の苔のかけ道

つゝら

遠山路岩ねに生ふるつゝら折くるしきまゝに暮しつる哉

暁聞鐘

身をも世をもおもふともなし鐘の聲落すなみたや暁の空

晩鐘

山かけも尾上の鐘のゆふあらし吹こす里はうときこゑかな

鐘聲何方

明やらぬ夢路の末の鐘の聲はなのしるへに匂ふはるの夜

曉燈

消かはる曉ふかし山の端の星のひかりをまとのともし火

窓灯

夢さそふ夜半の嵐は杉の窓にたえ〴〵なひくともし火のかけ

窓殘燈

ともし火やしる人ならん雨の音窓に夜深き秋のこゝろを

閑中燈

おのつから身をもしるへき光かな曉かたの窓のともし火

閑居灯

深き夜のまとの灯なつ虫のむすほゝるゝもをしきかけかな

野寺晩燈

尋ても風のみそとふ八重葎光りをかこふやとのともし火

帰るさを待も野寺の夕あらしはけしき陰のすみ染のそて

くるゝ野にかへると見しや月の本松の戸たゝく遠のふる寺

樵夫夕時

夕あらしつま木におつる橡の實の音もあられに寒き山かな

河邊舟

渡し守うちぬる夜はを里人の月めてしつゝさす小ふね哉

江舟

江を淺みつなくともなし亂芦の花をやとりのあまの釣舟

漁火出浦

數々にうかひそ出る浦風のあら磯こえてともすいさり火

漁船連浪

すむ方やちかの浦なみ暮はてゝのとかにうかふ海士の釣舟

漁父棹月

露かゝる芦わけ小舟ふかき夜の月をや拂ふあまの衣手

夕眺望

名もしるき浪のうき島原かまの浦よりおちになるゆふへかな

夕幽思

おもほえす袖にそみてる松風の心におとすゆふくれのつゆ

前内府より給し題心静延壽

吹みたす風も音せぬ夕暮はかすみのほらにすむこゝろかな

短夢

長き夜そさなから殘るをはたゝのいたゝに渡す夢の浮はし

夢

はかなさも誰か心より見え來ては夢ともしらぬ身をいさめ[illegible]

夢語昔人

名殘にも袖はしほらし夢の中の昔かたりに峯のまつ風

唐人

かしこくもかりはのえものうは玉の夢の面影世にそ名たかき

楊貴妃

いかならし千々に分けん心をも獨のうへにやとすおもかけ
まかまほし花の顔はせ通ふとも筆限りある笛たけの聲

貴妃の吹笛圖よみ侍し時に王昭君

よしや又たへなる姿うつし繪の僞りなくは名をものこさし
紅のにほひも消てますかゝみ見しにもあらぬ影やかなしき

人の家にて鶴を

をのかへん千年をおきて數へ見よ限りなき世を宿の友鶴

鶴來庭上

おもひあかる心と見れは雲井より馴來し庭を宿の友つる

飛鳥井拾遺賴孝の亭にて

すみの江や浦なれ行はふりはへておほふはかりの鶴の毛衣

松上鶴

夜の鶴八十島かけてすむ月の秋をかなしむ遠方のまつ

洲鶴

吹むかふ鹽風さむみ沖つすに入日をしたふ芦たつの聲

名所鶴

歸るらし契おきつの濱松に月もまつよのあしたつのこゑ

洲鷺

夕日影はるゝ河すに立鷺のはらふもかなし雪の毛衣

江鷺

さし捨て雨はふる江の舟の上にみの毛しをれて立るかささき
雨くらき入江の柳みる鷺の白きを後のみつくきのあと

みさこ

浦浪に入江のみさこ飛かへりしつ枝動かす荒磯の松

鳩

呉竹の園生に來なく家鳩も事とひすつるゆふくれの雨

もす

うす紅葉あさ霧渡る梢よりもす鳴落るそのゝむら草

暮林鳥宿

かすかなるはやしかくれにぬる鳥の羽音ひまなき夕くれの雨

春の暮の歌に

ほとなしや垣根のしとゝなれ〳〵てこそも別れし春のくれ方

鶺鴒來晩庭

めつらしき色に落きて秋風の草葉催ほす庭たゝきかな

名もしらぬ鳥の庭に來りたるを見て

年をへてみさりし鳥も松の戸に心をおかぬ山のあはれさ

春動物

宮古人春のさわへのふしみ草かりかふ駒のほとは見えけり

かもしゝ

奥山の岩ほにかゝるかもしゝの身をこそしらめあはれ世の中

鼯

ねさめつゝ聞はすさまし峰わたる曉つきにむさゝひのこゑ

蝶
哀なるこてふのうへに春秋の花としはなをたつねてそ問ふ
蜘蛛
呉竹の末葉を月にさらしけり千尋にはへしさゝかにのいと
書
七車つみおくふみやいにしへの忘れぬ道をこひくさに見ん
笛
思ふにも心そすめる天つ袖かけしはかりの笛竹のこゑ
馬をかりて物へまかりしに馬を返すとて道泉（池田佐渡入道）もとへ申つかはしける
足はやみむちをわするゝ春駒に老を助けて詠め來しかな
自然齋こゝに下りし時送行にまかせたりしかはよみて給ひし
いかにせんかりの山路の名殘たに長き別れの心地する世を
返し
心のみ行は山路のかひそなき島のほかにもおくれしの身は
冷泉左衞門督入道宗淸播州にて
くみ馴しもとの心をわするなよ野中の淸水なかれゆくとも
返し
ひたすらに袖をそひたす結こし末を野中の水くきのあと
橋本黄門公夏卿播州にて集會し歸路におもひ立し
神無月のころ申おくられし
たかふなよ木の葉の山路分るとも歸るこゝろの花の契りを
返し
心こそ花にましらめ老の命春の山路にさきたちぬとも
播州にて源貞久（櫻村内藏助）送り侍るとて
匂ひもて袖をひかへよしはしともいはゝかしこし宿のしら菊
返し
心さへ深きにほひにをのゝえもくたすはかり（平イ）の宿のしら菊
播州よりのほり侍し時職貞（小松原三郎）道まて送りしに障る事ありて歸るとて
高砂のまつにおよはて立歸る身をうら浪の哀れともしれ
返し
高砂の松のかけにも滿波の立や歸るとふみまよふかな
實（コイ）存法師草庵に年を送りし日向國に歸りくたりし時おくり行に
老をおきて行もさこそは思ふらめ心を見えし袖のけしきに
返し
思ひおく（トイ）袖のけしきの面影に行かた遂ふたひのそらかな
日能法師奥州送行
あはれしれあすともまたぬ老の波思ふあまりにかけし行末
返し

（一に聞）あたしも契りなかけそ立かへり千代もと思ふ和歌の浦波

二十歳はかりの時富士一見の望ありて秋の末つかた思ひ立しに伊勢の大淀の渡りに宿りてをひてを待しに二日三日旅ねせしかは

秋風のあしのかりねと思ひしをいくよの波に大よとのはま

いらこの渡をして三河國かた濱と云海面を傳ひ遠江にうつりぬ其ころくもりかちにてひきまと云所を出し明ほのにはしめて富士を見侍しなか月の下旬中天に雪白妙なり

すみ渡る秋のみとりの天の原ふりさけ見れは雪の富士の根

さ夜の中山のほとりにて

秋をへて都のそらに思ひ來し月をかたしくさよの中山

清見か關にて

明にけり月とのみやは清見かた岩うち越る沖つしら波

うつの山を越え侍りて

蔦かつらみたれてそほつ衣手にいとゝしくれのうつの山越

飛鳥井拾遺はりまへ下向の時播州池田にての當座に旅

濱傳ひ馬は有りともしかまかたかちより行ん事をしそ思ふ

關白殿(近衞殿)より給し二首中春旅

我心傳へよはなの雲井路や忍ふの山のみねのまつ風

野旅

しはしたに月もやとさす草枕こすの大野の露の秋風

旅人橋渡

旅ころも月ふきくもる空もうし濱名の橋の沖つ汐風

のる駒はみなうちいれて早川や橋あやふけに渡る旅人

山路旅行

明る夜の月のしるへも越かたきいは岡山のみねのむら雲

天台座主(梶井宮)給し五首中旅行友

おもふとち紅葉のにしきたちきても都は遠し白河の關

旅宿野

露宿にいく里人の旅ねせし秋のこゝろをみやき野の月

寄月旅宿

心をや月にも見えん旅ねより山里ひとの聲そいさとき

旅宿嵐

越えのこす峯のあらしの今宵たに夢やは頼むすゝのかりふし

心あれや今夜はみねの松こえて宿りを夢にかす嵐かな

旅枕なるゝ深山の鳥たにもふし侘る夜の木々のあらしに

羇中關

秋の夜の月は一夜の旅ねたに思ふ契りを須磨の關守

殘月越關

はるかにも行別るゝや月をけさ古里人のしらかはのせき

羇中嵐
かり枕通ふこゝろや椎の葉のあらしもしらぬ古郷の夢
ことゝふや夢もくるしき折敷も嵐の宿のみねの椎柴
羇中夕嵐
かりねにや哀かけゝん夕あらし送り捨たるみねのたひゝと
羇中送日
旅衣はるさへ暮ぬ形見とも行へはなにかふるさとの空
羇中友
里人と三島すか笠うちつれて行もや旅の友と成らん
羇中衣
思ふ（思ひ草イ）夢は宿りたえにき野への露峯のあらしの夜の衣々（にイ）
羇旅
しのふ山心のおくは白露のおなし袂にしをるたひゝと
海路
渡つ海のかさしの花の浦風にむすほゝれ行沖つふな人
濱千鳥古郷遠くなるみかた今朝の舟出を音にや鳴らむ
海路雲
明ほのや浮ふ千鳥をとまり舟漕出て見れは波のむら雲
海路遠
鳥かねも聞ぬ哀はおく山の旅ねにまさる波まくらかな
旅泊曉
さらにまた別れんもをしなみ枕あけかたきよのおきつよこ雲
旅泊雨
磯かくれ頼むたにうき夜の雨に行へもしらぬ沖のいさり火
おもひやれもしほの枕あま人もうれふはかりの曉のあめ
名所旅泊
哀しれひゝきのなたもなたらかにうちぬる程の旅のつかれを
旅泊夢
夢もまた何かをしまの浪枕むすほゝれ行曉のこゑ
たよりなき夢の名殘は浪枕あかつき近き興の月かけ
旅泊
和田の原夢路はたえぬふしのねの雪をいく夜の波の片敷
大海やくらき雨夜の天つ星ひとつふたつにかくるふな人
梶まくら涙すゝろにあまの子のすさむる笛の夜聲をそ聞

雜歌下

永正五年九月十三日
禁裡和漢御會に參りたりし暮かたの月殿上にさし入たりける時心中に老樂のいのちうらみぬ今宵かな名高き月を雲のうへに見てとおもひよりしを前内府にひそかに申しおきてまかり出しを奏聞ありしに次の朝くたされける　御製
さま〳〵に聞えあけける言の葉や名高き月の光とは見し

老後面目感涙之餘記之。
愚詠百首
勅點を申入て下されしに　叡感のよし女房奉書こまかに侍し時侍從大納言のもとへ
雲井まで思ひかけきや生る世の是そかひある和歌の浦波
返し
雲井まていかて傳へん和歌の浦に年ふる田鶴の啼ねならすは
まへのとし十三夜の御會にまゐりて
御製を下されし事をおもひて
影高き月の雲井に名をあけし去年の今宵を仰き見るかな
永正七年八月十一夜
禁裡御夢想の事承りて上洛せしめ御會に參りあまさへ發句を申すへき樣にありしかはとかく申上るにおよはす申侍り過分とも中々申にたへぬことなりき其夜心中につゝけ侍し
及ひなきほとは雲井の夢うつゝあやしき身ともおもほゆる哉
御夢のうちよりの次第をしるしとゝめたきよしを。前内府にしきりに申しかは。筆に染られ侍るを。こゝにしるしおくものなり。
さいつころ内の帝の御夢に。　先皇の御代に御連歌あるへきにて。發句は肖柏法師申へきよしありしかは。まつ内々に御覽有へき由。當代の仰ことなりしに。發句におきては當座に申へし。此歌のこゝろにてなん風情をおもひめくらし侍とて。
足曳の山遠き月を空におきて月かけ高き末のかけはし
といふ歌を申上たりと御覽せられぬるよしかたり仰せられしかは。さてもめつらかにもありかたかりける御ことかな。天暦以往の歌にとりても。まさしく柿本山邊の風體の外かゝるはまれにやあらん。もとより凡人の見る處にあらされは。凡慮の所詠にはあらさるへし。大凡靑雲紫宸の夢に入たくひ。もろこしには傳野の遺賢の舟楫補佐の名をのこし。巫山の神女の雲雨妖艷の情となれるためしもそ古語に有けん。今この老法師のかゝること葉をきこえあけぬと　叡慮をおとろかしけんは。いにしへ今道たえにたる事に社。年ころ夢庵とよひ來りけるも。かゝるへき事の讖の文にやとまてあやしく覺え侍しかは。折ふしたよりに文つかはすついてにしるし送りしかは。思ふにもこえける感悅。手の舞足の踏ところをしらすとて。九月十日のほとにふりはへのほり來られしも。まことにやさしきこゝろさしなるを。おなしき十三日。空のけしきこゝろよく晴て。吾國の月の名も實にかひありぬへきをりなれは。御連歌あそはさるへし。彼老人めしくしてさ

ふらふへし。發句は下官申へきよし仰られしかは。此事
をおもひ出て。さらはわたくしにあひゆつるへきよし請
申て。かの法師の發句に。

空におきて見ん世や幾世秋の月

腋はすなはち御製にて。

にはにくもらぬ玉しきのつゆ

是かれあまたさふらひて御一座。くれかゝるほとに御前
の東おもて色つきわたれる山々のけしき。御まへの庭の
梢もひとつに見わたされて。月いれたる槇の戸口もえん
なるほとに。夜にいりて事はてゝ。御くたものなとにて
大みきまゐる。昨日うち〳〵わたくしへつけて。上林
下若のまうけ。彼老人いさゝか申事侍しをもてはやさる
ゝおもむきにや。御さかつき度々になりて。天酌にて
も同しくたまはせし。老の面目道のめくみ。筑波山のか
けよりもしけくして。苔の袂につゝみあまるらん嬉しさ
は。身をつみてありかたくもかたしけなくも。おの〳〵
既醉を歌ひてまかつるほとに。しはらく南殿の月を見て。
そのまゝあひともなひつゝ清光をふみて蓬屋に歸りぬれ
は。宮漏や〻(闌イ)たけて鐘のこゑ半更を告わたる。けふの良
辰賞心樂事まことにあひあはすといふへきにこそ。

永正第七暮秋記之。　古槐散木御判

石山僧正(導海)懇望の事有し時給し

淺香山あさきになさは道を守る神そ心の奥を照てん

返し

深めても何か思ひし淺か山あさゝそ見えんいさらゐの水

南昌庵(橙林)恩詠の事を褒美有しかはつかはしける

しるへせし君かこと葉に和歌の浦や上なき玉をつゝむ袖哉

返し

和歌の浦や君かと葉の磨く玉も晴きに迷ふ人そかひなき

護道(内藤内藏助)つくしより連歌を見せはへりし

時つゝみ紙に

住吉の松の落葉にかき添よつくしの海のもくつなりとも

返し

住吉の松も下枝にかけや見んつくしの海の波のたま藻を

平賴亮(松田九郎)風雅にともなひはへりて知音と

なりあるとし花のころこなたかなた遊山しつゝ久

しくまからさりしかは申遣しける

よしや又稀なる花のひと盛うかるゝ身をも人なとかめそ

返し

一度はとへかし宿のさくら花うかるゝほとのいろはなくとも

藤原長正(池田彌太郎)年の暮に送り來りはへりし

万代の行へも遠き年波のくるゝもしらし和歌のうら人

返し
老の波も猶いくかへり年の暮行末遠きひとにひかれて
八月十五夜雨ふりし十六日藤原正衛（池田彦三郎）
過しよの會にもれぬる事を申て送侍し
名に高き月もわきてや曇るらん身をしる雨の袖の片敷
返し
誰里も月にうらみの雨なから身をしる袖はとはましものを
明石の月見んとて人々さそひてまかりし十五夜に
明石かた浦も名高き波の上に秋は今宵といつる月かな
明石に居し時藤原正盛かたより申送り侍りし
言の葉の光りを君に待そ見ん明石の月の浪の歸るさ
返し
明石かた思おくりし心さへそふる光りに見つる月かな
彼浦に柿本のよりゐ給ひし松とて有其枝をうら人
に一枝こひて來りしを正盛かたへ遣はすとて
明石かた歌のひしりの袖かけし松を君にと手折こし哉
返し
明石かた袖かけし世を松もさそ君にをられて思ひ出けん
又彼枝につけて源頼豐のかたへ
朝霧に詠めし世をも濱松のくちせぬ陰に相見つるかな
返し
濱松やしる人にせし朝霧のへたてこし世を君に殘して
前内府のかたへ彼松につけて
見せはやな歌のひしりの袖かけし濱松か枝も殘りける世を
返し
袖かけし跡もかしこき濱松のとの葉にこそ昔をも見れ
同藤原正能につかはす
明石かた袖かけし世を朽やらぬ濱松か枝に見しかかしこき
返し
あかしかた濱松かえにすむ月も見しを昔の人としるらし
去年の今夜友なひて明石にて見し事を思ひ出て藤
原正數につかはす
今宵こそ向へはさらに明石かた浪のまくらに宿る月かけ
返し
月も見て思ひ出らん明石かた波のまくらにかへるこゝろを
永正十三年の春都にのほりて近衛前關白殿御所近
き所に宿りて春日社の藤の花を見こし侍りしかは
申侍し
かけきやは夕明ほのゝ忘れける老の末葉のはるの藤浪
御返し
思はすようつしうゑても藤浪にかゝると葉の花を見んとは
おなし比前内府より山里の花の枝とて送り給ひし
返し

かは申侍り
山里の花の見るらん一枝に思ひもたえぬ老のあはれを
御返し二首
我もしか山里人のたよりにそ殘れるはなの春をしりつる
しりぬらん花鶯も老の後有しよりけにかなしからすや
中御門黄門の息伊滿丸（十四才）はしめて向顏し侍
りしかは花の枝につけて
たくひなき花のひかりに思はすの齢をさへものはへつるかな
返し
言の葉の花の匂ひに行末の千とせの影をちきりおく哉
伊滿丸のいもうと六才にして古今集暗誦の由つた
へ聞しかは父のもとへ申つかはし侍りし
たくひあらしまた七とせの中にして空に讀けん千うた廿卷
返し
はつかしや空に唱ふる千歌とはいつくの人のきゝていふらん
宮古より降りし人にものかたりし侍りて
久かたの雲井の月をかたしきの袖のこほりに思ひかけきや
今宵來りて物語せんといひしに見えさりしかは
ふけぬ間の夜半に心もつきはてぬたのめすてしを松の嵐に
藤原長正かたへ書おきたる後につけて
さゝの葉の霜夜の月のさむしろに思ひやすらん宿る面かけ
長正宇治のほとりにありし比今夜の月いかになか
むらんと思ひやりて
月見ても思ひ出やと思ひねの袖にかたしく宇治の川なみ
長正故ありて大和國へまかるとて
かくしつゝ移りもて行世中にしはしなれぬる程をしそ思ふ
返し
移りゆく世とも思はし忘れしのかたみはそらにあり明の月
秋の比便につけて赤松彌三郎かたへ
それと見る便りもあれな行方に心をそふる秋のよのつき
返し
そふるてふ心の色に君をしも見るはかりなるよな／＼の月
和泉堺にて少年の僧に逢て後つかはしける
いく夜われ結はぬ夢の浪枕見し人ゆゑに立やかへらむ
返し
浪枕むすはぬ夢はいかにして人のこゝろのたちもかへらむ
おなし處にて梅につけてつかはしける
まつ人のあたりに匂へ梅の花鶯さそふたよりのみかは
かへし　宮松
さそはれん袖とけなしに鶯も匂ふかきねの梅のはる風
ほとへたゝりたる處よりやよひのころつかはした
りしに

忘れすは人も見るやと賴む哉月と花とのはるの夜の夢
　返し　　　　　　　　　　　　　　宮　松
いかにして思ひ忘れん春の夜の花と月とのゆめの明ほの
　春の夜物語せし人に
よひ〳〵にくたけそまさる宿りせし花の薰りの露の衣手
　返し
名殘ある誰か行へとてよひ〳〵の花の袂にくたくしらつゆ
　堺よりのほり侍る時住よしまておくり來りて歸路
　より申送り侍りし
別れての名殘もよしや立かへり又も行あひのまつの契りは
　返し
老樂のいのちもしはしかゝれとや又も行逢の松のことの葉
　多田良與房所に侍る伊香賀六郎につかはしける
よそにたにかけむ哀もいかゝ崎岩うつ浪のくたけすもかな
　返し
よそにのみ見て社やまめいかゝ共問れし程の身にしあらねは
　松浦よりのほりて都にありし倘平（有馬神三郎）國
　に降るよしかたりしかは
それと見よ思ふ心は松浦かた淸き渚によするしらなみ
　返し
それと見ん便りもいさや松浦かた遠き限りの興つ白浪

　見すもあらさりしやうなる人に
わすれしなほのかにみしもしらさりし契有きや世々の行末
　返し
しらさりし妙なる君かことの葉にかゝるも世々の契ありとは
　永正十二年六月六日夜夢中につらね侍し
うしと見て古き柱にさし入つさすかにやれは惜き一筆
　伊賀國府善養坊印朝彼國にて相ともなひし數十年
　隔りぬるか書を送りて
異服とりあやに戀しさ增れともとひ立空に[illegible]けるけし
　返し
うきなから見えん世もかな異服とり怪きまても老はつる身を
　龍興寺橙林世のさわかしかりし比おくり給ひし
世の中をいとひても猶しほる哉老ての後の墨染のそて
　返答
いかはかり深き心の老の後猶しほるらんすみそめの袖
　ある僧の室を樵庵と號して人々に[illegible]を申はへり
　しに
いほりする深山かくれの妻木にもをりし椎をこゝろ成らん
　山城木津にむかふの觀音寺といふは遍昭僧正の住
　給ひし所なりとなんすゑの露もとのしつくの歌は
　此寺の前の橋のほとりにして詠し給ひきと申傳へ

たるなと人のかたりしかは寺に入て石塔なと拜し
奉りて
しほるなり古き言葉の末の露かゝるはかりの袂ならねと
髮ひけをのそかすなりて向顏せしのち前内府より
年月に憂身はもとの我なからしらぬ翁に逢もめつらし
返し
嬉しきは齡も名をも今は世にしらぬ翁となりにける哉
おなし比宗長法師のかたへ文つかはし侍りしに不
佞儒只道歸自然生形なと申て
見えはやなおのつからなる姿にていとゝ隱れぬ雪のみたれを
返し
しらし君雪の亂れの言の葉におのつからなる姿見ゆとも
宗長年々上洛すへきよし書のみありしかは
賴めこし年の渡りも鵲のあとをのみ見てなくさめよとや
返し
程遠き渡りに住て鵲のあと見るたひに袖ぬらしつゝ
生れし時みたりし人の四十にあまるよし申おくら
れしかは
思ひやれ二葉を見つる初草の老ぬるまての老の行へを
返し　　　　　　　　　　通胤朝臣母
思ふらん二葉の春のかことにも猶むらさきのねをそ添ぬる

宗叱渡唐し侍し彼國にて夢庵の二字を仲和といふ
官人の能書にかゝせてもて來り侍り思ひかけぬ事
にて感情不淺
かしこしなもろこしまても筆にさへ聞て染ける夢の庵よ
又宗補同心に此庵號の唐筆を見せ侍りし人の爲ま
て思ひ忘さりける事と覺えて
水莖にかけし契やたくひなき見ぬ唐土の夢のいほりそ
草庵のさま四隣に長松花樹めくれり前の庭に大な
る巖あり臥龍のことく猛虎に似たり海邊の石相ま
しはる其中に紅梅軒に近きありあしやの里よりは
るぐ\うつし來りて年をかさぬ横斜三四丈におよ
へりかたはらに非あり纏の長き官[illegible]卓[illegible]おほひ
て暑を避にたよりあり四時の花草木にたえすこれ
を以て遊ひて晨夕老を忘るよて書院を弄花軒と號
す
夢なから心はとめし老樂のなつさひきぬる山の岩木に
正月三日雪降たりしに梅につけて[illegible]へ池田
民部丞）かたより送り侍りし
それなからをらまほしきに梅かえにやかて[illegible]春のしら雪
返し
それなから千年のかさし手折とや雪もかゝりしやとの梅か枝

河州道堅に有りしに郭公聞たりしかは　宗鑑
今よりは恨もしせし今宵こそ待人からの山ほとゝきす
返し
忘れしな時鳥さへ心あるやとにかりねのあけほのゝ聲
神無月に桃の實も葉もくしたる枝を續燈につかはすとて
かさしてよみとせへたゝる仙人の君か爲にとのこすひと枝
返し
みちとせの後も契りて仙人に殘の春を幾世また見ん
前内府落髪のよし聞しかは申侍し
さても世に雲井はるけき位山猶うへもなき道に入けん
御かへし
ちりを出るけふそ過こし位山たにゝもあらぬ道と知ぬる
酒を愛し侍りて
さけの上の聖の道もかしこきもひとつ心のゑひの中かな
昔たれつくり初けんとはかりにすさめし人の心をそくむ
杯もかたふけあへす世の浮目見えぬ山路にいつか來にけん
濁醪誰造汝一酌散千憂といへるとをおもひよみ侍りし
哀とも誰か見さらん醉の中にしは〱かへす老のたもとを

老去一盃足。誰憐屢舞長。此句をおもひて。
身のうれへ何にのこらん浮へつゝ花に匂はす春の酒つき
摘花浸酒春愁盡といへることを
かゝけたる垣根の竹を折たきて秋の長夜をいねかてにする
燒竹煎茶夜臥遲
十輪院前内府うせ給し時南無地藏大菩薩の名字を十首の上におきて詠し
七十も哀まれなる世の中を思ひしらする今そ悲しき
むは玉のはかなき夢は秋の夜長かせとも又も見る世を
散花に心くたきし春も雲月の秋のみかたみとや見む
さかほとけゆつり置ける末の世をうけ引昔きくもたふとし
うれひあるたくひとや見ん秋の日も夕かけ草の庭のしらつゆ
たらちねと頼みこし身は木の本のひかたき蔭に労りやはする
いへはえにおもへは悲し樣々のしるへうしなふ身は殘りゐて
郭公こと傳やらん便りたにたえぬる秋の空もうらめし
里のあまの鹽やき衣五十まてなれにし袖のうへになりぬる
仕へこし二の道よくらゐ山のりも高ねにいたらさらめや
寶池庵(智周)うせ給し時彌陀の名號をかしらに置て
なれ〱て頼もしかりし後の世を聞すは別れなほいかにせむ
むつましと思ひしのみかみち〱の覺のはゝと頼み來し身を

朝露の夕もまたぬことくさに思ひいてゝもぬるゝ袖かな
身のうへも世の浮ふしのなくさめも又誰にかとせん方そなき
たくひなき哀をかけしこゝろをや木草につけて形見とも見ん
伏ておもひ起て願ひしさとりをも花の臺に今開くらむ

自然齋此花を愛せし事を思ひて

染置し心の色をかたみとて見るも露けき山ふきのはな

宗祐法師忌日六字名號を上におきて讀し中に

なき影と思ひもいれしいける世に大覺位にもいたらさりきや

正能か母身まかりし時よみて遣しける

命をもかけとゝむやとなれしさへくやしきまてにうき別れ哉

看病せしことをおもひしなり。

返し　　　　正　能

限りある命はいはし深かりし人のなさけを思ひ出にして

藤原長正母身まかりしに名號の六字を詠せし和歌

なそへなく思ふ別を行しかも見る世に我身めくり逢けん
むろの海やまよふとみるもたゝしはし浮世の浪にまよふ舟人
在明の空をうしとも今や思ふかきくらしつる心まよひに
磨き置し心やゝかてわしの山みそなはしける玉と見ゆらん
武隈や別れしかけにまつことのいつとしもなき道や悲しき
深く思ひ常に願ひし法の道しるし有きといまや嬉しき

倍桂厚うせにし時桂久につかはす

言の葉の道にいくとせそなれ松さても後れし老のなみ哉

返し

〔歌闕〕

源賴豐世の亂の時なくなりきたくひなき名を留めしかは舍弟宗息かたへ申送侍ける

ことわりの涙なからもせき侘ぬ人にことなる人のわかれに

返し

哀そへてとふことわりも大かたの涙ならすに袖やしをるゝ

玄左長正入道いとけなく有しよりあひなれ侍き和歌に心さしふかく廿歳より内に歌數もいと多くよみて稀にも過たる作と見え上古の風にも通ふにやとおほえき十四歳にて歌合に羈中關を都いかにへたゝりぬらん音にのみ聞こし物を白河の關とよみて奇特なるやうに人々感し侍りし十八九の比にや讀置し歌を書つられて愚老か瓦礫にあはせて五十番に愚判加ふへきよし望みしかは彼あやにくにまかせ侍し前内府一覽有ておくに一首を加へなとし給ひし大方万の道に心をすまして哀深き物なりき思ひかけぬ事にあたりて世をはやくせしかは悲淚たゆるまもなく思はぬ夜半もなかりきある夜夢に見え侍りて是より後は夢にても見えこしと申と覺

えて夢中にも悲しひ思ひし覺てのち讀侍りし
さたかなる面影かなし夢にたに又はとはしといひしひと言
壺の石文の人懇か草庵に數年ありしにはかにわつらひてうせにしかはかなしひにたえす
起ふしになれし人ゆゑみちのくや名さへうらめしつほの石文
源頼次予之多年知音也。風雅之志至切。于茲去六月廿四日。洛中戰場而殞命矣。其頃彼發句に。
吹たひに風のあきたつ柳かな
哀慟之餘。帶彼句綴三首和歌。以欲慰愁腸耳。
吹たひに露そくたくる驕〳〵てさらぬわかれの袖のあき風
この比の風の秋たつ草も木も心染つるひとをこふらし
時しもあれはかなくもろき柳かな歸らぬ人に折まくもうし
平賴亮(豐前守)世の亂の時致命のよし傳聞て悲歎かきりなし
人からそをしくかなしき君をおきて又仕へしの道と見れ共
宗揚(太田近江入道)うせにしかは其息承英僧都につかはしける
おくるとていくほとならし老樂も心の友を歎かさらめや
返し
いくとせを君か心に馴來てか今もかはらぬ言の葉のするゐ
性纂正盛入道逝去之時壽量品を書寫しておくに書付侍し

九重の　宮古のうちに　はる秋を　おくりむかへて
とにかくに　心をのへし　身なりしを　むかしに越し
みたれ芦の　世の浪風に　たゝよひて　名をのみ聞し
津の國の　ゐなの渡りの　山さとに　葎のかとを
さしこめて　たよりとたのむ　木の下の　ふかきなさけに
かゝりつく　花の露をも　もろ共に　春の日暮し
もて遊ひ　月のもとにも　立なれて　秋のよひ〳〵
いねかてに　雪のあしたの　言の葉も　をりにつけつゝ
いひかはし　老のかたらひ　年つもり　十とてみつに
なりにしを　又世のみたれ　うちつゝき　思ひのほかに
へたゝりて　しかまに染る　あなかちに　旅のやとりに
身をかくし　有ときゝしも　かなしきに　とき〳〵通ふ
鳥のあと　つらねし歌も　百くさの　花は千しほに
染いたし　近きつてにも　みし中に　物よりことに
高さこの　をのへの花に　かねのこゑ　國つみかみの
うら風に　解るこほりの　あやをなし　筆なけつへく
おほえにき　程もへすして　春の夜の　はかなき夢と
消しこそ　世のとわりも　忘られて　驚きあへぬ
なみたのみ　麻の袂の　ひまもなく　すこしこゝろを
しつめては　後れける身そ　恥かしき　よはひのほとは

いにしへも　稀なる年に　越しかと　かゝる人やは
をしからぬ　何のうへにも　あさからす　植し草木の
花もみち　たゝへて廣き　山みつに　すます心も
そこひなく　有か中にも　しきしまの　やまと言葉を
もとゝして　心ののりの　みなもとも　いかはかりかは
深かりし　これを思へは　うは玉の　夢のわかれも
わしのやま　雲かくれけん　春の夜の月

道泉數十年心のへたてなく和歌の道に心さし淺からさりしをおもひかけぬ事にてなくなり侍し初七日に不動明王の文字を十首におきて讀侍し

七十の心の友に後れける老よひとひもうきゆふへ哉

むねにみち袖にあまりて涙さへおき處なき身を歎く哉

深く思ひおもく賴みし君か爲葉よりもかろくすてしいのちよ

問はぬ日もなくてなれにし人をしも長き別れに見る世成けり

動きなき心にかへるかたちをは思ひもとめし浮雲のそら

水江の浦島か子も歸る世はありてふものをいかに待みん

やとりつる此世の夢を花鳥の哀れすさひに送りこし身の

うつし植し庭の朝貌花よりもはかなき人のかた見とやせん

わきておもふ昔よ今よ夢うつゝともにはかなきすさひ成けり

上もなき御法もよそに尋ぬなよふかくいりにし言の葉の道

宗椿法師むなしく成ぬるよし聞侍し何事にも心ありし人にてあまた年よりあひしかは悲しみの涙いふはかりなし抑この人和歌の道に深くこゝろを入て源氏物語をかける事二十部に及へり世にたくひなき事と覺侍り其外和歌の草紙をさしおく事もなかりきにはかにわつらふことにてなく成はへる其きはまて彼ものかたりを書けるか朝かほの卷にいたりて失にしよし聞しかは思ひつゝけ侍り

筆にそめ心にかけし契りとや折しも消し露の朝顏

禎洋(入江駿河入道)數十年相しりてをり〳〵風雅の席に會せし人なり病重くありし時とむらひまかりたりしに團扇をたひたりしか程なく失にしかはおもひつゝけ侍り

形見とも思ひやはせし程もへす秋のあふきの色そ悲しき

玉翁日珠(池田若狹守九十歳)うせ侍し後讀經をきゝて

賴もしな百とせへたる翁さひ御法の花の陰に住らん

源賴豐若年より勇者の名人にしられし人となん風雅の道にも心さし深かりき予多年相なれ侍りてこゝろを殘さすかれも深くあひおもひしをおくれ侍りて殘命かひなく愁歎かきりなし

思はすもおくれし人に琴の緒をたつはかりなる歎をそせし

暁述懐
おそくとき鳥のねよりも暁の老のねさめそ時もかはらぬ
月前述懐
たちかへる此身なりせはめてきつる月の都や世々の古郷
寄月述懐
なくさむる光りにそすむ世のうさをいかて知らん秋の夜の月
寄木述懐
植人のためにたにたてすいたつらに年を古木の身をは思はし
寄世述懐
世のうさも思ひ絶にきなほさりの昔や人もくるしかりけん
獨述懐
おろかなる我とひとしき友もやはあらしのかりほ思ひわふ共
老述懐
老ぬれは宿もわか身もおのつから浮世のほかにすむ心かな
世のうさも人のつらさも思はねは老の末こそのとかなりけれ
住吉の社にておなしこゝろを
さらて又何をおもはん住吉の松にそなれて年のおいぬる
述懐言義
世の中を露もかけすは思ふ事心深しと見えんさへうし
述懐依人
世は春の和歌の浦風しつみこし末葉あらはせ波のした草

自然齋追忌に經文歌よみし時懷舊
うちかへし老すはけふにとはかりもひまこそなけれ袖の白玉
尊義法師身まかりしに父の追善し經文の歌懷舊に
覺あへぬ夢路はるけん方もなし心のやみもおなし亂れに
自然齋十三回忌に宗碩すゝめ侍し寄衣懷舊
年ふれとたにしてかへさん道もなし浮身におほふ墨染の袖
宗切寺井伯耆入道追善に經文の歌宗長法師進め
し懷舊に
つれなくもおくれきにける老の友いつれはあれとうき別かな
思往事
呉竹の世々のふる事かきつめておもひくらせはほらふ秋風
法華經序品
待えたる御法の花にわしの山世々の匂ひをそふる閑庭
序品旃檀香風悦可衆心
世にひろく匂ひ出にけり限なく深き御法の花のはる風
壽量品
誰かしる鷲の高根の秋の月光すみこし世々のうらみを
壽量品常住此説法
峰にこひ色にしたはゝわしの山たえぬ御法を心ならめや
自然齋七年忌に法華廿八品の歌宗長法師すゝめし
に囑累品を

久かたの光をしまぬ秋の月よもの草木の露ものこらし
妙音品百千天樂不鼓自鳴
此世にて聞たにあるをおのつから雲井にひゝく絲竹の聲
妙莊嚴王品
天の原秋のけしきを匂ひにてのほれはすめる山のはの月
勸發品
遲さくらくれぬと思ひし世を春の匂ひに返す峯のまつ風
寄月中道
思へ人世のとくさの色も香も光りにこもるなかそらの月
箕面山にて釋教水
かきりなき法の水上尋ぬれはひとへにたかきたきつ白波
播州室の念佛寺にて
むろの海の釣する舟のうへまてもあまねく照す光りをやみん
社頭月
岩戸出し光りもあれと五十鈴川ふりさけ見れは秋の夜の月
社頭松
君を守る契もかくや岩淸水たねし有ける神かきの松
住よしにておなし心を
かしこしな松も神代の秋の風心にやとしそてにうけつる
社頭祝
君か代の千とせを誰かかけさらん春日の山のまつのとの葉

傳へきや神代君か代へたてなき風の姿をすみよしの松
社頭祝言
男山あふきてを見よ天か下風を治めしいは(嵐イ)のまつか枝
色かへぬ色もそふらし住のえや時世をまつのことの葉の道
守りこし昔か千とせの影ならし松のを山のよゝの神かき
神祇
あふき見よ誰との葉も世にひろく光りを分ん玉つしま山
思ふへし天地となり月と日のはかりかたきを神といふなり
播州古曾部の天滿宮は多年信仰渇仰の心さし也彼月次會に參るへきよし申侍しを雨いたくふりていかゝと覺し朝すこしの晴間に詣て侍りしかは又やかて雨ふりて歸路には晴つゝ奇特のやうにありしを感情のあまりに詠て奉りし
かきくらす雨の晴間に我たのむ神のしるしをあふき見し哉
寄月祝民
おのつから月をや宿す民の戸もさし忘れぬる君か世の秋
寄道祝
ちはやふる神代人の世一すちに道やすくなる心とを見ん
寄獸祝
のとかなる野飼の牛のけしき哉桃さきつゝく春のはやしに
中院黄門の息少年にして題を出されし五首の中に

春祝

百敷やたくひなき（名たかきイ）名をあかた召にとるへき筆の跡も見えにき

祝

ちりひちの大和との葉つもりては峯に八雲の幾重をか見ん

〔右春夢草以圖書寮本校合〕

續群書類從卷第四百八十九

連歌部十九

壁草上

春連歌

わかれしかたにけふもかすめる
天地となりていく春たちぬらん
わひぬる身にも年はこえけり
玉をみかく春のみきりのいかならん
舟よするきしのねしろの柳陰
こほりうちとけあらふ岩なみ
うくひすつたふくれ竹のかけ
水こほる岩のかけひも春はきて
あらたまる年のかへる古郷
よし野山かすみて又やさえぬらん
こそをことしの春も物うし
霞にものこりてさむき山ふかみ
雪よりいつる鳥の一こゑ
山もとのかすみの朝けおくさえて
やかてきゆへきかすみとや見ん
山のはゝ去年の名こりの猶さえて
あさ夕のかすみの衣なれ／＼て
とをさかり行こそのさむけさ
木すゑを山の庭のうくひす
春もあはれになら山のかけ
玉すたれあくる夜をとめ霞きて
朝かすみのもりもいほやいてゝ見ん
ゑしまか磯は舟出わすれし
よる波に松の葉かすむ朝ほらけ

志賀の浦に春はのこれり
遠ざかるあとはなきさの朝かすみ
浪こそ見えねいつちよすらむ
はる〳〵となきたる興つ朝かすみ
あたし心はさもあらはあれ
あけほのや霞にたてる末の松
こすゑみならす花櫻風吹て
きえぬ日もなき雪のみよし野
その山しなの石はしる水
春風のをとはの峯に雪消て
うつみ火も猶きえやらぬ老のとこ
はるさへとつるまとのしらゆき
みちしるへせよ谷のうくひす
あとうつむ雪に岩ふむ春さえて
さやかにも見るへき花に雲かすみ
あさ日いさよふはるのとを山
雪ま見えそめ日かけさす比
わか草をさそふうくひす今朝鳴て
先とへかしな春の山さと
うくひすも雪消はとやまたるらん
身をいさめけり夢の春風

うくひすにぬる夜の床をおきそめて
花にさそはれくるもはかなし
うくひすの宿あくからす梅さきて
かたらひくらすうくひすのこゑ
ゆきやらぬ春の山さと梅さきて
立よるはかり宿いつるみち
むめかかや人のとかむるそてならん
身にしむ風にことやつてまし
梅かゝにぬしさたまらすあくかれて
なれきつる花もあたなる色見えて
うつらぬもなく梅にほふそて
吹つたふ家の風こそのとかなれ
のきはのむめににほふ宿のね
むら〳〵しけるみちのへの草
青柳にかけふむ人のあと見えて
春なから雪やかつちりこほるらん
おつるとも見ぬあをやきの露
くれなゐのやしほやにほひ梅の花
あゐよりもなを青柳のいと
をく露はらふ山かつのみち
春草にかきほの柳うちはへて

なを雨かすむ野へそはるけき
あをみ行木草に春の色わかて
　かすみのあしたうちそいてぬる
露けふる春野を遠み駒なへて
　草木ははるも秋もわくらん
もえいつる野はたゝひとつみどりにて
　うらなみふけて鴈かへるころ
かつそよくあしの若葉の春風に
　さくらになして風そにほへる
春の夜もひましろきこすの明ほのに
　たかさとまてもふかき梅か香
月やなを嵐のこゑにかすむらん
　春もなからの山風そふく
うらかすむ志賀の古郷月すみて
　霞のうちも松風そふく
鴈かへるうらはの月にさよふけて
　いつにしもしかし春そとあくかれて
おほろ月夜にまよふ鴈かね
　日をふるまゝにかへるふるさと
春雨にぬれ〳〵鴈のたひころも
　今はいつくの春ものこらし

友やみなひとつになりてかへるかり
　おもひたえよと雪やつもれる
春さむきこしのしら山かへるかり
　なかめこし春やむかしの空ならん
行かへるかりそしつのをたまき
　とふもかへるも花にいくゝれ
あふ人に春はさりあへす山こえて
　なをしつけさやはるの朝露
おきゐつゝおもふ花さくよるの雨
　うきをわするゝ春はきにけり
ちることにならふ花なとまたるらん
　いそくかきりもなとかつれなき
さかすやはあるへき花の日数へて
　まつらん山のいほもはつかし
またきよりおもはゝとはん花咲て
　さくらそわかぬ峯のしら雲
青柳のかつらきしるく花咲て
　いるそら見えぬ春の夜の月
あつさ弓山のはことに花さきて
　松のひまにはくれ竹の色
鳥のなく春のはやしに花咲て

見れはさひしくけふりたつ也
一むらのはやしのしつ屋花咲て
よこ雲とともにあくる山のは
花や夜をほの〲さきてさそふらん
おしむともおもはて月や入ぬらん
見ぬは雲引花の春の夜
花のみやふるき都も又さかん
春はかはらすかすみたつ空
とを山さくらおりくるやたれ
九重の都の花になをあかて
いつれの山をたつねてかとふ
花にたれ都をゝきてうかるらん
古郷さひしすみやうかれん
たれもけふ花の山ちにたひ立て
野山のかきりたつねてそ行
花にけさ霞とともにたちそめて
こそのしほりの花やまつらん
山櫻また見ぬかたに遠くきぬ
しるしらぬあふ花のこのもと
山さくらさけは都をあくかれて
なか空にのみなされもそする

花さけは宿を心のあくかれて
たひに昨日の雨ははれけり
岩ねふむ山ちわするゝ花咲て
春やいたらぬかたもなからむ
石はしる瀧こそ花にうらみなれ
こまもなつむや山の下みち
岩ねふむ花にはあはす日は暮て
かさなる山は岩ねふむみち
花もしれいくしら雲に尋ぬらん
たよりもまれに遠き山こえ
尋わひぬよふこ鳥たに花になけ
かへらむさともはるかなるくれ
まよひ行山ちもしらす花にきて
宮こにかへる人をまつくれ
今日見つる花に山路をふみまよひ
山のかすみにやすらひそ行
一もとに日もくれぬへく花をみて
をとに聞つゝ見ぬもこそあれ
花にとふよしのゝ瀧のおくふかみ
松風にあかつきふかく日はさめて
花の心も山やすむらん

いひよらはやの心みたるな
誰となき木のもとすみの花をみて
かへりをくれぬさくらちるやま
見る人のなへてになさは花もうし
たのむゆへにそ身をもくるしむ
うつろはん色としる〳〵花を見て
むくらの宿にたへんものかは
春くれと花見にゆかん身はふりて
身をひたすらにうちやまかせん
世のうきも花見は忘はてつへし
きて見る山に草のかりいほ
世をいとふ心も花につきそめて
かりそめに見しをはしめのわか心
花ゆへ世をもいとふやまさと
いのちにのこすいりあひのかね
又や見ん老か世の花あすもまて
しのふともやはかへるいにしへ
あた人となりてもくらせ花の春
ありしにまさるかとの出いり
さく花のかけにかくれぬ袖もなし
うちまきれ行あらましの山

すくすへくたれかおもひし花さかり
あはすともよし先たつね見ん
身は花のさかりまつまもおほつかな
よしの丶さくら分いりて見よ
をそくとき花はいく木のいくさかり
ほのかなるたれにかあたの物おもひ
人をうくひす花になくこゑ
よそならぬ夢をも花にかこちきて
さくらかうへのてふのたはふれ
めに見えぬ神とてあたになすやたれ
おる人つらき花としらすや
こゑはのこれる野へのうくひす
かへるさにおりそへられぬ花もおし
夕の色はわかれさりけり
うすくこき花をいつれとたれおらん
ふかくはさのみなにをうらみん
おるもやは心なからぬ花のもと
心くらへにまけんとそする
とふまてとおりやらぬ花はちりつへし
あたなりとおもひなからもとしやへん
まれなる人も花にこそまて

いかにかはれるゆふへなるらん
かりそめもたれかめかるゝ花の色
しはしなるゝも友とならすや
わするなよあたのえなから花のもと
たのむもはかないとけなき人
わきてなをかたみや花もあたならん
霞たちつゝ日こそくれぬれ
鳥そなく花のいつくにかへるらん
あさな〱かすめる野へに打いてゝ
見れは宮こは花の雲井ち
かねを木のまの花の下道
山さくら軒はにたかき寺ふりて
とふともあはし世をすつる山
みねのいほ花のたよりは何ならん
やかて暮ゆく野へのはるけさ
木のもとをかへれは花にかねなりて
かすみもはてねたえのこる道
花はたゝ夢のうきはし明そめて
さと人はかへる野はらのかりまくら
花にさよふけ松風そ吹
うらみのあれはことのはもなし

つけさりし花に風ふく宿とひて
いまさらいはんことのはもなし
花さかりとはぬうらみは散を見よ(添)
あやなおほくのうらみをそさふ
ほともへす散世に花のさきそめて
たゝあさはかの夢の世の中
さけは花風も吹あへすうち散て
櫻はさけとのとかにもなし
花よなと風も吹あへすならふらん
鳥は音になく雪のかり人
さくら花ふきかふ風に駒とめて
はかなきはたゝ花のならひそ
うらみしよ櫻はかりやうつろはん
をそくとひてはいそくかへるさ
ふかゝらぬ心を花やちりてみん
ひたすら雪になれるくろかみ
やすらへははらふはかりに花散て
世中はなにかふりゆくとならぬ
昨日の花は庭のしらゆき
軒ちかき木間かくれに瀧おちて
庭に岩こす花のしらなみ

もとのみとりを庭の松かけ
ちる花はうつむも苔にはや朽て
庭にくちぬる木々のあはれさ
さくら花雪もしはしの名殘にて
門ふりはつるよもきふのおく
しはしこそ人もかけせし花散て
はかなきことをおもふもそうき
いかにせはちらしと花にあくかれて
うちたのみつる身こそあたなれ
ちらぬ間に又もとくれは花もなし
おもひなるれは松風もなし
花そうきいつかはちらぬ春も見ん
身をなくさむも心なりけり
よしやすめ花なき里はちるも見し
よそにほとへてたれもかへるさ
古郷は花やのこりてうらみまし
さひしきゆふへたつねんもいさ
音するも花ちりはてつたれならん
なにかおもひとなりてかなしき
花にたに嵐はきかし宮こ人
見すてし夢の跡そはかなき

おもかけは青葉の花の都人
くやしやたゝにすきしいにしへ
けふそきてみ山さくらの花の陰
見そめしよりも人そ戀しき
ひとりきてうつろふまての山さくら
うらみわひつゝ人そまたるゝ
雨にしも嵐ふきそふ花のもと
つらかりしをもさのみうらみし
一もとも嵐やのこす花ならん
うきにたへおもふそ思ふなさけなる
あらしの花にたれかへるらん
かくすそとおもふこそ世にはかなけれ
嵐の花にかすみはてめや
柴の庵花もうき世やいとふらん
かせもさそへとさくらちるかけ
なかきわかれと後にこそしれ
春の日のひかりもかなし花の跡
みやこも夢とおもひいる山
さくら花よしのゝおくや常ならん
おしむもよしや櫻散かけ
のこらしと春もや花に暮ぬらん

うらみしよさてこそ哀ふかからめ
ちらすはなにか花のはかなさ
霞のしたは露ものとけし
雨そゝく野へにぬれ〱蝶のねて
ゆきゝもかけにしけき青柳
つはめとふ春の川つら水すみて
いくむら柳うちなひくかけ
舟にけふ春の川つら行やらて
のきはにすかるさゝかにのいと
春雨のなこりさひしき露見えて
ひとりたゝなかめてさひし春の暮
あめのとかなる軒の玉水
しつけき宿に花おつる暮
ふるをともしのふの軒の春の雨
みなせの宮のはるの夕暮
霞にや秋のあはれもこもるらん
岩かねの苔に木たかき花盛
かたはらさひしはるの杉むら
春くれかゝる花のやまさと
さきにけりしつかつまなしそのゝ桃
むかしの庭の櫻散かけ

みち芝に菫つむ袖うちはへて
とはゝや人に松の下道
名もしらぬ春のむら草花咲て
あれ田のはらのあはれなるいろ
それとなくしけき春草花咲て
いもにこひわひ行やかへらん
すみあらすかきねは野への春のくれ
なれこしかたをおもへうくひす
野へちかき家ゐに春をあまたへて
衣手に花の雪ちるかけ分て
かたのゝみのゝかすむ日くらし
夕のかねにかすむ柴の戸
哀にも春のにし日のさしすてゝ
花の山路にあくかるゝころ
春もうき古郷人や老ならん
いほりのたく火花にくもるな
春ふかき夕やみかけてかへる野に
花の山吹かふ風のうちかほり
かすみのあしたこまいはふこゑ
鳥もきてやは花にさはらん
春をへて鷹のすみかの岩たかみ

あけほのしるく山のゝとけさ
一こゑに春をふくめる鳥なきて
宮ことりてふそれもむつまし
山ふかき花にうくひすかへりきて
春は行ともきしのやまふき
かはつなく池の水かけそこ見えて
松にや藤のさきのこるらん
きしめくる春の住の江舟見えて
ほとゝきすそれならぬかと鳴すてゝ
木するゑの藤のたそかれの色
みよしのゝ吉のゝおくの花にきて
春をくらせはきしの藤なみ
岩まより河きしこゆる春の水
さきてえたにもあまる山吹
いはぬなこりも文に見えけり
山吹を春もくれぬと折そへて
名こりを花にいふもはかなし
こさせしと春をやおもふかきつはた
いつくにゆかんみねは松風
かへるみち春もまよへとちる花に
ちりはてし花とおもへは又落て
み山の水の春のくれかた
花より後も松風そふく
あさちふにいとゝ古郷春くれて
なみたやおとすうくひすのこゑ
二たひととしにあひ見ぬ春くれて

夏連歌

いとくりたむる瀧のしら波
すゝしくもたれをりいてん夏衣
衣にうすしあらしふく空
けふもなをのこる花散夏はきて
木ふかきおくに人かけそする
夏山のみとりに花やのこるらん
うつろひし梢を跡の雨かけに
しけるや花の青葉なるらん
山の木草は名をしるもなし
ひとりとや世を卯の花の咲ぬらん
ふりてもたへぬをくるまのみち
かさす日に神もいく代かあふひ草
あとよりふれる風のむら雨
ほとゝきす花もちりあへすはや鳴て
まちていく夜と月もつたへよ

つれなきもたれにうらみんほとゝきす
　しのふ夕の雲風の空
ほとゝきすこの雨にたに音もせて
　一むら雲のかへるさのそら
ほとゝきすさそひすてつる雨もおし
　山のあなたに雨そはれ行
ほとゝきすなきてくるやのそらたのめ
　あはれをよそのことゝおもふな
たかためにに空もくもらんほとゝきす
　夢ともさすかわかぬ雨かけ
ほとゝきすさたかならぬと聞し夜に
　ゆく袖もありまつそてもあり
きゝきかす雲ゐる山のほとゝきす
　おもひやいつる今のをとつれ
ほとゝきすをのかときはの山こえて
　夢となせとやをとつれもせぬ
それかとも又きかはこそほとゝきす
　なにの身にてかかくしのふらん
おもふことうちもなかなんほとゝきす
　のとけき雨をひとりきかめや
郭公おもふよひゐの友もかな

なくさめてほとふるのみは何ならす
　なかてや雨もやまほとゝきす
うちまとろむもみしか夜の夢
ほとゝきすおもひたえさせとふもらし
　かたれはやかてまとろみそする
おもはぬをなれもうらみよほとゝきす
　ことはりかほにうちかこつこゑ
時鳥しのふの山にたへわひて
　見る人やたれのきのたちはな
ほとゝきすなきつる月を雲まにて
　又うき雲の雨なさそひそ
ほとゝきすねたるこゑするやまさとに
　ふくるまてねぬこゑきくも猶あやし
いかなる夜半そなくほとゝきす
　うきあつま路そ行空もなき
ほとゝきすおいそのもりに聞すてゝ
　夏の夜はたゝ時のまのほとなれや
なけは雲引やまほとゝきす
　後も又つれなきこそはたのみなれ
月もあり明の山ほとゝきす
　雲はたひなる山路ともなし

かへるにはしかしもいつこほとゝきす
いつかとまつは暮ことの空
ほとゝきすあやめ引日もはや過て
一夜の宿もなこりこそあれ
かたしきの袂にかほるあやめ草
けさはたか軒のたちはなかほるらん
ふきてあやめもわかぬいへ〳〵
花たちはなに入やかへらん
しけれなをむかしを宿のしのふ草
おもかけは昨日の花にほとゝきす
むかしおほゆる軒のたちはな
水ふかくなるやなからのはしはしら
あしのすゑ葉のさみたれの比
よしのゝ宮はふりて久しも
五月雨のたきつ河うちかきくらし
たれ一こゑと待ほとゝきす
みゝなるゝみ山のたきつ五月雨に
かきたえつゐにわひやくらさん
五月雨はいつくのつてもほとをへて
ひまもる露のかへはくちにき
玉すたれ軒のしのふのさみたれに

ひとつゝならふ家ゐの數見えて
夕かほなれりそのゝくれ竹
ふけてこそ吹くる風もすゝしけれ
月にのこれるよゐの蚊遣火
たちこそかへれ門のやすらひ
かやり火のしめるほとまつ夕すゝみ
を舟さしこすほとそやすらふ
うかひ火やよるの高瀬に更ぬらん
暮にけりたかへて門やたゝくらん
山水とをしくゐなゝくいほ
くろゝと見れはあくるみしか夜
夏かりのあし火ほのかにもえそめて
夢とたにいひあへぬまの衣〳〵に
夏の夜はかりなにかはかなき
うすきころもの夏の夜の月
雲はみなへたてなくてや晴ぬらん
はてはそてからくれなゐになりつへし
あさ夕露をなてしこのかけ
又むら雨の露のすゝしさ
ほのうすき峰のは山の夕日かけ
夕たちにてる日やあつく成ぬらん

又うちしきりせみのなくこゑ
　雲にわかれて月のこるそら
清見かた岩なみしらむ夏の夜に
　とりあへぬまて明やすきころ
ほたるとふ宿は中川又やねん
　岩かねをあるかなきかのとなりにて
かすかなる火はほたるなりけり
　はなれこしまにあし火たくかけ
とふほたる行かたもなくさよふけて
　庭すさましくなりやはてまし
このころの夏をせきやる水すみて
　くるやこすやの暮ことのそら
山かけに秋をおほゆる水せきて
　琴のひゝきもさむき夕くれ
夏の日のかたふくなかれ岩こえて
　のほれはたかき山こえのみち
袖すゝし岩の下行水のをと
　むす苔ふかし山の井の水
涼しさは桐の若葉の木の本に
　山のかけ野は秋風そふく
ひくらしにかけとめらるゝゆふすゝみ
　竹はちひろに夏ふかきかけ
よひ〳〵のうたゝねすゝし窓のまへ
　水にめくれる池のすゝしさ
かけにほふ荷のうき葉の夜はの月
　てる日にもなを池のすゝしさ
はちすはに露は玉こえ雨すきて
　立とまるへき風そすゝしき
手にならす扇ににほふうすけふり
　きけは都そとをさかり行
夕たちになをなるかみのをとは山
　なをあめつちをてらす日のかけ
中〳〵の夕たちすきてあつき野に
　なかむれは水うみわたる舟の上
夕たちすらしけしきすゝしき
　おりはへ水にみそきするころ
夏ころも日も良うすく暮そめて
　をとも秋なる水のしら波
夏衣ほすともいつか河やしろ
　はやくも今そ袖のすゝしさ
行水の岩きる瀬々に御秡して

秋連歌

たれかはとはんをのゝかたはら
けふそふく生田の杜の秋の風
色にはわかぬ庭のなつ草
このねぬる朝け露けみ秋はきて
心にうかひ秋はきにけり
なみたもやおちてなへての露ならん
又音つるゝ荻のうは風
露けきに秋くるよひはしる物を
かよふ舟ちもさそとこそしれ
なかめつる夕かせすゝしあまの川
めつらしく月の影にやむかふらん
こよひふたつのほしのかたらひ
一夜をあかす床のはかなさ
又いつか天のかはらのわたし舟
雲まもりくる月の夕かけ
ちきりてや荻にほのめく風のをと
すみふるす宿をも秋は尋きて
わか軒はをや荻のうはかせ
またよゐに雲かくれせし秋の月
むらさめいつち荻のうはかせ
はつ秋よりも夜こそなかけれ

荻のをといまはたさむくまとろまて
秋の風ふもとのいな葉吹こして
かりほのほかもにほふむら萩
秋をはしめと身になおもひそ
さひしさはもとあらの萩の古郷に
ひとりなかむる秋のあはれさ
涙もや下葉色つくはきの露
物ことに露をく色は哀にて
ちらはこはきのした葉のみかは
袖にうちゝる夕霜のいろ
小萩はらうつろふ下葉もろき野に
たちそいてぬる秋風のころ
さをしかのこもるしけ山くるゝ野に
かよへるみちの草のたえ／＼
さを鹿のかたをりかくる跡見えて
秋は八重たつ霧のさひしさ
鹿のねはまかきもわかぬをのゝさと
あり明の月に山風のこゑ
を鹿なくおのへもきけは枕にて
山のかけすみかの秋は人もこて
岩ふみならすさをしかのこゑ

うき秋をなくさめかぬる折からに
なれも鹿とやわひてなくらん
雨すくる野への〻をちこち色付て
かきね暇なくその〻露けさ
おもひ入深山をろしよ物かなし
雲行木する日くらしそなく
風そよく野ちのかやはら暮初て
むしの音いつれみたれあふころ
霧ふかきの〻花のいろ〳〵
虫のねもわかぬ闇夜をこめて
ねふりさめたる露のたまくら
ともし火はまた〻くかへのきり〳〵す
ひとりやねなん月ほそき空
むしのねもよはる嵐をかたしきて
こはきかもとに風かよふくれ
古郷はむしのねにさへ袖ぬれて
山した道の露のさひしさ
むしのねにさそはれくれは草の庵
草かきにあさかほの間の秋をへて
はかなや名のみ松むしのころ
あたなるを心ひとつになくさみて

草の庵のあさかほの露
露よりあたの心なりけり
門かほにまかきかこは世住やたれ
おとろきあへぬ露のことはり
あさかほはさくといふへき花ならて
露としるとも身をおしめた〻
朝かほの花もさかりはある世にて
竹のかす〳〵まとそさひしき
あさかほはかれし夕かけ露見えて
露けさもうちぬる人はおもはめや
月をまくらの花の秋の野
いかなる花そのこる秋草
萩す〻きさかぬも見えぬひとさかり
心をつくすあけほの〻あき
うす霧の花の色〳〵わかぬ野に
けにまもれるやこのおとこ山
よそにのみ見つ〻過うき女郎花
たれに見よとかさけるなてしこ
ひとりある宿の夕かけ露をきて
おもひつくさぬ古郷のあき
露よりや身のうきことはしけからん

ふるはかりなるむら雨の空
さゝの葉のみ山の露に風たちて
住あらす軒のいたまの秋風に
露は空よりふる雨のこと
うしとても身をこそしらめ秋の暮
よそにやは見ん露のはかなさ
月におりしく露のした萩
霧のぼる山さとさむみこまとめて
雨にもまさり露そみたるゝ
朝霧の身のしろ衣しほれきて
まよひつる遠かた人に霜きえて
ほすとも見えすそての秋きり
こはきに見れは露をふく風
さをしかのあさたつあたり霧はれて
いくたひとなき鳴のはねをと
はれくもる霧に水行野は暮て
月を見へくはこゝをすきしな
行舟もをしまか磯の霧はれて
あはれ見はやのをしま松しま
夕なみに月まつ苫や霧ふりて
かせのをとに秋をしらるゝ松ふりて

うらなみさひし高砂の月
心つくしのあちきなの世や
すみのほる空より月は木まにて
いり日の雲そ行ゑしられぬ
空とをみ山のはのほる月すみて
しはしまたする心しらはや
山のはゝいつへき月にくれそめて
人につれなき人もやはなき
山のはにまたると月をうらむなよ
めくる日はいかなるかたをてらすらん
月にくまなき夜はの大そら
名ものこる志賀の古郷尋きて
見れははるかに月ひとりすむ
又きてせはきやとりとそなる
影みてるひろさは池の月の秋
ふりぬるうへも又のそみあり
今夜のみ名は秋の月いかに見ん
よな〳〵風におちはすゝころ
山さとも木のまのほかに月ふけて
ゆへありかほにいつるよの中
うき秋の雲まを月のかき分て

秋きぬとしれはいたらぬ方もなし
月やね覺のこゝろなるらむ
山ふかく入のみはいとふ世ならめや
月よいかなるこゝろなるらむ
すゝふく風そ野へにはけしき
こよひたれ月の手枕夢も見ん
夏さむきほとはしられてふくる夜に
月はしろたへ荻はうはかせ
いまや宮こも秋ふくるそら
なかむれは月のうちさへ物さひし
行人もなき道のへのあき
我かけにともなひつゝも月を見て
見はてぬこゝろ後もうらむな
ふけゆかは月やくもるとかへる夜に
うちなかむるもあちきなの世や
ふくるまて身のうき月をいみかねて
すめる心そわか友となる
ふくるまてさひしからすは月も見し
さひしきにこそ心すみけれ
またれつる友さへ月にわすられて
えそしらぬ又やこさらん新まくら

ふしみの月のあり明のころ
松虫のねになくとえやはとはれまし
さとゝをきのゝ月ふくるころ
霧たちまよふ山はあけほの
ゆく心月のいつくにわかるらん
秋はたゝかきりもしらす長夜に
山のはつらし月の行すゑ
花に分いりまよふ秋のゝ
むしの音に月も山のはわするらん
われにそかはるこゝろしらるゝ
月をたにめてしいまはの老やたれ
露ふく風にあるゝふるさと
軒はもる月こそ昔しのふ草
古郷をいてゝや見まし露のくれ
しのふの軒は月もやはもる
玉をみかけるいにしへのあと
あさちふの秋のしら露月すみて
秋の夜ふくるあさちふの宿
露ことにかけする月をひとり見て
あきのおもひそなくはかりなる
ことゝへとこたへぬ月をひとり見て

舟よはふむかひに人は見えやらて
あまひこかとそ月にこたふる
ふたりともあらはせめてのかり枕
月は物いひかはす空かは
それとなく物おもひぬる秋の空
とりあつめてや月にかなしき
とひ行鷺の色はきえけり
むは玉の夜からすしるく月すみて
萩ふく風よ軒なあらしそ
露霜に月のなこりやつらからん
たれ露はらふ跡としも見す
月のいる山まてはいつたつぬらん
むしのねいつれやとの秋風
ふけてたれ月の名殘をこたふらん
秋もすゑの〻露のさひしさ
松むしのこゑかれ月もほそき夜に
ねさめせしま〻長夜のそら
月や身のうきをもしらせそめつらん
岩こす水のすさましきかけ
夜わたるや月も宇治河秋のくれ
山たちのほる月のさやけさ

あふ坂やむかふる駒のをとはして
露にむもる〻を田のかり庵
月にかく鴫のはねをと數ふけて
秋風さむき夕くれのそら
かへる野の袖に澤たつ鴫なきて
いくさと人の夢にすくらん
このねぬる朝けよふかしかりのこゑ
秋風はたかなかめより過ぬらん
わかやとのうへに雁なきて行
さそはれ月にふくる夜の空
をくりかねたる古郷の秋
雲行ていくほともなく霧はきぬ
哀にもつらにをくれぬかり鳴て
つらき世をしもなにしたふらん
なきてくる雁もはかなし秋の空
すみのほる月もいそけ山のは
はつ雁や嵐にふけてきこえこん
あさち風ふく秋は來にけり
さむくなる峰のしら雲雁なきて
たもと吹まく嶺の秋風
さ夜ころもよさむの月に雁なきて

賤上かかる霜のわさ田のいかならん
あさ霧さむしかりわたるそら
なにをかたより谷の戸の秋
落瀧つ岩にはふつた色付て
舟さして見れはすさましはなれ島
つたはふ岩にたかきしら波
こすゑは秋の風さはくやと
軒ちかき松にはふ葛いろ付て
おく山すみの秋のはつ風
まくすはふ岩かき水に露落て
物おもへとの袖の秋風
花すゝきまねくに人の行やらて
露をきそむる野への さひしさ
むらすゝき風もゆふへはほのかにて
なひくも霧のいくゑならすや
露しろきまかきの花のむら薄
野は露けしやいつくにかねん
まくらせはちらまくおしき花すゝき
月は雲まにほのかなるくれ
花すゝきむら雨なひく跡見えて
たおりもつ花の秋草打かほり

野の宮人の露わくる比
むかしかたりの秋はいくたひ
色草をのゝ宮人のかたみにて
むら〳〵に雲行空のかりのこゑ
かせに野分の雨かけそたつ
岩木なりともなひかさらめや
吹いつるをとは野分の草のはら
花むら〳〵の秋草のはら
朝ことの露のさかりに野分して
おもかけさへもおとろへてにす
ひとめ見し秋の花みな野分して
月は見る〳〵すみのほる山
野分せし雲はむら〳〵あはれにて
たかうへも秋のうさこそしられけれ
野分にあるゝ閨の月かけ
月見てや宿のつらさも忘まし
あめ露あらすねやのひま〳〵
木のもとさひし雨のふるころ
里はあれて桐のはもろきくれとに
たゝおりふしにかはる夕くれ
色もなきうらはの秋といかゝ見ん

やとるにぬれぬ袖の月かは
もしほくむうらはの海士も秋のくれ
あり明はみやらるゝほとかけ遠み
はまなのはしの秋の朝しほ
紅葉をかさす人もこそあれ
月しろき山路の菊を折はへて
いなんかたなくたのむ古郷
尋ぬとて夕のほかの秋や見ん
こゝやかしこにうつらなくこゑ
住ふるすさとはゆふへの秋の風
むかしもかくはたれうからまし
秋はたゝ古郷人のゆふへにて
いにしへをしのふにいとゝ露けくて
おいぬるはかり秋はたれうき
うきなくさめの月もはかなし
住かたき世にしも秋あをまたへて
あきのまくらをたれさたむらん
露は身もうきぬはかりのうたゝねに
荻ふく風になをむしのこゑ
たかね覺露をかこたぬ夜はならん
いつかわか身のことをしらまし

かきりなくね覺のみして長夜に
くりかへしてやかたりあかさん
秋の夜はおもふことさへつきぬへし
あかつきさむみ露なしくれそ
まはらなるいたやのね覺秋ふけて
あくるまのかきりもしらす月すみて
かねそをとする秋の夜のそら
月見れはおりにふれたる色ありて
たれしろたへのころもうつらん
うちむかはれす山風のくれ
白妙の月にきぬたを巻すてゝ
露より霜にしろき月かけ
衣うつきぬたにいたくさ夜ふけて
かりねの秋の山のさむけさ
衣うつ月のふもとやふけぬらん
月を見る夜や人にかはれる
うちたゆむきぬたのうへの松の風
いてゝいく夜の秋のかりふし
もりそめしはつほのわさ田霜さむみ
ね覺する夜のさをしかのこゑ
月にもるいな葉の風をまくらにて

をかへの松の月のうきくも
わさ田もろあし火の煙たてそへて
　くれぬれは妻とふ鹿のあくかれて
色こきわさ田かる人もまて
　月をそき夜のひとりねはうし
いなつまのかけたにたゆる秋ふけて
　嵐のみ吹やときけは鴈なきて
尾上の松もあきはふけゝり
　吳竹の夜わたる月にめは覺て
かけひの水も秋は深けり
　契しまゝの月のよな〳〵
あはれにも天のかつらの秋ふけて
　むすへはにほふ菊の下水
朝ことのはつ霜さむく秋ふけて
　ところ〳〵のを田をもるころ
山さとは霜をく月に秋ふけて
　むら〳〵にをく野への露けき
朝霧にはつ霜ましり秋更て
　いつくの月にうかれいつへき
おくふかきみねにいさよふ秋の雲
　露のたよりもなき戀やうき

さをしかのつまとふ野山草かれて
　虫のねもかれ〳〵になる床さひて
霜をうつらの野への夕くれ
　たのむかけそと松もあはれめ
むしのこゑよるかたなけに草かれて
　なくきり〳〵すちかきあしかき
野への色あさ夕かけに枯そめて
　のこるも見るももろきもみちは
あらかりし風のあしたの秋の庭
　霜にあとなき鴫の草くき
ちりにけり霧に風ふくはしもみち
　むら竹の露や葉分にこもるらん
はやしになにそかた枝色こき
　ふらぬまもくもりはてぬる秋の雨
それかあらぬかはつかりのこゑ
　あさ霧のこすゑや何のうす紅葉
眞木の葉さひし色かはる山
　暮ことの雲のはたてになかめして
にしきをゝれるあきの山のは
　舟とむる入江の山に鹿鳴て
浪や夕日のそむるもみちは

月まつかたの山そしくるゝ
里つゝくをとはの梢色付て
おくはしけみの秋の山もと
紅葉するいらかはたれかすみぬらん
ひくらしのこゑもさひしき山さとに
木葉色付霧わたるそら
めてしいまはのよな〳〵の月
むら雲に時雨ぬまなく秋ふけて
まくす吹まく野への夕風
色見えぬ松にしくるゝ秋深て
夕日にかゝるをちかたの雲
月をまつ時雨とや見ん秋の空
露は木の葉の行末の色
しくるへき山路の夕鹿なきて
みなもみちする夕くれの山
鹿の音にいつく時雨ぬ嶺ならん
すみてを見はや秋の古寺
をしかなくおのへの松の下紅葉
山とをくかへるかりはのちり〳〵に
かさすえたのみのこるもみちは
庭もまきたつくれのさひしさ

いつちりて紅葉も風のつてならん
またれにけりな去年のはつ雁
わすれめや菊の花さく秋の空
關のはら屋の今朝の旅人
おもひやれあらしの風の秋のくれ
ねさめもいく夜かゝるあかつき
たまくらにをかぬ露なく秋くれて
あけすくるまて月をなかめん
くれの秋草木の露をたもとにて
くちのこりつゝ見ゆる川はし
水上のあらしの紅葉秋くれて
かせにまかする興つしら波
龍田山みねの木葉に秋くれて

冬連歌

人けまれなりふる宮の庭
神はみなたひたつ山に冬のきて
宮井しつかに夜こそ更ぬれ
神無月時雨はかりのをとはして
うつろひはてぬ草木のみかは
神無月ふるき都はなをさひし
さそないつくも風さゆるをと

かきくもり都も冬のみ空にて
　雪けになれは千とりなくこゑ
古郷のさほのかはらのうちしくれ
　あふ人いかにうつの山こえ
はれままつをかへの里の夕時雨
　かつきゆるみねのあは雪打ちりて
あさ日しくるゝ山のさむけさ
　たちもよれふもとにむすふ草の庵
ぬれて時雨に行人やたれ
　月のかけおのへの雲をこえ初て
あらしそ松にひとりしくるゝ
　さ夜ふけはてぬかす宿もたれ
しくるへき月ともしらす遠くきて
　ふることかたる秋のたまくら
ひとりのみなかきをあかすさ夜時雨
　秋風はみねの松にやかへるらん
なみたの時雨行かたもかな
　行水さむくあらしふく山
霜をかぬ岩のはさまも草かれて
　風にふけゆく冬の夜の月
柴の戸は木葉そたゝく山の陰

　山の木かけの雨きほふころ
紅葉ちる嵐に人もたちまよひ
　河風は波のゆくゑに聞すてゝ
みきはあはれにくつるもみちは
　山にまたあるかとゝへは人もなし
木の葉も舟も河風のをと
　としくれぬとや雪ふれる山
をとあらましき水のしらなみ
　しくるやと見れは岩こす木葉にて
木からしにのこりてさひし峯の松
　石はしる水のあは雪はるゝ日に
冬草あをしみ山ちのあと
　めのまへに朽しは風の下紅葉
みきりの池はのこる冬草
　色なる露や秋のおもかけ
花すゝきたか袖となく野はかれて
　ゆく水さむくあらし吹山
霜をかぬ岩のはさまも草かれて
　月はあり明のなをほそきそら
霜かれのかた糸すゝき風吹て
　はしは霜ふり水そこほれる

を篠はら爪木の道に冬かれて
わかるゝ鴈のをちこちのこゑ
霜かれのあしはらさむみ舟見えて
月にふけ霜にさ山の嵐哉
野はさゝかしけ水こほる比
なかれたえぬや水もさひしき
山川やうへはこほりてをとすらん
こりけなく水にはれけり今朝の雪
月のなこりはうすこほりせり
し水そのこるみちのかたはら
野は霜にこほらぬもなき此あした
ほそくのこれるうつみ火のもと
瀧の糸のこほらぬ音は猶さえて
いく明ほのそ霜さむき空
よるの鶴のなくや澤水氷とち
雪にくれ行駒のあしをと
はる〱と石ふむかはら氷とち
きけはそともの鴫のたつこゑ
水しろき門田や霜もこほるらん
ゆく水さゆる川つらのさと
下そよくあしの霜夜にめは覺て
かた山舟のよるのあら磯
みつとなき鹽つすかうら風さえて
さゝふく軒は木からしそふく
まくらまて霜をく月や更ぬらん
木葉かたしきひとりぬる山
岩かねのとこは月ふけ霜さえて
里遠みのこるともし火更やらて
霜や野寺のかねさそふらん
たえ〱見ゆる雲のかけはし
霜しろき夜はのかさゝきこゑ深て
いかなる（の脱歟）岩のはさまにかねん
なくをしらうは毛も水もこほる夜に
水すさましき山かけの道
さはきたつ鴨のむら鳥かす〱に
あそふもをしのあとのうき草
雪にけさにほのかよひち見えそめて
山風たえぬ海つらのくれ
むら千鳥雪ふりぬへくこゑさえて
水うすこほりみちもつゝかす
霜しろき朝河千とり跡見えて
舟ちにあらき波のよる〱、

うらつたふ一むら千鳥こゑすなり
　雲ゐる嶋や雨のこるらん
ぬれてなく夕なみ千鳥行かへり
　やすらふいそはあらきなみ風
立ゐやはなれたにやすき村千鳥
　生田の河のとりのさむけさ
冬にうき身をかきりとや侘ぬらん
　のとかなる空もほとなくさえかへり
あさ日はかりの冬の山さと
　とへかしな風もさえ行夕まくれ
竹の葉さひしあられふるやと
　柴たくすみかあるゝ山かけ
あられちり時雨せぬ日をいつかみん
　雲に嵐のをとそさえぬる
かつらきや時雨もあへす雪や見ん
　軒もる風のよはり行比
雨ませの雪やかつふりつもるらん
　山は雲にもましらさらめや
朝またき雪まつ庭の雨さえて
　跡もなき嵐の露の夕まくれ
おち葉そ名残けふのあは雪

　先一ふしやうちもかこたん
なよ竹の山おるはかりなるの雪
　たとるはかりにおもかはりせり
ふみなるゝ山ちに今朝は雪ふりて
　こ家かす／＼かきこもる見ゆ
かすかなる田中の雪の夕けふり
　とはれ〔ぬ歟〕に事にならふ山さと
誰となく雪のあしたやまたるらん
　木すゑをまつの柴のかりいほ
雪おれの松にとほその道たえて
　いり日の空はかせものこらす
雪つもる松におのへのかねさえて
　やとれはみねにきよきともし火
山さとの雪のあかつきかねなりて
　誰も春いそくやとしのくれならん
ふるさとのみは雪もつもらし
　あけすくるかくらの庭火消かてに
つもれる雪のおもしろの夜や
　夕しつけしまつ人やこん
ふりあれし雪にしはしのひま見えて
　のこる炭うる春のあさ市

ふりたえは又雪あらしさゆる夜に
　行かたなくは我をたにとへ
あと見えは心も友の宿の雪
　わかをこたりそ道にはかなき
心のみゆきつもる宿はたれしらん
　我おもふほとしも人はおもはめや
けさふる雪にたれをまたまし
　うらみはてめやつれもなき人
庭の雪とはれは今朝のあともおし
　道はあれともくる人はなし
うとくなる心に雪やつもるらん
　たれかはとはん山のしたみち
つま木とるあとさへたゆる今朝の雪
　夕になりぬいそくやまかけ
やすむまの爪木につもる雪を見て
　なさけこそたゝをも荷ともなれ
はらふへき雪を妻木のかへるさに
　松なりけりなけふるひとむら
わかさりし雪のあさけのはるゝ野に
　河かせにとけて水行あさ氷
雪むら〳〵の八はしのあと
　千鳥しはなく浪の月かけ
雪はたゝうへにうきたるあはち山
　入日かけかたふきかゝるおきつなみ
ふなはたしろき雪のつり人
　夕河や柴つみを舟さしくたし
はるかにしろき雪の宇治はし
　千鳥なきたつなみのさむけさ
舟よする雪の磯さきちかゝらし
　みきはにたてる袖のさむけさ
雪に人鶴の毛衣おりはへて
　山こすからす雲になくこゑ
はし鷹のすゑのはら野に日はくれて
　身をうち山のかけとおもはし
さえあかす嵐を床のあしろ守
　岩かねつたふ水のこゑ〳〵
月さむき橋に一村猿なきて
　春秋めてし山の木からし
いつはあれと冬こそ月はくまなけれ
　うつみ火にむかへは夜はゝしつまりて
のこりてかせや月にさゆらん
　みきりの松そ雪に木たかき

ひまもなくこほる池水月さえて
　夜ふけてをしの霜はらふこゑ
月やかめさむるたひにさえぬらん
　又ひとしきりあられふるなり
月見れは村雲かけてさゆる夜に
　くれ竹のふりそふ雪にかたふきて
月はにしなるまとのさむけさ
　舟わたす水のむかひに里見えて
ほたるはかりのたく火さひしも
　たちやすらへは猶さゆるそて
まとろみしうつみ火もきえ鐘なりて
　又あとさえて雪のふるころ
枕せし夜やうつみ火もふけぬらん
　あはれとけつる心ともなし
うつみ火に朝戸とちそふ雪を見て
　雪のあしたの人のをとつれ
小野山の炭につま木を折そへて
　かせふきさゆるあしかきのうち
冬こもるかた枝あはれに梅さきて
　ほとけの名にもなみたおちけり
ともし火の残すくなくとしこえて
　わかすみか雪もはらはす道もなし
としくれ春はいつくよりこん
　山やかすみのとなりなるらん
行としのみねの白雲つもりきて

旅連歌

ゆかは山遠きもはては有ぬへし
おもひたつこそみちはかたけれ
　道をおもはゝなくさみやせん
わかるとも心をそへよたひのそら
　おさふる袖もなみたおちけり
行人にといみしもやたへさらん
　いまはのきはゝおもひみたれぬ
わかれちにしのひしなみたさきたちて
　それとはかりにのこるふるさと
あとはわか山のはさへやわかさらん
　こなたかなたのあとのおもかけ
あしひきの山ちをとをみ今日こえて
　われにかきらしおしむわかれち
しるしらすあふ坂山をさかひにて
　わかれおしみし人の面かけ
名こりこそあふさか山の關ならめ

あひのる舟のはやきなみかせ
手向せし道をや神もをくるらん
舟にさはらぬをちのしらなみ
たひにとるぬさのしるしも今日見えて
けふとしなれは秋はいぬめり
嵐ふくもみちをぬさに旅立て
身をすてはてし人のかしこさ
もろともにうきにいかてと立わかれ
身にさむかれのなをかせの音
いかてけふ冬たつ日しも旅の空
たひたつはやかてかへるもうき物を
とをくはましてつてもやはきく
ゆくゑしらるゝおきつ舟みち
都さへうきに出たつたひの空
都やおもひこしち行人
たちわかれいかにくやしき旅ならん
とをきはまへにあるゝしらなみ
都いてゝこしちはいつくやすからん
かたるもきかすわかすみしかた
いかにしてむつましき名そ都鳥
うらやまし雲に行かふ春の鳥

かすみのいつこみやこなるらん
かすならはやも何のかひなし
古郷のこひしきに行鴈を見て
たひのなみたをたれにうれへん
ほとゝきす山こえわひぬまてしはし
花ちるあとのみねのしら雲
かすむなよ山こそこえしかたみなれ
ほとゝきす一こゑすくる雨おちて
雲はこすゑをうつむ山こえ
木の下みちに日こそくれぬれ
遠く行旅をや花にわするらん
しのふもちすり花の香そする
あさ霧の野をわけ衣露もひす
ほの〳〵あくる手枕の月
しく袖もうす花すゝき露おちて
きえて又をくゆふかほの露
まくらかるやとのかるかやふくる夜に
あへすもたひの袖の露けさ
あし火たく宿すゝろに月もうし
おもひをそふる秋のよな〳〵
夢にわれ見ゆらん物を草まくら

我もかりねの野へそかなしき
しるしらすむすひもかはす草枕
夢よ衣をかへしてや見ん
いとせめて都こひしき草まくら
草のまくらの秋はふけゝり
かり衣かへす夢ちにうつやたれ
ひとりに袖や遠く見ゆらん
袖にもかへす夢ちかさ夜衣
みやこの月にわれやかへらん
夢も身をさそひてさめぬ旅枕
旅衣なれにし月は有明に
夢はあらしのさ夜の中山
はかなしや野上の里のかり枕
いふきおろしをかたしきの夢
草のまくらに夢そ見えくる
たひねにも身はならふこそ哀なれ
よの中はみなかりそめとしる物を
たひねのみやははかなかるへき
草のいほりはまくらもそうき
かりの世と旅ねにさへやしらさらん
あくるもくらしをちの山もと

からすなく夜や旅人もさはくらん
駒かふ人のそては見えけり
ともし火にあくる夜いそくたひの宿
うくつらきしるへにつるゝ旅の郷
はかなの友やみねのしら雲
かへるへきかたこそなけれ旅の郷
ゆふへの雲にふみまよふ山
衣かさねよさむくなり行
日も袖もうすき夕のみねの雲
山かけはあけほのとをくふかき夜に
かねたにをくれおきまよふ郷
くれ竹や里のしるへになひくらん
岩木をしのくみ山ちのすゑ
かなたこなたに行旅そうき
み山ちも一すちならはまよはめや
郷の空にてなきそかなしき
しるへせし人もみ山にふみまよひ
身をつくさすはみちもやはえん
谷みねにふみまよひくれは跡ありて
ほと遠く絶にし友のめくりきて
山ふみまよひいつるたひ人

とへとも人のこたへせぬやま
こえくるやみねの嵐にむせふらん
なこりさむけきむら雨の露
霧のほる槇の葉しのき山こえて
おのへのかねをさそふゆふ霜
山ち行杉むらさむみ日は落て
行をわするゝ友とこそなれ
しるしらす岩ふむ山ちかたらひて
としにくるしき薪をそとる
身やよはる山ちやたかくなりぬらん
しら雲の上にはるけき山こえて
たゝ空のみやたひの行する
かきりなきまてひろき世中
むさし野は空や行〳〵末ならん
いつをかかきりわかたひの空
武蔵野やわくれは遠き末もみつ
わかれしかねの夕くれのころ
よこ雲にいく夜ともなく朝たちて
いくかゝわくるむさしのゝはら
富士のねはゆけともおなし雲井にて
むなしけふりの面かけそたつ

あさま山さとはみつゝもとひわひて
あすはつれてそこえん山みち
はるかなる月の行ゑに峯の雲
たひをなくさむ末のしら雲
天の原はるかに月の行を見て
あさまたき袖にみなとの風こえて
おきていなのゝ月の露けさ
あすもやかゝる山ちこえなん
いもに戀いそのしほひをあかすみて
わひつゝをくる身をやなけかん
たひにしもうきを都にきかすなよ
なみたはさらにつゝまれもせす
こひしさを都の文にまきこめて
すみにそむるも袖はぬれけり
一筆に旅のうれへをかきやらて
あとふまん道のすゑもおほえす
わかさきに駒の音する山こえて
こえしとの法もくるしき道にして
雪ふむこまのあしひきのやま
いそくとすれと道はいそかす
遠くきてみなあしひきの山ふかみ

夢に見るさへ遠きふるさと
あしひきの山こえくらしまくらして
誰もたゝ身をおもふにやすてつらん
をくれてひとり雨にあふ山
たか袖ならしすくるかけはし
たひ衣日も夕嵐ゆふしくれ
たゝなか空にむかふ戀しさ
古郷はいく重ともなき山こえて
なにときかましよるの雨風
月しろく河音ふくるたひまくら
かすみうちはへすくるたひ人
こきいてし舟はつなても見えやらて
日なかきころはとをくきにけり
くるゝまてつなてうちはへ興津舟
馬人いつる夜はあけにけり
所せくのせてはるかにわたし舟
まくらにきくもとをき川音
舟にみなあすのわたりをおもひ侘
見れはすさましよもの山〳〵
なみの音あら海中に舟出して
おもふも遠しふる郷の空

つり舟も見えぬ波ちにこき出て
いそのまくらは夢もむすはす
衣手にしきつの浪の夕こえて
夢たになみの枕をそする
もしほ草かきたえぬ夜思やれ
はなれそにかたふく笘屋なみかけて
ねぬ夜くるしむ雨の舟人
磯うつなみに松風のこゑ
見し夢もおもはぬ床のさ夜千鳥
いかゝしつめん胸としもなし
あともなきひゝきのなたのおきつ舟
しつみかなしみおもひをそする
ゆもたゆくとりあへぬ舟の浪風に
たむけをしてそ旅はゆかまし
かせあらきゆらのみさきを舟に見て
心つくしになをそはるけき
もろこしにならはいつとかまつら舟
契をきてもをとつれはなし
ほとふれはたゝもろこしの舟ちにて
みそきに心なをそすゝしき
舟わたる田蓑の島の雨すきて

見よやすかたもやつれはてけり
舟みちやたゝ海士ころも旅の袖
はかりもそことわかぬ遠山
うらなるゝ人も舟ちやまよふらん
時雨しはしのやとりとふくれ
とまるやとよせし舟行うらの松
ありなしもやは法にさためん
あすとしも契らぬ風に舟とめて
あすのみちまて旅やいそかん
一夜をたのむ舟のとまふき
風そよくあしのかりねは夢もうし
追風をまほにひきかけ行舟に
おほゆはかりの夢もみさりき
かせそよくあしのかりねのみしか夜に
まはらなるあまの苫屋の月を見て
風はまくらにあらきはま荻
あかつきならしよるのむら雲
まくらする清見か關のなみの上
夢は又とふ松かねのとこ
磯なるゝ枕もとをし浪の音
かり枕都の夢の又とひて

なみかせにたにたひそなれ行
ことはかりにちかき山さと
たれとなく旅ねわかるゝこのあした
古郷人よあへるうれしさ
ゆくとくとなみたはひとつ旅の空
あたにきゝしをたのむ身そうき
いまこんと風のつてなるたひの空
たよりの文にむねさはくなり
いつくにてはつとりきかん旅の空
身はたのますよ行末のそら
なからへてかへらん旅をまち見はや
なきになしてや心やすめん
としへたるひなのたひ人待わひて
なか〳〵しくもつなてひく舟
袖はいつひなのわかれのうらつたひ
うらみてせめてたえんとそする
遠さかる古郷人につてもかな
夕くれふかく人かへるなり
都にや旅のやつれをしのふらん
たかかへるさそこまいはふこゑ
都人うちむれけふの關むかへ

〔以上四季及旅部以連歌合集新補〕

壁草第六

戀連歌上

誰にならへる戀路ともなし
ほの見しを心のかよふはしめにて
　とすれは心うかるゝもうし
ほのみしや誰そとおもひ捨やらて
　あかつきならすね覺をそする
みし人やならはぬ夜半の我おもひ
　ちきるかほにはなに憑むらん
見すもあらぬ行衞はかりにあくかれて
　さてもたれかは戀はをしへし
はかなしやいとけなきとちの物思ひ
　聞はかりにてみることそなき
心のみうらこくもあやし窓のうち
　あやしや夕何おもふらむ
我や此つらき戀する人こゝろ
　戀侘る身をはしつめん方もなし
わかなかむとや雲もうかるゝ
　君かあたりをやすき〔く戀〕すきぬや
泪こそなかむるかたの夕時雨
　おもふ心の夕くれのそら
いつしらせいつ待初て恨まし
　くるしきのみを心ならひか
戀よいかに待暮またぬ暮もうし
　なかめありとも長ゐをなせそ
更るまてねぬよを人にしるもうし
　憂名はたつといひやのかれん
いかにせん心のしるを我おもひ
　心のうちにあらましのすゑ
ぬれにけりいはぬをしるや袖ならむ
　いひ出ぬおもひ朽やはてなん
せきかへす袖もいつまて我なみた
　こゝろの奥をみすは絶めや
忍山しのひても猶とはまほし
　たちや出まし物おもふ暮
こめわひぬ戀のけふりよいかに計
　いくたひ人を待てうらむる
くるしとや夕も戀をおもふらむ
忍ふおもひは露もかはらし

くるしさを戀する人にかたらはや
おもひはたかきいやしきもなし
戀はみなくるしと聞もなくさみて
しれる道にそたれもまよへる
うき物といひ／＼戀よいかなれや
なくさめかほそ中／＼にうき
おもはぬを打わらふこそつれなけれ
おもひわくにそ世はあはれなる
いひよるも數ならぬかたは甲斐なくて
誰ゆへなるゝ袖とかはしる
心こそ物おもはする人ならめ
すたれのうちのきぬの面かけ
それとなく空にたく香のほのかにて
落葉ののちにちかきかよひ路
かねてしもおもひかけきやもろかつら
ほのかなりつる夢のあはれさ
面影も雲まの月のあり明に
こぬ人をしも幾夜待らん
今はともねぬへき月は在明に
夏も忘るゝ夜も深にけり
物おもへはねぬに明ぬる空もなし
夢ならて又きぬ／＼もなし
思ひ侘すこしまとろむあけほのに
ゝいのちは君をまたんものかは
露むすふ夕かけ草を獨見て
名をかくしつる君かすむ里
おもひこそしるへならめのやすらひに
かりのなみたそ袖にたくへる
物思ふもとあらの小萩ちらはちれ
鳴むしのこゑは尾花か本なれや
露のしけさはわかおもひくさ
わけはいかなる野へをかもみん
かきりなき心の内のおもひ草
あやにくをよしや心の憂としれ
もらさんとせは露やこほるゝ
さま／＼にみる人のことはり
一ふてをかこちなくさめ打をかて
かきりありつゝあひみもそする
强面に身をなつくしそまてしはし
つらからは人なをやかこたん
たのましといひもはなたし待しはし
心よせめて一すちにあれ

つれなくて誰にもはてはいかゝせん
あさはかにこそおもひ染つれ
なひかしと聞しもしるくつれなくて
うちしはふくも人そねふれる
よりきつゝ驚かすにもつれなくて
紛にかく人に似たるもそある
恨るもかこつもきけはつれなくて
人の心はつきんものかは
つれなきはなつともおなし歳にて
情にかゝる玉の緒のすゑ
哀とは折〳〵いふに絶やらて
強面はよしかはせ一こと
いなせをもきかはおもひも堪やせん
いとふともやはうさはやすへき
靡人さてもやおもひ絶もせむ
ふかさをもわかすは思ひ何ならん
涙はふねもわたるうみ川
我か中河のなかそくやしき
妹をゝきてふね渡りする里もなし
色にめてゝも世はなにかせむ
あたならぬこゝろをみすはたのむなよ
心はわれもえこそさためぬ
はかなくも憂あた人に馴〳〵て
海士のいへゐをかくす蘆はら
かりそめの契りに名をもいひ侘て
かりにもあたの身をはたのまし
目の前もしらぬ行衛も契らめや
又夕暮をとはんとそいふ
ならへともはかなく憑む僞に
たゝ一たひそ身にははかなき
名をはかくいかなるえにてしてつらん
身を忘ぬる程のはかなさ
あひみすはありともたてし名はもれて
中にたえぬるふみの音信
たちし名に花も紅葉も折侘て
君かためこそ身も惜みつれ
もろともにたへは憂名もいかゝせん
物おもふ玉はそふとしらすや
かけはなれうき名をさへや立ぬらん
身のあたなるもよしや歎かし
われのみや思ひする世の名もたゝむ
あたし名になりにし後は問もこて

人ことしけき世をやうらみむ
　強面人をたのみてそふる
いつあはん月日ともなしかそへきて
　たのめて送る戀のはかなさ
おしむへき月日をさへに待侘て
　いくね覺ともわかぬ冬の夜
ひましらむ軒端をひとり待侘て
　さひしと雪をいとひはてめや
我か心おもふかり行駒もしれ
　かへれと人をいはん物かは
霰ちり雪つもる夜やとひもみむ
　おもひかけねはをとつれにけり
さりともの人になさはや小夜時雨
　といひかくいふことそくせなる
いつの暮さはりなくてはとひつらん
　軒によりてそまたん夕くれ
恨なよえさらぬさはりなき世かは
　待をむなしくなさしとやする
誠にはさはりもしらぬ文の來て
　又をとつれのおもひとはなる
一筆はさはりありとやとり侘て
　おほつかなしやなとかはるらん
書なれし跡とは見えす文もうし
　たのむはかりにおほきことのは
いつはりとしる〳〵盡す文をみて
　戀すこゝろの闇もふかゝる
さやかなる折しも月を獨みて
　まくらさためは夢やとひこん
おもひたえうかれし月を獨みて
　たつねしこゝろいまや忘れん
待けりと君もねぬよの空更て
　こなたかなたに分まよふみち
あた人の所さためぬ宿とひて
　しはし待心やすめてまとろまん
とはすはおもひたゆるよるかな
　せめて契りし暮なたかへそ
おもひ出てとはんとこれ〔その〕かたからめ
　跡つけてかゝる雪には誰かこん
とはぬうらみもゆふへにそよる
　誰か里か入相の鐘はきかさらん
待といはすととふくれもかな
　さのみかこつなことはりもなし

こぬもやはちきらぬ葎はつらからむ
おも忘れせは猶やうからむ
人傳のことにもあらすたのめきて
おもふや〔衍歟〕しるしるへ里そわかれぬ
そことしもとはゝと君はいはさりき
つれなきこゝろよはりもやせん
さりともの空よとはすはかねもなれ
うちまとろむや夢もみゆらむ
今はとてまつよも袖の片敷に
月とふたりのそてのたまくら
君しこはうたゝねの露やうたかはん
月よりも心つくしの秋の空
こぬ人またれ日くらしそなく
おもひたえよの人の心か
つれなくはやましといへはとふもうし
心ともなきおもひとをしれ
中たちやいひなひくると問もうし
あはれに身をそ思ひすてにし
憂世とも人のつらきにしり初て
人もおもはぬ道の露けさ
忍夜はそこはかとなくまとい來て
心もしらす何うらむらむ
忍ふよのよひうちすくし人の來て
いつくによりて身をはかくさん
玉すたれ眞木のはしらのやすらいに
二道に心さためすなり初て
いたつらふしにあかす夜な〱
こゝろの人に行てもやそふ
よひ〱に馴なは夢もうら山し
はらふかひなき宵々の床
せめて夢君にかはりてみえもこよ
とはれぬよはや猶なか〔ひ歟〕ゝらん
ひとりねのうきもならぬ頼なよ
よるとて夢は心さそふな
かた糸の絶にしまゝのひとりねに
なくさめてとへ夜こそ長けれ
明しかね物おもふ空のほとゝきす
きえての後の身をも思はし
とはゝ人草の原よりこの夕へ
忘るゝとても我はわすれし
きえかへる露とは見えん草の原
とはすはいつの夜をかたのまん

かならすをいのちにかけし此夕へ
　わすられはてぬちきりもやある
うくつらき後をやさらは憑みみん
　あかぬはかりそかたみとはなる
うくつらく絶は忍はんゆへもなし
　たより求て人のまつ暮
なひくもや契りならまし空の雲

壁草第七

戀連歌下

　かひなき名のみ殘る衣〳〵
憑む夜のくらふの山も何ならて
　面影のみのちきりなりけり
稀にあふ夜は灯のほのかにて
　誰に行けしきを我にかくすらん
月まちいつるほとのかたらひ
　名はたつとてもよし忍ふ中
なからへはつゐにみゆへき契りにて
　わかつらさには似たるもそみね
いにしへの繪にも戀せし形ありて
　およはぬきはゝいかてこゆへき

ちきりこし浪にたかゝれ末の松
　いのちを人にさためかねつゝ
ちきるとも誰かはおなし夕けふり
　心みしかくなとうらむらむ
行末をみすはみへましちきりかは
　心をしるにたのむ世もうし
ちきりより風待花はほとやへん
　淺はかなるをこゝろとやせん
君し見は風も吹あへぬ花もうし
　心あてなるくれことのそら
たのめしやうつろふ花にならふらん
〔闕〕
かけさりし中に露こそあやしけれ
　いつかおもひのはてもやらまし
ちきりをく人にうたかひ猶そひて
　たのめをきても人そあたなる
命こそとはかり語る手枕に
　いかになしてか身はたのまれん
逢ことはありともよはる玉の緒よ
　かすめる月そふけてさやけき
相夜をや涙も隙とおもふらん

いかはかりかは名にもたゝまし
逢事はたゝ夢の間の行末に
そむくる光うすきともし火
さやかにはみへしと逢も何なれや
戀しさのはてしはあらん心かは
あふたひ〳〵にあかぬよのゆめ
いつうちとくる心をか見し
あふたひに新手枕の夜半にして
いかにいひてか又もとはれん
相たひに今一たひもことふりて
ねてのあさけそ行衞しられぬ
一夜たにあひ見はといひし我か思
あかさりし心を忍ふ中にして
あひおもふときや人にわかれん
誓をきくにたのもしの身や
忘しの人に命やなからへん
おもふもはかなまゆの面かけ
明ほのゝねくたれかみよ我ならん
なをおちそふる涙なりけり
朝ねかみ物思ふにやみたるらん
我くろ髮のかはるかなしさ

手枕にうちかほりつる夢覺て
ほのかなりつる夢のあはれさ
たまくらのかほるはかりを名殘にて
別つる後の朝の物おもひ
夢になせよといひしことの葉
後にそ人のいつはりもしる
おもふにや夢になせともいひつらん
うかれとの忘形見は何かせん
とれは扇そひとのあきかせ
あふ夜半のみか鳥の鳴こゑ
いたつらに歸るも明る空はうし
たひかさなるに戀そ猶うき
いたつらに今宵もいかにかへすらん
たま〳〵あふもなといそくらん
かへるさのよふかゝらても待みはや
面影はひかふる袖に消やらて
駒のみすゝむかへるさのみち
きえなんとする道芝の露
月もうき別にたへぬ哀しれ
空さへうしやきぬ〳〵の比
月やたか恨ありともしらさらん

忍ふたよりや月のむら雲
道のへのあかつき露におき別
いつまて心のとけかるへき
逢夜半のとりあへす又や歸らん
うき一ふしをうたふあはれさ
あはぬ夜の恨をきけのかへるさに
こゑはかりきく鳥そしられぬ
人をなと曉かへし初つらん
なとあやにくに人の戀しき
歸る夜の今朝の間を今にたへ侘て
ほのかなりしもとまるおもかけ
今朝はたゝあかぬ人香を名殘にて
かすむ夜も曙またぬ君としれ
人香もおなし花のたまくら
身をおもはぬも思ひ成けり
雨にとひ嵐に幾夜歸るらむ
待夜をいつち行らかれまし
をしへはや我あたりをや忘るらむ
余所のとたへを誰か上とみん
二道はとふよもおもひなくさみて
おもひやる方やいかにと打侘て

身をしわけねはうしや二道
かすかになりぬかへる鳥の音
逢夜半の朝はうきも形見にて
一筆の文の返しを待てみむ
あふ夜のあした夢かうつゝか
かねてさためし心ならはや
〔未詳〕行衛は誰か忘しもいかならむ
みちかはらすはわれもつれはや
契りてもしらぬ後世いかならむ
なをいかなれや人の戀しき
君をゝきてあかすもたれを思ふらん
情のほとはくらへんそうき
ことの葉はたゝなをさりの心にて
おもふをゝきておもはんもなし
ふたりにも心かたちをわけ見はや
つれなきよりもつれなかりけり
心のみうき二人にやつきはてん
をろかなる心とや世にしられまし
思はぬおもふおもひをそする
忘られてこそおもひわひぬれ
きもあらはあれなもありのすさひにや

こと葉のこりて別もそせし
たのめなを絶はてんとはみへさりき
身をしるへくはかゝる夕暮
たまさかもよその便の影みせて
こしやいつかは又もとはまし
たえはつとおもへはかゝる契にて
ちきるもいふもあはれなる中
たえはつとおもふたひ／＼音信て
音せぬ人は心たになし
程ふるをさこそともなととはさらん
あふときはらへ袖のした露
とたえをもうらむと人にみへはうし
あひみてかたるほとはなをさり
はしめこそかそへし夜はれ思ひやれ
おもひのはてはうらみぬもなし
うときにもなをさりの程たへしよに
心をしるにたのまれもせす
あちきなや恨はするもいかならむ
したふとて又袖やぬらさむ
わかこゝろしらすは人をうらむなよ
いまをかきりと別行道

なみたさへ思ふ計は落やらて
水上の山かとそ聞郭公
なみたは瀧つ袖のあかつき
はらふはみねと露そこほるゝ
物おもふ袖は月もやいとふらむ
身にそふ年を何いそくらん
おりふしは移るともやは我おもひ
心にすてぬ身はかひもなし
たのましもとの葉までの恨にて
こぬ人をつらきもいはぬやすらいに
年さへくれぬうらみやらはや
なくさめに身は忘れこそすれ
恨をそ戀はやるかたおもひやれ
とはすはいとゝうさや積らん
うらみつを心くらへにわかまけて
涙にとつる閨の戸もうし
とふ人に心つよしやわかうらみ
年經ておもふ末はしらせよ
わか恨まち槻弓つきもせし
たれ世中にたのみはつへき
うらむなようつろふこそは契なれ

恨みかこつは中のならひそ
つらきことありともたへは契にて
　殘れる道は露木の葉のみ
絶ぬへきえにこそあれと思はゝや
ひ〔ま歟〕もとめはやちかきこすの戸
傳ならてせめて一言いはまほし
　すみあらしたる須磨の關守
わくらはの人傳をたに待侘て
　後の世をたにちきるはかなさ
あるうちにおもひを盡しはてもせて
　引結ふあふひを草の手枕に
後は又ともみすのかたらひ
　ほのみし夢そ露名殘なき
あかすして物おもへとや絶ぬらん
　のこれる月に薄ちるかけ
露は誰か手枕かれし跡ならん
　いかにして契りし花を忘るらん
かはらはおなし蓮もそうき
　ひとへ心はわか身成けり
かはらしとたのむに恨ある物を
　うときは何に殘こゝろそ

夢にのみ見ゆるも今はうらみにて
　うちむかひてはうらみたにせそ〔す歟〕
つらきにもなとにくからぬならん
　おもひいつへき面影もなし
何か人つらからさりし忘れはや
　たく火はあらし人の戀しさ
おもかけは似たるにせめて忘れはや
　面影なから人はわすれす
似たるをやせめてかたみに忍ふ草
　人にうらみをよしやのこさし
おもひつゝ消ん世さへやつらからん
　踏わけぬまて露ふかきみち
われならて本の心をたれみせむ
　身を忘ぬる戀のはかなさ
あらはれはいかにせし間もむかしにて
　戀になくさむ老のはかなさ
むかしせし思ひをさ夜のね覺にて
　猶あられぬは物おもふ身そ
大かたも憂世に人をこひ侘て
　さしいてかたく身をそ侘ぬる
いたつらのおもひするまにおとろへて

ちきらぬをたのむもならひ有世にて
われのみこひやはかなかるへき
いのちさへもそつれなかるへき
憂人やはかなきもしらす世をも經ん
身のうきさまそみへてくやしき
君かため我か面影やつくもかみ
ふかきうらみそたのむ中なる
身をしらぬ人やは憂を忍はまし
こゝろはみへつあちきなの世や
又こすはくやしきこともいかゝせん
たのめもをかすかりに見へつゝ
又これは此世の夢も何ならて
心さはかす中はくるしな
たのむ夜はとはす思〔に歟〕はぬ折はきて
あふこかたみまさる戀しさ
ことの葉は水やはもれし跡もなし
いりあひの鐘にたちかへる暮
こゝろをや戀は忘ぬ術ならん
いりあひひゝき哀なる暮
戀しさや世にはとまらぬ我命
戀はいかなるまよひなるらむ

生たにあはゝ又ともおもふ世に
いつをあふ瀬をなからへてみん
朽ねたゝ身やつれもなき名取川
思ひ初しは夢のおもかけ
忘すは長世までの戀はうし
ゆふへ〳〵や袖はしほれん
限とてわするゝもやはつらからぬ
打返し何とおもふもなくさまて
忘られはてつ心うの世や
枕やつらきこゝろしるらん
うとくなる人をは夢もみせ侘ぬ
みせはやかゝる山のありさま
さ莚にいつまてはらふちりならん

壁草第八

雜連歌上

草木にしるき春の初風
いつとなき山里住も年越て
うつる光のかけのあはれさ
山ふかみかゝる谷にも春みへて
さくらはかりのみよし野の奥

こほりとけ瀧のあたりも春みえて
見渡しの空はいつより霞らん
柳いろつく春風そふく
かた淵あをき嶺の下水
ふし柳幾たひ春に成ぬらん
をしなへてなく野への鶯
一本に吹風匂ふむめさきて
まつ人からの春もかひなし
草の戸に野邊の鶯今朝鳴て
にほひさへわつかに梅の花咲て
一むらやふにうくひすのこゑ
もゆるそしるき野への下草
つなかれぬ駒のけしきも春の日に
山櫻とへは風のみこたへして
尾上にかすむふる寺の松
花にせし心盡しは散やらて
あはれにかすむ老のとし〳〵
霞のうちはましるしら雲
春の夜の月はふくれと澄やらて
うたかふほとはふくる夜の門
やすらはゝ霞を出る月や見む

さき散も音信きかぬ花の陰
いりにしまゝのみよし野の春
花にたちそふ松も一しほ
高砂や霧のうら波あけ渡り
又こそさかめ山さくら花
春は猶むかしなからの志賀の浦
やとりなはいく日もあかし妹か島
かすむ欄干に田鶴わたるみゆ
詠こし霞の名殘なをもたて
春の欄干のをちかたのなみ
色〳〵をみし花のかへるさ
忘すは春やをもかけ天津鴈
身やことし都をよその春霞
またき野山の花のあらまし
いのちなりけり又やあひみむ
花に春今年はかりもあまた經て
かすむこすゑそ遠く成行
我植し花にあまたの春をみて
いかはかり老はつる身のかはるらん
花にもねぬる春のつれ〳〵
暁りならふる山の下陰

かきこしの花は一本ぬしや誰
おもひよはらしすつる身のうへ
花鳥の色香に柴の戸を閉て
わするへしやは今のおもかけ
さやかにはみせねと花に朝かすみ
うつろふとしる〳〵猶も思ふ世に
いつかは花をうき物とみむ
さひしさのみそ夕をもとふ
花のかけ音せし人もちりはてゝ
蓬生に花ちりはてつ誰かこん
道芝茂しすみれたにさけ
おしむをはしゐてもおらし花の枝
春のなさけのゐひのたはふれ
立わかれつゝかすむ遠かた
古畑のけふりも春の山のはに
うつろへるいろや梢の花ならん
そこも水すむ池の藤なみ
春にこそむかし語りの友もあれ
古郷かすむ志賀のやまこえ
むかしのあとは野にそかすめる
春毎に狩せし宿の天の川

なを遅さくらふかくたつねん
谷の戸は鳥のかへるをしるへにて
夢も夢かははるのうたゝね
郭公[illegible]生の月にさ夜更て
さきなは花や夢とちらまし
春暮ぬはるしらぬ宿も慰て
見せはやの花を今日まで折侘て
春を山路にくらすかへるさ
みやこをしへよかへる山雲
時鳥またぬかたにやなきゆかむ
うらみを（て歟）かくる夕くれの雲
郭公またせもたゝ一こゑに
うちもかたらへ行ちかふ道
おもひ入山の端いつる郭公
心をのこすみしかよの月
郭公きゝしや夢のうたかひに
かたつふりさへ角はおそろし
蟬の羽はかさねまほしきから衣
行〳〵虫の遠さかるこゑ
から衣梢に蟬のぬきすてゝ
はたへかくさぬほとのさ衣

誰もけふあつきにたへぬ夏の日に
　夏の夜は涼しき風を枕にて
とれは扇に閑もからはし
　ほとなやこもる一夏の内
村雲にまたるはかりの秋のかせ
　月影しろ〳〵くらき灯
とふ螢かせに殘れる秋は來て
　秋かせや小舟を遠く送るらん
年のわたりは行人もなし
　月になりぬる夕暮のそら
〔荻歟〕萩原や初風しる〳〵ほのめきて
　あはれいまかた風そ身にしむ
小萩原露けき宿にちり初て
　夜をかけて露もかはかぬ草の本
むしの音たかし風の明ほの
　秋もすゑ野の道のへの霜
しほれたる薄か本にむし鳴て
　いつくか君かかけならぬ里
朝露に門田色つく片ゐ中
　今朝をく霜に初鴈のこゑ
山のはの霧のをちこち野はみへて

　雲の行末をめくろむら雨
吹まよふ野分に秋の日は暮て
　こぬ夜かさなる秋風の雲
衣うつ比しも旅よいかならん
　昔をかへしかたれ秋の夜
露は袖に曉のをたまき幾ね覺
　あらしの風にのこる夜の夢
月更ぬ誰かまとろむ宿ならん
　幾度か恨は跡もなかるらん
月に時雨る秋の夜のそら
　荻原やしのに露ちる秋はきぬ
人こそみえね月のやま里
　むかふ鏡の影ははつかし
くまもなき月は中〳〵友ならて
　たちゐもいかに引しめの内
浪の音月すみのえの神さひて
　たかき潮のあかつきのこゑ
男鹿なく月有明の淡路山
　かへりみる梢そ名殘下紅葉
時雨にたへぬしかの一こゑ
　鳴海かた引のこす塩に夜はの月

かけむら〳〵の秋のほしさき
月にいつはるゝを聞かん雨ならん
軒は忍ふのやとのまつかせ
雲もあはれをさそふゆふ暮
誰か袖のつれなかるへきむら時雨
我すむ庵の露ふかき暮
時雨降山の下柴はこひ來て
不破の關屋も守らす成けり
古はてゝ苔むす軒のゆふ時雨
しつやのあたり鳥そむらかる
門近き一本柹の實落はした
軒ちかき古井の本の寒わたり
葉は朽はつる桐のふゆかれ
水をとる岩間かくれに道有て
月に猿なくやまのふゆかれ
舟よはふ浪に暮る河音
さひしさは友なし千鳥我なれや
とへかし山のうきをこたへん
柴の戸にこのころ積るみねの雪
かり場のすゑに鳥の立こゑ
雪白き野をあさふませ駒なへて

春のくるをもしらぬ柴の戸
長閑しな世をすて人の年の暮
稀なることかさりきたる道
春秋に別るといかて恨らん
一たひの情はかりにすこさめや
春よ秋よといかゝあらそふ
目の前にうつろふせみはいかならん
ふるき都はあとさへもおし
夕暮は高き賤き哀にて
ふるきみやこのいへ〳〵のあと
ころもうつなる風そ身にしむ
菅原やふしみにも誰すみぬらん
露となみたの袖はかなしき
すみ荒す跡や野鳥か崎ならむ
水をはなれぬ鳥の一むら
すみ捨し砌にひろく池ふりて
古はつる軒の荻原むら薄
たれわけきてか道芝のあと
宮こ人歸る夕は夜をかけて
さきをひさはく小車のをと
おもはさりきに年をふる山

立かへる世はをのゝえの跡に似て
心くらへよいつかはてなる
みたれ碁はけにをのゝえも朽つへしゝ
音にきく人を風たにさそひこよ
月に夜ふくる笛のさひしさ
吹そひおつる庵のやま風
琴笛に泪しのはぬさ夜ふけて
松風きけは物そさひしき
琴の音やわかぬ心もすみぬらん
忘れもはてねつらきふること
かきならし猶袖ぬらす絃を絶て
侘人はいつを思ひの隙ならん
ことの音なくね打そませたる
暮はおしき春の木の本
亂あひ身を蹴鞠にやすむらん
今と共かしこき人の世々の跡
筆にそふるきこともこれる
なにの心かなをさりにある
古き世のことこそ聞もあはれなれ
きゝ分ぬ神歌うたふこゑはして
ふりにしことよいつれもとする

うらみし友のこゝろしらはや
おもふ事うち出る酒のたはふれに
なをひらきみる文の巻〳〵
つれ〳〵をなくさみ草はかたみにて
ふるきもいまも歌の數〳〵
行末の跡を誰をかしのふくさ
法はたゝかはらぬ道と聞物を
おもはゝ誰もやまとことの葉
およはぬかたそ心かけけり
哀ともつゐにやしらて和歌
君か代は誰かつたふる數ならぬ
こゝろ〳〵のやまとことのは
行はきゝしも遠さかる道
ふかくなる學に跡はかたからて
まれにとひしそ中〳〵にうき
ふかゝらてしるこそ道のまよひなれ
とへとことのはをのこしこそすれ
おもくのみせよ道をかくすらん
こゑをしるへに道やたとらむ
大唐の文字を學ひは絕もせし
見すしらさりし心とそなる

年を經て取むかふ文の灯に
　くるゝまてたとるもつらし道の末
幾年雪を窓のともし火
　みちほのかなり誰にとはるる
灯にかゝけししるしかつ見へて
　まとろむ夢そやかておとろく
ともし火をかゝけつくせは鐘なりて
　むせふなみたや又くらくなる
かきたてゝ古事かたる燈に
　よしあしの心〳〵をうち語り
雨よなくさむともし火のもと
　窓よりにしにほそき月影
灯に露まとろまぬ空もうし
　更はてぬとやたゝにやはねん
あはれともきかは友こそ雨ならめ
　水鶏にまかふやま郭公
槇の戸の明かたくらき雨すきて
　往來にたへすあふさかの關
鳥の音にほの〳〵しらむ夜を籠て
　あかつきふかく犬ほふるこゑ
さそひたる夕付鳥も哀にて
　たゝひとり明やらぬ夜を打侘て
捨らるゝ音を鳥やなくらむ
　草枕またみぬ月の曙に
夜烏さはくやまもとのまつ
　おなし友にもおもふもや有
夕烏跡に一つれ行やらて
　ちかくなる舟の行末の沖つ島
岩にむら鵜のさはき立みゆ
　霞む日も髪の雪は消やらて
あはれにたてる澤の老鶴
　この山からすかすむ鳥の音
箸鷹の巣かくる峰に友なひて
　我か門すくる人の面かけ
誰としもなきをくるれは犬ほへて
　すゑのちかきに打そおとろく
弓を見て鹿や矢先をのかるらん
　なれぬとや浪に靜けき渡し舟
柴おふ馬の行かへるさと
　賤か家ゐもちかき山かけ
牛の子の澤行あたり水さひて
　山もとかすむ春雨のあと

しけき野に牛飼村のゆふ煙
　駒いはふ野は夕かけの帰るさに
家路やちかきほのけふり見ゆ
　とひやゆかましとひやきてまし
誰となく庵ならふる山のかけ
　余所にかくれぬ柴の戸の内
とふ人になしとこたふる山のおく
　下賤をたのみて籠る奥の庵
爪木わらひのおり／＼のつて
　雪のすみかそいてんみちなき
打くふる爪木のけふりむすほふれ
　さむさにたへて冬こもる庵
わつかなる爪木を幾夜のこすらん
　風は朝夕ふかぬ日そなき
高瀬舟妻木の往来いかなれや
　河風にふかれて渡る橋の上
みれははや瀬の宇治の柴舟
　それをせめてのをとつれもなし
奥山は木こる道さへ跡たえて
　いつこりはてん中としもなし
里／＼の薪の山路おくふかみ

　積るよはひを誰にかこたん
高砂の松の友こそまれならめ
　雲霧まよふゆふくれの山
いりあひを尾上の松のしるへにて
　日はまたのこる舟の入海
山本の松一むらに鐘なりて
　澄のほる月や嵐につれぬらん
雲ゐる山は鐘しつかなり
　こえくるは山郭公きくらめや
あとはくもゐるみねの杉むら
　夕へそさはく烏なくこゑ
しつかなる蕘に杉はむら立て
　霜に鐘さゆるいりあひ山深み
杉むらとをき谷のほそみち
　夕へなかむる草のかり庵
雲を山いかなる故かちきるらん
　詠めやる空より雲の郭公
幾八重山の高根ともなし
　雨はゆふたちすくる八はし
雲はたゝ二むらやまに風見えて
　まよふ行末そさへぬ日もなき

御吉野や古郷ちかきみねの雲
　山さしおほふ河つらの里
はるかなる嶺は三笠のさほの内
　しほるゝ袖よたれかしらまし
思ふ事しのふの山の奥もかな
　さそふ浪にもいてぬ河舟
世を宇治の里もやすめはすまるらん
　もゆる草木の奥のかくれ家
かけろふの岩かきこむる道絶て
　おひしけりたる蔦のかつらき
くる人もうつの山こへみち古て
　なにゝよりてかおもひ初けん
花ならぬ木の本住の柴の庵
　山陰やあまり憂身の宿ならん
つま木の外は求へき世か
　田をもる笘をあらしふく床
下賤や夢といふ事もしらさらん
　たれをやすしとうらやみもせん
柴の庵もいとなむ朝け夕煙
　人はいつより身を捨つらむ
すみならふ心とはゝやみねの庵

　とはゝやいかて世をそむく人
雲水を朝夕嶺の庵しめて
　奥にきくのゝ響に夕けふり
庵かすか〔に脱歟〕雲風のあと
　身を猶ちりに誰ことふらん
あふ坂やすみけむ庵は跡もなし
　苔にあとあるやまの下道
いつちとか荒しはつらん草の庵
　れ畳の露のうへにをく霜
篠ふける庵は嵐にうち侘て
　かりの世とおもひとるこそ哀なれ
竹をはしらに柴ふける庵
　いかにしてあらき風にはむかはまし
竹あめる庵の窓のともし火
　露けき木の葉音もきこへす
古寺は軒の忍ふになをくちて
　岩角たかくめくる瀧なみ
梯にこすゑをふめる寺見えて
　みちはかすかに嶺のはるけさ
かけはしは鳥のみゆきや帰るらん
　つかへこしその大君はたゝしくて

なをあとのこる山の井の水
　ひかぬあやめや江にしけるらん
さと遠みこまもすさめす水さひて
　あかつきをきも秋のふる寺
心すむこの山水を身にしめて
　名は瀧の糸やかて絕けむ
山ふかみ瀨々の岩をに苔むして
　凉しやさくら水おつるをと
みきり行なかれに石をたてそへて
　千鳥なきたつ雪の暮かた
松風の吹上の眞砂打なひき
　海士小舟はるかの奥に漕出て
夕なきさひしあしのやの里
　數〳〵かへるあまのつりふね
いかゝすむ波にちいさきはなれ嶋
　ひとつふたつの庵の哀さ
船よするはなれ小嶋の夕けふり
　こきかへる舟は夕になるおかた
難波の鐘を送るうらかせ
　かすみの浦のかすむつり舟
海のかるもしほのけふりたてそへて

音むせひ行岩の下水
夕鹽のあら磯けふる山のかけ
　あし火をうつす水の一すち
夕鹽の跡かしら洲の遠き夜に
　たてるもしるし岩代の松
はるかなるしほやのけふり浦さひて
　里はなれなる峯のかり庵
なかむれは眞柴ふすふる浦さひて
　浦かせに下葉うつろふ松高み
夕日そわたるあまのはしたて
　磯の千鳥そ行かへりなく
夕浪の淡路にちかき須磨の浦
　いかはかりかはね覺かなしき
よる〳〵の浦波あらす須磨の關
　風吹すさみ舟や出さむ
村雨の雲は山こすいそのまつ
　引こそあへね山の横くも
釣舟のよるの綱手に火は消て
　山道はちかく見ゆるも遂にて
松の葉こしにうかふつり舟
　なすつみのむくひにさてもいかならん

この世はなにゝうかふつり舟
舟つなく江は暮はてゝ降雨に
簑引かくる海士のつりふね
いつよりかくはふる宮の道
朽わたるいた田の橋のちり〳〵に
岩に鳴なく夕さひしも
奥ふかき嶺は雲ゐるよしの河
けふのみとすむ世こそ遠けれ
かはる瀬もいつかは絶し飛鳥川
雨はすゝかの山の木のはか
幾瀬ともしらぬ川音さ夜更て
旅のうさ聞しは物の數ならて
よるの雨見る大河のみつ
とをきもみゆる松の村々
行舟を木の間の山路海晴て
月のやとりをとふ人もなし
山の端をなかむるかたの限にて
山はかすみのたえ〳〵の比
横雲や夢路に別そめつらむ
道とたへたる橋かすかなり
明ははや夢のわたりの末ならん

うちなかむれははてもなき空
いつくにてきゆとも跡はしら雲に
おもかけみえて山そしられぬ
半天にかくさは雲や富士ならむ
すみかやあるとたつねいる山
たちぬはぬ衣を峯の雲にみて
山をもすきて春や行らん
鈴の音しるき驛路かすむなよ

壁草第九

雑連歌下

いま此たひはすみ染の袖
花ならてわけんもかなしよしの山
憂にたえたる我そ強面き
いとへたゝ吉野の奥のなき世か（の脱歟）は
つゐに我かすまはいつれ山ならん
よし野も人のしらぬおくかは
岩ふみなるゝ庵の朝夕
おもひたにいらは吉野の奥もなし
はかなくかゝる命つれなよ
山ふかみいつれ朽木とおもふ身に

かりの傳にもなくさみにけり
ひたすらに都とをくはすまれめや
草木のうへに春秋そある
おりにふれ宮こおほゆる山の奥
そのかねこともなくて來にけり
おもひ立心やいつのこけころも
あまりさひしきかくれかはうし
かけはなれいとはむも世はいかゝせん
誰もわか心はしるもなかりけり
世は人毎にまとふてふみち
人毎に世をうちといふ山の陰
たれこそしると身をしるもなし
人に身は猶まかせてやみむ
世はたれもつらきを獨いとはめや
おもふあまりにかこちもそする
いかてかく出かたき世の道ならん
よはひの末は長閑にそなき
今は世を出立いそき日にそへて
すむへき奥か雲に山かせ
世をいとふ所はいつくとたつねきて
おもひとらすはまなひかたしな

世をいとふたくひはかりにいそくなよ
柴のあみ戸の山風のくれ
世をいとふ心もよはりはてつへし
とへは心のしつかなるいほ
世をいとふ人は朝夕なれまほし
年の老てそ世をいとふ道
いかなれば身をさかりにて朽つらん
やすらひ侘ぬわか哀しれ
行末のあらは待ても朽む世に
あらは世中なをやうからん
さりともと思ふな朽る身の向後
侘ぬれは〔落字在歟〕よるへたになし
哀身はさそふ水もやすて小舟
此後のいのちのかきり待侘て
身はすてはてついかに送らむ
うき世は誰もおもかけの人
今はとて名殘おほくも捨る身に
すみうかるゝ〔を脱歟〕や草の戸のうち
捨し身も今は夕待わひて
陰たのむ深山は風もうからめや
花をも世をもすてはつる人

いつかさらましふかき柴の戸
とふ人をいとふ山路のあるしにて
こゝろすますに何かしくへき
をろかなる苔の莚とおもふなよ
引むすふ栖とたのむ草の原
へたてもはかなこの世のちの世
いつちともなきたのみをそする
いとはする此世後世いたつらに
大かたになし人やつれなき
世のうきにあへといつたれいとふらん
苔のころもよあるにまかせよ
身はすてつ命まてやはいそかまし
さすか父人めもつらしたへかたし
兎角に世は老そいとはむ
捨る身に結ひもをかし草の庵
うき世の夢と松風もふけ
稀なる友よしはしやすらや
七十の世はのかるとも何ならむ
かりのやとりをいとふはかなさ
住はてむ世こそつらきもつらからめ
後の世をこそ誰もねかはめ

よしや身はやすからすとも夢なれや
ゆく衞思ふとおもひかひなし
うしとみし世やなをさりの絶ならん
くらへはなみたいつちまさらん
うしとみし世は行末もたのまめや
たゝきのふをもいへはいにしへ
うらやむなわれもゆくすゑ遠かりき
おもひはいつをはてとしもなし
哀たれ憂世と名付住つらん
うきもおもへはたゝ夢の間そ
世中よいかにたのみて恨むらん
わひぬるを身の習ともせよ
誰もこそうき世をいかにうらむらん
語るに老か世をそなくさむ
身の恨みおなし事とはおもふなよ
はらふに憂はなとしたふらん
立ゐにつるゝ心しらはや
身と心むかしのたれそとはまほし
うきことよ身の何にてか絶さらん
こへくる年そ身にはくるしき
浮とはあらたまるへきわれならて

あやしや何を祈なるらん
思ふ事つゐにしるしもなき世にて
なみたなからに立歸るそら
あたらしき年もかひなし我おもひ
世中のうきにたへぬはおろかにて
身よりほかなるわかなみたかは
いかゝ忘れんすきし世中
大かたのつらきことかは身の向後
何をまつとて身は殘るらん
大空をたのむはかりの世中に
身の向後神やしるらん我心
おもふ事うき空もはつかし
浮世のほかと月やなをみむ
思ふ事空になく〳〵なくさめて
かたらはこと葉誰もつくさし
淺からぬ心あるとちのつれ〳〵に
我のみかとはかりぬるゝ老の袖
おもひなくさむ世さへはかなし
世にすみてしほれぬ袖よ誰ならん
うきにつれなき心ともかな
古郷は猶いかはかりあれぬらん

わかみし世さへむかしともなし
見しもきゝしもよし夢になせ
こゝろそとむなし昔にとまるらん
誰か行すゑもうきは世中
いにしへは人によりてもかへらめや
ゆくすゑ今をおもひこそやれ
身の上よむかしはいかゝわきつらん
おとろへゆくを見へははつかし
ことゝふも昔なからの宿ならて
草のかきほにすみははてしな
佗人もめくみなき世かまてしはし
行わかれすは何かうらめん
春秋をよはひの末のうらみにて
心なをくは物はおもはし
君か世の人にさま〳〵くるしみて
なにのうへにも限こそあれ
人毎にしらぬふかさはこゝろにて
かゝみもとらし身そおろかなる
すかたよりみかくは人はこゝろにて
なき名を何といひものかれん
いかに淸くはうきもなけくなよ

なみたや人のうきをとふらん
はてはなを心ならてもおもはめや
　おもふはかりにくたさんもらし
ことつもる心のそこの哀しれ
　なと郭公またれのみする
物ことにおもひすつるもねさめにて
　かゝるをも身にはおほえぬ思ひして
生れこは誰もくるしむさかひにて
　山里すみにましはるそうき
後の世の外に何事おもふらん
　しつかならすはかくれかもいさ
後の世のねかひたになとかたからん
　大かたにこそおもひなすらめ
のちの世をなけかはいつを隙ならん
　墨のころもをいかゝはつへき
後の世を歎くなみたにやとれ月
　愚ぬる法のをしへに目は覺て
おもはぬまなき老の後の世
　いつおとろ[か歟]はん人の世中
明るとはたのまぬ鐘も聞馴て
　けふも〳〵とたのむ行末

驚すいりあひの鐘も耳なれて
　たゝけふのみとすくす年月
いつきくか入相の鐘のはてならん
　けふのかきりはかねそしらする
あちきなやおとろかぬまをわか命
　夢さめぬれはたゝわれもなし
面かけのかたちをいかにたのむらん
　老にかなしき鐘をこそきけ
暮ぬまはさすかにたのむけふことに
　心のほとを老にたつねよ
憂にたへぬなみたもたくひある世にて
　千々のおもひを誰にかこたむ
數ならは身のうきにしもなさし世に
　誰になを心をとむる世なるらん
こゝもかしこもうき身ならすや
　我にある心ともなき老の末
身の物わすれたれにかこたん
　よしあしもたゝあるにまかせよ
絶はそれ何はれ[の歟]事かふりさらん
　身そいたつらになからへてうき
月も日も何をしてふる世とかみん

おろかにみゆる人の一筆
何わざも心いらぬはかひなくて
われはほのかにうちけふるかた
まゆなかはふり分髪にかくろひて
心と何の種かなるらむ
いやしきに賢子こそあはれなれ
おそるへきをも背くおろかさ
親ならぬ誰かいさめをたのまゝし
なすこそ〔と歟〕ありと身にはしれとも
子をは皆いさむる親のおろかにて
おもひのやみはわくかたもなし
子をめくむ父母いつれ淺からむ
もろ友に有さへ身こそ侘しけれ
かなしむちゝよ母のくるしひ
つらきにはへて露ふかき秋
くり返し老の玉のを長夜に
淺茅か本によはる虫の音
老はうき露の玉のを打はへて
今やわかれを誰もおしまむ
哀身を老はてぬさきにかくさめや
あふたにあるにつらき玉の緒

あはれ身の老のこぬまにはてもせて
幾たひそ荻ふく風に袖の露
老にわかあふ秋のゆふくれ
まれにたに人めはあらす庵ふりて
宿かすかなり老てすめとや
むかしにかへる夢の長閑さ
今は身をねふりて送る老の床
おもひわすれて身をもやすめん
歎かるゝ老にまとろむ夜半もかな
ためぬれと露のうからぬ袖もなし
老やみなわかたくひなるらん
一つゝ積るに何かみたさらむ
鹽干もかなや老のとしなみ
おもへはつらしすめる世の中
あかさりし春よ秋よと身は老て
かたるにや心のはてもなかるらむ
こゝらつもれる老のふる里
こゝろをしるにたのむ世もうし
老を人すてかたくや〔て歟〕見もはてん
いたつらに身のなからへもうし
何を我か老のしるへと人もみむ

さらはつれなき名にたにもたて
たくひなくよはひ遊になからへて
はかなき筋にかゝる玉の緒
行末を白髪まてとたのみきや
すくなるを心のすちにたのみをけ
（に[illegible]）うきのみやはくろかみのしも
積りこし恨はいつの世につきむ
かしらの雪の山はふしのね
なをこの比の秋はすさまし
老か身は幾露霜のつくも髪
人のとはねは道としもなし
賢もかしこかる世やしらるらむ
夕付鳥におきいつるみち
立かへる宿をは旅のつかへ人
科はいさめにあらはれそゆく
中〳〵に毛を吹世やはおさまらん
祈すはかゝる世中いかならむ
けしきことなる雲居のそら
あはれみふかきこの君かとき
いかなりし罪にてかくはおもるらむ
あらしも契れすゑ遠き山

姫子山子日に千代を籠初て
それかとはかりほのかなる山
行末は千年の松の二葉にて
いくゑまて霜を嵐の送るらん
苔にも千代はしるきまつか枝
君かためとや春日野の神
萬代を摘てふ若菜數〳〵に
風を花しらてやけふも殘るらん
おさまれる代の春の長閑さ
たえ[illegible]程こそことのはもあれ
打はへて青柳の糸のなかき日に
つれなきに君いかはかりならふらむ
御垣の竹のいろかへぬかけ
こまかにそゝく雨の靜けさ
君か代は民をめくみの數わかて
めくみはふかしつかへぬる道
かけはみな此君にとやつくは山
いつくとえても山そはるけき
かきりやはしられん君か千代の坂
道は神代の末としもなし
立かへり猶いにしへの和歌

佛とも神ともなるは心にて
國をあはれみ代を守るきみ
　深草やむかしの跡の春さひて
照る日のくれし空のあはれさ
　聞しもしらすたのむ世はうし
あとをさへ心まとひにとひ侘て
　はかなく今は戀やしぬへき
跡をたにとはまし親の古郷に
　いかなることをちきりをくらむ
すゑの世は猶とをかれや神と君
　かすみをみてもおもひいてつゝ
數〳〵に忘れやるへきあとならて
　年へてきくはつらき音信
しらさりきなかきわかれの旅の空
　いつちなり行螢ともなし
空蟬のはてたにかくはある世にて
　あたにきゝしをたのむ身そ憂
なきを猶有物にせはいつかみむ
　くらきにたとる後の世をしれ
きえはてはなき身といかておもふらん
松一村に風かよふをと

山陰に名はうつもろ（れ歟）ぬ苔生て
　月をしたふもとをさかる空
程もなく露消し日はめくりきて
　こふるはおほき人のおもかけ
みしは世にあらしましかはね覺して
　何をか忍ふあとゝなすへき
我か身やはあらしましかは數ならん
　誰かためにとくとか聞し法の道
とをき跡とふけふのはかなさ
　世中はたゝ朝かほの花の上
なにかはたのむ身は露にして
　いつもなれともすさましき暮
身はすゑの露の消まつ鳥へ野に
　身のはておもふ秋のはかなさ
わかゆふへいつくの露にまたならん
　なみたをたにもなくさみにせん
藤ころも名殘おほくもぬきすてゝ
　たれかは露にやとりおくれし
とはるゝもとふも跡こそ草の原
　とにかくになる戀しさのはて
ありふれは忘るゝ世こそはかなけれ

いひしはかりに日數をそふる
をくれしの跡もやあらは忘まし
かりにみえしや夢の行末
あはれそれ佛の世さへ常ならて
松杉ならふおくは神かき
閑なる苔に櫻の宮ふりて
つかへもて行神の宮人
春日野に春のめくみをかけ初て
袖にやとりし月の面かけ
石淸水松ふく風に神さひて
まふてもしけき神かきの道
住吉や春秋每の祈して
松さへも秋にはあへぬ風吹て
神のゐかきの月のさやけさ
袖の凉しくうつる水かけ
涙にも御祓のしるしはやみえて
みちやはすゑにならむとのは
祈なをうるほふ民の天か下（落字有歟）
夢のつけ祈る日數をそへて
しるしを見てそ神にうれしき
しつかにくるゝみねの山てら

事もなき今年や祈るかひならん
昔さへ狩場はまれの御幸にて
佛のことのねかひかしこき
なみたすゝむる松風そふく
ことはりは分もわかぬも法の庭
苔の袖ふく風そ身にしむ
おもひ入心やあさきのりのみち
いつれの法もおろかにはなし
獄の上の草はたとへにて
あひ見るとはまれの我人
法に身をうけくる誰か淺からん
雲にこゑあるいりあひの鐘
さらにたゝ空やむなしき法ならん
身をある物とおもふはかなさ
心にやひかれてゆかむ六のみち
こゝろの闇はさてもいつまて
人をみなわか子と歎くかの佛
形をもうけすはと身を恨みきぬ
佛にとをきこゝろなになり
夜ふけてたかき人のこゑ〳〵
灯におこなひさひしみねの寺

影は今朝まてあり明のつき
結ひこしあかの清水に年暮て
月をも水にむすひあけはや
曉の露をしきみに折そへて
佛にもかはらぬこそは姿なれ
檻にかほるすみそめのそて
捨はてゝさへやすからぬ身そ
命には松のはにたになからへて
いつかは心やすしともせん
法の道いらは猶こそかたからめ

壁草第十

春發句

年の内立春ありし正月十一日獨吟の連歌に
去年立し春も今朝しる霞哉
かつとけてむすふはかりの氷かな
風や春名殘たになき氷かな
水や春むすはまほしき心かな
春の風いつくもをよふ草木かな
雪なから遠さかるみねや朝かすみ
今朝はまた霞も雪の外山かな
とき山やおもへは軒はあさかすみ
越後國に侍し比春の初に
かすむへき物とや去年は（の歟）嶺の雪
朝霞雪にさむけき山も哉
みねの雪今朝はかすみの麓哉
野は分かぬ下もえしるき雪間哉
富士のねは天のはらなる霞かな
伊豆の山家より所望せしに
朝かすみ數そふ沖の小島かな
雨は今朝木々に露けき霞かな
一本にさくやこの花四方のはる
花毎に思はむ梅のにほひかな
いく里か匂ふ春風やとのむめ
鶯もにほふ風をややとのむめ
いつく梅にほひははらふ霞かな
いかてかく色さへ香さへ梅のむめ
宗祇禪師毎月忌日にせめての事とて一折なと興行
し侍る正月
あかさりし色香やかたみむめの梅
梅に匂ふ柳にみえて風もなし
雨に今いくかは木のめ春のはな

岸みとり鶯さそふ柳かな
かけゆらく春の日ともの柳哉
かせたにも過かてにする柳かな
[illegible]村を川つら青むきし柳
草若み木すゑはこのめ春のかな
待人によらはけふさけ春の花
雨に花みれはこもらぬ枝もなし
こまかなる雨やみる〳〵花の露
折花は思ふおもはぬ一木かな

花の木ともに蔭おほくうゑたる所にて侍し一座に
都ともいふへきやなきさくらかな
空はれて庭も糸遊柳かな
糸あそふ花になかき日風もなし
風吹かぬ世はなを花の色香かな

有山家の知人を使にして草庵のあらましなとせし
春の比まかりて
山櫻おもふ色そふこゝろかな
さくらさく山鳥のをの春日かな
朝かすみこめは花なき里もなし
立をみぬ霞やはなの朝日かな
おしむへき月日も花のさかり哉

はなさかて[illegible]る日數かな
しほれ[illegible]おるやとを山櫻かり
さかりいつまたれをしまれ花もなし
[illegible]くときいつれかいつれ花さかり

長谷寺にはなの比まかりに
ちらは花尾上の鐘の夕かな
山ゝちる折て行かふ人もなし

閏三月の心を
あかぬ世を花にしるへき今年かな

住吉法樂千句に
春深し代々につもりの濱の松

祝の心を
行春の宿のものとや迎さくら

暮春に
いまさける宿や月日も遅櫻
うらむなよくれぬ里ありや花の春

夏發句

夏のはしめに
郭公木たかき藤ややとのまつ
はるも見ぬ光や谷のをそ櫻
誰か宿そ卯花ゆへるかきつはた

根やかよふ岩かきつはた松のふち
香はいとゝとる袖ふかし八重榊
むかふ日に露はあさをくあふひ哉
またるともしらはつれなし郭公
聞きかすいつかはぬる夜時鳥
月を今朝今一聲かほとゝきす
又やなかむきかすかほせは郭公
　甲斐國より或人所望せしに
郭公根こし山こすはつ音かな
　信濃國淺まの山わたりより人の所望せしに
こゑもらせをちこち人に郭公
　或人みまかりぬる跡にて侍し會に
まつこえし山路のつてか郭公
　伊勢山田にして
郭公杉村わかぬ深山かな
　五月四日に侍し一座に
今日のみや根は水こもりのあやめ草
かけしける柳を池の水草かな
鷺のゐるほかは夏野の水草かな
夏野行袖さへ草の袂かな
とるや里野山色そふ早田かな

苗にして民の秋しる千里かな
風や秋早苗にそよく岡のまつ
　信濃國あさまの山近きわたりにて
五月雨やみな雲はれぬ淺間山
晴またに庭は五月雨柳かな
五月雨は水に澄やるこゑもなし
さけは誰か外面もひとつ樗かな
雨匂ふ木末雲ゐる樗かな
〔此間二十行闕〕
　宗祇禪師武山寺にしてうの葉さへ花橘の色香かな
とつかまつりて身まかりぬる又の年おなし坊にて
　侍し會に
橘に去年をしのふの軒端かな
橘は袖ふれし香は郭公
今年生に心をゆつれ園の竹
水鶏なく門田木ふかき柳かな
天の戸の横雲いそく水鶏かな
水鶏なく夜半よゐまの槇戸哉
廻あへぬ月やあり明なつのそら
とこなつに咲やいかなる花の種
花そさく庭は苔むす石の竹

蟬の羽や岩ほなつてふ夏ころも
こゑたかき楠は蟬のは山かな
　六月十五日に侍し一座に
今日に消てふる雪涼し富士の嶽
夏は手に山の井ならぬ水もなし
月に風みれは手にとる扇かな
　伊勢山田にして千句に
神風やゆふとりそふる扇かな
　川つらちかきやとりにて
更まてたちすみぬるや河邊かな
夏はきえ秋はうかへる泉かな
秋を荻風にまたせぬ夕かな
またてたにちるや秋風柳かな

秋發句

　秋のはしめ大神宮にして獨吟の千句つかうまつり
　し第一に
ふくならす川風凉し秋の水
風を今朝しらする露の一葉哉
かせや秋うらめつらしき葛は哉
木葉ちる初風幾日秋のには
　新きやとをつくりてはしめて侍し七夕の一座に
七夕に玉をみかける宿かな
たえぬ瀬や年のわたりの代々の秋
たゝ一夜一とせにほしの衣かな
　かへまからさりし人の宿所にして侍し會に
みぬ行とも秋も歸にけり宿の松
桐の葉のうらこくや名殘今朝のあめ
朝露に雨きく桐のしたはかな
秋は風いつともわかぬ松もなし
ちるも見ぬ下葉数そふ柳かな
ちらてわかはらふみきりの柳かな
みるはかりもろくはちらぬ柳かな
　宗祇禪師一回の追善のために興行せし會に
僅や覺し面影去年の夢
　おなし追善のためにとて人の所望せしに
身にしめて風や幾秋荻のこゑ
月の秋初風淸し荻のこゑ
秋の草ひとつ花なきさかり哉
野へみれはしかし歸も花の秋
　荻葛なと有所にて
吹かへる風や葛葉も荻のこゑ
荻にのみ吹そふ風か荻の露

ささかくせ庭は本あらの荻か花
初かりや空に懸こし荻のつゆ
鴈そなく隣や羽風はなすゝき
　或山家にして
心して風をまたすな秋の露
鹿の音を朝夕霧のまかきかな
鹿の音を今一しほの山路かな
かけや秋早苗色つく岡のまつ
　大和國布留の社のあたり人丸の御廟あり柿本寺と
　云寺にして
秋は露けにをくともの早田かな
風いつく朝霧たかし嶺のまつ
　若狭國小濱の津にして
朝霧や波の上なる秋のうみ（にしき）
　越前國一乘しにて
霧に夜は日たけて明る朝戸哉
　山城國薪の妙勝寺朝江軒と云所在宇治のわたり伏
　見渡眺望眼前也其庵主逝去の翌年の秋まかりて有
　しに或人與行せしに
水とをき江は朝霧の名殘哉
浪や磯千里も霧のあしたかな

朝霧のうへに三笠の太山かな
月や秋木の間のほかの空もなし
ほのめくを荻や末葉の夕月夜
しら雲も月すめる夜の光かな
　八月十四日に侍し連歌に
月に光名をさきたつる今宵かな
　八月十五日夜に
月今宵名を殘けり代々のあき
行末もとよひや幾世秋の月
名のみをは月におもはぬ今宵かな
なひく野はよるや明石の今朝の露
野は今宵の霧さむしるし露の色
風や野分玉ゆらかゝる露もなし
心さへ霧はあきの千しほかな
うす紅葉しくるはかりのこすゑかな
初時雨染てほすまか山めくり
　浦邊にして
夕時雨染すやはあらぬ秋のうみ
時雨きや夕日をのこす秋の海
菊に霜にほふからうへのさかりかな
程とをし秋といふ秋の宿の菊

きくならてうつろふをみる花もなし
松みれは風も色つく葛葉かな
九月盡に
見れは秋葛葉をかへるしるへ哉

冬發句

北國に侍し比神無月の初に
都やはもみちの庭に峯の雪
駿河國に侍し比出雲國より遙〳〵尋下し人の爲に
興行せし連歌に
時雨らん八雲にしるしふしの雪
明石の磯にて月を見侍し時
とわたるや浪に雲ゐる夕しくれ
あしやのなたちかき所にて
しくるへき袖やはるゝ夜夕月夜
豐原寺にして
いつくちり木のはともなき太山哉
唐船歸朝せし人の興行の一座に
からにしきをりはへたゝむ木のはかな
しらしす(マヽ)て風や山本むらかしは
さえし夜の霜のふるはや朝柏
田鶴そすむをのかへぬへき霜の松

あたらしき所をしめて家作し侍る人の初て興行せし連歌に
心經ん初雪しるく宿の松
伊勢國阿野郡にて
海はれて遠山さむき朝戸かな
三河國八橋のあたりにして
あられせし庭は水行こほりかな
今朝みるやさえし夜よりは薄氷
日も寒き月はあり明のあさ氷
今朝こほる水上ならしみねの雪
今そしる水こほり山の谷のこゑ
夜やさむき鳥の音せぬ水もなし
空に寒て月はまたるゝひかりかな
みれは雪聞は時雨る山路かな
或人上野國よりはる〳〵と草庵にたつねきたり侍しに
村時雨ぬれぬはかりのやとりかな
さ夜中山ちかき宿所にして
甲斐か根は雪に時雨る山路かな
水けふる山本うすしみねの雪
紀州粉河寺より所望せしに

さそな今朝松の初雪わかのうら
山や雪木の葉吹こぬ嵐かな
　大和國へまかりし時奈良にして
はれは雪幾村山の朝くもり
山は今朝つもらぬ窓の太雪哉
雪いつこ見ぬ山のみの朝かな
はらひ殘す山路の袖や宿の雪
　宮こにてのしる人駿河國迄はる〳〵尋下て幾程も
　經す歸りのほり侍るとて興行せしに
宮こまて心や送り雪のとも
　甲斐のしらねはさ夜の山なとよりこそ常は見侍つ
　れまとに根こし山こしある人の宿所に行いたりに
　けれは興行侍しに
雪の宿雲ゐに見えし麓かな
　神樂の心を千句に
うたふ夜や星も曉松のしも
　早梅の心を
雪に春入江のとけし梅のはな
またてさけさかはたか春梅の花
さかは春またるとをしれ梅の花
　歳暮に
おしむとは春にしらせし年の暮

此一册は宗祇古人越後國守護戸部に八十の殘生をやしなはれて住侍し。文龜のはしめ秋長月の暮とふらひ罷下しとき。其國に有人愚句を書あつめたりしとて見せしむ。雪中のつれ〳〵のあまりに。四季戀雜とわけ並て侍るを。自然齋かつはなをし候へは。くはへなと心をやる每にせしを。さらはれもなき事になすらへて。壁草といはむといへは。さもや有へからんとての年の明日けふまてのを書入つれは。もとのは二三百句には過さらんかし。老葉下草等のはゝかりもありぬへけれと。（り脱）らし其露にたにかゝらまほしくて。人のいひおもはん雫をはおもはさる物なるへし。

續群書類從卷第四百九十

連歌部廿

永仙句集

〔右舊本闕〕

連歌部廿一

荒木田守武句集

第一　守武

飛梅やよろ〳〵しくも神の春
　われも〳〵のからすうくひす
長閑なる風ふくろふに山見え(ゑ歟)て
　目もとすさまし月のこつかけ
朝かほの花のしけゝやつほるらん
　これ重寶の松の露けき
むら雨の跡につなける馬の角
　かたつふりかとゆふくれの空
何やらんふみつふしたるおとはして
　くゐつくほとにおもほゆるみち
梢よりきてこそほゆれ犬さくら
　さるまなこにて花を見るころ
さほ姫やあはれ打出さけふらん
　人はさら〳〵かすかのゝはる
さくらをや若紫のすりころも
　袖うちしほれとくはしやうけう
夕しくれ親孝行の雲井にて
　みねのあらしのろんこふく聲
瀧の糸ふんからうの緒のたえ〳〵に
　いかにふたつのこゝろほそかる
去年うみし子や古里にのこるらん
　七夜といふもいまの事なり
五日より六日になるはほともなし
　賀茂のけいはに袖はぬれけり

紅葉さす野の宮人そ雨ふりて
　おしてふくなり森の木からし
下葉ちるなりひら人やなかむらん
　しら〳〵しくそ余所にしらるゝ
くろちくの筆にてかける文もうし
　うの毛ほとたに心ありてよ
篝火にいつみもちるゝ夜半ならて
　おくひやうろふはみねの犬しやう
白旗をふるひ立られなひけられ
　雪にせかきはいましはしまて
節分や寺にも物をいはふらん
　かはらの鬼もそとへとひやうち
まめ男空打詠こゑ〳〵に
　十三夜とや月をいふらん
婦入の空吹風（一に賦）そ粉はれて
　鹿のねちかきつゝらくし箱
奉公のひまもあれかし秋の山
　女房たちを鳥羽のこひ塚
忍ふるや花のみやこにはけぬらん
　かはさくら戸に袖なぬらしそ
春雨のふれは筆さへ笠をきて
　しら鷺いかにさひしからまし
匂へとも誰もたゝ香やなかるらん
　鼻さへまれになれる此しろ
のそかるゝこともありしを命にて
　つかれはしすな山かけの庭
ひけ僧と鯨はいつくかはるらん
　とにもかくにもあふらなりけり
すへるなといひたにあへすすへりきて
　人なとさのみふしやなるらむ
ちきりしを物にたとへはことし竹
　こと〳〵しかる夏のゆふくれ
日本にほとゝきす鳴こゑはして
　たうの御門やくゐなゝるらん
楊貴妃のほゝほと〳〵と打たゝき
　朝ねをおこすほうらいの島
藥にていたつらものをなをさはや
　あさましくこそとくはかるなれ
人はたゝゆめまほろしのつえ鱸
　いしの火にてそよくあふるへき
うかれつゝ硯水にやぬらすらむ
　懐帋もかゝす物おもふくれ

君こすは獨やこよひ賦くたり
　ならさゝりける事のせうし
けふの日もやう〳〵なれやいかゝせん
　八つか七つの道のやすらひ
橋みれは三川の澤に數たえて
　ふたむら山もあはれたりけり
くれはとり屋のへふけとやおもふらん
ものゝふの音羽のかたに立よりて
　都の雨にすゝまさるのみ
　くそくをみれは瀧のしら糸
月と浪爰をはれとやゆふあらし
　尾花かもとはおもれおもはゆ
鶉なとゝを山とりにかはるらん
　ぬかれやするの野へのかたらひ
けふにあふ子日のまつもかすかにて
　きらりとみゆる春の夕くれ
鴈かねやめつきをさしてかへるらん
　はけたる太刀のつはめ鳴ころ
青柳の糸まくまても打わらひ
　から〳〵なれや道のくのすゑ
誰となく地藏をとなへ旅立て

　ほそなかきこそあはれなりけれ
ほの〳〵とみしよりこひをし文字にて
　圓のわつらひはことのはもなし
遠島の海草とてや送るらん
　松の葉こしにしやうしする比
夕附日百日はかりうつろひて
　にか〳〵しくもこひしかりけり
柴の庵なときはたをものみぬらん
　ひえなん事もしつはしらすや
をたまきをあふりては又くり返し
　はらのいたきもやすきはた物
きりはたり長命丸や合すらん
　ひやらしをうちて見るはむらさき

横何　第二

青柳の眉かく岸のひたいかな
　氷打とけよするたし浪
水鳥のけさせちことにうかひきて
　耳にもいらぬうくひすの聲
大きなる春のかうかひいかゝせん
　小刀とてもあさくおもふな
いかなりし日も打ぬかすつかはれて

引手物もやほのかならまし
舞人の道のほとりの花すゝき
徳利をもたせ秋風そふく
月影は誰か小者めを遣るらん
ほのかをしてもかとなゝたてそ
朝もよひ木丸殿のまろ〳〵と
たち花なりのちきりもやせん
いとけなき人のかほこそまもらるれ
ひたいにゆふはちはやふるかみ
あまりにも翁のゑほし前へきて
うしろをみれはさひわたりけり
ときもせぬ鑓をや供のかつくらん
あふらはなきか山さくらかり
しろ〳〵と庭鳥おほき花にきて
氣合よともおもひぬる春
霞つゝかける双帯やゆかむらん
人しらさらは名をもなかさし
ひつこめと川風さむみ日はくれて
つきん大にちとりなく聲
雪たまりかきなてかみや拂ふらん
けつりはすとも爪なゝきりそ

程もなくけふはひつしの檜木いた
こくらそうにはまけやこもれり
求聞持やまへかんなにてくりぬらん
あふなき事もしらぬ道なり
おさひやかみかたかれと手向まし
はひかゝりては哥をよむなり
藤の花さけるは定家かつらにて
西行さくらうつろへるころ
さもあらはあかなん春の十五日
くるはせにける頃は正月
みとり子や僧もおやもあまるらん
大かりけりちいさかりけり
富士の根はとうちんからを籠にて
おもしろき事きくはよしあし
見物にみな後の世やねかふらん
なむあみ笠をきぬ人もなし
忍ふにはおもてをさらにむけされや
たゝみもかなのむかしなりけり
一條もみえぬはふるきみやこにて
かみからしもへかこつ道の邊
しう取のねやすほとをや秋の暮

しくれてくるそ露かたまるそ
有明の月はいかにもひらくして
高野ひしりのきたるかさゝき
橋わたるなりはしほなく打詠め
花咲山にのとはかはかし
みよしのゝ茶のむの鷹やかへるらん
すきのまなれと春のふるさと
戀草は見えすなにやらむら〳〵と
おもひきれともきられさりけり
涙には刀のはまてこほれ落
いたひけなるはおそろしき比
姫ゆりのなと鬼ゆりに成ぬらん
庭こそあらめ罪なつくりそ
古寺は何のわけなく打見えて
つゝみはあれとしらぬ大小
猿樂はいつを晦日とおもふらん
まくりを詠めこよみをも見す
雑葬箱くすり箱ともなり果て
やまとにはあらぬ老僧の道
たうの鳩の杖をつきてやかよふらん
雨くら〳〵とさ月つきおら〔たち〕

せいろうのうらそことなくすゝみきて
物くるひこそあまた見えぬれ
百萬やすみた川原をわたるらん
くろくもあらぬ山うはのいろ
口ひるにもとより袖はあかくして
小豆かゆをやうちこほすらん
霜月の廿四日の風をあらみ
道虚日にも雪はふりけり
寒けれは物しりかほの旅ならて
けふの道やはむなそりなまし
飛鳥川淵は瀬むしの夕わたり
ふまんとおもふかはつなく聲
山吹の花そめころもかきあけて
桃咲ころはもゝも見えつゝ
西王母いか斗りかはかゆからん
湯をもあひさる秋はきにけり
三日月もたらいもわるゝ夕にて
ひしやもんたうは露のよもきふ
花さかりきのふかけふのきり〳〵す
時うつるなりいかほともなけ
やゝとなき姿とてあかたふきて

ひとりおふなの類をよむ聲
山里やさびしかるらん中のかさ
　しつまりたまへみねの松かせ
花にいま月とことゝか出あひて
雲のうちに酒の酒なり
一たびもぬるむ水なみのませはや
二見かうらをかへるくちなは
くひ玉をまきゐの松や殘るらん
あられ打ちりしやうしする比

何毛　第三

花よりも鼻にありける匂ひかな
　月はおほろにふくるゐのしゝ
春の夜の夢やさなから牛ならん
　けさのあさけはきえかゝるなり
橋板にいたかねなれはかさなりて
　こゝろのまゝのすゝめならすや
十三や酒をはたちも殘すらん
　かすは五臟の養生のため
前は四つ後はひとつやくを見よ
　なたのしほやの尺八のあな
芦垣にかゝる瓜さねほのみえて
　すゝろにはらのとくはしれかし
我かおもふ人は何をもあかさらん
　山のちやのこと海のさかなよ
はまくりの秋は楠になるをみて
　香かと月にさし出す碁
ひやゝかに何をのまんもいさしらす
　衣かへしてくすりせんしよ
春過て夏めにけさやなりぬらん
　たゝれにけりな卯のはなのかけ
玉川やすりこすらるゝなかれにて
　たかわゝおくはなをかうや鵲
いつかまてその曉のしろからん
　あら〳〵とこそをくりかねぬれ
一筆に御こひしやとかさ捨て
　ひなのなかちにその若子たち
手ならひはなとあまさかる物なれや
　あかりなんとや〳〵
はりことにくりことするは山のかけ
　にきりこふしはうき犬はんにや
なこよふに六百貫やまけぬらん
　せんのかすさへあれはなりけり

いねかての夜半のせうふうさえ〳〵て
　詩はつくれともかゝまりそする
ちやへうにはとうはか竹やなりぬらん
　花の會とてつくすからもの
櫻咲く宿はさんせうこせうにて
　春よろこふをなかめさらめや
帶をいまとかんことこそうれしけれ
　かきたえ後は中もよき比
一門にひとりもかゆきかたはなし
　かさのなをるは平家なりけり
おさなひにをはらこからやのますらん
　ねよといへともねぬそしつはう
哀にも枕のさきはちよつとして
　きほうしまても夢のうき橋
あちきなやつれていつくもなかるらん
　風もなきたりしかとをれなみ
いんきんも舟のうちには無用にて
　たひ人はたゝうたひなりけり
都をはいさしら雲のくたり月
　やかてまいらん秋風そふく
佛をはつくりもあへす露見えて
　すみそめころもすそはいかにそ
寺よりも馬をかへとや告ぬらん
　人はなにとておあしやうくはん
ちいさくてうすくて結句空ありて
　ほめとしろなくなるやそのまゝ
能をたゝすへきもあしのたらはこそ
　とをるのおとゝしひすなりけり
しほかまの櫻鯛をやつくるらん
　はたらくほとの花のめいほく
かすめとも所存しらるゝ道のへに
　おもてのきすもつかぬたひ人
山たちのほうつき鑓はさひ果て
　いとゝみしかくおもひあこかれ
通路やなか〳〵しくも匂ふらん
　たち花てらもからちなりけり
正月の柑子くりけの伊駒やま
　麓のさとへせちすゆるころ
瓶子をは野への胡蝶につゝませて
　ゆめ〳〵あたにあらししやうくわん
月みてやときはの里へかゝるらん
　よしともとのに似たる秋風

やみ〳〵とうたれにけるを礁にて
　おそろしきには何かうらみん
報こそいかにもいたき物ならめ
　めくりもあへすはやはちなり
いとけなき人は車のしちのさき
　行もゆかれぬ道はころ〳〵
ゑのこにもあらぬいぬこもおこりきて
　いける身なれは果報あらめや
大なる耳とてさのみかこちなよ
　うききゝ見るに道理なりけり
月出て狸や浪をはしるらん
　くすりもいらぬ秋のゆふくれ
荻はらや風のはやるもしつまりて
　ともあらの小萩せうき大臣
裏にも紫すみ繪かきくらし
　窓にせめてはなるないりあひ
貝ふくや南の海にきこゆらん
　とくせいやりのたつるふたらく
おもしろや目のしやう迄もつよくして
　あへのゝはらはきはたのみなり
こかねなとまつむしほともみえさらん
　おやすからある秋風の比
月の夜にたかれてぬれは匂ひきて
　こしのあたりにふしをあらする
人のたゝさすへき物は竹かたな
　おくひやうならは千代もへぬへし

姉何　第四

鶯のむすめかなかぬほとゝきす
　椎卯の花はそたちきにけり
山里のたのみはいかてにほふらん
　みやこおゝゝにあはさるへき
旅衣つまにせんかた十二三
　あひしやう文のことつてもかな
おんやうに捨れぬるも人に似て
　うつりかはりて猿とこそなれ
花の春紅葉の秋のもゝのさね
　よまれもやらすうたてかりけり
玉つさをなとなか〳〵とつゝくらん
　まいらせ候やまいらせ候や
そなたへも又こなたへもいひ〳〵に
　かみすちほともちかはさりけり
くしひきのさんをゝくにもたゝならて

名をはなにともさためさる比
秋風やたゝ入道と吹ぬらむ
こよひの月はくまさかもなし
かんたうをうつかときけはから衣
目鼻をつゝむことのせうしさ
秘佛とてひするに誰かまいるらん
けさあさもよひもよほしならへ
きの國やいろはもしるく見えわたり
ちりぬるをわか吹上のはま
雪に鳴ちとりとやらかかすかにて
竹もまふたもおほひぬる門
言葉に心ひくかはよからまし
かきぬるも人よみぬるも人
座頭へとこせのもとより文のきて
ほろりと目よりなみた落けり
僧こそはうつほつくるも殊勝なれ
なむからたのうとらのかはとや
あら／＼と風のうそふく松かけに
茶はひかれすよすみよしの里
高砂のうはかふところしめりきて
むかしもいまもしつくなりけり

のゝこんと猶めいしんやおもふらん
日をわつらへるけふのさるかく
紅梅をこうはいさんに成もせて
花そめころもさらはにほふな
山吹に立なん名こそせうしなれ
宇治のわたりに針は見えけり
橋姫はあねか小路のいもとにて
水あふるなといさめぬる聲
はたかにやならんと斗おもふらん
小袖も帯もみなおろさまし
さしぬるはさめさやまきの刀にて
こまかにくとき都路のすゑ
くりことや五茶あたりの物ならん
夕かほふくへふくへゆふかほ
庭鳥は水雞くゐなは庭とりに
なにとかさためひよ／＼の聲
横笛やたてにふけともならさらん
もしわるくかとおもふ夜の月
曉の秋のあらしに打あてて
露こゝろへぬなかめするなり
長からすさらは山のは丸からて

みすみになるはくるゝ日の影
[illegible]や花のいろこかた
そこに蛙のすむ岸の山吹
蛙にはなにとてつのゝなかるらん
父のためにはこゝろおるゝか
しやうふんはうけとりぬるもうらみにて
葛はふ岡の山田一たん
秋風に誰たのしくもなるこ縄
辨才天に月のさやけき
〔礼讃〕
かそふねはこよひは十五とうしにて
としなみしるく經をこそよめ
もしも人とらすはいかにふせの海
たゝかくれとそおもふ越中
旅衣たち殘したる布を見て
なみたのうくれ傳そあるへき
浮世とてこひにすきこときかしたゝ
しやくろなりけり命なりけり
鏡ときさよの中山けふこえて
あつまのかたにいそくよめいり
吉日や出てもくるゝかけならん
のめはかんろの水の冷しき〔ご獻〕

我朝もしけりへたつる柳かけ
[illegible]になき[illegible]わたひ[illegible]
[illegible]はすね物ならて
あま覺なれとあまくあらひや
ともすれはくひつくことをとりとにて
あふるに似たるもろいなりけり
あちきなや何ゆへいたうこかるらん
むすめをつるゝけふの舟道
松風は紀のありつねか夕にて
花のおるを[illegible]もみん
吉野山くたるそしるきやよ彌生
役にしのふ宿のむらく
戀せしと何もいはすや成ぬらん
御[illegible]川原をすくる會下僧
わたうよりほかはこゆへき物ならて
車なるかなまなことなるかな
しのへきや夕とゝろきに入ぬらん
にしはるかなる一はんめ比
東路のはてとおもへと恭を打て
しちやうにかくるさのゝ舟橋
勤進や月日も遠く成ぬらん

表紙もふるくなる奉加帳

竹何 第五

給あはせは十二のほねの扇かな
　ほたるともし火かきもかきたて
玉くしけまたかたふたはあけやらて
　こすゑ詠むるなりはいたいけ
花ふさをちふさなりとやおもふらん
　むね打かすみ行かたそなき
年こゆる時はくれともいけとられ
　しけひら貝をふかれぬるなり
風呂に入千壽のまへはかゆくして
　かれたる木をもたゝたけやたけ
見るにたゝこほる姿はうるさきに
　のくるものかすはくもはかれす
人になとかうやく狐つきぬらん
　風ひくといひ犬なりといひ
日の本にいこくのえひす鼻をひて
　はる〳〵きつゝむねつふすなり
ふところのみやけの熟柿いかゝせん
　孫に見えたる道のかへるさ
夕されは野への重寳傳へはや
　さねもりなれや深草の里
ひんひけの色は墨染さくらにて
　寢箱をや花の手まくら
何とてか春にはかとのなかるらん
　世をおさめぬるこゝろうつくし
紫の色にはんれいさそはれて
　こうなりなすひちきりてやみん
非をうてはしやうしさせんの言葉に
　ひれありけるそをき所なき
佐夜姫のふとるや月よみえぬらん
　ちからをいたすほしあひのかけ
すまふをは草の露より猶とりて
　まつ一はんに秋風そふく
昨日かもうへし岡邊の田代殿
　かろ〳〵しくも山ほとゝきす
夏衣いかにもうすく縫たてゝ
　春はつま戸のことくなりけり
けふははや花もきりゝと押ひらき
　いつまてにきりつむるわらひ手
かうかいは人のとるへき物ならて
　よしさもあらはあれなあからね

柱へもとりつきぬへき道のへに
　やとるなりけりすへるなりけり
へうたんをみれは山からなまつにて
　うちわられてはよみちのみとる
百首にやはうとりそふる中ならん
　うきこひ草のねまてほり川
きるといふ事をいはぬは都にて
　旅と太刀との行衞しられす
朝ほらけおさ舟とをく漕出て
　あまのたつるは波とはた物
錦にはにしいかはかりまかふらん
　それもからもの是もから物
目きゝこそ大かたならぬみやこかな
　町へいつるはいかめしく見ゆ
手綱をもからすはかまはほころひて
　はれかましきといふもいつまて
日はひるになるを狩場におとろきぬ
　十郎殿そしほをたゝるゝ
けふは又とらやくしとやおもふらん
　佛も人をくはれなはうし
極樂はにしへかたふくひもしらて

　すゝしき月を手ならひにせん
そたてゝは能をつけんの撫子に
　やまとに一の名をもあけはや
おもはすもはちかくらくの初瀬にて
　この山てらはせうしにもなし
松立るみねのあらしの福の神
　のとかにいつかうけもとるへき
朝な〳〵手をむなしうし霞にて
　春のあはれやうしにつけまし
花に風猿はうつほの樹中に
　月にむら雲麁鳥にみつ
曉の秋しくれよなあはれかな
　夜なかなりとておめきあひけり
物かたりするはきかすときかすにて
　大事はさてももらすへきかは
能はたゝ口のうちにもありとしれ
　舌つゝみをやうちならすらん
誰かうへもちやのこといへはたのしみて
　天下太平國土あん息
いつまてか梅のさねにはまかはまし
　人のこゝろをかみくたかはや

おもひ人〔一人〕忍ふの山のおくはにて
秋風ふけはいろつきにけり
またよひの月やてらされかぬるらん
とゝろ〳〵の雨はとをさし
なるかみにかき紙一重かさなりて
とひぬる雲もしふくりにけり
あしたつやふひんとて猶袖ぬれぬ
弓をいつゝもきみに見せはや
我かこひや十三そくにあまるらん
うかれこゝろにたひもたまらし〔二字缺〕
足を空になす斗にもすへかね
神代もさこそきるゝあかゝり
大原やそくいをしぼの山見えて
みねに炭やくひいたけのへら
さきありとむなをはあふれ年の暮
春はほとなき比のつはなみ
鳥は古巣花はねふとにかへりきて
山のおくなるものゝ大きさ

唐何　第六

かさゝきやけふ久かたのあまの川
はしふきわたす秋風もかな
松杉はここか柳は移ひて
行てとはゝや山里のなか
雪はたゝなにとふるともたまるらん
ぬふてふかさもさきはときけり
鼻そけや世をうくひすとおもふらん
花にわすかな人のいつしん
欵冬のさけはせんほうはしまりて
かしましきかな春のふる寺
墨そめと余所にわひぬる色をしれ
しろかねさいく水もむすはす
目貫よりまつ山の井をほりもせて
目かけもあつきしゝ二疋つれ
常夏の花に文珠の立ならひ
妙に利根にりこんならすよ
法花經をおほへすまして忘るらん
くらの道よりほかはなきかや
謎をかもしる人にせんさかいにて
けつり物にはたこ砂の松
しやうしんのけふはいかにも吹風〔原缺〕
山ふしにもやことしならまし
正月の一日のゆめにとひを見て

かゝすに假つゝたのもしき作
里とをみ夫婦ねて行夕かすみ
　子をはいつくに岡のへの松
いさゝらははらむ山田をなてゝみん
　衣ももたすうつこともなし
盗人にあひぬる坊主森をとめて
　物さひしくもくまぬなりけり
淺茅生に風にひきたるめゝくすり〔之歟〕
　なとかは貝をあはせさりけり
獨つゝあはれたもつやいなやにて
　大弓いるはもとの事なり
世をおさめ民の〔り歟〕おとなや詠らん
　かまとのけふはたつはおもしろ
信濃なる淺間のたけはうつほにて
　すかのあらのゝくさやはくらむ
草枕おそろしき風のふく聲に
　ぬるくもあらすあつくもあらす
よきほとに酒やわかして出すらん
　霞のうちにこうはいりけり
人かけに春の雛ともおとろきて
　忍ひ〳〵に花をさすころ

見ぬ中は見たき物にもあるなれや
　鬼かといはゝいひてきかせん
目大きに口ひろくしてしやくまきて
　やせたる人のことはたゝかひ
ひゆるなとくりてかけははかけとめよ
　いつれはあふた八はしの水
風呂に人いりてはあかをかきつはた
　みやこほとりのたしなみの色
津の國のさそ〳〵匂ひわたるらん
　布引よりもおつる瀧たき
一すちにすくなりけるを雲井にて
　君はぬくともおほしめされす
今さらになとほうけんのさやまつり
　をよはすなからあふらぬらはや
久かたのあまつ乙女のはなのさき
　たゝきりとこそおもひやらるれ
玉手箱さゝまくほしくおもふ世に
　ふる双帋をはいつちさためん
葎生る宿はからとち大和とち
　かけさはらすはふたつならめや
天目のはたより角をふりたてゝ

虵は人をのみ人はちやをのみ
　いけにへのあたりにするやしとならん
くわんたいなりとけんくわ出にき
　きれ／＼になりぬることはあはれにて
むさしをさすと見ゆるなりけり
　辨慶やはちのあるともしらさらん
うそをもふかすけなけなる比
　そゝろにはなるもはかなく太刀はきて
天神さこそつらきみちのく
　月なみや末の松山越ぬらん
あたしこゝろをもちにけるかな
　よはひをもさつけぬるとて油斷すな
川をわたれは鶴とたうかめ
　向かるも見えてあかゝる下はらに
いつれ手染の糸のへそのを
　衣をやいまむまるゝにきせぬらん
はなのあたりのなりはこひたり
　誰となく一たひゐめはもゝちとり
ひまのみ見えてはかすみの山
　楊枝をやかみをやけつり捨ぬらん
なにもたまらすとんせいの後
　物きれの五郎入道ときたてゝ
月にかけんもやすきしら浪
　我宿はたゝ龍宮の秋のくれ
とよ玉姫や萩のした露
　うのは吹萩吹風もしつまりて
はらのくすりときくをたつねよ
　國々をかゝへてかけやまはるらん
きひのかす／＼みゆるたんしやく
　なに／＼とたゝのりと今行あひて
くわんしんちやうをよみ入しらす
　ちやう／＼ときこえてとまることもなし
かねやうつらんはくちうつらん
　寶ぬりは正體なしの刀にて
おや十代の跡の夕暮

刀何　第七

錦かとあさめにほそき小萩かな
　もみちおりたくふるみやの比
狼にかへまくほしき鹿鳴て
　さこそは月のやとる水かき
のひあかりみれともみえぬ足もとに
　くひのあたりのくるゝ山かけ

草刈やのと笛吹てかへるらん
　つほところをもおもふこゝろか
花一木せいからさんに咲そめて
　たうとの鳥のさえつれる聲
をしへつゝ七種なつな打たゝき
　あはれなりけりしつかおはのは
山里はいとことうしや送るらん
　他人よりなほ物そさひしき
時雨ふる聲とを〳〵におとろきて
　槇の下葉に罪つくるところ
地獄へは打くもりてや落ぬらん
　よはひの末そときみかくへき
去年よりも今年は腰はかゝみにて
　いつまて杖をつかんとすらん
嶺のみか山も尾なかき里とをみ
　きつねに似たるものゝかよひち
小町こふ四位のせうしやう狸にて
　もゝよもおなし丸ねまろやき
灸をするかたはやかてや家作り
　なか〳〵し日もくるゝ番匠
花のかけいくたひ水をのみならん
　春も身にしむゆひをおるなり
深草に連歌の初心あつまりて
　いさやふし見のたけくらへせん
わらふにも腹たゝぬこそ上手なれ
　猿もくすしをすると見えたり
水にすむ月と詠とをとり〳〵に
　涙すさましくなにおとりけん
河原とはいへといしなこ〔は脱歟〕なき物を
　たかこむすめの身をこほたす
長閑なるつゝらのふたの朝ほらけ
　うちくもりにて春のとを山
硯まて若紫のまとのまへ
　くろかる色はあるやなしやと
灰燒の物はいかにもかすかにて
　ふくりをみれはおほはらの里
世をいとふ人ははりまつおもひ〔に歟〕きて
　ぬはんきけんもせぬこけ衣
侘ぬるやとにもかくにもにかるらん
　きこくまてにはたのしからすや
せんしてものまん大こくゑひすにて
　おもしろき事きくはよしあし

猿楽のかすや暦にしらるらむ
　くわんせこんはるとんかふふにち
かならすも薪の比は手向して
　夏にこゝろのなとかむかれぬ
かわなから瓜をし人のめかなくに
　ゆふかほまてもつくるなりけり
世中は長柄の橋とふくへにて
　さんせうことにむせわたらはや
からふりのす物かたりのつれ〴〵に
　くやしき事はけんふくにあり
浦島やはこわう殿をあけぬらん
　むかしかいまにいたるまてこひ
すきまなくあらさるをたゝあるにして
　よろひの袖にこても見えけり
武士やへいをぬるにもすゝむらん
　せめくる事は何をきらはす
枕より跡よりこひと鮒かきて
　ゆめのうきはし又はまなはし
せをわたる道やつらくもしらさらん
　めをといさかひたゝかへる聲
夕ま暮かううかうそは物ならす

　闇とを〳〵にさこそ〔乙脱歟〕きへぬ
あはちかたかよふ千鳥の耳こにて
　いく夜ねさめを須磨のせきしやう
暁のもしほとかやかみたれあひ
　こなたかなたをやかんとそする
足引の山やかつけをさそふらん
　ひろへることはいつわすらめや
道のへの刀をみれはあふひにて
　夏きにけりとほうも見えけり
ほとゝきすなくはなんたやこほるらん
　もとの事をはきゝたくもなし
今やうかよしとそおもひあはせきて
　打なかむれはみくさにほへり
我宿のきゝやうかるかやおみなへし
　籬のきくの花なゝさきそ
あまり月しろ〳〵として人こひし
　尋ね行こそとふはかりなれ
花よりもこなたのこみそたまり水
　春にあはひは身をやなけまし
大かたにすゝきはらはん物ならて
　あかにむもるゝみな月のかけ

土用にや耳のあなをもほらさらん
やめぬるまゝにつゝく八專
いつとなく物しりかほはひもやらす
うるしに似たる僧のかたこと
なむやくしぬ〔ろ歟〕りくわう如來唱へきて
あはれくすりもいらしとそおもふ
あちきなくちいさかりけるからはこに
目に見へぬなりめをかけぬ也
金をは鬼ももたすやなりぬらん
あたちかはらのくろつかの太刀

霜何　第八

名乘てやそも〳〵い〔こ歟〕よひ秋の月
鐙ふんはりはつかりのこゑ
轡むしゆるす手綱やなかるらん
そよやあちこちかけまはりけり
竹よりも猶つれなさはひさのふし
木の葉打ちる比のやきいし
神無月起請のさたもしくるらん
物のうするはやさしくもなし
月花にうかれし宿へはい入て
人のめにこそ春のくちなは
かへるをや辨才天ののみぬらん
歌をはさらによまぬゑの島
都にもはやるは笠のしうくにて
雨はふりつゝつまるともなし
打しめりさたまらぬこそ空ならめ
ふとくあらすやほそくあらすや
さらは人雨あしなからこいならて
もすそかきあけつく〳〵と見る
はるか〔に歟〕るも行へきやはにおほゆらん
いそくとならはおちぬへきくら
いかにせんあんけつのたうの一はし
水うちなかれなくはかりなり
あしたつや耳のあたりを過さらん
ゆみもちなからこひんはつかし
花月とはいへとはけつと成はてゝ
都いつれは山たちにあふ
門出していは〔れ脫歟〕ふやいはゝさりけらし
めてたけとも涙落けり
君か代は鼻毛ぬくへき物ならて
なかいきするは手にそしらるゝ
玉のをや十いろはたいろひろくらん

　うしろほそくもをしさけにけり
あすしらぬひうち袋をたのむ世に
　くちのうちにも入は山ふし
かねをたにつくれは人ははくろにて
　いか斗かはわかくなるらん
鏡にて見よや〳〵のはてもなし
　むさし野よりもなを大ひたい
秋風にけはなけれとも詠して
　ありあけの月ののこる〔マヽ〕朝
せいしかと夜さむの窓をおし開き
　にしへきぬるは衣をもきす
人はいつあつまからけに成ぬらん
　たひに出てのかわこからうと
都こそ用心すへき物ならめ
　似あはさりける弓のおふくろ
のふし見よ人の母この出られて
　大わたほうしふるはれにけり
こまかにと病者やくすりおもふらん
　まさこにたてる松のふくりやう
歌をこそよみて心の丸からめ
　筆はなきかやものゝふのみち

宇治川をわたるするすみ油烟にて
　いろこき袖やきせんなるらん
おられてやくんしゆの中の櫻花
　春の日くらしおされぬるのみ
霞たつころに牛王はまきれめや
　なにとて佛しゆしやうなるかけ
いんやうの神もありけるともし火に
　さこそは文をかけるなりひら
杉原の二てうのきさきこひ初て
　かさなりぬるをとかにさらるな
釣さほは何をつるともおもほへす
　かやのうちにはなをや飛らん
いとゝたにかほのあかゝる人なれや
　ほうさきのみかへにさきもらし
涙こそはれやかになき物ならめ
　けふもとはれすこゝろまう〳〵
ことの葉をいひちかゆれは牛に似て
　柳はみとり花はくろなゐ
木のめには出るもいるもよしあらす
　さきほの〳〵とさへかへるころ
いつくへもくつといるへき春の風

はらめてをせよ年のくれかた
埋火のはいたてのみはかひもなし
雪のうちにやきつて出らん
甲斐き青葉の竹の一かつき
笛はいふにもをよはさりけり
あつもりの尺八いかに吹ぬらん
あそひの道はうすくならすよ
子ともみなかたひらきるとおもははや
ひへ〳〵としてむれたちにけり
りうならや沖のかものさしつらん
しほのうわひか又はそこひか
苫のやのひしくるほとにぬるもうし
しくれふるとも雪はふるとも
年の暮錢もつ人のことのはに
吹風までも打ひらめなり
おのこかとかきあけみれは姫小松
こゝろはやみにこゝろはやにゝ
春の夜にからやくなくはいかゝせん
月はおほろに人のはれもの
花にたゝかくるはちらしくすりにて
くり返してやかみにつゝまん

いひしめて又いひしめてほの〳〵と
しのゝめあくるきやうにんのけさ
念佛やひかしの空の物ならん
移はさゝらをするかかなりけり
うつの山うつは狸のつゝみにて
こせにはけたる蔦の下道

京何　第九

こほりねと水ひきとつる懐紙かな
きりよりほそき冬の日のかけ
ほの〳〵ともみに紅葉のちるをみて
たんしやくかくにひわなゝなひさそ
いとゝたにさとうまかひのつゝつさの
しやうなりかたれともし火の本
こよひはや時は牛若更はてゝ
よはひのおほろ月にひか耳
鶯の聲やふたつにきこゆらん
花の木すゑのほそきひよとり
ひたすらにしやうことしるはいかなれや
あかき色こそとくと見へぬれ
しやくまきてのむへき物はくろ藥
しやう〳〵まひの日までまふらん

あふなくも打わたしたるはしかゝり
　月にこゝろをしかとさためよ
秋風の吹てけ〔くり脱歟〕なけにおくひやうに
　かちあれはにけくりもあり
食籠のふたは何ゆへあけぬらん
　留主にをきしは小兒ならすや
さひしくもさそ物おもふとの引出物
　紙一てうにあふき一ほん
千早振翁をいさやのこはまし
　いくたひとなくはなはたゝりし
暮るまてつまりぬるこそかなしけれ
　箱のふたとはなりもならすも
かたえさすおふのうらはのなしちにて
　いもめへいらす月はとをやま
長夜はいくね覺せんねつきせん
　火によくあふれ前ようしろよ
雪の暮女若衆の尋ねきて
　なりひらひまやなく侍らん
戀路にも霞こめたる里のまへ
　春もそとはもたつ森のかけ
若菜摘生田の小野の小町にて
　まてしはしとはうはかことのは
わらわへの出るや雪の朝ほらけ
　かのこまたらよかのこおとりよ
夏狩にいられぬるこそいたからめ
　かゆさもなをるゆふくれの空
入あひはめやきかねにやなりぬらん
　なをありかたくきこえきへけり
あくはたゝこゝろのうちに打すてゝ
　源太いつまてしやしするらん
七日けふあひもゑひらの旅ほうし
　のといたけれと名をやあけまし
耳はさもあらはと入やしらるらん
　六十斗をくるなりけり
日の影もなか〳〵しきは源氏にて
　山とりの尾の春のこかゝみ
花はいく門をたてゝやみへぬらん
　さくらかもとのせいめいか判
ぬれ〳〵と蘇民將來朽やらて
　浪のそこにも家つくるなり
人はたゝ脊匠かいやたのむらん
　ひたいのあたりはしろく見へける

そめ殘すしかまのかちのはかまにて
　さのみにはよしたしなましとや
さらぬたにうきなもかけをつゝけられ
　ひたいよほうよ又はおとかい
世中にけぬきのなくはいかゝせん
　これ第一のれうしなりけり
千句はやはしまりぬれと人はこて
　くせとてなにもおもしろからす
それはまよひこれはあまくやきこゆらん
　たゝのまんちうさたうまんちう
少人のいにしへいまのひとりこと
　いつかほうしのうかひ出まし
まうくるゝ又まうくるゝあま小舟
　うけかたきこそにんしんとしれ
何までもくすしはしちをおきぬらん
　やふのすみへもおもひやりにき
佗事をするは田舍の儒ゆふに
　みやこのかたへ手をすりにけり
妹にこひ文かく墨はみしかくて
　一寸はかりありといはゝや
櫻花なと光臨をしらさらん
　春こそちろり〳〵なりけり
曉の明星かすみもれいてゝ
　しろきからすかとふといふ人
いか斗鷺はくろくも見へぬらん
　きとくあらはす松の一もと
ふたつにはならすもかなと祈る世の
　七日に中はわれそめにけり
牛の子の尾やたなはた爪ならん
　月にまけてもしつを見ましや
木のほりとなりて梢は移ひて
　さかさまなるはこひちなりけり
いくたひか君かかたへはよはるらん
　たのむのかりをむしる春秋
親の日も空おほれして詠して
　いたはしといふ身こそおほけれ
佛にも手向る物は花しやくろ
　柳櫻の寺はあちきれ
春はたゝ僧とひくにをこきませて
　夏はいつくへくしてゆく空
ほとゝきす鳴はなんたやこほるらん
　夜半またくらうさこそひまなき

判官はさいくをつれて忍はれて
　小刀にてやつくり山ふし

墨何　第十

から笠やたゝえ鏡のけさの雪
　氷もいくへあつかみのいろ
あしつゝのうすきを月ややふるらん
　鹿かとはかりつのゝあかつき
ね覺する秋の枕のかたつふり
　露のふかさよあしのはやさよ
むら雨もまたひぬおかはよけてきて
　さかもりになる山の邊の里
赤人はこうたをさへやしらるらん
　うそをいふかとおもひぬる春
鶯のあかきかあると告られて
　はねにや花のちりかわるらん
矢はいとゝまれなる物とさはらめや
　いくたひとのこふゆきひら
もしほより猶たれぬるや跡ならん
　松のおほさよはまのおほさよ
山里と人はいへとも碁をうちて
　みやこ出てもさかりさりけり

進上とたよりの文や送るらん
　しやうくはんをこそして見るへけれ
雪まなき比はたれにもきらはれて
　家ことにいる春のさむけさ
今いくかありてか花ははち開き
　あつき事をはいはしたとへし
夏の日のかけにたしなむ程みえて
　こかねつくりの太刀のそらさや
涼むとて忍ふになにのおしからん
　門のうちへはひとりましませ
福の神ひんほうかみを伴ひて
　なと大こくをかたらはぬそや
甲子にふりつることよ雨のくれ
　うつてこそけにさやかなりけれ
太鼓には月毛の駒やはきつらん
　慈悲をかゝるははかなかりけり
あたけなく觀音いらふ人見えて
　十八日の松風の聲
涼しやと豐後の國にくたるらん
　わつらひならぬたひは憂也
はなむけをほたるはかりも送りきて

情のあるはひかりこそすれ
尋ぬるは心みんとやおとすらん
　いのちはよしやあしの名殘に
まはらやとおもふこゝろはなにはかた
　旅もゑほしをきちのとを山
おりにふれひつしはひさまつくとみて
　佛さへたにこひをめさるゝ
夕暮の壁打詠めなき不動
　ひはなちらすやかなしかるらん
あひ引にひくは小櫻をとしにて
　春とはみれとこはくこそあれ
松に咲藤くしらとやおもふらん
　浪にいるかはやすむこゝろか
大臣はふなはたをたゝ枕にて
　ねゐるなりけり〳〵
きほうをやけふのゆみやに謌らん
　はけしくつよく風のふくにも
世の中はきたのかたにもありとしれ
　南をみれは己かおとこ山
あちきなく笠ふか〳〵と紀の國や
　すゝきとのとはたれかいはまし

名をつかは鯛三郎やます五郎
　刀にはたゝ庖丁をさせ
ふをいふはをしくつろけてよき物を
　月よむ歌やのとにつまらん
しふかきのもとの人丸秋更て
　あかしといへとあからまぬなり
ほのくらく物やはらかに浪のうへ
　袖ぬらせとやてつきいむらん
戀草はてんなんしやうになり果て
　おもひをもせよけきやうをもせよ
名をあけんとは何にもきしらめや
　ねすみの世なるいくさなりけり
猫ちねの扇をいるはやしまにて
　つみにもあたる松のした道
われてなと都を遠みおちぬらん
　いつみへゆきてまりをける比
誰かきるしのたの森のくすはかま
　秋のけしきやいとゝいんきん
山のはにかしこまり入月見えて
　よしわすれんのけさのお情
さのみなと色このみとはいはるらん

れいもせられぬさいこ中しやう
手にすへて行はましろのたかあした
　雪はらちちりあふなかりけり
袖かへすさむきこしけのたゝならて
　日にてられつゝまひをこそまへ
白拍子くろひやうしにやなりぬらん
　しつからうたひはつゝくともなし
かり衣かいたらうくたりやふれあひ
　かたのゝはらははせをなりけり
秋風にきんやの里やはれぬらん
　わか身ひとつはもとのねふとそ
月やあらぬ春やむかしの針ならぬ
　つくとしならはかすまかさはや
花の比つ(れ歟)まれむしられいかゝせん
　すみのましりの野へのほうひけ
ひより鳴聲に大ちこ打出て
　れらしならすやいつく飛まし
橋まても刀ぬくとや見へぬらん
　みたれやきはの宇治の柴舟

追加

梅そめはこぬ春まねてたもと哉

　ひらり〳〵の雪よあふきよ
嵐吹けふのまひ人飛つれて
　をみのころもに鶴のけころも
位こそ空にしらるれなくなとよ
　日なかきころはしいとやいはん
花さかはつけんも馬はねりつへし
　つかひはきたり牛にくらをけ
舌をたれねふりにけりなこひの道
　たま〳〵あふはあつ〳〵として
ひやむきに猶うとんけやまさるらん
　桐のはかなくなれる冬され
火箱とも見えぬ斗にこかれきて
　又あふなきは露のいのちそ
しやうりやうやとらふす野へに通らん
　くれ竹の葉のうらほんの比
念佛はふしをあらせて申せたゝ
　すみたかはらのくすりなりけり
都鳥はしとあしとはあかたにて
　たひにしあれはうつくしきのみ
そことなく手にもとられすかけ捨ぬ
　なをふしめくやよるのかつらき

山伏のこしにつけたる貝ほらけ
　いかなるかたへとをる爻はこ
細工とはいへともしらぬきりのさき
　さひはつるにもりこんなれかし
しんほちはいふ事さかす寺ふりて
　まかはんにやはらへ庭のした雪
かんきんやうしろさむくておとまふしゝ
　ほしにあたるほことし大屋へ
廿五日になりぬる人の釣をいて
　此月すゑはゆかみすちらす
松よりも杉かよしとやおもふらん
　横川にたてる志賀の明神
大作のくろぬし色の鵜をすへて
　薪にあゆをとりやそへまし
水ぬるむ出家こゝろよまてしはし
　しつた太子の過る春の野
ひはり毛のこんてい駒に打乗て
　花のすかたをほめぬもそなき
おもかけや猶此里にはやるらむ
　うらはをみれはほうもはれたり
あまのかる藻にすむのみかむしくいは
　日もいふなきにましなひやせん
山風のはけしくきふくならひきて
　初瀬の寺にするは奉公
殿原やもろこしまてもきこゆらん
　にしきにまさるけふのこはかま
もゝたちをとりて古郷にかへりきて
　天文九年しくれふるころ

右の誹諧は。そのかみ獨吟千句立願ありけれと打紛。又は成かたく過しけるも空おそろしく。いかゝはせんのあまりに。御鬮をとるへきに。一ならは本より。二ならは誹諧のあらましことにて。あはれ二をりよと念しければ二をりぬ。ありかたさかきりなく。大形千句は三日なれは。これはわつか二日にもたらさらんに。おもひのほかになかひき。夜はね覺かちにもよほし。かのへさるには二百韵にて五日につゝりぬ。そのおりふしにやありけん。周桂かたへ此道の式目いまた見す。都にはいかんと大方のむね尋しかは。かゝる式目は予こそさたむへけれ。定めはそれを用へきとの。されたる返事くたりぬ。あはせさらは此のたひはかり心にまかせんと。所にいひならはせる俗言。私ひれたるこゝろ詞。一向ほうほつうつゝなき事のみなれと。あまたの中なれはうすくこく打ませけり。扨はい

かいとて見たりにし人にわらはせんと斗は如何。花實をそなへ風流にして。しかも一句たゝしく。扨おかしくあらんやうに。代々の好士のをしへ也。此千句はそれをもとちめす。とくみたしたき初一念斗に。春秋二句むすひたる所もあるへし。されとも正風誰人の耳にも入ましきに。いさゝかもきこへんは。はからさるさいはいならんや。其上粉骨妙句なきにしもあらす。またさしあひも時代によるへきにや。しいてなをさんも執心いかゝ也。しかるに誹諧何にてもなき跡なしことゝ。このまさるかたのことくさなれと。何か又よの中それならんや。本歌連歌に露かはるへからす。大事ならんか。されは兼載のこのみにて心ものひ他念なきとて。長座にはかならすもよほし。庭鳥からつほなるとゆめを見せむに入に一はしをわたり。宗碩は文かよはしの白讀に入りあひのかねをこしにさし。宗鑑よりたひ〳〵發句なとくたし侍り。ちかくは宗牧一二座わすれかたく。それらをたよりにておもひよることしかなり。追加五十韵おほけれと。祇公三島にて千句二折をおもひて出る物ならし。扨古来稀れなるとくきん千句成就。松の葉の正木のかつら日出たくや侍らん。

荒木田守晨句集 稱神路山

〔右舊本闕〕

續群書類從卷第四百九十二

連歌部廿二

贈從三位元就卿句集

〔右舊本闕但宜參照本書卷第四百四十三所收贈從三位元就卿詠草〕

安宅冬康句集

〔舊本闕〕

連歌部廿三

梵灯庵主返答書上

むかし數寄の翫に立交し比は。友にいさなはるゝ事も侍き。我も興に乘して人を誘引する事も侍き。其比はみるもの聞物に付て。詞をもふけ心をも得侍るやうにおほへしかは。交もいとはしからす。數寄の心も甚しきなるへし。世をのかれて後は。なに事もたゝ耳のよそにおもひ侍に。いま此一卷を披見仕にそ微におとろかるゝ心地し侍る。さま／＼の題目。いつれか分明にその心をしらん。されとも覺悟のふんはかりをと。あなかちにいなひかたくうけ給候に。一筆しるしつけ侍るなり。

抑連歌と云事は。女神男神のふたりして唱給ける神詠をおこりとせり。それはさもこそありつらめとも。世に是をしらす。素盞烏の尊のいつもやへかきの御歌よりぞ。あまねく世にも申傳侍る。日本武尊の筑波の御句に。火ともし人の付申たるよりぞひろまれりける。代々の勅撰にも入られ侍れとも。多くはみえす。是みな諸人のしれる處なり。後鳥羽上皇定家卿家隆卿なとに御合られて。數を百韻にさため。法様なとを仰てしるしをかれ。其比歌の道しれる人かすをしらす。いつれの歌仙も雲上の筵に連歌と云事をすて給はすとこそ承れ。其後為家為氏なと此道の棟梁にて堂上に侍りき。又地下に善阿法師と云者あり。數寄の物にて救濟順覺なといふ門弟あまたあり。花の下紅葉の蔭に宴席をのへ。人をあつむる事あり。かゝる人達は地下のものなりと心得侍はをかしき事也。或は仙洞或は竹園。皆月卿雲客の筵にてこそ侍るを。地下へ下れりといへるは。あしく心得たる也。せめて救濟。近來周阿等道の棟梁にて。大樹

この風を學ふ人多かりき。今は彼兩人もなし。誰を博士にし侍へき。おき〳〵に執謙するほとの達者も侍れは。蘭心のまゝに成もて行也。

一連歌の付合の事。たゝ前の句によくかゝりて案すへき物歟。一句をなみ〳〵としたてゝ。前句を捨へきかと。初心の人あまねく是を尋られ侍なり。いかなる靈達の人もいつれこそより侍へきとは兼て申かたき事也。唯とりよるは作者の調法によるへし。攝政家の御手の甲をあはせられたるも。救濟・人か心にあらす。さためて御同心かとおほゆ。

一詞のよしあしの事。上手はいかに事かけ侍とも。聞にくき詞を口より出すへからす。これ私の詞にあらす。先達の付にまれなるなり。至極練達の後。ともかくにもこゝろにまかせて。しすつる事侍るにや。周阿か句に。

宿もなき山の遠みち雨ふりて

後に御前にて沙汰ありしは。遠道と云詞。いかにおもしろき事を取合ても。聞にくかるへき事なり。此句周阿か詞つきにまきらはしく申侍。上手の調方毎事如此候。

一古と今との連歌かはるへきにあらす。當初ふところかみ扇なとにかゝれたるは一結に過す。其跡を追侍らんも大やうなるへし。攝政家の救濟を召れて。色々に御詞を盡さるゝ一卷ありと傳承る。救濟又自筆をもて道の奧旨を殘所なく申上侍き。其奧書に。

一一段上古の事は代下りてしれる物なし。かけ句うつほ句なと云物も。さして肝要にあらす。たゝ中興を此道の本意として。時うつり世變と云とも。道を改る事有へからす。おもふ樣ありてしるしをき侍なり。救濟おなしく筆を加間。唯佛與佛いつれの人か道に志しあらん物信し申さるへき。文和の比をひなれは。はるかに隔り侍りぬ。

一侍公はいつれの體をも捨さりけれとも。たゝおもひ入て。いか程もしほれたる所に心をかけ侍けるやらん。あれたる宿の築垣も。傾く軒の檜皮は忍草なと茂く。春の月の朦朧たるか。御簾のひまよりほの〳〵とさし入たるに。はしちかくは人の音なひ（さ花火）もなきやうに句を作侍しなり。攝政家の御句は。さきかねたる花の横雲も朝霞もおなし梢にて。又なくえんなるに。日のさし出たるかけ匂ひ滿て。こほれおつるかとみゆ。されとも一葉もちるにはあらす。盛はけふなんめりと詠居たるに。夜の露處々に殘れり。ぬるとも花の陰にと云詞もいまにかなへり。花のしつくは只露の殘りなるへし。かやうにそほけくとも。うき〳〵とも御案ありし。されは毎句御詞もわひしれすやさしく聞へ侍し程に。當座承し人もみな耳をおとろかし。いかなる初心もたゝ心うき〳〵と成とそ申侍し。周阿は詞きゝにて。いかほとも

いひくたきて。一句のうちに理をいひたてぬをは。本意ならすと存けるにや。近來攝政家の仰にも。こと葉くたけて長高句なし。或は作連歌。或はこまかなる連歌。心によしと思ひしめて。てにをはには働はてをよしと申侍しなり。されとも天下の好士用侍れは。是非を沙汰するに及す。今はむかしかたりとのみ成て。正しく其比の事耳に觸たる人多くはあるへからす。後世或は數寄或は稽古。徒に寶の山をしらすして止なん事。無念と云てもなをあまりあり。

一梶井二品親王御數寄の比をひ。佐々木の導譽禪門常に參候ありき。順覺。信昭。救濟なと肩をならへてつかふまつりし比。晝夜御會ありけるとなん。十三夜に三百韵あそはして。攝政殿へ御點を申されき。其の懷帋世間に定流風し侍歟。

一ある貴人御連歌ちいさかりける事。いかなる權者も知事あらんや。かやうに未來をも兼てしろしめされける事こそめてたけれ。

一凡春の句に秋をつけ。朝に夕を付たるも。上手はのかぬ様にするなり。うち任て初心の人しらんはこゝろもとなし。

　　なき人かへる夢のかよひちと云句に。

　雨となる夕の雲のあまつ風　　救濟

是は一句の感の爲に夕の字を申たるにや。上手はちかひたる詞も猶たゝには非す。又。

　　とりくるしきやこゝろなるらんと云るに。

　浪あらく風さたまらぬ舟の梶

周阿か句にも此風情は少々見え侍り。

　　かゝれる身にも罪はなけかし

　紫の雲をは我も松の藤

一住吉の松の木の間をなかむれはといひ下したるはおもしろけなり。されとも木の間いかゝ侍らんと。後鳥羽院仰ありけるに。あるひは松のうへよりなかむれはと申。あるひは松のこまよりなかむれはと申人侍き。俊成卿は松のひまよりと申されたりけるとかや。定家はつゐに所存を申されさりき。父子同篇儀いかゝとて。斟酌ありけるこそ獨興ふかけれ。關の清水に影みえての歌。山立いつるきりはらの駒。いつれにてかと御たつねありけるに。其比の歌讀大略山たちいつるきりはらの駒まされりと申されけるとなん。それも定家は所存を申されさりき。鵜本末にかやうの事書をかれたるなれは。いかてかしる人あらん。ある人のいかにしてもれ聞たりけるにか。近來の歌讀きりはらの駒まされりと申侍こそ其いはれあれ。一反二反吟すれはきりはらの駒まさり。三反五反吟すれはもち月の駒まされりとかきて。かの本末におさめられたりけるよし申侍也。當時發句かきれ

たるときれさると申不審あり。是もやすかるへき事にけあらす。さは／＼といひきりたるは。誰か耳にも聞て子細なし。侍公の發句に。

五月雨はみねの松風谷の水

あなたうと春日のみかく玉つ島　　周

攝政殿の御發句にも。つねに此面かけ有しやらんとおほへ侍れとも。歳ひさしく過てさたかならす。耳たかゝらねはいまの人こそ狐疑不信も侍へけれ。彼三賢の位にては。いかてか切たる切さる混合あるへき。昔細々に參ちかつきし比。此條いかゝ候へきと尋申たりしに。一反二反にては猶分明ならす。四五反も吟すれは。必吟聲のうちに切たるは聞るなり。たゝ口に水を含みて。よく味をしれるかことし。

一歌には制の詞あり。連歌にはあなかち斟酌すへき事なし。同類こそ我人取ちかへ／＼聞る樣に侍れとも。正しく十四十七の一字もかはらさるはなし。それも當座にてもさやうの沙汰あれは。連歌のとゝこほりとなり。無興なるなり。

泣とたにおもはぬ月に袖ぬれて

なくとたに思はぬ先に袖ぬれて

或は初心の人の句に。

涙なとはしめもはてもなかるらん

泪なとはしめもはてもうかるらん

かやうに一字にてあたらしく成也。凡連歌は諸人烈座して人より先に由斷なく案すへき者歟。攝政殿の袴のそはを取て堀をこゆるやうにと仰られたるも。あなかち秘事あるへからす。人の思たらん堀をつゝきて越たらんは。いかにこえさまおもしろくとも徒事なり。たゝ手をそなる人の連歌は行度人にこさるへき歟。されは淀川の流のことしとそ先達も教侍れ。けにも勢田川上のすゑなれは。底はさこそ早かるらめとおほゆ。歌は題をとりても。かいふん心の行ほと案するものなり。いかにもしつかに用捨し侍らんは。いよいよ珍重なるへき事也。貫之は一首を廿日になんと申ける。みな人存知の事なり

一歌の體さま／＼なる事。毛詩の六義より出侍り。事あたらしく申に及す。もろこしの詩にも五言あり七言あり。八句あり絶句有。たゝ作者の心に任たりとみゆ。されは萬葉にも文字のかすさたまらす。いつれをも入られたるは。一樣にあるへからさる歟。

一安賀の陰陽師一天の星をまほり。和丹の醫師萬卷の書をひらけとも。傳るところなくしては益なからん歟。諸道の家業いつれもかくのことし。歌は家風ありて又傳所なし。心を種として詞天地の間にひろまれりとそ歌仙も申侍る。

一初心の人何心もなき連歌を聞食て。明年なとに成なはいか

に下手になりなん。是こそやすき御披判にて侍れ。いま何心もなきは子細なし。我才學ましはりて。するの世には心のまゝなる句とも仕へき條。かの御耳にて聞食損へきにあらす。靈達の後は權者の心にかはるへからす。

一攝政家より鹿苑院殿へ御點を申さるゝ事あり。俄に召れし間いそき參たりき。御墨を可被付事いかゝと仰ありしほとに。何の樣も候まし。たゝ御意のことく合〔合點〕をせらるれは。御入興あるへく候。軈て御心あてありけるやらん。是等にあひ申へきやと仰ありし程に。いつれかおろかなる御句交へきなれとも。長たかく幽々としたる姿。ことに珍重なるへきよし。少々愚意の趣申せし程に。五六句は御墨を付加へられき。あまりに年ひさ／＼く成て。いかゝ侍けるやらん。それもたしかならす。

一御點の事。當座人數退散以前。又雌雄を決せんかために。連中悉く歸路を忘て御點到來を待申よし申せし程に。或は深更。或は曉天。殘燈の本にて火急の御點圖子をとるにおなしかるへしと仰ありしなり。凡内々御雜談にも。侍公は道にあひ。周阿は人にあふ。愚老はたゝ面白に任てあふと仰ありき。其比好士おなし連歌を三百韵清書して。彼三方の點を所望し侍しかは。さらに一樣ならす。攝政殿へ尋申侍しに。句はかはるへき條勿論也。意地は同物と仰ありし。いかゝ心得へき。救濟は上句はやすく。下句は大事の物なり。おなし程なりといふとも。下句の長點なとは作者も勇あるへし。道の興隆も又是に過へからすと申けるとかや。されは三の句より侍公の點は脇句に合侍しとおほゆ。但今日明日の連歌誰人申出しけるやらん。下句打句なりといひて。たゝ口にまかする間。點ころのみゆる句明し。是は點者の不覺にあらす。たゝ仕手の連歌をしらさるへし。凡點者は萬人の連歌を曇なく見明めてあふへきやらん。よのつねの好士とも達者ともいはれたるはかりにては。おもひよらすや侍らん。上手の名を發しても。なをいふかしとこそ先達も申侍しか。

一下手のよき句と上手のあしき句とは。等同なるへきかとおもへは。曾て其儀なし。下手のしすましたるは下手の心の秀逸也。上手の句はなにといひすてたるも。さらに初心の口より出たるとは聞へす。

一諸人の口にはしりまはる句あり。自他取ちかへ／＼仕ほとに。句は同物にて作者日ことにかはる。結句主の心には是を高名と思侍にや。折句をあまた所取あへす申てはとて。わか達者のほとをも自證する形勢ありき。沙汰のかきりとも云つへし。

一先年九州探題より（于時今川與州。）尋申さるゝ句とも。雨

三句侍しやらん。年久しく成てさたかにもおほえす。

　我よりも人に水上なみた川

何水上をたつねけん。あまりに本歌の詞おほくや侍らん。

　木葉をもしくれと聞に袖ぬれて

是又それにもぬるゝわか袂あひかはらす。かやうの事後世の爲に仰下さるへきよし申されたりしに。歌にては憚もや侍らん。連歌にはくるしからしとそ仰ありし。

一其比知識と聞えし人に。佛法の掟さこそ律儀にも侍らんとおほえて。眞の心をこそしらすとも。知識の法度をも何はんかために。或は一夏或は半夏逗留せしかとも。たゝ江湖の僧五百人千人集りて。自他の褒貶のみにて。一座の修行をも成かたかりしかは。一往は智識の會下をさくる事も侍しかとも。後にはたゝ足にまかせ心の行にしたかひて。浮雲流水を觀してさまよひありきし程に。漫々たる蒼海に出ては。友なし千鳥の類に身をなし。うはの空に歩行に。峨々たる靈嶋聳たるに。松栢の枝をかはせるあり。見上侍るにいかさま靈佛靈神の居をしめ給かと覺て。九折なる道處々にあり。こゝかしこにやすみつゝ上るほとに。夕陽もかさなれる山にかくれぬ。心ほそきやうにてたとり行に。入會のかねの近々と聞え侍にそ。されはこそとおほへ侍し。佛菩薩はかゝる清淨の地に住給んとてこそ。寄特をも人にみせしめ。衆生をも利益し給なれ。由來うちやりさまの事にあらす。よくそくれ〳〵上り侍ける。たゝ足にまかせたる中にも。かゝる寄特ありけりとおほゆ。森々たる谷の深き水の流に付て尋入に。奥はいよ〳〵常磐木のこくらくて。心のまゝなる石ともの苔滑にて。踏ならす人もなかりけりとみゆ。たゝ水のなかれをしるへにてたとり行に。川上は猶水の音もかまひすしく。落葉なかれをせきて。行なやむ處も侍り。名もしらぬ鳥のおとろ〳〵しき聲にて。はるかの梢に飛かふはかりそかすかに聞へし。あらぬ谷に大河あり。峰より雲を分て濺り落る瀧あり。李白か三千丈も猶かきりありとそ覺る。やう〳〵薄雪杉の梢にむら〳〵見えて。寒嵐衣をふく。樓門を見つけてたつね入に。奥に儒〔僧歟〕坊あり。本堂の燈ほのかにかゝけつゝ。閼伽盤花籠なと持たる法師の中に。いつくより詣來る人にかと問に。只此御甍を拜し奉らん心さし斗也と答て。今夜は此禮堂に通夜し侍らん。ゆるし給てんやと問に。何の子細か侍へきと云。此寺の草創いつの比にかなと尋侍る次に。むかし西行上人も暫おはしけるとなんかたり侍き。やう〳〵更行まゝに。正面の柱によりかゝりて眠居たるに。鈴の響谷々に聞えて物すこきに。曉のかね懺法の聲にたくひて。何となく所からにや身にしみて聞ゆるにそ。佛法の尊さも一際ある心地せし。さ

て次の日佛を禮したてまつるに。内陣の柱に西行法師と書たる筆の跡あり。是を見るに。

　山高み岩ねをしむる柴の庵に暫しもさらは世を遁れはや

かやうの靈所には。元より緣に任たる事なれは。しはらく逗留せし事も侍し。其年は白地なる樣にて冬をも過し。正月のすゑつかたに出侍しやらん。か樣にたゝ心のまゝに乞食し侍し程に。眞の修行を知らす。或時は深山に入て居をトるに。靑嵐木すへを扣て頻に曉の夢をやふり。流水溪を廻て遂に濺れとも。流に獻人もなし。かやうのしつかなる處にも。眞の心さしなけれは。とゝまりかたき浮世のならひ。愚なる身のはかなさゐ。今更おもひしられて月日を送り侍りき。或時は海邊に出て行脚し侍に。あらき浪舷をこへて。みちくる鹽こゝもと也けりとさはかしく。かの源氏の物かたりおもひよそへられて枕を峙たるに。海のおもてはそこはかとなきに。月はたゝきら〳〵とみえて。曉出るふねとものいかりをあけ。ともつなをとく人のをとなゐ。まことにいそかはしけなり。さて思々に漕列行梶音も猶かすかなるに。たゝ火のかけはほの〳〵とみえて。うきぬしつみぬ遠さかり侍に。やう〳〵興津しら浪よこ雲も一にあけわたりて。遠からぬ洲崎の松風。うきねの鳥の立つゝく羽音。いつれも旅泊の夢をおとろかすかとそおほえし。もしほをたれ磯菜をつむ海士の子ともの思〳〵に囀る聲ともいとおかし。海に望て佛閣あり。又社壇あり。この所をは何といふそと問侍に。象潟となん申侍とこたへ。さて其靈場に詣て見るに。僧坊なと甍をならへたるか。築地もくつれ門も傾なとして。星霜いくひさしかとおほゆ。白洲に鳥居あり。はる〳〵と步過て神殿を拜奉るに。扉に書たる歌あり。

　松島やをしまの磯もなにならすたゝきさ潟の秋のよの月

西行法師と書たりしそやさしくもあはれにも覺えし。かやうにいつくともなく行脚し侍事十餘年。其後出羽國に山居し侍しに。其所の人草堂を一宇おもひ立事あり。もしさやうの故實有は。とりたてゝたひなむやといふて。あなおもひよらすや。努々さやうの才覺なきよし返答し侍しを。佛法興隆は御身に帶してしかるへき事なりと再三申侍し程に。心ならす一兩年は彼山中にて逗留し侍し。(今光明寺是なり。)みちの國に乞食し侍し比。ひろき野邊の草高かりしをはる〳〵とわけ過たるに潮木あり。汀に付て人の往來かとおほえて。鳥の跡よりも猶かすかなるか。たえ〳〵見へ侍をたとりつゝ。所からの面白さに一足つゝ前へ步に。傍にさかしき谷をおりくたる人あり。鬢鬚は雪よりもしろく。身には藤縄る衣をきたり。此翁步み近付て。いつくへ心さ

し給ふ人そ。此すゑには道もあるへからす。われは此山に年ひさしく柚をとりて住侍る物なり。わか跡に付ておはしませ。人里まては日も暮なんとすといふに。うれしくて彼翁のもとにいたりぬ。けにも白地に板とも取かけたる柚木の中に。翁かたくひなんめりとみえて。人ひとりふたりをとなふ。むかしは此邊のあたりに人の住侍事ありけるやと問に。さる事なし。心さしありて住給はんに。子細やはあるへきといふに。やかてかの翁かこと葉に取つきてかすかなる庵をむすひ。時々里に出て食をこひなんとして一夏を送り侍しや。しらす仙郷にもやありけんとそおほえし。水四面の山をうつして。みかける鏡よりもかけいさきよく。雪松の傾たるあり。黒木の央なるあり。浪丹青をうつして畫圖のよそほひをなす。あさやかなる事。千枝經紋か筆もをよひかたくや。水底には金銀の沙をしけるかとみえて。鷺たち連おとれとも水濁る事なし。側には瑞雲峒を出て靡あり。夕には白日の嶺に映徹せるかけ。すへて眺望一にあ（[illegible]）らす。水にむかへは天こゝにあり。我はからす非想非々想に至かとうたかふ。かやうの靈地にこそしつかに殘生をもおくりたく侍しに。かの翁あきの霧にやをかされけん。朝の露ときえ夕の煙とたちのほりぬ。あはれさいふはかりなし。いよ〳〵たよりなくて。長月廿日比にいつくともなく吟出ぬ。たゝ蒲團を枕とし衾を莚としてそ。ふるき堂なとには夜を明し侍し。

一邪正事けにも二にてこそあるへけれとも。天を執に地の捨かたき事。陽を執に陰又捨られさる事勿論也。始より邪を構たる人の只正より正へ出たるは。助をへたる所聞へす。邪をしらすしては正をも又さとりかたし。殷紂夏桀をは堯舜の上と申侍も。よきは賢王の譽ありしまてにて餘なし。あしきは後の人愼ところあるによりて。徳あるへしと釋せり。

一惣して數寄の人は硯懐帋をみても心うき〳〵とあるへし。されとも一の懐紙のうらなとまては。誠に心しつまる事なし。此道に醉すしては我心より出來連歌あるへからす。たとへは上戸の酒を三盃五盃のみたらんかことし。口には味もや侍らん。心はさらに酒なし。數反の後心酒に成ぬれは。一身は酒にて本心は迷失ぬ。連歌も數反おもしろき心に醉侍れは。興に乘たる心もたゝ醉の中也。されはいかなる初心も。分々に句を儲るといふは醉る心なるへし。まして上手は醉のうちに眞實の秀逸をは儲るなり。もし一座の中他念あれは本意の句なし。吾心を取靜て一心よくおさまりたる時。人の息を口よりつき出すかことく。氣を天地の間にちらして。かならす求る所なけれとも。前句をたより

にして取むかふに。出來せすといふことなし。

梵灯庵主返答書下

抑上手にはいかなる人の成侍へきやらんとみるに。文殊の智惠。有留那の辯にもをとらぬ人も。連歌の道をはたやすく得事なし。四十年五十年晝夜此三昧に入といへとも。猶上手の位に至ことなし。さては利根も才覺も連歌にはいたつら物と見ゆ。推量するに。さにてはよも侍らし。吾調方の至らさるなり。人の金を持て生涯用に立さらんかことし。只ありのまゝに心にて求所なく。先達の跡を追へき物歟。上手も又かやうにこそ申侍しか。誠の數寄は連歌なき時も又ひとり酔り。百韻過ても左右なく餘味する事なし。攝政殿は人の御點を申とて。夜深く門を扣なとするにも。やかて内より連歌を詠吟ありて。殿上人に紙燭をさゝせて御出ありし也。祇候の人はおきあからぬも侍り。目をさましたる諸大夫なとの少々あるは。只今何事そやなとつふやきて。分明に目をみあくる人もなかりし也。それにいつの程にか百詠吟も有つらん。是に當仕たゝ此道に酔せ給けるとおほへ侍る。句は吟の内にありと仰ありし。是又はかりかたき事なり。常に連歌はかゝり第一なり。かゝりは吟也。吟はかゝりなりとこそ仰ありしか。

　ちらしてみはや花のあけほの

たゝ花にむかひても此句子細なきか。後にや風のうさもしられんといふ證歌より出たれは。殊さらおもしろくこそ侍れ。谷の堂にて三の句に。

　谷にふる雨よりうへに月出て

きまての秀逸とはよもおほしめされし。當座はみな歌も連歌も一かとにて侍やらん。

一いにしへ西芳精舍にて和漢の侍けるに。

　軒ちかく植しさくらも散過て

とありしに。

　法のためにや人はとふらん　夢窓仁問

おもひよらぬ付會。銘心肝して候。

一此道の事。いくら筆をつくし詞を極めたりといふとも。限あるへき事にあらす。たかきやまにのほらん志ある人。山のふもとを百度千度めくり侍とも。のほる事は只わか心をしるへとして。足をみちひくなるへし。他の力をからす。佛法にも江上（[illegible]）一路と申侍れは。只傳る事なき肝要なるをや。

一或顯讀の基俊に歌をはいかやうによみ侍へきと尋申されけれは。枯野の尾花有明の月と答られ侍き。是はいかゝこゝろえ侍へきことそ。

一遠白躰はいかほとも餘情ありて幽玄なるか。堂上の花とみへてよき也と仰ありし也。清涼殿の有明の月に。梅のかほり満らん様に案すへしとこそ仰ありしか。餘情の句はてりもせすくもりもやらぬ春の月。夜もやう／＼明かたになりて。峯の松原そこはかとなくかすみこめたるに。雨さへそほふりたらんは。何となく物あはれにおもかけうかへる心地すへし。是ひとつのすかたなるへき歟。西子顔色を大国にても何にたとへてかふなへきと人申されけるやらん。五湖の句によそへられたり。李花一枝なといひたるは。諸人思よる事もあるへし。五湖は山遠して水をあらはし。山又水をへたつ。遠近の眺望一様にあらす。凡慮の思よらぬ所なるへし。是餘情の句にかなふへきやらん。いつれも句を引あて／＼一姿申へく侍れとも。此句は合さんめりなと人の申さんもいふかしくて。こまかには略畢。歌の躰を定家引合てかゝれたるにも。惣して此躰しらす なととて 殘されたり。或は海躰。或は竹躰。是等なり。

一秀逸の躰。

山かけに猶雲ちかき花さきて

故郷や花の老木にしらるらん

一幽玄の躰。

うき世にもかゝる時ある花さきて

一長たかき躰。

山里はをやみもさひしむら時雨

一たくみなる躰。

風ふけはあすのとまりに舟の來て

やみをまついさりのあまの月にねて

一俗なる躰。

一うるはしき躰。

老まては我ためにうき命にて

松原のうす雪まては風ふきて

一邪路に入躰。

一たゝ詞の事。

一かゝりよき躰。

むかしたにうき身のいつを忍ふらん

月やしるみし人いかに成ぬらん

一めつらしき姿。

風なくは猶いかはかり松の雪

あらましは半すてたる身に成て

一ふるきを學躰。

一誹諧の躰。

戀をのみ雙六のはのあひもせて

一誠のある躰。

月そとふさらては老の友もなし

身にはなとひとりの親もなかるらん

一やさしき姿。

今夜とはちきらぬ人の月に來て

一まはしたる躰。

松みれは風にはちらぬ木葉哉

是そまはしたる發句と沙汰ありしを。むかしうけ給侍し。

攝政殿千松林にて和漢の有けるに。

千世もみむ松のはやしの山さくら

今熊にて。

里よりも時雨はやまのもみちかな

知恩院にて。

なけやけふ宮こを庭の郭公

清水寺にて。

瀧なみは花の常葉のためしかな

鹿ケ谷にて。

瀧たかしかきりもさらに浪のはる

安樂寺にて。

くれなゐを忘れぬ梅のもみちかな　救濟

大原にて。

落葉にも月はおほろの清水哉

北野社にて。

下もみちちりにましはる宮ゐかな

梶井宮にて十三夜曉。

明にけり又月の夜のあきもかな

八月十五夜。

雨ひとり月をおもはぬ今宵かな

箱崎の社にて。

箱崎のまつ夜はあけぬ時鳥　周阿

千珠滿珠の心を九州にて。

浪やちるしほの滿干の玉あられ

須磨明石にて。

月雪のあかしのとなみ夜もなし

駿河府にて正月一日に。

年たにもこえぬたかねか富士の雪

常陸の筑波にて。

つくはねや木のもとふかし花の雪

一勝句は昔より指たる名句なし。清閑寺にて。

雪の山草木の花の家ゐかな

と云發句ありけるに。

冬さく梅にましるくれ竹

と救濟の仕たりけるそ珍重なりしと。後にも御沙汰ありし。(當時花の發句に花咲植物致さぬ事也。發句花抜からに成故也。)池に木葉のうかふと云發句有しに。

うへは時雨の浪のしら雪

と攝政殿のあそはしたりしそ。當座もおもしろく。後日にも諸人美嘆申侍し。周阿は秀句より取よる所侍しなり。救濟はあなかちさやうの所に心をかけす。されとも又嫌にはあらさりけるやらん。

草まくらうつらふすゐの床とはに

是救濟か句なり。かさね句は周阿か連歌には多くはみえす。攝政家の御句に。

ゆふへ〳〵の寺々のかね

救濟か句に。

うつゝは夢か夢はうつゝか

又攝政家の御句に。

もし夢ならは又や見さらん

夢かやさては我もおほへす

夢そ花さてもうつゝやなかるらん

何とも取定たる所なきにや。されは上手は凡慮の思さる處自然に出來なり。羚羊角をかく。其跡を知らん事難かるへし。

一僧正遍照。在原業平以下歌仙好所各別なる歟。連歌も一躰をまなひえたるは好體あるへし。八方をかけたらん人は。あなかち風躰さたまるへからす。

一月のこる狩庭の雪。山もとの嵐の上なとは。近來の秀逸なりと御沙汰ありし上は申に及はす。何の人か吹毛の難を申し侍へき。

一しほひにかすむ旅の道。野邊の兎の月をみて。雪のあられといひつゝけたる。いつれも十分にかなひてはおほへす。愚意も只御意のことし。我はまつ山にて聞つほとゝきすは。先の字前の句を詠歟。一句聞にくきにあらす。

一順徳院範永か外はさまて聞ゆるなしと仰けるそありかたき。

一俊頼家中の人を集て歌をよませられ。其中に可然を引直して。わか歌にせられけるそ。ことに此道に譽ありける人の心にて侍る。

一鴨長明此歌の肝要とて。しもにてこそと申たりけるやさし

くこそ。

一ある人口こそかなはすとも。連歌の是非聞しらん事。誰にもをとるましと申たりけるそ。天魔波旬のたくひ成へき。あなおそろし〳〵。

一周阿鹿苑院殿の御懐帋に點を合申て。祈禱のために北野の社に参詣しける事。神慮にも かなひ。道の 冥加も 有へき也。

一當座の勝負を決せん爲に。點をとる連歌の事。上手の故實もあるへき者歟。いかに秀逸の風情うかふといふとも。人にこされては徒事なり。句數をもつねよりは薄散し侍れは。必其中に點はあるへきものなり。

一田夫の花の陰をさり。商人のあさやかなる衣をぬきても。猶いふかしかるへき事也。

一愚句に憑めし暮やまたるらんと申侍ける。およそは子細なく候歟。年ひさしく成て。さやうに思惟候へらんもおほへす候。

一民部少輔成量はむかしより上手の連歌を聞たる者にて。耳は無雙に候し物を。その世に候はゝよき點者にてこそ候はんすらめ。歳四十未滿にて身まかり候し事無念候。

一前典藥頭嗣長朝臣周阿雙座して。毎度連歌を談合し侍事肝に銘候。聖人の師は不聖人なる所よく存右(知歟)し候けりと。いよ〳〵心にくゝ候。

一面の四句目に。

　水田の月やかりてみゆ覽

とあそはされて候は。裏にて候はゝ。なをいかにおもしろく候はんすらむ。

一隣者なとのまれに列座して。興ある連歌をし出したるをは驚覺する躰。誠に無念に候。一座の權門とおほしき人の連歌。高聲に褒美讃嘆もしかるへからさる事也。所詮道をしらさる人の相交たるか無興なる事多也。

一京極黄門我は歌作にてこそあれと申されける。連歌にも連歌作。連歌師。連歌聞あるへき也。只耳こそ肝要に候へ。

一俊成卿我本意の歌六首侍りとて書をかれたり。後に定家卿亡父の歌を廿首秀歌とて撰れたるに。五首は入られて。一首除れたるこそおほつかなく侍れ。

　世の中に道こそなけれ思ひ入山のおくにも鹿そなくなる

一愚問賢注に。よきうたはいかやうなる躰そと御尋候はぬ。心にかゝりて候と。頓阿後日に申候つらん。けにもとおほえ候。先は秀逸の躰こそゆかしくも候へ。

一良阿かきれぬ發句に點あひて候こそ一興に候へ。堤つき候在所にて。馬の口をとらへてあはせ候はむには。きれぬほとの祝言あるましく候。

一貞和康安の比をひの好士。或は帶紐をいはす。或は詞けすしく候中に。さやうの御沙汰眉目に候。小町こそ思よらす候へ。

一順徳院の御夢に。小町か手より金をめさるゝと御覽してより。天性この道を得たりと。八雲の六巻にしるしをかれたるそ。ありかたきためしとも申しつへき。

一柿本のまうちきみの歌は。古今の間に獨歩と申たるこそ其謂あれ。孔子はいつれの代に出給とも。なとか聖人の譽なからむ。

一いにしへは執筆する人多くは侍らす。相阿。素阿。成量等也。是皆連歌をよくしれる也。一座はたゝ執筆の計ひにて侍る間。衆中口を閉侍き。もし猶不審なる事一兩句も変る時は。其中の篤者とおほしき人に商量する間。一座もとゝこほりなく。諸人輿に乘してこそ侍に。近頃の會のやうをみるに。假名なとかたのことく書つゝくる者に執筆をさす也。是さらに此道をしらさるへし。さる程に筆を閣て諸人の形勢をうかゝふ間。あたらさる褒貶無窮の事多し。連歌一座の間は他念なかるへき處に。沙汰かましく成て。或は嗔〔二字[illegible]〕素をおこし。或は百韻終さるさきに退散す。道の障碍無念といひても猶餘りあり。

一近日の好士万葉如きのおそろしく耳遠なる詞。前句のより處なけれとも。しいたさるゝ事何事そ[illegible]何なとにもかやうの詞出來やうにおほえ候。むかしの上手いつれも稽古のをろかなる事はよも侍らし。されともより處なくてし出る事なし。羊質虎皮と云事あり。只虎の心こそあらまほしけれ。皮を羊にきせたらんは。還て心あさくこそ。

一鹿苑院殿いまたいとけなく渡せ給し時より祗候し侍し人の。[illegible]にもあらさりしを御覽せられしより。直垂の衣文なと引なをさせ。出仕のたゝすまひをも御指南ありし也。後には布衣に召加られて。常に金吾相共に不斷せしなり。よろつ水とうをとの思ひをなしてこそ罷過しか。身の浮沈せし後は萬里の山川を隔し間。心のうちはかりにて申通するに及す。奥州松島に茅庵瓦笛の陰をなして侍し比。御音信ありしそ。不思議にも又いにしへを思食忘さりける。御心さしのあまりかともおほへし。青き鳥の翅もやすめす。遙の堺まて飛さかりける事。ものゝ自然に相叶侍る。豈蘇夬〔武歟〕か雁書にかはり侍らん哉。さるほとにおもひの外に都へのほりて後も。李源圓降か約せしにおとらす。其よしみの深きことをおもふに。蘭麝よりもなをかうはし。賢慮定て同前歟。武庫又天性器用。諸人存知の事也。されともいまた最上の處に至す。凡依有親近愚意之趣連々諷諫申者也。貞實幽玄の堺に入といふ事は。我とあきらむる事なからんほ

とはいかゝあるへき。たゝ能〳〵一心をしつめて修行あらは。なとか自得發明の位にもいたらさらむ。猶々殊勝也。一今一天のおさまりて四海に風波おたやかなる事。唯君と臣との德なるへし。遠くは三皇五帝の目出たかりし政にもこへ。近くは延喜天暦の御代をひさしく知しめして。國土安穏なりしにも過て。蒙古も襲來せす。四夷も又發る事なし。されは帝都を始て。壺の石文の外まても。動きなくおさまり侍そ。たゝ君の目出き御光。又は伊勢大神宮の神德とも申侍へき。さるほとにたへたるをつき。すたれたるを發す。諸道いま時を得たり。殊更和歌は神道より出侍れは。草木に付ても萬歲といはひ。道に心さしあらむ人。ふるきをしたひ。あたらしきをも捨さるへし。

卯月十日頃より病に煩ふ事ありて。月日の遷行をもしらす。老の浪かへらぬ旅の出立をこそおもひ侍れ。されは入會のかねを聞ては。けふも又つれなくてくれなむとすることをなけき。曉の月のかたふくをみては。その山のちかき事をおもふ。風の燈水の淡。跡なくきえなん事を待侍るに。此一卷つゐに返答をみさらん事ほいなかるへしと。しひて承ほとに。夢ともなくうつゝともなき心まよひに注付侍なり。上下の句になすらへて。卷を上下に分たり。定て參差する事も多く。荒蕪の詞も交侍らん。只いつくをも引直されて給へし。努々外見あるへからす。落散なは人の口遊も存内候。御披見之後。やかて火爐に投らるへく候也。

應永廿四年後五月十八日　　梵灯判 于時六十九歲

梵燈庵主袖下集

次第不同

源氏万葉古今以下凡此内に有。

花兄と申は梅の異名也。初春の發句にすへし。たとへは梅を花の兄と申事。万の草木の先に花開か故に。花の兄と申なり。

一花の弟と申事は菊の異名也。菊は是万の草花の後に開る故に。花の弟と申也。九月の發句によし

一菊の異名。山路草。乙女草。秋の花。九重草。ますり草。菊の水。是は九月九日の酒の事なり。菊を秋しへとも云也。

花は冬名は秋しへの盛かな

一梅の露。柳の露。櫻の露。皆春也。染とすれは秋也。

一名所に三の山陰有。宇治の山陰。小野の山陰。

一名所に三〔マヽ〕の風有。初瀨風。佐保風。飛鳥風。

一櫻麻と申は六月の麻を申也。但麻の中也。いつれも色あかくくれなひなるを申也。櫻麻に花を結てすへし。

一四季の草。是は撫子の異名也。四季に花開か故に。よとき草と申なり。

一山橘。名取草。廿日草。となり草。是はいつれも深み草の異名也。四五兩月の發句。

一青嵐。六月に吹嵐を申也。發句によし。

一七夕妻とはをり姫の事なり。

一鏡草の事四季あり。春は大根。夏は紅。秋は槿。冬は松也。いつれも歌有なり。

けふよりは若をもちひて鏡草咲さかふへき陰そ久しき

夏野には水さめてみん鏡草たゝ開はなは色はくれなひ

槿のあたなる花の鏡草移しとゝむるなこりなれかし

冬野には月も落葉の鏡草〔萠歟〕松の木の間そしほし曇れる

一さいたつまと申は春の草の萌出たるを申也。一說は。

さいたつままたらら若み御吉野の霞かくれに雉子なく也

あひ思ふ春の野にあるさひたつま人には忍ふ名社惜けれ

一須磨の鈴舟と申本說は。源氏須磨の里に御下有けり。その時淀よりお舟にめさるゝ也。此御舟に驛路の鈴と申て。天〔脫〕上人のゐ中へもたせらるゝ鈴を入られたり。さて須磨の鈴舟とは申也。路次の難なし。思ふまゝ也。山路も同事。源氏此鈴舟をすまの上野ちかきうら邊へよせ給ひけるとき。上野の雉子鈴の鈴かとおもひおとろき鳴けるほとに。源氏とりあへす。

鈴舟をよせける波に驚て須磨の上野に雉子鳴なり

此歌は三月廿日餘の時分。須磨の鈴舟雉子寄合。

一須磨の風祭と申は。源氏須磨の山さとに夢の春を送り給ひける間に。花のためにしつかなれと風をまつり給ふなり。吹しつまりてありけるなり。須磨の花に風祭寄合。中比まては春の季。今は雜也。

一青葉のすたれと云句あらは扇給可付也。大内に四月一日に青葉のすたれをかけらるゝかために植をかる。柳の青木立の韭〔簾〕寄合也。同しらかされ。是も四月一日の衣かへの事也。天上人ねり貫きの衣をき給ふ也。しらかされとも又はころもかへともわたぬきとも申なり。

一錦鳥と申事。源氏万葉にもあり。歌有之。源氏の錦鳥の事は。戀の中たてする女のことなり。

三年まてかひそたてたる錦鳥我思ふこと使よくせよ

源氏の戀の文なとに錦鳥寄合。又深山なとに此外錦鳥と申鳥有也。

み山邊の紅葉の秋の錦鳥夜は月にや見え照すらん

一紅葉鳥。是は鹿の異名也。秋植物にあらす。

よもすから立田の山の紅葉烏ぬれ〳〵わたる大和河かも
大和川と申は名所也。初瀬川の末の流をやまと河と申也。立田川の流合たるなり。

一海の都と申は龍の都の事也。玉津島明神。あきのいつく島の明神。皆龍宮の龍女也。海の都に寄合也。

一浦島と申は人の名也。龍宮の姫と契をむすひ。夢のことく年月を送りしもの也。海の都と申句あらは浦島寄合。

一槻の宮。是は伊勢の内宮の御事也。伊勢と申句あらは槻の宮付へし。

一月よみの宮と申は伊勢の外宮の御事也。秋にあらす。

一竹の都。是は伊勢齋宮の御事。いつきの宮とは齋宮と書てよむなり。

一業平[illegible]の異名の事。あつま男。めつら男。昔男。とよなり男。何とおなし。いつきの宮に可付。

一くれはとりと申は。大國あやをゝりし女也。君のめしにしたかひて大内へ參。此女兄弟有て。さる程に君の御意にまかせ綾をゝりける事。心も言もをよはす。此兄弟の女異國より參たる女なれはとて。あねをはくれはとり。妹はあやはとりと名を付らるゝ也。名任せて歌の道にはくれはあやはと言。或人の發句に。

くれはとりあやめは明日の軒端かな

一秋さり衣。同秋衣。皆七夕の別の衣の名なり。ねかひの糸。七夕の衣織る糸の事。岩枕。七夕のあふ夜の枕の事也。秋の季を何も持也。庭の立琴。七月七日に七夕に奉ることを云。かさゝきの橋。紅葉の橋。天の川に付。うへ物にあらす。

一百子池と申は天川の異名也。七夕祭の時に。百のうつは物。に水を入て。水の底に鏡をしつめて。二の星の影をうつして。水の上に燒物をたき給ふ也。是を百子の池と申也。水邊にあらす。星の舟。七夕の舟。非水邊。やすの渡。同たきつの河。天の川のこと也。天のてくさと申は。七月七日に大内にて菊のたから物を舟車につみて。七夕にかし給ふを云ふ也。發句によし。

一宇治の花園と申は秋の花也。源氏年〳〵に此花をつみ手向給ふ也。うちの花かき。うちの草つくしと申は是なり。七夕ならては草つくしとはいふへからす。

一志賀の花園。昔の櫻花也。うちの花園に付所かはれり。

[illegible] さゝなみやしかの花園みる度にむかしの人の心をそ知

一難波の御舟と申は春にてはなし。昔難波の天皇と申君のめされたる御舟なり。年月をふりくちて久しきをおほろ舟と申也。春の夜の月とあらは御舟付てよし。

一朧の清水。春にてはなし。名所也。大原のさとに朧の清水

あり。難波の御舟木撤万葉。
いたつらに難波ほり江の御舟月水たらてすましとそ思ふ
一あきつの宮。同松。同市。同里。住吉の事。
一瀧の都。同あしかきの都。いつれも吉野の異名。吉野の名なり。
一あきつの島。同あきつの國。日本のこと也。日本はとんはうのかたちの島也。さてこそ日本をあきつとは申也。かやうの本説大切なり。
一つくし九ケ國。つくとりの國とも。又つくとりの島とも申。昔いまた人すまぬ。つくとり計すむしま也。その本説によりつくしをつくとりの島とも國とも申也。殊に唐より見れはつくとりの姿の國なり。唐に寄合也。
一よふこの島。同渡とも申。名所。つくしひせんの國に有。松浦の寄合なり。
一松浦の鏡の宮と申事。昔松浦さよ姫彦大臣に契る。唐舟にのせさるほとに戀死にしす。松浦の鏡とはいわひ申ける。是を鏡宮と申也。伊勢の鏡宮と付所かはれり。松浦の鏡の里あり。その所にましますま宮なれは鏡の宮と申也。近江に鏡山あり。是も付所かわる也。さよ姫の本説。御門彦大臣を唐へ御使に遣されけるに。都よりさよ姫も唐まてつれんとつれ行けるか。心かはりして舟にのせす。ひれふり野へのかたへ出。高山にあかり身のみゆる程に舟にてまねき。舟かくれし後はそのまゝ石となり。さよ姫なく涙紅になかるゝ。此石のかたち女房のきぬをかつきてふしたる躰也。石のせい五尺あまり。彦大臣三年に歸朝有。その後松浦さよ姫を鏡の宮といわひ申とかや。
一ひかたの鏡の本説は。昔伊勢の明神の御神躰を鏡にあまいらせけるに。さく/\ときす付にけり。きす鏡を海へ捨てけり。此鏡を紀の國吉野川の海に流て。その所の人につかせ給ひ。昔は是伊勢の神躰の鏡也と託宣ありき。此かゝみを海よりあけ奉り宮居を作。紀の國にあかめ申とかや。紀國こそのしやうと申は。此ひかたのかゝみにてましますなり。伊勢に紀の國を付此所也。
一難波めと申は。難波に住いやしき女房の事也。
一初瀬姫とは試の女にてはなし。初瀬の山姫のこと也。山姫とは山の神の事なり。
一卯月雪。卯月の花。いつれも卯花の事也。發句にも平句にも能卯の花とすれは。いつものことめつらしからぬこと。名を替てすへし。
一初嵐は七月一日に吹風の名也。二日三日の比まてはよし。初嵐とあらは一葉ちるとすへし。
一日晩。初秋也。一葉ちる。初嵐に付てよし。

一きりつほ。植物。秋也。大内の庭の事なり。
一萩の戸。秋也。植物。大内の萩の庭のこと也。
一紫の庭。大内の事也。萩殿。是は大裏の庭に萩をうへ給ふを云也。大裏に秋の句在は萩殿と付也。
一霞のほら。壽なり。是は大内の御事也。春句とあらは霞のほら付へし。
一なしつほ。藤つほ。梅つほ。いつれも内裏庭のこと也。梨はさくとせすは雑なり。
一松の花。初春也。二月三月には松の花とはせす。松は是百年に一度つゝ十度花さくもの也。是を十かへりの松とは申也。千年に十たひ花咲也。いかにも祝言也。松の初みとり。初春。松の新は。松のみとりゑ。松のわかみとり。いつれも春也。只みとりの松雑也。
一花椿開春也。たゝ椿は雑也。
一正月の七種と申は七日の若菜の事なり。
一秋の七種は槿。萩。尾花。撫子。女郎花。葛葉。以上是也。七夕に七の草の花をつみて七日に手向也。此草の紅葉は皆九月也。
一吉野のくすと申事。是はよのつねの連歌士は。國栖と申を御調と心得たる也。昔吉野の王にめしつかはれし大臣の名をくすと申也。又國栖の翁とも申也。つくしより御調にはらかの魚を取次しをくす人と云也。芳野のくすとあらは。はらかの魚と付へし。腹の赤魚也。吉野川にも。つくし筑後の國なかすのうら。なかすの濱と申所此魚を取也。吉野の王の御歌に。

　代々をへしくすの翁のなかりせははらかの貢誰か供へん

一にほてるとは水海の事也。おしてるとは鹽海の事なり。
一木葉のおきとは名所也。近江の水海のをの奥をいふ也。植物にあらす。
一からさきとはしかのうらの洲崎の松也。一木の松と付也。
一なからの山。しかの浦に付へし。名所也。
一なからの橋。津の國渡邊の橋也。長等山の本歌。

　さゝ浪やしかのから崎旋なるなからの山の春のけしきを

　から崎やにほてる奥に雪消て月の氷に秋風そ吹

　此歌は三季の歌と云也。

一手習の小野名所也。是は宇治の里在。手習つけへし。
一かけろふの小野。是大和に有名所也。小野の里ともすれは都の小野也。
一遠里の小野住吉也。すみよしにあり。住吉に寄合。
一小野の湊は伊勢に有。をさゝ川の末の海に出たるを申也。すゝか川とあらはをのゝ湊付へし。
一あのゝ湊。同松原。いつれも伊勢に有名所なり。

一きそひかりと申事は。五月五日に藥のためによろづの草を尋て取を申也。五月五日の發句によし。
一たけかりと申は秋也。八九兩月の松たけをりきのことを野山に入てとるを申也。植物。
一木の葉の里名所也。山城國在て。冬にてはなし。
一夜寒の里。松風の里。いつれも〔鳴海〕〔尾張〕海邊に在名所なり。尾張のほしさき。よひつきのうら。同里濱。いつれも鳴海に付へし。
一二萬の里名所也。備中國也。二萬の里より御調をさゝけて内裏へ參。
一竹の里。是も備中國在之。竹の庄の内に在名所也。竹の清名所なり。加賀の國に在之。同竹の橋。又とまりともすへし。
一鉢莪草。あしの異名也。
一露取草。是はいもの葉の露を取て織女の賦を書也。硯の水の事也。
一青田として六月也。
一ふかみとり。中比まて五月。今は雜也。
一青楓。四五兩月の發句によし。
一富士の初雪。六月也。
一はてう。同はてき故也。是は稲をかくる木を田のあせにいく也。
一すまの山里に櫻と菊と付る事は。行平中納言源氏よりさきに三年須磨の山里に住給ひける時。櫻と菊と植をきて詠給ひけるにや。

　須磨の浦の春の山里思ひ出て鶯の聲のかそする

　千さとゝも是をそいはん秋ことに菊植てみる須磨の浦人

一すまの松島と付も。行平の御時より合。

　松島や海士の笘やもいかならんすまの浦人鹽たるゝにも

一初瀬の海士をふれと申は。昔初瀬大淀なりしとき。多の海士人住て釣たれける也。此海士人は觀音の現して海士人になり。方便に釣をたれ給ふ也。其後はつ瀬に塔を立。初瀬のあまをふれとつゝけてすれは。海士に非す觀音也。初瀬の句にあまをふれとすれは。眞のあま小舟なり。かく付事此冊也。泊瀬に海士を付へし。泊瀬に鐘と付事。唐にほうれい寺と申山有。此寺のかねつける頭になりす。十月になりて霜夜の寒けるに忍ひせられてをのつからなる也。此鐘を戀の鐘と申也。こたふる鐘とすれは。十月のこと也。十月の發句。

　夜を籠てこたふる鐘かあさ嵐

一庭鳥の名のこと。夕つけ鳥。くたかけ鳥。とよ鳥。おしかひ鳥。是也。

一鶴戸の岩屋名所也。是は日向國にあり。あまたの岩戸是本也。伊勢に天の岩屋本也。
一千鳥か瀧。冬にてなし。名所也。是もうとの岩屋の近所也いそ山の瀧也。千鳥此瀧にかよふ也。但生類にてはなし。
太山かと思ひきたれはさもなくて千鳥か瀧に[illegible]そ落行
一國守護の居たる府中。國の郡ともすへし。
一琴引の宮と申は八幡の御いもうとの御事也。是はつくしちくこの國を守給へる神にて候也。玉たれの姫と申は此琴引の宮の御事也。つくしと申句あらは。琴引の宮とも。玉たれの姫とも付へし。かうら山と申所に玉たれの姫御座候也。又はぬれせぬ山と申名所也。發句。
時雨にもぬれせぬ山の木葉かな
一水の花羽嶺。同羽嶺花。いつれも蓮の異名也。六月也。
一なにかし寺と申はくらまの寺の異名也。源氏の大將未兒にて物ならひ學文志給ひける寺也。夫はなにかし寺にはわらはやみと申事寄合。をこりと申ふるひ病の事也。
一北山に雀子付事。紫の上と申女人まします。北山にすみ給ひけるに。とし／＼雀をかひ給ひけるなり。ふところの内袖の内に入てかひ給ひける。紫上と申句にすゝめ子寄合なり。又紫の上のひちよにいぬきと申女人有り。是すゝめ子をかひける也。すゝめ子にいぬきとも付也。いつれも北山の寄合也
一すゝ舟の國。同[illegible]舟島とも申。日本事也。未日本の初なかりし時は。舟なとにて島のこゝく子をうみそたてけるにや。日本をすゝ舟の國と申也。
一島のかひに。人の子なとの句に。すゝ舟の國。同嶋付へし。
一わか草山。うへ竹にあらす。春日山の事なり。(脱字有歟)
一鶴[illegible]。河内國にあり。名所也。是は四國のあ[illegible]の國にあり。誠のあまの外に里のあまと申も浦也。鹽くむ海士人。しをふまれ[illegible]く。[illegible]に。
里の海士の鹽屋も雪に埋れて焼藻の煙行かたもなし
浦風になひきにけりな里のあまのたく藻の煙心よはさに
一心の水。[illegible]。
酒は瀬にひまなくかはる飛鳥川人の心の水やなからゝ
一命の水。同。
いつをとはさためぬ身社かなしけれ命の水[illegible]
一かほよ鳥と申は雉也。ひすいと申鳥の事なり。
一ひもす鳥。是は山からの事也。雑なり。
一浪やうつ。日の名にあり。川つゝみ。七夕の異名也。
日暮ぬと駒をはやむる深山路に心すこくも鳴[illegible]鳥
一雲つゝみ。鳴神の事なり。
一鏡の宮と申は伊勢にも申す也。神明の御事也。伊勢の鏡の

宮には二見の浦父神明山と付。

一つほの石ふみと申事。田村の將軍陸の奥に下けるに。國府の内につほと申所あり。そこに石あり。石の面に弓のはすにて日本の中央なりとかゝれけり。それより石文と申なり。

一こすの下水とはけしやうのわたしの水のこと也。

一ゆふたゝみとは神の御まへのゆふしてをたゝみたる也。

一〔綠野〕緣の花。櫻の異名也。春の句吉。

唐や緣のはなのとり〳〵に雪紅の袖の白にふ

一あられ松原のこと。冬にあらす。住吉の松原のこと也。住よしといふ句に霰松原付。

一みさこくさ。桃の異名也。三月三日發句よし。みとせ草。同もゝの異名也。發句同前。

一明石にしるしの松あり。人丸の庭にあり。

春秋にしるしの松の風聞はあかしの里の昔思ひき

一野嶋か崎と申は。あわちの國。つの國。近江。同名あり。つの國難波こほりにあり。近江には鹿を付也。

一すけの庭鳥。同ふてつむし。いつれも蛬名也。

一車舟とは津國兵庫の嶋わたのみさきをめくる舟を車舟と申なり。

車舟わたのみさきをめくるそやはやくも移るあわち嶋陰

一繪嶋と申。あわち國にあり。あわちと申句あらは繪嶋付へし。あかしの句にも付。繪しまにも鹽くさ付也。

一草衣。草の袂。捨人のきぬ事なり。

一浪間かしはとは海の中に岩に付たるかきと申かい也。

一岩とかしはとは岩のかとの白を申也。吉野川に岩とかしは付る也。

一玉かしはと申は海中にある石を云也。おもひふかきことにたとへて本歌にもよめり。玉かしはに難波よし。

一此てかしは。女郎花の事也。春のかしはの葉わかきは。兒の手ににたるほとに。このてかしはと申なとと申ならはしたる。誠の女郎花なるへしと。人にしらせしかためにかくし申たる也。本歌に萬の物の名を別に申たる也。

一はらひ草。夏也。麻の葉を申なり。

一撫子の岡。大和あり。やまと撫子といへり。

一梅かえうたふは正月七日の事也。梅かえに付たる夫數のまつりとも申なり。

一卯杖と申は正月七日の歌也。大内へ若菜つみて御調そなふる人の杖をう杖と申也。是はうのはつみさしたるつはきの枝。柳のえた。松の枝。三の枝を取て四尺五寸に切て。五色の糸にて十二所まきて。大内へつきてまいる杖にて有。若なのお調とあらはうつえと付なり。

一あつかい草と申は人の上の事也。
一たまきとは。女房の手にぬき入る玉にてしたるものをたまきと申なり。
一十二月の花鳥。定家卿御門の勅によつて花鳥申定に(ら脱)れしなり。花鳥の歌一首つゝ候へ共たゝ四首。

春三月柳櫻に藤のはな鶯きゝす雲雀なくなり
夏三月卯花盧橘撫子に山ほとゝきす水鶏鵜の鳥
秋三月女郎花萩すゝき鷺鳫かねにうつら鳴也
冬三月殘菊(花脱)琵琶に梅のはな鶴鳴わたる千鳥をし鳥

一櫻を千種とよめる歌在之。古今三番目に。

咲花は千種なからにあたなれと誰かは春を恨みはてたる
春の色の千種なからに見えつるは霞ひく山の花の陰かも

已上。

一光源氏十二文名。(是より已下後人の書入歟)須磨にてはしとの文。宇治にてはうちとけ文。かつらにてはむすひ文。小野にてはみちのく紙の文。野の宮にてはあやめかさねの文。難波にては蓬生の文。明石にてはもみちかさねの文。まつらにてはうすやうの文。したの里にてはこさしの文。横川にては紫の文。伊勢の野宮にては忘文。初瀬にては新妻文。
一十二月衣名事

正月。上。若菜衣。
中。子日衣。
下。氷の衣。
二月。上。梅の衣。　小蕨の衣。
中。　鶯のねすり衣。
下。柳の衣。　花椿の衣。
三月。上。つゝしの衣。　ひはりの衣。
中。
下。かは櫻の衣。　藤の裏葉の衣。
四月。上。卯の花衣。　あふひの衣。
中。
下。かきつはたの衣。　花しやうふの衣。
五月。上。あやめの衣。　夕ひきの衣。
中。　蟬の羽衣。
下。夏山の衣。　撫子の衣。
六月。上。あをかえての衣。
中。　夏蘆の衣。
下。床夏のころも。
七月。上。梶葉衣。　きゝやうの衣。
中。
下。荻の葉の衣。　女郎花の衣。
八月。上。千種の衣。　紅葉のの衣。　萩の衣。
中。
下。稲葉の衣。　椿衣。　鳫の衣。
九月。上。菊重の衣。　鶉の衣。　かり田の衣。
中。
下。鹿のはしり衣。　かやほの衣。　ひをの衣。

十　月。上。木葉衣。　霜の葉の衣。
中。下。水鳥衣。　枯野の衣。
十一月。上。雪の椿衣。
中。下。霞の衣。　氷の波の衣。
十二月。上。もやの梅の衣。
中。下。鶴の羽衣。　松の雪衣。

木草の異名の事

一松はいわこ草。雪見草。二葉草。手向草。[illegible]草。めさし草。夕かけ草。[illegible]草。とかへり草。琴引草。

一梅は匂ひ草。かへはへ草。色か草。此花草。香取草。五種草。

一柳はねわか草。川た草。糸引草。

一櫻は春さけ草。

一檜はみこさは草。

一桃は三千世草。

一牡丹はよしろ草。名取草。ふかみ草。

一桔梗は一重草。

一菊はよろひ草。きさり草。あつかひ草。

一荻はねは〳〵草。たはふれ草。風もち草。月見草。そまな草。

一杜若はかほよ草。

一萩はそとな草。しはあり草。

一萩はのなみ草。

一仙翁花はこふはい草。

一夕顔は玉かつら。

一わすれ草又一種忍ふ草とも云。

一いぬ栗はころ〳〵草。

一苻はつみまし草。

一菖蒲は花かつみ。あやめ草。

一蓮は水の花。はねす。

鳥の異名の事

一鷺はかしこ鳥。

一からすはひもす鳥。

一きしはかほとり。

一千鳥はいそな鳥。いそかし鳥。

一鶏はゆふつけ鳥。くれは鳥。玉さかとり。をしかい鳥。くたかけ鳥。かけのをとり。

一鶯は時しり鳥。百千鳥。春つけ鳥。

一時鳥〔子規〕はくもせ鳥。

一もまをはむさゝひ。かささと云。

一猪はしなかとり。

一鹿は紅葉とり。

一猿はこのみ鳥。よふことり。
一とむはうはあきつむし。
一螢は夏虫。
一かたつふりはつふなめ。
一梅の燒物。菊の燒ものはたき物の名なり。
一龍田姫おとこ也。
一いな舟いつくにも可有候哉。いやと云てうらみたる心にて候。いねにあらす候。
一苫苦のうらは和歌のうらの事に候。
一行幸小馬可有候哉。尤也。行幸はこゝ(こ歟)にめす也。供奉の人は車にめし候。
一つとまりとは水神の事候。川社も同前候。
一かさゝきの橋秋也。
一六花雪の異名也。六出の花共云也。
一式津の里。式つの神。式津の松。住吉也。式津の都とも申也。
一波間かしはと云事。海中にかきと云貝の事にて候。難波に付へし。歌に。
難波めか浪まかしはを取ほとに日もくれかゝる袖の月影
一鐘の御嶽。瀧の都。吉野の異名なり。
一ツホノ石ふみ。是は石に書たる起請文也。ツホと云都にあり。
一生田の才三鳥。木にて作たる也。生たるやうにはすましく候。
一ねこを命婦のおとゝ云は。命婦は五位也。おとゝは殿と云心也。
一おきな丸とは犬の事也。
一生て七才までを兒と云也。
一天子のはかをみさゝきと云也。
一歌にみくりと讀はすけのと也。
一ひるむしとはひるもと云草也。
一したときとは物なとはやことに申者也。
一ゆの葉のことくとはわろき小袖也。ゆすのはに似たる衣也。
一三重扇五重扇とも云也。扇の三重かさねも扇のことにて候。薄やうにて上をとぢたる扇の數を幾重と申也。
一やうきとは梅のうつは物也。葉を入る也。源氏物語にも見え候。
一阿彌陀か嶺とはせいかんちかくに候。此所にて餘載はいかいの發句被申候。
西ふくやあみたか嶺の秋のかせ
本歌に。

多くとも四十八にはよも過しあみたか笠のともしひの影

一歌にも連歌にもひれと云事は。源氏夕顔の巻に白妙の衣うつ碪のひゝきもとかけり。しろくか赤くか有んを。かやうに云候はては不可叶。白妙は衣かさ□れ□ひれとは餘情也。人のいしやうは皆ひれしほなくて候歟も連歌もあしく候。無用と思へとも。しほに置字かさりと申也。されは

鶉雉子鳴荻のやけはら雨落て。是等も雨落てと申候へは。ふひんのかた無用とは思へとも。置言ひれにて候。此一字肝要に候。

一花の木と云は梅櫻はあしく候。花と計あらは尤候。

一うち松とは篝火のこと候。

一北野は宮寺共云也。朝日寺と云有り。二月廿五日は持日。八月四日御祭。御延生日也。(連歌)むかしをしのふきさらきのてら。(ツケリ)宮居して跡をしめ野の神まうて。衆しめ野はうち野也。

一うるさくとはうるはしきこと也。

一仙郷には黄菊計有由云人有り。口惜候。人界さへ五色の菊候。仙郷に何の菊か有ましく候哉。

一あすはの神。神宮ゐ。かまの神の事なり。歌に。

いなかつら我はあすはの神かけてさほの乙女の歌ふ聲々

一あかを夜分に用ましく候。あかは水のほんこに候。

一佛の出しは難波の圖のなにはにあらす。大和の難波也。

一初瀬に里有へからす候。

一うなひ子十二三までを申候也。みとり子七はかりを申候。

一尾上名所にあらす。みなせ。たかまに候。

一門松と有候哉。八代集なとに見えす候。爲尹卿被讀候。

續群書類從卷第四百九十四

連歌部廿四

宗祇袖下

常德院殿　進上　　　宗祇

袖下

抑一座の行樣の事。いか樣にあそはされへく候哉。いかほとも案し返し〳〵。よき付合なと引合て。うつくしく長高くあそはさるへく候哉。千句の行樣の心もちの事。是はいかにも〳〵かるくとはしめ。取つきたらん付合をすてすして。めつらしからすとも。ことはさはやかにかる〳〵と御さたあるへく候哉。案し返し候へは。こされ候連歌すくなく候。御たくみ日出度候。

一面の行樣の事。口惜事共取出しもとめられては如何にて候。かる〳〵とうつくしく御さたあるへく候哉。

一八代集幷伊勢物語萬葉源氏。其外種々之内を覺候也。

一せなとは男のことなり。

一（同）あねはの松とは女にたとへたるを云也。人ならはとねかひたるなり。

一（同）みけしとは上衣の事也。御衣の事也。賞翫儀也。

一（同）あさはかとはあさくはかなきことなり。

一（同）髮あけとはひんをそく事。

一賀とは。花の時分賀をは花の賀と云。賀とは老親なとに物を出は春の事也。雪の時分の賀をは雪の賀といふなり。

一人をうけへはと云事。のろひたる事なり。わろくいふ事なり。

一こもり江とは。ふる江なとの事なり。

一玉のをと云事。しはしと云事にもあり。物によるへし。

一あはをとはあはせたる糸の事也。

一してのたをさとはほとゝきすの事也。
一ぬさとは幣の事。手向物也。大ぬさも同前也。みそき入物也。後に河になかす物なり。
一目くはせとはめにて心をかよはす事。
一友たちとも。又友とち共。何もくるしからす。
一玉むすひせよとは。うかれたる玉なとみて。きしなひたる事也。ひとにこひらるゝには。下ひものとくる事也。
一玉かつらとは草のかつらの事也。
一山かつらとは峯の霞を云なり。
一ぬるゝとはぬれたる事也。
一かりにたにとはかりそめにたにといふ事也。
一はゝ木々とは。森の梢にすくれて。そのなかによそよりたかくみえたるを申也。
同一もぬけの蝉とは身出たるせみの事也。
同一いきすたまとはいきりやうの事也。
同一ふりはへて行なとはわさと行事也。
一源氏須磨あかしなとの躰を。からのあやに書給ふを寫繪と云也。
一けしきはむとは色のみゆる事也。
一玉かつらの巻に。こかねのかめに山吹をさして。枝にてうをつけたり。同白かねのかめに梅をさして。鶯をつけて秋の御かたへ。しなさためのの書物の様を定たる事也。
一たき物合の事梅かえの巻にあり。
一宇治の橋姫とはうはそくの御むすめ也。宇治にとはす語付也。
一峯のはかむと云は。源氏にあり。東屋ちゆかみてとあり。
一橘と時鳥と一句にむすひては。時鳥へひかれて夏になるへし。橘と霞とむすひてははるなり。
一いさや河。舟なとのなき河にて舟付へからす。小川也。
一うつら衣。みしかき衣の事也。
一懸の袖。ちいさき袖の事也。
一立田河に舟付候ましく候。小河にて候。
一かさゝきとはちいさき鳥の事にて候。かさゝきのはしとは。鳥二つはきをならへて。橋にわたし候事を申也。
一みた山まつり。七夕に付へし。
一おみ衣。神祇にて候。冬なり。
一あつまかきならしてとはことの事也。
一難波をつらねてなとゝは歌の事也。
一むくさとは是も歌の事にて候。
一むつの花と云。雪の事にて候。
一むつの玉のちりと云事も雪の名にて候。

一ぬる玉と云は夢の事にて候。
一たまたすきなる戀とは。戀ちかひたる事也。
一春日のうちに武藏野と云在所有。春日に付へし。
一物語と云句に。はま松。岩屋。たけとり。すもり。（鳥のすにいのこりたる鳥の事也。）世つき。うつせ。か樣之事を物語と云句に御付候へく候。是は何も物かたりの名にて候。
一きぬと云句に。春は若菜。すみれ。山ふき。夏はなてしこ。わかな一色。卯の花。秋はあさかほ。落葉色。こほり。何もきぬと云句に付へし。是は皆々衣の名にて候。ひすへし。
一九のしな河とはこくらくの事也。
一世にかゝつらふとは世にかゝはると云事也。
一八代集。源氏。萬葉。伊勢物語。其外樣々事集たる歌の道秘書也。
一ひむろの事。さん雪をわけ可㆑樣あらす。
一清見寺の（マヽ）湍にあるにより。水邊に可㆑樣。
一花の花過ても。花の草の庵。花の草枕有へし。
一舟岡山。御舟山。舟と云字に五句可㆑嫌。
一衣河。衣手の森。衣と云字に五句可㆑嫌。
一生田と云句に森と付て。又森の名所に不可付。
一くち木と云句に杣と付て。又杣の名所に不可付。

一賦物の嫌樣。花人。山櫻。水邊。
一心の杉。こゝろの松。定たる心の事也。
一いつらとは何れはと云事也。但物によるへし。
一さすらふる身とは。世にすてられたる者の事也。
一たち花の香を［　］よきことは也。
一けちめみせぬとは色をみせぬこと也。
一ろくをやるとは物をやる事也。
一みそかに。ひそかにと（は）物をかくす事也。
一ことなけとは鳥なとことよひなけと云事也。
一なそへと云はなせと云事也。
一連歌［　］心なき人はうき世に身をすてゝ［　］うき世小（口傳）（マヽ）僧
一夕されは。夕へされはと云事也。
一幾山とはする也。幾野へはわろし。みねの事にて候間。山には峯あり。野には峯なしとしるへし。
一とまや。あしや。面にこのむへからす。
一たなゝし舟とはちひさき舟のこと也。
一かさりちまきとは五月五日のちまきの事也。
一あふなく〵。よきと藥なり。
一裳と云はもはかまの事也。
一駒のたなわしとは馬引者の事也。

一今はとてと云ことは今をかきりと云事也。
一いやなおもはしとはいやおもふまひといふ事也。
一しはまてと云はしはしと云事也。
一年ふとは年のふりたること也。
一風のまに〳〵とはかせの間の事也。まゝとも云。
一野々宮。神祇なり。
一山の姫とは山の神の事也。
一さほひめところも。衣裳にあらす。
一しは〳〵もと云はしはしと云と也。
一たく火。夜分にあらす。
一いはゝし。水邊にあらす。
一かけはし同前也。山類也。
一瀧津瀬とすれは水邊也。瀧とはかりは山類也。
一雲のつゝみとはなる神の事也。
一室のやしまは山類。水邊にあらす。
一紫のねすりとは紫にてかり衣を染たるもんのある也。君のめし候也。紫のねすりの衣。おもしろき詞なり。
一つゝし。卯花。木也。藤は草也。
一槇と云ふ字に木きらふへからす。但槇柱。まきの戸には木の字五句可嫌。
一ほから〳〵とはほの〳〵と云事也。
一なきさしよる。よきことは也。しはをき字也。
一給ふ扇とは四月一日の事なり。
一花の兄とは梅のと也。花のおとゝは菊のとなり。
一菊の水とは酒のことなり。
一花のうれとは木するの事也。
一名所に三の山陰有。須磨。宇治。小野。
一名所に三の風あり。初瀬。佐野。あすか風。
一四季種とは撫子の事也。四季に花咲故也。
一山橘。名取草。廿日草。隣草。何もふかみ草の事なり。
一鏡四季有。春は大根。夏は紅。秋は橙。冬は松也。
一さいたつまとはいたとりの事也。
一青葉のこすとは大裏に四月一日よりかけたまふなり。
一白衣とは四月一日衣かへの事也。連歌にはしらゐとするなり。ねりぬきの事也。
一にしきとりとは戀の中立の女なとの傳のこと也。
一もみちとりとは鹿の事也。
一大和河とは初瀬の川のするの事也。
一うみの宮とはりうくうの事なり。
一櫻の宮とは伊勢内宮の事也。
一さくらはの宮とは小野の御事なり。
一竹の宮ことは伊勢齋宮の御事也。

一秋さり衣は七夕の別の衣の名也。
一岩枕とは七夕の逢夜の枕の事也。
一庭の琴とは大裏にかし給ふ琴の事也。
一もみちのはし。七夕のはしのこと也。
一やすのわたり。浮津の河。天の川の事也。
一天の名種とは。七夕に大内にて万 寳 物 事に移てかし給ふ也。
一宇治の花そのとは秋の草の事也。
一うちの花合。草つくし。同秋草の事也。
一敷津の宮とは住吉のことなり。
一瀧の宮。あしかきの宮。何れも吉野の異名也。(宗砌如此。宮様相違歟。宗祇は住吉異名云。)
一あきつの小野。住吉の御事也。(宗砌は吉野にありと云。如此分私云。)
一よふこの濱。よふこの鳥。唐舟の留り也。松浦に可付候。
一松浦に鏡の里。鏡の宮。ひれふる野へ付へし。
一ひかたの鏡。伊勢の神明也。是紀國に有。伊勢に紀國付へし。
一なにはめとはいやしき女の事也。
一初瀨めとは女にてはなし。山姫也。山神の事也。
一卯月の雪。卯月の花。うの花の事也。
一はつあらしとは七月一日に吹かせの事也。

一萩の戶。うへ物也。萩のとは大裏の庭に植たる萩の事也。
一紫の庭。大内の庭の事也。萩の戶付へし。
一松の花。初春也。百年一度つゝ咲也。
一旅にて故鄕の躰を思ひ出したる躰をは面にも仕候哉。
一松の初みとり。松 葉初春也。綠立。若綠は春也。松のみりとはかりは雜也。
一にほてる海とは水うみの事也。
一をしてる海とはしほうみの事也。
一たみ草とは百姓と書也。百姓の事也。
一吉野の栖〔國栖歟〕とあらは腹赤と付へし。うをのこと也。
一木葉の巢とは瀾の沖のことなり。冬なり。植物にあらす。
一千琴の小野とは宇治の里に有名所也。
一かけろふの小野。大和にあり。
一をのゝみなと。伊勢にあり。
一きそひかりとは五月五日藥のために萬草をとることなり。
一夜さむのさと。松風の里。ね覺のさと。名所也。二萬の里備中に有。御調物付へし。
一竹の里。名所也。備中にあり。
一竹浦。竹橋。竹のとまり名所也。加賀國に有。
一霞のほら。大内の御事也。春なり。
一朧の清水。春にてはなし。名所。大原のさとにあり。

一なにはのをほろ舟とは難波天皇のめされし御舟事也。（歌有。）
一志賀の花そのとはまことのさくら也。（歌有。）
一須磨の風まつりと申は。花を風のちらす間。源氏かせを静なれときねんし給事也。
一なには草とは芦の事也。
一露取草とはいものはの事也。
一おにのしこ草とはしほんの事也。
一須磨の山さとに梅菊を付候事。行平源氏より三年さきにすみ給ふ。梅菊をうへてなかめ給ふゆへ也。
一すまに松島を付へく候。（歌有。）
一初瀬のあま小舟の事色々申候。昔大海なりし時。初瀬にこもり江とも付候也。昔大海あるによりてなり。
一霜にかねを付事。唐にほうれいと云山寺有。此鐘かならす霜夜になり候也。
一鵜戸の岩屋名所也。つくし神の古跡也。
一千鳥冬の生類にあらす。名所也。磯山瀧也。
一國の宮（宮脫歟）ことは國の守護所事也。
一琴引のとは八幡御いもうとの事也。
一玉たれ姫とは高良山に御座也。ぬれせぬ山とも申也。
一なにかし寺とは鞍馬山異名也。源氏の大将いまたいとけなくて手習したまひける寺也。
一わらはやみとはよりあひなり。わらはやみとはおこりふるひやみの事也。
一東野。名所。河内国に有。
一若草山。植物にあらす。春日野にあり。春日野に付へし。
一鶯の（せき歟）河内にあり。
一鶯の瀧。高良山にあり。高良山とは高き山なり。ちくせんにあり。
一日もすとり。山からの事なり。（山からふしん。からすに云歌有。私云。）
一里のあま。名所。阿波にあり。只あま過（脫字歟）てもすへし。
一河つゝみとは七夕の異名也。
一鏡の宮。伊勢の神明御事也。二見浦。神路山に付へく候。
一石文とは。田村將軍陸奧の國へ御下向時。弓の上はすにて書給ふ御事也。
一こすの下水とはけしやうわたしの水の事也。
一霰の松原。冬にあらす。住吉に有。松原の事也。
一御さけたねとは桃の花の異名也。
一あかしのしるしの松の事。人丸の跡の松の事。明石に付合候也。
一野島か崎。淡路津國近江三ヶ國有。津國は難波あたりに有。

近江は志賀に有。
一すけの庭鳥。同筆つむ虫。筆つむし共する。何もきり〱すの名也。
一車舟之事。津の國兵庫嶋和田の御崎を廻る舟の事也。
一繪嶋とは淡路の國に有。須磨明石藻塩草付へし。
一浪間柏。かいちうの岩に付たるかきと云貝の事也。
一岩戸柏とは岩のかとの白きを云。吉野に付へし。
一玉柏と計は海中にある石の事也。思ひふかき事付へし。難波を付へし。
一此手柏は女郎花の事也。
一なてし子の園。大和の國に有。大和撫子といへり。
一梅かえうたふ。正月七日に大内にて梅をかさして舞事也。
一卯杖とは正月七日大内へ御調物そなへて参候人のつく杖也。卯の方へさしたる松椿枝を取て。四尺五寸に切て。五色の糸にて十二所巻てつきて参る也。
一櫻を千種と云事。古今三番めの歌也。
一あこめの琴と申事。人丸東へ下給ふ時。武藏野おはなのさとに三年住給ふ時作したまふ故にあこめと申也。東にて作たる故に。東琴共申也。
一すまに鈴舟を付候事。源氏のめしたる舟の事なり。
一百千鳥とは鶯の事にや。但初春は萬鳥の事にや。句の躰によるへし。
一夜かれとはひとのとはぬ事なり。
一さはりと云は。ひとの事を心にかけて。ひとのとはぬ事也。
一相坂の關とすれは山類也。相坂と計は山類をのかれ候。
一かすむ夜とは。月ともあくるとも（ら脱歟）なくてはせぬ事也。
一草のよられてとはする也。よれとはせぬ也。
一鹿の車有。ひつしの車あり。
一連歌のとめはに道のへととめぬ事也。
一河そひとゝめぬ事也。かねのねとせぬ事也。
一山ふかきに峯を付ぬなり。
一住吉と計は水邊をのかれ候。但神とすれは水邊也。
一五月雨とゝめぬ也。水音とせぬ也。水のをとゝはする也。
一あやにくとはおもひたかふ事也。
一わくらわとはまれなる事也。
一わきもこかとはわかおとこの事也。
一玉くしの葉と云は榊の事也。（歌有）
一連歌五文字にいかゝせんとはせす。いかにせんとはすへし。
一夜嵐とせぬ也。さ夜風。夜半の嵐なとゝはよし。
一さえかへると計はせぬ也。空共霜月ともすれはよし。
一三ケ月の出る時分也。いるは夜分なり。

一有明のいるは時分にて候。
一たらちねは親なと又人の〔マヽ〕む所の事也。
一たはれめとはけいせいの事也。
一しのゝは草とは篠の様にて冬かれたる草の事也。
一なみなと打たえにとはうつ時分の事也。たえたる〔不審〕柚にも有。
花なとの咲なへに。ちるなへになとゝはちる時分の事也。
一風の吹なへにとは吹まゝにと云事也。
一こゝらの露とはつゆのしけくをきたる事也。
一むへとはたうりと云事也。
一そふたにとはそれをたにと云事也。
一たゝまくとはたちゐの事也。
一とよのあかりとは日本のあかりの事也。
一とはに浪こすなとは常に浪のこすにて候。とことはとは常住ゐたる事也。
一おほろけと云事は。およはぬ事物をふかくしらぬ也。
一ちきのかたそきかたくのみとは思ひかなはぬ事。あかぬ方也。
一めつると云事は。花紅葉月なとを見おもしろきと云事也。
一さりけなくとはさやうにもなきと云事也。
一けたれぬと云はおとらぬと云事也。
一玉ほことはみちといはむとての枕詞也。

一さやは契しと云はすはやと云事也。さやかなる事にも云なり。
一いやはねらるゝと云事は屋にねらるゝと云事也。
一かゝる所なと云事にか様の所と云事也。
一かく計と云事は此やうなると云事也。
一あなかまと云はあらかしましと云事也。
一うたゝねと云事はそとねたる事也。
一ふるころおひとは女なとにかよふ男の有事也。
一ゑしとは大内せちゑなとの時火をたく役人事也。
一させもか露とはさしもくさの事也。よもきの事也。
一花なかすは三月三日の事也。
一わきかぬるとは物をわけかねたる事也。
一良はたさむしと云は。いよ〳〵さむしと云事也。
一月草とはかまつるの事なり。
一たゆむと云は風なとの吹たえたるなり。たゆる事也。
一なくなへにと云は鳥なとのなくまゝにと云事也。
一いやとをさかると云はいよ〳〵とをさかる事也。
一しのゝめとは夜明方あしたとくの事也。
一かりかねなとの□云ははやき事也。
一雁のつはさにならすかせとは。かせの時分雁の飛事也。
一しらぬひとはつくしといはんとての枕詞也。

一たるひとは水のそとひたる事也。
一うは玉とは夜るといはんとての枕詞也。
一へらなれと云はさやうにあると云事也。
一わかせことは我かおとこの事也。
一あやまつ。あやまたるゝなとは。一重に待事也。
一めかれぬと云はわかぬことなり。しらぬ事也。
一しかあれはと云はしかるにと云事也。
一おりてめとは花やなとおらんと云事也。
一花みかてらはき詞なり。
一雪のきえかてになと云はきえんとすると云事也。
一花の香をぬすむと云事よきこと葉也。
一なけの情とはそこの情の事也。
一こゝらなくとは鳥なとのしけく鳴事也。
一あかなくにと云事。あかぬと云事也。
一おりはへてなくとは鳥なとのしかとして鳴事也。
一いとはやとはいとはやきと云事也。一字略の心へ也。
一わたつみの事。うみの事也。
一けぬか上にとは雪の消ぬか上と云事也。一字略也。
一なへて雪ふるなとゝ云。をしなへてふる事也。
一關士とは關もりの事也。人類也。
一つゝらおりの道とはしけくまかりたる道の事也。

一鷹のを山。名所也。
一あさると云はかりする事也。野をあるく事也。
一あしろきにいさよふなみと云は。あしろ木に浪のをとつれたる事也。たゝよふたる事也。又やすらふたる事也。
一雪として秋の物を入たるは冬也。霜にひかれて秋のたうくを入たるは秋也。霜は四季にあるにこそ。かりかねさむし。秋なり。
一あつかひ草とは人の上の事なり。
一玉きとは女房の手にぬき入たる玉を云也。
一業平名少々。東男。まめ男。ねゝ男。豐虎男。何れもなりひらの名也。ひすへし。
一かさゝきの橋。七夕の天河はしの名也。
一星の舟。七夕の舟。何れも水邊にあらす。
一遠里。遠野。名所也。とを里。遠野。何も一所也。
一たけかりとは九月八月松茸を取事を申也。
一木の葉の里。山しろに有。冬にあらす。
一老に檜原を付候事は只檜原の老の事也。ひはら。ふりたる事也。
一夢人とは夢まほろしの事也。
一戀の句一句すへく候事口惜候。
一はもきかそまの事。しけりたる山に似たるを申也。山類に

あらす。
一めもあやにとは［　　　］
一水のむしろとは水に莚様にもんの有を申也。
一水すたれ同事也。かせの吹時。そろ〳〵ともんの有を申也。
一花の古郷とはちりはてたる枝を申候也。
一袖の香戀にて候。
一夕とゝろきとはゆふ暮にむねうちさはきたる事也。
一山かつらとは曉の雲を申也。
一戀の山水之事泪の事也。思山もたかき事也。
一歌と過てことのは折をかへすへき也。
一みさをの事。つねなると云心也。又わたくしもなしと云事にもあり。源氏にはあたなる心にもみえ候。
一あせの事夏なり。
一清水の事。せくともくむ共候はねは雜也。
一夜たゝとは夜もすからと云事也。
一おとろ草。たゝ〔いば〕草の惣名なり。
一岩に石の事。おりて可嫌なり。
一石に眞砂同前なり。
一半天に空と云字。五句可嫌。
一世に代の事。五句可嫌。
一人のためとは人すかしと云事也。
一わりなしとは無理と云こと也。
一虫のなくに。人のなくには折こしを可嫌。
一薄におはなの事。おもてを可嫌。
一雪をれの事。竹共木共候はてはいかゝにて候。
一ねやと候折に。ね沙汰の事面を可嫌。
一雲の上そひきなり。
一夕立に夕への字。五句可嫌。
一氷と候折に月の氷。おもてを可嫌。
一わさ物之事。打こしを可嫌。
一雪のふりは。月のふりは。たゝ風依也。
一をそき日の事。暮るゝ事也。
一岩かき。居所にあらす。
一灯候折に火の事。折を可嫌。
一水鳥に千とり。面を可嫌。
一つまと候折にいもの事。面を可嫌。
一河すみとは川のすみを云なり。
一雲水とは只雲水と二ッつゝけたる事也。
一身をしる雨の事。伊勢物かたりに。雨ならはまいるましく候とおもふひとのいひし。されはこなたをおもはぬ故なれは。身をしる雨といひならはし候。

一命過て玉のを。折を可嫌。
一旅ねと過てかりね。おりを可嫌。
一手向物の事。一句にそのかん候はてはいかゝにて候。
一すみれ摘。わさ物にあらす。あそひ物也。
一行。打こしを可嫌。
一關之事。關を守る共。關候へは旅にて候。さ候はねは國のかためにて候。
一外山の事。山にゐて山のはしを外山とみる事也。
一いつしかとはいつかと云事にて候。
一さはと云事。さやうにとかと云事。一座に二ッ有へく候。
一きやと云事。けりと云事也。
一ひちてとはひたしてと云事也。
一みらむとはみるらんと云事也。
一おりけれはとは居けれはと云事也。居けれはとはきゝにくき間。おりけれはと云也。
一野守とは野を守者を云。春日にあり。(缺有。)
一道行ふりとは道ゆかん次の事。つれたちたる人也。
一あやなしと云は本はかなしきと云事也。あちきなく思ふ事のかなはぬと也。思にたかふ事也。あやにくは同前にや。又あへない事也。
一たれしかもと云はたれかもと云事也。しはをき字也。

一(ゐ)はきてとはのそきてと云事也。
一やよやまてと云はしはしまてと云事也。
一ことならはと云事はかくのとくならはと云事也。
一しかもかくすかとはさもかくすかと云事也。
一くれなはなけとは暮たりともなかるへきかと云事也。
一駒なへてとは駒ならへての事也。
一いつはとはいつとの事なり。
一なりなめと云事はならんすらめと云事也。
一なかなくとはなれかなくと云事也。なんちか事と云事也。
一とゝろきとはうこくやうなる事也。
一いなおほせ鳥とは庭たゝきの事也。せきれいの事也。
一うらひれとはうらふれと云事也。又物おもひたえたる事。しなへふれと云も同事也。
一枝もたはゝにと云は。えたのたをみたる事也。
一冬こもりとは草木の雪にうつもれたる也
一あさなけとはあしたにけてかへる事也。又物によりてあした夕の事をも云なり。
一なりしとはなかりせはと云事也。
一いさゝめとはかりそめと云事也。
一いさなみとはそつしと云事也。
一あやめもわかぬとは物の色をもわかぬ事也。峯をわかぬ事

也。
一雲のはたてとは雲のはたにゝたるを云事也。
一ほつ枝とは梅の末の枝を云也。はつえも同事也。
一ほつ枝つほめるとは枝梅のつほめるを云也。
一よるへなしとは立よるえんもなきを云也。
一するつゐにとはおもふ事かなふ事なり。
一今しはと云はしはしと云事也。一字略心也。
一いとなかるらんと云はいとまなかるらんと云事也。
一はしに我身のなるなとゝは橋たてになると云也。
一花まいなしとは。花も人の云なしにこそ賞翫もすれと云事也。
一めさしとはいそなつむ女わらんへの事也。又みるめなとつみ入る籠をも云也。
一けゝらなくとはこゝろなくと云事なり。
一よこほりふせる山とはよこさまにある山の事也。
一紅のふりいてしとはいよ／＼まさりたる様なる事也。
一物のこゑのしらへ上たるを申也。
一は入にたてる柳とは門の入口に立たるを云也。
一夜とこねとは夜るふす床の事也。
一八そ氏人とは八十氏人の事也。（輝按に武士を云也。古事有。）

一八十氏川とは宇治川を云也。それについて宇治のさと人を八十氏人と云也。
一そよみなくわたらんとは。水ともおもはすわたらんと云事也。
一野もせとは。野もせ。庭もせ。水もせ。園もせ。是皆おもてにみち／＼てあまねきよし也。
一たはやすくとはたやすくと云事也。
一遠山すりとは遠山を衣のもんにする事也。
一花すりなとみな同前。
一蘆つゝとは蘆の中にうすやうの様なる物の有を云なり。
一すくもたくとは藻くつをあつめてたく事也。
一二こもりかいことは。同まゆに二こもりたるを云也。
一物あらかい。又うへしたある物にはすの葉付へし。
一鶴の林。釋伽佛御入滅の事也。八十一年。
一しつはたとはみたれたる事也。思亂たる程と云由也。
一翁さひとは七十中納言事也。老の後花やかに出立たる也。
一まさきのつなとは。まさきのかつらをつなになひたるを云なり。
一思ひのつなとは思ひふかき事也。
一こきむらさきとは一（在歟）位二位三位までの袍を云也。
一あとうかたりとはさそ／＼かたりの事也。

一さくさめの年とはしうとめの事也。

一あまる（さ歟）鳥なとは物をはむ事也。とめる事也。

一櫻かりとは櫻をたつぬる事也。

一ねこしてうへしとはほりてうへたる事也。

一すさむと云事。風なとのすさむと云はあらく吹事也。すさむと云にも。雨のふりすさむはふりやみたる事也。戀なとのすさむはとひすてたる事也。すさむると云にも。月花をすさむるは。いかにもみはやし。賞翫おもしろかりたる事也。

一うたかたとはいかてと云事也。又水のあはと申事。中〳〵もち論に候。水のあはをもうたかたと云也。

一鶯は夜るなかす候。蟬もなかぬ物にて候。

一藤つほ。梅つほ。春にてはなく候。同なしつほ春にて候。是はいつれも大裏の庭也。

一かのこまたらの雪とはむら〳〵の雪の事也。

一むさしあふみとは。武藏近江より天子へ昔參初し物を。その國の名をよひ給也。武藏鐙と申ならはし候。弓は信濃より參初しかは。しなのまゆみと申也。

一にととまるてにをは過去。現在。未來有。

くわこ。　人こゝろよもかはらしとおもひしに。

現在。　かへてわれうらむへしとはおもはぬに。

未來。　われからうき人のこゝろのしられぬに。

一月や花夜るみる色のふかみ草。

一鳥かへる雲や霞に日のいりて。

一今ははやとはしと月に鳥鳴て。

一そかよの三字之事。口傳。一句のうちに此字あらは。てと留るましく候。但末にとの字入候はゝ。との字はおさへ字にて候間。てと留候へく候。

一二五の三四と申候て。此道の隱にて候。連歌のふしをおとし。たけ高くうつくしく。うるはしくなす秘曲也。

一山の遠やまつくれぬらん。先と二ッ。暮ぬらんと五。是は二五と申候て。連歌ふし立候てわろく候。

一山の遠や夕へなるらん。夕と三ッ。なるらんと四ッ。是は三四と申て連歌うつくしく。たけ高くふしもなく能候。二五のやうには聞え候へ共。初郭公山時鳥なとは。くちのうち一ふしに候あいた。うるはしく候。

一發句の切字の事。もすそやぬれしよとなせり。如此字入候てきれ候へし。又にてかなの事無上の秘事也。發句あそはし候て　哉と御留候御發句をよみ御くたし候て。二三ときこえ候はゝ。きれたると御心得有へく候。きこえ候はすは。御さた候てもきれ候ましく候。かなのうらは〔にて脫歟〕にて候。にてのうらはかなにて候。此故に發句のかなと候に。第三

にゝてとはにぬ也。御分別あるへし。

一大僧ヵ賀何日傳。

一花は非レ心も情にかみをときつ風。（こゝろなきも）

一ゆるし色とはうくれないのうすき事也。

一やよ時雨とはあいしくれと云事也。

一難すてふ。哀てふなとは。難をする哀をすると云事也。

一大みねの事。春入をは順のみね。秋入をは道のみねと云事なり。

一やすみしるとは。お隈やけは八方をしろしめさるれはそのとはり也。みなから萬方の事をおほしめし御しり候事也。

一昔の御事也。

一つかのまとはそとのまの事也。

一十五日はもち月。十六日はいさよひの月。十七日はたちまち月。十八日はゐまち月。十九日はねまち月。廿日よりさきは有明也。

一御わさとは佛の御ことなり。

一おさ／＼しからすとは。おとなしからすと云事也。

一かいまみるとは垣間よりみたる事也。

一ひたふるとはひたとよる事也。

一なまこゝろとはやさしき事也。

一さしも草とはよもきの事也。

一かつみ草とはあやめの事也。

一ふかみ草とはぼたんの事也。

一さき草とは檜の木の事也。

一かりかねと千鳥をむすひたる付合也。

一月といひ候ては。夜るはそとをみたる躰すへからす候。

一風をそてになれてとは。あふきの風の事也。

一志賀の山こえ。夜は旅なり。

一高砂。水邊にあらす。

一三吉野。山類にあらす。

一つねのともし火。夜分にあらす。

一すゝしきに風。一句きらはす候也。うちこしも不苦。

一花の宿。居所に二句きらふへし。

一かつらきに加茂を付候。其故はかつらきより加茂へ御うつり候間。かつらきの神もかもの御神様も同御事にて候。

一おしと留り候字。しの字に不嫌候。

一つれなきに無と云字不嫌候。つれなきとは無面と書間不嫌候。

一松山と詰せす候。松山の浪共すゑ共仕候也。水邊なり。

一花にひねもす。月にひねもすなとは。終日まよひてくらしたる躰にて候。

一他國と書て人の國とよむなり。

一他のさとと書て人のさとゝよむ也。何も人倫に二句可嫌也。

右北條左京大夫氏政筆寫之。

貞享五辰九月五日

于時寶永七庚寅年六月六日書寫終　　花中

右墨三十二紙

續群書類從卷第四百九十五

連歌部廿五

花能萬賀喜

一救濟連歌。

袖こそ梅はなをにほひける と云句に

妻木とる山里人の藤衣

これはいやしき山かつのことを云たるか。句は極てやさしくしたてたる。妻木は前句ににほひけると侍る所に取付たるへし。

なくや千鳥の水さむきこゑ

舟くたすさよふけ方に月出て

これはさよ衛の跡をしたひたる詞の外はことなる事なし。たゝ一句からのさひて哀なる躰を以。前句によく似會たるなり。

うき別をはしはしとゝめよ

古郷の山遠くなる湊舟

誠に古郷の旅別、山さへ見えすならん。湊にて舟にのらん客。いかてかしはしとゝめよとおもはさるへき。

旅のあはれはやと毎にあり

忘れしな山路の夕浦の秋

人の別も今は年〳〵

我涙れ覺の秋にかさなりて

時をもしらす過るかくれ家

柴の戸の朝氣のけふり末絕て

これそこたふる谷のあまひこ

杣木引檜原の山の夕あらし

うき世のゆめは通すもかな

陰家に今は終りを松のかせ

以上此五句寄合は一もなし。只心似合詞色有て。毎句感ふかくたけ高き躰なり。

　我戀しさそ偽もなき
思ねはその人をのみ夢に見て

是は只やさしき姿。うるはしき躰なり。

　宮古に行は心なりけり
あふ人に遠くきぬるとこつてゝ

これ又やさしくて。而も伊勢物語。業平の朝臣宇津山にて修行者に行會し心を合て。詞はおなし物語に。すみた川にて都鳥に事問けるなとを具足せり。態其所の事をせむとにはあらす。天性上手にては。自然に如此のこと出來ものなり。

　つゐにはおなし道とこそきけ
乘る駒のあしから近き箱根山

これは一向心はかりにて付たる句なり。

　かるゝや草のかきりなるらん
我なみた人目しのふのみたれにて

是は若紫のすり衣忍ふの亂かきりしられすと云。本歌の詞を以付たるなり。

　いさやおほえす夢をこそみれ
河音の近き旅ねの東の山

これ又とこの山なるいさや河の本歌也。此一句に河と云字の入たる肝心なるへし。

　今日をこそまつる日吉とはやすなれ
忌さゝぬまに門出をせよ

是は日吉と云所を吉日に取成て。門出をせよと付たるなり。まつる心捨かたきによて。忌さゝぬ間と云たるなり。

　一むかしなる夢の世中
又や見ん今こそ伊勢の宮作り

一昔は廿一年にて伊勢の造宮ありと。誰もしる事なれとも。夢の世の心大事なるを又やみんと云。誠に明日を期せぬ人間にて。未來の造營にあひ侍らん事これかたし。殊勝の妙句趣過の金言なり。

　月寒しとふらひきます友も哉
野寺のかねの遠き秋の夜

詞はやす〳〵として。心はさひてあはれなる。野寺訪僧歸帶月と云詩をもて付たるなり。

　うき世の中はいてもやられす
くれ竹のは山かくれの窓の月

これは只詞をやすらかに云て。姿を優美にしたてたり。此寄合はいかなる初心も思よらさるへきにあらす。

　かねこそ春の夕なりけり

ねぬる夜の其曉に年越て
これは年越しあかつきのかねを。其日の夕に又きゝて。春なりけりと知たる心なるへし。
こゝろのすちは二あるみち
左右肩には髮をゆりかけて
これはこまかに心を付たる句なり。
あふきの紙も包ふたきもの
山陰に消さる雪か梅の花
是は扇の詩に盛夏ニ所消雪と云心を付。薫に梅花方。如此寄合をこまかに四季なと云様にくみて付たるなり。
親や我子のまもりなるらん
腰にさす片名の文字を取分て
是又こまか也。まほり刀の心。又おやの名乘の片字を取分てつく物なれは。如此なむ粉骨したる句也。かゝる躰はまなひ得事甚以可難。歌に强力躰と云にあひおなし。
角あるは又牛とこそみれ
目をひらくたけり心はおそろしや
これはたけき武士なとの躰をしたてゝ。詞さへつよくきこゆ。うしとこそみれと云所に。人のたけりたる所を云あらはせる神變なり。角には目を對たるなるへし。ひらくとはめをみいからしたる形なり。歌に鬼拉様躰と云は其躰に相

同。
一良阿連歌。
くるれはうかふ月のおもかけ
萩にふくかせをなみたの初にて
これはことなる事なけれ共。秀逸の躰なるへし。
子をおもふ鳥そ立空もなき
ふみしたく草はやけ野のけふりにて
是は前句の心にとれは。此草は鳥のふみしたきたるにて。一句にとれは。人のふみしたきたるなり。
庭なる花の枝をこそおれ
山からす巣をはいつくに作るらん
庭前の花の枝を山からす巣のために令折心。いとおかしくおもひよれり。
かりね少き月の短夜
五月雨にみつのゝあやめ末みえて
前句の假ねを苅根に取成て。みしかき心に末見えてと云たるなり。よとのと云ても同事の様なれ共。みつのを水の字にしたてたるかおもしろし。一句は常の事なるか。より所あたらしく見えたるなり。
三十あまりの誓たのもし
よむ歌の文字に枯木も花開く

観世音の三十三身の誓約を和歌の三十一字の心に取成て侍るか。猶不足なる故に。千手の観力の心を云かたるなり。

名ある人こそかゝみなりけれ
賢をまなひうつすは心にて

是は事可然躰なり。上座の人も下座の人も。初心も後心も。主を不可嫌句也。

霞てや月のかけさへなかるらん
花のしつくの山の井の水

これは上臈しくて。主を不可嫌句なり。

かへらぬしての山路とそ聞
時鳥す守のかひ子うみすてゝ

うらおもてある世のにこりかは
蓮はのかけなる水は月もなし

ほしのはしるやとふ火なるらん
出て見る野守に鹿のおとろきて

以上此三句。心も寄合も一句の姿も。さま〳〵かけ合てやすくおもしろし。

おやのいたみや子にあたるらん
かり人の矢前の鹿のはらこもり

是は興をもよおす風骨なり。

よろつの虫そ命つきぬる
朽木をもたけは夕のけふりにて

是又趣思寄所なり。命つきぬると有に。夕のけふりと云て。無常の心を含みたるなり。

とり所なき身をそ捨つる
猿澤のいける計に月すみて

さるの水月を取得さる心を。かの池にうねめなりける女。身を捨ける古事をあらはせり。一の矢をもてこの鹿を射ると云ことく。一の句をもて二のさるをつなきたる。只これ手たれのわさなり。

いくたひ法に身をすてつらん
舟もなき流の砂みなきりて

彼玄弉三蔵佛法弘通のために。流砂葱嶺のけしき。造々に七生身を捨けん事を思て。なをたらぬ様にやとて。法と云詞に舟をよせたるなり。至らぬくまもなきこゝろはへなるへし。

一周阿連歌。

山のさかひもしらぬ明更
雪もふり月も残てさむきよに

これはさかひも見えぬ明更の躰を能付て。雪と月との景物を取こみたりといへ共。更にあまる所なく。末座の輩にも初心の人にも可似合句也。和歌に見様躰と云か。此句あひ

おなし。
　よるかたもなき天の川なみ
宿も哉ぬるよかたのゝ草まくら
是は心哀に詞やさし。よる方もなきなと云るに。草の枕の便心。其意あさからす。
　あはれはことに山さとの秋
捨し世はかへらぬ旅のはしめにて
是又同前。
　さためぬものを旅の行末
風ふけはあすのとまりに舟のきて
これは巧過て。其理たちかたく其躰艶ならす。
　なみしつかなるうらの夕くれ
里やゝと舟の内には人もなし
これは巧みにして姿よろし。
　めもあはてこそよをあかしけれ
籠の中のつるゝ親子のなく聲に
此秀句一興の詞なり。依時心とく聞ゆへし。
一梵灯連歌。
　又かはり行秋のさひしさ
木葉ふくあらしの末のむらすゝき
舟出して山の湊も有けるに
うみはる〳〵とめくる近江路
　又もあはすはのちいかにせん
法を聞人とけ今も生きて
此三句あさきに似てふかし。むらすゝきは見様に。近江路は景曲躰。法を聞人は麗躰也。
一宗砌連歌。
　こゝをさらてもいたるかのきし
龍田よりそれに三室の山櫻
こゝをさらて。かしこの山さくらをみたる心は。一興の躰にや侍らん。
　山川に竹のゆひ樋引かけて
谷のいほりにたれをまつらん
これはまへの句。色〳〵道かたき詞共をうちすてゝ。やすく心一を付たるなり。あなかち此二句自讃にあらす。さすかに世にきこえたるもあまた侍へけれと。此等の金玉共に書加てなにゝかはせん。しかはあれと今上下の二句思出してこれにのせ。いさゝか筆のすさみとし侍計也。
　享徳初の年神無月の比。大和國より或少人連歌の道心得侍へきやうを書付てと承程に。草案なとにもおよはす。かたはらにみつけ侍る此料紙を取てかやうにしるし。かの所望にしたかひ侍る。いかにそや。

馬上集 心敬僧都述

宗砌 在判

なにはの事も夢とおとろけ
大ゐ川入江のあしに風ふきて
　猶さひしさそまさる山里
なくさめて歸ると人やおもふらん
　さひしく成ぬ松の下庵
うたて身に捨し心やかはるらん

此三句當代連歌發心執行の句とて翫ひ侍り。愚老も同心つかふまつる。此心を自得したまはゝ。なとか此道の好士にならせたまはさらん。人の数に寄へからす。但てにをはなとは習侍る事とあり。只我といく度も吟し合て。前句付句をかみ合て付給ふへし。昔中つ比の好士我も〳〵と付合なすといへとも。其比の連歌の心修行いたらさりける也。愚意及難き故か。心に入こほりたる修行の句はみえ侍らす。救済周阿なとの句。千句の惣長とて。當代の齊（青歟）抄なとに書顯し世に翫ぬ。點句とも愚案を廻し侍るに。心のふかき事はあさくて。只言葉のかさりを付るとみへたり。少々句を注す。

山より里にいつかいつへき と云句に
　雨を待岩尾の苔のたまり水

此句打聞侍る心はさも有らん。愚意は明かたくこそ存れ。先巖の苔のしつくのたまり水は。何の故に雨を待といへる縁心ほしく候。縦雨灑水たまり。里迄流れ出へき事もいかん。何所詮に苔のたまり水雨を待と付侍るそ。或は早苗採ひかたの田面、生巣の魚。花遲き梢なとゝ云句に結ひ入て社。雨を待心しかるへけれ。遠山陰の岩尾のたまり水。雨を待といひ付侍る事曲なし。但其比の名句なれはこそ千句の惣長にて侍りけん。當代は如何にも心の深き奥を尋て。理を上にあらはし。古事を下に含めと云り。大方に學ふへき道にあらす。此程の好士のかゝる言は面白珍しとて。少も心はゆかて言葉をおかし。つはきをなめたるつひつきの句毎に眼を曝し。五音相通に至ふかく說々なるへし。長々敷御物語なれ共。近代集に書洩したる事計注す。當世の連歌に種々の口傳有とて。一年京都より關東へ下向の好士着（差歟）事なくて上洛す。もし愚老か事日はつかしく存す。前々に申如く。此道は心より取よるを第一とす。句の修行かなひなはさのみ別の口傳有へきとも存せす。千言も一言の悟と申とく。能々案し給ふへし。

一むかし攝政家に二日千句興行有。千万點を取惣長の作者に

は。上聞に入て拜領をなし。末代に此道をのこし。人の心をも漸慰らるへしとて。七日以前より廻文あり。殊救濟宗匠なれは一番に觸らる。同周阿救濟の弟子なから。いつれはさやと天下にあつかひ侍る程に好士也。周阿救濟か宿所に夜更人しつまりて忍行。ひそかに申けるは。扨も世に人多といへとも。此道に名をしられたる者は兩人也。今度千句惣長の事如何思召給ふそ。可申合心中にて夜陰に參たり。若惣長あらは當代は所知得。末代には名を殘し給ふへし。凡公家武家諸大名の連衆。又北野宮仕等連歌。如何に所領は氣なり共惣長は叶まし。貴邊と愚身と心得計案したらん句に。なとか惣長ならさらん。愚身に定而執筆をさしあてらるへし。然共指合なからん者後をみすまし。愚句を一句捨て前句を申へし。諸人句を出す共。指合あらとてかへし侍るへし。

池をも田にや作りなすらんと申へし。此句に兼て付すましたまへと。兩人ともに名を得たるほとの好士。一夜かほと談合して付侍れは。なとかあしかるへき。

水鳥のをしねかりほす秋の日に

兩者申定而退出す。則攝政家の千句に參て。救濟は宗匠なれは。貴賤滿座とも輕らす。さし合はうしきを申定けり。あんの如く三百韻めの執筆を周阿にさせしに。周阿上座して執筆をつかふまつり。三ノ面六句目に件の句を出す。

池をも田にや作なすらんと申て。救濟か方を忍侍る時。約束の句を出さんとて。扇を追取執筆之み上よりはやく。

一條殿

ふかゝりし夜はほの／＼と打あけて

とあそはさる。滿座も前對句成にやすノ＼とあそはし侍るとて感もあへさるに。夜分近くわたらせ給ふとて。貴句を返したてまつる。救濟法師しはらく案したるよしにて。

水鳥のをしねかりほす秋の日に

と申けれは。二條殿よくそさしあひありてかへり侍と御感有けれは。上下の面々もさゝやきあはれけり。千句果て則其比の好士名を忍世にかくれわたらせ給ひけり。方人點をとられけれは。八方點は水鳥の句惣長也。然則北野領のうち近江丹波に兩所御約束のとく拜領して。たくひなき事とて。世に偏執の人も多かりける。去程に周阿か愚案にこそとて。一所をは周阿にとらせけるとなん。然に此點懷帋を二條殿取よせられ。指合と周阿申折を御覽するに。五句十句之內。夜分はみえす。如何樣此句兩人かねて談合して。指合無句を返したる惡しとて。彼懷帋を兩人のかたへみせ給へは。面目をうしなひ。あなかち罪科のさたはなかりしかとも。都の内を忍ひ出て九州へ下。三年へて一首の歌に

てめし返さる。
水鳥のをしゆへにこる心哉物いはてかく三年をそふる
と申たりしゆへ。一能は一技をのかるゝといふ本文あれは。にくけれとも召らる。殊にかれらは此道の聖也。一度のあやまりは聖人もあるといへる事。なか〳〵しき御物語なれ共。若公も執筆連歌世にすくれ給ふへきとみえたり。當代も勝負連歌なとに指合無句を返し侍る執筆數を知す。神慮の恐といひ。かゝる昔の誤を聞侍らぬからたてしくこそあれ。此道はよくさとりをなし。いかなる下賤若輩の句をもそたて正直を守らは。現世安穏後生善所のつとめたるへきを。いくほと無命の中に。かゝる惣心（惡歟）を胸に挟けん事こそおそろしく侍れ。中つ比當代の好士達或弓箭に肝を通され。魔道にちんりんするた。庵主不審に存られ。北野に一七日参籠申。此事をいのられけるに。滿願の夜あらたに天滿天神枕に立たせ給ひ。汝よく聞。先達とも指まんきをおこし。人の句を出せは。爰にもつかす。かしこにもあたり侍らす。此興の句也。指合有て返れかし。我句を出しとまらんと。胸中に毎座含ゆへに。神慮にもたかひ。魔道にちんりんす。更別儀にあらす。汝も先年有に千句有つる時。他人の句とに指合あれかし。我句をとりなんと思ひし罪により。片方の隈しひたり。只此道ならす。人の難にもかはり。人を助る心たにあらは。神慮とて別になし。此心を未なをし侍らすとて。うしろをむかせ給ふとみて。夢は覺にけり。則發心して諸國修行し。此道を人にも教そたてけるとなん。

一他人の句を我しらぬ事あれはとてそしり。句を返す事有へからす。下賤若輩の句なり共。他人の句ならはさしあひなくは書付給ふへし。或當好士の下に入。理をもうけ。門弟なとあらは。毎句不審をも明らめとひ尋へしとなり。此道は更々少心に計かたき道也。我しらぬ事のみ多かるへし。宗祇語傳しは。越前國に千句の有けるに。いつかたともしらぬあさましけなる修行者。千句望かほに推參す。此斧僧の姿をみるに。連歌も思ひやられたりとて。少人若衆なとは目を引笑しゝめきけるとなん。此千句も十方點を取へしとて。勝負の賭物に砂金十兩上座につみ置。上に短册を理の題のために歌一首狂言を書侍し。

言のはの千句の中に惣長に砂金十兩みな出へし

彼修行は此歌をしらぬかほにて心にとめ。（[illegible]）滿座の句共を二百韻聞。一句も付すしてありけれは。客僧は連歌は望になくて。還廊の所望とみえたり。次の間へいらせ給へと追出しけれとも。さすか好士なれは。しようしをほそくあけて。前句を待ゐたりける所に。

車をかへす人のさま〳〵と言前句有。

　母に勝申の名なれは行かたし　　　客　　僧

と付侍りしを。執筆むさ〳〵とうけ取。満座も一同し笑さゝやきあひけり。座上に宿老の好士。此句さる古事ありと覺ゆ。殊勝に候とありけれは。其時執筆請取書付侍り。後の日に點を取けれは此句想長也。點と注を書付。懐紙をかへされけるとなん。此心は唐に周の蘇王狩し給ふ時。俄に雨ふり。立よらせ給ふへき陰なかりしに。狩野よりむかひに松一村の里あり。蘇王あの里へ車を進よとゝはせ。雨をとをせと勅定あり。里名は何と云なと御尋有けれは。母勝里と申となん。因縁はいかにと有けれは。むかし只ひとり有ける子。母と軍をして母をころしけるより。母勝の里と申ならし候と申けれは。あなおそろしの里の名やとて。御車を返させたまふとなん。しかあれは面白き名句也。此客僧越後國松の山家河原山天神にてわたらせ給と語侍りし。さも有けるや。彼砂金。此句想長ありける一兩日ありてうせけるにや。うたかひなき天神の御業と申ぬへし。當代も我しらぬ事のみ也。智恵ふかき人の上をなんし侍る事毎々也。我しらすは何事もやう有とおもひ給ふへし。

一宗砌の句に。

　いかにもしけれかへる道しはと云句に。

春の野にきしや卵をかくすらんと付侍しを。此前句鳥類の心はかりかたく存す。當代此道に敎外別傳の案心修行仕といへとも。鳥類獣の振舞。能作はあつかひ侍らん事。推量も無益かと存し。宗砌も名をのこしたる好士なれ共。知此事たゝあるとなん。馬にはのれる人なつ(マヽ)こと葉おゝきものはしなすくなしといへる事。誠なるかなや。

一又其頃の句。作者はおほえす。

　たのむ陰なくて雖面生る世にと云句に。

きゝすかりはの草そみしかき。此付句前によそとあらは。付句よろしかるへし。よく〳〵かみ合たまはゝ。おのつからんとにとの分別心を得給ふへし。同其比の句に。

　岩かねに苔むす松のかたふきてと云句に。

つえつく程に道そくるしきと付。作者は誰なるらん。事願。愚老此句ふしむ申侍りし。愚意も同心のよし申華。或我庭の植木になり傾は。杖をも柱をもつかすへけれ。深山木の朽たる松なとは。とく朽て薪にもせはやとこそ思ふへけれ。何の所詮ありて杖はつかすへき。如此の句かゝる千歌万首にもわたりはんへるへし。かやうの句ゆへなし。上は似たれとも。露程も下は不付。よく〳〵心得給へ。

一當代の句。作者は不覺。

　朽たる松の枝を杜きれと言句に。

山賤も心有けるみねのいほと付侍り。此間の名句とて。

田舍なとに詰句に申侍り。前句こそ山賤なから。花咲木をはのこし。花さかぬ木の枝を分て切たるこそ。山賤の心ある道理ありノ\と聞え侍れ。此ふかき心なる事とも分別なく。只好士なとの句なれはとて感し給ふへからす。如此等の事注にいとまあらす。

一中つ比の名句に。

いかにつくると罪はあらしなと云句に。

古のかりはの野邊を田になしてと付侍。此句前にはよく付侍れ共。前句心得かたし。釋教外の悟の上なり共。歌道には一句の道理をいひたて。心をやはらけ侍りてこそ道たか〔ゑ歟〕へけれ。か様の句は兼て前句を作付侍るとて。きらひ給ふへき也。

一前句に付句にて。いひかけ付侍るてにをはの事。

おしまぬなからいつまての身そと云句に。

月にさへしほくむあまのまつしまやと。前に言懸侍れは。歌は松島やをしまの海士といひつゝけて。一ふし故ある也。何れの句も前句に付句の下の句にて云かけ侍る手爾遠葉。是にて悟たまふへし。

一當代にとまる句に。上にてこそといひ。又成敗したる句。にとまり侍る句多くみえたり。近代名句に。

吉野のおくも秋は來にけりと云句に。

隱家は人こそとはね鳴鹿にとあり。此句は攝政家のあそはし侍るとなん。然に凡慮及かたく侍り。其比天下にめつらしきてにをはとて。用侍る人も多かりける。しかはあれとも愚老一兩人は御句の心及かたく存て。此てにをはにてに留りの句はつかふまつらす。又凡人の手本に用侍るも尤か。攝政家の御句なる上は。聖人も一度のあやまちのあれは。さもわたらせ給ふらん。又は手爾遠葉に付て。六義のならひありといへと。愚意及かたく侍り。

一せいはひの句留りにの事。

ちらてさけ花も名殘の春成にとあり。手爾遠波ちかひたる句也。如此事書注侍る事めつらしからす。しかれ共當代我もノ\と存たる人の句ともにあり。手本になるへからす。

一にてと留り。てと留りたる句。前にての字侍。指合有とて返し侍れは。少も案しふせにして。らんとなをして句をとまる人多く侍り。にてとにとの留は。手爾遠波のしかと定るけしきもなく。らんと直し侍りとゝまる事。此道の達者とや申さん。又道の深をしらぬ故とやいはん。惣して貴賤なとか〔に歟〕て賦句を直し侍る事一向法なき事といへり。救濟は一生の中に二句直し留る侍ると自見集に書侍り。是にて計しらせ給へ。

一それをたにと云句たゝみえ侍り。萬相事なし。

それをたにうきに又聞松の風とも。秋の風ともつゝけ侍らはん。それをたにの上にていひなかしたる手仁遠波をは。心もにあひ侍らんか。只人の習ありて用ると葉も。てにをはをもしらすして。毎々もちいらるゝ事うたてしくこそ侍れ。此句にて何をも心得給ふへし。

一投はといふ手仁遠波の事。

投は心にかなふ山里と云句に。

うきはたゝ都に遠き事ひとつ。さてはと付侍るてにをは六義の第一とす。前に申とく。松しまやと留りぬれは。ふつゝかにきこえ侍れ共。おしまといはん爲なれは聞にくからす。如此等てにをは初心の時はたゝ人まねのやうに聞侍る程に。中らうの比よりあそはし給へ。

一さなきたにといふ手爾越波の事。

さなきたにさひしき山は水の音。それをたにの手爾遠波同前。

一ともすれはと云言は。遠國中國にはやり用侍り。愚老此心を問ひ尋侍りしより一向斟酌せり。近代西國よりのほる點懐紙に多みえ侍る。あひかまへて用給ふな。

一ありさまと云言葉。昔中比より好士も用來る條さもありなん。けれやら調の心は其品の有様と聞え侍れは(と歟)。こうみ(好味)は入たる儀なしとあれは。宗砌奉行申せし代より。うるさきとは成とて。天下に知る程の連衆は用侍らす。

一よそほひのとはこのましからす。花のよそほひ又は月のよそほひは莊の字の意か。此とはも愚老はいまた申侍らす。

一ましはしの言は手爾遠波。宗砌句に。

いかなる世にかあはん行末といふ句に。

うき身とて思ひなすてそましはしと付侍り。如此の句はましはしに叶侍るへき也。

一こそと有句。とまりはかならすけれと留り侍るへき句なれ共。句によるへし。

佛こそ二つの川の渡し守

香に立を花こそしられ春の風

それこそ是こそと名を云付侍れは。か樣にも申へきなり。如此等の手爾をはなとは好士の上のこしつ也といへり。初心の時は發句は哉と留。第三はにてと留。こそといひてはけれと留。そとにこしてはると留。やとうたかひてはらんと留給ふへし。めつらしきとは手爾遠波なとは。座を經るひ。我物にいひなし侍る時苦かるへからす。人ことに上下の句一句も指合なとなくて留り侍れは。歌連歌はたやすき道也。なんて(ろ歟)もさのみならひあるへきのゝしり。我連歌にまよひ。世に人はそれともしらさるに。名を名乘我句を語

句にする人多し。此道は如何にも我は名をかくし身をひけし侍れ共。他門より名を知。世上にゆるされてこそ面白侍れ。あさし共申に障なし。歌道にかきるへからす。諸道にわたり侍るへし。

一連歌神法樂（哀傷）或は初春貴殿高官の會なとには。少引つくろひ。禁句あひしやうの句心得らるへし。それも主人歌道の好士なれは。只より付たる句をかんし（歟）祝言を外する也。連歌はいかなる經論說法より難有祈禱也。此道をもしらぬ所の興行なとに。昨日みし人も無世に。手を折て子ありとも。うかふ程にはよもとはし。連て行道あれかしな。苔の下な（筭）とゝいふ句。興をさましたる心得也。かはかりの事はかねはか（計）り侍れ共。失念おこり。愚老も越後上杉同州の所にて。三歳の子息の髪置の祝言の連歌に。前句は覺へ侍らす。餘に寄來る付所にて侍りし程に。

　みとり子は二人の親に先立てと申。末座の召つれたる同宿敬松と申ける。是か連歌器用により。愚老に久しく伴。歌道の儀なと朝夕申聞せ侍しか。愚老方をにらみ侍りしかとも。三歳の子息髪置の事は思ひもよらす。如此等の事は兼て心にかけぬれ共心にまかせす。此道はよく道にいり修行に眼をさらし侍るを。なんてう千代万代。千年ふる命なといひならふ事は。此家の迷の中のまよひ也。何の人かかく祝言して千年百とせ送けん。一生夢の中なれは。さめぬ先に一すしのいきのをはかりをこそ尋みたけれ。此道に十德をあけ。又十德を和して百德を作りあけけるも。天台十德に露程もかはらす。第一に自解佛乘の位をあけらるゝは歌道の位也。如此等の深奥を輕思。舌上のつゝきになしとはをかろくはき捨らるゝ人こそうたてけれ。猶々申侍るへき事澤山なれ共。近代好士と色さまをかへ書付侍る程にめつらしからす。此言はは此間の先達申もらし侍ると。かたはし計まいらせ候。殊今日御馬毛に具て御物語申かね侍り。觀音寺より明日下向之時一夜推參申。重而注まいらせ申へし。此文は人の舌にある事なれは。あなかしこ御他見有事なかれ。

　此抄は心敬僧都九條殿若君と石山へ供奉の時。心敬僧都道すから馬の上にて條々を尋させ給ふる。馬上集と名付侍るとなん。其以後叡慮により僧都自筆にて進上申されける本を申出し寫取畢。關東へは一帖書下さると風聞候。此抄はふつかまに納給ふなれは。凡慮輙もちあつかふへからす。

馬上集　下

前に申如く。連歌は十躰に分て。十六方へ心を遣へきよし

先注申侍り。其まていたりかたくは。心をくたき。前句の肝要心のしみたらん事をとゝのへつめて付へき也。十躰の句あら〱注也。中つ比なとは十躰も替侍り。

一やさしく長高き句。

面影の遠く成こそかなしけれと云句に。

花みし山の明ほのゝ雲

一心付の句。

身の偽ならん祈成けりと云句に。

小山田の早苗とるより雨待て

一古事本說の句かゝり。

ねぬ夜に朽る夢の浮橋と云句に。

いにしへの長柄の宮の月をみて

一たけ高き句。

夢現とも分ぬ春秋と云句に。

月に友花も此世のものならて

一前句を洩さす付侍る句。

ほしをいたゝく衣〱のせいと云句に。

武士のとものほろかけ甲きて

一名所をのけす付侍る句。

こゝをさらてもいたる彼岸と云句に。

立田よりそれと三室の山さくら

一戀の句のあはれふかき句。

おもふ心そ空にうかるゝと云句に。

からす鳴霜夜の月にひとりねて

一あはれふかき句。

こゝろや花の陰にあるらんと云句に。

植をきし人はむかしの宿の梅

一哀ふかき述懐の句。

ありしなからの黒髪もかなと云句に。

捨果ぬ身ならは出ん君か代に

一親子ふかき心さしの句。

武士の軍の庭に子を連てと云句に。

なからんあとをたれにとはれん

一連歌に十好の物あり。

一に弁。二に利根。三に了智。四に智恵。五に口。六に貧。七に修行。八に不酒。九に□十に遁世。十好之儀一も闕なは。世にしられぬる好士には成かたしと也。歌連歌は福貴にしても朝夕米錢算用にて諸公事をあつかひ。嗔恚をおこしてもかなはぬ道也。又はさのみ貧にても興行成かたし。惣して此道は酒肴取散して。酒宴音曲なとにてはこそみえたるほか。說のと葉出來かたかるへしと也。とやいかん貧は愚老かやすく侍るへし。此貧は無力にして。事たらぬ

貪は心はかり侍るへき也。
一連歌に二十五德あり。是は九州安樂寺之別當善心に御夢想の告侍り。二十五德記とて應字に用。今に九州九ケ國にいかなる鬼靈の祈にも。大成德自在天神と廿五德を掛奉りて祈禱成弁と云へり。少々肝要斗注也。
一祈すして神慮叶。
一我身賤位なくして高位にもちあけらるゝ。
一惡心をおこし。たかひに敵心をさしはさみぬとも。一度座に會つらなれはうらみを着（忘歟）。
一惣て歌道の友は。まさしきいとこより猶ちかき本文有となり。
一行いたらすして遠き名所を見る。
一ならひさとらされとも心中あきらか也。
一千句には七難を眼前に七里の外へ拂。七福十德即しやうするといへり。聞侍るとこ猶々捨かたきみち也。
一無實の咎をいのれは立所に叶侍と也。
一不捨してうき世をいとふ。
一ならはすして書點を心みる。
一假定業たりといふともてんすへきと也。粗注はいとまあらす。
一千句は連歌のくわんちようたやすく思はしむる事。やすやすと持へし。惣して救濟は百韻に三百句付て持けるとなん。愚老とも一句に二句三句は付て持。胸中にてくたし侍る事每々也。いはんや好士等におひてをや。初心の時は句をかる〳〵と心得。縱大啓の及かたきなん句成共。安々と思ひ。付句をは大事に心得へきと也。初心より心斗をたかく。たけの長短のみあんし侍れは。言はこほりはて。こゝくしつの者と斗見え。大にひいる事なし。例式の五句三句の連衆と聞へ給ふ斗也。天に階なくとも登り。地にはかりなくとも分入心を先とすへき也。句數なとはこそ。み修行つもりぬれは。おのれとつゝまるへし。
一千句なとに會出時は。其比世に用とめる好士又は宗匠なとへ衆目に酒樽をも送り給ひ。千句間は每句御言葉をもかゝれは罷出へきなとゝしめし付侍れは。好士も別に心さしをはこひ。おろか成句。かゝる指合なとになれる文字なと、是は打はふき。好士宗匠の外はなし句を返す事なし。しかあれともさしあひの句を留め給ふと云人にてはなし。歌道千句は廣座のしはさなれは。當代何事も連歌にかきらす。へつらひいてくるならひ。今にはしめさる事なり。
一執筆にまかせす。下座なとより指合をくり返す事あり。滿座にも出物とみえ。早々法式にもれたる事也。あひかまへ

てし心得給へし。時の好士宗匠のと執筆の初心なる時は申聞るゝ事尤可先。其句を見指合なくは他人の句にかゝる事侍る事いかん。

一本歌をあしさまに心得。付合に用事多し。宗砌のよりあひにあらすと申入ありけるに。

　秋萩の花咲にけり高砂の尾上の鹿も今や鳴らんと。後作者歌を引侍り。此鹿は我庭或は何の在所にても。萩の花さきぬるをみて。高砂の尾上の鹿も早鳴らんと云歌をあしく心得侍り。是にて千歌万首の取所をみかきたまへ。

一稲葉の葦屋に琴を付る人毎〳〵也。然共琵琶なり。それを本と用給ふ。是も本歌の心得にちかひ覺にかはりたる故なり。

　稲葉の風の葦屋の村雨はふるき檐のひわの音そも

大和物語に注し侍る古事。定家傳紙なとにも。かの蟬丸は両様共に上手なれは。琴もさかなんなれ共。歌によみ連歌に用意せらるゝは琵琶といへり。

一此道の好士なれ共。にくけをたしなみ。連歌あひわつく（ろ歟）。初心の者哥よるをも心にかけす。利口けなる好士多し。あしにふりさまをみ。我上をかへりみ侍るへし。ある好士の句に。

　とはゝこたへん言のはのみち。か様の句もいかむそかし。如何に我心そ上手なれ共。此道には名をも雲ゐの月に心をかけ。わかいたら風身こそやさしくあれ。然れは人にとはゝや昔の葉の道なとゝしてこそよろしからんか。如此事もしるすにいとまあらす。

一同合に百句百句ありといへり。少し注之。

　あふ時もわかれ思へは涙にて
いつはりとおもひなからも又まちて
先の世のむくひの儘に生れきて
霞かくれにかへるかりかね
けふも又閉入あひのかね
秋は又こゝかへる雁かね
やよひの末そ夏近くなる
秋ちかきけふみな月に御祓して
年のくれ春の近きにおとろきて
かつほとゝきす又もなけかし
谷の戸いつるうくひすの聲

此類ひ百句ありとなん。惣して連歌の一ふし。前句によそは言葉さし出たる事か。又は一句の内おとりたる句に付よきとそ。前に少〳〵注申句なとは。一こともとりよるへきとはなし。當代の好士なとは能心もいたり侍るとおほゆなれとも。付よきよし承及ひ侍り。前句少々注之。

山へ入てはなにとたつねん
月をいれしと戸をそ明（開歟）ぬる
ねさめにおもふ春秋のせは
いかにつくるとつみはあらしな
かくれつみへつみへつかくれつ
おやにかはるや心なるらん

此等の句たかひには付安く侍るへき也。宗砌のかたるは。其比京都の連衆に四條の良阿梁心なとよりあふには。句も出來事侍るなとゝ毎々申せし事。前句によるへき事。おこかましく思ひしに。近代よりてさとり侍る。

一先年執筆之法式の事。初たる連衆の名乘を執筆とひ侍る事をかきをこし侍るとおほゆ。但老の失念にて侍るか。若いやとならは是を遣給へ。貴侍高位の人の御名の字なとは。兼て能々とひおほへ給ふへし。以下の事はさたにあらす。おとり（マヽ）道場眞阿執筆つかふまつる時。宗砌あつま人をしたひて百韻興行發句に。

春風にゆく人したふ柳かなと申句。執筆眞阿うけ取詠し書すまして。發句の作者問ひて筆さゝへて。御名の字を如何ととひ侍れは。あまりの事にこたへかねてありし時。專順立てひそかに宗砌とかゝせけるとなん。如此事は在かたしとおほゆ。其比連歌の席にて高きもみしかきも。宗砌としらぬ者やある。天下に出て執筆をする程の者のあやまちとやいはん。又は此道を心にかけ侍らぬとや言ん。

一發句當代もさのみ珍しく。長高しみこほる心に。古事縁語を深含みたる句は希成や否。大略面白なとゝある發句は。他人の心を犯すときこえ侍り。自身彼道の發句は愚耳おろそかにて聞しり侍らす。近代の發句立春の題に。

月の秋花の春たつあした哉

又中つ比。

雪落て春にかたふく枘哉

又當代の發句に。

花盛待に鳥啼み山かな

又當代の句に。

名もしらぬ小草花咲河過哉
水増り梅ちる庭の長雨かな
櫻かり花や心のとまり山
小倉山花のほかなる夕哉

專順申侍に同。其春ある好士。

松くらし花の外なるゆふへ哉とつかふまつり。同發句とて風聞あり。愚老にもさやうの事あり。

山や雪しらぬ鳥啼みやこかな。その比宿出てかなと留り侍る事珍しなとゝ初心人申給へり。おなしくその冬清水寺

おなき所にて會のありし時。兼ての案にちかひ。俄にあるへきより。樹の梢も分す大に雪ふり侍しに。軒近く小鳥なきよる聲きこえけるを。よき發句よと斗初一念に存。

　軒近く鳥鳴雪の朝かなと申侍して。後の日に連歌同朋かたるは。天下の耳にはたゝ山や雪の發句と同心にて侍よしさた有けるとなん。さらにあらかひ申事なし。されとも愚句を二度口外する事は。知恵の淺きよりあやまる事なれは。そのみのつたなきのみ也。若他人好士なとの言はを犯し侍らは。いかはかりかはつかしく侍らん。めつらしからん申事なれとも。好士の五十句百句。心をつくしちをはき眼をさらし。深底の修行の口ひらきいたしたることは心なとを。假初にも舌の上にのせんとこそおそろしけれ。但前句よき寄所なり侍らは。昨日の句をもいたし侍れと。しるしたる抄ありけれは。よく注をみ給ふへしと也。縦失念は念して名句なとつかふまつらるゝも。當好士有共。失心のしわさと思ひ給ひ。わらひてうつさせ給ふへからす。前に申ごとく。馬にのれる人おつると云本文まことなるかな。

一昔の發句に。

　水鳥の藤波くゝる郭公

　水鳥か瀧のうへゆく子規

　これやこの花の匂ひの朝ほらけ

かやうの五文字にて申侍るを切字と心得候事あやまち也。それとみてそれかあらぬかなとゝ云事は。少にたる事をこそいひつけ侍へきに。藤波くゝると云事をいはんとて。水鳥のほとゝきすに成へき事うたてしき事也。惣して發句は五文字にてはいひ立かたし。然共切字もいかん。但上手のこしつにはしかし。三目切。四目切。大まはし。大方切れると云て。十八の切字侍るとなん。しかあれとも愚老は大略かなと留り侍り。

一連歌に法報應の三身ありと云り。天台四教の圓教の位といへり。さもありなん。とはかりの法味は申にいとまあらす。

一法身の句の心。

　あなたうと春日の琢く玉つ島

一報身の句の心。

　世にあらはあまた持へき子を捨て

一應身の句の心。

　人の身に一日ならては日もなくて

此三身の心をよく分給ふへし。圓教の位とは大日かくわらの意也。居給ひなから三千界をみたまひ。言葉をも出さす人の敎にもからす。我と悟修行すへき事を連歌にたとへたり。

一俊成卿の密言抄に書給ふ也。花はちりての跡を尋。この本のさひしきをみて。いかに此花盛面白侍らんと盛をねかひ。連歌歌にも其心を案し。跡へ心を返てこそ盛もあり又情も殘るへきにて候。只花盛に打向みん事。さのみかん味も難有。月も雨の夜曇かちなる空を待につけて。又入ぬる山のみを心にかけ。明从の山をみてこそ面白けれ。うちみれくもりなき月に向ひ侍らは。何事かのそみの心あらん。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつは本のみにして

此心にて心得給ふへし。

一此道はいかなる鬼神も和き。たけき武士もなひきしたかひ。女男の中たちもこれにすきたる事なしとて。神代初り人の世と成にけるより。いかなる祈禱にも增りたりとて。夷の國までももちはやし侍るにより。連歌はしけく侍れ共。名にしをふ聞えたる好士は希也。但田舍遠國なとにて一人二人の連衆によひ出されむも。浦山敷しゆくしうとこそ覺え侍れ。先達好士此道の德により佛果にいたりて。又此世まで此道を如形たつさはり侍るに。魂とからうはかし生れかはして。好士に成給ふへしと云事。關東にてまさに聞え侍り。しかあれはたのもしく思ひ給ふへし。

一前に軒はの荻と空蟬の碁の勝負の事御物語申侍し次に。濱の眞砂碁にならすやいなやと御尋ありつるやらん。一句のしたて碁にて成へきよし申侍りしか。

むかひへ出すや浦の女舟

打みたすはまの眞砂はまけわさにと付侍り。かやうに秀句にかちまけと付侍るならて。かならす碁に用侍るへし。如此碁と過ぬるをたゝ眞砂と心得。百韵の四折めに、一色三上江州碁の句を出侍るを。執筆碁の句過たるよし申。何をかへしけれは。なんてう眞砂か碁に成へきかとて論侍りしに。宗砌本歌を引て申侍るよしかたりしに。

白波のうちやかへすとせし程に濱の眞砂の數そまされると後白川の御時。帶をかけ物にして碁を打。負給ひてかやうによませたまひけりと云けれは。問答留りけるとなん。

一前に申かとく。歌を連歌に取れんしやうをつゝけ侍る事少々注也。

花はたゝうき世につるゝ色みえて

うつろふ春のうつる程なさ

色みへてうつらふものはよの中の人の心の花にそありけると云歌をつゝけ侍る。是にて何の歌も心得給ふへし。

一詩なとを取連歌に用事。

夜の夢明方急く月落て

月落烏鳴とつゝけ侍るを隈とせり。是にて何も辨給ふへし。

一つよからぬ女の歌と云へる。あまりぬれ〳〵て。しほしみ

ちからなき事と計は心得給ふへからす。小野の小町。泉式部。小式部なとは自身修行に眼をさらし。色香にめてたる女也。當代の若衆なとも女の歌ゝにたるよし。及なき人申あへり。つよからぬ女の歌と計心得て申事と覺ゆ。世にうつくしき人なれ共。あまりに心の誠をしてすましたち。切に心を入。小袖かたきぬうちやふり。かみをもすくにいひあけす。大むねうちて。あかき手足に土うちつけ。爪をもきらす。楊枝をもつかはす。かねもつけすして。牒子ともいさなひて つふてうち。そら刀ぬきくるひ。しつまる時は。物知かほのりかうしたるは前代未聞の有様也。かくて過行はいつをさきて人はうき世の思出にせん。人は廿になりぬれは。たゝいたつらに老の坂くたるに程なき物は。二度人と成事はためしなき事なれは。よるを日につき。身の能藝をいとなみたまへ。御事も二八の春秋をたゝいたつらに送り行給はゝ。過しむかしを忍還させ給はん事。みるか如くに覺ゆ也。かやうにすいさん申ても。身の徳一つもあるへからすとは思へとも。此程の昔か情にほたされて。かく出物を申也。殊に連歌は名聞りやうにあらす。大唐におきては經陀羅尼。吾朝にては和歌とてもちはやす事なれは。假にもあたにし給ふへからす。此理を信に思はん人は。無間の闇庭に落沈。二度あかるためしなし。生てはひやくらいこくらいに成て面をさらし。門に立乞哀聞へき因縁有。その身は申〳〵達者も心えもとこそ尤なれ。名を付はをくろめたる武士。或家計を墨こそめ。なま心ある者とも連歌はいたつら者のわさなり。ひきなく念佛を申へしと云者のみ侍る。前に申事。又は九州安樂寺にて。神宮寺の神宮の眞松童女につかせ給て。其比九州に武士六人出家。十人連歌偏執したる科により。此僧武士につかせ給ひ。或は変りなきかさをかゝせ。即時に取ころさせたまひ。後年に生得共は無間落所ありと　類共に付せ給ひけんし給ふと也。あなかしこ。吉日を撰。ちかつかせたまへ。にたるを友とせりと云ゝは。あしからん友にかりそめにも似させ給ひては。いかにく物とも叶まし。しかあれはちしやの歌にはなれとも。くしやにましはる事なかれと云へり。尤と覺ゆ。

前に申ことく。差たる金言は申侍らねとも。叉々聞食入らるへき由。重而徳阿御使に候而粗申侍り。前に申つる詞も。御意に隨ひ給ひ候はゝ。此申事は後日に申侍れは馬上下卷と名付給ふへきか。一人の譽にあらす。此詞は近代の好士書もらし侍るを。別當下上判をうけ申。歌抄を一帖作り侍申を書抜侍申上は。愚老言にあらす。前に申かとく歌抄に限りひすへきと也。如何となれは。艷と

珍しくあるとは手爾遠葉なれとも。二度と犯ぬれは。例式の定言とのみ聞え侍る程に。別て秘すへきと。俊成卿も書をき給ふ也。この言のははさせる事なき馬の上のすさみなれは。春草の原に引すてたまへ〳〵。

寛政八年む月はしめ。

右二冊心敬僧都記所なり。やつかれ。成島峰雄所持之所。業用の暇かりうつし侍ぬ。文字のたかひ多らん事外見おそるゝのみ。

なかれ。昔中つ比は百韻つゝ十日に満願有といへり。此比田舎なとに三日五日に終して。をそくはてぬれは。連衆のいたりなき様にさたある。ゆへなき事と思給ふへし。初心の時は千句初百韻より終まて句數をおとらす。次第にいやましにし侍るへし。初百韻二三百韻には。たゝさんけに付て。次第に句數を減しぬれは。智惠の程みえて世にはつかしき道也。こうと座と口と心と叶はすは叶ましき事也といへり。好士十人とも廿人共。同とくの上手なんとあらん會坐ならは。句數を十句八句に定めさるへし。然者初の折には一順ともに四句。四折目にもかうの一順共に四句。中二折には六句宛なれは。以上廿句也。先何時も百韻の連歌にも廿句留り給ふへき也。然座へ同とくなる好士ならひゐて。指合をくり本歌本説の不審を明め。五音相通の本末をきんし給るを聞侍れは。大野に矢をはなち。虚空に尺をはかるとく成へし。然時の心は衆両上座貴上にもましはらす。我より下手と計よりあひ侍りて。言はのみかきふし立たるゆへ也。かく侍る時心を取しつめ。如何なる上手成とも。又はなん句成共。なとかは取よる心なからんと思ふ心を。

續群書類從卷第四百九十六

連歌部廿四

うす花さくら

詞之分別事

紅の梅。青梅。冬梅なとゝつゝけたる。よろしからす候。花の雲。花の雪不宜候。花の白雲。花のしら雪なるへし。花の風。花の雨よろしからす候。春夕。夏田。の文字いれ候はねは悪候。松の藤。白藤。白つゝし。白萩。八重菊。冬菊。をそ紅葉。以上不宜。おほろ夜。朧月わろし。朧月夜なるへし。夕月同前。閑の月。床の月。窓の月不宜候。床の月影。窓の月かけなとは宜候。春の月。夏の月。冬の月。夜文字入候はねは不宜候。秋の月は云ならはして能候。神なし月。神無月にをとり候。夏木立。青こたち。青楓。蓮花。すゝみとるむきの秋。已上不庶幾候。無き秋殊無下候。五月雨雲。夕立雲。夕雲。夕山あしく。夕山もとなとは宜候。うき霧。浮鳥わろし。うきねの鳥は宜候。鹿のとを聲。鹿の妻こひ不庶幾候。小田守。きし田。水田。遠田。千町田。いつれもあしく候。秋雨。小雨。片雨。かた空。水音。瀧音。野里。谷里。深山里。浦里。うら路。浦松。きし陰。とをみち。柴のや。草の屋。以上悪し。山寺このましからす候。遠山寺はよし。夜嵐。小夜嵐にはをとり候。夏府。冬府。冬すみ。竹の雫。篠の雫。杉の雫不庶幾。松の雫は宜候。雪夜このましからす。うらゝ不宜候。名所をなところなと云事あしく候。門出わろし。かとては能候。出舩かけ。しほくもり。みちしほわろし。潮しほよし。しほくみ。鹽燒悪候。しほやき衣なとはよし。薪人。柴とり。靈人。人聲。友とち。道つれ。来れ。又れ。忍ち。忍ひ妻。忍文。返し文。たより文。遠妻。戀の身。こひ衣。戀心。うす情わろし。惣して情といふ詞このましからす候。

あた契。あた夢。とはれねは。戀の道不宜。こひ路はよし。妹かりゆく。いもかり通ふなとはよし。此比妹かりの道と云人。ありの文字不叶。戀の詞は殊にやさしくあらまほしく候。かこたれて。したはれて。おもやせて。ねかはれて。さみたれて。船こきて。如此詞上句のとまりに不宜候。又下句の終ニ五月雨。夕立。白妙。永日。長夜。道のへ。在明。入逢なとやうにとまりたる。ふつゝかにて不宜候。捨人不宜。世捨人は宜候。昔人。古人。の文字なきはよろしからす候。すみ衣。の文字あらまほしく候。墨の衣はよし。山すみわろし。奥山すみはよし。彼佛このましからす。かのきし。彼國は無子細候。賤の女よろしからす。たゝ賤はよし。鷹場。市場わろし。とけ氷。とけ霜。夜霧。田守。里田。もみつる捨子。此類多く候へ共。殊無下に候間。注に及はす候。又異名にうけられぬ事多候。氷をうすらひ。ひすゝみ。菊を翁草。松を千代木。千代之草なとやうの事に候。鶴をたつ。猿をましら。鹿をすかるなとやうはよろしく候。舟にねて。霧ましつけきなと庶幾せぬ由。あこ先達被申候。右先哲庭訓のふんあらあら注申候。如此用捨は人の所好ニによるへし。耳にたつことは大略よろしからす候。此條々古歌より出ぬは候はし。然共古今にあれはとて。ちるそめてたき。へら也なとはよむましきよし候哉。又逝道の作例にはありとも。用にたゝぬとも見え候。誰か又詞にいはゝ。よきもなくあしきもなし。たゝつゝけからにて侍へしともあり。又ある抄に定家卿薄花さくらは歌のあたりにもよすへからす。心ちあしきなとゝありしに。家隆卿歌に。

紅のうす花さくらほの〳〵と朝日いさよふ小はつせの山と讀たりしを。定家卿にみせ申しかは。長點のおひたゝしきをあそはされたりし時ニ。いかに御にくみのうす花櫻にと申たりしかは。わらひて。にくき物とおもひつれとも。是をわろしと申さんは定家かふかくなり。めてたしと申されき。いつれもよみやう。つゝけやうによるへきにやとあり。

明應元年壬子仲秋日。（[illegible]）依或嚴命白地注之。恥外見云々。

法橋兼載在判

〔右うす花さくら舊本闕今以帝國圖書館本書寫校合〕

白髪集

宗祇　述作

夫發句をつかうまつるに。春夏秋冬共に其時節に相當の發句をむねとすへし。すこしも其時に違たるは不可然。春の

季の物にても。正月の物二月のもの三月の物是有へし。然を四季ともにしるし侍る也。

正月の物　春三月分別すへきもの。

梅。残雪。氷消る。さえかへる。若菜。野への下萠。荻の焼原。星をとなふる。

正月一日歌に。

皇の星をとなふる雲の上に光り長閑き春は來にけり

此歌は年中行事の歌合に。正月朔日御門の當年星をおかみ給へる事を。星をとなふると申也。

霜。柳。鶯。雲雀。長閑。（是等は春三月共に可有也。）

二月の物

雉子。櫻。若草。田を返す。（三月も有へし。）鴈歸る。花を待。すくろの薄。（燒野の薄の事也。）東風（三月にいたる也。）

三月の物

桃。（三日に限る。）花。巳日の祓。永日。藤。款冬。躑躅。

四月の物　夏三月分別可有物。

衣更。（一日に限る）卯花。時鳥。杜若。木々の若葉。藤茂る。加茂のみあれ。（神事なり。）青楓。玉眞葛。螢。明安夜。短夜。（三月にわたる。）

五月の物

菖蒲。（五日に限る。）五月雨。梅の雨。（今時分不好詞也。）茂。樗。百合草。若竹。子規。早苗。

六月の物

凉しき。雲の嶺。（六月西にたつ雲也。）白雨。撫子。常夏。暑日。秋近き。來ぬ秋。蟬。（五六にわたる。）

七月の物

一葉散。木葉衣。柳散。桐の葉落ル。露。女郎花。秋の初風。霧。虫。鹿。（三月に渡る。）

八月の物

衣打。（九月にもわたる。）鴈。櫻の枪。（諸木の中にはやき也。）冷しき。野分。（是は秋一度吹大風也。）身にしむ。（九月にもわたる。）夜寒。蘭。野山色付。忍草。尾花。

九月の物

時雨。（秋の詞をそへて。）紅葉。薄散。菊。（九日にかきる。）霜。（秋の詞そへて。）冬近き。木葉且散。虫の音よはる。晚稻守。（田を守也。おくて也。）

十月の物　冬三月分別すへき物。

紅葉散。凩。時雨。草枯。冬かまへする。

十一月もの

雪。霰。氷。（三月にわたる。）朽葉。神樂。

十二月の物

冬の海、年の暮、春近き。年木こる。なかるゝ年。（歳のゆく也。）春を隣。
かやうの詞たれもしれる事なれとも。其月／＼にあたる物。又其季三月に渡りて不苦物なとの事しるし侍り。發句をつかふまつらんに。其時節の用心の爲に。一端最初心の時發句なとを作るには。如何にも正直に有へき也。山河江湖の風景を有のまゝに見るやうに仕出し候はんより外の秘事大事不可有。修行最初心の時は。歌なとを覺えて、其歌を取やう分別なくして。當座の用にたゝぬ物にて候。只最初心の時は。春來ては霞わる山の朝間の躰、野邊の霞のしらぬ霞に晴れ、梅の匂ひ打しめりたるに。東風吹空のかき曇り。雨か雪かとそゝろ寒き春の氣色なと打詠て。かやうの折節に發句拵思案候はゝ。心境界にうはゝれて、求めぬ境より發句なとをまふくる物にて候也。又二月の比ほひは。靑み渡る山の梢に。木のめ春雨しめ／＼と降に。今や櫻なとも花をほのめかすらんと思ひしより。消る雪まの草のみとりもうすくこく見えわたるに。をちなる澤邊より水の煙り長閑やかに打なひくをたよりとして。舟さす棹の霞行汀の蘆の草かくれより。雲雀なとの床はなれして夕日にこゑするも。いとおかしき風情なと見給ひて。心にしめ句をなし給ひ候はゝ。をのつからさかひに入給ふへくや。三月に至りては。我宿の一木の花を見初るより。四方の山邊に白雲のたなひくも。皆花かと心をかけ。後徳寺の詠しける歌に。

葛城や高まのさくら咲にけり立田の奥にかゝる白雲

かやうの面影なと思合せ。又落花の陰を見ては。峯に殘る白雲も花の名殘とおもひ。是は良平の歌に。

散花のわすれかたみの峯の雲そをたに殘せ春の山かせ

なとよみ。或は。

散にけり哀うらみの誰なれは花の跡とふ春の山風

かやうなる歌の心をも思ひしめ給はゝ。をのつから心の師と成て。道の境ひに通侍へし。四月に至りては更衣の歌に。

花の色に染し袂のおしけれは衣かへうきけふにもある哉

かやうの詠歌の傑。又山の梢の茂渡りたる陰よりも。春にをくるゝ櫻花ひとり咲るをみては。

哀てふ事をあまたにやらしとや春に遲れてひとり咲らん

なとの本歌を思ひ合せ。卯花のさかりを見ては雪の垣ねと疑ひ。或は月かと詠て。

卯花のむら／＼咲る垣ねをは雲まの月の影かとそみる

かやうの本歌をも思合すへし。又波かと詠て。

卯花の咲ぬる時は白妙の波もてゆへる垣根とそ見る

なと〻もよめり。又卯花に時鳥を待或は聞相かなへり。

卯花の垣ねならねと郭公月の桂の影に鳴なり

杜若牡丹なとも四月の物也。是はさのみいひつけたるたよりもすくなき物也。杜若なとの歌もさのみみえす。伊勢物語の歌に折句の題にをきてよめり。

唐衣きつゝなれにし妻しあれは遥々きぬる旅をしそ思ふ

又澤入江なとに生物也。但初心なとの時は。其季にあたりたる物の中にも仕出し候はゝ。をのつから景氣風情の有やうなる物を。發句なとには案し給ふへくや。五月に至りては。五月雨に軒のあやめのかほるにも。

打しめりあやめそかほる子規啼や五月の雨の夕暮

なとゝ云へるを思食。或は花橘のかほる風を聞ては。

夕暮はいつれの雲の名殘にて花橘に風の吹らん

なとの歌を心にかけ。梅の雨を聞ては。花の時を思ひ出。早苗のそよくを見ては。來ぬ秋風を傍にきゝ。若竹のなひくを詠ては。露の涼しき朝を心にかくへし。庭の梢の茂りたるを見ては。花なりつる枝もかく成物よと觀し。又夜はの月の木葉かくれに成行をみては。

花散し庭の木末も茂りあひて天照月の影そまれなる

曾禰好忠詠しけるなと思ひ合せ給ふへし。或は草の茂りをみては。

夏草は茂りにけりな玉ほこの道行人もむすふ計に

藤原元眞の讀るなと思ひしめ給ふへくや。道行人の草を結ふと云へるは。旅立時かへらんしるしに結ふと也。又杉の木の下かけを見ては。

あふち咲外面の木陰露おちて五月雨晴る風わたる也

と良忠のよめるを思ひらかへ給ふへし。螢のとふをみては。

夕されは螢よりけにもゆれとも光みえはや人のつれなき

漁火のむかしのひかりほの見えて芦屋の里に飛螢哉

思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゝや物を問人もなし

かやうの歌なと思より給ふへし。六月に至ては。暑日に涼しき影をしたひて。夕立の雲のよそほひを見ては。俊惠法師に。

とをち（十市）には夕立すらし久かたの天の香久山雲かくれ行

又川邊なとの涼しきには。

涼しさは秋やかへりて初瀬川ふる川のへの杉の下陰

樹上の蟬の聲を聞ては。二條院讃岐。

啼蟬のこゑも涼しき夕暮に秋をかけたる森の下露

また攝政太政大臣の詠し給ひける歌に。

秋近き氣色の森に鳴蟬のなみたの露や下葉そむらん

如此の面影思ひしめ給ふへくや。或は道のへの清水を見ては。西行上人。

道のへの清水なかるゝ柳陰しはしとて社立とまりつれ

又夕立の晴のほりたる空のけしきに月の出たるは。又もいはぬ氣色也。頼政の歌に。

　庭の面はまたかはかぬに白雨の空さりけなく澄る月哉

とよみ給へるも當座の景氣なるへし。雲の嶺なと今時分庶幾せさる詞也。床夏撫子のみ風景深き物に非す。たゝ其いつくしき姿迄也。巖撫子。大和なてしこ。からなてしこ。かやうの詞より外にさのみ餘情もなき物也。床夏の花なとよめる歌有へけれは〔と歟〕。さのみ聞なれす。六月にも歌なとおほきは。納涼白雨なとの數をつくしてよめる歌共侍り。泉又一興の物也。是は炎天の時結ふ水迄也。飛泉といへる。瀧の事なるへし。本歌を見るにも。

　下くゝる水に秋こそ通ふらめ結ふ泉の手さへ涼しき

下くゝるとは。瀧の落たる下に又水は有物なれはかやうに讀り。七月に至ては。一葉散より荻吹風のさひしきに心をかけ。雅經歌に。

　きのふまて余所に忍ひし下荻のすゑ葉の露に秋風そ吹

崇德院の御歌に。

　いつしかと荻のはむけの片よりに空や秋とそ風も聞ゆる

定家卿

　秋風にそゝや荻の葉こたふとも忘れぬ心我身やすめて

葛の葉に風のわたるを聞ては家持。

　神なひの三室の山の葛かつらうら吹かへす秋は來にけり

秋萩のたはやかなるをみては。永縁法師。

　〔歌闕〕

人丸

　秋萩をおらては過しつき草の花すり衣露にぬるとも

家持

　小男鹿の朝たつ小野の秋萩に玉とみるまて置る白露

かやうの名歌共思ひわたり給ふへくや。惣而秋の山邊に霧たえ〳〵立のほるに。嶺の松の村々顯れて。遠なる木間を見渡は。なかるゝ水しろく落て。苔地幽につゝく岩尾の末に。梯あやうきなと見え。深き谷にのそみては。名も知ぬ常磐木の生かさなりたる緑のかけより一筋立のほるは。人家有らしなとゝ思ひ。麓の村を詠れは。賤か苅田の通路に夕の嵐冷敷て。雲まもりくる月影は堤の水にたゝよひて。すゑ野の鐘の一聲の夜かくる折節なと。句をなす心のたよりとなるへく候程に。古人の胸中を尋るまてもなく。初學の時はかやうの景氣思ひしめ給ふへくや。七月の事はこと限りなけれは申に及す。八月に至りては。秋も半の事なれは。草にも木にも色〳〵の心のたより詞の種なる物多し。いつれをさしてとも筆に及す。そは秋の哀ふかきは此時成を

や。渐草〳〵の花おとろへ。虫の音もよはり。木葉も移ふ色外に顯はれ。おのつから作意を催す折なるや。殊十五夜は月のたくひなき時なれは。古人も色〳〵様〳〵に心を盡し讀侍り。海邊の月といふ題にて宮内卿。

心ある小島の海士のたもと哉月やとれとはぬれぬ物から

いつこにか今宵の月の曇るへき小倉の山も名をやかふ覽

此歌大江の千里かよめる也。古人は八月は多分月の歌のみ讀給へり。連歌にも發句なとは此月は月耳心にかくへきと見え侍り。夜半の嵐の雲吹はらふをみては。經信卿歌に。

月影の澄わたるかな天のはら雲吹はらふ夜半の嵐に

立田山夜半に嵐の松ふけは雲にはうとき峯の月影　通光

鶉の來る伏見の里に夢覺てねぬ夜の庵に月をみる哉　慈圓

村雲や鶉の羽風に晴ぬらん聲する空にすめる月かけ　攝政太政大臣

里はあれぬ月やあらぬと恨ても誰淺茅生に衣打らん　宮内卿

まとろまてなかめよとてのすさひ哉麻のさ衣月に打聲

秋とたに忘れんとおもふ月影にさもあやにくに打衣哉　俊成卿

山人の折袖にほふ菊の露打はらふにも千世を經ぬへし

我宿の菊の白露けふことに幾代積りて淵となるらん

谷川の菊の下露いかなれはなかれて人の老をせくらん

菊水の事。周穆王の臣下に慈童と云童あり。穆王寵愛限りなし。然に有時天子の御枕をこゆる科により。てつけん山と云山になかさる。其時穆王尺尊御偈の法花普門品秘法を彼童子に傳給。彼はるの山にて落る溪にて菊の葉に此二句の偈を書付て。其菊より落る露たまりて水となり。是を童のみて仙術をえたり。是を菊水の宴といへり。又十三夜に移りては。十五夜の名殘忘ぬ心さしを案給ふへくや。十三夜の歌。通信朝臣。

秋はつる小夜更かたの月みれは袖も殘らす露そ置ける

秋の夜は衣さ莚かさねても月のひかりにしくものそなき

此等の歌はいつれも十三夜の心を讀り。殘菊には初心の時用る歌幾はく有へし。花園左大臣歌に。

九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬をおもひわするな　定頼

今よりは又咲花もなきものをいたくなをきそ菊の上の露　俊成卿

これ（ら歟）をみなゆへある歌也。木葉を見ては。

問ふ人も嵐吹そふ秋は來て木葉に埋む宿の道芝　同

色かはる露をは袖にをきまよひうらかれて行野への秋哉

蟋蟀のころを聞て西行上人。

蓬夜さむに秋のなるまゝによはるか聲の遠さかり行

好忠

人は來す風に木葉は散はてゝ夜な〳〵虫の聲よはる也

時雨の比ほひ松をなかめては。

俊成卿

心とや紅葉はすらん立田山松は時雨にぬれぬ物かは

かやうの歌はいか計かんせい有へくや。此歌なと只有の儘いひならへたる物也。稽古の手本なるへし。十月に至ては。風いとゝしく打しきりて。時雨の雲の絶まより。山のかたへの紅葉のをくれ先たち散くるをみて。

藤原高光

うすくこく散艶葉を先たてゝ色〳〵に吹山颪かな

神無月風に紅葉の散ときはそこはかとなく物そ悲しき

日くるれはあふ人もなし正木ちる峯の嵐の音はかりして

又山家の落葉をみて藤原秀能。

山里の風冷しき夕くれに木葉みたれて物そ悲しき

又木葉亂るゝ音の時雨にまかふを聞て藤原資隆。

時雨かときけは木の葉の降物をそれにもぬるゝ我袂哉

是は無常を觀したる歌也。

慈圓

木の葉散宿にかたしく袖の色を有ともしらで行嵐かな

前の歌に心さしひとしき歌也。或は月を待山の端にしくるゝ雲を見ては。西行。

月を待高根の雲のはれにけり心あるへき初時雨哉

具平親王

艶はをなにおしみせん木間より漏くる月を今夜こそみれ

家隆卿

詠つゝ幾度袖に曇るらん時雨にふくる有明の月

丹後

吹はらふ嵐の後の高根より木の葉くもらて月や出らん

具親

晴くもるかけを都に先たてゝ時雨とつぐる山のはの月

かやうの名歌の粉骨思ひしめ給ふへくや。又は枯野の村々見ゆるに。夕日の影の移ふをのみ命とたのめるも。夜寒の霜の月影に消はてぬるこそ哀なれ。かやうなるも偏に冬野の至極也。心をふかく付給はゝ。おのつから何に成侍るへし。十一月に至ては。神無月の比散盡しける木のもとに。朽葉殘りたる霜の上に月かけのさえわたるをみては。

清輔朝臣

冬枯の森の朽葉の霜の上に落たる月の光り（影のイ）さやけき

浅茅生の露の名残に置霜の更行色を見てやは　攝政太政大臣
篠の葉の深山もさやに打戦き氷れる霜を吹嵐哉　清輔
君こすは獨やねなん笹の葉の太山もそよとさやく霜夜に　源宗行朝臣

山家の冬の歌に。

山里は冬そ寂しさまさりける人めも草もかれぬと思へは　式子内親王
寂しさに絶たる人の又もあれな庵りならへん冬の山里　西行
見るまゝに冬は來にけり鴨のゐる入江の汀薄氷りつゝ　家隆卿
志賀の浦や遠さかり行浪まより氷りて出る有明の月　俊成卿
獨りみる池の氷りにすむ月のやかて袖にもうつりぬる哉　源重之
白浪に羽打かはし濱鵆かなしき物は夜半の一こゑ
烏羽玉の夜の更行は楸生る清きかはらに鵆啼也　能因法師
夕されは鹽風こえてみちのくの野田の玉川千とり鳴なり

夕なきにとはたる鵆浪まより見ゆる小島の雲に聞ゆる　後徳大寺左大臣
閨の上にかたえさしおほひ外面なる葉廣柏に霰降也　能因法師
狭莚に夜半の衣手さえ〳〵て初雪しろし岡のへの松　式子内親王
降初る今朝たに人のまたれつる太山の里の雪の夕暮　寂蓮法師
待人の麓の道や絶ぬらん軒端の杉に雪おもる也　定家卿

誠山家の雪の深きも哀成物也。大概此歌ともにもるゝ氣色あるへからす。十二月に至ては。四方の山〳〵に積れる雪より落る風のいたくはけしきより。外は眺望もなく。たゝ是のみに心をかけ。此時の心にかなへり。太上天皇のあそはせし歌に。

此ころは花も紅葉も枝になししはしなきえそ松のしら雪　通具
草も木もふりまかへたる雪もよに春待梅の花の香そする　讀人不知
雪降て年のくれぬる時にこそつゐに紅葉ぬ松も見えけれ

又古人は歳暮に述懐の歌おほくよみ侍り。

自つからいはぬをしてふ人や有と休らふ程に年の暮ぬる　西行上人

かへりては身にそふものと知なから暮行年を何したふ覽　上西門院兵衛

隔行よゝのおもかけかきくらし雪とふりぬる年の暮哉　俊成卿

歎つゝ今年も暮ぬ露の命いける計を思出にして　俊惠法師

年の明て憂世の夢の覺へくはくる共けふは厭はさらまし　慈圓

いそかれぬ年のくれこそ哀なれ昔は余所に聞し春かは　入道左大臣

かそふれは年の殘りもなかりけり老ぬる計悲しきはなし　和泉式部

是等の歌作者の粉骨也。たやすく見給はゝ。其神妙の處聞ゆへからす。古人の心をみるに。春は花秋は月。それのみならす四季の景物を色々の事に見なし聞なし讀置り。誠に哀ふかき事也。年の暮は今年のかきり。こゝより來れるかたの無常を觀し知のみならす。此歳暮より老の積る道よきん方なけれは。さま〲の心懷を詠し盡し給へり。先達の此道の深旨を書盡し給へは。中々中に及はす。此十二月の心つかひの事。千の一も相かなふへきならねと。初學のためなれは。嬰兒の竹馬草鶏におなしたるへし。此あさはかなる事よりふかきに至給へとの情氣より。みつからのひか事をかへりみさるへし。初學の發句を案し候はんに。四季ともに指出たる物を案し給ふへからす。其故は春は花秋は月なと樣の物は。をのつから景氣を具して出る物也。四季共にめにたゝぬ物を取出し侍れは。發句のかうもすくやかに聞ゆる也。上手のうへは物ならぬ物をよく取成。みれんの時左樣に風躰を學ひ候へは。句のすかたをくるゝ物にて候。又初學の時なと大樣に心かけ。正直ならん歌を旨と案し給ふへし。たくみなるかた。細工かましき言葉を心かけ給ふへからす。それも先達にもなり境に入時は。いかやうの歌をも庭に入給ふへし。

日の御影花に匂へるあした哉　心敬

花に見ぬ夕暮ふかき青葉かな　同

風ゆるく花かうはしき朝かな　備廣

小松生撫子咲るいわほかな　智蘊

名もしらぬ小草花咲川邊かな　同

此等の發句さしむきたる儀の正直なる物共也。少もたくみ成かたなく。扨又輙くは出來かたき物也。初心なとの時，かやうの發句の躰を學ひ給ふへくや。

一初心の時。連歌にあひ侍らん座中にて。色々の心遣侍るへし。先發句出侍らんに。我つかうまつるへき所ならすとも。脇の句第三望し給ふへし。さて四句め五句め心懸ぬに。人さしたる時。前より連歌心なき時は。始而知ぬ人にあふ心して。一順なとは聊爾に出來ぬ物也。脇の句より案し給へとは此時の用心也。一順なとのふかく沈思雖に案せぬ物也。凡前へのかぬ句にて候はゝ。様々とあそはし給ふへし。其故は一順なとは席にて候物に候程に。事をつくしみかきたてぬ物也。されは人に待れぬを。しつけと仕給ふへくや。再返の句一順と同前たるへき物也。一順にこと〱しき詞抔取出さぬ物にて候。いかにも無事なるを本躰とし給ふへし。又懐帋移りにはいつれの様にも四句五句めの内にはやく分句を守給ふへし。其後句を案候へは。心落付静まりて。いかやうの事も案しらるゝ物に候。先一句もとまらぬ懐帋には。心をくれて面をすりやせんなとゝ思ひ候程に。必しをくれて。いかやうの比興なる句もせられぬものにて候。爰許の用心肝要と覺候。

一花の過さらん懐紙のうらなとに春の句能候。金言の句抔はしらす。凡の句に春を仕出し候事。上手の嫌ふ物にて候。殊に花の句に立去かたき春の木の本なと云る句用心可有事也。かやうの句側に花の事を云る成へし。花なとは思ひかけぬ所にて仕出し侍る事を。上手は嫌ふにちかふ也。是花のなとゝ招かけたる風情を案侍る也。

一春にても夏にても。月の句出來候はんに。其句に秋なと付る事無益也。秋の句を月の句なく求めつらぬる事是嫌候。但又秋をつかうまつらて叶間敷所。又は名句抔にては力なき事也。夏の月抔に夕の露の涼しき出なとゝいへる句に。さゝと秋を付候はん事心なくや。露とも云寄る夏の句に出候間。季の字大切成をや。

一風も音せぬ春のさひしさなといへる句に。雨過る夕山かくれ長閑にて。かやうの句はよろしきやうに候へとも。前句を二度となへたる物にて候。多分尺する所の分別なき人の連歌はかやうに候。風も音せぬこそは長閑に候へ。雨過き片山かくれ霜日に。なとにて尺したる心のかるへくや。

一峯の楢の秋しらぬ色なと云句に。松の葉になるゝ時雨の峯やらて。松の葉の露いたつらに置馴てなとゝいへるは。又前とおなし物成へし。付所よきやうに聞えて前を尺したる物也。前句の峯の楢のあきしらぬ色こそ松や楢にて候へ。

一初心の時先達の名句とも多く書集て。事として日夜見て。其句の心を便りとして連歌をし給へる人。世におほく見え侍り。當座のたよりをうる事は尤に候ても。ともすれは自然其名句の内を丸〱と忘てつかうまつる物にて候。一見

して心をとめさらん事可然候。たゝ上手なとの座に常々ましはりて。當座にて其上手の心遣をたんれんして嗜ひ給ふへくや。心をえすとも歌を心かけて朝夕見覺え給ふへし。歌の心詞幾度もそれを取給りて。連歌にし給はゝ更に科なかるへし。上手の連歌をは。一度成ともぬすみ候ては。道の外越度の第一たるへくや。いかにも自讃歌百人一首なとに過へからす。殊にすくなき物覺ゑ安き物也。かやうの歌見覺え。詞をたゝしよみ給ふへし。此歌とも分別あきらかならん好士に意趣を開覺え給はゝ。其力を以古今新古今集の歌なとも只々くみしり給ふへくや。いかさま初學の時より古今新古今二部の間を隨身して。自見をもなし給ふへし。心をえん事（うたかへなしイ）はかたくとも。大方彼集の歌詞なと取て句をなし給候はゝ。力いらすして。みつからの句のさしのひ。長たかく有へく候。誠に古人の恩徳有かたき事也。

一初學の時ひえさひたる姿杯こひねかひ給はゝ。あかる事をそかるへし。此姿なとも境に入至極の人の心かくへき道也。先初心の時はいかにも饒敷。若殿上人なとのいつくしくさらそくして。花のもとなとに出たるやうと先賢申されし。さひしき句の程も。秋の野に鹿鳴。夕の風そよ〳〵と吹わたるに。萩の上の露たはやかにやとりたるなるへし。此中に哀もさひしさも侍るへき也。此比初學の人なとの我とかれたる句さむき句なとせんと出たちて。霜さむき野邊の一木に風吹て。夕烏嶺の枯木にこゑはしてなとのやうにし出して。我こそひえやせたる句したるかほに見え侍る。かやうに慈めきたる物にては聞にくき事也。其上代々の名聖達細斯の句に事を盡して句毎に仕置給へり。且はかへりて見苦敷事也。前句抔をのつからさひしきは。其句にひかれて。今付る句もさひしきやうに有へきなり。連歌は先世上の雑談の返答をなすに似たり。さても昨日の風はいかめしく吹つるかなと侍らは。さこそいつくの花も殘らす散つらめなとゝ返答をしたるやうに有へき也。又至極の後は西といへは東と答る樣に句をなす物也。左樣の道は尋常の好士及かたき事也。宗祇法師の句に。　都たに四方の風吹入ぬ。　遠山松の夕くれの陰。　あすやいつへき湊江の舟。　松原の陰に鳴たつ小夜千鳥。　梵灯庵云。かやうの句〔こそ歟〕より西といへは東と答る句なれ。此等は至極の後のしわさなるへし。至らぬ時學給はゝ。たくみなるかた細工かましき物となるへくや。

一名所の句。たゝ誰も聞なれしれる所なと覺えたりとも。今度の句に付樣しらさる名所なとすへからす。其故は名所の句は所に讀たる物抔ならては。たゝ心はかりにてはつかぬ物也。然聞名所の句をは上手も付にくき由申あへり。好士

の云。□吉野の歌二百五十首はかり覺侍れとも。吉野と云句の出來侍る時はいつれもえ付ぬへき物心になき由申給へり。是を以て知ぬ。五首三首共名所の歌覺え給はん人は。付物につまり給ふへくや。蔦紅葉と云句に立田と付ては。いかさま立田に有物三句にわたるへくや。夕付鳥關鹿なとは輪廻すへし。然者前後の辨もなくして侍らは。中比の作者たるへし。今も中比の作者はかやうの事心得す也。

一心至淺き時は。細工かましき發句たゝ句抔。正直ならさるを面白く覺る事侍り。尤用心肝要成をや。至極の無上の連歌といへるは□むきたるまゝに正直に見る物聞物共にありのまゝなる所を至極と。古人は云置給へり。（置集イ）

　蔦かゝる谷の埋木幾秋かをのかえならぬ紅葉しぬらん

　ほの／＼と有明の月の月かけに椛吹おろす山颪のかせ

此歌二首は今の世にいかほとも蔦かゝるの歌を至極と云る。是等は不堪の覺悟也。ほの／＼との歌は打聞えたる所は餘に／＼やすく打ひらめたるやうの物也。此歌の至極の所は筆にも難及し。

一我心一としていひはてぬ句をきこえにくゝ作りなして。人の耳に落さる句は悪かるへし。左様に仕出したる我句。世に聞知人なくしてなとゝ。我句のいひ終ぬ所をは歎すして。かやうに取置るはひか事なるへし。上代の名歌共によきさまの歌とて。定家卿のしるし給へる詠歌の大概。秀歌の大躰。今の世の秀歌抔とて。様々の抄物共專を盡して云給へるにも。先聞えぬは一首も侍らす。扨又西行上人を後鳥羽院は例の人丸の再誕と被仰。定家卿は五代集に及てそんしきたる歌を。後西行上人□直されけるなとゝ褒美し給へり。此上人の歌に平懐躰の歌多分有て、聞えさるは百首に一首も見えす。雑合歌も連歌も聞えたるうちにたけしなゆうありて。いはぬ備殘れるを上手の至極仕態と心得へし。初中後共に稽古の本意と學へき連歌は。

　我よりも年のまされる人をみて
あらはとおもふ親のいにしへ　敬済

　捨る身は中／＼科と成にけり
親のゆるさぬ墨染の袖　同

　夕くれことにかこちやらはや
隣よりたつる煙りを月に見て　同

　夜は更けりと人も音せぬ
月かすむ鹽干の浦の泊り舟　同

　いつかは山の陰を出まし
雨をまつ岩まの苔の埋れ水　同

　人は中／＼こゝろなかりき
岩にさへ苔のころもはきる物を　同

ふるさとゝなるまて人の猶住て
荻吹かせに衣うつなり　　頓阿
砧の音そたかく聞ゆる
秋寒き峰の庵りに人住て　　同
水さむけにも千鳥鳴なり
舟下す小夜更かたに月出て　　救済

宗祇在判

一花の匂ふはさひしく静なるかた也。花のかほるはきやしやにさゝめきたる風情也。柴の戸。谷の戸。草の庵。山里なとの花をは匂ふと可有候哉。都の花。雲上人なとの見る花は。かほるなとゝ有へくや。匂ふとかほるとの境。天地の隔なるをや。又散花はさゝめきてきやしやなる風情也。花落るは淋しく静なる姿也。

花落て小篠露けき山路哉　　心敬

此等なとは落てと云て。淋敷哀深き詞也。

月に散花はこの世の物ならて　　心敬

花の散と云句の姿。かやうに可有候。かやうの分別。歌人の事を盡し沙汰し置侍り。連歌しの拙きはかやうの分別もなく。散も落も同事に侍る也。

一心を總てと云分別の事。太山と云句に鳥と付侍らは。獨鳴心を思ひよるへし。森なとに付侍らは。ねくらを取てさはく心なるへし。市なとゝ侍らは。只集りたる風情なるへし。

一冬野枯野なと云句に草苅抔は不似合。爪木取なとの様の事可然候哉。又夏野草深き野なとゝ云に。柴取薪取なとは不可然候哉。

一前に十二月をしるし侍る所に。七夕の事注し殘し侍り。元來此星は天上に天河を隔てすめり。此星七月七日にあへると。光心得をなす儀也。然を上代の歌に我身即二の星成やうによみ侍り。

宗祇在判

發句切字十八之事

哉　遅く來て見殘す花の夕かな
けり　神無月紅葉も春に成にけり
もかな　草はあり櫻に秋の花もかな
し　松青し陰に色つく秋の草
そ　雨そ花ふれはひらくる初櫻
か　秋そめし露か木葉の朝氷り
よ　降くれよさてこそ秋のみ雪哉
せ　染盡せ紅葉むらこの片時雨
や　露や色花の木ぬれの朝朗
れ　氷れたゝさてこそうへにみつの雪

つ　花はみつ紅葉はをそき秋の草
ぬ畢　雪の花青葉になりぬ松の風
へ　雪待て花に散そへ下紅葉
す　一聲は思ひもあへすほとゝきす
いかに　月いかに木の下やみの松の雨
し　よもふらし薄雲までの松の雪
け　ふけ嵐花なき春の青木立
らん　風よりも日數にた(ちイ)らん花の春

や。うたかひの詞。哉。うたかひの詞。けり。みたす(るイ)詞。もかな。ねかひたる詞。か。ふかくうたかひたる詞。よ。せいはいの詞。そ□せ。くたしたる詞。□や。いやしきとたり□らん。侘たる詞。又しらぬ詞。し。日前の詞。うたかひの詞。れ。頼みてせいはいする詞。つ。したうたる詞。今一物をよひたる詞。ぬ。はやして見たる詞。もとの色なき詞。よ。うたかひたる詞。又はせめたる詞。し。推量の詞。ゆたんの詞。へ。さいそくの詞。又は物によそへてこと物を見たる詞。け。おとろかしきる詞。うつみせいはひの詞。す。かんする詞。[illegible]たる詞。めつらかにかんする詞。以上。

一大まはし。かしらまはし。三切なと有事は。人に文字の有所をたにみせす。先此十八の切字につゐて能取なさは。我人のせひたるへし。汝より外は此義しるへからすと思ひ。自心の箱をふたりの間に是を語也。其故いかんとなれは。汝七條眞阿もとに行給ひてありし時、自も汝に打そひて行つゝ聞しに。三百韻めの發句をし給ひしに。其句に月は今朝尾上の花のかたみ草と侍りつるにては。切字なしやと云へきにこそとかなしく。座に有て相思ひしによりて。未此詞十八の相傳にしらぬによりてなりと思ひて。我は是十八の口傳有によりて。各心をかよはす間、此十八の字自かせい也。是を汝にとらすると被仰下詞なれは。倩御妻を見奉るに。白髪老人の形と見え給ふにより。白髪集と号外題を書により。人に上書をさへ顯さす侍る。連歌の道共妻とも父母とも可謂也。

連歌やに七の次第

きるや　散花や嵐につれて迷ふらん
中のや　鳥歸る雲や霞に日の入て
すてや　かくしても身のあるへきと思ひきや
疑のや　思へはや鶏鳴まてとまるらん
はのや　今はゝやとはしと月に鳥鳴て
すみのや　思ふやと逢夜も人を疑ひて
口合のや　月や花より見る色のふかみ草
一切や　うたかひものにもかよふへし。又知ぬにも似たり。

一中のや　まきれる詞にも似たり。數多いはん爲也。
一捨や　ふてたる詞に似たり。
一疑のや　うたかひなからとかめて。底に悅たる詞也。
一はのや　たひくつしたる詞成へし。又は大方推量のことは成へし。
一すみのや　此やにとゝ云字をそへねは。はのやに似たり。とをそへたる時は。うたかひの心あやふみたるに似たり。
一口合のや　一句の中可然玉しゐならん人に合て云也。又是程位おとらさる間にて。口合に云へしとなん。
一此内のやにて。にてと留る分。中のや。はのや。すみのや。一らんととまる分。切や。疑のや。

そかよの三字之事

そ　うき世そとおもふ涙に袖ぬれて
か　里人の山はふるかと雪まちて
よ　又よとはとむる情にいひ捨て

如此そかよの事は。そとかとよとなといひて。てととまるへし。但そかよはかりにて。とをそへすはとまらす。されはそとかとよといふす爲にてとゝまらす。一句を聞に。そかよあれ共不聞。大切の口傳。

にてととまるに五の次第有。

を。は。も。からぬ。らは。

を　風もなき荻をね覺の枕にて
は　又よとの情はのちのなみたにて
も　僞りに思ふといふもうらみにて
からぬ　戀しさに身は惜からぬ計にて
らは　絕て逢ならひのあらは別にて

如斯五字にておさへねは。皆發句のことく哉ととまるへし。

一有文無文の連歌。なからと付るに（に歟）二義有。したひなから。とめなから。したひなからと云は。

有文之句　瀧の音そちかくきこゆる
したひなから　月に吹太山颪の聲なから
柴の戸さむく秋そしくるゝ

とめなからと云に　露のもる軒端は松の風なから
無文の句　猶しくれ行秋とこそなれ
とめなから　嵐吹雲間は月の影なから
苔の衣のはるとしもなし
同　櫻さく山の陰には住なから

うけてにをはの事

來てこそ道の遠さをもしれ
出てけふ幾日なるらん旅ころも
かゝる旅そとつけもやらはや

舟にては枕の下の興津波

重詞之事

いたく今年は霰をそ聞
ふきかへて苔なき軒の板庇
みちしらは薪の女よまてしはし
柴の戸あけて山見えにけり

引違付之事

山にてもたゝうきは夕暮
浦人は何と聞らん松のかせ
月にはいとふ秋のむら雲
花を見し春は殘れと思ひしに

うつみ付之事

さむさそまさる山風の色
くもる夜の月の雪には晴まにて
名殘はいまた都なりけり
秋の行關のこなたや時雨るらん

心付之事

ふみかへて行道はるか也
鹽みちて干潟や海に成ぬらん
なこりやをしき出る舟人
この浦の月と雪とに夜は明て

體付之事

霞にとをき浦の松原
月に行舟路に春の夜は明て
花のうへより夜は明にけり
霞には峯も見えす山見えて

風情付之事

あたなる身をは露にたとへて
水の上の泡と見えてや消ぬらん

詩の心付之事

川こそうすき氷り成けれ
橋ならはあやうくとても踏へきに

うけてにをはの事

夏河の岩まの水の絶〲に
なかるゝ浪をうつむうき草

傳云。是を汝にしらす。初心の人に是を見すへからす。今生後生の罪たるへし。三世ともに其罪重かるへし。

右此一冊者依津田經次所望仍禁染筆云々。出葉分別。至實可謂歟。作者不詳。校合次記之而已。

永祿六年清和上旬　紹巴在判
天正六年菊月廿五日書之。　紹與

天正九年菊月廿六日　　　　萬休書之。

此両帖透綱院殿御筆也。永子孫に可傳。可秘々々。

勝延

續群書類從卷第四百九十七

連歌部廿七

心敬僧都庭訓

心敬法印庭訓云。

一花の連歌の外に。よしなき所にて。春をとりいたす事なかれ。春は手すくなき物なり。秋はなにとなくさひしき物にて。よきたうくはるよりはいますこしおほし。すへて春はあたゝかなる也。もろこしには春をほめたりどいへとも。もつはら詩にも秋冬をつくれり。瀟湘の八景の題に春のなきにて大かた心うへし。

一花のまへといはんとき。春の句なとしたる。比興のことなり。花付よからんとする事なかれ。又わさと付にくからむとするをなかれ。

一上手にならむとおもはゝ。先上手にきらわれぬように連歌をしならふへし。あひてに戀しのはるゝ程に成ぬれは。をのつから句をもきゝとり。こうも入て上手にもなるへし。上手ならは句のよしあしをいはす付てこそといふ人あり。大きに物もしらぬ事なるへし。たとへは手書にわろき紙筆にて。きとくにかけといはんかとし。けにはたゝ物にてはあるましけれとも。よくはかゝるましきなり。上手のきらふといふは。第一たうくの多くとりこみたる句。又一句の理なき。又ことはりの過たる。又世俗に人のうちひらめといふ句。付にくき最上也。異相の句は異儀なれとも。かへりて名誉の句をも付いたすこともまゝあり。古人の名句かたり句なと見給ふへし。皆異相不思議の前句とも也。うちひらめにふつとよき句つくましき也。うつくしき句のしかもわかむねより出たる句は最上也。いさりする。かりするなとに罪科。釣たるゝ。柴ゝるなとにひまなきわさ。さけ鶴

なとゝいふ句にいましめ。如此のたくひいかほともあるへし。かならす下手のこのむ物也。今よくもあしくも付られぬ物也。よく／＼心うへし。

一下手のこのむ物とも。松の落葉。さひしき。すこき。鳥羽田守。又水邊の三句めなとに。とまや。あしのや。ま砂。神祇祝言なとはしまぬ物にて候。無用の時とりいたすましきなり。かようの事をこのむは。その亭主なとのついせうにするにや。あさましき事也。それによるへくは。せんすまんさひなとゝいふ物の。千代萬世さま／＼のいはひなとゝいへとも。諸人か祈禱なとにきせん。大般若仁王經心經なとはこと／＼く地獄のさた空のことはりなり。しかれとももつはら祈禱になる也。法樂にも讀はいたつら事のつかぬ千代萬代。鶴龜。神のゐかき。みしめなはなとはなるましきかと覺るなり。君千秋万歳といはふなる。勅撰にもかならす哀傷の部とてある也。

一初心の時からひたるかたをこのむへからす候。たゝしくうつくしくすへし。さゝめとにもいふかとく。五しやくのあやめに水をかけたるやうにすへし。大に見る／＼と物になりさうにといふ心なるへし。こせこせとしたるは。七八の子のひけのおひたるやうなり。をのつから年も老こうも入て後。からひたるはよし。初心中つ比迄もたゝしくすへし。

たゝ虫といふはうつくし。きり／＼すといふはからひたる也。これほとのともかはる也。

一上手の句を見るか肝要にて候。但上手の句を見るにとりて心あるへきとあり。世にあるほとの事しつくして。あらぬかたへのみ心をやり。やせからひたるを見て。とりつきたちなる物のまなふは。毒をのみたるほとの事なるへし。又もとより上手の句にも。いか程もまなふへき句あるへし。それをしりたる人にとひきゝ。書抜ても見るへき也。

一躰の物には用を付へし。用には躰を付へし。但事によるへし。海浦なとゝいふ句に。水邊のものにてしかも躰にても用にてもなき舟橋。あし。あまなとやうの物の付たるに。今度用をはよきとて。浪。しほ。水なとしたるなとやらん心よからす。中と絶たるやう也。

一よき句といふは。我もしらすふと出くる物也。兼てよき句せんとあてかはゝ。ふつとせらるましきとおもふへし。

一連歌はかねてたしなみ。朝夕修行工夫して。その座にてはかろ／＼とすへし。平生たしなむ人の句は。口にまかせてするやうなれとも。よくきこゆる物也。たゝの時たしなまぬ人のたしなむ風情見せんとて。あせをなかしうつふしあふのき案するは。かたはらいたくこそあれ。數寄とはみえす。それを聞しるましきとおもふかむねんなり。

一上手のあひてになりてする時は。心をわか分よりはひきさけてもつへし。或碁打のいはく。上手とうたん時は。かたんとうつへからす。まけんとうつへからすと云。連歌におなし事也。

一下手のことは中にをよはす。よき程の人も前句にすつへき所をえすてすして付るほとに。無用のほねを折くこうへるなり。たとへはなぞ／＼と云物に。笛ひつとふきて。つゝみをとう／＼と打ならし。鬼こそかへり候へ。いやそれはさも候はす。ひとこそかへり候へといふをとひとゝくなり。ひとをうちかへせはとひなり。まへにいろ／＼の事をいひたれとも。いやそれはさも候はすといふほとに。みな用にたてすてたる也　連歌に大切の事也。ものゝふの八十宇治川なとゝあらん句には。うちの事とのみこゝろえて。枕ことはのものゝふのやそをはすつへき也。このたくひ毎々句にあるへし。

　櫻ちりもみちはくつる山里にといふに。

ひとり暮行木からしのかせと付たりしはやさしき也。いひもてゆくほとに。さくらも紅葉もつけねとも。よく付たるなり。

　海山の心にうかふね覺して

はくゝみたてしちゝはゝの跡

是も或人付候し。との外ほめられ候つる。父母の恩を海山にたとへたる事。誰もしりたる事に候。此ね覺してをつけぬかよく付て候。夜分まくらなと入候ては。さん／＼の物なるへし。

一宗祇の句に。

　秋さむけなる木からしそ吹

をしねもる遠山もとの草の庵

此句さむけなるをつけんとて。遠山とをきたれとも。無下にけつこうにて候也。かた山もとの草[illegible]こそ。さひしく不便なるかたは候へ。是程の分別肝要なり。心え給ふへし。

一北國の者のをしへたうけて。無上の器用なる人も。無下の下手になるなり。もとをしへられたる人をひいきの心あるにより。あらためられかたき物也。さるにより入門よりよき人に物をとふへし。關東にもきのふけふする人は皆心えよし。古者はりやうしやうすれ共。心もとのかたをひいきするにより。もとの下手まて也。

一心はこと葉をころし。詞は心をころすと云。故人の言葉也。尤と思ふ也。こと葉をかさりいたはる程にこゝろはなく。いつもの事のみ也。また心をもとゝたくむほとに。こと葉のつたなく。ふしくれたちたるをしらす。よく／＼心うへし。

たゝと葉はうつくしくやさしく。心はあたらしからんにしくはあるましきなり。またいかに案するとも。さしたる心なからん時は。詞をよくしたて候か一の事にて候。是は秘事にて候。他人にの給ふましき也。

一一順の連歌をはいかにも淺／＼とすへし。結構する句はことに一順にわろし。さいへんなとまてもおなし事也。たとへは猿樂のしき三番とて。おもしろくもなき。いつもの事をくりかへしするは。人の心をおとししつめしませんかためなるにや。そのとく一順にて連歌心になすへきなり。しからは猿樂のしき三番と心えてすへし。一順にこれはと思ふ連歌をしいたしたる人の。末よはなるか比興なる物也。脇第三なとは又いかにも一角すへし。

一百韻に一ある物。二ある物。五句さりてある物。よく／＼分別してすへし。一二ある物をは。さしたる事なくはいたすへからす。旅まくらかりまくら同し物ならは。かり枕として旅の字殘すへし。あるものゝ句に。

　あらしやさむき嶺の旅人とせし。道をしらぬもの也。嵐。寒。嶺。旅。いつれも一二より外はなき物也。

一無上のよき連歌といふは。湯水なとをのむとくなり。させるあちはひなけれとも。いつきくもあかぬ物也。めつらしきとは。うちきくに面白けれとも。やかてさむる物也。又かくいへはとて。初心よりさやうにさせるともなくあてかへは。うちひらめになりてめもさめぬ也。

一器用の人を初心より見しるやう。人にとつとわらはるゝ句をもし。又思よらぬ句をもあてかふか。物にはなるさうなり。それは上手にそひ稽古修行すれは。わろきかたはうせて。おもひよらぬあてかひはいよ／＼つのる也。上手にかならすなるへし。はしめよりうつくしく科もなき句の。させる事なきをのみするは。さしたるしてにはならぬ物なり。

一歌はたゝもろ／＼の難題ややすき題やにて。百首千首万首もよみ。連歌は上手とも下手ともよりあひ。あけくれ千句をも百韻をも。又前句付をもいひすてをもすれは。胸のうちなる毒氣ぬけて後ならては。誠のわか句いてきかたき物也。にこりたる水をすこしつゝ汲てすめるをまたは。すむ事あるましきなり。しけく汲てくみかへは。底より清水わくへし。そのことくよき句は胸の底にあるへし。連歌をたしなむ執するとて。座にあふ事をものうく思ひ。句をすくなくする人は物にはなりかたし。

　私云。兼載その比たしなむなと申て。百韻に一二句より外は仕候はす候し。それをつねにいさめられ候ひし。人によるへきことにて候。句を多くする人にむきては。い

かにも連歌は案せよと又申され候し。

一連歌に雜談しいねふりなとするものは。そのみはさたのかぎりにて候。一人なれともましり候へは。みなのあたになる也。ゆめ／＼ませ候ましきにて候。さし合輪廻遠輪嫌句のしな面かけ餘情なといふやうなる。さま／＼の大事とも胸にさしはさみ候はゝ。何事かいはれ候はん。さやうに雜談なとする物は。けにもたはとのやうなる事をのみし候て。善惡の分別の候はゝこそ。かへす／＼あたりへもよすましきにて候。しみこほり神も佛も影向なりつへらすみわたり。時々香の にほひ空たき物なとこそ おもしろくは候へ。

一宗砌かいひしは。はしめより會席にあはぬ人の中ほとに來るもわろし。始よりあふ人のはてぬに立たるもわろしと申候。けにもとおほへて候。但佛法者學文にひまなく。又若につかへ。又人のつかさとる人なとは。ひま／＼にあへるもことはりとおもふ也。さもあらぬいたつらものゝ。さらに用もあるましきか物忩なるにくきなり。上古は座を一度たつ人をも不思儀のやうに申候し。

一古人のよきうたをつねに見て。上下の句のつきやうにて連歌を心うへし。人のつねに歌は何のうたをみてよく候はんと申候。其返事かはる へきにて候。しやうとく作者あてかひのねふりめなる人には風雅玉葉集なとを見よ。定家慈鎮和尚の御詠なとを常にこゝろかくへしといふ。又あまり心のたけてかける人には。たゝ俊成爲家もしは草庵集なとを見よとをしゆる也。いつれにも新古今にすきたるものはあらしと。ひとへに心敬は取置て候。心も詞も用にたちて重寶にて候。

一心もち肝要にて候。常に飛花落葉を見ても。草木の露をなかめても。此世の夢まほろしの心を思ひとり。ふるまひをやさしく。幽玄に心をとめよ。春の曙秋の夕暮ときゝとるくちまねにすてはいたつらこと也。春の曙をも秋の夕をも。心をとめたる人のいひ出すは。同し夕曙なれともかくへつの物也。心はふとく欲心をかまへ。あたゝかなるあてかひにて。言葉はかりにて。うく。つらき。かなしき。あちきなき。世をいとふ。身をすつるとのみいへとも。かたはらいたくこそ候へ。しみこほりもせす候。哀なるとを哀といひ。さひしきとをさひしきといひ。閑なるとをしつかといふ。曲なき事なり。心にふくむへきにて候。又其身に似あはぬ連歌したまふましきにて候。心敬等都をいてゝひとへに流人のとくなりはてゝ。年よりくちたるものゝ。ふけあすしらぬ心の句をうらやましかり。若き人なとのまなひ給ふましきにて候。かつはいまく／＼しくまとしからす候。

西行上人の歌なと。古人もな似せそとをしへける。此とはり也。

一歌にも連歌にも。本歌をとる事このむへからす。かなはぬ也。又をのつからよりきたる所にてはよろし。其歌の面影うかふはいかにもおもしろし。いつれにも世にあるほとの事。歌にても古事にても。又萬葉伊勢物かたり源氏さ衣なとをも。よく〳〵見心うへし。さてそれを毎々とり出す事はみくるし。見くるしとてしらぬは無下也。俊成卿六百番にも。源氏見さらん歌人は無下のとなるへしと申されし。

一此道はたゝ一大事の物とたに心えてたしなまはあかるへき也。あんへいに心うへからす。

一十躰のうちに。事可然躰と云かある也。初心の時は心にかけてまなふへし。連歌そんせぬやう也。

　山住もまたやうき世にかへるらむ

あらしのひまの曙のゆめ

　妻とふ鹿の聲そ深ゆく

高砂や松に尾上の風落て

　うらさひしくも春かへる比

もしほやく煙に霞鴈鳴て

此躰愚句なれとも無爲なる躰也。初心のときよし（り脱）ひかみたる連歌は何ともならぬ物也。心え給ふへし。

一下手は冬野のかはりたると云句に。草のかれたると付。山水のおつるといへは。やかて瀧なとを付。籬の花の秋にほふといへは菊を付。

一花に櫻をつくる。用心すへし。

一旅の道。戀の道。ひたゝけたると葉也。このみたまふな。

一初心のほとはくるしからす。中つ比にもなりては。戀の句大事の物なるへし。うき人の戀しくてあひたき。待佗たるなとやうにのみすれは。あたゝかなる物也。惣してこのまぬかよき也。下手はやゝもすれは戀の句をいたすもの也。

一心もちに三重あるへし。初心の時は。たゝしくうつくしく心にかけ。先口なれ候やうにすへし。中程になりては。きとく玄妙神變のかたへ心をやり。人の耳をもおとろかし。人にもきとくといはれて。よく聞たる句をのみすへし。さて上手になるさかひに入ふしては。道をまもる心をもち。初心の時の句をもし。きとく神變をも現し。又ふかくも淺くも一途にさたまらぬやうにすへし。かやうの心もち肝要にて候。餘情面かけひえやせたるとは。上手のくらゐにいたり。をのつからしらるへき物也。習傳かたき物也。

一田に鴈金はよし。かりに田は好へからす。

一脇の付けつこうなるわろし。第三たけ有やうにすへし。

一庭の草木。家のつくりやう。絵なとかけたるやうにて。其

人の[illegible]はしらるゝ物也。はつかしき事なり。たしなむへし。つれ〳〵草に此ことわり書たるなるへし。

一かすかなる所に心をかけ給ふへし。ひとへ白梅の竹の中より咲いて。雲間の月を見る如くなる句かおもしろく候。八重紅梅のさきみたれたる末をきりつめ。八月十五夜の月なとのやうなるはこのましからす候。

一才覺あれとも下手はある也。才覺なくして上手あるましき物也。たゝすきといふもの肝要にて候。されは招月庵主は數寄といふ二字を懸物と申名聖にかゝせ本尊とさため。又やかて給にすきを書て。あめかしたなるすきそこのすきといふ歌。讃にかき給し。數寄たにあれは師匠にもまみゆ。抄物もあつまる也。

此條々。心敬法印。兼載か若年の比。連歌心もちのやうをしへられし。其時わすれ候はしとて。物に書付て置候を。いまものゝ中より見いたして候。其比は何ともおもひ候はす候しか。たゝいまよく見候へは。みな〳〵ありかたく候。此道にてはかの院主の詞をは。佛の御法のやうに最意にはあふき候。又御信仰のやうに見申候之間。隨分の庭訓にて候へはしるし進之候。あひ構て人に御見せ候はて。御覧し可被下候。若御同心にて候はゝ。此心もちより外は我らも候はす候。其雜義のまゝに書候間。無下にたゝ詞共にて候。さりなから理たにきこへ候はゝにて候あひた如此候。御一覧之後。やかて御破あるへく候。

長享二年戊大簇上旬　兼載 在判

古市殿

此書は俊明ぬしよりもとめて。資周か筆してうつし侍ぬ。いとしも数のかしこかりけり。明和七の年霜つき十日あまり八日。　昌周

〔右心敬僧都庭訓以東京帝國大學圖書館本校合〕

ひとり言

さても此世の事はみなまほろしのうちなから。三のさかひ火の中にして。くるしみみちてひきたなき事。まのあたりさとりしり侍れとも。かはかりつたなき時世の末に生あひぬるこそ淺ましく侍れ。五十年あまりの事はあきらかに見きゝ侍り。それよりこのかたは。天か下かた時も治れる事侍らす。三十とせの比より。はからさるにあつまの亂れ出來て。年月を經。後千万の人數に身をやふり□うせまとひ侍れとも。今に露はか

りもおさまる道なし。其後いく程なくて。赤松の亭にての御事なといてき。後は年々歳々天下つえつくはかりも長やかなる所なし。諸家の内さへ思ひ〳〵に君臣同僚のあひた亂れやふれて。さま〳〵の人數を盡して失侍り。君臣たかひに我國々にとりくみて。よるひるのたゝかひ侍れとも。一所おちつきたる方なし。あまさへ昔聞も及へぬ德政なとゝいへる事。近き世よりおこりて。年〳〵邊鄙の土民十方より九重に亂れ入て。ひとへにしら浪の世となして。万人をなやまし。寶をうはひとると。つや〳〵いとまなし。かるかゆへに民もつかれ。都もおとろへ果て。萬の道万か一も殘らすとなり。さるに此七とせはかりのさき。なか〳〵しく日てりて。あまか下の田畠の毛一すちもなし。都鄙万人上下つかれてうかれ出。道のほとりに物を乞。伏まろひ失侍る人數。一日の内に十万人といふ事をしらす。まのあたり世はかき道となれり。むかし鴨長明方丈記といへる双紙に。安元年中に日照りて。都の内に二万余人はかりは死人侍り。大風に火さへ出て。樋口高倉の邊よりはしめて。中御門京極まで火とひありきて。都やけうせ侍るなとしるしをけるをこそ。淺ましくも偽とも思ひしに。たちまちにかゝる世をみる事。ひとへに壤劫末世の三災こゝに極まれり。亂れかたふきたる世の積りにや。いにし年の暮より。京兆合戰のあひた物いひ既大やふれとなりて。

天か下ふたつにわかれてけり。かゝる程に金輪仙洞は殿中に行幸なりて。京兆一所に玉臺をしめ給ふ。其外京兆に同心は一家の讚岐守。阿波守。伯父右馬頭。下野守以下。ならひに管領畠山尾張守政長。六角四郎。赤松の次郎法師。武田大膳大夫信賢等也。金吾一味は一家相摸守。兵部少輔政衡以下。ならひに斯波治部大輔義門。畠山右衛門佐義就。同名右衛門佐義統。一色。土岐美濃守。六角宮内大輔政高。大内新介。土屋介等なり。內裏仙洞殿中をはしめとして城郭にかまへ。大ほり道茂木を十重廿重に引けり。金吾の方にも彼亭以下を同篇にきひしくかまへ侍り。其外諸國の寺社。武家貴家上下の家〳〵。一塵も殘所なく。大野やけ原と成て。上下万人こゝを守にしてくれまとひ。四方に散々なり行侍るありさま。嵐の花木枯の紅葉よりも跡をとゝめす。都のうち目の前に修羅地獄となれり。さて數にもあらぬ心敬等まて。都のほとりには草の一葉のかくろへも枯果て。ひとつの露のよすかも頼むかけなく成侍れは。かりそめに參宮なと申侍て心をのへ侍るに。東の方にあひしれる長敏といへる人便船を送りて。ねんころに富士なと此ついてにと侍れは。波にひかれたゝよひ侍り。やかてと契て出しかとも。都のみたれいよ〳〵淺ましく成行侍て。海路山路の便をもうしなひ侍れは。はからさるに武藏のゝ草葉を結ひて。一夜のかり寢とおもひしか共。二とせの

夢を迷侍り。誠はるけき境なれとも。いにしへの人の舊跡とて。和歌の心さしの人。色このみなとも殘侍て。をのつから忍ひ／＼に歌連歌なとの事をもたかひにかたらひ侍事よりより也。ある人の私語とりよろつの道むかしにかはり果ぬる有さま。ことに歌連歌なとのなり行侍ることなとひそかに語ねけるに。見聞侍しことも詮なく忘れはて。又いさゝかのともおかましきやうに侍れは。道事にもあたはさりし。あなかちに辛ることたひ／＼になりぬれは。むねに思ふ事うちさらし侍らねは。腹ふくるゝなとゝ古人も申侍れは。草の枕のひとりとに。あら／＼道も世に見しことのはしをうち出侍り。まとに永享年中の比までは。歌連歌の名匠先達世に殘りて。きら／＼しき會席所々に侍りしなり。公宗には一條大閤。飛鳥井家。冷泉爲之。武家には頂光寺。同典廐亭。同阿波守畠山匠作。同阿波守一色左京大夫。武田大膳大夫。伊勢守。小笠原備前。此外正徹和尚。堯孝法印の會。在々所々月次の會當座褒貶なとゝて。さま／＼の會席興しらす。其座作者先達。飛鳥井黃門。冷泉黃門。畠山匠作。同名阿波守。同名左衛門佐。一色左京大夫。武田大膳大夫。小笠原備前入道。東下總守。近藤入道。宗砌法師。智蘊。外郎。常佐已下。其外には清巖和尚。堯孝法印。春日正三位入道當関以下數をしらさりし。其比さへ昔の十か一とこそ聞しに。其席に有し好士。今の世には一人も殘らすなり侍り。誠興廢時のまの夢となり捨れたる有樣。あさましくも悲しくも侍る哉。心敬彼席ともに望しかとも。不堪愚蒙の事侍れは。盲目の前の紅葉。牛の前の調彈よりも詮なし。殊清巖和尚に三十とせは日夜のことに侍しかとも。一のことをも耳にとゝめす。いさゝかのさとりをもえ侍らさりし。今は千たひ悔思すりをし侍る斗也。此頃ふしきにもいかはかりの器用利根の人世に生れ侍るとも。眞人の風を學ひ。いかなる友にあひて。故實をもあきらめ。此道の大情に入侍らん。まことに十方常暗冥の時にや。

大覺世尊愛に阿私仙人にあひ給ひて。苦行年久をつみてこそ法をえ三界の導師とは成給ひしか。先達に逢なを尋侍てしはとけぬ翟になれて。邪なる劫入侍らん好士つや／＼詮なくや。

白樂天は元結をなけき此情をあつめ。

白(伯)牙は子期うせて琴をわりしと也。

孔子ば顏回獨をこそ惜み悲み給へ。

佛も迦葉一人をこそ微咲給ひしか。まことにあきらかなる人はおほろけにも有かたき哉。佛目蓮をつれ給ひて。須彌の麓を過給へるに。土をとりて御爪の上にすこしをかせ給ひて。目蓮にとひ給へり。此土と須彌の土といつれかおほかりとの給ふ。目蓮須彌の土はおほく。御爪の上の土はすこしきとこたへ給へは。さとれるものは御爪の上の土のことしとの給へり。い

つれの道も人間の無常遷變を念々に忘れす。なさけ深く心高かるへしと也。もろこしの詩人第一の杜子美は一生の間うれへはかりの詩をつくると也。されは杜子美一生うれといへり。許渾水三子とこ。一期の間水の詩はかりを作りしと也。けにも水ほと感情ふかく清凉なる物なし。春の水といへは。いものひらかに佛もうかひて。なにとなく不便也。夏清水の本泉の邊又ひらさむし。秋の水ときけは。心も冷て淸々たり。又こほりはかりえんなるはなし。苅田の原なとの消うすこほり。ふりたるひはたの軒なとのつらゝ。枯野の草木なと。露霜のとちたる風情。おもしろくも艶にも侍らすや。いにしへの歌仙二人此世の事をむつ物語せしに。獨は世に余波のおしく侍るは雲のみなりと云。月に別れん事也。獨は世には露のみ心とゝまり侍る。露をいまた見殘し侍るとかたるとなり。哀なりし。けにもいかなる岩木の心にか。月を艶に露をはかなく見侍らさらん。古賢のいはく。大かた歌道をしらさらん瞿は。壁にむかつて。ほとときをかふりて。一生を送侍るかとくなるへしと也。もろこしに道林禪師といへる人は。此世のあまりにはかなきとにたへ侘て。木の末にのみ住侍しを。白樂天見侍りて。鳥の巣の禪師なとゝ名つけて。和尚の栖あまりにあやしく侍る物かなといへは。和尚答。汝かこの世を忘れて。ましはりくらすこそ獨あやうけれと。又樂天とふ。いかなるか是佛法と。和尚こたふ。諸惡莫作。諸善奉行。樂天云。このとはりは三歳の嬰兒もしれり。和尚いはく。しれることは三歳の嬰兒もしれり。行する事は八旬の老翁もまとへりといへれは。白樂天三禮してされり。まとに唯今をしらぬまほろしの身をは忘れて。常住有所得のみに落て。さまへの能藝學問佛法なとゝてのゝしりあへる。おろかなるかた。たゝ春の雪にて佛を作りて。我ために堂塔婆なとをかまへ侍るかことく也。昔二條大閤にある人の連歌の堪能と不堪との心あてを尋申侍しに御給ひしと也。佛師經師箕作といへらん程の事也。不堪の句は箕作佛師經師なとゝてさるへし。けにもうつくしく聞よきさまに句を作らんは上手なり。つまつきていひ出さむは下手なるへし。はかなき一ふしの御こと葉なれとも金言におほえり。一大事はかはかりのあしきうちに侍るへく哉。又好士尋ね奉る。上手の句の内に第一のあしき句と。下手の一生の最上の句と。おなし位に侍るへく哉。無下のことを申侍るものかな。堪能の次の句は堪能の物なるへし。同日對論に及へからすと有し。有難き御言葉也。けにも手跡音曲にき物なとにてさとり知へく哉。昔の救濟周阿を侍故とて世の人ならへいひ傳へ侍ると。梵灯菴主口惜き事と被申けるた也。有かたふこそ覺侍れ。けにも救濟に周阿及へからすや。周阿は心きゝてとり合せ。てたり上手とみえ侍り。しかはあ

れと思ひいれてたけしな面影なとのよふおんの句見えす。救濟は奥ふかく不便のの躰のよし。近き先達もいへり。周阿句。

海士人の濱田かりしほみちくるに
霞にさすかたなひきなる花すゝき
雲あれは出る山にも月入て

救濟句。

ふる網に鵜をつき木の花咲て
こしにさすかたなの文字を取分て
いつ出て雲まの月に成ぬらん

おなしとから様なれ共。しなたけえんの句ともさま〳〵にみえ侍と也。同周阿句に。

柴の戸ほそをたゝく秋風と云に。
今夜とは契らぬ人の月に來て

此句秀逸とてしるし侍り。しかはあれと心うるはしく。前句によらさるか。月に人はこてと有へきや。

後京極攝政御詠に。

月みよといひしはかりの人はこて槇の戸たたく庭の松風

此御歌の上下の心にて。周阿句分別あるへくや。

救濟句に。

冬さく梅にましるくれ竹

此鶴句二條大閤樣もあそはしをけり。しかあれと草木といへるに竹をよせ給へるは。古今集に。

木にも非す草にもあらぬ竹のよのはしにも我は成にける哉

此本歌にてよせ給はゝ。草木の心をとはり度哉。草木といへは竹と諸人付侍る。あきらめたく侍りて。おそろしきとにて侍れとも。いさゝか尋侍るはかり也。古人秀逸とて書人しるし置侍るをみるに。大かた前の句をかゝす。又かたりあひ侍るをきくにも。前の句の沙汰なし。此事無念にや。連歌は前句をきかては。いかはかりの玄妙の句所詮なくや。前の句打越の輪廻なとのあつかひによりて。地連歌定句も興情あるへくや。かやらのかろ〳〵しきとより。ひとへに心もと葉も前句によらす。まなこうせ侍りて。たゝならへ置たる句のみになり行侍る歟。其比河内良阿とて名をえし好士侍り。れんこゐ作者にて侍りけるや。かたり句なとゝてさま〳〵いひつたへり。しかはあれとうるはしき先達とはみえすや。きとくおもしろき所に心をとゝめ侍しにや。さ樣の人をは佛法にも頓教別教なとゝて。圓成圓教の所よりは淺くや。まとの先達の句には。かならすいひ捨たるものおほかるへし。當座の稱揚を宗として。輪廻前句の難句なとには。とをすてゝ人の句をたすけ侍る句おほかるへし。古人の歌にもつゝりに錦を纏ませよといへり。さのみゑり句ゑり歌にのみ心をとゝめ侍らは無念

の事也。このもしくめつらしき句ともをきゝしりて。ほうひするは諸人のうへにて。初心末座の人のさせるふしなき句の内にも。思ひ入はつかしき句ともましり侍へくや。いかはかりの所までも心をつけ。毎々句々に耳こゝろのとときて。聞おとささらん好士。まとの大切の人数と申へく哉。たしなみ修行おろそかにて。劫のみ入たる人のきゝしるへきにあらさるか。俊成卿のかたり給へるは。源俊頼はすへて歌をしらぬ好士也。その故は毎々座々にこのもしくおもしろき歌はかりを詠し侍れは也とのみ給ひし。此言葉艶ふかく修行高き事なるか。されはとてれふり日におたしくのみ歌をよめとにはあるへからす。このさかひをさとりあきらめ侍らん好士。おほろけにも有かたくこそ。連歌は大かた歌をこゝろみ侍らては。あきらかにはさかひに入かたくや。歌の上下の續さまの心のてんし侍るを心え侍らては。他人諫句なとの手をはなちたる所なとにたとり侍るへく哉。連歌はかり偏稽古の好士は。細工の小刀なとにて家を作り侍ることくなるへし。くたけふしくれたち侍るへき歟。いかはかりの下手にても。番匠のつくりたらん。よろしかるへし。凡堪能不堪の人の句作れるさま。此うたににてとはり侍るへく哉。

誰としもしらぬ別れのかなしきはまつらの沖をいつる舟人

此歌を不堪の人の筑紫は旅の別のもろこしへ行なとゝいひあらはし侍るへし。それは幽遠余情をくれ侍るへし。かたへの好士たちいかはかりつたなきこと葉をも代々集にあり。古人の本歌とて。用心なくあら／＼敷ともいひちらし侍る。いさゝか用捨有へくや。代々集にもゑせ歌とも入侍らてはかなはぬならひ也。ことに上﨟權門たち歌をしらす入給へは。其内によろしからぬなま／＼しくあら／＼しき歌もおほかるへく哉。古今集なとさへ秀歌のみにはあらすといへり。いにしへより代々つきさまの歌ともいれ侍り。撰者の處度には有へからすと也。又證歌なとにはいかはかりの歌ともたつへくや。但まなはん事は用捨なくては無念の事侍るへしと也。神代万葉集なとの歌とも。往とはり先達に尋ねあきらめて學ふへしと也。上古は代もあかり人の心もすなほにて。今の世のくたり果たるには。あはぬ事のみおほかるへし。かたつ田舎なとに此頃賦物をとるさま不審に侍り。發句を讀進して已後。賦物の沙汰侍りて定給へるとおほつかなし。大かた賦ものは發句の題たるへく候哉。詩聯句なとにも先題を披露して。後々句を出す歟。しからは先賦物を定めて。發句を出參らせ候や。あまさへ此頃は發句の作者をはさし置て。滿座ほしきまゝに定侍る。此事年久不審に侍り。久かたはらの會なとに。座上の好士なとの世を名の世たゝ世なといひならはし侍る。きゝにくゝ候哉。うちませて世ふたつなとならは。こと葉よろし

かるへし。歌一首なとにて。名の世たゝ世なとゝいひ侍るは無下の事にや。[illegible]連歌も昔は公家にもつはらの事にて侍しかとも。[illegible]おとろへて。近き世は禪學達の中に明匠ともの聞えおほく侍り。中にも近き世には南禪寺惟肖和尚大かた日本にて此二三百年の此かたならへて云へき人なしと也。最一の作者と申あへり。[illegible]此三十年さきまて在世の人なり。此後は建仁寺心田和尚とて。ならひなき詩人。世間ゆるし侍るはかりと也。是も十とせはかりさきに失給へり。今の世にもいかはかりの明匠わたるらめとも。その人はかりは聞え侍らすや。おなしく禪門修行の明匠とて。數をしらすきこえ侍れとも。今の世に行[illegible]も心地も世の中の人にかはり侍と聞え強るは一休和尚也。萬のさま世の人にははるかかはり侍ると人々かたり侍り。此門流に和泉の堺にて果給し南江。ひ出たる詩人と申あへり。是も行義心地異相不思議の人といへり。十とせさきにうせ侍り。立[illegible]主とて[illegible]ほとりに[illegible]なとせし。八旬に及たる老僧あり。是もまなこある僧なとゝ申侍し。此四五年はかりの年の暮に忍ひて立出。勢田の橋にてひそかに身を失ひ侍り。長いきし侍るを恥。老後の終焉のつたなからん事を思ひとり侍る。ありかたふ哀ふかし。とに愚僧か知人にて侍し。感涙おさへかたふこそ。萬人諸宗我人口詞はにては賢くのゝしりあひ侍れ共。我見所得にとちられて身を情と。此界のならひなるに。有難くも思ひとり侍る。いつれの學者よりもたつとくうらやましくこそ侍れ。凡天下に近き世の無雙の人々。愚僧見及侍しは。平家物語かたりしには千都檢校といへるもの。齊持無双の上手といへり。大かた彼物語かたりはしめては。昔より第一のものといへり。清書和尚の給し。此千都檢校をは宇治の平等院の寶藏にこめたきなとまて利口し給ひしもの也。同しき心給かく人數をしらす。さる中にも周文禪學ならひなかりし最第一と也。是も二三百年の間に生れかた【一本無[illegible]】りしと云はかりの人と申あへり。碁をうち侍し近き世の無上の上手には大山の樂徒大圓といへる也。おなし比あつまに三浦民部といへる上手勝負なき計也。此二人の人の手あひ。むかしより今に生ぬはかりのもの也。かれら失て後も。上手とて侍れとも。二人に及へきにあらす也。早歌なとゝてうたへる人も。近くは天下には清阿口阿とて。二輪二通のとく申あへり。いつれも坂口の坂阿か門弟也。今に彼二人か余流世に殘りし也。いつれも廿年さきにうせ侍り。其後はかれら程の聞え侍る人なく哉。尺八なとゝて。萬人ふき侍る中にも。近き世には增阿とて齊持のもの侍てふき出したり。今に一天下此風流をうけ侍り。無雙の上手最一と也。是も三十年はかりに失て[illegible]侍り。彼か門弟に頓阿とて。增阿か跡をつき。世一のもの也し。此十年はかり前に身まかり侍り。かれか後は

名をえたるはさのみ世に聞え侍らす。猿楽にも世阿彌とて。世に無雙不思儀の事にて。色々さま／＼の能とも作りをき侍り。今の世の宗一の上手といへる音阿彌今春大夫なとも。世阿彌か門流を學ひつたへ侍り。音阿彌は近くは天下無雙の者なり。殊我道の名譽をつくし侍るなとゝ人々申あへり。是もいにし春の比失侍り。今春大夫又當持の上手と四十餘年はかりは天下に稱讃申傳へ侍り。かれか子に七郎大夫親の跡をつき。是又當上手のよし萬人申あへり。都にて聞傳へ侍ることを耳のまゝ注し侍り。程なく今の世に萬の道すたれ果て。名をえたる人ひとりも聞え侍らぬにて思ひ合するに。應永の比永享年中に諸道の明匠出うせ侍るにや。今より後の世には。その比は延喜一條院の御代なとのごとくしのひ侍るへく哉。もろ／＼の道古きを尋ねしる。まとの人情ふかきと也。凡連歌世々さかりなりしより。代々好士の名をしるし侍る。又連歌は萬葉よりはしめて。此集にさほ川の句なと入侍し已後代々集々にいれり。近くは後鳥羽院の御比より盛にも出て。百韻五十韻なとになれり。千句は爲家卿嵯峨にてひとり申給へるより世に其後みち侍り。後つち應長の比ほひより。善阿法師といへるもの盛にもてはやし。彼か門弟に救濟。順覺法師。信照法師。十佛法師。良阿なとゝて侍し。彼らか後まで救濟一人九十五頽齢をへて。二條大閤樣門弟とし奉。ならひに周阿法師。成穆。成阿法師。素阿。琳阿なと。その外諸人かの門弟也。かれら失侍りて。應永年中の比より世に聞え侍る人々には。今川了俊。成阿法師。梵灯菴主。波多野。外山。平井入道。道助。遁世者には中宜菴主。頓阿。畠阿なとゝて。やむとなき作者侍し。この内にも末の世まて殘り。世一の先達の名をえしは梵灯庵主也。その比大家には飛鳥井小路道孝。岩倉の道欽。赤松の禪門なと也。此外近き世までの好士には眞下滿廣。杉原伊賀守賢信。蜷川周防信永。相阿。梵阿。重阿。承祐。璠藝。宗慶。忠眷。宗砌。智蘊。遁世者には左阿。萬阿。玄阿。祖阿。春阿彌。濱名備中法育。森下入道。淨蓮。此等の中にも宗砌法師智蘊法師は名聞え堪能なりしとなり

寛仁二年仲呂晦日　心敬作

本云
于時文明十一年巳亥神無月十日辰刻校合畢。

明閑判

續群書類從卷第四百九十八

連歌部廿八

連珠合璧集

いときなきわらはの。連歌の寄合といふなるもの書てあたへよと侍しかは。能もしらぬ事とは思侍れと。いなとはいひかたくて。なましひに見聞し事のはし〳〵を書つらねて。連珠合璧集と名付侍り。をのつからおちいりても見給へらん人は。此筆の海にひろひ殘せる玉のひかりをみかきそへ給へとなり。然はいときなきものゝもてあそひ物にうらみなからんかし。

目錄上

目錄下

連珠合璧集上

一天象

空とアラハ。（あまつ空。大空。み空なといへり。）

みとり。海。水なき。鳥の道。凡天象の類皆可付之。
天の原とアラハ。(空の事也。)
富士の煙。なる神。くもりふたかる。後撰
古今 天の原ふりさけみれは春日なるみかさの山にいてし月かも 安部仲丸
新古 秋のよの月やをしまの天の原明かたちかきおきの釣舟 家隆
これらの歌の中の詞を取て。其歌をとれりときこゆるやうに付へし。以下是に准すへし。朱をもていさゝか引わくへし。
あまの戸とアラハ。(あまのいは戸とも。いは戸の關ともいふ。皆空の事也。あくるよしに事よせていふ。)
あくる。出る日。千代ともさゝし。雲井。神代。(いは戸に。)をしあけかた。(天の戸に。)年こえて。(いはとの關に。)とりの聲。(同。)又あまのとは海人の家居のとほそなとに取なしても付へし。
鳴神とアラハ。(源氏すま明石の巻には神なりさはくとあり。)
萬 なる神の音にきゝつゝまきもくのひ原の山をけふみつる哉 人丸
ふみとゝろかし。からうすのをと。(源氏夕顔。)
いかつちとアラハ。
岡。(万。)あま雲。(万。)つゝみのをと。(万。)なる。をつる。とき。(迅也。)風はけしき。八色。(日本紀。)
二光物

〔虹とアラハ。市。雲の梯。朝日。夕日。日をつらぬく。村雨。雲間。イ〕
日とあらは。
ひかり。かけ。はれくもる。てる。出る。入。あさ。夕。なかき。(春日に。)みしかき。(秋冬の日に。)あかねさす。(紫なとに。)天てらす神。
あさ日とアラハ。(あさつく日ともいふ。)
出。さす。里。山。(宇治。)寺。(小野。)にほへる山。
夕日とアラハ。(ゆふつく日ともいふ。)
入。さす。山のは。入あひ。かたふく。
入日とアラハ。
西。雲ま。木のま。峯。岡。とよはた雲。かへす。影をかくす。をかむ。(彼岸の日に。)紅。
日影とアラハ。
糸。かつら。(葛也。)あそふいとゆふ。(草。)
月とアラハ。
光。かけ。出入。久堅の空。秋の夜。桂。襟。鏡。弓。舟。友。心のくま。霜。雪。空行。林。
月桂とアラハ。
枝。木高き影。花。木枯の風。男。手にはとられぬ。(伊勢。)

拾遺　久堅の月の桂も折はかり家の風をもふかせてしかな
三日月とアラハ。
まゆ。西の空。ほのかに。三月。かたわれ舟。ほそき。
新古今　花なかす瀬をも見るへき三日月のわれて入ぬる山の遠かた　長明
弓張月とアラハ。（七日八日をは上の弓張月といふ。廿二三日をは下の弓張月と云也。）
入。高まと山。引とめかたき。よはき。（凡弓の付合。）
秋の田のかゝし。末たのむ。
金葉　弓張の月の入にもおとろかて　國忠
つれなくたてるしかの島哉
夕月夜とアラハ。
ほのめく。をくら山。藤のうら葉。（源。）池のかゝみ。
古　夕月夜さすや岡への松の葉のいつともわかぬ戀もする哉
お　春くれは木かくれおほき夕月よおほつかなしな花の影にて
もち月とアラハ。（十五日の月也。）
こま。秋の最中。みちたる。かけぬ。富士の御雪。（六月十五日にきえてその夜ふるなり。）
續古今　をなしくは花の下にて春しなん其二月のもち月の比　西行
いさよひの月とアラハ。（十六日の月也。又いさよふ月ともいふ。両説有事也。）
山のは。ゆくりなく。（源氏夕かほ。不意の心也。）まきのいた戸。

もろともに大うち山は出つれと入かたみせぬいさよひの月
此外十七日の月をはたちまちといふ。十八日をは居待といふ。十九日をはふし待ともね待ともいふ。同し月なから其心して付へし。又廿日の月をはたゝはつかの月といふ。或は山のはつかになと歌にはよめり。
有明とアラハ。（廿日より後は皆有明也。）
山。さくら。
古　有明のつれなくみえし別よりあか月はかりうき物はなし　忠岑
同　今こんといひしはかりに長月の有明の月を待出るかな　素性
新古　有明の月の向後をなかめてそ野寺の鐘はきくへかりける
おほろ月夜とアラハ。
梅のかほり。おほろけならぬ。（源花宴。）しるしの扇。（同。）千里。（歌人名也。）
新古　てりもせす曇もはてぬ春のよの朧月よにしく物そなき　千里
同　今はとてたのむの鴈もうち侘ぬおほろ月夜のあけほのゝ空　寂蓮
ほし月夜とアラハ。
かまくら山。きく。鹿の子。
星とアラハ。
あまつ。北。箒。やとり。二。七。あふ夜。かのこ。犬かひ。となふる。菊。まつる。いたゝく。梅。ほたる。
（以下似物也。）

伊勢物語
はるゝ夜のほしか川への螢かも我住方のあまのいさりか
たなはたとアラハ。(ひこほしは男也。七夕は女也。)
天の川。かさゝきの橋。紅葉のはし。玉はし。年のわた
り。つまむかへ舟。やすのかはら。としの戀。いそ枕。
袖つく夜。はた物のふみ木。七日の月。にきたへ衣。(い
とにてをれる衣也。) 手向。ねかひの糸。さゝかにの
糸。あふ瀬。一夜。かちの七葉。たちぬふ事。(七夕に。)
つま待よゐ。衣かす。花のかつら。雲の衣。いまる
ゝ。空たき物。秋のしらへのとのね。庭のともし火。
萬 七夕のいをはたゝてゝおる布の秋さり衣たれかとりみる 五百のはた物せ
〔七夕のあすのおしての八重霧に道ふみまよへ又やかへる
と 俊頼〕
いなつまとアラハ。(秋のはしめの物也。)
よひの間。光のま。てらす。露にやとる。石のひ。山の
はめくる。秋の田のほの上。
新 有明の月まつ宿の袖の上に人たのめなるよひのいなつま 家隆
三絲物
霞とアラハ。(詞にはかすむといふ。春かすみ。うす霞。朝
霞。夕霞。八重霞なといへり。よこ霞ともよめり。)
あさ。夕。八へ。うすき。ふかき。たなひく。たつ。へ
たつる。こむる。風長閑なり。衣。袖。さほ姫の衣。

關。浦。網。
雲とアラハ。(うす雲。村雲。うき雲。あた雲。夕雲なとい
ふ。雲のはたてとは夕の雲也。又とよはた雲ともいふ。)
白。八重。あまとふ。いさよふ。よこきる。朝ゐる。夕
ゐる。たつ。ゐる。きゆる。雨。まよふ。ゆきけ。山。
花。うきたつ。あたなる。浪。かゝる。へたつる。
古今 夕暮は雲のはたてに物そおもふ天津空なる人をこふとて 讀人不知
横雲とアラハ。
曉。有明。山櫻。別。ひく。浪にはなるゝ。
新古今 春のよの夢の浮橋とたえして嶺に別るゝ横雲の空 定家
紫の雲とアラハ。
藤。あふち。林。位山。(拾遺。) むかへ。(聖衆來迎事
也。) 宮の中。
新古 聖衆來迎樂 紫の雲ちにさそふとの音にうき世をはらふ嶺の松かせ 寂蓮
霧とアラハ。(秋霧。うすきり。夕霧。朝霧なといへり。)
たつ。こむる。あたる。ぬるゝ。むせふ。しほるゝ。へ
たつる。まかき。時雨。鹿。雁。あさくもり。もみち。
朝霧とアラハ。
はれまもまたぬ。(源。) かりのくる嶺。(古。)
古 ほの〳〵と明石の浦の朝霧に嶋かくれ行船をしそ思ふ 人丸
夕霧とアラハ。

あしのは。（万。）友まとはせる鹿。哀をこむる。小野の山里。（源。）草の葉の露。（同。）色こきいね。（同。）やとはなくして。（万。）

山里の哀をそふる夕霧に立いてん空もなき心ちして

凡連歌に源氏のまきの名出來たるに。やかて其卷の中にあれはとて。よりもつかぬ事を。口にまかせて出すは無念なる事也。いかにもにつかはしきよりあひをもとめ出て付へきにや。〔假は夕霧に小野の山里。草葉露なと付侍らん類也。イ〕

霧の籬とアラハ。

夕暮。たちとまるへき。（源。）しかのたゝすむ。（同。）秋の田。花のあさしめり。

（新古）山里に霧の籬のへたてすは遠かた人の袖もみてまし（好忠）

煙とあらは。（夕けふり。うすけふり。）

たつ。くゆる。思。あさけ。わらひ。荻のやけはら。松竹。水。浪。あまのもしほひ。あし火。すみかま。蚊やり火。しほやく。柴とる。ふし。民のかまと。室の八嶋。鹽かまの浦。

（新古）むせふともしらしな心かはらやに我のみけたぬ下の煙は（定家）

四降物

雨とアラハ。

ふる。さはる。やまぬ。ぬるゝ。ゆふへ。身をしる。泪。水をと。笠。みの。木葉。松風。櫻かり。まとうつ。古郷。篷ふく舟。たのむ木。

春雨とアラハ。

しく〳〵。木のめ。衣。野山のみとり。梅の花かさ。むなしき空。（歌。）あまねき御代。（同。）をとなき。いとをみたせる。

（新古）ときはなる山の岩ねにむす苔のそめぬみとりに春雨そふる（後京）

五月雨とアラハ。

日かすふる。水まさる。うちたれかみ。夏引の糸。まこもかる。郭公。あやめの露。あを葉色付。軒はくつる。泪。みをしるし。さなへとる。田子のもすそ。はれぬ思。月はつれなき。あふち。花橘。

夕立とあらは。

涼しくくもる。草葉に露すかる。雲もとまらぬ。空くもりする。

（千）とをちには夕立涼し久かたの天のかく山雲かくれ行（俊頼）

（新）庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月哉（頼政）

露とアラハ。（しら露。朝露。夕露。うは露。下露。露こほるといへは冬也。）

をく。きゆる。あたなる。ぬるゝ。むすふ。葉のほる。

類。

時雨とアラハ。（露時雨とつゝけ。或又秋の詞を入ては秋に成也。村しくれ。一時雨。朝しくれ。夕時雨。初時雨。よこ時雨なといへり。）

山めくる。山かきくもり。草木をそむる。集イ 露。月を待。雪けの雲。雲間の日影。やゝ寒き。もみち。鹿。木のは。ね覺。泪。川音。松かせ。みかさ山。（歌。）まきのいたや。身のふりて。ふるの神杉。（歌。）

後 神無月ふりみふらすみさためなき時雨そ冬の始也ける
新 時雨の雨まなくしふれは槇のはも爭ひかねて色付にけり 人丸

霜とアラハ。（露霜なといひては秋也。初霜。朝霜。夕霜。霜こほり。霜くもりなといへり。）

をく。きゆる。ふる。むすふ。さむき。草のうら枯。木の葉色つく。夏の夜。虫の聲かるゝ。まさこ。をくてのいなは。曉。かね。月。きく。白妙の衣打。もとゆひ。露。こほる。かれ野。

新 篠の葉は深山もさやに打そよきこをれる霜を吹嵐哉 後京
同 鵲のわたせる橋にをく霜の白をみれは夜をふけにける 家持

霰とアラハ。（玉あられ。又たはしるなといへり。）

くたく。よこきる。玉。深山。玉さゝ。松原。おとろくはかり。

詞花 霰ふるかた野のみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなけれは 長能
千載 月さゆる氷の上にあられふり心くたくる玉川の里 俊頼

雪とアラハ。（初雪。あは雪。白雪。うす雪なといへり。みゆきは行幸。御幸をもいふ也。）

ふる。つもる。ふかき。あさき。白。はらふ。あと。うつむ。あつむる。きゆる。浪。花。梅。櫻。うの花。きく。月。ふし。こしちの山。友待。鏡の影。白ゆふ。松。

ふゝきとアラハ。（雪をふく風也）

花。しの。いなのしは山。（後頼歌。）

千 君きかはなけ郭公くろかみのふゝきになれる我もをとらし 源
千 雪つもる峯にふゝきやわたるらんこしの御空にまかふ白雲 二條院

みそれとアラハ。（雨雪のましりてふる也。）

千 春雨にちる花みれはかきくらしみそれし空の心ちこそすれ 長家
六百番 風わたる花のあたりの春雨は冬の空にも有ける物を 慈鎮

村雨とアラハ。（小雨ともいふ。）

木陰。中宿。ひわ。松かせ。時鳥。雲まの月。蓬ふく船。

新 村雨の露もまたひぬまきのはに霧立のほる秋の夕くれ 寂蓮

あまそゝきとアラハ。

琵琶。（源氏紅葉賀卷源内侍事。）あつまやうたふ。（同。） 催馬樂也

よもきふの宿。(同。蓬生卷。)
催馬樂 東屋のまやのあまりのあまそゝき我立ぬれぬ其戸ひらかせ
源 立ぬるゝ人しもあらし東屋にうたてもかゝるあまそゝき哉
あま夜とアラハ。
しなさため。(源。)しめやかなる。(同。)鬼一口。(伊勢物語。)あはらなるくら。(同。)梟。くらき。物語。
玉葉 みたゝのむ人は雨よの月なれや雲はれね共西へこそ行
ひちかさあめとアラハ。(にはか雨を云也。)
いもか門行過かねて。(催馬樂。)すまのみの日のはらへ。(源。)

五吹物

風とアラハ。
吹。(笛なとに。)聲。きく。日にみえぬ。天つ空。うはの空。便。扇。すきま。
嵐とあらは。(あさ嵐。夕嵐。はつ嵐。)
山。松。嶺の木の葉。(歌。)逢坂。(古。)水上。(歌見下。)九かさねの中。(古。)野への草木。(同。)關の杉村。(新古。)
野分とアラハ。
はた寒き。秋の花。しほるゝ。くろ木あかきのませをゆふ。(源。)おとゝのかはら。(同。)草村の露。玉のをみたる。(同。)虫の籠に露をかふ。(同。)かるかやの文(同。夕霧の大將の文。)
源 吹みたる風のけしきに女郎花しほれしぬへき心ちこそすれ
同 風さはき村雲まよふ夕にも忘るゝまなく忘られぬ君
木枯とアラハ。
森。笛。(源。)
後拾 山里のしつのまつかきひまをあらみいたくな吹そ木枯の風
新古 秋の色をはらひはてゝや久方の月の桂に木枯の風　雅經
山おろしとアラハ。(遠山おろし。深山おろし。ふしおろしなといふ。)
麓の里。(歌。)昨日にかはる。(同。)紅葉。
新 同のへの里のあるしを尋ぬれは人はこたへす山おろしの風
同 〔うかりける人を初瀬の山颪はけしかれとはいのらぬものをイ〕　俊頼
こちとアラハ。(こちは東風也。朝こちなといふ。)
氷をとく。
拾 こち吹は匂ひをこせよ梅花あるしなしとて春な忘そ　菅
又あゆの風といふも東風なり。家持か越中守の時歌によめり。こしの國の人の詞也。あなしとはいぬゐ風をいふ。ひかたとはひつしさるの風をなつく。たつみの風といふ說もあり。

松風とアラハ。
ことのね。里。高砂の嶺。山。浦。玉川の里。桂の里。（源。）浪。琵琶。（同。）大井の里。（同。）きゝしにゝたる。（同歌。）雨。さよふけて。

六時節

子日とアラハ。（正月始の子日也。はつねとも。はつねの日ともいふ。）
松をひく。初春。若菜。鶯。千年をいはふ。春日野。ひくま野。紫野。二葉松。姫小松。御まへの山。（源。）ひけこ。ひわり籠。（同。）

きさらきとアラハ。（きぬさらきともいふ。）
春寒き。梅。霞の衣。雪。佛の別。つるの林。はつ馬（いなり）。北野。

やよひとアラハ。（いやおひともいふ。）
春の暮。夏近し。三日月。山。桃の盃。有明。さいたつま。（若草の名也。）高野の山。

卯月とアラハ。
衣かへ。いみにさす。榊とる。神まつる。かもの御あれ。あふひかつら。花。時鳥の初聲。佛のうふゆ。

五月とアラハ。
やみ。雨。花橘。郭公。むきの秋。

六月とアラハ。
なこしのはらへ。（夏の祓とも。）てる日。秋近き。

初秋とアラハ。
荻の葉風。露置そむる。西。三日月。風そ涼しき。一葉ちる。扇をゝく。七夕。

長月とアラハ。
秋の夜。有明。木末の秋。衣打。野宮の別。きく。

神無月とアラハ。
冬のくる。時雨。行ていのらん。紅葉のぬさ。春といふ詞。（十月を小春といふゆへ也。）霜のしらゆふ。

年の暮とアラハ。
春のとなり。松きるしつ。月日。冬木の梅。なやらふ。（鬼をふ事也。）わかくろかみ。雪つもる。春秋。一夜はかり。（暦のをく。）

七時分

曉とアラハ。（しのゝめ。いなのめ共いふ。）
殘月。有明。かね。鳥。ねさめ。別。鴫のはねかき。しちのはしかき。横雲。やみ。衣々。う盧。霜をく。さしくし。黒かみ。山かつら。（曉の雲也。）しきみつむ。

あたら夜とアラハ。（おしき夜の事也。）
明石。（源。）

後 あたら夜の月と花とを同は哀しれらん人にみせはや　信明

みしかよとアラハ。（夏の夜也。春をもいふ也。）

夢。郭公の一聲。有明。わかたけ。夏かりのあし。

長き夜とアラハ。（秋のよ也。冬にもあるへし。）

山とりの尾。あしのね。擣衣。すか莚。あふ人から。すけの鶏。（きり〳〵すの名也。）

一夜とアラハ。

松。笛 竹。うかれ妻。星あひ。玉さゝ。もろこし船のとまり。月のまへの友。

伊勢 秋のよの千代を一夜になせりともことは残りて鳥や鳴なん

赤人 春の野に菫つみにとこし我そ野をなつかしみ一夜ねにける

晝とアラハ。

袖の泪。草葉の露。手折し花のしほむ。まはゆき。きつね。かたふかぬ日影。槿のしほるゝ。

後 晝なれやみそまかへつる月影を今日とやいはん昨日とやいはん　兼輔

ひるねとアラハ。

夢。朽たる木。（論語。）よもきふの宿。（源。）とこ夏。（源。雲非のかりの事也。）かひなを枕にて。（同。）

ゆふへとアラハ。

墨染。（袖とも衣とも。）雨。かね。宿問。舟とむる。かへる木こり。（或柴人。）人まつ。ねに行鳥。秋。

夕暮とアラハ。（夕ま暮とも夕されともいふ。但付合いさゝかかはるへく候。）

いかた。（くれに。）夕の付合墨染の外は雨以下皆上にをなし。

新 いつくにかこよひは宿をかり衣日も夕暮の嶺の嵐に　定家

たそかれ時とアラハ。（たれかれとも又たれときともいふ。）

なのる。ほの〳〵みつる。（源。）藤のうら葉。（同。）たと〳〵し。

源夕顔 光ありと見し夕かほのうは露はたそかれときの空め成けり

よひとアラハ。

いなつま。雨。人まつ。うたゝね。またふけぬ。三日月。

やみとアラハ。

五月。木の下。ともし。いさり。夕。曉。色こそみえね。うつゝ。あやなし。にしき。後の世。

後 人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまよひぬる哉

夕やみは道たと〳〵し月待てかへれわかせこ其まにもみん

八山類

山とアラハ。峰とも谷とも山類のより來れるを付へし。又植（イ殖）物には松梅。生類には鳥なとよし。詞には。たかき。

へたつる。こゆるなと付へし。
遠山とアラハ。
都。古郷。ふし。きいち。あしやの海。あの〻松原。
(伊勢。) 鳥。櫻。すり衣。まゆ。ひわ。
深山とアラハ。
篠のは。霰。鳥の一聲。水音。櫻。庵。奥。烏。
古 深山には松の雪たにきえなくに都は野への若なつみけり
外山とアラハ。
まさきのかつら。柴の下草。あきしの〻里。(此外名所略
之。) 闘。ふか〻らぬ。
山かけとアラハ。(片山かけ。深山かけともいふ。)
雪の夜。(故事。友を尋る事也。) 友を尋る。(同。) 吉田
の宮。(此社は山かけの中納言はしめて請せし也。)
萬 吉野なるなつみの川の川よとに鴨そなくなる山陰にして
山もととアラハ。(遠山もとともいふ。)
新葉 麓にして物戀しきに山本のあけのそほ船おきにこくみゆ
嵐ふく遠山本の村かしはたか軒はより雪はらふらん 家隆
尾上とアラハ。(嶺の事也。)
松。里。鹿。山鳥。高砂。鐘。
麓とアラハ。
里。野へ。寺。庵。烟。

岡とアラハ。
水くき。行き。やかた。入日。夕月よ。(歌。) 松のは。
(同。) つ〻し。わらひ。こゆる。草かるおのこ。(拾
遺。) みまくさ。(同。) 明石。(源。) くす葉。
新古 さを鹿のつまとふ山の岡へなるわさ田はからし霜は置とも 人丸
谷とアラハ。
光なき。鶯。河。戸ほそ。氷のとさし。打出る浪。(古。)
春の初花。(同。) 柴橋。
瀧とアラハ。(瀧津瀬。瀧川なとつ〻けては水邊にとる。其
外は山類水邊をかねたり。)
をつる。ひ〻く。岩ね。柴橋。河。天の川。布さらす。し
ら糸。浜。雨。櫻。枕。白玉。水上。川上。
〔瀧津瀬の中にもよとはありてふをなと我こひのふちせとも
なきイ〕
そはとアラハ。
かけち。(かけはしとも。) はた。たつ木。
畑とアラハ。
うちおろす。やく。土左國。
金 片山にはたや〻くおのこかのみゆるみ山櫻はよきてはたやけ 長能
新 ふるはたのそはのたつきにゐる鳩の友よふ聲のすこき夕暮 西行
洞とアラハ。

山人のすみ家。みとり。霞。つる。貝。
杣とアラハ。
山。川。まき。檜原の山。よもき。おのゝえ。木をきる。我か立。をみゝ音。朽木。しからき。泉。くれ。みほ山
坂とアラハ。
こゆる。老。鶏。上る。下る。杖。藤代。
古今雑 ちはやふる神やきりけんつくからに千年の坂もみえぬへら也
梯とアラハ。
峰。谷。雲。きそち。あやうき。いは。
嶋とアラハ。（山類也。又水邊也。）
はなれ。うきたる。おきつ。川。ふところ。よもき。つき山。
炭竈とアラハ。
やく。こりつむ。煙。まき。小野。大原山。しからき。よこ山。（河内。）雪のむらきえ。
堀百 匡房〔うら島か箱ならねとも炭かまは年のあくるをくゆるなりけりイ〕

九海邊

わたの原とアラハ。（海名也。）
八十嶋。（歟。）あまのつり舟。（同。）
わたつうみとアラハ。
はまの眞砂。おきつ鹽あひ。浪の花。いはふ。もゝ。伊せ。
湖とアラハ。
しほやかぬ浦。にほてるをき。しかのからさき。（近江の名所多也。）たこの浦。（越中。藤よめる所。）ふせの浦。（同。）
浪とアラハ。
小しま。鹽あひ。かもめ。舟。中川。玉も。
磯とアラハ。
岩ね。山。松。千鳥。へちふむ。みるめかる。
鹽みては入ぬる磯の草なれやみらく少くこふらくのおほき
濱とアラハ。
千里。吹あけ。眞砂。松。ひさき。荻。つはき。千鳥。あらき浪風。とまひさし。碁の石。田。
江とアラハ。（海にも川にもあり。）
にこる。みさひ。あし。にしきをあらふ。難波。（餘之名所略之。）
入江とアラハ。
松。まこも。あし。すとり。大井河。よと川。
萬 あし鴨のさはく入江の白浪のよにすみかたき我身なりけり 人丸

湊とアラハ。（海と川との行あひ也。湖にもあり。）
川。田。しほむかふ。袖。さはく。春。秋。
岸とアラハ。（海にも川にもあり。）
かた山。川。柳。住吉。三室山。山吹。ねなし草。浪打。姫松。忘草。（すみよしの岸に。）
干潟とアラハ。（しほのひたるあと也。）
遠。かゝみ。（同形。）
鹽とアラハ。
さす。みちたる。ひく。くむ。燒。かなひぬ。煙。からき。おつる。
潮とアラハ。
おつる。あかつき。かもめ。

十水邊

川とアラハ。
水なかれ。ふち。瀬。舟。いかたの類。又泪。思なといふ詞にて付へし。
河上とアラハ。
つら〳〵つはき。（万。）瀧。玉島。檜原。
水上とアラハ。
なみた川。もみちなかれて。
（新古）桴しよまてととはん水上はいかはかり吹山の嵐そ（資宗）
汀とアラハ。（汀の字の心は水際也。歌にはなきさとよめり。又寒汀鷺立といふ本文の心を。源氏に汀をすさきとよめる也。たとへは同所なれと事〳〵によりてもちいかへたるへし。）
森。とまや。千鳥。松。大井川。
なかれすとアラハ。
うき鳥。鴫。つる。
すさきとアラハ。
寒き。鷺。（かさゝきともいへり。源。）宇治川。
淵とアラハ。
そこひなき。ふかき。みとり。いはかき。竹川。のそむ。うき草。戀。涙。身をなくる。せになる。
瀬とアラハ。
あさき。山吹。（宇治。）くたり舟。（のほり舟。）あゆふす。さてさす。うれしき。あふうき。たきつ。ふむ。あた浪。
ふち瀬とアラハ。
あすか川。かはる。ふかき淺き。昨日けふ。
堤とアラハ。
池。柳。人目。（つゝむ心也。）つく。
柵とアラハ。

水。瀬々。ゐて。雲。かゝる。秋萩。鹿。袖。氷。山
川。(流もやらぬ。)

瀧とアラハ。
鏡。すかた。いひはなつ。中嶋。藤浪。水鳥。蓮。實。
から人。魚。

沼とアラハ。
岩かき。あやめ。杜若。うき草。みぬま。(不見万也。)
水こもり。

澤とアラハ。
山。野。田。雪氣。忘水。鳴たつ。ねせり。あし。つ
る。螢。ちはら。さまよふ。

井とアラハ。(いた井。山の井。さらし井。いは井。玉井。
石井。寺井。あか井なといへり。)
古 我門のいた井の清水里遠み人しくまねはみ草生にけり
萬 あさか山陰さへみゆる山の井の淺き心をわか思はなくに
古 むすふ手のしつくにゝとる山の井のあかても人に別ぬる哉
さらし井の木の下陰に雪ふれは衣手寒しせみはなけ共 俊頼

出湯とアラハ。
わく。鹽。つきもせす。藥(くず葉イ)。有ま山。伊與。くむ。石
の火。

氷室とアラハ。
山。まかせし水。冬の名殘。上なたらなる。田。富士
の雪。松か崎。高津宮。(仁德天皇を申。氷室の始也。)
堀百 つけのゝに大山守かをさめたる氷室は今もたえせさりけり

氷とアラハ。
とつる。うすき。關。くたく。むすふ。とく。ふむ。は
し。岩間。みきは。くさひ。水とり。

やり水とアラハ。
庭。まかせし。岩間。車。中河。(源。) 北山。(同。) 小
野。(同。) かゝり火。(同。)

懸樋とアラハ。
竹。山田。もる。たえ〳〵。山里。

(若水とアラハ。春のたつ。くむ。むすふ。とくる水。イ)

橋とアラハ。(うきはし。つきはし。ふなはし。)
わたる。たゆる。かくる。つくる。はしら。かよひち。
紅葉。かさゝき。舟。川。朽木。まきのいた。むもれ
木。なかれ木。思なから。(昔なからなと。) ふみ見る。
をたえ。夢。(うきはしに。)

岩はしとアラハ。
中たえて。苔むす。くめち。
拾 岩橋のよるのちきりも絶ぬへしあくる侘しきかつらきの神

たなはしとアラハ。(人の門なとにたなのやうにいたをわた

したる橋也。）

古 天川。わか門。わたす。

まてといはゝねてもゆかなんしゐて行駒の足をれ前の棚橋

泡とアラハ。（みなはとも。うたかたとも。水にも海のしほにもあはゝあり。）

消。雪。あたにちりにし花。川の瀬。

後 思川たえす流るゝ水のあはのうたかた人にあはてきえめや

新 わかの浦やおきつ塩あひに浮出る哀我身のよるへしらせよ

湊とアラハ。（庭のたまりたる水也。）

五月雨。雨。軒のしつく。行方しらぬ。數まさる。玉ゐる。

白浪とアラハ。（おきつしら浪。水の白浪。あさせ しらなみ。）

たつ。よする。うつ。かへる。ぬす人。

古 風吹はおきつ白浪たつた山よはにや君かひとりこゆらん

同 住吉の松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつ白波 貫之

後拾 おきつ風吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白なみ 經信

新古 ふりつみし高根のみゆきとけにけり清瀧川の水の白なみ 西行

古 天川あさせ白浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける 友則

さゝ浪とアラハ。（さゝら浪とも。小波をいふ也。）

池。しかの浦。

詞花 こほりゐししかのから崎うちとけてさゝ浪よする春風そ吹 匡房

みかは水とアラハ。（御溝也。禁中にかきらす。古今には春宮の雅院にてもいへり。）

櫻花。（古。）梅か枝。（源。）たき物のつほ。（同。）はをうかふ。あくた川。

清水とアラハ。

野中。關。おほろ。いた井。むすふ。くむ。礒。

みをつくしとアラハ。

しるし。ほり江の川。住吉まふて。（源。）

侘ぬれは今はたをなし難波なる身を盡しても逢んとそ思ふ

十一 地儀

土とアラハ。

あらかね。壁。あらを田をかへす。黃なる色。國。ありのかよひち。佛をつくる。すさのをのみことの歌。てる日にさくる。

つちくれとアラハ。（塊也。）

はと。やふらす。雨。

野原とアラハ。

草木の類。もしは里あれて。庭ふりてなと付へし。

野中とアラハ。

いほ。森。

古の野中の清水みるからにさしくむ物は涙也けり

田とアラハ。

つくる。うふる。もる。かる。かりの身。ほ。水せき入て。山。澤。岡。湊。濱。門。庭。外面。むしろ。槇。かけ樋。(下樋共。)ますらお。

春の田とアラハ。

返。うちをこす。なはしろ水。しめはへて。種。あせのかこひ。水くちまつる。かはつ鳴。くはひゝろふ。雨。歸鴈。

夏の田とアラハ。

早苗とる。ふしたつなへ。ひくしめなは。秋近き。五月雨。わさほのかつら。郭公。草かる。むろのはやはせ。

秋の田とアラハ。

守。かる。いなは。かりしほ。はつほ。はやわせ。をしね。おくて。おちほ。いなむしろ。ほやつくる。紅葉散敷。いほ。ひたのかけなは。なるこ。かかし。そうつ。(山田。)おとろかし。鹿。鴈。鳥おとろかす。ひたふる。(永也。)いねかて。すこ。(山田もる物也。)

冬田とアラハ。

秋はつる。をちほひろふ。ひつちほ。庵あれて。もりすつる。

霜さゆる冬田の木葉ふみしたきむれゐる鴫も秋をこふらし　後京

くろとアラハ。(山田のくろともいふ。)

村すゝき。ゆつる。あらそふ。

あせとアラハ。

豆懸。つたふ。かこひ。ほそ道。うき土。(西行。)なは。

いはほとアラハ。(只岩とも岩ねともいふ。同事のいさゝかかはれる也。)

なつる。苔のむす。あまのは衣。中。(いはほの中。)かとある。松。こすけ。(岩に。)つゝし。(同。)なてしこ。(岩ほに。)小松。(岩ねに。)山。瀧。うこかさる。

石とアラハ。

かたき。たつる。さゝれ。しつく。玉。とらをいる。さはる。かと〳〵し。火を打。碁。すころく。帶。

沙とアラハ。(まさことも。いさこととも。)

かす。霜。玉しく。はま。庭。河。白。

塵とアラハ。(ちりひちともいふ。)

あとをつく。うつはり。たつ。つもる。拂。ましはる。床。鏡。床夏。麓。山となる。花。紅。むらさき。木のは。松葉。千代に一たひ。枕。

關とアラハ。（山類にも水邊にも有。）
すへて。こゆる。へたつる。とをさぬ。ゆるさぬ。とまる。（とむるとも。）都。岩かと。杉村。し水。わらや。もる。中。戀。鷄。こなた。あなた。衣。人めしけき。なこそ。もし。はゝかり。忍。

關戸とアラハ。
あくる。さす。かたむる。

關屋とアラハ。
あふ坂。あはた山。（源。）打出のはま。（同。）車。（同。）旅すかた。（同。）石山まうて。（同。）不破山。板ひさし。

むまやとアラハ。
すゝ。をさ〳〵し。里のをさ。（長也。）すゝか山。水。あつまち。一たひ。よる山こゆる。あふ坂の關。すま。
（むまやのおさに。）

水むまやとアラハ。
すゝ鴨。すゝ船。たけかは。（源。）男踏歌。（同。）

十二國郡

〔杜とアラハ。しつく。しめなは。郭公。下草。うたゝね。いくた川。イ〕

〔林とアラハ。つる。山。かた山。紅葉をたく。かつら。竹。雲。鏡。イ〕

都とアラハ。
花。月。竹。四方。遠山。鳥。にしき。ふし。なら。しか。難波。うつす。すま。手ふり。玉しき。九重。たつみ。

國とあらは。
大八島。あきつす。あしはら。玉かき。みつほ。日の本。吉野。難波。はつせ。敷島。あはち島。（我國の初也。）六十餘の國の名。いつれにてもよりきたれるを付へし。

郡とアラハ。
鶴。（甲斐。）けふ。（奥。）忍。（同。）

ひなとアヲハ。
中ち。すまゐ。人。うくひす。

古　あまさかるひなに五年すまゐして都のてふり忘られにけり

もろこしとアラハ。（から國同事なれと。付合にかはれり。）
一夜とまり。人の國。吉の山。から衣。から紅。松浦さよ姫。袖ふる山。虎。

古　唐土も夢にみしかはちかゝりき思はぬ中そはるけかりける
伊勢　おほゝえす袖にみなとのさはく哉もろこし船のよりし計に
千　もろこしも天の下にそありと聞てる日の本を忘さらなん

とらふすのへ。（から國に。）舟をうかへて遊。（から人に。）

袖ふる事。（同。源。）

須ま
から國に名を殘しける人よりも行方しられぬ家居をやせん

此外百濟國をはくたらといふ。佛の御法の始て我か國にわたりし事は。百濟國より聖明王といひし王の佛の御かた經なとを奉しよりの事也。源氏若紫の巻にいへる。聖德太子のえ給へる金かうしのすゝも。くたらよりわたれるよしみえたり。又新羅國をはしらきといふ。神功皇后の御代始てしたかへ給て。御つきをそなへし也。此時しらきの君のちかひのことはに。東の日は更に西よりいて。あれなれかはの水はさかさまになかれ。河の石ののほりてほしとならんかきりは。御つき物をたいてんせしとこそいひしか。末の代にはさもなきこそ心もとなけれ。抑みちひの珠といふ事は地神第二代の時の事なるを。神功皇后の三韓をたひらけ給へる事に申つたへたるは。あまやりをもてあやまりをつたへたる事也。高らいをはこまといふ也。源氏きりつほの巻にこまう人にあひて相せられし事。花のゑんにこまう人に扇をとられてなとかけるは。石川の歌の事をかやうに取なしてかけり。舞樂の左はから樂。右はこまかくとて。笛なともかはれる也。胡の國は北にあるゑひす也。王昭君か胡國の王のきさきになりて行とき。馬の上にて琵琶をひきし事あり。又蘇武といひし物胡の國にとらはれて。かりのつかひに書を事つけし也。とこ世の國とは仙境をいへり。蓬萊山と書ても。日本紀にはとこよとよませたり。又浦の古事をも。とこ世と歌にはよめり。又たちまもりといひし人花橘をもてこしは。とこ世の國よりもてこし也。それをはときしくのかくのみといへり。如何様とこ世といふは。あら海をへたてゝ。世はなれたる國なるへし。八雲御抄には胡國をとこよとしるされたり。

〔あつまとアラハ。鳥かなく。こと。關。野。春くる方。イ〕

〔つくしとアラハ。紫。くし。心。にし。北野の神。もしの關。玉かつら。白雲のたな引方。イ〕

十三居所

家とアラハ。

つくる。風。はなれて。梨。犬。くものい。かたつふり。

殿とアラハ。

瀧。釣。まひ。木のまろはしら。

催馬樂
このとのはむへもとみけりさき草の三は四はに殿作りせり

窓とアラハ。

梅。竹。螢。書。燈。雨。打。あくる。北。

戸とアラハ。
たつる。あくる。さす。たゝく。（此等の詞いつれの戸にてもいふへし。）櫻。松。柴。竹。

門とアラハ。
松。杉。桑。よもき。むくら。はしら。柳。法。あまねき。たつるなといふ詞は戸におなし。

庭とアラハ。
柴。をしへ。あした。うへ木。つき山。玉しく。

古 さとはあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋のゝら也

外面とアラハ。
小田。あふち。道。國。

故里とアラハ。（古郷にしな〳〵あり。古き都を古さとゝいふ。又今住里のふりたるをも云。又旅に出て我かたを古郷ともいふ。）
あさちか原。庭あれて。軒あれてなと付へし。荻。かり。なら。しか。芳野山。すま。（此外尙多。）宿もる雨。

隣とアラハ。（人の家の五までをはとなりといふ也。）
中かきをへたつる。近きあたり。はる。軒をならふる。宿。夕かほの宿。（源。）ぬかつく。（同。）きぬたの音。（同。）はなひる。

垣とアラハ。（垣ほとも。かきねとも。又中垣。袖かき。松垣。竹垣。草垣なと云。）
へたつる。かこふ。八重。一重。隣。山かつ。（かきほに。）青つゝら。（同。）

蘆垣とアラハ。
まちかき。吉野山。難波の里。かきわけて。うたふ。（催馬樂。）藤のうらは。（源。）夜をへたつる。年へにけり。（催馬。）この家。（同。）

［八重垣とアラハ。出雲。梅。つくる。雲。イ］

籬とアラハ。
鳥。たけ。霞。霧。雲。田。きく。草花。

蘆屋とアラハ。（あしのやともいふ。）
里。たく火。海。（あしやに。）あまのいさり火。世にすむ。

伊勢 蘆のやのなたの鹽やき暇なみつけのを櫛もさゝすきにけり

とまやとアラハ。
舟。雨。浦。海人。

岩屋とアラハ。
苔の衣。雨のをとせぬ。明石。

金 草の庵を何露けしと思ひけんもらぬいはやも袖はぬれけり 行尊

かはらやとアラハ。

下たく煙。軒の松。寺。賀茂。
あつまやとアラハ。
あまそゝき。(さきにしるす。) 宇治。(源。) やりとをさして。(同。) ひたのたくみ。(同。) 車。(同。) よもきのまろね。(同。)
新 さしこむる律やしけきあつまやの餘程ふるあまそゝき哉
〔ふせやとアラハ。木曾。はゝ木々。しつ。イ〕
〔火燒屋とアラハ。衛士。野宮。宮幹。イ〕
柱とアラハ。
宮。うつほ。まろき。まき。帆。はし。霜。たつる。めくる。
まき柱とアラハ。
人にゆつる。(源。) ひはた色のかみの文。(同。) やとる水。(同。) ときはの森。(同。)
源 今はとて宿かれぬともなれきつるまきの柱は我を忘るな
同 なれきとは思いつともなにゝより立とまるへきまきの柱そ
床とアラハ。
夜。うつら。ふすゐ。むなしき。ちり。山。
ゆかとアラハ。
玉。あならむすふ。(坐禪事。)
新 ゆかちかしあなかまよはの葢夢にも人のみえもこそすれ　基俊

壁とアラハ。
ぬる。うかつ。むかふ。いつまて草。きり〳〵す。みなしこ草。隣。石の文はこ。ともし火をそむる。耳あり。
庵とアラハ。(いほり共いへり。)
むすふ。かり。さす。草。柴。小田守。山下。かりほ。
樞とアラハ。
なは。松。たけ。うるをす雨。
甍とアラハ。
ならふる。やふれて。寺。
室の戸とアラハ。
北山。(源。) ひしり。とつる。いは。さしこもる。入海。たかの山。
ついちのくつれとアラハ。
すまのなか雨。(源。) あつまや。(同。) 池の水かけ。(同。) ふみあけたる。(伊勢。) わか通ち。(同。) せきもり。(同。)
園とアラハ。
竹。桃。鹿。こてふ。花。きく。から神の社。

十四草類

春草とアラハ。
もゆる。(下もえとも。) 雪ま。霞かくれ。野を燒煙。

緑。雨。
若草とアラハ。
山。駒のいはゆる。もゆる以下の詞春草に同し。　ねよ
けにみゆる。(伊勢。)
古今 春日野はけふはな焼そ若草のつまもこもれり我もこもれり
夏草とアラハ。
事しけき。むすふはかり。さゆりは。玉まくくす。のし
まかさき。かりにくる人。
秋草とアラハ。(此付合不見。不審。)
冬草とアラハ。
霜枯。人目かれたる。霜の花。露氷る。殘菊。
竹とアラハ。(連歌には竹は草木に二句へたてゝ付也。)
世。(夜とも。)ふし。川。笛。ち色。しのへ。草木。伏
見の里。またらなり。とよら。たゝす。つりさほ。窓。
古 木にもあらす草にもあらぬ呉竹のはしに我身は成ぬへら也
竹の子とアラハ。(たかんなともいふ。)
雪の中。親思ふ人。(孟宗か事也。)よこふへ。(源。)ち
かき林。(同。)山にほれるところ(野老)。(同。)いとけなき
子。(たかんなとアラハ。)
源 うきふしも忘すなから呉竹のこはすてかたき物にそ有ける(かはる大将事也)
古 今更になに生出ん竹の子のうきふししけき世とはしらすや

竹の林とアラハ。
源 世中にふるかひもなき竹のこはわかへん年を奉る也(花山院)
七のかしこき人。寺。酒。とら。
篠とアラハ。(小さゝ。玉さゝ。小篠か原。さゝのくまなと
いふ。)
夜。世。ふし。深山。あられ。岡へ。庵。さゝのくまと
は。たゝさゝの生たる所也。宇治はし姫の巻にあり。又
ひのくま川によめり。
若菜とアラハ。
つむ。雪間。君かため。袖ふりはへて。都は野へ。と
ふひの野守。いく田の小野。(此外名所數不知。)卯杖つ
き。)
薺とアラハ。(からなつな。)
庭に生る。あをし。垣ねの中。都の木末。
芹とアラハ。(ねせり。ふかせり。)
つむ。ねにあらはれて。澤。御かきか原。(俊頼歌。)つ
はくらめ。君に奉る。あらふ。
ゑくとアラハ。(ゑくのわかなと云。)
つむ。山さは。袖ぬれて。み山への里。(歌。)
わらひとアラハ。(さはらひ。初蕨。下はらひ。かき蕨。)
紫のちり。物うき。折。ほとろましり。かしこき人。草

のけふり。(源。宇治。) つく〳〵しを籠に入て。(源。宇治。)

早 岩そゝくたるひの上のさ蕨のもえ出るよにあひにける哉

母子草とアラハ。

つむ。阿倍市。(するか。) 三日のよのもちゐ。よと元イの。

杜若とアラハ。(連歌には夏の物也。)

春のへたて。(垣によせていへり。) きぬにする。(万。)

紫。池。澤。ぬま水。かこふ。八橋。(三川也。在中将から衣の歌によめる所也。)

菫とアラハ。(つほすみれとも。すみれくさとも。)

紫。つむ。あれたるやと。一夜。をのゝしはふ。春のかたみ。野をなつかしみ。

山吹とアラハ。(八重山吹。)

花色衣。いはぬ色。とへとこたへす。口なし。かはつ鳴。ゐての里。(名所猶多。) あかたの井戸。とのはしけき。

藤とアラハ。(藤浪。藤かつら。)

浪。紫。松。かゝる。かさし。杜。鳥井。池。たこの浦。三笠の森。ときはの橋。(此外名所猶多略之。) かけなる海。夏かけて。廊をめくる。をよはぬ枝。(源。) 花のあたり。(同。) 北。ふたらくの岸。今そさかへん。

藤のうら葉とアラハ。

葦のまへ。(源。) まつよりすきて。(同歌。) たをやめの袖。(同。) 蘆かきうたふ。(同。) まつにちきれる。(同。)

後 春日さす藤のうら葉のうらとけて君し思はゝ我もたのまん

源 いくかへり露けき春を過しきて花のひもとく折にあふらん

葵とアラハ。(もろかつらとも。もろは草とも云也。かけさすかたの歌はからあふひの日のさすかたにかたふくをよめり。別の物なるをひとつに用たる也。)

二葉。その神山。みあれ。かくる。神のかさし。みす。やそうち人。いつきの宮。かりねののへ。

堀百 あふひ草てる日は神の心かはかけさす方にまつなひくらん 廿後

ふかみ草とアラハ。(牡丹也。)

廿日。花のもと。(歌。)

あやめとアラハ。(あやめ草とも。又さうふとも。花さそふ共いへり。)

ひく。かる。ね。草の庵。郭公。五月雨。軒のしつく。池。ふく。うちしめり。かりねの床。枕。かほる。ぬまの岩垣。よとの。かつらにかくる。いつか。(同。) ま弓のひおり。さ月。くす玉。水のほとり。(源乙女にさうふ。) 駒もすさまぬ。(源。) わかこま。(わかこも也。

源。）

（西行）櫻ちる宿をかされるあやめをは花さらふとやいふへかる覽

まこもとアラハ。（みこも。すこも。すかこもといふ。）

かる。みたるゝ。枕。淀の澤水。ほす。

（萬）陸奥のとふのすかこも七ふには君をねさせてみふに我ねん

とふに兩說あり。とふは郡の名也。又十ふにあみたるとい

ふ儀有。

〔早苗とアラハ。（初なへとも云也。）とる。五月雨。竹田。

いた舟。田子。むろのはやはせ。

（堀）はつなへにうすの玉えをとりそへていくしまつらんとし

つくりみに俊頼イ〕

はなかつみとアラハ。

かる。あさかのぬま。かつみる人。

蓮とアラハ。（花はちす。はちすのうきはなといふ。）

胸。池。糸。かつまたの池。（はちすなし。）うてな。に

こりにしまぬ。

（拾）けふよりは露の命もおしからすはちすの上の玉と契れは

（古）蓮はのにこりにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく

（後）蓮はの上はつれなきうらにこそ物あらかひはつくと云なれ（貝也）

（司）蓮はのはいにそ人は思ふらん世にはこひちの中におひつゝ

（池中蓮化大如車輪の心を）むまれはやめくるとならは小車の輪にまかふなる池の蓮に（俊頼）

撫子とアラハ。

二は。しめゆふ。ませ。からのやまとの。（源。）この花

その。（源。）親の心。玉かつら。もとのねさし。（源。）

（源はゝき、）山かつの垣ほありとも折〳〵に哀をかけよなてしこの露

（同常夏）撫子のとこなつかしき色をみはもとの垣れを人や尋ねん（そせい）

（古）我のみや哀と思はん日暮しのなく夕かけの山となてしこ

常夏とアラハ。（撫子同物也。）

花は常はの。から國にをれる錦。わか獨りぬる。

（古）塵をたにすゑしとそ思ふ咲しよりいもと我ぬる床夏の花（躬恒）

（源はゝき、）打はらふ袖も露けき常夏にあらし吹そふ秋はきにけり

夕顏とアラハ。

宿。はしとみ。（源。）ゑみのまゆひらけたる。（源。）遠

方人。（同。）されたる戸口。（同。）こかしたる扇。（同。）

しつか家ゐ。

（源）心あてにそれかとそみる白露のひかりそへたる夕顏の花

（同）折て社それかとも見めたそかれにほの〳〵みつる花の夕顏

あちさゐとアラハ。

よひの間。花のよひ〳〵。月。

〔あちさゐの下葉にすたく螢をは四ひらの數のそふかと

そみる定家イ〕

百合とアラハ。（さゆり。ひめゆり。くさふかゆり。さゆ

りは。ゆり花。）
萬 野鵐か崎。（さゆりは。）ともし火。
夏の野の茂みにさける姫ゆりのしられぬ戀はくるしき物を
藍とアラハ。（山あゐ。からあゐ。）
やしほそめたる。かくる。ほす。あほき。から。つか
ね。はたけ。しかまの里。（播磨。）
櫻あさとアラハ。（あさて。あさのは。なつそなといふ。）
みそき。よもき。たち枝。おふのうらす。
新古 櫻あさのおふの下草しけれたゝあかて別し花のかたみに
萬 庭にたつあさてかりほしゝきしのふあつま女を忘給ふな
萬 夏そひく（夏麻引）うなかみ（上總）潟の沖つすに鳥はすたけと君は音もせす
千 けふみれは麻の立枝にゆふかけて夏みな月の祓へをそする　寂蓮
みそきすとしはし人なす麻のはも思へは同しかりそめの世そ　定家
萩とアラハ。（秋萩。糸萩。村萩。小萩。初萩。萩原。）
紫。紅葉。鹿。古え。本の心。鴈の涙。錦。秋の田のか
り庵。花すり衣。高まと。（野。）宮木野。（名所猶多。
略之。）
［下野とアラハ。（五月にさく花也。）國の名。しめちか原。
（下野國。）なす野。（同。）女によせてもよめり。イ］
女郎花とアラハ。
うしろめたく。おほかる。男山。一時。妻こふる鹿。

さか野。花のすかた。馬。（遍照。）むせる粟。
古 名にめてゝおれる許そ女郎花我おちにきと人に語るな　僧正
藤袴とアラハ。（らにといふ。源氏にはらんの花とかけり。）
紫。きてぬきかけし。さゝかにの糸。のとに。夢。白
露の玉のつかり。かり（らイ）衣。すそ野
古 秋風にほころひぬらしふちはかまつゝりさせてふ蟋なく
源 おなしのゝ露にやつるゝ藤袴哀はかけよかと許も
槿とアラハ。
日影待間。朝霧。面影淺。しのゝめ。千年經松。（つゐ
にくちぬる。）あたなる。うつるてふ名。（源夕顔。）さ
しぬきのすそ。（同。）露けき花の中。（同。）なさけしら
ぬ山かつ。（同。）有か無か。（同。）かれたる花。（源。
夕顔。）きりの籬。（同。）露をおとさて。（同。）
源 見し折の露わすられぬ槿の花のさかりは過やしぬらん
朝かほを何はかなしと思ひけん人をも花のさこそ見るらん
紫菀とアラハ。（しをにと云。鬼のしこ草は紫菀の名也云々。）
若紫。色なき露。うすものゝ裳。（紫菀の色に。）
くすとアラハ。（まくす。くす花。くすかつら。）
恨る。かへる。はふ。神のいかき。秋にはあへす。岡。
玉まく。みね。秋風。風さはく。
蔦とアラハ。

もみぢ。下道。庵。うつの山かつら。
新古　袖にも今や衣をうつの山夕霜はらふつたの下みち　定家イ
荻とアラハ。
秋風。秋とつけつる。そよぐ。そゝや。そよとこたふ
る。濱。軒ば。古郷。
源うつせみ　ほのかにも軒ばの荻のむすばずは露のかことを何にかけまし
ほのめかす風につけても下荻のなかばは霜に結ぼゝれつゝ
薄とアラハ。(しのすゝき。花薄。村薄。一村すゝき。糸
薄。しのゝおすゝき。しのすゝきはほに出ぬをいふ也。薄
の歎合。穂に出る。みたるゝ。)
小花とアラハ。(初小花。)
なびく。まねく。袖。草の袂。うつら。あしけの駒。
まのゝ入江。浪よる。かりふき。
かるかやとアラハ。(たかゝや。かや原。ねしろたかゝや共
云。)
みたるゝ。したをるゝ。せきもり。面影。(まのゝかやは
らに。)野分。(源。)文。(源。)いつくの野へ。(同。)
りんたうとアラハ。(りうたんとも書也。)
かれたる下草。(源あふひ。)紫。武蔵野。
菊とアラハ。(白菊。八重菊。村菊。そか菊と云。まさり草
ともいふなり。)

一本。紫。うつろふ。霜。秋なき時。ねさへかれめや。
おひせぬ秋。花待とを。ぬれてほす。山ぢ。白妙の袖。
なか月。九日。露つもりてふちとなる。つむ。又さく
花。なかれを汲。菊名所。(みなせ。大さはの池。紫野。
たみのゝ島。吹上。大井のとなせ。さほ川。あふさかの
關。網代濱。)わたきする。盃。霜。
月くさとアラハ。(露草也。鴨頭草とかく。)
うつりやすき。花たの帶。
古　月草に衣はすらんあさ露にぬれての後はうつろひぬとも
たてとアラハ。(ほたてをいふ。)
くれない。ほ。からき。水。犬。虫。かはへ。こまもす
さめぬ。
菅とアラハ。(小すけ。いはこすけ。白すけ。)
なかきね。深山。しのき。(すかのねに。)ありま。あさ
は野。(たつみはこすけ。)石もと。しのや。鷄。笠。
莚。
あさ茅とアラハ。(あさち原とも。あさちふともいふ。)
あれたる庭。色つく。やたの野。(越前國。)
あさちふとアラハ。
小野のしの原。宿。
新古　里はあれぬ月やあらぬと恨みても誰あさちふに衣うつらん　良經

あさちふや袖に朽にし秋の霜忘ぬ夢をふく風哉通光

つはなとアラハ。（ちはなの事也。春の物也。夏もよめり。）
みちのしはふ。春雨。ぬく。荒たる宿。

蓬とアラハ。（よもきふとも。）
麻の中。すくなる。かみ。門。しま。杣。あやめ。まろね。車をつくる。宿。（よもきふに。）もとの心。（源。）
露をはらふ。むまのふち。（源。）あまそゝき。（同。）みかささふらふ。（同。）

菱とアラハ。
つる。（うきつる。）いけ。沼。とる。ひとへ。角。

うき草とアラハ。
さ月。ねをたえて。さそふ水。水の面。夢。池。沼。ふち。浪の花。（花の浪イ）うへはしけれる。

玉裳とアラハ。（おきつも。かるも。たくもなといふ。）
藤。あまのかる。よるかたなき。うき浪。おき。川せ。かつく。床。すむ虫。（かるもに。）結ひあけて。磯。
鷹。煙。（たくもに。）ねくたれかみ。（歌。）さる澤の池。（同。）

芝とアラハ。（しはふとも。芝草とも。）
道。小野。（しはふに。）砌。野かひの駒。

忘草とアラハ。（忘るゝ草とも云。是に二種あり。忍ふを忘草と云。又萱草をわすれ草と云。住よしのきしのわすれ草は是也。）
古軒は。しのふ。心のたね。わかしたひも。
住吉とあまはいふともなかゐすな人忘草おふといふ也仙覺

忍草とアヲハ。
ふるやの軒は。昔。軒のいたま。ほに出る。すり衣。みたるゝ。みちのく。

蘆とアラハ。（みたれあし。しほれあし。なかれあし。むらあし。）
世。夜。さはる。かり。うきふし。夏かり。難波江。鴨。燒火。めもはるに。

苔とアラハ。（さかりこけ。）
衣。筵。岩ほ。松かね。朽木。しつく。

朮とアラハ。（うけらか花。）
武藏野。さきてひらけぬ。

あをつゝらとアラハ。（はまつゝら。夕つゝら。）
なかき。くる。籠にくむ。駒のつまつく。山ちのかき（かつイ）ね。（はイ）

さねかつらとアラハ。
くる。ゆふてもたゆき。山。あふさか山。

まさきのかつらとアラハ。

と山なる。色つく。くる。松にはふ。
玉かつらとアラハ。（女かくる 玉かつらとかよはして付へし。）
はふ木あまた。くる。花さく。みならぬ。つくし。（源。）
夕かほ。（同。）
ひかけ草とアラハ。
かつら。かくる。あまてる神。かさす。をの山。
［新古］あかねさす朝日の里の日影草とよのあかりのかさし成へし
芭蕉とアラハ。
風吹はやふる。あふき。古寺。庵。
葎とアラハ。
八重。門。さしこもる。さはらす。
［伊勢］思ひあらは葎の宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも
［拾］八重葎しけれる宿のさひしきに人こそ見えね秋は来にけり　恵慶
ぬなはとアラハ。（ねぬなはともいふ。）
うき。くる。みたるゝ。なかく。池。ぬま。
羊蹄（イチシ）とアラハ。（いちしはともいふ。）
はなにさく。みちのく。
はまゆふとアラハ。
かさなる。もゝへ。いくへ。三熊野の浦。
みくりとアラハ。（みくりなは。）
くり返し。ひく。かくれぬ。ねにたてゝ。さ山のいけ。
つくまえのぬま。
［源］しらす共尋てしらん三島江におふるみくりの筋はたえしを
［同］数ならぬみくりや何の筋なれはうきにしもかくねをとゝめ劔
荊（チトロ）とアラハ。
かみ。みち。藪。
とくさとアラハ。
かる。みかく。その原山。
〔さしも草とアラハ。しめちか原。いふき山。もゆる。イ〕
もゝよ草とアラハ。
父母。かとのしろへ。いゑのその。しちのまろね。
なきとアラハ。（水なきともいふ。春の物也。）
まく。つむ。ぬま。さは田のあせ。はなさく。あつ物。
なのりそとアラハ。（神馬藻也。）
いそかくれ。浪にゆらるゝ。きのまろ殿。（名のるによせて付へし。）しきつの浦。
みるめとアラハ。
かる。いせのあま。朝な夕な。大よとの浦。
うきみるとアラハ。
あしやの里。みなみの浦。
わかめとアラハ。

いそ。かる。春の日にほす。こゆるきの磯。

くはいとアラハ。

ひろふ。あら田。

瓜とアラハ。

五色。あをき門。水にうかむ。ほそ。かほ。つる。となりかくなり。こまのわたり。つくる。なつめ。やまと。から。からす。

おもたかとアラハ。

いけ。

栗とアラハ。

女郎花。むせる。箱根山。春日野。まく。飯。

十五木類

うへきとアラハ。

庭。たね。つき山。玉。

若木とアラハ。

梅。櫻。ねこしてうつし。花咲初る。

老木とアラハ。

古郷。昔を忍ふ。松。苔むす。くつる。

くち木とアラハ。

柚。み山かくれ。心の花。はし。

舟木とアラハ。

とふさたつ。足から山。紅葉こかるゝ。のと山。きる。

うつほ木とアラハ。

くまの住山。こけのすたれ。(うつほの物語。)はしら。

やとり木とアラハ。(やとり木はほやを云。又源氏にはつたを云。是も木にかゝれる故也。)

ほや。桑。紅葉。つた。(源。)木たに。(虫也。源。)

源 やとり木と思ひ出すは木の本の旅ねもいかに淋しからまし

同 荒はつる朽木の本をやとり木と思ひをきける程のはかなさ

はゝきゝとアラハ。

そのはら。ふせや。ありとはみえてあはぬ。紅葉しにけり。心をしらて。(源。)あるにもあらぬ。(同。)中川の宿。

浮木とアラハ。

天河。のる。かめ。あへる。舟。

むもれ木とアラハ。

瀬々。あらはるゝ。名取川。たに。はし。くつる。

黒木とアラハ。

鳥井。ませ。なら山。數珠。

常盤(ときは)木とアラハ。

森。はかへせぬ。松杉(檜イ)の類。春秋しらぬ。

草木とアラハ。(草と木と也。)

竹。野へ。山科の宮。野山。佛のたね。古郷の庭。花。
もみち。
しほりとアラハ。
新古 山道。しはとる。
芳野山去年のしほりの道かへてまたみぬ方の花を尋ん 西行
梅とアラハ。
雪。鶯。誰か袖ふれし。色香。月。山里。軒は。柳。垣
根。窓。あるし。春や昔。はやくおつ。南の枝。櫻。八
重。
紅の梅とアラハ。(二月盛の物也。)〔の末イ〕
色こき花。日影。匂ふ。此外紅のよりあひを梅にとり合
て料簡すへし。
冬木の梅とアラハ。
春待。ふりをける雪。
櫻とアラハ。(山櫻。庭さくら。遲櫻。初櫻なと云。)
雲。雪。八へ。瀧。山。(深山とも。)
樺櫻(カハ)とアラハ。(かには櫻とも云ふ。)
花のとちめ。ふゑ。ひつかは。霞の中。やはきの里。
ひものゝ里。まく箍。
櫻戸とアラハ。(山さくら戸とも。)
山。雲。とつる。あくる。あるし。しほり。雪とふる。
あふさか。
萬〔あし引の山櫻戸をあけおきて我まつ君を誰かとかむるイ〕
新勅〔名もしるしみねの嵐も雪とふる山櫻戸のあけほのゝ空定
家イ〕
同〔あふさかの山櫻戸の關守は人やりならぬ花やみるらん家
隆イ〕
櫻かりとアラハ。
かた野。花の雪ちる。しらおのたか。
千 櫻かり雨はふりきぬ同しくはぬるとも花の陰にかくれん
〔又やみんかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちる春の明ほの俊
成イ〕
花とアラハ。(初花。花さかり。)
春の植物には梅。柳。櫻なと有へし。似物には雲。雪。
瀧なと可付之。ちる。うつろふ。さかり。身。心なと皆
花によせある詞也。一々にしるすに不及。
柳とアラハ。
糸。煙。まゆ。玉。川。岸。なひく。かみ。鶯。みと
り。門。
青柳とアラハ。
糸よりかけて。梅花かさ。うたふ。(催馬樂。)鶯のは
風。かつらき山。

桃とアラハ。
物いはぬ。盃。紅。ふる里。やよひ。みかの原。
拾 三千世へてなるてふ桃のことしより花さく春にあひにける哉
李とアラハ。
菩園。頂ほゝ。からふり。(李下不正冠といへり。) 雪。山かつ。庭にある。はたれ雪。
躑躅とアラハ。(いはつゝし。をかつゝし。下つゝし。しらつゝし。)
紅そめ。山下てらす。大江浦。みほの浦。(白躑躅。) 入日さす。山のをかへ。よしの川。羊。火。
卯花とアラハ。(初卯花。うつきなといふ。)
かきね。雪。月。ぬのさらす。郭公。白ゆふかくる。浪。玉川の里。神山。白川關。
橘とアラハ。
古郷。昔。五月まつ。袖の香。郭公。五月雨。風。軒は。かけふむ道。ところの國。
万 橘はみさへ花さへそのはさへ枝に霜をけすまし常磐の木 にしてイ
花柑子とアラハ。(源氏にも伊勢物語にも柑子といふ詞あり。)
樗アフチとアラハ。
この比はいせにしる人音信てたよりられしき花からし哉 慈円

外面。とのへもる身。北野。岡へ。かもの川原。紫。時雨。五月雨。
桐とアラハ。
おち葉。井。すむとり。きざむ。一は。壺。
新古 桐の葉もふみわけかたく成にけり必人を待となけれと 式子
紅葉とアラハ。(初紅葉。下紅葉。うすもみち。)
染。一入。千しほ。露。時雨。てる。錦。たつた姫。(山姫。) 霜。石かき。色。
柞とアラハ。
森。さほ山。泉川。いはたのをの。
まゆみとアラハ。(しらまゆみ。)
岩かき。ほそかは。あたちの原。秋霧のたなひく。
かへてとアラハ。(若かへて。青かへて。)
紅葉。ちとせ。かしは木。枝さしかはす。(源。) 手折枝。うつろふ色。
はしもみちとアラハ。
もすのゐる。たち枝。かたのゝ原。
かきのはとアラハ。
本。文をかく。山。しふ。
ひさきとアラハ。
をのゝあさち。きよきかはら。片山陰。はま。

はまひさきとアラハ。
須磨。小しま。
柱とアラハ。
柳。一枝。入江。紅葉。あふひ。川。神山。みあれ。おひ風。月。
梶とアラハ。
とる。とわたる船。(天川。) 露の玉つさ。七。
椎とアラハ。
柴。紅葉。ひろふ。車。身にしむ。秋。(源。やとり木。)
家にてはけにもる飯を草枕旅にしあれはしゐのはにもる
松とアラハ。
松は山にも浦にも野にも庭にもいつくにも有物也。常磐なる色なから。春はみとりの色一入まさり。夏は茂る梢に枝をましへ。秋は下葉ことに見所有。冬はつゐに紅葉ぬおのかみさをゝあらはす。雪の比にも成ぬれは。又たくひすくなき木たち也。あたゝかけにふりつみたるも。下おれたるも。皆見所あらすと云事なし。ちりうせぬとはいひならはし侍れと。落はは有物也。其心を得て連歌には付へし。
一松とアラハ。
みのゝを山。なるお。しかのからさき。(一木の松と云同事也。) たくひなき。
そなれ松とアラハ。
すま。たかしのはま。いらこかさき。(いせ。) あらゐの崎。(武蔵。)
松かねとアラハ。
枕。浪うつきし。あらはれて。
まきとアラハ。(まき柱なと云也。眞木也。よき木を云。まきのはなと云は木の名也。されとまきといへは同より合にても付へし。)
柱。板戸。杣。しけ山。つきはし。霧立のほる。あらそふ。島。
椿とアラハ。
玉。(しら玉共。) はま。つら〳〵。二たひ。かけあらたまる。八千とせの春秋。八みね。葉かへぬ。つるのこほり。高砂。いつのたけ。
杉とあらは。
しるし。門。みわの山。逢坂の關。あや。庵。坂。二本。(はつせ川。) 又もあひみん。ふるの社。いなり。
檜原とアラハ。
老。くもる。川上。杣。みわの山。かさしおる。
柏木とアラハ。

森。（三笠山。）はもりの神。ならしかほなる。すゑあへる。（源。）神のしるし。（同。）戀しぬる。（同。衛門督事。）玉。ならのは。なかめ。この手。うちつけなるとのは。（源。）岩ねの松。（同。）

柏木の歎は、衛門督の身まかりて後。夕霧の大將の一條の御息所によめる也。岩ねの松の事は。其まきにはあれとも。かほる大將の事にて別の事也。されとも柏木とあれは。いはねの松なとを付きたれり。是は木と木となれは。さのみちかはさる事にや。

つきの木とアラハ。（ゆつき。いはひつきといふ。）

もゝ枝。（はつせ。）弓きる。

ならの葉とアラハ。

柏。時雨ふりをける。名におふ宮古事。

後拾　榊とる卯月になれは神山のならのはかしはもとつはもなし　好忠

梨とアラハ。（花は春。實は秋也。つきなし。夏なし。つまなし。）

つま。からふり。壺。かたえ。なる。身。

新古　片枝さすおふのうら梨初秋になりもならすも風そ身にしむ　宮内卿

山なしとアラハ。

花。雪。雲。のかれんかたなき。（あけまき。源。）

世中をうしといひてもいつくにか身をは隱さん山なしの花

〔櫻あさのおふのうらなみ立かへりみれともあかす山なしの花イ〕

榊とアラハ。（まさかきと云。いせには玉くしのはといふ。）

ねこして。おる。うたふ。かくはし。天のかく山。かみ山。野の宮。かゝみをかくる。ゆふして。しめの外。（源。）

なきのはとアラハ。

あへ物。みくまの。

桑とアラハ。（桑原とも。）

こきたれて。かふこ。（まゆ。）弓。園。

かしとアラハ。（かたかし。しらかし。かし原。）

田上山。を車のわ。花。

くぬきとアラハ。（ゝぬき原。ふしくぬき。わかくぬき。）

さほの川原。色つく。おほ川のへ。

柴とアラハ。（ふし柴。ならしは。下しは。しい柴。）

ほす。取。かる。戸。（庵とも。）煙。舟。車。ゆふ。すま。しは〳〵。

樒とアラハ。（しきみか原。）

つむ。墨染の袖。花。あたご山。一夏。あかさら、ときあをにひのかみの文。（源わかな。）あまねき門。（同。）曉おき。山路の露。

かへの木とアラハ。
み。もり。ひろふ。三室山。葉かへぬ。杜。
むろとアラハ。
いそへ。とつる。とほそ。ともの浦。(備後。)
かうかとアラハ。(合歓木也。ねふの木と同也。)
かたみ。大内山。身ならぬ。
ゆつりはとアラハ。
折。かさす。山人。春をむかふる。なつる。老のしほみ。
あらくま山。御井。おく山。
りくとアラハ。
いそ。こまつまつく。神さふる。ね。
むくとアラハ。
もゝしきの大は。おちは。みかく。

十六鳥類

鳥とアラハ。(鳥は諸々の鳥也。又鶏をも鳥と云。句により
てかはるへき也。)
深山。花。むれゐる。曉。雲に入。跡。別。あつま。(鳥
かなくに。) 林。かへる。おとろく。
とふ鳥とアラハ。
あすか川。めをすくる。はや舟。
はなち鳥とアラハ。
籠。いけ。
百千鳥とアラハ。
我門。鶯。
古 もゝ千鳥さえつる春は物ことにあらたまれ共我そふり行
貌鳥とアラハ。(一説ふくろふ子也。一云。うつくしき鳥也。)
月。花。春野。聲ほのかなる。霞かくれ。草のねしけき。
やとり木。(巻一名。) しけみを分て。(源。やとり木。)
かほよ鳥とアラハ。
かけみる。むこ川。山河のゐくゐ。大井川。
浮鳥とアラハ。
をしかも。池。川舟。床。下やすからぬ。
すとりとアラハ。(洲の鳥也。)
入江。むこ川。
鶯とアラハ。(初鶯。)
たにより出る。梅。柳。朝な／＼。さそふ。たけ。わか
き。老。ひな。花の宿。またるゝ物は。こほれる涙。た
かきにうつる。
郭公とアラハ。(初時鳥。山郭公。)
鶯。(かいこの中にあり。) 卯花。花橘。山。村雨。月。
雲間。一聲。五月。なきふるす。忍ね。ね覺。森の雫。
涙なそへそ。

古 けさきなきいまた旅なる時鳥花橘に宿はからなん
新古 きかすともこゝをせにせん郭公山田の原の杉の村たち 西行
雁とアラハ。（初雁。とふ雁。鳴かり。衣雁かね。）
　玉つさ。舟。かす。涙。雲井。衣。田。落る。とち。友よふ。都。思つゝぬる。とこよ。古郷。
帰雁とアラハ。（別の雁とも。）
　みちゆきふり。花なき里。古郷。こしの海。三芳野の里。たのむのさは。別。
雉（きゝす）とアラハ。
　春の野。子を思ふ。霞かくれ。野を焼く煙。しらをのたか。かた野。つまこふ。
きしとアラハ。
　ひつきのかり。ほろ〳〵。小鹽山。（源。）御幸。（同。）一枚。梅の枝。時なるかな。見えかくれ。
新古 雪深き小鹽の山にたつきしのふるき跡をもけふは尋ねよ（んイ）
雲雀とアラハ。
　春の野。あかる。おつる。あはつ野。しはふ。馬の毛。網。
燕とあらは。（雁に行ちかふ物也。故かへるつはめは秋也。つはめともつはくらめともいふ。）
　ならふ。うつはり。かたる。せり。ねたむ。かり。行ちかふ。石。こやす貝。巣。
よふこ鳥とアラハ。
　人待よる。社頭の声。いとか山。待かね山。しのたの森。なゝしの岡。
古 遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥哉
水鶏とアラハ。
　たゝく。まきの戸。夏の夜。木末に。あかし。
鵜とアラハ。（しまつ鳥とも。まとりとも云。）
　つかふ。石。あらいそ。魚をとる。舟。あへ島。（津国なる。）うなての杜。
鵜川とアラハ。
　たつ。やみ。かつら川。大井川。宇治川。かゝり火。八十とものを。五月。瀬々をとめ。
新 うかひ船哀とそみるものゝふの八十宇治川の夕やみの空 慈円
稲負鳥とアラハ。（定家説庭たゝき。家隆説たか。或説馬名云々。）
古 我門にいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹風に雁は来にけり
同 山田守秋のかりほにをく露はいなおほせ鳥の涙なりけり 忠岑
堀川百 秋の田の稲負鳥のこかれはも木の葉もよほす露やおくらん 家隆
　いたくらのはしをそたれもわたれ共稲負鳥そ過かてにする 公實
鶉とアラハ。（かたうつら。）

小鷹人。衣。床。
古今 野とならは鶉となりて年はへん狩にたにやは君はこさらん
金 うつらなくまのゝ入江のはま風に尾花浪よる秋の夕暮 俊頼
千 夕されは野への秋風身にしみて鶉なくなり深草の里 俊成
鴫とアラハ。
門田。ふす。たつ。はね音。
古 曉のしきのはねかき百はかき君かこぬ夜は我そ數かく
新古 心なき身にも哀はしられけり鴫たつ澤の秋の夕くれ 西行
色鳥とアラハ。
わたる。小から。山から。ひは。ぬか。うそ。秋の田。
しとゝとアラハ。
垣根。おりゐる。雨にぬるゝ。みこ。
鵙（モス）とアラハ。
はしのたち枝。尾花かすゑ。草くき。時鳥。
庭たゝきとアラハ。
みとのまくはひ。いなおほせ鳥。物おもふ。
千鳥とアラハ。（さよ千鳥。友千鳥。村千鳥。浦千鳥。濱千鳥。川千鳥。磯千鳥。）
海川にあり。ゆふ浪。友なし。あと。浦つたふ。たちゐ。
拾 思ひかねいもかり行は冬のよの河風寒み千鳥なく也 貫之

金 あはち島かよふ千鳥の鳴聲にいくよねさめぬすまの關守 兼昌
鴨とアラハ。（あしかも。うきかも。）
あをは。かね。はかひの山。山。川。あしへ。山かけ。
（歌。）なつみの川。車。
芳野なるなつみの川の河よとにかもそ鳴なる山陰にして
鴛とアラハ。
池に住。うきね。獨ね。つるきは。ふすま。いくた川。
つかはぬ。柴。物いはぬ。
鳰とアラハ。（鳰のうきすは夏也。）雑イ
下道。通路。玉もにすむ。あそふ。あしま。あふみの海。おき中川。水の關。
鷗とアラハ。
曉。うしほ。おき。白。ふちえの浦。
あちむらとアラハ。
山のは。さはく。
秋沙（サ）とアラハ。
山きは。わたる。
雎鳩（ミサゴ）とアラハ。
魚とる。はとやの鷹。
鶴とアラハ。（まなつる。ひなつる。しらつる。）
子を思ふ。毛衣。林。霜。かける。蓮田。

たつとアラハ。（同物なから付合かはる事あり。あしたつ。たつかね。）
さはへ。雲井。蘆へ。塩みちくれは。わかの浦。

鷄とアラハ。（庭つ鳥。）
すてに。關。坂。合。あか月。

ゆふつけ鳥とアラハ。（鷄の名也。）
逢坂の關。立田山。神かき。別。

くたかけとアラハ。（いせ物語にあり。家にかふ鷄也。）
狐。よふかくなく。せなをやる。（歌。）

かけのたれおとアラハ。（鷄の尾を云也。）
長き夜。みたれ。あかつき。

烏とアラハ。（朝烏。夜烏。友烏。山からす。）
み山。月よ。やもめ。森。うかれ。かしら白。市。わらふ。つくれる小田。

雀とアラハ。（村雀。夕雀。）
夕の雲。わたる。なるこ。おとろく。かしかまし。きひはむ。竹にとまる。網。

雀子とアラハ。
紫。鳥。ふせこ。北山。ひなあそひ。（以上源。）

鵄とアラハ。
金色。弓のはす。琴。尾。

鷲とアラハ。（か丶なくわし。）
とや。上みぬ。深山。羽。たかね。二上山。つくはね。ひらかの鷹。（出羽。）

鷹とアラハ。（はしたか。ましろのたか。しらふのたか。若たか。やかたおのたか。）
かりは。戀。心のおく。山かへり。斬は。すゝ。つかふ。あはする。犬飼。遠見。とまり山。ならしは。此外たか詞數しらす。別に註すへし。

小鷹とアラハ。
鶉。尾花。つかり。あしを。はつかり衣。

とやこめの鷹とアラハ。（鷹のとやたしは七月十五日也云々。）
忍ふ。夏かい。毛をかふる。いくかへり。あふ事しらぬ。

山鳥とアラハ。（遠山鳥。）
尾上。か丶み。ひとりぬる。つまこひ。嶺をへたて丶。ほろ〳〵となく。

鷺とアラハ。（白さき。あをさき。みとさき。あま鷺。）
しらとり。森。寒き。すさき。五位のかうふり。みのけ。かさ。

かさ丶きとアラハ。（まつはからす也。鷺をもかさ丶きとい

ふ。かよはし用る也。）
嶺飛越る。橋。木をめくる。寒きすさき。（源。）
都鳥とアラハ。
渡し守。住田川。ほりえの川。
古
名にしおはゝいさとゝはん都鳥我思ふ人はありやなしやと 業平
鳩とアラハ。（山はと。家はと。）
ふく。まふしさす。杖。みね。八幡山。友よふ。そはのたつき。夕かほの宿。家ことに。雨け。
はこ鳥とアラハ。
あくる。二上山。三室山。
ぬえとアラハ。
雨に又水そひぬらんよもすから物思ふ宿にぬゑの聲して 俊頼
佛法僧とアラハ。
松のお山。三のたから。
うとふやすかたとアラハ。
そとのはま。みのかさ。雨夜。淚の雨イ
梟とアラハ。
谷一。鳥のから聲。おそろしき。雨夜。よもきふのやと。
十七獸類
鹿とアラハ。（おしか。さほ鹿。）
秋萩。紅葉。時雨。しからみ。夢野。妻戀。通路。山田。たちと。たゝすむ。高砂。
すかるとアラハ。（一説蜂の名也。常には鹿の名に用る也。）
秋萩。野。
かせきとアラハ。
山。きねく。きたらす。ほたい。
夏野鹿とアラハ。（かのこ共云。）
ほし。またら。ともし。つの。つかのま。
馬とアラハ。
うかへる雲。道をしる。かちより行。法の道。こわたの里。心。大津の里。くら。たけイ
駒とアラハ。
隙行。つなかぬ。もとこし。春野。若草。あしけ。いく木。わかは。もち月。（信乃。）切原の牧。（同。）たちの。（武藏。）みつの御牧。（甲斐。）つなひく。鐘イ
〔青馬とアラハ。春の七日。ひく。わかな。
万
水鳥のかもの羽色の青馬をけふみる人はかきりなしといふ
家持イ〕
黑駒とアラハ。
甲斐。すまの里。風にあたりて。
駒迎とアラハ。（駒引共いふ。）

引わけ。關の岩かど。くつは虫。逢坂の關。

さかの山千代の古道跡とめて又露分るもち月の駒　定家

牛とアラハ。（ことゐの牛はお牛也。）

あけ卷。ゆきのしま。つの。車。桃の林。黒。時の簡のくひさす。

犬とアラハ。（里の犬。村犬。）

またら。あたる。かむ。けた物の雲に吠。藥をなむる。うちの里。（源。）とかむる。いへ。さとひたる。ほし。鷹かり。

猿とアラハ。

木のは。さけふ。衣をうるほす。梢をつたふ。とのゐ。月をとる。ひえの山。

ましらとアラハ。

わひしら。山のかひある。

ふすゐとアラハ。

かるもかく。矢さきにかゝる。たけき。ゐなのさゝはら。

熊とアラハ。（あらくま。）

おく山。月のわ。うつほ木。て心。うらにあふ。かる。すかのあら野。黒。

羊とアラハ。

あゆみ。車。かみ。竹のは。つゝし。

虎とアラハ。

またら。ふす。石。矢さき。もろこし。たけ。身をかふ。うへたる。曉おき。もろこしの原。（するか。）

狐とアラハ。（おひ狐。若狐。ふる狐。又きつとはかりも云。）

ひる。ふるつか。火をともす。はかす。くたかけ。あたちの原。いなり山。かけろふ。（源。）夕顔の宿。（同。）蓬生のやと。（同。）こんといふ。

兎とアラハ。

月。萩の露。筆の毛。かりは。雪野。流を走る。馬。耳。

たぬきとアラハ。

あな。ふすふる。

猫とアラハ。（からねこ。）

つな。まり。（源。）柏木。（同。）ねう／＼。（同。）かきなてゝ。（同。）虎。

戀わふる人の形みと手ならせはなれよ何とて鳴ねなるらん

鼠とアラハ

あな。月。草のねをはむ。白黒の月。火。

鼯（ムサヽヒ）とアラハ。

おく山。鳥待。曉おくる。森。梢。高まと山。三國山。

十八虫の類

虫とアラハ。

命。かるゝ。なく。露。涙。野面。籠に入る。松。すゝ。草。あさちか原。よはりはてぬる。

松虫とアラハ。（人まつむし。）

嵐山。音羽山。秋風。あらし。露の床（寐イ）なろ。

すゝ虫とアラハ。

霜のふる。故郷。なるみの。馬やつたひ。小鷹かり。笛。（源。）

きり〳〵すとアラハ。

かへの中。深草（ふるき草イ）。つゝりさせ。いたくなゝきそ。長き思ひ。蓬か杣。ゆかのあたり。蓬生の月。霜よ[illegible]さ莚。

はたおりとアラハ。

錦のあや。しものたて露のぬき。萩のにしき。いと薄。しつか衣。

蟬とアラハ。（うつせみ。）

羽衣。貝。あけたては。をりはへ。

うつせみとアラハ。

から衣。もぬけ。玉の向道。はにをく露。むなしき世。身をかへてける。（源。）碁。（同。）

日くらしとアラハ。

山の陰。朝はらけ。山里。山と撫子。秋風。

螢とアラハ。

秋風。かり。雲の上。ほし。思。もゆる。あつむる。袖につゝむ。みさほ。いさり火。蘆屋の里。几帳の帷。（源。）窓。草くちて。

夏虫とアラハ。（火取虫共螢共いふ。）

（後）ともし火の影。けたぬ思。むなしくきゆる。

つゝめ共かくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひ成けり

蛙とアラハ。

井て。山吹。あひ宿り。かひやか下。苗代水。水に住。歌。

（左二行イ无）
かへるとアラハ。

（後）足引の山田のほう（そ一）つうち侘て獨かへるの音をのみそ鳴

蝶とアラハ。（こてふ。）

夢。花その。まひ。

古今月よゝしの歌を取て。こてふににたりといふ詞を付るはあやまりなり。こてふは來といふことは也。虫のこてふにはあらす。たゝしそれも又事によるへし。

蚊とアラハ。

山をおふ。まつけ。はしら。

蚊遣火とアラハ。(蚊火共云。)
ふすふる。をく。賤かふせや。煙。いふせき。
かけろふとアラハ。
ありやなしやと。あたなる世。軒。もゆる。春日小野(野イ)。
(源)ありとみて手にはとられすみれは又向後もしらす消しかけろふ
さゝかにとアラハ。(くもとも。)
糸。衣にかゝる。雲のふるまい。かけつくり。軒は。そとをりひめの歌。いへ。
はちとアラハ。
あな。山。巣。さす。たるき。すかる。
かいことアラハ。
まゆ。桑。ふたこもり。糸ひく。つくはね。(にゐくはまゆに。)
(古)たらちねの親のかふこの繭籠いふせくも有か妹にあはすて
いもりとアラハ。
しるし。さ月五日。
いとゆふとアラハ。(遊絲は陽氣也。生類にはあらす。八雲抄にしはらく虫部に入たれとも。虫にはきらふへし共覺え侍らす。)
のへの馬。霞の衣。遊。日影。みとりの空。みたる。
蝸牛とアラハ。
牛。つのゝ上。あらそひ。家。
かはほりとアラハ。
扇。とひかふ。古寺。鼠。
簑虫とアラハ。
梅の花かさ。雨。
玉虫とアラハ。
色。身をかふる。から。はかなき。
われからとアラハ。
もにすむ。ねをこそなかめ。

十九魚類

龍とアラハ。
のほる。たき。雲に住。鯉。雨。あをふち。(万。)門。
わたつみのそこ。文。
魚とアラハ。
ひれふる。いけのはちす。水に住。戀。あそふ。
鯉とアラハ。
淀川。はしる。たつの門。なかるゝ(つなく 文イ)。
ふなとアラハ。
つゝみやき。かたの浦。ふしつけし。
鮎とアラハ。(わかあゆ。さひあゆ。おちあゆ。あゆこ。)
釣。めつらしき。松浦。玉嶋川。あかもたれひき。西

川。かつら川。瀬にふす。う舟。ひかる。すまの入江。
柳のは。とこ夏。(源。) つり殿。(同。)
鱸とアラハ。
つり舟。ひれふる。秋風。藤江の浦。ひかたの浦。
鯛とアラハ。
櫻。さかひの浦。あちるかたのみ。(□名也。)
氷魚とアラハ。
網代。紅葉。たまふ。よる。うち川。田上川。
鰐(ハニ)とアラハ。
やひろ。口。とよ玉ひめ。
鯨(クジラ)とアラハ。
とる。かねのこゑ。あふみの海。
鰹(カツホ)とアラハ。
釣。千木。
鯵(アヂ)とアラハ。
須磨の入江。
海月(クラゲ)とアラハ。
うみの月。ほね。
廿貝類
龜とアラハ。
尾。山。なく。池。劫つくす。目一。うき木。岩ほの上。萬代。蓬かしま。せなか。うら井。
貝とアラハ。
ひろふ。おほふ。壇。あはする。ふところ。わすれ。
玉。かたし。いたや。ほら。いそ。うつせ。すわう色。
櫻貝とアラハ。
浪の花。八への鹽ち。霞のあみ。伊勢海。
梅花貝とアラハ。
付合梅貝も同し。
あわひ貝とアラハ。
玉。あつもの。かた思。
簾貝とアラハ。
吹上の濱。よりもにかゝる。あみの目。蘆や。
紫の貝とアラハ。
藤嶋。(伊勢。) 二かたの浦。
鳥貝とアラハ。
しらゝのはま。(伊勢。)
雀貝とアラハ。
竹のとまり。
蜷貝とアラハ。
村竹の岸。(伊勢。)
かたし貝とアラハ。

二見浦。あふ事なき。

文祿三年甲午孟頭下旬

（二本奥書）
斯集上下卷故入道殿御作也。初學之輩尤可熟見之。愚自竹馬之昔抑志雪螢之學。結春日野草茅。翫莵久波言葉。爲擢當座之廢忘寫留之者也。莫言々々。

黄門羽林（花押）

連珠合璧集下

廿一人倫

宮人とアラハ。（大宮人とも。）

月。秋。春。須磨。

百敷の大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふもくらしつ　赤人

源氏賢　宮人に行てかたらん山櫻風よりさきにきてもみるへく

雲の上人とアラハ。（殿上人を云。又内裏の女房をも云。）

大内山。紫の庭。月の都。上る。

源きりつぼ　いとゝしく虫の音しけきあさちふに露置そふる雲の上人

八十氏人とアラハ。（諸姓の人を云。）

ものゝふ。宇治川。あふひ。吉野川。

鄙人とアラハ。

かさしの花。あしふみ。入日をかへす。南まつり。雪をめくらす。こてふ。入あや。左右。紅葉の陰。山あひの袖。

賢人とアラハ。

竹の林。七。よしのゝ川原。わらひおる。

山人とアラハ。（山に住人を云。又仙人をもいふ。）

たきゝおへる。（きるとも。）花の陰にやすらふ。薪。つるにのる。たちぬはぬ衣。袖イ

新　山人のおる袖匂ふ菊の露打はらふにも千代はへぬへし　俊成

遠かた人とアラハ。

夕顔の宿。（源。）

古　打わたす遠方人に物申我そのそこに白く咲るは何の花そも

新　山里に霧の籬のへたてすは遠方人の袖もみてまし

かち人とアラハ。

しかまのあゐ。馬。逢坂の關。（いせ。）木はたの里。わたれとぬれぬ。（いせ。）しかの大わた。すはの海。

あき人とアラハ。

市。うる。かふ。たつ。能きぬきたる。金。琵琶。

盗人とアラハ。

立田山。同しかさし。白浪。みとりの林。心を取。（歌。）さよふけて。春日まつり。蓬生の宿。

古 門たてゝ戸はさしたれと盗人のゐれる穴より入てみえけり

わひ人とアラハ。

琴。すむへき宿。思ひ子。

古 わひ人のわきて立よる木の下は憑む陰なく紅葉散けり

あた人とアラハ。（あたなる人也。）

秋にはあへす。（後。） 我身ふるせる。（古。）

まめ人とアラハ。（まことしき人也。）

夕霧。（源。） 男。

海人とアラハ。

つりする。鹽やく。（くむ共。） しほたるゝ。（詞にてはしほるゝ心也。） いさり。心なき。あみひく。みるめかる。さへつる。とまや。蘆や。浦。舟。衣。里のしるへ。すま。難波。根。いせ。しか。かひつ物。

あまの子とアラハ。

かひゝろふ。わかめかる。あそひの浦。（丹後。） あそひたはふれ。夕顔。

白波のよするなきさに世をつくす蜑の子なれは宿も定めす

ますらをとアラハ。

小田。ともしひ。ともやたはさみ。（万。） 高圓山。

あらちをとアラハ。

拾 あらちをのかるやのさきにたつ鹿もいとわれ計物は思はし

さつをとアラハ。（五月にともしする物を云。）

ほくしの松。ねらふ。鹿。木の下やみ。

しつのをた巻とアラハ。

いにしへ。くり返し。昔を今に。（伊勢。） 衣うつ。はたをる。あさ衣。なかき。

山かつとアラハ。

すき。垣ほ。撫子。時うしなへる。（源。）

山守とアラハ。

いはゝいはなん。高砂の尾上の櫻。とかむる。氷室。をのゝ音たかき。

山ふしとアラハ。

苔の袖。すゝわくる袖。をい。貝ふく。火を打。なちの瀧。くま野。かつらき山。吉野山。すゝかけ衣。とねりの関。

たはふれをとアラハ。（風流士と万葉にかけり。）

となり。火をこふ。おそ。宿かす。

老人とアラハ。

宇治。中川の宿。よゐまとゐ。（夕まとひの事也。） 杖にかゝる。

翁とアラハ。

さひたゑ。人なとかめそ。みたり。（三人也。） 舞。霜を

いたたく。草。なみのしわ。しらぬ。ひえとり。つりする。伏見。

野守とアラハ。

鐘。篝火の原。若な。今いくか。出てみよ。いほ。

しまもりとアラハ。（おきつしまもり。）

にゐ。おきつ。あらたまる。

宮木守とアラハ。

杣。志賀。霞たなひく。

時もりとアラハ。

つゝみ。よるひる。香の煙。

斐太人とアラハ。（ひたゝくみともいふ。）

ま木なかす。にふの川。うつすみなわ。（ひたの工。）宮つくる。（同。）てをのをと。（同。）位山。あつまや。（源。）やり戸。（同。）

たをやめとアラハ。

袖にまかへる。藤のうらは。雲ゐのはし。

わかせことアラハ。（男をも女をもかよはしていふ。）

衣はる雨。櫻花。花かつら。くへきよひ。くものふるまひ。

乙女子とアラハ。（たゝおと女ともいふ。）

袖ふる山。みかさの山。櫻（梅イ）。雲の通路。すかた。日影の葎。（源。）天のは袖。（源）。あをすりのかみ。（同。）

をとめこも乙女さひすもからたまを袂に巻て乙女さひすも

乙女こも神さひぬらん天津袖ふるき代の友よはひへぬれは

わきもことアラハ。（妻を云。）

ねくたれかみ。さる澤の池。

（万）わきもこかねくたれ髪を猿澤の池の玉もとみるそかなしき（人丸）

うなひことアラハ。（童子也。うたひ乙女は童女也。）

松。

あけまきとアラハ。（童の名也。又いとにてくみたる車なとのかさりをもあけ巻と云。かよはして可付也。源氏又さいはらの歌より出たり。）

蓬生の宿。はなちかふ馬牛。（源。以上童。）なかき契。むすふ。よりあふ。（以上いとのあけまき。）たゝりの糸。（たゝりはいとよる物也。）

うかれめとアラハ。（うかれ妻とも云。海川のほとりの遊女也。又山或野なとにあり。あそひおはくゝつといふ。傀儡とかく。遊女をは流の君と云。）

遊たはふれ。（遊女歌の詞。）一夜。契さためぬ。浪枕。江のほとり。（琵琶引の心なり。）舟の中。かりの宿。むろ。（以上遊女。）野上の里。鏡山。たつた山。草枕。（以上くゝつ。）

妻とアラハ。（忍つま。遠つまなといふ。）
鹿。きゝす。わか草。なし。軒のあやめ。我宿。衣紅。
こもる。
妹とアラハ。
かり行は。山。わかの松原。
千 山城のみつのゝさとにいもを置ていく度淀に舟よはふらん 頼政
妹かりとアラハ。
万 いもかりとむまにくらをきい駒山打こえくれは紅葉散つゝ 人丸
思かね。河風さむみ。千鳥なく。
男とアラハ。
山。月のかつら。昔。まめ。
女とアラハ。
つよからぬ歌。青。ねたむ。　女郎花。　ゑにかける。
車。五のさはり。三にしたかふ。たつ。
父母とアラハ。（かそいろと云も。）
あめ土。ひるの子。（神。）ふたり。て習人。難波津あさか山。（古序。）やしなふ。民。花の春雨。生ぬさき。ほろ〳〵となく。（行基。）
おやとアラハ。（たらちねとも。）
かふこ。いさめ。うたゝね。心のやみ。
子とアラハ。（思ひ子とも。みなしこともいふ。）
みとり。まよふ。すつる。はらむ。はくゝむ。あそふ。いたく。ふところ。ひさの上。くろかみ。たけ。うみ梅。つる。きゝす。ひはり。鳥のす。たけの馬。庭の数。杖。あしのほわた。明石。（源。）わか紫。（同。）はつね。（同。）
拾 逢事はかたいさりする絲子のたゝむ月にもあはしとやする 業盛
兄弟とアラハ。（おとゝひ也。又あにをは子のかみともいふ。）
枝をつらぬる。ふすまをかさぬる。鴈のつら。鶯。郭公。梅。菊。とし。七あゆみ。（七歩に詩をつくれる事也。）まめからをたく。（同。）かしは木。玉かつら。
友とアラハ。
花。月。雪。昔語。老。尋る。鏡。つる。千鳥。たけ。舟。旅の道つれ。山かけ。
使とアラハ。
心。伊勢。宇佐宮。文。かり枕。無名(ナシ)きし。

廿二人躰

目とアラハ。
見る。網。花かたみ。柳。あし。涙。
耳とアラハ。
きく。あらふ。ふるゝ。兎。さを鹿。はり。
手とアラハ。

とる。折。たゝく。さへきる。うつ。占。まい。わらひ。くも。くま。七夕。左右。

ゆひと[アラハ欤]

十。月をさす。おる。かそふる。ふし。

足とアラハ。

あらふ。ふむ。あゆむ。駒。かりの文。雨。雲。日。船。車。まり。くつ。浦。難波江。(蘆にかよはして云也。)

ひちとアラハ。

まくる。枕にする。かさ。鷹。すふる。

むねとアラハ。

思。あはぬ。こかるゝ。さはく。くるしき。けふのほそ布。月。煙。蓮。ふし。いた間。

こしとアラハ。

山。おひ。はかま。折。のへて。

髪とアラハ。(黒かみ。朝ねかみ。ねくたれかみ。おちかみなといふ。)

とくる。むすほゝる。柳。なかき。ゆふ。かきやる。けつる。おつる。なつる。亂るゝ。あかぬ。心のすち。ふりわけて。蓬。五月雨。曉。くし。鶴。馬。

ふりわけ髪とアラハ。(おさなきものゝかみをいふ。)

つゝ井つゝ。(いせ。)雪。霜。駒。

いせ くらへこしふり分髪もかた過ぬ君ならすして誰かあくへき

うちたれかみとアラハ。

さほひめ。玉柳。

つくもかみとアラハ。(老人のかみを云。)

かいまみ。むはらからたち。(伊勢。)

伊世 もゝとせに一とせたらぬつくも髪我をこふらし面影にみゆ

髪そきとアラハ。

紫の上。千ひろの海。みるふさ。あをひ。(以上源。)

午の日。山橘。山すけ。

かしらとアラハ。

雪。霜をいたゝく。白山。烏。馬。

しらかとアラハ。

鏡。瀧の糸。數。ぬく。梅の花。

廿三夢類

夢とアラハ。

見る。おとろく。さむる。歸る。あたなる。はかなき。あはする。語る。昔。(いにしへ。)世。身。面影。たゝち。うき橋。うき草。こてふ。もろこし。花。春秋。凡夜之詞可付之也。

まほろしとアラハ。

尋行。玉のありか。(玉の向後共。) 空に通ふ。
夢うつゝとアラハ。
世の中。有てなき。明暮。朝夕。うつの山。
(伊勢)君やこし我や行けん思ほえす夢かうつゝかねてかさめてか
(同)かきくらす心の闇にまよひにき夢うつゝとは世人さためよ
うたゝねとアラハ。
(拾)よひ。戀しき人。夢。
たらちねの親のいさめし轉寢は物思ふ時のわさにそ有ける
まろねとアラハ。
しちのはしかき。百夜。よもき。おひとかぬ。
ねふりとアラハ。
老。杜。めさましくさ。つる。思さます。曉。

廿四人態

木こりとアラハ。
山。柚。歌。虫。をの。
草かりとアラハ。
野。をのこ。かの岡。笛。牛。わらは。
ともしとアラハ。
松。やみ。鹿。ほし。立あかす。あふ。小藏山。二村山。宮城野。
いさりとアラハ。
やみを待。たく火。舟。あまのなわたき。あしのや。螢。我すむかた。
塩やきとアラハ。
蘆のやのなた。いとまなみ。たき木取。衣。難波の水。すま。からき。
柴取とアラハ。
庵。爐。ほす。をの山。舟。うち。すま。ゆふ。車。

廿五述懐付懐舊

世とアラハ。(うき世。あたし世。露の世。夢の世。世中。世の向後なといふ。又世にすむと世をすつると其心弁知へき也。)
すむ。すつる。まよふ。出。竹。あし。夢。露。
捨身とアラハ。
山。世の外。かくれ家。あれ田。吉野山。
有増とアラハ。
山。月花を待。夕暮の雲(空イ)。身の向後。
隱家とアラハ。
しはの庵。山のおく。世のうき時。芳野山。鳥の落草。市の中。
墨染とアラハ。(衣袖なとにいふへし。又只墨の袖すみの衣共いふ。)

夕。我たつ杣。櫻。(深草山。但禁忌事也。) 筆。そむる。

苔衣とアラハ。(苔の衣。苔の袖なともいふ。)
岩ほ。われにかさなん。

命とアラハ。
長き。みしかき。つれなき。あたなる。露。花。虫。鳥。いけすの魚。さよの中山。(歌。)

玉のをとアラハ。(命の事也。)
かた糸。よはる。たゆる。なからへて。ゆらく。なかき。みしかき。琴。涙。あふ事は。

老とあらは。(老らくとも。)
つれなき。命。ねさめ。友。涙もろき。松。つる。年なみ。ねふり。坂。山ふし。門さして。(老らくに。) 昔を戀。いにしへ。鶯。

思出とアラハ。
月。花。昔。(いにしへ。) 夢。老その森。

古とアラハ。
しつのおたまき。野中の清水。物忘せぬ。老。

昔とアラハ。
語。友。夢。しのふ。しかの都。故郷。

廿六釋教

佛とアラハ。
ちかひの海。寺。御法。三世。いける。光。彼國。蓮のうてな。月の御かほ。世に出る。二月の別。花のさかり。草木。たね。

御名とアラハ。(佛名會と只稱名念佛の心かはるへし。)
年の暮。竹の燈。のふしのかつけわた。(導師の布施也。) かゑなしの酒。三世。(以上佛名云。) 西に向ふ。六の文字。雲のむかへ。ときつるき。十聲一聲。三の心。極樂。心亂ぬ。九しな。(以上稱名。) となふる聲。

寺とアラハ。
歸る。松か本。鐘。軒のかはら。麓。野。嵐山。さかの山。はつせ。難波。(此外名所多之。)

寺とアラハ。
めかきおかき。鐘の聲〳〵。諸の佛。

法とアラハ。
船。馬。駒。門。花。とく。もとむる。三の車。すゑの世。さとりの道。

法師とアラハ。
尋る道。思はぬ山。(源。) 世のとはりをとく。(同。) 夢の浮橋。(同。) 船渡し。

尼とアラハ。

かたちをやつす。心ある。うつせみ。いむ事うくる。松
からら島。くたらの國。しほくまぬ。
うはそくとアラハ。
おこなふ道。こん世。かつらき。うち。みたけさうし。
ひは。
彌陀とアラハ。
雨夜の月。蓮の上。西。世にこゆるちかひ。御國。
釋迦阿彌陀とアラハ。
よふもをくるも。さかのふる寺。
彌勒とアラハ。
其曉。後の佛。たつのはなふさ。かさき寺。三井の寺。
みたけさうし。夕顔の宿。(源。)
文殊とアラハ。
御かほ。けふみつる哉。つるき。くせの戸。をのかし
し。
普賢とアラハ。
のり物。すゑつむ花。
迦葉の舞とアラハ。
とのね。こゑにめくる。しゐかもと。(以上源。)　金色。
鷄の足。
不輕とアラハ。(不輕とは人をおかむ行也。)

ぬかつく。こゑ。汀の千鳥。鴫のしも。(源。あけ卷。)
宇治。
たるまの弓とアラハ。
九とせ。かへに向ふ。ちいさき林。あしのは。西よりき
たる。
佛のうふゆとアラハ。
卯月の花。五色の水。獨たうとき。ふなつゝみ。(經佛の
布施也。)　七あゆみ。
たつの女とアラハ。
佛となる。五のさはり。南にゆく。玉をさゝくる。てな
らひ。(源。)　八の歳。
優曇花とアラハ。
一たひゝらく。佛の御法。
うとんけの花待えたる心ちしてみ山櫻にめこそうつらね
菩提のうへ木とアラハ。
身はこれ。鏡のうてな。我立そま。
つるの林とアラハ。
きさらき。よ中の別。空かくれ。かるゝ。二千とせ。河
のほとり。なきかなしむ。
鹿の園とアラハ。
法をとく始。三の車。

わしの山とアラハ。
法の花。常にすむ。へたつる雲。
ふたらくとアラハ。
紫の竹。わたる。
須彌の山とアラハ。
哥ふたらくの南のきしにたうたてゝ今ぞさかへん北の藤浪
夢かたり。あかし。月日。海にうかへて。(以上源。)そ
めいろ。(蘇迷盧といふは梵語也。それを染色に用へし。)
えふの身とアラハ。(閻浮提の人也。)
なをやます。(古。)南。さかひ。みとりの空。
一味の雨とアラハ。
三くさ二木。くすり。みかさ山。
三の車とアラハ。(羊鹿牛の車也。)
一の門。火の家。
三界とアラハ。
やすき事なし。思の家。
六の道とアラハ。
輪の中をめぐる。
哥我遠七のやしろのゆふたすきかけても六の道に歸すな 慈鎮
みたけさうしとアラハ。(金峯山まうてをいふ也。)
ぬかつく。夕顔の宿。(源。)手習ひ。(同。)

數珠とアラハ。
玉のを。くる。黒木。けうそく。こんこうし。かさり。露。
あか水とアラハ。
佛に花奉る。花さら。たな。むすふ。くむ。をけ。山の井。ふかきたに。一夏。
一夏とあらは。
むすふ。安くゐる。こゝのそち。とく。花奉る。
其曉とアラハ。
たかのゝ山。有明の月。世に出る佛。
彼岸とアラハ。
くるしき海。舟。いたる。時のたゝしき。春秋。
奈落の底とアラハ。
くるしみ。隙なき。もゆる火。とけぬ氷。人ぬれは。やみ。紅のはちす。
罪とアラハ。
つくる。おもき。ふかき。しつむ。をかす。きゆるはかり。ふたつ。かりは。ともし。いさり。う舟。むくひ。
後の世。

廿七神祇

神とアラハ。

まつる。祈る。あまてる日月。世。かゝみ。（凡神祇類皆可付之。）
社とアラハ。
あまつ。七。いなり山。かも。
井垣とアラハ。
こゆる。しめの外。くす。鳥ゐ。
玉墻とアラハ。
あけの衣。圓。
瑞籬とアラハ。
老かさし。かも。
鳥ゐとアラハ。
くろ木。野宮。柱。ゆふして。杜のかけ。つる。
かたそきとアラハ。
行あふ。住吉。宮作。霜や置らん。かやふき。
しめとアラハ。（しめなわ。御しめ。）
もり。はゆる。ひく。ゆふ。田。野。うち外。かくる。
さかき。なかき。こゆる。
しらゆふとアラハ。（ゆふして。ゆふたすき。ゆふたゝみ。）
花。雪。霜。さか木。鶏。かくる。なひく。三室山。
ぬとアラハ。（大ぬさ。御ぬさ。）
手向。とる。紅葉の錦。はらへ。ひく手。

夏はらへとアラハ。（御そき同し事也。）
六月。あさのは。人かた。秋風。みな底の月。かも川。ありす川。夕は河。すかぬきかくる。いくしたて。総せし。（御そきに。）神はうけすも。（同。）
巳の日のはらへとアラハ。（三月上巳の日也。）
人かた。やよひ。すま。（源。）山陰。舟。（源。）海つら。（同。）ひちかさ雨。（同。）笠も取あへす。（同。）又なき風。（同。）
（源）しらさりしおほ海のはらへ流きて一方にやは物はかなしき
野宮とアラハ。
別。松風。秋の草。淺茅原。虫のね。小柴垣。いたや。黒木の鳥ゐ。神つかさ。火たきや。物のね。しめの外。夕月よ。榊。月の入かた。（源。）西川の御秡。長月。さかの山。有す川。
（源）やしまもるくにつ御神も心あらはあかぬ別の中をとはれ
（同）鈴鹿川やそせの浪にぬれ〳〵すいせまて誰か思ひをこせん
抑いつきの宮とは伊勢の斎宮をも賀茂の斎院をもともに申事也。野宮と云事も。斎院斎宮のまします所をは皆野宮といふ。斎院は紫野。斎宮は有す川に其所あり。斎宮は九月に西川にて御そきし給て伊勢へ下給ふ。斎院は四月に東川にて御祓有て賀茂に參し給ふ。源氏榊の巻にい

へるは。斎宮の野宮と心得へき也。

神樂とアラハ。

庭火たく。（本末）榊。あさくらうたふ。あかほし。石
戸あくる。笛。おもしろき。かなての袖。やまとこと。
御てくら。たちからを。（神名也。）うすめ。（同。）か
ら神。そのこま。里。

夏かくらとアラハ。

川やしろ。榊とる、「うとはまの聲。宮人。きり〳〵す。
篠。弓。杖。」ひさこ。人の長。取物。イ」

里かくらとアラハ。

かとかましき。

すさのをの神とアラハ。

八雲立いつも。そかの里。いなたひめ。村雲のつるき。
歌の始。たけき。

ひる子とアラハ。

あしのは船。ひろ田の社。（西の宮。）

かそいろはいかに哀と思らんみとせに成ぬあしたゝすして 新撰

下てる姫とアラハ。（天わかひこの妻也。）

かつら木。（ゆつかつら。）なゝしきし。ひなふり。（歌の
事也。）をかたに。久かたのあま。玉の御すまる。

豊玉姫とアラハ。（ふきあはせすの御ことの御母也。龍神の
女也。玉より姫は豊玉姫のいもうと也。）

うのは。をきつとり。光ある。なきさ。子をやしなふ。

武内の神とアラハ。

八幡。弓矢の家。

菅原の神とアラハ。

きさらき。つくし。北野。なき名。一夜松。風月のある
し。梅。

石神とアラハ。

うこかぬ。あふ事をとふ。

きねとアラハ。

つゝみ。袖ふる。すゝ。なきさの宮。しらけたる。ねき
事。

はふりことアラハ。

三輪。賀茂。すわの社。

後拾 はふりこか祝ふ社の紅葉はもしめをはこえてちると云物を 能因

同 うと濱に天の羽衣まれにきてふりけん袖やけふのはふりこ

いみにさすとアラハ。

卯月。たゝすのたけ。

廿八覊旅

旅とアラハ。

草枕。宿。船ち。あさ立。うかれ妻。都。故郷。我方。タイ

關路。かりね。(かり枕。) 野を分衣。山分衣。山越て。
あつま路。うき世。つくしち。便り文。日かすふる。
宿とアラハ。
かりの世。かり枕。立よる。月。花。一よ。夕顔。あさちふ。
中宿とアラハ。
村雨。木陰。うち。初瀬まうて。旅のかれはゝ。山路の月。花。
便文とアラハ。
にさきのはこ。かり。もしの關。みちのくの忍ふ。伊勢の使。

廿九戀部

戀とアラハ。
鷹。いけすの魚。くさ。ふち。山。
思とアラハ。
煙。袖に螢をつゝむ。尾花か本。草。ふし。川。室のやしま。
涙とアラハ。
玉。おつる。をく。つゝむ。なかるゝ。こほるゝ。海。もろき。袖。衣手。瀧。川。氷。露。時雨。(凡ふる物の類。) 鶯。郭公。かり。鳥のなく。
書とアラハ。(玉つさともいふ。)
かく。おく。よむ。あなかしこ。名。便。一くたり。かり。鳥は。鯉。つゝみやき。(鮒。) しちのはしかき。きぬのうす様。
名とアラハ。
忍ふ。つゝむ。たつ。もらす。なかるゝ。文。あらはれて。人目をつゝむ。おしむ。
錦木とアラハ。
たつる。千つか。門のまへ。くつる。紅葉。花。
錦木はたてなからこそ朽にけれけふの細布むねあはしとや 能因
待心とアラハ。
夕暮。夕よゐ。夜のふくる。僞。夢にとふ。獨ね。空たのめ。
逢心とアラハ。
新枕。したひもとくる。むつ事。別を惜む。夢。程なく明。ふたり。
別心とアラハ。
有明。横雲。曉。うき。鐘を恨。鳥をかこつ。明を惜む。衣々。涙。又と云。後の暮。とめかねて。形見。うつり香。(袖。まくら。衣なとに。) 又ね。名殘。きかへ衣。面影。

面影とアラハ。
　花。月。雪。まのゝかや原。鏡。玉かつら。(伊勢。) 夢。
新枕とアラハ。(新手枕とも。)
　あふも別も始。あかしの宿。むつと。契り。としのみとせ。(伊勢。) 夢かうつゝか。
ひとりねとアラハ。
　袖のたき物。山鳥。月にわかるゝ。
僞とアラハ。
　まちふくる。人のことのは。鳥のそらね。雲を花とみて。
忍とアラハ。
　人目。涙。關。軒の草。みちのく。みたるゝ。鷹。
恨とアラハ。
　文。くす。衣。海邊の詞。
同世とアラハ。(一世も同也。)
　命。ちきり。中。竹。あし。
移香とアラハ。
　形見。面影。よるの衣。梅。橘。
戀死とアラハ。
　思の煙。いく田川のをし鳥。柏木。かりはの鳥。いけすの魚。後世のむくひ。夏川のいを。

卅衣類

衣とアラハ。
　たつ。きて。ひとへ。重る。をる。ま遠。なるゝ。霞。雲。關。河。鴈。恨。玉。
〔夏衣とアラハ。かとりのきぬ。たつ。うすき。かふる。イ〕
衣手とアラハ。(袖同也。)
　森。涙。
袖とアラハ。
　(この頭) みなと。尾花。(薄。) 雲。霞。涙。浦。かき。露。
みちしろ衣とアラハ。
　ひちかさ雨。
後撰　降雪のみの白衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる　敏行
〔小忌の衣とアラハ。あかひも。山の井。すり。日かけくさ。イ〕
から衣とアラハ。
　紅。うつ蟬。返す〲。末つむ花。(源。) 和歌。(同。)
あさ衣とアラハ。(あさきぬとも。あさのきぬ共。)
　山かつ。しつかうみを。きそち。櫻。
かは衣とアラハ。(かはきぬとも。)
　ふる木。蓬生の宿。雪の山人。扇はなたす。(萬。)
苔衣とアラハ。
　岩屋。捨人。深山かくれ。朽木。松。世をそむく。(歌。)

衣打とアラハ。
夜寒。(秋寒。) 淺ちふの宿。しつ。かり。月。雪。おきあかす。㭊の根る。故郷。伏みの夢。さらしなの里。十市の里。玉川の里。あまの礒や。夕顔の宿。やとやからまし。

きぬたとアラハ。(擣衣同事也。)
ちたひうつ。つちの音。白妙の衣。くたくる。 夕顔の宿。となり。

きぬとアラハ。
小車。こす。をとなひ。妻。かさね。ひとへ。から紅。

衾とアラハ。
冬の夜。ねや。をし。おほふ。またら。かさぬる。あさて。電。海のおもて。誰と友に。

したひもとアラハ。
闕。花。とくる。むすふ。衣。しるし。

帶とアラハ。
むすふ。みち。行めくる。細谷川。横雲。花田。石。ひたち。(かしまの神。) しつはた。三重。

花田の帶とアラハ。
夏衣。石川。(催馬樂の歌。)

[illegible]
中絕はかとやおふとあやうさにはなたの帶は取てたにみす

常陸帶とアラハ。
かしまの神。かこと。祈る。むすふ。

ゐての下帶とアラハ。
みてくらの使。(大神社。) 子。むすふ玉の。

あかもとアラハ。(くれないのもすそ。又あから裳なといふ。)
玉島川。(松浦。) あゆつる。あま乙女。すそ。ふなのり。しほみつる。

錦とアラハ。(以下衣類にあらす。便をもて是をのす。)
立。をる。よる。やみ。小車。ひも。花紅葉。萩。家にかへる。立田山。はた。あらふ。から。もみち。

綾とアラハ。
雲鳥。おりへのつかさ。(織部司也。今の大とのゐの事也)
二村山。氷。杉。

絲とアラハ。
亂るゝ。よる。たゆる。ひく。くる。ふし。あさひく。長き。ふる。へて。佛の御手。さゝかに。竹。柳。薄。春雨。時雨。たき。日かけ。

綿とアラハ。
衣の妻。ひとへ。重る。あしの花。きく。かつく。ふし。しらぬひのつくし。

布とアラハ。

てつくり。さらす。あさ。むねあはぬ。たき。けふの
郡。(陸奥。) うち。さほ川。卯花。

卅一食物

酒とアラハ。
たけのは。なかるゝ霞。きく。あたゝむる。三輪山。
泉。にこれる。よるひかる玉。(萬。) おほきひしり。
(同。) 罪をつくる。三の友。(琴詩酒也。) 三室山。

かれいゝとアラハ。
八橋。(伊勢。) 栗をかしく。旅。つゝむ。
(万)家にあれはけにもるいゝを草枕旅にしあれは椎の葉にもる

さかなとアラハ。
あるし。こゆるきの磯。わかめかる。もとむ。

もちゐとアラハ。
はかため。かゝみくさ。鏡山。ねのこ。三日のよ。はら
こつむ。紫の上。

あつ物とアラハ。
なきのは。ひしほす。こなきつむ。

卅二火類

火とアラハ。
こかるゝ。きゆる。むね。螢。隣。あし。もしほかく。
あくた。いさりのあま。石の中。うちいたす。松の煙。
たき物。

衛士のたく火とアラハ。
雲井の庭。室の八島。

埋火とアラハ。
ねや。寒きよ。おきなから。春近き。あたり。はいしれ
て。

ほたゝくとアラハ。
山かつ。さしあはせ。きる。

かゝり火とアラハ。
う舟。遣水。まゆみの木の下。(源。) 夏の月なき。(同。)
(源)篝火にたちそふ戀の煙こそよにはたえせぬほのほ也けれ

燈とアラハ。
そむくる。かゝくる。まと。かへ。常。ほたる。明石
浦。夏虫。

卅三雑物

船とアラハ。
うきたる。とまり。こかるゝ。一は。あま人。つなく。
池。よるへ。海(カイ)。とまや。やかた。膓かね。

あま小船とアラハ。
はつ瀬。

もろこし船とアラハ。

袖のみなと。松浦さよ姫。芳野の川。ぬさのおい風。一夜とまり。夢ちにちかき。
から船とアラハ。
みつらゆひたるわらは。こてふ。池の中島。（以上源。）
すて舟とアラハ。
あま人。鹽木。かひのかたはれ。かたはれ月。つなかぬ月日。浪に朽たる。
車舟とアラハ。
牛まと。わたの御さき。うちゐあしろ。すま。しまめくる。鴨。しほの引。
たなゝし小舟とアラハ。
伊勢 蘆へこくたなゝし小船いくそ度行歸るらんしる人をなみ
あけのそほ舟とアラハ。
万 旅にして物戀しきに山本のあけのそほ舟をきにこくみゆ 高市皇子
紅葉こかるゝ。宇治。
あしわけ小船とアラハ。（又蘆かり小船。）
後拾 玉江こく蘆かり小船さしはへて誰を誰とか思さためん
さはる。難波。
いつて船とアラハ。（五手船也。一說伊豆の國より出船也。）
ほり江。
あさつま舟とアラハ。
山。しかのうら。よこの海。まのゝ浦。夜をこめて。
つくし船とアラハ。
との音。すまの浦浪。（源すま。）大しま。西の海。ひゝきのなた。からとまり。箱崎。かねのみさき。（源玉かつら。）むらさきのこかたの海。
舟中とアラハ。
藻をもとむる。鵜のをの山。おいせぬ。
帆とアラハ。（まほ。方ほ。）
あくる。をろす。つかふ。風。走る。蘆。湊田。鴈の聲。
いかりとアラハ。
をろす。なは。とまり。
つなてとアラハ。
ひく。くる。とく。長き。たゆたふ。なはの浦。
からろとアラハ。
をす。鴈かね。
かちとアラハ。（まかち。やかち。）
しけぬく。とる。天川。枕。しつく。こたへ。おと。ゆらのみさき。
かいとアラハ。
しつく。たへかたし。と渡る船。天川。

さほとアラハ。
さす。とる。しつく。みなれ。いかた。衣ほす。竹。釣人。川。橋。雪。駒。
とまやとアラハ。
おほふ。ふく。とる。雨。はまひさし。
いかたとアラハ。
くれ。たゝむ。かさぬる。床。さす。くたす。杣川。のる。大井川。となせ。いは浪たかし。まてとゝはん。水上。山のあらし。
網とあらは。
ひく。をく。かけほす。うけなは。目にかゝる。鞠。もるゝ。雀。あこきか浦。かたゝの浦。霞。
梁(ヤナ)とアラハ。
のほる。くたる。うつ。魚。田上川。
さてとアラハ。
さす。あゆ。瀬。
是(チ)を見よ六田のよとにさてさしてしほれし賤かあさ衣かも　俊頼
車とアラハ。
やる。めくる。水。柴。力。かさり。よへの鳥。(三よつの馬イ)流るゝ水。三法。羊。鹿。牛。網代。ひさし。蓬。袖。椎。床。しち。あけまき。忍。みあれ。淀。かもの河原。あつまや。月の輪。簾。袖口。ひおりの日。
手車とアラハ。(手にて引車也。)
きりつほ。中のへ。(内裏事也。)ゆるさるゝ。
力車とアラハ。
牛。つむ。戀草。
水車とアラハ。
田。川。鴨。月の輪。氷のくさひ。宇治の網代。
簾とアラハ。(こすとも。みすとも云。又玉たれ。)
まく。おろす。あくる。かくる。あみめ。蘆。(すたれに。)いよ。(同。)貝。(同。)竹田。(御簾に。)山。(同。)こかめ。(玉たれに。)
席とアラハ。
しく。まく。菅。かや。あや。苔。をになる。
疊とアラハ。
八重。ゆふ。
茵とアラハ。
しく。錦。はし。おとし文。(源かしは木。)舞姫。
几帳とアラハ。
かたひら。螢。はし。風にまかせぬ花。(源まほろし。)たつる。をしよせて。さす。
帋とアラハ。

すく。まゆみ。みちのく。羊。硯水。(源。) 紫。(同。)
薄様とアラハ。
きぬ。竹。紅。紫。かさね。
筆とアラハ。
かさ。ゆふ。そむる。春の木。土筆。林。つか。海。うの毛。紅。
墨とアラハ。
する。松の煙。衣。袖。綸。こきうすき。烏。空なき。
硯とアラハ。
きる。紫の石。水。池。むかふ。わろ。かはら。はこ。かめ。面。
盃とアラハ。
うく葉。石にさはる。桃。きく。弓のかけ。涙おつる。(春盃に。) 峯の影。めくらす。
かはらけとアラハ。
かさね。うねめの歌。あるし。花橘。(いせ。)
笠とアラハ。
さす。ぬふ。かくれ。梅花。こすけ。花。松。竹。袖。きぬ。さき。月。雨。(凡降物。) 一目。しからき。
蓑とアラハ。
鷺。虫。かくれ。山。

枕とアラハ。
袖。岩。松かね。そは立る。草。すか。浪。さゝ。つけの小くし。かち。瀧。ふかき。(夜分をつくへし。)
鏡とアラハ。
くもる。みかく。面影。裉。ひかた。七子。野守。山鳥。わたり。山。さかきの枝。日のまへ。月。池。友。玉手箱。うつる。老らく。ふれる白雪。市の中。わりなき。かさゝき。
玉くしけとアラハ。
ふた。身。あくる。あふ。
玉手箱とアラハ。
ふた。身。あくる。あふ。浦島か子。我身はなれぬ。(源。)
櫛とアラハ。
つけ。つま。さす。ひく。はをしけみ。つくし。けつる。曉。別。(野宮。) なつる。(同。)
花かたみとアラハ。(只かたみとも云。篭事也。)
目ならふ。若菜つむ。しきみ。
碁とアラハ。
うつ。みたれ。いきしに。かちまけ。石。はま。白黒。をのゝへ朽る。山人。うつ蟬。(源。) 軒端の荻。(同。)

竹川。(同。) いよのゆけた。(同。) かけ物。(さくらく。同。) 刧。手習。(伊勢。)

双六とアラハ。

うつ。石を打火。いちはにたてる。一石。すま。(源。) 近江君。(同。) さい。

万 わかせこか額におふる双六のこといの牛の角のうへのかさ

冠とアラハ。

いたゝく。うゐ。李。みとりのせみ。たゝしくす。ゑひをすゝむる。

杏とアラハ。

ぬく。はく。かも。まり。馬。うり。一巻の書。砂にひゝく。

たちとアラハ。

さや。つか。帶。ぬく。やく。かさり。まきゑ。枕にをく。玉つくり。え。

拾 銀のめぬきの太刀をさけはきてならの都をねるはたか子そ

つるきとアラハ。

秋の霜。つかにかくる。村雲。草なき。とき。きる。は。をしのは。林。池。さひ。石上。あつたの社。とをす。

かたなとアラハ。

竹。まもり。ひし。夢にみる。うつはり。こし。つか。さや。ぬく。

鞠とアラハ。

ふむ。ける。あかる。をつる。足。かす。下香。ありや。かゝり。みすのすきかけ。(源。若菜。) 猫のつな。(同。) 櫻をわきて。(同。) 柳櫻。

小弓とアラハ。

雀。かちまけ。まとゐ。

弓とアラハ。

引。本。末。いる。はる。をして。そり。つる。月。盃のかけ。かり人。ものゝふ。馬。高圓山。あつさ。

針(ハリ)とアラハ。

ぬふ。耳。たなはた。なへ。いと。釣。

つり針とアラハ。

あかめ。(鯛の事也。) たつのみや。いと。魚。

杖とアラハ。

つく。かゝる。さゝふる。うつ。あたる。すかる。たけ。はと。あかさ。狩人。親の子。千とせの坂。卯の日。

鐘とアラハ。

なる。つく。(詞也。) ゆふへ。曉。寺。ひゝく。聲。

霜。おのへ。かも。花。ねよとの。高砂。さかの山。初瀬山。(凡夜分を付へし。)
入あひとアラハ。
山寺。山里。けふも暮ぬ。花そ散ける。春そつきぬる。
鴨の鐘とアラハ。
行。暁おき。しきみの青葉。山かけ。
をのゝえとアラハ。(をのゝ音なといふ。)
朽る。山人。斧。かつらの里。こたふる。(をのゝ音に。)
ひゝき。(同。) 木をきる。(同。) 柴をつけて。(同。)
我立杣。(同。)
扇とアラハ。
をる。さす。妻。ひろくる。月にたとふる。閨。をく。
秋風。たまふ。繪。骨。女車。
はかりとアラハ。
かくる。をもき。かるき。目。鳩。罪。稻。
火取とアラハ。
たき物。虫。はい。ふせこ。人をねたむ。(源。) 槇柱。
(同。)
はたとアラハ。
をる。たつ。錦。いと。しつ。雲。七夕。薄。
玉たすきとアラハ。

かくる。行ちかふ。
占思はすはおもはすとやはいひはてぬなと世中の玉襷なる
寶とアラハ。
をもき。七くさ。三くさ。山。てをむなしくす。池。
玉とアラハ。
よるひかる。みかく。きす。露。涙。かさし。鹽のみち
ひ。かす。つらぬる。衣。袖のうへ。
金とアラハ。
ほる。花さく。山ふき。きく。いさこ。みちのく山。
銀とアラハ。
たちのめぬき。鏡。あまの川。
まかねとアラハ。
きひの中山。ふく。わかす。
うるしとアラハ。
黒。ぬる。川。花。にかは。

卅四管絃

笛とアラハ。
吹。竹。青葉。隣。草かり。おつる梅。たきさし。一ふし。あな。(詞也。あなかま。あなかなしの類也。) 花ちりたる。(笛のこゑ。)
横笛とアラハ。

柏木。荷の宿。虫の聲。(以上源。)
横笛のしらへはとにかはらぬをむなしく成しねこそ盡せね
ことアラハ。
かきなす。ひく。てなれ、松風。秋のしらへ。春のしらへ。ひきのうへ。したひ。岩こす浪。星の手向。わひ人。きり。なけきくはゝる。閼のわらや。枕にする。
ことちとアラハ。
雁。たつる。
やまと琴とアラハ。(あつまともいふ。)
神樂。きり。孫えた。ひさの上。紫の上。(源。)
琵琶とアラハ。
引。なかはの月。遠山。江のほとり。村雨。さゝめこと。馬の上。胡のくに。あかし。うち。立きく。
琵琶撥とアラハ。
宇治。橋姫。月をまねく。(以上源。)つけの木。
鼓とアラハ。
うつ。時もり。いさめ。瀧。川をと。苔ふかし。御法。(源。)
絲竹とアラハ。
しらへ。聲々。あはする。絲と竹との付合にて了簡すへし。

女樂とアラハ。
わかな。紫の上。きさらき。かつらきうたふ。(以上源。)
〔さいはらとアラハ。うたふ。拍子。わか駒。高砂。貫川。東屋。あすかゐ。青柳。いせの海。あなたうと。梅か枝。蘆垣。竹川。このとの。イ〕

卅五色部

紅とアラハ。(から紅とも云。)
ふりて。うす。ゆふ。くゝる。日。霞〔等イ〕。はな。紅葉。きく。梅。つゝし。染。涙。一しほ。草。
紫とアラハ。
うす。こき。若。はひさす。藤。萩。藤はかま。きく。杜若。蕨。こかたのうみ。つくし。雲。もとゆひ。上なき色。
綠とアラハ。
ふか。あさ。若。うす。空。水。たけ川のふち。髪。松。竹。若草。野山。春雨。
白妙とアラハ。
雲。雪。霜。まさこ。ふしの高根。衣。

卅六禁中

すへらきとアラハ。(すへらともいふ。)
てる。ひかり。神にしませは。(萬。)神の宮人。(同。)

ひしりの御代。八すみしる。御こしの内。
御幸とアラハ。
後 大原野。小鹽山。たつきし。(源。) 御こし岡。今一度。行平
さかの山御幸絶せぬせり川の千代のふる道跡はふりけり
源 うち聞しあさくもりせし御幸にはさやかに空の光やはみし
百しきとアラハ。
大宮人。紫の庭。御はし。櫻橋。雲の上。玉しき。御かは水。
大内山とアラハ。(内裏也。又仁和寺に此山の名あり。)
ならひの岡。松風。
源すゑつむ花 もろともに大内山はいてつれと入かたみせぬいさよひの月
春の宮とアラハ。
東。あをき。光にあたる。
いつきの宮とアラハ。(斎宮斎院ともにいつきの宮と云也。)
伊勢。賀茂。紫の。有す川。竹の宮こ。(いせ。) あふひ草。さかき。
みかきもりとアラハ。(衛門也。)
をさ〳〵し。(古。) とのへのあふち。
ともの宮つことアラハ。
朝清め。此春計。玉の砌。柳の糸。(歌。)
御さふらひとアラハ。(殿上人也。)

御かさと申せ。宮城野。木の下露。
國栖とアラハ。(くにすとも云。)
よし野。にへ奉る。若なつむ。しめし野。ふゑ。
官とアラハ。
百。神。まつりこと。
位とアラハ。
のほる。山。高き。みしかき。上下。あけみとり。
うゐかふりとアラハ。(五位の冠をいふなり。)
昔男。ならの都。かりに行。(以上いせ。)

卅七人名

橘姫とアラハ。(日本武尊の妻也。海に入てしにし人也。)
浪風。あつま。うすひさか。(上野。)
くれはとりとアラハ。(又あなはとり。二人の名也。仁徳天皇の御時。呉の國より來れるきぬぬひ也。)
あや。きぬをぬふ。二むら山。なにはの宮。
そとおり姫とアラハ。(允恭天皇の妻也。後に玉津島の明神とあらはれ給ふ。)
ちぬの宮。(河内。) 濱藻。(なのりそともいふ。) 玉津しま。衣通姫。
日本紀 わかせこかくへき宵也さゝかにのくもの行ひ今宵しるしも
同 さゝらかた錦のひもを解かけてあまたはねすに只一よのみ

むまやとの御子とアラハ。（聖徳太子の御名也。）
南無ととなふる。もりや。法のはしめ。難波の寺。橘寺。いかるかの宮。片岡山。
浦しまか子とアラハ。（蓬萊へ至て三百年計にて此國へ歸りしと也。）
住のえ。つりたるゝ。かめ。蓬か島。水の江。故郷に歸る。しろかみ。紫の雲。玉手箱。はこやの山。

夏のよは浦島か子か箱なれやはかなくあけてくやしかる覽

松浦さよ姫とアラハ。（大伴のさてひこか妻也。さてひこ入唐せし時。ひれをふりてしたひしもの也。）
ひれふる山。妻戀。もろこし船。
櫻子とアラハ。（二人の男に思かけられて。せんかたなくして自害せし女也。）
かさしにせん。いもか名。花ちらは。いやとしのは。（萬。）あらそふ。
かつらことアラハ。（三人の男に戀られて。是もせんかたなくて。みゝなしの池に身をなけし女也。）
耳無池。
たけとりの翁とアラハ。（たかどりともいふ。かくや姫をやしなひし人なり。）
物語。かくや姫。その世の契り。（源。）雲井にのほる。

くねすみ。富士の烟。締（暗）あはせ。（源。）春の野。火をたく。（萬。）たはれあふ。（顯照歌。）
ちぬのますらをとアラハ。（又さゝた男。）
うなひをとめ。もとめつか。いく田川。おきつき。（つかをいふ也。）うき鳥。
是も津國に有ける女。二人の男に思かけられて。何もおとらす心さしのわりなく侍しかは。はかり事に。いくた川にいくらもあるうき鳥を。いつれにても射あてたらは。其あてたる男にあはんと約束し侍れは。此男何も鳥にいあて侍り。此上はせんかたなくて。此女いくた川に身をなけし也。其女のつかをもとめつかと申侍り。此二人の男もつゝきて水に入侍しかは。女のつかのそはに。同しく二人のつかをつき侍るか。後までなをあらそひ侍りとなん。委大和物語と云物にしるし侍り。身をなけし女の歌。

すみ侘ぬ我身なけてん津の國のいく田の川は名のみ成けり

人丸とアラハ。
柿のもとつ葉。うれしけれ。よし野山の櫻。ひしり。歌。ならの御門。三のくらい。明石の浦。
小野小町とアラハ。
野中。をちほをひろふ。そとおり姫。女の歌。

卌八雑類

さほ姫とアラハ。
霞の衣。春のすかた。玉柳。春の色を染。花のにしき。

たつた姫とアラハ。
紅葉。錦。山。秋の色。

山姫とアラハ。
布さらす。瀧。雲の衣。(袖とも。) まゆ。

山ひことアラハ。
こたふる。聲。ひゞく。なにかしの院。(源。) 夕顔。
(同。)

木玉とアラハ。(山ひこ同物也。)
きつね。(源。) 鬼。(同。) 宇治。(同。) 手習。(同。)

鬼とアラハ。
あかき。青き。一口。一車。かはら。面。くろつか。荘の宿。(伊勢。)

鬼神とアラハ。
日に見えぬ。歌。

天羽衣とアラハ。
うとはま。はふりこ。君か御けし。(いせ。) とひたつ。(いせ。) 雲分る。紫の色こき。(定家歌。) 岩ほなつる。雲の上人。

なやらふとアラハ。(鬼おふ事也。)
桃の弓。蘆の矢。ひな遊。(ひな也。源若紫。) いぬき。(女名。同。)

歌とアラハ。
やまと。なすらへ。そへ。たゝ事。たとへ。かそへ。いはひ。ゐひす。なかくみしかき。あつま。た。よむ。もしのかす。ならの都。神代。鶯。かはつ。濱の眞砂。ゐらふ。あつむる。木こり。

舞とアラハ。
左右。やまと。するか。もとめこ。こてふ。雪をめくらす。袖ふる。おきな。

占とアラハ。(ゆふけとも云。)
あし。石。橋。心。はひ。つし。かめのこう。道。めと。まさしき。あふ。とふ。みつのかしは。手。

御調(ツキ)物とアラハ。
そなふる。八十船。ゆるす。民のかまと。さゝくる。
御調物はこふよをろをかそふれはにまの里人数そひにけり

にへとアラハ。
ひつき。はらか。くす人。もすのくさくき。

つとアラハ。
みちゆき。はま。家。都。みつのこしま。

荷とアラハ。
をもき。あふこ。はこ。おろす。つくる。
薬とアラハ。
あはする。おひせす。しせす。紅の雪。雲にとふ。よもき。かめ山。るりのつほ。
瓦とアラハ。
鬼。やく。をし。硯。松。（杜イ）高。（寺イ）なにかしの院。
しつくとアラハ。
もと。袖。さほ。森。末の露。石。雨。山。ぬるゝ。木々。こけ。
したゝりとアラハ。
玉ほこ。しほ。
おとろかしとアラハ。（又かゝし。）
田。鳥。鹿。弓張の月。
そうつとアラハ。
山田。秋はつる。横川。
ひたとアラハ。（又鳴子。）
引。鳥をとろかす。ひたすら。（同。）うちはへて。
ひま行駒とアラハ。
白。黒。月毛。日を過る。鳥。月のねすみ。おとろく。はやく過る。

手習とアラハ。
父母。いろは。をのゝみち風。
あまのさかてとアラハ。（人をのろふ事也。）
うつ。このはふりしく。（伊世。）
門出とアラハ。
旅たつ。よき日。いく田の森。（歌。）
方たかへとアラハ。
なる神。一夜めくりの神。中川の宿。（源。）いたつらふし。（同。）とりもしは〳〵なく。（同。）
後　あふとのかたふたかりて君こすは思ふ心のたかふ計そ
つら杖つくとアラハ。
なけきこる。

卅九詞類

引とアラハ。
しほ。霞。よこ雲。舟のつなて。弓。綱。琴。まゆ。こま。柚木。（宮木。）
打とアラハ。
窓の雨。浪。碁。衣。杖。石の火。
たゝくとアラハ。
くひな。門。戸。ふなはた。手。
堀とアラハ。

金。井。池。川。太刀のめぬき。
かへるとアラハ。
浪。鴈。弓。寺。鳥のかいこ。蔦。袂。
ひろぶとアラハ。
椎。つま木。しほ木。玉。くわい。をち穂。
さすとアラハ。
しほ。入日。あさ日。月。戸。門。船。
亂とアラハ。
忍草。髮。かるかや。薄。柳。いと。
とくるとアラハ。
氷。髮。綱。船のつな手。
綱とアラハ。
三日月。有明。遣水。山道。なは。帶。いと。
長とアラハ。
髮。糸。命。玉かつら。春の日。秋の夜。船のつな手。
山鳥の尾上。かけのたれを。
みしかきとアラハ。
玉のを。夏のよ。秋の日。
くるとアラハ。
つなて。糸。しつのをた卷。つゝらおり。みくりなは。青
つゝら。

やるとアラハ。
文。車。心。使。
あくるとアラハ。
天の戸。まきの戸。浦島かはこ。
たゝむとアラハ。
いかた。あふき。文。ゆふ。
折とアラハ。
扇。手。枝。花。紅葉。
立とアラハ。
霞。雲。秋風。煙。錦木。衣。年浪。
たゆるとアラハ。
橋。花田の帶。中。
結とアラハ。
帶。夢。露。霜。草枕。岩代の松。ふみ。
つなくとアラハ。
月日。船。こま。鷹。
さそふとアラハ。
うき草。涙。木の葉。花。船。水。
こかるゝとアラハ。
紅葉。舟。たき物。思。
かくるとアラハ。

かつら。帆。玉たすき。橋。浪。
こもるとアラハ。
妻。まゆ。霞。鬼。初瀬。
まねくとアラハ。
山のかせき。ひはのはち。尾花。舟よはふ。袖。
落とアラハ。
うしほ。鳫か音。涙。月。木の葉。花。瀧。
ふるとアラハ。
すゝ。月日。雨。露。袖。糸。
あたるとアラハ。
たく火。犬。まと。うつみ火。戸。(弓の事也。まと)弓。
あらそふとアラハ。
まきのは。み山。つのゝ上。さくらこ。
さはるとアラハ。
蘆わけ船。雨。石。
いたゝくとアラハ。
霜。星。すへらきのおほん神。祭。
こゆるとアラハ。
關。浪。年。山。まかき。
くゝるとアラハ。
紅。岩間。鴫の下道。袖の涙。

四十數字
一重とアラハ。
梅。衣。袖。墻。うす雪。
三重とアラハ。
帶。扇。
八重とアラハ。
梅。櫻。山吹。菊。霞。雲。かき。しほち。足から山。
二度とアラハ。
玉椿。ほり川の水。たけくまの松。
一しほとアラハ。
紅。紅葉。染る。
四方とアラハ。
都。木末。山。あらし。

四十一重詞
たえ〳〵とアラハ。
かけはし。雲。煙。かけひの水。通路。
より〳〵とアラハ。
あふく。いと。舟。
つれ〳〵とアラハ。
すたれ。雨中。
村々とアラハ。

雪間。煙。里々。あしのかれは。

はる〳〵とアラハ。

野くれ山くれ。から衣。旅をしそ思ふ。

とり〳〵とアラハ。

紫。たきゝ。花紅葉。

かれ〳〵とアラハ。

虫のね。草葉の霜。人目。

四十二引合

春の始の心ナラハ。

年越て。春立て。年のは。氷とけて。(氷きえて。氷なかるゝ。) 霞そめたる。殘雪。(雪きえて。雪ま。) 春寒し。(春さえて。さえかへる。) はつ春。鶯のはつね。む月。

暮春の心ナラハ。

やよひ。春暮て。春のみなと。夏ちかし。春の別。(名殘とも。) 雲に入鳥。(ふる巣にかへる鳥。) 老の鶯。根にかへる花。(落花。) 藤。山吹。つゝじ。

春の心ナラハ。(春といふ詞をそへては。何ともいふへし。)

月のかすむ。(おほろとも。三日月。有明。おほろ月夜。) 風長閑なり。浪のとか也。(うらゝ也。) 永日。(遲日。春の日。) 春の曙。(朝あけ。) 春の夕。春の夜。春の雨。(はるさめ。) 鶯。きゝす。つはくらめ。(つはめとも。) ひはり。梅。(紅の梅。) 歸る鴈。(別のかり。) 柳。(青柳。) 早蕨。若草。(草の若葉。) もえ出る草。小田かへす。なはしろ。いといふ。櫻。(山櫻。遲櫻。) 花。松の綠。(はつみとり。) 山なしの花。桃。川つ。鳥のす。身の花。心の花。わかあゆ。つるの林。佛の別。東風。白尾の鷹。(つき尾。) なき鳥。水のぬるむ。

夏の始の心ナラハ。

夏のきて。卯月。衣かへ。春のとなり。卯花。夏木立。(青木立。) 櫻。(をそし。) 茂る木。郭公を待。(初音。) あふひ。神まつる。ひとへの袖。殘櫻。青梅。

夏の末の心ナラハ。

涼しき。(夕涼み。朝涼み。) 夕立。みな月。夏暮て。蟬。秋近し。泉。(水をむすふ。) 夏はらへ。(みな月はらへ。みそき。) 櫻あさ。夕かほ。撫子。(常夏。) 扇。夏もなし。(すゝしき心也。) ひむろ。

夏の心ナラハ。

みしか夜。(夏のよ。明やすきよ。) 明安き月。郭公。くひな。夏草。(草の茂る。) 夏山。夏野。あふち。五月雨。さ月やみ。橘。あやめ。まこもかる。早苗。藍。ともし。あゆ。か遣火。鵜舟。(鵜川。よ河のかゝり。) 鳩

とりの巣。わかたけ。(たけのこ。) とやこめの鷹。(毛をかふる鷹。毛をかふる鳥。) 麥の秋。

秋の始の心ナラハ。

あきの來て。秋の立。初秋。ふ月。一葉ちる。螢。(秋の詞を入て。) 蟬。(同。) 梅の紅葉。いなつま。さひあゆ。(をちあゆ。) とやたしの鷹。扇をく。七夕の心。

秋の末の心ナラハ。

なか月。有明。秋暮て。秋の別。時雨。(秋の詞露なとそへて。) 秋の霜。冬ちかし。かつちる紅葉。(木のは。) やゝ寒し。(秋さむし。夜寒。) きく。野の宮の別。うらかれ。(草野。) かれのゝ露。虫の音かるゝ。衣打。

秋の心ナラハ。

露。(露けき。) 身にしむ風。芭蕉。すさまし。秋のよ。長よ。秋の夕。(あした。) 霧。野分。月。(三日月。有明。) うき秋。荻。すゝき。(お花。) 萩。女郎花。かるかや。椎。ふち袴。きく。紅葉。色付。(木末。野山。あさち草。) 千草。名草のかるゝ。そむる野山。つた。くず。鳫。(はつかり。鳫のくる。) 鹿。(すかる。) 虫。松虫。すゝ虫。はたおり。きり〳〵す。寢中の秋。生をはなつ。衣打。(きぬた。) 露霜。うつら。鴫。櫨の紅葉。秋の日。はと吹。ひさき。歸燕。色鳥。ひやゝかなる。(風水なと。)

冬の始の心ナラハ。

冬のきて。はつ冬。神無月。時雨。木の葉。(落葉。) 雪をまつ。露の氷る。紅葉ちる。

冬のはての心ナラハ。

年暮て。(年の暮。) 春近し。春まつ。春の隣。梅。(冬木。) なやらふ。

冬の心ナラハ。

霜。あられ。風さむし。(風さえて。) 月寒し。月氷る。(有明以下同也。) 寒夜。(冬のよ。) 雪の花。雪。冬の日。氷。(つらゝ。) 湊の氷。水とり。をし。かも。あしろ。あしろ木。あしろもり。千鳥。木枯。枯野。すみかま。〔炭竈〕(岩焼。) 草枯て。霜枯。(冬枯。) 木の葉。(落葉。)

戀の心ナラハ。

戀しき。(戀しく。) しのふ。つゝむ。まつ。僞。(まこと。) 別。(別ち。) 恨。(うらむ。うらめし。) 名をおしむ。(名の立。うき名。あた名。) 契り。憑む。とふ。くる。(きて。) ふたり。獨ね。中。うき人。名殘。歸る。とむる。戀しぬる。同し世。(一世。) かたみ。うとき。忘るゝ。なく。夢にとふ。(夢にあふ。夢にきて。) 遠つま。(忍つま。一よつま。) 涙川。錦木。戀衣。袖ぬれて。

袖ほして。人つて。かね言。かた戀。（かた思。）いそく。つらし。むつと。空頼め。思。情。あらはれて。下ひも。人目をつゝむ。したふ。たのむる。かなたこなた。文。（玉つさ。）衣を重る。新枕。枕をならふる。後の碁。又ね。又と云。（後といふ。）きかへ衣。

述懐の心ナラハ。（述懐懐舊引合て三句にすくへからす。）

有増。命。（玉のを。）世をすつる。うき世。世の中。世の向後。世外。かくれ家。墨染の袖。（衣。）苔衣。（苔の袖。）捨人。身を捨て。うき身。まよひ。年たけて。（としたけ。）思出。夢の世。身の夢。思子。いやしき。數ならぬ身。心なき。（心ある。）後の世。さきの世。身の行衛。うき。あたし身。身のさかり。老。（老らく。）昔。いにしへ。身のふりて。かしらの雪。

旅の心とアラハ。

旅衣。草枕。宿。（中宿。）舟。（船ち。）あさたつ。都。古郷。むまや。みなれぬ山。我方。關こえて。かり枕。（かりね。）山こえて。野を分て。（山を分て。）旅やかた。一よ妻。うかれ妻。うきねの床。東路。道。便文。

山類。

山。嶺。尾上。麓。谷。（以上躰也。）たき。かけはし。（以上用也。）

水邊。（川の水邊也。）

川。たきつせ。（瀧川。）川上。入江。ふち。瀬。いせき。さは。池。みなと。（以上躰。）水。水上。なかれ。なみ。（以上用。）船。いかた。千鳥。水とり。あし。はし。（以上非躰用。）

海邊。

海。おき。浦。いそ。はま。江。みなと。（以上躰。）浪。しほ。うしほ。（以上用。）あま人。いさり船。あみ。千鳥。かもめ。蘆。（以上非躰用。）

水邊のゝき所。

夢のうき橋。小田かへす。布さらす。あやめふく。あふせ。涙の川。（涙の瀧。）みつわくむ。花のたき。老のなみ。（としなみ。以上川。）あしや。とまや。松原。まさこ。霞のあみ。白鷺。蘆火。みるめ。（詞。）しほたれて。（同。）一しほ。恨。雲のなみ。かひなき。（以上海。）

夜分。

夢。ねさめ。曉。よひ。曙。あくる。しのゝめ。いなのめ。かね。鳥。（鶏。）枕。とこ。螢火。よこ雲。月。たく火のかけ。ほし。ぬるといふ。（詞。）ともし火。やみ。ねや。莚。衣かたしく。袖をかたしく。

夜分のゝき所。

明はてゝ（明過て。）朝あけ。朝ぼらけ。世の夢。身の夢。花の夢。その曉。心の月。うつらの床。うきねの床。心のやみ。常のともし火。苔むしろ。かものかね。たきまくら。岩まくら。

永祿十年卯月中八日

〔以下一本〕

取本歌事

撰集は新古今集までの歌を寄合には用へし。堀川院百首の作者のよめる歌は。新古今集より後の集にありとも。本歌にとるへし。新式の法如此。近年任雅意これを用へし。不可然。此抄の引歌は新古今集の後の歌をも是を引のせて證歌にせんとす。本歌の付合には用へからさる者也。

斯集愚老爲少年人所書也。而流布世上有寫之罪歟。愛中納言羽林爲連歌稽古。聊以染翰畢。仍示愚老乞奥書依是錄其子細耳。

南華老人（花押）

〔右連珠合璧集以帝國圖書館所藏古寫本校合〕

續群書類從卷第四百九十九

連歌部廿九

雨夜記

宗長編

一前句付句引合すれは心一にて。付句斗引放は心別に成句あり。

夜な〳〵ねはや花の咲陰
梅か香のかすめる月を袖に見て

右前句に引合はねかひ也。一句は梅の匂ひに霞る月を袖にやとしてみたる心地也。

月のかつらをおらぬかなしさ
色ふかき秋の紅葉に袖ふれて

引合て。月のかつらの紅葉に袖ふれて折ぬ事のかなしと也。一句は色ふかき紅葉に袖をふれたると云心なり。

行へき道かいさや歸らん
雲かゝる尾上の雪をふみ分て

引合は。高山の雪をふみ分てはいかて行ん。いさや歸るへしと也。一句は山路の雪をふみ分たる心なり。

いつるとみれは歸るつり船
沖中の小しまに海士の家有て

引合は。沖の小島に海士の家有て。其家より出る舟かとみれは。家はなくして此方へかへる舟なりと付也。

一句は小島にも家有けるよと也。

吹風にとはりの錦かつちりて
あらたに神の拜まれよかし

引合ては。神前の紅葉ちりて。神の拜まれ給へとねかへは。紅葉の散ぬ心也。一句は神も形をあらはして拜まれよかしと也。とはりは戸帳也。

一前句は人の事なるに。禽獸草木の上にとりなせる句あり。

はなれかたしや古里の秋

荻に風いつより契りそめつらん

はなれかたきはましはりの中

折侘ぬはふき數多の藤（かつらイ）の花

もとのなみたにかへるおく山

鹿そなく妻とふ野へや明ぬらん

さきの世や人に思ひを付つらん

花の都の跡のまつかせ

きかすかほゝいかにうらみん

鶯のなくにも花はとゝまらて

一禽獸を人の上にとりなす句。

知らぬとりな（くイ）し雪の夕暮

そこはかと嵐の花に迷ひきて

男鹿の聲のしけき山本

ならの葉をふるき都にふみ分て

螢はおもひいはねともみゆ

しるしなき我戀草はくちねたゝ

一手爾於葉の文字にて付たる句。

音する水は氷とけけり

雪うつむ深谷の小川春寒て

名殘ある鴈は越なる山越て

歸るつはめわか春の空

我はひとりの秋のかなしさ

今夜月誰か手枕になれぬらん

みるは思ひそ猶まさりける

聞てのみ人はうからしつらからし

人はむかしの言の葉もうし

水なくて聲はなからの橋はしら

螢はおもひいはねともみゆ

しるしなき我戀草はくちねたゝ

あらはれぬれはかき絶にけり

明ぬ間の雲の遠山まゆにみ（にイ）て

雲吹風に月は出にけり

秋ふけぬいつまて人のまたるらん

一前句のやの字に付様（くイ）あり。

つるゝや鴈の遠かたの聲

海士小船ひとりうたひて出る江に

鴈のなみたやともに落らん

色かはる秋のは山の夕日影

一付句の五文字。前句の用に立されとも。一句のかさりに置事有。

とつる氷のとけてこそ行ヶ
水青き春の川邊のすて小船
木の葉なかるゝ山川のすゑ
男鹿なく峯の嵐に秋ふけて
暮るかすみはうすすみの色
雉子なく荻の燒はら雨をちて
一前句を取分て付様あり。
猶くちのこる櫻木の陰
太山路は去年の落葉を花にして(みイ)
花はたゝ陰も動す咲添て
梅かゝちかきともしひのもと
殘りてそ哀はまさる春の花
梅かほる夜の有明の月
うへてそ竹の陰に住ぬる
水青き小田の早苗の臥見山
曉きゝし入相のかね
子規行衞わすれぬ日は入て
一前句は他人の事なるを。我上に付なせる句有。
打わたす人そ行衞さひしき
水けふる川原の月に駒とめて
いつくの人そ心はつかし

山里の花にたゝすむ夕間暮
一いつくと云分かたき事を付たる句。
たひねはいつく入相のかね
初せ山四方に花さく陰わけて
いつち行てか枕さためん
二道におもひうかれて夜も更ぬ
いつの夢とか身も消なまし
露の秋霞の春のあたし世に
一山類に水邊を付。水邊に山類を付て。景氣を本としたてたる句。
柳ちり(かれイ)立遠の川つら
山(里イ)陰にさし入淺き(くイ)門古て
畑たつ麓の里は木かくれて
小ふねすて置江こそくれぬれ
一前句の末の五文字を付句の枕詞にしたる句。
程なきに波風さはく蜑小ふね
はつせの川そ岩つたひ行
人にさていかゝ語らん沖津波
立田の山の秋の色〳〵
一付句の七文字を半臂としたる句。
そこと難波の夕暮の空

郭公あしの忍ひになき捨て
うつら鳴野と庭そなり行
あれぬれは（ゆけはイ）尾花かもとの里ならて
一詩の對句のことくに付る句。
越にし山（峯イ）は八重の白雲
沖つ波月の千里に船出して
さよのほたるそあをく明たつ
白妙の雲の端山に蟬鳴て
山陰の月や兎のふし所
秋の入日（タイ）にからす（うつらイ）鳴なり
一前句にいへる事の端的の事を付たる句。
さひしさつらさ誰にかたらん
花をつる比しも雨を夜きゝて
我心誰にかたらん秋の空
荻に夕風花（雲イ）にかりかね
しのはんとてや此比の空
小萩散荻に風ふく夕まくれ
一はかなきと云句にはかなき事を付たる句。
はかなき事を思ふもそうき
いかにせはちらしと花にあくかれて
はかなき事を思ふ夕暮

雲風にいひやる斗待侘て
一前句にいへる處の樣をしたてたる句。
田舍をとへは物そかなしき
かすむ野の竹一村に花咲て
たれかはとはんかすむ山陰
道のへの柳木ふかく梅咲て
一前句にあちきなき事をいへるに引かへて。慰事を付たる句。
忍ふともやはかへるいにしへ
あた人となりてもくらせはなの春
二度は人と（にイ）ならしと思ふ身に
只月にめて花にくらさん
一前句にとはゝやといへる句を。不審なる事を付たる句有。
あまりうき世を人にとはゝや
別れてふ事を誰身にはしむらん
世の古事を松にとはゝや
花を風いつより散らしそめつらん
とはゝや神のそのかみのみち
法をなとしめの内にはへたつらん
一前句の誰にかとはんといへるを。心なき物はかなしと付たる句。

誰にか春の行衞とはまし
別れしは霞斗の朝ぼらけ
秋になるかと誰にとはまし
月をたゝ住人なれや草の庵

一付句の末にかなを添て心うる句。
心の末に賴む夕くれ
待もせし恨もせしと云捨て
のこるや木の葉山風の聲
おもふへきあはれは花にことつきて

一心くたけたる句に景氣を付たる句。
罪のむくひはさもあらはあれ
月のこる狩はの雪の朝ぼらけ
うき身おもへはあちきなの世や
遠山の雪の夕につりたれて

一前句に景氣二句續たるは心にて付る也。
薄霧にうかへる船の朝ぼらけ
秋のあはれを何にたとへん
浦霞む難波の春の朝朗に
海士もなとかは心なからん

一景氣に景氣を付たる句。
深山の庵に衣うつ音
松（杉イ）の葉にかゝれる月はかすかにて
煙たつ麓の里は木かくれて
小船すて置江こそくれぬれ
露白き野の春雨の跡
橋霞む山本遠く夜は明て
引わかれ行横雲の空
春の夜の月に一すし鴈鳴（猿イ）て
きりに明行志賀（辛崎イ）のうら波
秋の夜の長等の山は鐘なりて
日もくれなひのうす雪の空（色イ）
秋ふかき廣野の末に富士見えて
遠山の端の秋のさひしさ
天津鴈沖こく船のつな引て
時雨の跡の露そ身にしむ
虫の鳴野への遠山色付て

一心の景氣の句。
山やね覺をかきり成らん
子規雲間の月に待更て
霞に雪のたまれ遠山
こす波の花のうき鳴明る夜に
簾の内のきぬの音なひ

軒近き花の匂ひに月更て

一詞の景氣。

　すゝ吹風の音はいつまて

よしの山帶の古郷さへて

一前句何を付ても付へし。又させる事有間敷句に細なる事を付出したる句。

　心うれしき春は來にけり

あひに逢蒔花寄に梅咲て

　鶯に殘る有明の月

春の夜の棚なし小船音更て

　起てみつからむすふあかつき

色つらきはなたの帶の別衣に

一前句秀句過て聞にくきを。やすく取なして付たる句。

　我袖のつゝりさせとて鳴もうし

身に寒くなる初霜の聲

一逢といふ詞に戀斗を付へからす。

　あへは中〳〵言の葉もなし

吉惡のことはりわかぬ末の世に

　あはんかきりを空にこそまて

影薄きかたわれ月の初秋に

　あへは又心ならひの猶そひて

山路やすらふ夕立の雲

一前句に侍る詞の内を捨て付様有。

　櫻散紅葉ゝくつる山里に

ひとりくれ行木からしの風

　櫻紅葉不付。但木からしは取付也。

　庭に入たつ木からしの風

寒き日は野への小鳥も人なれて

　野への小鳥庭に入たつと付る也。木枯不付。寒日にてかへたり。

　澤水の半は土にうつもれて

深田をうふる賤の哀さ

　田植る賤か土に埋ると付たり。澤水をは捨たる也。但田の邊に澤水なかるへきかは。

霞わけつゝのほる日の影

山高み花の梢のあらはれて

　高山の花に我分登る事也。日影不付。但花咲山の霞に日かけなかるへきかは。

跡よりきゆる山のうき雲

行人の袖白妙に雪ふりて

　行人の足の跡より雪消ると付る也。雲不付也。但雪山に雲なからめやは。

眞砂の露をはらふ秋かせ
月寒き夜の欄干に雁落て（鳴イ）
雁に露をはらはせて秋風をはすつる也。但秋風の折節
なり。
かくれ住ぬる山のしら雪
行水も冬籠かと氷る日に
氷の下に水のかくれてすむと付たり。雪の山不付。但
雪の山水也。
一思へはのはといふ字に付様有。
思へはとはぬともうらめし
とけてねし一夜を今は命にて
おもへは今に似たるいにしへ（ならしイ）
絶ねたゝ見すしらさりし中そかし
思へは雪ははやく消けり
昨日みし富士のねいつら朝霞
思へはといふはの字せいはい。思ひ〳〵ておもひかへ
せはといふ心なり。
一前句の心をあらぬやうにとりなしたる句。
世にあふまてと身をかくす人
老の後つかへん道も安からて
前句は商山の四皓か事也。付處は范蠡か事に取成し
たり。
いつの時かは春にまされる
世はいとゝ花散る比やうかるらん
前句は春のいみしき事也。付心はいつより春の空らし
と也。
梅かゝのいつくよりかは匂ふらん
朽木に咲る花の哀さ
前句はそこはかとなく匂ひ來たる梅也。付心は朽たる
梅の立枝に花一二咲て。匂ひのふかきと也。
おそくみつるは悔し松しま
老ぬれは思ひし事のかひもなし
前句は行てみて云たる事也。付心は見はやと云内に老
と也。
いつくかは都にまさる春の花
遠山櫻猶尋ねみん
前句は都に増る花はあらしと也。付心はいつくにかあ
らん尋はやと也。
いつれの峯か住よからまし
尋しよ此世の外はなき物を
前句は尋たる心也。付心は尋しとなり。
今一こゑをなけ郭公

櫻さく東野の森の朝くもり
前句は一聲鳴たる上に云たる心也。付心は夏なかんより此櫻の朝くもりに鳴かし云へり。
花盛秋のあはれも何ならて
枯野の松の雪の夕くれ
前句は春秋の爭也。付心は枯野の松の雪の夕暮は。春秋の哀にも増れりと也。
一こそと云句に付樣二種侍り。とかめて付たる句。
人こそ人をいさむとはきけ
螢なと集めぬ窓を照らん
梅こそ春の色をあらはせ
雪殘る深谷の櫻陰寒て
秋こそ人のおもひとはなれ
誰も皆心うかるゝ春のそら
佛法僧と鳥もこそなけ
人はなと詞もあたにもらすらん
露こそのこれ秋の手枕
山遠く月は入野の花すゝき
とまりとてこそ舟はよるらめ
松立てる遠山本の夕時雨
昔をは人の語るもはるけきに
花こそ殘せ志賀の古郷
せめて契りしくれなたかへそ
思ひ出てとはん事こそかたからめ
一とかめぬ付樣有。身にしたかふこそと云なり。
波こそ見えねいつち行覽
はる／＼となきたる鴫の打霞み
ほとなの月や西にこそなれ
秋ふかき音羽の梢小倉山
見てこそいとゝ戀しかりけれ
なき人の庵に殘る山さくら
一そと云句に付樣二種有。あたりて付たる句。
ことたらぬ身そつかへ侘ぬる
道／＼の正しき御代に生れ來て
櫻そわかぬ峯のしら雲
青柳のかつらきしるく花咲て
とまるそおほきあふさかの關
人歸る山さくら戶の暮る夜に
あふさかの山さくら戶の關守は
人やりならぬ花や見るらん
心のなきそ寺を過行
法の庭人は數／＼立よりて

一又そふて付るそ有。
　色〳〵わたる世の中そうき
櫻花風をいとへは雨ふりて
　むかしを忍ふ袖そ露けき
里はあれて花のみひとり匂ふ野に
　海士の衣そ又かへもなき
しほれたる袂を夜るは片敷て
　とふそまとの情なりける
人を待宿に花ちる春くれて
一いかゝせん。心得様色〳〵有。思案分かたきをも云。又落つかぬ事をもいふなり。
　したはゝせめて哀とをしれ
つれなさは身に限るとも如何せん
　よしやしはしは思ひなくさめ
身に限るうき世なり共如何せん
　仕る君にうらみのこすな
人による恵み成とも如何せん
　心よせめて一すしにあれ
つれなくて誰にも果は如何せん
　身につらき心ならひは如何せん
とけぬを人のくせとたにみよ
　力不及如何せんと打云たる心なり。
　絶てやはおもひありとも如何せん
萑の宿の秋の夕暮
　夢打覺て思ひやる床
戀ちにも長き闇をはいかゝせん
　唐土までも知る人そ知る
心なき秋のね覺をいかゝせん
　いかや(う脱歟)にしてよからんと思ひ煩て。打歎きたる心也。
發句 いかにせん花を急はみねの雪
　花をいそけは雪末になる。又雪をしたへは花跡に成。
　いかゝせんと我了簡に不及事なり。
一物をといふ詞に二つの心有。當て付たる句。
　うき世中よさもあらはあれ
ちらぬ花老せぬ人もなき物を
　とくる心や神にまかせん
言の葉を人につくすはうき物を
　前句に有も同し事也。
先きえ行は有明の影
　陸奥は廣き國そと聞物を
あこやの松にさわる月かけ
　かへさるゝ文は我さへみぬ物を

何をすことにうき名立らん
一又從て付たる句。
　目の前にゝ嫌す事はなき物を
春秋つくす庭のつき山
　むかしにはかへるためしもなき物を
老木をかくす花のあはれさ
　更て後出へき月もある物を
かねのみたけの秋のあかつき
たのもしなあかつき契る月影のかねて住らんみよしのゝ嶽
一前句にことはりをせめたる句には。付句はうき〱と云なすへし。
　武藏野に秋の幾日を送るらん
かやか末葉の有明の月
　身を捨る心世になとなかるらん
歸の末の秋の夕くれ
　おもはぬを思ふに我身つかれ來て
入山每の華の春風
　梢にも根にも歸らす花散て
哀いつくに春は行らん
　眞砂の數そおもひとはなる
かり初の恨を我は花として

かたるも更に語り盡さし
一ふしの恨となして捨ねたゝ
又余りに安き句をは。やらかましく付候へし。
　山ほとゝきす過て行空
いつれそや花の明ほの夕月夜
　春秋の哀いつれと分かれて
水鷄なく夜の月ほそき影
一前句を分て別に付なす句。
　身をたすくるも神の哀み
うへし田の稻光して降雨に
　人の身を田の實になし。神を雷に付なしたり。
　暮ぬる色に替る浦風
霜白き椎のは山の秋更て
　浦風を椎のはの裏に付なし。暮を秋末になる事になせり。
かすかなるかねを横川のしるへにて、
う船さし捨てかへるあかつき
　橫川寺の鐘を夜の川に取なす也。
身はなき物のなにかくるしき
欵冬の花はいく枝も折てみん
　身を山吹の實の無に取なせり。

なると吹こす風のはけしさ
眞木の屋も住うき斗秋暮て
　名所の鳴門を戸のなるに取なせり。
なるとよりさし出されし舟よりも我そ寄邊のなき心ちせし
一五文字を付句まて用たる句。
夕の雪にむかふ遠山
　忘れしな春の明ほの月の秋
契りきや時は長月花は菊
　今朝置霜に初鴈の聲
物淋し（ろイ）峯の松風瀧（ちる山イ）の音
　時雨か雲に木葉ちりしは
あしたの霞夕くれの空
　山里は花の匂ひに鳥の聲
一小き物に大きなる物を付たる句。
せはき袂をくたす蚕の子
　大海の遠き鳴干に求食して
はやきり／＼す袖たのむころ
　露のくれ霜のあしたに野は枯て
露の情そなくさめとなる
　海よりも人をうらみはふかき世に
みるさへうしや、筆の跡

朽殘る松かうら島波こえて
一大成物に小成物を付たる句。
打出て見れは四方そ遥けき
　亂碁に手増方の地は廣し
雲間の月の影そすくなき
　おく山の岩のとたえに水すみて
見えす成行ふる里の山
　草木なき砌はたれかあらすらん
くるゝ（をイ）さかひそ猶あはれなる
　籠内にたのむやとりと鳥のねて
一大事の難句に付様あり。
佛法僧と鳥もこそなけ
　人はなと詞をあたにもらすらん
物いふ鳥の聲もこそあれ
　飛螢もへてはなにを思ふらん
初瀬にますはよきの神垣
　迷ひてや我世をあしくいのるらん
鴎ににたる人そしつけき
　馴ぬれは波のさわきの世をしらて
前に出ぬそ新參なる
　ありへはとおもふに身をや頼らん

車の右にのりし歸るさ
人の見る馬場のびをり時過て
一うきにつらきかなしきは同し趣なれとも。一句のうちに結へは心少更る也。
是もかたみの袂のぬれきぬ
にくからぬ人ゆへ愛はつらからて
うらみ侘つゝ立やかへらん
うき時はつらしとおもふ宿そかし
同し思ひのなみたともかな
暮毎に昨日のうきはつらからて
なにゝか秋の淋しかるらん
世のうきにかへはつらさはなき物を
おもひわくうへこそ愛もつらからめ
人にしみたる心なになり
聞もひとりとおもふ世の中
誰か上か身のうき程はつらからん
此句とも思ふに。うきと云は大身にて。つらきかなしきは一入ふかき心侍る也。
一かけ手爾於葉。
今幾夜かはありあけの影
朝な〳〵うつろふ野守出て見よ
日も夕暮に宿やたのまむ
夜も更は枕いつくにかりころも
因幡の山の松そ久しき
秋風に名殘おほくも立別れ
うらみもはかなおもひすてはや
恩にてうへき道かは和泉の浦
明れは雲や立別らん
かへりこし身を浦島か玉くしけ
あやめも見えぬ秋の夕暮
月待といへは泪のあやにくに
うつゝといふもたゝ夢の内
都出ていく夜旅ねのうつの山
一うけ手爾於葉。
浮雲にこほるゝ時雨玉あられ
あられん物かひとりなるやと
遙なる鹽干の浦の夕なきに
やくや物思ひわかむねの内
なかむれは夕暮淋し峯の松
待人いかに月いつるそら
またあはて人のうらみはよもあらし
あらしの花にたれをまつらん

うらむ（語へイ）へき理もなし夢うつゝ
宇津の山へにむかふふしのね。
一只と云詞二種あり。心のなき句、
たゝありなしのちきりなりけり
人の身はかゝみのうちのかたち（みイ）にて
たゝ時の間にかはるうなはら
鹽みては汀の松を沖にみて
たゝ一すしの思ひなりけり
花にうらみ木葉に人を待侘て
ふるき都はたゝ秋の風
下葉ちる木すへのかた（月イ）にむしなきて
一又さなからと云心に付たる句。
淋しき空はたゝのへの露（春イ）
雲雀鳴庭の芝生に里ふりて
わか山とたゝ月は入けり
人すまぬ尾上の宮の御簾くちて
かへるさはたゝいなつまのかけにゝて
横雲出るあり明の月
袖の泪はたゝ秋の水
夕間暮鴫立澤の草の庵
かくてふなるはたゝもしほくさ

湖の汀に松の葉はおちて
一哀と云にあまたの心あり。月を哀むといふはあいする心也。おやを憐むと云はからう〳〵の心也。物をほむる心もあり。恨ミをかくる心もあり。
残りても哀は増る春の花
梅かほる夜のありあけの月
あはれむはいかなる人そ旅のやと
うきかりふしのあかつきの雨
猶こそたのめ待はよはらし
村雲も月に哀のそひやせん
淋しきもうきも心よ草の庵
哀ともきけあかつきの雨
夕の物とあはれなりけり
身にそしむ心にやとれ秋の色
いつれも面々付句也。面白付也。
一詞に付る句。
住吉はたゝ此（里イ）浦の名のみにて
なか（浦イ）ゐの濱にみちか夜の月
是もいけるをはなつかみかき
秋更き木綿付鳥の聲すなり
なとうくひすの竹に鳴らん

春淺き遠山鳥の里に來て
　かみかき斗のこるあはれさ
里〳〵の灯きへて更る夜に
一前句に本歌詞多く出たるには。付句は仄に其心を顯へし。
　雪うちはらひいそく袖みゆ
またるゝや駒をもとゝめあへさらん
駒とめて袖打はらふ陰もなしさのゝわたりの雪の夕暮
一前句に本歌の詞仄にあらは。付句に其歌と聞ゆる樣に付也。
　いとゝなかめもしつかなるころ
夕なきにやくやもしほひ我思ひ
こぬ人をまつほの浦の夕なきに燒やもしほの身も焦れつゝ
　あらぬ心と戀そなりたり
あらたかのいつなら柴のなれもみん
み狩する狩場の小野のなら柴のなれはまさらて戀そ增れる
　わか物おもひかきりやはある
長き夜も明ぬる閒の隙みへて
終夜物おもふ比は明やらてねやのひまさへつれなかりけり
　泪をさそふあかつきのかね
老よはや身を浮草のねをたえて
侘ぬれは身を浮草のねを絶て誘ふ水あらはいなんとそ思ふ
一人のあまねく知たる歌をは。詞を少とるへし。

　朝霧かくれのこるありあけ
秋風に島ときいつる船みへて
ほの〳〵と明石の浦の朝霧に島かくれ行船をしそおもふ
　よものけしきも春めきにけり
難波津のむかしをほゆる君か世に
難波津に咲や此花冬籠今を春へとさくやこの花
　かへるさは時雨る泪かきくれて
又逢みんも定なの身や
神無月ふりみふらすみ定なき時雨そ冬の始之けり
　音に知らるゝ秋のはつかせ
さやかなる色こそみへね夕月夜
秋來ぬと目にはさやかにみへねとも風の音にそ驚かれぬる
　くらき木陰の露分る道
つたかえて色つく秋も今やらん
　つたかえてと云て。宇津の山とせぬ所宜とそ。
　鐘さへそこと聞わかぬ聲
行心もろこしよりや遠からん
遙なる唐土までも行物は秋のね覺の心なりけり
　つゝむ名も世にかくれなく成にけり
むかしなからのやまと言の葉
さゝ波やしかの都はあれにしを昔なからの山さくら哉

よみ人知らすには入たれとも。忠度か歌には知らるゝ也。

けふをまちえて神まつる里

ちきりせし數あらはさはつみもなし

近江成つくまのまつりとくせなん難面人のなへのかすみんつくまとせぬ所よろし。

夢の行衞はたゝ鐘の聲

杜宇過るまくらをそはたてゝ

時鳥鳴つるかたをなかむれはたゝ有明の月そのこれる

ひとりわかたゝすむ方へ梅咲て

人のくるをそうくひすもなく

梅の花みにこそ來つれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

おもひらかるゝ空もはつかし

みぬ人をたゝふく風にこひそめて

世中はかくこそ有けめ吹風のめにみぬ人もこひしかりけり

一本歌の心詞にて余の物を付たる句。

袖におち來る瀧もはかなし（はつかしイ）

よそにのみ聞こし物をうきわかれ

音にのみ有と聞こしみよしのゝ瀧はけふこそ袖におちけれ

こなたかなたの松風のこゑ

かた糸の一むらすゝきかるゝ野に

片糸をこなたかなたに撚かけてあはすは何を玉のおにせん

一前句に本歌の詞不出を。付句に其歌の詞言出す句。

ふかきおもひそ病ともなる

うすくこきのへのみとりの言の葉に

薄くこきのへのみとりの若草に跡まてみゆる雪の村きへ

此歌を案して是合成なり。

したふ心のなにのこるらん

わすらるゝ人に命のたへもせて

忘れしの行末まてはかたけれはけふをかきりの命ともかな

泪の袖はいつかとはれん

朽ん名もおしからぬまて戀侘て

うらみ侘干ぬ袖たに有物を戀にくちなん名こそおしけれ

くる人なしのやとそふり行

いせのうみやおふのうらみは身につみて

何ゆへにそこの海松も生の浦に逢事ならの名には立らん

手にもたまらぬ俤そうき

拾ひ置て泪の玉はみせまほく

こきちらす瀧の白玉拾置て世のうき時の泪にそかる

よそにうつろふ事をしらせそ

[illegible]きかたゝいほり數多のほとゝきす

名のみ立しての田長はけさそなく庵あまたと疎まれぬれは

一本歌の心詞を少取て付たる句。

木の葉盡して冬は來にけり

さのみなと泪の袖に時雨らん

やよ時雨物おもふ袖のなかりせは木葉の後に何をそめまし

捨たる世をはわすれはてけり

花鳥を深山の庵に友なひて

柴の戸に匂はん花は遮莫なかめてけりなうらめしの身や

わすれんとすれは人の俤

逢ぬ間もありつる身そと慰て

よし別れあはてたにこそ過しつれとは思へともぬるゝ袖哉

大方の空も身にしむ物おもひ

月をもめてし戀しさそそふ

大方は月をもめてし是そ此つもれは人の老となる物を

おもひそ增る秋ふくるころ

在明に云し斗の月をみて

今來んと云し斗に長月の在明の月を待出つる哉

一其歌の俤にて付たる句。

ちきらし物よ我そはかなき

いつはりの在世にたれをたのむらん

かはらん程を思ふさへうし

いつはりの在世を知るも泪にて

いつはりのなき世なりせはいか斗人の言の葉嬉しからまし

ふる里淋したれか又來ん

あらしたに花の跡とへ夕間くれ

ちりにけり哀うらみのたれなれは花のあととふ春の山風

長閑にたれか身をはたのまん

風渡る秋の草木の露をみて

秋風のよもに吹來る音羽山何の草木か長閑ゝかるへき

かすめる程そわく方もなき

けさは又去年か今年の空さへて

春立といふ斗にや三吉のゝ山もかすみて今朝はみゆらん

春をは人のおしまぬもなし

花そうき何の心にちりぬらん

山陰にすまぬ心のいかなれやおしまれて入月も有世に

有し情をしたひてもみん

つらしとはおもへとたれをたのまゝし

いつはりと思ふ物から今更に誰まことをかわれはたのまん

目にかゝる雲たになしや天のはら

ふしにはれたる雪や高けん

我世をはけふかあすかと待かひの泪の瀧といつれ高けん

一詞斗を云のこす句。

淋しさは夕くれのみか秋の山

空ふく風におきのはのこゑ
淋しさは夕暮のみに限らす。空ふく風も荻の聲かといへり。
いかにして都を思ひはなれまし
春を過せは又秋の月
春の興を過せは。又秋の月にも名殘おしきみやこそと也。
山に住身のいつをまつらん
治れる世は有ともの我よはひ
治れる世は有とても。我身老ぬれはかひなからんと也。
（發句）夏は手に山の井ならぬ水もなし
むすふ手の雫ににこる山の井のあかても人にわかれぬる哉
むすふ水。毎にあかぬ心也。
つかひもおもふ程はつたへし
玉章にふての限は書やりて
玉章にも細に書。使にもくわしく云聞せても。我（尚イ）心の書あらはしかたきと也。
一本歌の心をかへて付やうあり。
閑なる谷にも松は風ふきて
世のうきよりは山の淋しさ
山里は物の淋しき事こそあれ世のうきよりは住よかりけり

木の葉の後の陰そかはれる
冬こそとおもひし月に小夜しくれ
秋は猶木葉かくれもくらかりき冬こそ月はみるへかりけれ
祈るしるしにあへるはつせ路
君か代ははけしきかせも治りて
うかりける人を初せの山おろしはけしかれとは祈らぬ物を
おもふ心（思ひイ）のはかりもそなき
逢事をかきりとたれか云つらん
我戀は行衛も知らす果もなし逢ふをかきりとおもふ斗そ
一本歌にうち任たる句。
たれをうらみんことはりもなし
世中はもにすむ虫の泪にて
蜑のかるもに住虫の我からと音をこそなかめ世をは恨めし
一句は我からの泪と云心也。
秋風寒み夜の長き比
ひとりねはおはすて山の月なれや
我心なくさめ兼つ更級やおはすて山に照月をみて
一句はなくさめ兼たる心也。
一もと云手に於葉に付やうあり。
なれもやもめのからす鳴也
風さはく夕山本のひとつまつ

旅にも秋のつらさこそそへ
草枕露も泪のたくひにて
花も盛をみせぬ朝かほ
月をそく出れはあくる東雲に
一前句に分かたき物二ついへるに。又別の物を取出したる句。
春秋の哀いつれと分兼て
水鶏鳴夜の月ほそきかけ
待も別れもうさはかはらし
花も猶心つくしの木の間にて
夢つゆのみかあたのことはり
めくる世ををもへは水のあはににて
一心なき物に心を付句。
ひとりかすみをたのむ山陰
知られしの花の心を風も見よ
花にゆかすは末やまよはん
やまふきをしるへにかへる春もうし
あたらさくらそ一かたにちる
けふのみとおもはて夏を花もまて
おもふとちとやましる哀さ
月影に花のやとかる草のつゆ
心も知らす山風そふく
更わたる月は雲をもたのむらん
うきもさこそと舍をそかす
松に風かへるや花に別るらん
松風や山路の程を遣らん
しほるゝ花を人はたをらし
一重詞に又重詞を付たる句。
おもへともおもはぬをたれ思ふらん
人にも人のうきをきかはや
こゝろ〳〵をかたりてそきく
なれ〳〵しむかしの人をこひ侘て
一詞に取合せすして心斗にて付たる句。
おしめははやく月の入山
松風はうらむる花に猶ふきて
夢にもなさてなにうらむらん
跡もなき昨日の花の山おろし
侘ぬる身にも年はそへけり
玉をみかく春のみきりのいかならん
跡こそみへね千鳥なく也
眞砂より雲に飛鴈數きへて
ねかはゝ戀のあはさらめやは

呉竹の此うきふしを人もしれ
　雪中筝の故事也。
一有増と云句。述くわいのみに不限。何事にても付たり。
　末も通らぬあらましの山
花に来てもみちをなとか忘らん
　あらましの徒ふしの月をみて
ちきらし物をあきかせそふく
　あらましの山こそくるゝなかめなれ
雲か花かもあすやたつねん
　人はしらしのあらましのするゑ
はかなしや空にしめゆふ物思ひ
一てはと云言葉の事。
徒に行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ
わすれては打なけかるゝ夕かな我のみ知て過る月日を
　海士のたくものさそな露けき
夕波にきへてはもへてとふほたる
　いくたひならん月にうき雲
秋の風時雨ては又更やらて
　一すしのおもひにさらはなし果よ
とたへては又花に山風
一かなしきと云事は面白事もあり。

須磨の浦の有明の月になく千鳥かたふく月はなれも悲しき
　露をかなしむと云は愛する心也。おやをかなしむと云は
　いたはる心也。子をかなしむと云は情をかくる心也。一ら
　らかなしきと云は淋敷心又面白心也。
一又と云字に付様あり。
又とふに人の誠はあらはれて
しはし程なき夕にもなせ
　又時鳥つれなきもうし
うくひすのまたるゝ雪の山里に
　又帰へき世ともおもはす
今一めおさめぬさきに見まくほし
　又うき事に袖やしほらむ
おもひ立身を一きはにすてもせて
　又帰るさは千鳥なくなり
船のほる雪の夕の雁のこゑ
　又ともすれは物そかなしき
跡もなき苔路の花をひとりみて
　又立帰るおもかけもかな
たき物もおなしおもひの烟にて
一無名の鳥に名の鳥を付様あり。
　おくれてかへる鳥のこゑ〳〵

村鶏ねくらやせはく成ぬらん
　春の鳥たになかぬおく山
聲淋しかすみの内にとふからす
　鳥色〳〵の池のゝとけさ
朝日さす堤の霜に鴈なきて
　冬の空にそ鳥をうらむる
夜半の月蘆のうきねに影澄て
　みなれぬ鳥のかよふ山本
空寒み雪をつはさの夕からす
　とかなき鳥をかこつはかなさ
初鴈のこゑにも人を待侘て
　鳥の聲さへ春めきにけり
曉をさかひに年や越ぬらん
　いかなる鳥そ雨になくこゑ
夜な〳〵の月につれなき時鳥
　鳥の音も聞へぬ方とすつる身に
山時鳥なとまたるらん
一花に花の名を付様あり。
　まくらにかるゝ花はうらめし
梅か香の名殘に春の月おちて
　今年の花もあたにちる比

うへ置し若木のさくら咲そめて
　花をは手折しきみをそつむ
梅かほる曉毎におきいてゝ
　むかしのまゝの梅か香そする
花にのみなと末の世のなかるらん
　尋來ぬれは花ものこらす
いかにして風にかくさん山櫻
　花こそもとの色はかはらね
山さくら朽木のあとに又生て
一ねかひの句に。上下にてねかひたるもあり。大ねかひ又とねかひとも云也。又一方にてねかふもあり。これかひと云也。これかひと云句。
　試かてら尋ゆかはや
さく花を木の下住のはしめにて
　春に此まゝすめる世もかな
山里の又みもなれぬ花に來て
　黑かみの白くなる迄なからへて
みはやつかふる君か行するゑ
　たましひは此世にひとつとゝまりて
君かあたりの雲とたになれ
　入日のかけをとくねかははや

出かての霜夜の朝戸おし明て
おもくとも罪は心に消つへし
新島守を君に見せはや
一小ねかひと云句。
すつる身は木ふかき陰に庵しめて
うき世の月よみへしなかめし
きへはきゆへきおもひならはや
はかなくも身を秋ちかくとふほたる
わか住ほとや山をかくさん
峯の雲棚引谷に庵しめて
一とりなす句は云過したるも不苦。
しほむかつらをなけく天人
雨そゝく春の藤江の浦さひて
三は四はに家そさかふる
武士のゑひらの矢なみ数そひて
おもふねかひのはやき御手洗
はなつやのいたる所は心にて
一付句より云もて來る句あり。殊更前句を付のくへし。
末は廣野にしくれ行空
一筋の雲をたな引はしめにて
音もあられのあらし木からし

瀧津瀬の落葉か上に玉こへて
つく／＼しつむのへの寒けさ
花はまたさかぬ木かけの下蕨
つゆうちはらひ侘つゝやねむ
歸らしよふりにし人の花の陰
はや冬かれをうつす山の端
雲とみし昨日の花の夢覺て
草のいほりに松風そふく
秋ふかき花のあるしは音もせて
年はけふ逢坂山の關こへて
くれては春のいつち行らん
ふくとしふけはすこき秋風
かるゝ野の一村すゝき一まつ
聞は千里に衣うつ音
隔のなく有明の月に起出て
末はあまたの水のはや川
高ねよりみれは一すし瀧おちて
一まてと云手爾於葉大切也。
月なきやみの空はいつまて
木の本のもみちに月のこゑ有て
世にあふまてと身をかくす人

老の後〻かへん清〻やすかれて
　いつまて草のかゝるつゆしも
武蔵野を行〻は秋過冬の来て
　今こんまてとたのむ面影
わすれしの人の誠や夜半の月
　山まてとこそちきり置つれ
ちりつもる床におもはぬ落有て
　けに老まては知らぬつゆの身
花にさけ松（桂イ）の陰なる秋の草
一けなると云手爾於葉を付る事。
　秋寒けなる木からしそふく
おしれもる浅山本の草の庵
　やすけなる身もよそめ之けり
水を友山をとなりの草の庵
一けきの手爾於葉を付る事。
　聞はさやけき澤水の音
船下すふしみの月の更る夜に
　山里のさやけき月に人はねて
風や木の葉の衣うつらん
　神代の月もかくやさやけき
天の戸の明方遠き秋の空

　音そのとけきふる里の雨
つゆはたゝ忍ふにかゝる軒くちて
一かと云手爾於葉を付る事。
　曇かとみれはさやかに空晴て
木の葉の後は冬の夜の月
　うらかおもてか衣ともなし
東雲のあしたの山のうすかすみ
　松よりおつるつゆの下草
ふる里の花は野はらのこすゑにて（松よりの付句也。）
　まとおになるはかはるそなたか
春の来る東の山のかすむ日に
一此と云詞を付る事。
　此朝より人やかはらむ
たのまれぬつゆのちきりに秋は来て
　此山本は眞柴たになし
秋寒し烟もたちぬ旅のやと
　是や此木葉朽葉の岩ね松
苔にさひたる太山路の月
　此うち川のたち花の嶋
船のほる水の水上花咲て
一かほと云手爾於葉付る事。

つれなやなとかしらすかほなる
ことの葉も心の松はあらはさて
きかすかほなりいかにうらみん
ほたし多き世を難面くもわかいてゝ
一つゝの手爾於葉を付る事。
おもひ絕またしとするも夕にて
雲のはたてに人は見へつゝ
みれはこてうの空にとふかけ
一つゝたゝよふ雪に風ふきて
泪にやうき中川の増るらん
なきかかへると夢に見へつゝ
いかに出んとおもふ世中
なかめつゝ閑は庵なく山もうし
一前句の末の字よりすみちかひに付様あり。十文字付と云。
長閑にすめる春の川水
蛙なく雨夜の月の影更て
㵎はるかにすめるおく山
立出て打なかむれは雲かすみ
あみにかゝれるうをのかすゝ
引あけて歸る夕の海士小船
かるゝ蓬はつゆものこらす

引捨て麻干ちらす夏の日に
秋の夕に小船さす人
裏枯のすか簑ひとつ身にかけて
一みつと云手爾於葉を付る事。
今そ心のあらましの果
宮城のや松島までの月もみつ
思はすおくの籬かまもみつ
ふしのねの望斗に旅立て
ふしの高ねそ言の葉に聞
思ひこしあかしの浦の月は見つ
一けにと云手爾於葉は物二つにて付へし。
けに哀なり鳥のなくこゑ
余所に聞別を今夜身にかけて
けになつかしきいにしへの人
學ふへき心のおくを文に見て
礒山かくれけに閑なり
鷺ねふる渊崎にひとり釣たれて
けにかへらぬやいにしへの夢
去事みれはなかるゝ水に似て
一覽と云に過去現在未來有。
思ふに遠しいにしへの空

叢生にいつより月の澄ぬらん
　是は過去也。
淸くすむ心になとか恥さらん
かしこき人にそふよしも哉
秋風の舟路の末や山ならん
思はぬ浦のさをしかの聲
　是は現在なり。
なかるゝ船に手をそかけたる
夕貌や筧の軒をめくるらん
時のうつるや水にしるらん
花うかな[illegible]なかるゝ立田川
年〳〵の春はいつくにかへるらん
若葉のくつのかゝる埋木
　是は未來也。
一うはさの句には當座を付へし。
心のすゑの秋風そふく
立田山木々の靑葉のつゆを見て
のほるもくるし峯の一村
さやかなる月の麓の夕かすみ
翅やすむる鳥の一こゑ
跡先もかすむひろ野の花に來て

又ちと更りたる噂。
よそにうつらふ程は見へけり
おく山の花の盛に春くれて
見るに心のうつろひやせん
尋はやうき世の外の山櫻
一に文字をやうにと取なしたる句。
太山にむかふ春の面影
ふる里の庭に花ちり鳥なきて
のへのすかたにふれるつゆ霜
うへ置し庭の秋草うらかれて
おきなすかたになれるかなしさ
年わかきかつきの海士の身をつくし
冬に一花さけるなてしこ
淸水せく岩ねの月は夏さへて
枯野の月に山風そふく
春寒き霜の下草萠侘て
かせやかれのゝ月にふくらん
冬されはあしの花ちるさ遠干潟
一成けりを付る事一切也。
萬ことたる心なりけり
住侘し草の庵に花咲て

おもへはつゆのやとりなりけり
夢になる（霜に見るイ）色冷しきのへの月
一とに付様あり。
わか古里と鳥そさへつる
誰うへし木末の野へにかすむらん
しおりとなるや煙一すし
遠近の道ふみまよふ淺間山
すさきなる松や冬木と成ぬらん
眞砂の月は夏のしら雪
住仙人と身はなりにけり
うへ置し庭の小松の陰ふりて
一是と云詞に付様あり。
是そかたみの袖のうつり香
俤は手にもたまらす又消て
これ見よとてやともすほたる火
夏草のかけにしられぬ花咲て
一とてと云句に付様あり。
うきたる身とていつち行らん
こきつれし夜船の月はかたふきて
たか泪とて袖ぬらすらん
かす〳〵にふる事おもふ小夜しくれ
旅とてかなし草のかりふし
秋の野は月と花とを枕にて
名のらすとても我としれ人
うき中やむかふ時たに忘らん
とても戀路をあらはしやせん
後の世のかゝみにふたりむかははや
一上句の末の五文字を付句の上に置て心うる様あり。
池に住ひとりの鴦を身に知て
旅ねかなしき冬の山里
色〳〵の草はあれとも花さかて
一木あはれにたてる秋の野
雉子なく藪しかくれに羽をのして
あかるひはりそ床はなれ行
虫の音もよはると聞けは又なきて
鴫立宿の暮る淋しさ
又付句上の句にても心は同事也。
たゝわれひとり殘るへきかは
人は皆旅立里にしはしねて
一成敗の上の手爾於葉の付様あり。
よしおもかけよちきらすもあれ
我まねくむかしの宿の花薄

　船さしとめよ秋の水上
舊のある川への渡ち色付て
一ほとゝ云手爾於葉の付やう。
　おもひなくさむ程のはかなさ
入ぬへき道をも知らてよむ歌に
　いく程ならぬ身をそうらむる
昨日今日かくるちきりのはやたへて
　むくひの程の果をたにみん
鏡面をよそにわするゝ人もかな
一なとゝ云手爾於葉の付様。
　夢よそなたになと歸るらん
ねやも閨枕も同し枕にて
　とむるをひとのなといそくらん
獨さへ住めはすまるゝ山里に
　物おもへとはなとちきるらん
たのめすは侘つゝもねむ雨（秋イ）のよに
一さてもと云手爾於葉の付様。
　いつをかきりに扨も待みん
夜そふくる行ても人を諌はや
　扨もはかなやいひし言の葉
先たつを聞は都もいそかれす

　扨もうき世にかゝる身の程
松の葉をたゝ朝夕のけふりにて
一いかてと云詞の付様。
　人をうかれといかて思はん
みれはたゝ泪そおつる秋の月
　昔にいかてか名をは知られん
あちきなやおもひの果の草の原
雨聞てあかすたに有秋の夜に
　月にもはちすいかてねぬらん
一問答したる付様。
　ぬるゝ袖をやつゝみ果まし
うらみをも世のうき事にいひなして
　峰こす風に木の葉ちる音
柴の戸をとはゝ何とかこたへまし
　せめては小夜の夢にたにとへ
なき跡に心ほそくも獨ねて
一何と云詞の付様。
　はかなの春や何にたとへん
朝つゆのきへぬ風にも花散て
　何をよすかにしはしとゝめん
山里の花の跡とふみやこ人

一いとゝの手爾於葉の付様。
みてこそいとゝ戀しかりけれ
なき人の庵にのこる山さくら
心をみてやいとゝ難面
あはすとてかよひ（おもひイ）はやまし夜はの空
一はかりと云手爾於葉の付様。
かたるはかりにむかふ面影
それならぬ聲もうらめしほとゝきす
きへむとはかり身をうらみつゝ
戀しさはたゝ等閑の夕にて
手にとるはかりちかき俤
遠島を夜船の末の雪にみて
手にとるはかりみゆる俤
夕月夜袖より出る山こへて
淋しきはかり物しつかなり
山深み鳥たになかぬ花に來て
かすむはかりのあけほのゝ山
春の夜の月にうきたる雲きへて
わかれし人そみるはかりなる
淺ちふやふるき都の月の本
一比と云言の付様。
雲路もみへす雪のふる比
春ふかくかすめはふしの猶冴て
萩の下葉のうつろへるころ
うらかれの野路の玉川すゐはれて
一前句に侍る事を噂に付る様。
けふれる方や舎なるらん
飛鳥の末野の柳秋くれて
たゝ名をゝしめ弓矢とるみち
なくそうきかせきの山の時鳥
一にての手爾於葉を付様。
山はたゝ人かけもせす閑にて
尾上の柚木雲や引らん
たへ〳〵の人めをしのふ便にて
花ちる比そむかし催す
一さそなの手爾於葉の付様。
心のやみはさそなかなしき
しるへせよなかき山路の時鳥
さそなすかたもかはり行らん
住なれてこゐひなひたる都人
一名所をする様。
遠島松のかすむ明ほの

きへやらぬ淡路の山を雪にみて
　霄に明行しかのからさき
秋の夜のなからの山に鐘なりて
一又國をへたてたる名所。
　分行するのとをき武藏野
白川をかすみの關にまつこへて
一下句の口傳之事。二五三四の句。
　妹にこひ行夜や更ぬらん
山の遠きやまつくれぬらん
夕の鐘にちる山さくら
とをきみやこのつていつきかん
年もはやへぬいつをまたまし
是より三四の句。
　山の遠きや夕なるらん
遠きみやこの便きかはや
いもにこひ行空や更ぬる
夕の鐘にさくらちる山
一心付の句。
　みやこたに四方の木枯吹入ぬ
遠山松の夕くれの陰
一無心所着の句。

　春去秋をむかへぬる比
子日せしのへの松虫又なきて
〔發句〕月白き水のおもたかとやもなし
　是躰の句毎に工夫有へし。
一當意則妙の句。
　よる船ちかき春の山本
青柳の朝氣の煙江にはれて
　みれは木末に船そよりくる
五月雨のふる川柳水こへて
一付様心持。たとへは出ると云をかへると付。山を海に付。我を人に付。人を我に付。鳥けた物を我に付。我を鳥獸に付。木を草と云なし。草を木に取なして付へし。
　立歸りみるや色こき小萩原
玉川過るのちのたひ人
　いつれもしぬをいとひこそすれ
ますらをか心あらくまかり留て
　夜や更ぬらんまとろまれけり
瀧の音嵐ふきそふ山里に
　杉の葉こほす風そふきそふ
古寺の花は苔地に色朽て
あすとないひそあらましの山

いそかれぬ新島守の舟の道
　さくらにのこる鳥の一こゑ
かすみけり逢坂こゆる夜半の月
　なく蛬かすかなるこゑ
よもきふの宿は月さへ澄侘て
　鏡のうへになみた落けり
白妙の雪の山の端鴈鳴て
　わか心たれにかたらん秋の空
荻に夕風雲に鴈かね
　かへる心や行かよふらん
めかれせぬこすゑになれは花散て
　人もね覺はかゝる物かは
老てこそ哀をもしれいとふなよ
　夕日にかゝるしかの浦なみ
秋寒き古郷人のはつ時雨
一一日をする様。
　暮るまてにや身をは頼まし
朝ほらけ船行あとの波をみて
　夕〳〵に鴈のくる空
つゆ寒き萩の下葉の朝な〳〵
一一季をする様。
　三月の空もはやく暮けり
みな人の遊ふはむ月二月や
一一年をする様。
　月の夕くれ雪の明ほの
みやこかなさくらかつきは時鳥
一陰陽の連歌の事。たとへは前句を取かへたる句も。言もて行は。取なしも。又發句をするにも。是を知らてはかなふへからす。陽はあらはれたるかた也。陰はかくれたる方也。陰に陽かけたる句。
　船の行衛そおもひやらるゝ
磯山にすくなる松の木を植て
又陰陽かけたる發句。
　朝鳥の霜夜を賦る日影かな
又陰陽かけたる句。
　遙々木曾の里のかりふし
伯母捨の月を都の望にて
一かけ手爾於葉。又十文字付三句する様。
　なるとをわたる波の村雨
　ふるまゝに世は何事もなると知れ
木の葉の後も落栗のこゑ
一かけ手爾於葉。うけ手爾於葉。

立春しるき雪のあさ明
山はまた去年のまゝなるうすかすみ
引小松こそ野にはまれなれ

一又心てにをは。歌てにをは。
海士の衣や船にうつらん
もる月のあかしの筈やあれしより
住うかれたる世こそ秋なれ
心とやわか古里のあれしより住うかれたる世をはいとはん

一又とかめてにおは。遣手爾於葉。
何とてつらき世には住らん
身をすてはやすかるへしと知りなから
もつにおもにの椎柴のつゆ

一みたれ手爾於葉。
いかなる雲の山かくすらん
千里をもへたてぬ物は心にて
いにしへ人そ月にとはるゝ
今よりは身こそ獨の老の秋

一かけ手爾於葉。重てにをは。
あらしや秋の夕なるらん
つゆ霜のはやふる畑のかたあらし
たれそとみれはしらぬ俤

主かくす絹こそあまれ玉簾
たとへはあまりうきに海士小船。柴の庵にしはし。いたつらに板ひさし。濱ひさしに久しく。身をつくしに身をつくす。つとめてに夙におきて。是等うけつかけつ心に任へし。

一重てにおは。
待を知りて月も出らん
とちはつる葛葉のおつる松の戸に
あやめもみへぬ秋の夕くれ
月まつといへと泪のあやにくに

一餘情の句。
なからへてたのむちきりのすへいかに
また初草のれみんともせす
發句 あなたうと春日のみかく玉津島
同 吹盡せ花さかぬ間の春の風
同 さす花や瓶の上なる山櫻

一三段切の句。
發句 時は春春は明ほの花盛
同 花盛おもへは似たる雲もなし
同 いつれ宿さくらか本の夕月夜
同 五月雨は峰の松風谷の水

一前句を釋したる句。

獨ありその海をこく船

風ならて月に音する友もなし

音せぬ月の夜はかなしとすへし。

一中古と當世の句の心もち。

旅人の足あたゝかにくつはきて

たひ人の手はあたゝかにくつはきて

一前句にかゝる句の事。

迷ひをみれは千鳥なくなり

一木立すさきをみれは鷺は居て

鷺のゐてとしては釘を打ける也。

待て心をつくす川船

月更る淀のわたりの時鳥

月代のとしては釘を打ける也。

一いりほかの句。

よし野の花のおくを尋ねん

春や知たか世にうへし山さくら

一前句をそのまゝにてする句。是上手にならすはすへからす。

夕哀になひく竹の葉

鳥そなく花にねしをや思ふらん

草葉のつゆの白妙の色

行袖の傍とおく野はくれて

一まなひて可然躰。

空に澄月やおもひをさそふらん

うれしき聲に初鴈そなく

なかめすはうらみやせまし夜半の月

松風ふきておしかなく山

旅にと人のいつるふさの端

又あはん身はしら菅のかりの世に

一長高き躰。

嵐の音そ木々にのこれる

人歸る太山のまかね吹すてゝ

毛をふく世こそうらみおほけれ

虎の臥太山おろしに花おちて

人もね覺はかゝる物かは

老てこそ哀をも知れいとふなよ

一序の連歌。

おもふにつけて増る戀しさ

山本の春のあら田を打返し

一未來記の連歌。

みれは波よる遠のあら磯

船ならぬ終のとまりも知らぬ身に
　鐘ははるかに明るとそ聞く
おとろかはこん世の夢もさめつへし
　天津鴈夜半のわかれにこゑきゝて
春よ心に夢な覺しそ

一發句わき第三の事。發句はいかにも時宜に相當したる様にすへし。脇の句は發句の心をうけて。時節の不違様にすへし。第三はさのみ不付とも。長高く幽玄にすへし。

　雨夜記畢。

此一卷は宗祇老人に年比相尋し事を。書は世の中のいとまなく人めもしけゝれは。雨夜のよひ〳〵灯の本にて書つけ祇公へ捧けれは。祇公くり返し御らんし。はしはしもれたる事ともを書加はへ給ひ。此道の趣向老人かむねに同し。此外なしとて御ちかひ有。連歌の奥義是に過へからす。年は永正十六つちのとう。さ月かみの十日にしるしおはりぬ。

宗　長判

〔右雨夜記舊本闕今以内閣本書寫以刊本加校合〕

淀乃和當里

〔右舊本闕〕

續群書類從卷第五百

連歌部三十

連歌極秘之書 號胸中抄

地連歌心得之事

そこともなく霞む海つら
曙の浪に別るゝかりないて

そこともなく霞むといふに歸鴈似合たり。海つらに猶よせたり。

旅衣霧分ゆくは鳴立て
山路かすみにつゝく荒小田

旅衣分るといふに山路を付たり。鳴に荒小田を取出たり。

古里の垣根あらはに打霞
なかれたえ／＼蛙鳴なり

古里の垣根になかれをよせたりけれなとの心也。蛙に霞を付たり。同時節也。

月ほのかなる夕かれの庭
鳴虫の音もむら薄風立て

ほのかなるといふに薄を出せり。穂の縁也。夕かれの庭といふに。風のいさゝか打吹たる縁也。

野原の里にかり寐する暮
虫の音は枕に近き月更て

野原の里に虫似合たり。假寐する暮に月勿論也。右の五句いつれもめかれす。又奇妙なる所もなし。地連歌の心得なり。地連歌を能心得て。其上にて時々作意の句も。又は氣氣殊之外の儀も有へき也。

作骨連歌心得之事

一つつゝちれる木の葉の重りて
花より後のほのくらき山

前の句。ひとつゝちれるといふに。木の葉の事なるを。付句は花のちるに見なせり。葉の重るといふを。落花の積木すへかつ〳〵茂る心にいへり。奇妙の作骨也。

うしや我にもあらす也ゆく
柴の戸の花に吹たつ夕嵐

柴の戸と云出したるは捨身の事也。其邊に必花有へし。捨る身にては花の事をも何とも思はさらましに。夕嵐の吹來て花をちらす見て。俄におしく思ふ心也。はしめの心にあらすといふ所の付様は。捨身の心よはく成をうしと也。

やかて替らん心とそ知
一夜とは思ひあまれる契りにて

前は人の他なるをいふ也。付所は難面人を思ひ〳〵て。只一夜逢たらは。やかて又逢たく思ふへきをかく言り。我心の替らんと也。

心にすてぬ身はかひもなし
頼ましもことのはまての恨にて

前は捨る身の事也。眞實捨る身ならねはかひもなしといふを。戀に付なしたり。つれなき人を恨みて。今は頼ま〔思敎〕しといへとも。心中にすてねは。又やかて戀しくとふよし也。

草木折ふす雪の明ほの
野分せし庭の月影夜冴て

前は雪のおもきにおれふしたる草木を。野分に折ふしたるを付たり。雪を月の雪にとりなせり。

景氣連歌心得之事

かすかにつゝく野への古道
一むらの竹の葉かしけ梅咲て

野むらの躰也。竹の葉かくれに。垣根の梅の咲わひたる有さま見るやう也。

宿かり衣嵐ふくなり
いつくともしらぬ野原に駒留て

旅行の躰也。日も夕くれの空の嵐なとに。そことなき野原に駒打寄。宿かりたる有様有へし。

嵐に雪もしふく笠の端
むら竹に棚なし小舟さし留て

舟人の雪嵐をかなしみて。笠打かたふけて。むら竹の陰にさしよせ休ふ有様也。誠に唐繪なとのことし。凡處是に及へからす。

心ほそくもぬる夜かなしも
雨なから花落盡す草の庵

落花の時分。雨中深夜。まことに心細かなるへし。廬山

雨夜草庵中といふ詩の心也。

芦邊にしろき鷺の一つれ

雨落る入江の浪に山暮て

暮山の入江は麓なとに鷺のおり居たる躰也。夕になりて鷺の一しほしろき仕立粉骨也。此五句氣氣斗の句也。上手のわざなり。初心として數寄及ふへからす。

取成連歌心得の事

いはぬ恨はいはてこそあれ

山吹の垣生荒ゆく春の暮

前の句は戀なるを。山吹のいはぬといひて。口なし色に咲ゆへ也。又垣は結ものなれは。荒ゆくにまかすれは。いはぬと取なせり。

是や御幸の氣色ことなる

夕嵐催す山のむら雲に

前は御幸の事なるを深雪にとりなせり。けしきことなるといふ所なとも。嵐の雲に有へし。

泉にや袖の氷をむすふらん

しのたの森の木の間もる月

前は泉の事納涼なり。和泉の國にとりなして信太の森を付たり。信太の森は泉州也。氷は月をいふ。

打つち高き麻の狭衣

山賤の畑の古道跡見へて

前は槌のつちなるを。土の字にとりなして古畑を付たり。麻のさ衣は山賤にて付たり。

髪白くなる事そかなしき

衣〳〵の妻戸の障子明る夜に

前の髪白くなるを紙の字にとりなして障子を付たり。かなしきと云所。逢夜の明るをかなしむよし也。

本歌を取連歌心得の事

知人もかな深き夜の月

高砂のまつ袖しほる秋風に

藤原の興風の歌に。誰をかも知人にせん高砂の松もむかしの友ならなくにと云歌を取也。深夜の月は秋風にてあひしらひたり。

袖は嵐の風そはけしき

都にも身を侘人の麻衣

古は長歌に。九重のうちにては。嵐の風も聞さりきをと有を。都にても侘人の上は。嵐のかせはけしく身に覺ゆると云り。本説に引かへて付たり。九重とは都事也。

草の庵は限しられす

夜の雨晴るとすれはまたふりて

俊成卿の歌に。むかしおもふ草の庵の夜の雨に涙なそへ

そ山郭公。此歌をとれり。草の庵といふより夜の雨をとれり。限しられすと云所より。雨の晴てはふり〳〵するを。かきりしられすと云り。

年へておもふ末はしらせよ

我恨眞弓つき弓つきもせし

伊勢物語に。梓弓まゆつき弓年をへて我せしかことうるはしみせよ。つき弓つきもせすといふ間のつゝきおもしろし。

むかしの人も僞そある

入相の鐘にもちらぬ花を見て

能因か歌に。山寺の春の夕くれ來て見れは入相の鐘に花そちりけり。むかしの歌はいつれ共なきに。此歌を取出したり。入相かねより後に花の有を見て。扨も能因か歌はいつはりといへり。(好歟)奇妙の作意也。

右二十五句之連歌者宗牧婦士の賢作也。以宗養自筆の本令書寫之畢。尤可謂連歌之至寶也。

龍山御判（近衛殿御事）

右連歌二十五句。者宗祇。注は宗牧也。初心としておろさかに見るへからす。まことに連歌の付合秘事を顯す所成へし。

闇夜一燈

夫連歌は梨壺のむかしを忍ひ。齋宮のいにしへをしたひ。かさゝきのかたらひをなし。金石の交をかたくするに。人の心花になり色にうつり。あたなることのはのみにして。まめなる處すくなし。好士の申せしは。先春秋の句に心をつけ學ひ出さは。夏冬の句はおのつから移りやすかるへし。水邊の句にはいかやうにも眺望をめくらし。山家の句には景色を毎句吟味し侍らは。自然に幽々玄々の境に入つへしとそ。祇公東下向の時。胡蝶の床の夢打覺て。宗長にこしかた行末のことゝもかたり給ふて。連歌には付所秘することゝまて。近來沙汰し侍らす。皆人おもふ所なれとも。是をむねとせされは。風情すくなしと。より〳〵いひしらせ給ふを。宗牧此道をふかく懸望せし(マヽ)語出し。まことにしめ野の草の枯葉も。紫野の露の置處なりと。たかいに感しあへりとなん。今尊命に應し。艶言大方しるし侍り。他見あるへからす〳〵。

付所詞

一わかる　天地。横雲。夢。雁。春。秋。

一行　枕。年。月日。春。秋。水。鳥。鷹。雲。

一むすふ　草枕。糸。氷。水。夢。露。霜。帯。紐。
一高き　名。年。草。木。山。河音。いやしき。
一きゆる　罪科。露。霜。雪。雲。けふり。灯。命。
一さやか　月日。鐘。霜。風。水。
一残る　思。恨。袖の香。月日。露。霜。雪。春。秋。
雲。
一めくる　車。月日。しくれ。
一たつ　鳥。霞。雲。春。秋。月日。名。烟。衣。旅。
一きく　風。雨。かね。郭公。鹿の音。
一みる　花。月。雪。夢。水邊。山類。
一渡る　風。橋。世。舟。雁。鳥。鹿。
一やむ　雨。風。おもひ。うらみ。雪。
一重る　山。雲。衣。岩。
一夢　花。世。旅。春。秋。
一雪　花。月。黒髪。波。
一うかるゝ　蝶。鳥。世。雲。思。
一うかふ　水。月。花。鳥。雲。涙。蛙。俤。
一沈む　鳥。花。世。涙。水に月。
一落る　月。花。露。雨。日。涙。水。雁。鴫。木葉。
一ふる　雪。雨。しくれ。露。霜。世。
一聲　郭公。波。法。鳥。鹿。かね。風。水。舟。

松。荻。
一おと　風。かね。水。波。雨。礒。
一まつ　月。花。郭公。春。秋。
一過る　時雨。雨。風。春。秋。時鳥。
一火　螢。いさり舟。衣ほす。
一水の烟　うかひ舟。いさり火。河。
一松竹の烟　ともしさす。鵜舟のかゝり。
一はらふ　風。鴛。鴫のつはさ。露。霜。塵。草。雪。
一うさつらさ　秋。世。花の友。旅。
一はかなき　露。夢。花。世。
一他なる　露。花。命。世。身。名。
一つれなき　命。松。有明。
一かくす　雲。霧。山。月。身。狩場の鳥。霞。
一かつ〳〵　露。涙。雁。
一うらむる　虫。きり〳〵す。世。身。秋。
一契　花山。荻の風。草の露。鳥。
一深き　水。山。霧。霜。雪。恨。袖の香。
一淺き　水。山。川。春。秋。
一入出る　野。山。舟。月日。
一詠　月。雪。花。雲。山。
一すむ　水。山。月。世。庵。心。

一さそふ　水。胡蝶。雲。風。春。秋。舟。鳥。獣。

一おとろへ　秋の花。むし。世。身。

一うつ　衣。きぬた。波。

一ほのか　虫。月日。夢。かね。花の香。

一むら〳〵　霽。雲。烟。松。竹。草。鳥。霞。雪。霜。

一歸る　鳥。春。秋。雲。波。舟。雁。昔。水。

一とふ　風。嵐。郭公。友。月。鹿。時鳥。鳥。雁。夢。

一くる　春。秋。鳥。獣。糸。雁。

一あと　野分。雨。鳥。鹿。古郷。雪。霜。

一みち　鹿。水。野。山。霜。雪。學。

一傾く　月。軒。よはひ。竹。橋。松。舟。

一友　月。花。雁。旅。鳥。

一かたらふ　雲。水。鳥。袖。

一のふる　筵。命。こゝろ。

一ひく　柚木。舟。横雲。袖。菖蒲。汐。網。

一つなく　舟。駒。馬。こゝろ。

一折　花。わらひ。爪木。柴。草。女郎花。

一かく　もしほ草。松のは。琴。手。草。

一ふく　笛。鳩。あやめ。風。

一灯　舟。法。窓。

一焼火　里。舟。もしほ。

一つゝむ　螢。袖の涙。うれしさ。思。

一ぬるゝ　露。霜。雪。旅。もしほくむ袖。

一ひゝく　かね。水。谷の聲。松。

一おさむ　世。舞の袖。身。國。御調物。

一ひらく　花。戸ひら。

一をす　舟。弓。

一をく　露。霜。扇。身。

一短き　夜。命。心。草。

一いふ　垣。下紐。かみ。

一とくる　下紐。こゝろ。氷。

一とる　螢。榊。棹。柴。扇。ぬさ。早苗。爪木。

一つるゝ　鳥。獣。雲。風。旅。雁。

一かくる　すたれ。笹かにのいと。野。山。

一長き　日。命。綱。舟。夜。旅。

一絶て　道。命。橋。夢。傳。風。

一果て　春。秋。命。身。野。山。道。

一ふし　笹。竹。糸。うき。

一さす　舟。日影。笠。汐。棹。戸。垣。

一とまる　春。秋。移香。舟。心。狩場。雁。

一かるゝ　野。山。水。霜。虫の音。冬。草。契。槿。

菊。

右篇他准之。

春連歌

わかるゝと云に　わかれし方そけふも霞める
　天地と成て幾春立ぬらん
行　ゆかは花いつれとからん遅からん
　春の月日のたちそむるかけ
結ふ　木陰にしはし水結ふころ
　春ふかき谷を氷やたのむらん
きゆ　埋とも猶きえやらぬ老の床
　春さへとつる窓のしら雪
さやか　さやかにもみるへき花に雲霞
　朝日いさよふ春の遠山
めくる　めくれる雲は幾重なるらん
　陰高き花に車の音はして
のこる　残りてそ哀はまさる春の花
　梅かほる夜の有明の月
たつ　霞立つゝ日こそなかけれ
　鳥そ啼花のいつくに帰るらん
きく　見し人のなきを日毎にきゝ侘て
　櫻ちる野の宿の松風

　遠き昔は猶きかまほし
ふし　花を風いつよりちらし初つらん
　ふしとなるへきうさかつらきか
　篠のはのかりそめ咲る花ちりて
　旅はうきふしいかて多かる
みる　玉の緒はいとならねともくるしきに
　みれは寂しくけふり立也
やむ　一むらの林の賤屋花咲て
　うらみふかくてやみなんそうき
夢　花の後なと雨風のよはるらん
　なくさむ程の夢もやはみん
雪　時しもあれけふ咲花に山颪
　ひたすら雪になれる黒髪
うかるゝ　やすらへは（宿とへはイ）拂ふ計に花（雪イ）ちりて
　うかるな心櫻もそちる
うかふ　春の野は胡蝶にたにも誘引て（んイ）
　春行水に浮ふうたかた
おちて　雨さそふそこの蛙の聲立て
　ちり果し花とおふもへは又落て
ふる　み山の水の春の暮かた
　世中は何かふり行ことならぬ

きのふの花は庭のしら雪
移ふ　うつろはんとはかねてしらすや
置つふる露こそ花に哀なれ
のみ　春のみならぬけふの別路
夕暮の霞に鳥も打鳴て
もと云　なかれぬもなき花の瀧川
ことはに　みよし野や櫻山吹春くれて

夏連歌

聲　聲にや立ん袖の別路
蟬のはの薄き衣をけふかへて
夢の行ゑはたゝかねの聲
郭公過る枕をそはたてゝ
待　いつさめてかはなをも待らん
村雲に聲も跡なき郭公
過る　過ゑしまのおもひもそそふ
ふけぬまの初音やいつく郭公
もゆる　下萠の芦のむら〳〵打靡
螢とひかふ夜半の涼しさ
火　離小島に芦火焼影
飛螢行かたもなくさ夜更て
水けふる　流て遠くけふる川水

いさり舟なきたる海にさしやらて
水けふるなり川そひの道（河そひ道のた〳〵にイ）
鵜舟のかゝり夜をまつかけ
松のけふり　ふかきは松のけふる一むら
殘る夜のは山のともしさし捨て
身をつくさする戀や拂はん
夏虫のもゆるおもひは風もふけ

秋連歌

うきと　うかるへきをそことはりとしる
いふ何に　夕露のふるき都の秋立て
ふかき　紅葉にふかき露は見えけり
月やとる庭の岩かき水越て
かくす　雲な隠しそ秋山の色
露匂ふ花の薄きりはるゝ野に
他なる　露より他のこゝろえけり
朝かほに眞垣かこはせ住や誰
數々　竹の數〳〵窓そ寂しき
朝かほのかれし夕かけ露見えて
亂るゝ　野分の亂とひもこよかし
萩（花イ）すゝきいはむかたなき古郷に
聲　有明の月に山風の聲

小鹿鳴尾上もきけは枕にて
細き　獨やねなん月細きかけ
虫の音もよはる嵐を片敷て
かこつ　そのゆへとなき秋なかこちそ
獨なとさのみあなかまきり〳〵す
ふかき　紅葉に深き露は見えけり
月宿る庭の岩かき水こえて
入　山深く入のみいとふ世ならめや
月のこゝろの行ゑしらはや（れすイ）
詠　打詠るもあちきなの世や
ふくるまて身のうき月をいみかねて
すむ　すめるこゝろそ我友となる
更るまてさひしからすは月もみし
音　草葉うら枯水そ音する
野は月に床あらはなる鴫鳴て
うかるゝ　秋にうかるゝ風もなつかし
故郷もかりとや鳴て渡るらん
さそふ　さそはれ月に更るよのそら
哀にもつらにをくれぬ鴈鳴て
おとろへ　俤さへにおとろへて似す
一日みし秋の花みな野分して

打　打頻り今はあなかまきり〳〵す
きぬたの音に松風の暮（秋）
幽　幽に成ぬ有明の月
虫の音のすゝのしのやの秋更て
むすふ　むすへと匂ふ菊の下水
朝ことの初霜寒く秋更て
村々　むら〳〵にをく野邊そ露けき
朝露に初霜ましり秋更て
朽る　朽殘りつゝみゆる川橋
水上の嵐の紅葉秋くれて

冬連歌

移ふ　移ひはてぬ草木のみかは
神無月ふるき都は猶さひし
あふ　逢人いかにうつの山越
晴ま待岡邊の里の夕しくれ
細き　月は有明の猶細きかけ
霜枯のかたいとすゝき（うイ）風吹て
たつ　立こそ歸れ（とまイ）す（參ゐイ）む方やな[illegible]
村衛幾あら磯を傳ふらん
問　とへかしな風もさえ行夕まくれ
竹の葉寂しあられふる宿

跡　あともなき嵐の峰の夕ま暮
　落葉そ名殘けふのあは雪

傾く　入日かけ傾きかゝる沖つ波
　舟はた白き雪の釣人

雜連歌

峰　なかき瀾の曉の峰
　男鹿啼月は有明のあは(やはイ)ち山

友　同し友にもおもふもやなる
　夕からす跡に一つれ行やらて

ひく　引のほる淀の川舟おほからし
　宮木をいそく九重のうち

折　歸さに手折つらし山吹
　春の野や紫の重荷も忘るらん

細き　こゝろほそきは跡の夕くれ
　浦遠く藻しほのけふり打靡き

かく　かき集るはたゝもしほ艸
　にほの海の汀に松の葉は落て

つるゝ　打つれて行鳥の聲〳〵
　曉を催しきぬる旅の友

庵　草の庵はかきりしられす
　夜の雨はるゝときけは又ふりて

かく　あらはれぬれはかき絶にけり
　明ぬまの雲の遠山眉に似て

ふく　一しきり竹吹しほる風あらみ
　梅咲かけは笛の音もうし

灯　螢のかけそ灯となる
　芦原に蛬の釣せし舟朽て

きゆる　潜行舟そ波(水とイ)まきえ(落イ)ぬる
　汐合のあはと遥(たイ)に日(身イ)は入て

　きえまつまゝになきに成けり
　燈のたとへていへは常にして

あふ　あへるも風の便ならすや
　さま〳〵の家をあらはす君か代に

右之一巻父宗牧某かために闇夜の一燈として授與之。今少しも殘らす令書寫進覧之候。努々他見他言有間敷候。此旨於御背者。住吉玉津島天滿大自在天神御罰可被罷蒙者也。

季秋七日　　宗源在判

長慶朝臣

連歌執筆次第

一師君貴人亭主なとは。いかに句を付遲りたりとも。下句なとの時。是にて遊はし候へと云へからす。景物なくとも。上句の時はあそはし候へと申へし。但下句なりとも。雪月花能候はゝ。景物有所にて遊はし候へと可申也。

一初獻三獻なとの時は御座にて食すへし。點心なと食の時。又は飯の時分。膳を持て下座に下へし。縱貴人如何樣成食中にも句を可付と仰有とも立へし。さて末座にて左右にかまはす。早々食果て可居なるを。隙明たりとても。上座食中ならは末座に居へし。貴人參候へと仰あらは。文臺を左に見なしてよるへし。膳を持て立時は。文臺を右にみなして可立なり。惣して大小の用有て中座に立時も。文臺を右にして可立也。

一執筆の人と出合の句の事。是も聲の前後いふへからす。大形に式代して近句を可書也。重々は式代をせぬかよきなり。

一夢想の句引の時は。夢想の句をは作者より一字も二字もさし上て可書也。仙洞或公家或將軍の作字は。一字指上て書也。其外は指引なき也。

一作者書終て後。年號月日を書なり。

一師君貴人紙硯を召よせ。是文臺に置候へと。取つかせられ候はゝ。文臺の眞中に紙を打敷。其上に硯箱を可置也。我家なとにて會をせは。我と文臺に紙ををき。硯をうへに置て座へ出へし。

一懷紙を書果て。年號月日を書損。正月七日。三月三日。同盡。卯月八日。五月五日。七夕。重陽。九月盡。二夜の名月。此日ともは發句にて時節を聞ゆる間。年號月計書て日を略すへし。但如此作者失念して。只の發句なとならは日付を可書也。

一早連歌と披露あらは。百八句書て。頓て年號月日を書へし。略義とも人あらは。百過て候と答ふへし。是を切殘の口傳とも云也、自然の儀也。

一懷紙書果て作字讀あけ。三に押折て文臺に置。立時の法樣は。文臺を右にして立へし、始めさし寄時も文臺右なり。今又立時も右になせは順にたつなり。加樣に硯を右にするゆへ右筆と云也。

一山はいつくそ。里はいつくそなと云句有。兒若僧なとの句ならはかやうに書へからす。其時はいつこそと書へし。是五音相通也。是執筆の習ひ。古實也。

一住吉の宮こ。難波の宮こ。宇治の宮こ。吉野の宮こ。月の宮こ。是等の時は都の字不可書也。秘傳々々。

一發句の末の哉と留る事。二ケの大事あり。末の五文字かなの時はかな假字たるへし。眞名字の時はかな眞名字たるへし。亦一說。五文字假字の時は〔か歟〕はな眞名たるへし。眞名の時はかな假字たるへしと云々。

一發句の上の五文字の筆立は眞字也。脇の句の筆立は假字たるへし。惣して上の句には眞字に三ツ。下の句には眞字に二ツ。合て五ツ可書也。

以宮內省圖書寮所藏塙氏原本再校畢　芝葛盛

明治四十四年十月廿一日印刷
明治四十四年十月廿五日發行
昭和十六年三月廿三日　七版發行

發行者　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市豊島區西巣鴨二丁目二五七四番地
丹羽誠次郎

印刷所　東京市豊島區西巣鴨二丁目二五七四番地
忠義堂印刷所

發行所　東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七・電話大塚七一一八